

# 日本漢文史

籍叢刊

第三輯

雜史

+



上海交通大學出版社  
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第3輯, 雜史 / 周斌, 孫錦泉,  
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-11956-8

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—  
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—雜史 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 199077 號

日本漢文史籍叢刊 第三輯 雜史

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:946 字數:18920 千字

2014 年 9 月第 1 版 2014 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-11956-8/K

定價:23800.00 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

# 第三輯目錄

## 第一冊目錄（總第62冊）

雜史

佛教

元亨釋書

（目錄、表、卷一—卷三十）

本朝高僧傳

（總目、序、凡例、援引書目、卷一—卷二）

四三五

## 第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳

續（卷三—卷四十七）

一

## 第三冊目錄（總第64冊）

本朝高僧傳

續（卷四十八—卷七十五）

一

東國高僧傳

（序、卷一—卷十）

二四三

續日本高僧傳

（序、總目、援引書目、凡例、卷一—卷九）

三七九

## 第四冊目錄（總第65冊）

續日本高僧傳

續（卷十一—卷十一）

一

吉水實錄

（序、卷第一—卷第十四）

三七

正法山六祖傳

.....

二五五

日本往生全傳

（序、極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、本國新修往生傳）

二七三

扶桑往生傳

（序、卷上—卷下）

四〇九

總目錄

淨土真宗付法傳 ..... 四五五

三國高僧略傳 (序、例言、卷之上—卷之中) ..... 四七五

第五冊目錄 (總第66冊)

三國高僧略傳 續 (卷之下) ..... 一

近世禪林僧寶傳 (序、凡例、目錄、卷之上—卷之下) ..... 二七

高僧名士傳 ..... 一二七

和漢高僧傳 ..... 一五三

門跡傳 ..... 二四一

天台圓宗列祖略傳 ..... 三〇三

密宗血脉鈔 ..... 三二九

日本國大師一覽 ..... 四五一

唐鑑真過海大師東征傳 ..... 四五九

東福開山聖一國師年譜 ..... 四八七

蒼龍窟年譜 ..... 五〇九

東海一休和尚一代記 (上) ..... 五二九

第六冊目錄 (總第67冊)

東海一休和尚一代記 續 (下) ..... 一

智証大師年譜 ..... 一三

正受老人崇行錄 ..... 三五

東海鐵塔諸祖年譜略頌 ..... 六一

峨山禪師行實並法語 ..... 九一

方廣開山無文元選禪師行狀 ..... 九九

越溪道蹟 ..... 一一三

損翁老人見聞寶永記 ..... 一二一

近世高僧年表 ..... 一六三

淨土傳燈總系譜 (序、卷上、中、下) ..... 一九九

東大寺要錄 (序、卷一—卷六) ..... 二六九

興福寺年代記 (序、卷一—卷六) ..... 三八五

長谷寺緣起 ..... 四三九

扶桑伽藍紀要 ..... 四六一

慧超往五天竺國傳箋釋 ..... 四七七

### 第七冊目錄 (總第68冊)

入唐求法巡禮行記 (卷第一—卷第四) ..... 一

參天台五臺山記 (卷第一—卷第八) ..... 一四九

### 神道

神道五部書 (卷第一—卷第五) ..... 三〇五

皇國神社志 ..... 三七三

古義神代考 (卷第一—卷第三) ..... 三九三

天滿宮世家 ..... 四三七

祖志 (序、緒論、目次、卷一—卷三) ..... 四五五

### 第八冊目錄 (總第69冊)

祖志 續 (卷四—卷六) ..... 一

雜紀

古事記 (卷一—卷三) ..... 八三

春記 (卷一—卷三) ..... 一六三

玉葉 (序、例言、目錄、卷一—卷十二) ..... 二一七

第九冊目錄 (總第70冊) ..... 一

玉葉 續 (卷十三—卷二十六) ..... 一

第十冊目錄 (總第71冊) ..... 一

玉葉 續 (卷二十七—卷四十) ..... 一

第十一冊目錄 (總第72冊) ..... 一

玉葉 續 (卷四十一—卷五十五) ..... 一

第十二冊目錄 (總第73冊) ..... 一

玉葉 續 (卷五十六—卷六十六) ..... 一

明月記 (諸言、目次、第一) ..... 三九一

第十三冊目錄 (總第74冊) ..... 一

明月記 續 (第一、第二) ..... 一

第十四冊目錄 (總第75冊) ..... 一

明月記 續 (第二、第三) ..... 一

第十五冊目錄 (總第76冊) ..... 一

明月記 續 (第三、補遺) ..... 一

古語拾遺 ..... 三四三

將門記 ..... 三六一



大塔物語 ..... 三八三

保建大記 (卷上—卷下) ..... 四〇九

本朝稽古篇 (上中下、續上中下) ..... 四三七

十三朝紀聞 (慶弘紀聞) (序、卷一—卷三) ..... 四七五

第十六冊目錄 (總第77冊)

十三朝紀聞 續 (卷四—卷七、跋) ..... 一

今日鈔 (卷一—卷七) ..... 七五

柱史鈔 (卷上—卷下) ..... 一七七

近古史談 (卷一—卷四) ..... 二二一

近世史談 (卷一—卷四) ..... 二九三

帝國史談 (卷上—卷下) ..... 三六五

續近事紀略 (卷一—卷三、征臺略記) ..... 四一五

尊攘紀事 (卷之一—卷之六) ..... 四七三

第十七冊目錄 (總第78冊)

尊攘紀事 續 (卷七—卷八、跋) ..... 一

尊攘紀事補遺 (卷一—卷四) ..... 二五

行在或問 (卷上—卷下) ..... 七九

皇朝靖獻遺言 (卷一—卷八) ..... 九五

慶安小史 ..... 一七一

先朝私記 ..... 一八五

遠野史談 (卷上—卷下) ..... 二一一

西京傳新記	(初編—四編)	二三七
-------	---------	-----

日本詩史	(卷一—卷五)	三三三
------	---------	-----

回天詩史	(卷上—卷下)	三九一
------	---------	-----

和漢茶誌	(卷一—卷三)	四三一
------	---------	-----

本朝畫史	(卷上—卷下)	五一
------	---------	----

第十八冊目錄 (總第79冊)

續本朝畫史	(卷上—卷下)	一
-------	---------	---

近世畫史	(卷一—卷五)	二七
------	---------	----

雲煙略傳	(卷上—卷下)	一一五
------	---------	-----

日本國事跡考		一五七
--------	--	-----

史館茗話		一九七
------	--	-----

寤眠錄		二二三
-----	--	-----

幽囚錄		二三九
-----	--	-----

在津紀事	(卷一—卷二)	二六五
------	---------	-----

正名緒言	(上下)	二八九
------	------	-----

本朝蒙求	(上—中—下)	三三三
------	---------	-----

扶桑蒙求	(上—中—下)	四〇九
------	---------	-----

神代千字文		四九五
-------	--	-----

本朝千字文		五〇九
-------	--	-----

內國千字文		五二一
-------	--	-----

日本千字文		五三三
-------	--	-----

第十九冊目錄（總第80冊）

大統歌（上下）

盡忠錄

涉史偶筆

（卷一—卷六）、涉史續筆（卷一—卷七）

香亭雅談

櫻史新編

酒史新編

國朝佳節錄

外史劄記

歷代君臣名功錄

傳疑小史

仙臺支傾錄

先哲醫話

奇談新編

第二十冊目錄（總第81冊）

中朝事實

潛中紀事

正保野史

稽古要略

丙丁炯戒錄

養真亭藏泉譜

一

一九

四一

一八九

二三五

二五五

二九七

三一

三三三

三九三

四〇九

四三七

五二三

一

一〇七

二六五

二七三

二八五

三二一

新撰寬永泉譜 (前編—後編) ..... 三九九

明治新撰泉譜 (一集—三集) ..... 四二一

明治新撰泉譜別集 (初編—貳編) ..... 四八三

大東世語 (序、卷一—卷二) ..... 五一七

第二十一冊目錄 (總第82冊) ..... 一

大東世語 續 (卷三—卷五) ..... 一

近世叢語 (卷一—卷六) ..... 三五

新撰叢語 (卷一—卷三) ..... 一〇七

修身叢語 (上下) ..... 一五一

日本智囊 (卷一—卷十) ..... 二二三

皇朝金鑑 (上書、序、凡例、總目、卷一—卷十七) ..... 三三九

第二十二冊目錄 (總第83冊) ..... 一

皇朝金鑑 續 (卷十八—卷五十五、跋) ..... 一

戰略新編 (序、目錄、卷一—卷五) ..... 四一七

第二十三冊目錄 (總第84冊) ..... 一

戰略新編 續 (卷六—卷十一) ..... 一

策府 (題、序、凡例、目次、卷一—卷二十四) ..... 七九

第二十四冊目錄 (總第85冊) ..... 一

策府 續 (卷二十五—卷三十、跋) ..... 一

外史

日本外史前記 (卷一—卷五) ..... 九七

日本外史 (序、例言、引用書目、目次、卷一—十八) ..... 二二九

第二十五冊目錄 (總第86冊)

日本外史 續 (卷十九—卷二十二) ..... 一

續日本外史 (卷一—卷十) ..... 七三

近世日本外史 (卷一—卷八) ..... 二五三

續近世日本外史 (卷一—卷二) ..... 三九一

日本外史補 (自序、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七) ..... 四四一

第二十六冊目錄 (總第87冊)

日本外史補 續 (卷八—卷十四) ..... 一

江戸將軍外史 (卷一—卷五) ..... 六一

史表

皇朝金石年表 ..... 二五五

日本金石年表 ..... 二八七

史籍年表 ..... 三一九

日本史籍年表 (前編) ..... 三五九

第二十七冊目錄 (總第88冊)

日本史籍年表 續 (前編續—後編) ..... 一

第二十八冊目錄 (總第89冊)

日本史籍年表 續 (後編續) ..... 一

銅鑄和漢年契 ..... 四五

增訂新撰年表 ..... 七七



近世儒林年表	.....	一三五
日本外史年表	.....	二三五
重撰和漢皇統編年合運圖 (上下)	.....	二六三
年代紀略	.....	三四一
新編分類本朝年代記 (卷一—卷七)	.....	三六一
國史年表	.....	五二九
逸號年表	.....	五三九

第十冊目錄（總第71冊）

玉葉

續（卷二十七—卷四十）

.....

玉葉

卷第二十七

治承二年十月  
十一月

治承二年冬  
十月〔小〕

一日、卯、辛〔天〕晴、春日使、淀、梨原等雜事、并道造等事、各注分獻、博陸、并送、邦綱卿之許、爲令傳、白川殿也、先例、彼領知之庄々等、令勤雜事之故也、又奈良法印、并八幡別當慶清等之許、同注遣了、又山階寺別當沙汰、分注獻、博陸了、爲被下知也、奉行家司信季、日來病惱近日增氣、不能出仕、仍其人未定之間、仰季長朝臣、内々令注分者也、博陸有各可致沙汰之報、自餘未聞返事、

二日、辰、壬〔天〕晴、〔今夕爲三方違、參宿女院御方、自晚頭一寸白更發、雖服種種藥等、猶以無減、相扶所參也、〕覺乘得業、示送山階寺別當僧正返事云、御儲事、更不可存疎畧、可致了事云々、去月内々遣、觸之返事

三日、巳、癸〔天〕晴、〔巳刻許歸宅、晝之間一寸白有少減、入夜殊辛苦、以胡餅干糞等治之、又服可梨勒

丸〕此日召刑部卿賴輔朝臣、示陪從裝束事於左大臣、雖爲定以前、先内々伺形氣、隨左右、可入定文之故也、近代事、萬事可有用心歟、邦綱卿可申沙汰之由、有返報、

四日、午、甲〔天〕晴、大夫史隆職來門外、依物、忘也、使人問山門衆徒事、學生方申狀、雖被仰可有沙汰之由、不及始終、而問、今日已合戰、學生方兵士等爲攻堂衆等、燒拂大津在家等了云々、然而堂衆等敢以不傾動云々、

五日、未、乙昨今物忌也、然而一寸白發動、殆及大事、仍忽召典藥頭定成、兩三所加灸治了、入夜頭中將定能朝臣來、數刻談語、多是春日使之間事也、此次語云、蓮華王院、惣社祭之日、候院北面之衛府等、著紅衣立垣代云々、是内々取御氣色之處、已有許容云云、新制之最初、豈以可然哉、如何々々、又云、上西門院御惱危急云々、而今日定成語云、憲基并定長等、申

殊事不可御坐之由云々、但於定成者、候于中宮之間、不奉見云々、是乳上腫物出來、日來、貞時奉治之間、又御面腫云々、忽召憲基、定長等、有御療治云々、頭中將又語云、日來、禪喜僧正修孔雀經法、痰惑入太微之御祈也、去四日結願、星出太微宮者、可有賞之由、豫有其沙汰、而去三日已出太微之由、有其聞、仍密奏之輩六人、於藏人所被問之、即定能奉行也、

泰親朝臣、

時晴朝臣、

業俊、

資元等、申未出之由、

季廣朝臣、

廣元等、申出了之由、

仰云、事不二決、明曉重見定出否、一同所令申者、四日一同申出了由、但資基一人申未出之由云云、即四日御修法結願修中、星出太微宮了、仍有勸賞、以內證上生院禪喜僧正建立、堂在高野邊、爲御祈願所、可被寄阿闍梨三口云々、但未被宣下云々、六日、丙申天陰、時々雨下、此日女院御懺法結願也、余著烏帽子直衣參入、源大納言定房、五條大納言邦綱等候座、事了、雨大納言已下取布施、邦綱卿即退出、定房卿還禮候、余於西廊方、對面定房、語云、山

門學生等、悉以離山了、堂衆其勢太强、敢不及爲敵云々、小時、大納言退出了、今日余密々仰春日使事可奉行之由〔於〕右衛門權佐光長、光長非平家司四年宇治左大臣記云、定春日使、雜事、左中辨朝隆執筆、朝隆雖非家司職事、故左大辨爲隆卿非禪問家司職事、否攝政春日使定文、依彼例、所令者也云々、今度遂天仁此所仰也、申承了之由、但一旦自女院、可被觸申關白殿云々、申旨可然、仍可被觸仰博陸之由、申女院了、七日、丁酉天晴、自白河殿、被借送鈴唐鞍、皆以美麗、敢無損物、即以返納、臨期可取寄之故也、此日刑部卿賴輔朝臣送書於行賴許云、陪從裝束事、申左府之處、報云、畏承了、尤可調進之處、土左國左大臣知行之國也、爲親宗朝臣奉行、自院被宛催旁觀百餘前、雖爲各別事、一所勤也、仍難調得之由、可令申者、此事未得其意、就中報旨似無廉耻、可彈指々々、但定有樣事歟、八日、戊午天晴、大夫史隆職注送曰、去夜被行公事等、權律師範玄、還任孔雀經法賞、天變御祈、大僧正禪喜、以下私建立堂內證上生院金剛峯寺中、爲公家御祈願所、被寄置阿闍梨三口、

解官、

內舍人橋惟清、職人所榮、雙六之間、互及又傷之科、

主計允惟宗、盛弘、隱官、

被召還一流人、有結政請印、參議實宗、少納官惟基等參勤、天邊御所、

多々良盛保、伊豆、同盛房、常陸、

同弘盛、下野、同忠遠、安房、

已上周防國住人也、

又有免物事、同御祈、

治承二年十月七日、

上卿別當忠親卿、職事頭中將定能朝臣、

九日、己天晴、觸陪從裝束事於左大將、是先內々近代

之人、爲方大將勤之由、令存知一歟、尤謬事也、天

仁故殿勤仕使之度、左大將雅實子時內被載定

文、隨又領狀、臨時服暇事出來、仍被改右大將家忠、故殿、右中將也、依彼

佳例一所觸示也、可調進之由有返報、又示隨身

裝束事於中御門中納言、件人家爭原憲、雖似無心、先例、

件卿之外無其人、皆以疎遠也、仍忘備所示遺也、同有可調送之報、光長事、

關白被申云、光長未補家司一歟、如此事、爲家司

之者、奉行先例也、但早可被仰光長云々、頗有抑

留之氣一歟、又光長密々申女院云、自殿下內々有

被仰旨、爲之如何云々、大略關白結構之事也、不

能左右、又強不可申、於今者、不可有沙汰之

由、申女院了、今夕召右京權大夫光盛、仰春日使

事可奉行之由、申承之由、即可補家司之由、仰

信季了、

十日、庚子天晴、未刻、右近府廳頭清景參來、傳年預將光

能朝臣命云、中將殿、可令奉仕春日使給者、季

長朝臣布衣申次之、即仰可示中將之由、中將候女院御所、

季長向中將曹司示之、申承了之由云々、清景退

出、抑有方大將之時、以大將命催之、今大將辭退之

間也、仍以年預將命所相催也、自今日中將爲

神事、其法、曹司之內、不入僧尼、月重輕服、水之輩、

於女院御所方者、雖郭內不憚之、且又先例也、

又於女院者、不奉忌之、但參御前之時、他

尼并月水女房不同坐也、又於重服之者、惣以不

參郭內、又曹司前立神事札、今日源中納言雅賴

來、數刻交語、及晚歸了、此夕著職事等信光、催

公卿摺袴、各有承了由報狀、入夜依召參女院御

所、故法務母上參入彈箏、天曙歸家、今日自然方途也、

十一日、辛丑天晴、申刻、著直衣參內、謁龍顏、入夜

詣關白第、即以被出逢、春日使之間事條々令申、



及夜半歸丁、

十二日、壬寅〔天〕晴、以季長朝臣、示遣時忠卿許云、御座七日內、若春日使相當者、可勤前驅之者定指合夜々役、歟、可然之樣、可被計沙汰者、報云、鳴絃役之外、不可及沙汰、可存此旨云々者、入夜定能朝臣來、備御隨身并御馬等事、可申院之由、示付了、

十三日、癸卯〔天〕晴、自關白許被示送云、光長、梨原奉行、儲事、任注文可致沙汰之由、別當僧正所申也云云、即遣請文也、及晚參女院御方、仰光盛令問春日使雜事定日次於在憲朝臣、十五六日、十九日等吉云々、今日仁王會定、上卿隆季卿、

十四日、甲辰〔天〕晴、物忌也、自院注給諸國所課散狀、親宗朝臣奉行、褂、布、單重等大略領狀、於祿絹者、親宗朝臣不辨知先例、偏令催凡絹、忽不能催改、仍家所用意也、凡其外依指合御座、諸國不可有實勤、私致用意之由、申院了、然而被相催之間、自然有其勤等歟、此夕左京權大夫光盛補家司之後、始申吉書、職事國行傳覽、今日春日使之間條々事、仰光盛一定、明後日、十六日、可有之由、仰之、又殿上人摺袴

事、可遣御教書之由、同仰之、〔入夜邦綱卿來、數

刻言談、雖物忌強不堅之上、及昏黑之故也、〕此

日秋季仁王會也、檢校實綱、實宗等云々、行事辨親宗、

〔十五日、乙未天晴、昨今物忌然而午後外入來、今日已刻、

大外記賴業參上、依物忌不調之、一兩月依所勞

沙汰居、昨日仁王會始出仕、久依不參所參也云々、

十六日、丙午〔天〕晴、此日定春日使雜事、秉燭土御門大

納言、邦綱、中御門中納言、宗雅、源中納言、雅賴、等來、宗最前

出居、實綱、余出資筵、尋常上達家、召人、左京權大夫光盛

持硯續紙等、天現置折敷、在筆二卷、墨一、須先參上、奉持參、失也、居廣庇、予座、置硯、拔笏取副例文、膝行、

昇長押進之、余取之置前、光盛復座之後、披見、

仁等定文也、余置前、次此間、職事信光、國行等著衣

冠、持切燈臺掌燈等、立光盛前右方、在打敷、光盛作

氣色、摺墨卷返續紙染筆、爰余與奪之、其詞云、定、

事、光盛得了候、氣色、又讀云、一髮束、光盛書定文〔畢〕、放

舞人下、此後光盛開置土代、書之、紙與一卷定文、土代并紙殘、取硯具等、以定文盛折

敷、挿笏膝行持來之、余取文置前、折敷在、光盛拔

笏退下、余披見了卷之、差遣邦綱卿、次第見了、取

上之、余取之、相加例文、置座前、目光盛、々々

參進、余給<sub>二</sub>三通<sub>一</sub>、以文下爲光盛插、笏取之、數、折退

下拔<sub>レ</sub>笏、如<sub>レ</sub>本置<sub>二</sub>視具<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>例文定文等<sub>一</sub>、取<sub>レ</sub>之退下、

次初役人出來、撤<sub>二</sub>常燈<sub>一</sub>了、此後楚與<sub>二</sub>卿等<sub>一</sub>談語、頃

之人々退出、今日、邦綱、宗家等卿直衣、雅賴卿束帶、

定以後、差<sub>二</sub>分職事等<sub>一</sub>、催<sub>二</sub>公卿所<sub>一</sub>課變、并先日催殘公

卿摺袴等、此次關白中將摺袴事、以<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>同觸<sub>レ</sub>之、又

陪從隨身等裝束催<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>舞人裝束<sub>一</sub>者、中將可<sub>二</sub>參<sub>一</sub>

啓殿下也、定文者、家司下<sub>二</sub>奉行職事<sub>一</sub>、々々下<sub>二</sub>所司<sub>一</sub>、

々々侍所上障子押<sub>二</sub>紙一枚<sub>一</sub>、其中納<sub>二</sub>言<sub>一</sub>定文、是故實

也云々、今夜光盛稱<sub>二</sub>書改明日可<sub>一</sub>進之由、取<sub>レ</sub>之退出

了云々、

定文書樣、以<sub>二</sub>天喜、天仁等定文<sub>一</sub>與<sub>二</sub>春之<sub>一</sub>

定、

春日祭使雜事、

一裝束、

舞人下襲、

關白殿、

陪從裝束、

左大將、

關白左府之處、有障云々、仍入也、天仁、故殿爲  
右中將、勤仕使、而作<sub>二</sub>置<sub>一</sub>右大將家忠卿、以<sub>二</sub>左大將  
雅賢<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>、以後例入<sub>レ</sub>之、

隨身裝束、

藤中納言

中御門中納言所<sub>レ</sub>課也、而件人正中納言也、仍不可  
被<sub>二</sub>權字<sub>一</sub>只稱<sub>二</sub>中納言<sub>一</sub>、又延涼也、仍以今書<sub>二</sub>藤中  
納言<sub>一</sub>也、後代人定  
混<sub>二</sub>資長卿<sub>一</sub>歟、

行事信季朝臣、

家司少納言、

一饗、

立日、

使陪從、

上達部殿上人、

諸大夫卅前、

加陪從卅前、

還饗、

使陪從、

上達部殿上人、

諸大夫卅前、

加陪從卅前、

家司 光經

行事太皇太后宮大進朝臣、付酒部所、

一祿、

絹、

總、布、

家司左京權大夫、

職事上野守、

行事光盛、

賴高朝臣、

一雜具、

唐鞍、

引馬鞍、

手振十二人、

馬副八人、

家司季長、

職事左馬權助、

行事前和泉守朝臣、

國行朝臣、

御出奉行也、代々多入雜具行事也、

一鋪設裝束、

家司成光、

家司盛方、

行事豐前守朝臣、

前民部少輔朝臣、

家司陸奥守式部少輔、

家司前大宮大進、

範季朝臣、

行賴朝臣、

散位職事、

兼親朝臣、

季長子、院殿上人、

御厨別當也、先例多入雜具行事、而其息國行人之父子相並之條、似無便宜、加之天仁、清實朝臣爲御厨別當、入鋪設行事、其子雅職入雜具行事、逐彼例也、

一掃除、

右衛門尉、

左衛門志、

行事基廣、

重成、

檢非違使、明法博士、

檢非違使、

抑饗、自院以土左美作兩國、被宛定四ヶ度饗

了、土左立日、美作還饗、仍入定文之間、今二ヶ國不足、故雖不可有實勤、相計所入參河備前等也、此四ヶ國之中、土左、叶天喜例、備前、叶延久例、自然合吉

例、尤神妙、土左國者、左大臣知行之國也、事體雖似無骨、自院被宛定、隨又領狀了、仍非本所進止、又爲勤仕之國之上、叶天喜之佳趾、仍所入定文也、何況先例未必論親疎耳、延久例、午日有定、今度自似彼例、是吉祥也、

十七日、丁雨下、公卿所課變等、各領狀云々、摺袴又同前、申刻、左大將送書云、陪從裝束事、欲調進之處、禪林寺律師、其名忘却、去十五日入滅、何樣可候哉、爲隨重仰、所馳言上也云々者、答服暇無左右之由了、件律師、俊忠卿息也、將軍者、彼卿外孫也、

十八日、戊天晴、左右廳頭參入、先内々注進舞人以下參入之輩、又光盛參入、申殿上人摺袴散狀皆悉、領狀云々、府生賴文(來)云、可勒儲之由被仰下、而

被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>新制<sub>一</sub>之由承<sub>レ</sub>之、風流之間可<sub>二</sub>用心<sub>一</sub>歟如何、仰云、今度之制、祭使過差風流可<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>之由、未<sub>レ</sub>聞及者、不可<sub>レ</sub>乖<sub>二</sub>近代此祭之例<sub>一</sub>歟、

十九日、<sub>酉</sub>天晴、俊光朝臣來、寬治二年春日使重資卿記、相持之由令<sub>レ</sub>語、件人彼卿外孫也、陪從裝束事、無<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>相觸<sub>一</sub>之人、仍私所<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>調也、

廿日、<sub>戌</sub>天陰、午刻、左將曹兼任參來、自院可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>中將殿御共<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰下、仍所<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>也、御出立所并刻限可<sub>レ</sub>承云々、如<sub>レ</sub>法已刻可<sub>レ</sub>參院、殊可<sub>二</sub>早參<sub>一</sub>之由仰了、博陸被<sub>レ</sub>示云、師武尙申<sub>二</sub>故障<sub>一</sub>云々、又關白隨身下臈中臣忠友來云、伯父去八月晦日死去云々、以此旨<sub>二</sub>申<sub>一</sub>關白之處、可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>之由、有<sub>レ</sub>仰、所<sub>二</sub>參上<sub>一</sub>也云云、件男可<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>舞人<sub>一</sub>、仍所<sub>二</sub>來示<sub>一</sub>歟、仰可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚由<sub>一</sub>了、

廿一日、<sub>亥</sub>(天)晴、頭中將定能來、今夕有<sub>二</sub>行<sub>一</sub>幸于院御所<sub>一</sub><sub>法住寺殿</sub>云々、出立所可<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>給殿上人<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>內旨<sub>一</sub>、示付了、

廿二日、<sub>壬</sub>雨下、申刻參<sub>二</sub>女院御所<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜歸來、關白被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>云、師武可<sub>レ</sub>參之由召仰了、度々仰依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>助成<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>參<sub>一</sub>(也)云々、申<sub>二</sub>畏思給之由<sub>一</sub>了、

了、

廿三日、<sub>丑</sub>朝間小雨、午後天晴、此夕行幸還御云々、召<sub>二</sub>右近府廳頭清景<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>條々事<sub>一</sub>、舞人任<sub>二</sub>天仁例<sub>一</sub>、余番長之外、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>他番長<sub>一</sub>之由、仰<sub>レ</sub>之、又召<sub>二</sub>光盛<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>次第事等<sub>一</sub>、又以<sub>二</sub>使者待<sub>一</sub>、示<sub>二</sub>送大理卿許<sub>一</sub>云、出立日、檢非違使可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>催事、鴨河可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>浮橋<sub>一</sub>事、淀渡之所可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>遣檢非違使<sub>一</sub>事、已上先規已存、任<sub>レ</sub>例可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御下知<sub>一</sub>歟者、

廿四日、<sub>寅</sub>(天)晴、申刻、檢非違使基廣參來、仰<sub>二</sub>出立所并京中掃除事<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>也、此次申云、今日參<sub>二</sub>別當亭<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>仰云、春日使御出立所、可<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>之檢非違使等、加<sub>レ</sub>催了、須<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>申本所<sub>一</sub>也、道志參入似<sub>二</sub>無<sub>一</sub>便宜、汝祝候者也、內々尋<sub>二</sub>問奉行人<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>淀渡所<sub>一</sub>之檢非違使、被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>仰明基<sub>一</sub>了、爲<sub>二</sub>御不審<sub>一</sub>條條所<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>申也云々、同刻左近廳頭範直參上、舞人光近猶可<sub>二</sub>釣出<sub>一</sub>之由召仰了、又申云、舞人馬事、近例春日祭使無<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>大路<sub>一</sub>之儀、仍本牧馬各儲<sub>二</sub>南京<sub>一</sub>、敢不<sub>二</sub>京上<sub>一</sub>、且久安、仁平等例、各用<sub>二</sub>私馬<sub>一</sub>云々者、此事右廳頭清景昨日有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>、仍所<sub>二</sub>召問<sub>一</sub>也、此日酉刻、中將爲<sub>二</sub>申<sub>一</sub>舞人半臂下重、參<sub>二</sub>關白御許<sub>一</sub>、直衣如<sub>レ</sub>例、共人二



人、經家朝臣、季信、騎馬共人二人定成、信光、隨身重等如、恒、此次、

隨身事、同可、申之由、相含了、歸路之次、參內被

召、御前云々、入、夜歸來、戌刻、大納言邦綱卿來、謁

之、水精地鞍、申、出可、進之由、所、示也、

廿五日、卯、天晴、藤源兩納言來、各謁之、許、定春日

使之間事、又自、白河殿、被、送、水精地鞍、加、檢知、返

獻、臨、期可、申請、也、又右二位中將被、借、送馬一匹、

小馬也、爲、乘替、先日所、借請、也、仍被、送獻、令、乘、

中將、見了、返還了、酉刻、左三位中將知盛使侍送、摺

袴、以外早速也、加重務并津加利組、今夜依、方違、參、宿

女院御所、

廿六日、辰、雨降、此日於、春日御社、奉、供、養自筆般若若

心經十三ヶ卷、復、每月朔日所、奉、書寫、也、是去年

分也、連々有、障、自然懈怠及、于今、者也、且、宿願

之上、春日使事、如、思可、遂由、所、祈申、也、以、覺乘得

業、爲、導師、被物一重、布施、一、所、加遣、也、但昨日、遣、之、

此日春日使出立所裝束始也、兼日問、日次於在憲朝

臣、光盛奉行、午刻著、烏帽直衣、臨、其所、奉行家司光盛

著、束帶、參候、鋪設行事行賴、兼親等著、衣冠、同候、

他行事等、懸、母屋簾一間、敷、始弘筵一枚、大略敷、疊

等、下、賜指圖、於、光盛、令、行、之、

今日右近廳頭清景參上、申、當府官人參否、并舞人馬

事等、本牧馬尙不、可、京上、之由也、先例舞人以、私

馬、騎用云々、仍察馬不、相叶、者、可、用、私馬、之由、

加、下知、慥不、可、問、事之狀、仰含了、

御裝束始事終、光盛已下退出、

自、今日、女院御、余直應、余參、住御所、可、爲、出立

所之故也、中將余同宿也、入、夜頭中將定能朝臣來、

示、合使之間條々事等、

廿七日、巳、天晴、寅刻、定能朝臣告送云、中宮有、御產

氣者、欲、參入、之間、又示送云、非、御產氣、煩、胸給

云々、仍不、參、法皇御、鳥羽、依、浮說之告、未、天曙、

忽以還御、即渡、御彼宮云々、已刻、重告示云、猶有、

御產氣、人々多參入、早可、參入、者、此間左少辨兼光

來、依、先日召、也、祭之間社頭禮、儀、爲、令、示、聞、中將、也、申云、殿上人等可、催之由、

一昨日被、仰下、了、即令、相催、之處、未、承、散狀、十

人許盡、催出、哉云々、即令、謁、中將、已終、余著、冠直

衣、前、近衣冠、網代車、依、車副連參、牛、童、遣、之、季信連車、隨身一人參合、參、中宮御所、六波羅、先

是左大臣已下、公卿廿人許參候、各直衣、淺黃指貫也、御、產以後翌日著、

薄色、先、左大臣、土御門大納言、藤大納言、源中納言等



在寢殿西底座、余加此座、左大將已下十餘人在中門、尋常公卿座二棟廊也、而依爲孔雀經御修法仁和寺宮、壇所、以寢殿西底南二ヶ間爲公卿座、依被修也、其座狹少、人々群集、中門廊也、以中門南廊也、爲御讀經所、公文從儀師實賀在、其所行、事、御驗者實詮僧都、顯智法印等、奉祈之、事體非火急歟、未及御祓、小時、宮權亮維盛朝臣內大臣、有告示左大臣、事、不知何事、即左大臣退出、疑是御產非、忽事之由、內大臣令告示歟、此後人々少々退出、此間於寢殿南庇、被供養五大尊、中宮大夫時忠卿日來遣立之、今日奉供養、供養了、給布施、右兵衛督賴盛卿取被物、少將時家朝臣取布施、一、要即導師其可退、退出、昇出御佛等了、大進基親出來、余問案內、申云、自今曉聊煩御胸給、又有逆吐事、然而非御產氣歟、但陰陽師入人、皆占申御產氣之由、其時刻皆以相違、於泰親朝臣、申明日可有御產之由、退出了云々、先是小輔僧正昌雲參入奉祈之、今日始參渡、御物氣、即退出了、未刻余退出、後御產事無聞云々、此日自院賜餽馬牽馬等、各置其鞍、令騎試中將、各返上了、唐鞍引馬鞍等、今日取寄之也、

廿八日、戊午〔天〕晴、終日沙汰明日雜事等、中御門中納言調送隨身裝束、注以下雜具、出、公卿侍臣等送摺袴、自院應被送道諸國所課祿、褂、袴、單重、布、凡絹等、式日、自親宗朝臣院北、光長等之許、注送役諸大夫散狀、又別當卿以檢非違使久忠、示送云、明日可參入之官人、進奉八人、但其中候中宮之輩、若有不參會事歟、猶所相催也、浮橋事下知了、隨又爲明基沙汰、已所令渡也、可行淀渡船事之檢非違使即久忠、依分配可罷向也者、條々承了、每事有沙汰、尤爲本懷之由、令答了、久忠又申云、先例奉行渡事之時、渡船口少之間、有其煩事也、仍以行事辨若職事、御教書付諸國、令責催渡船者例也、今度如何、豫觸行事辨兼光之處、隨本所仰、可申沙汰、由、所申也云々、余案之、度々春日使記渡船事、爲諸國沙汰之由、無所見、仍私致沙汰、而今以久忠申狀、重廻思慮、事理可然、何況天仁爲隆記云、檢非違使向淀行渡船事云々、以之思之、不付諸國者、以何可行哉、縱又雖無先例、至于此條、不可有難、仍仰光盛、以御教書仰遣兼光之許了、入夜自白川殿被送摺袴、以美作守基輔

爲使、件袴地摺袴也、尤奇也。申畏給了之由、今夜備裝束了、酒部所  
幄立骨、於覆者、明朝可張也、余加檢知、光盛季長  
等祔候、亥刻、右近廳頭清景進本府差文、職事國行覽之、左近先日覽之、  
同刻自關白御許、以職事重章、給舞人半臂下重、及  
童裝束四具、加三毛申畏給之由、又關白息中將以信  
賢、職事、被送摺袴、及深更一邦綱卿調送難色八人、  
取物四人裝束、女院御庄之美作國等所課、皆悉所進  
也、昨今、檢非違使基廣重成等掃除庭上門外等、但是  
大略許也、所々召人夫、日來所掃除也、

〔治承二年十月晦〕廿九日、己未天顏快晴、雲膚盡散、此  
日右中將良通爲春日祭使、發向、以九條亭爲出  
立所、裝束在指圖、卯刻、余著烏帽直衣、令懸舞人  
陪從裝束、以待際障子上三ヶ間、爲懸裝束、職事國行著衣  
冠、祔候、侍男共役之、先懸舞人裝束、爲上、以摺  
袴、引重々袴、其懸上、故實也、其末懸陪從裝束、以半  
臂下襲懸上、異舞人裝束、此間、奉行家司左京權大  
夫光盛參上、饗饌未持參、頻以催促、舞人陪從遲參、  
再三加催、此間、源大納言被來、暫居殿上人座、及  
已刻、舞人陪從等來、不悉召西廊南面、賜裝束、家司  
職事四位已下、著衣冠束帶、役之、各取一具出自障子、上南書月、於中門

廊南緣上結之、件舞人陪從〔著布衣冠、進跪砌下、取  
所、素切高麗也〕之、不參之舞人陪從〔裝束、自侍所方、預給廳頭清  
景、此間余居西廊廳中、行、事、頗登四面、見之、源  
入、大納言獨在殿上人座、余招  
斷交、次持參饗饌、次第居之、諸司官人著衣冠、役之、  
布衣相交、依人數不足、侍男共著

上達部饗、各給折敷、高杯三本、無飯、七人料、禮頭、  
殿上人饗、著座之後居也、而依可、通之、兼以居之、  
已上、土御門大納言所課、件饗、四府督相替役

之、而左兵衛督有輕服日數、仍一府關如之、  
所相親公卿勤之者例也、仍所宛彼卿而已、

舞人饗十二前、黑柿机十前、依座短、略今二前、於  
陪從饗八前、朴木机八前、居

已上右衛門督、別當、所課也、

諸大夫饗五前、居、中門廊紫端前、兼居飯、攝政關

加陪從饗卅前、白家者、撤、藏人所、兼居飯、攝政關

已上、土左國所課也、先例二ヶ國勤之、而今度  
自院被催之間、一國被宛兩方饗、然而於定  
文者、加入參河國了、

又張酒部所幄、覆調具、其中雜具、  
次余改著束帶、於東對、南面發遣幣帛、陪從陸奥守

職事、之後、著冠直衣、著薄色堅文織物次良〔通〕著

裝束、此間、公卿侍臣少々來集、

闕腋袍、黑半臂、打下襲、紅打柏、萌黃柏二領、紅單

衣、白浮文織物、表袴、紅大口、冠、櫻、紫檀地螺鈿

細劔、水精柄、闕白中將元服之時、余細劔、加冠引出物劔也、依小川之、紫淡平緒、繡、銀魚

袋、家無銀魚袋、仍所借、泥繪冬扇、笏、鞆、帶、落花形、川頭中將定能也、

散位定成奉行之、基輔政季等著布衣、相共

奉仕之一、

自關白之許、以前筑前守以政被送落花形、納蓋、

此間源中納言、雅賴、頭中將定能、朝臣等來著裝束

之所、定能朝臣云、賴文去夜補將曹之由、所承也云

云、將曹者、除目之時所補也、然者給祿之時如何、依

有疑示合源納言、源納言已蒙院宣了、不可知

除目之有無、可賜將曹祿云々、理可然、參議猶以

上皇仰任之、例、時中況自餘官哉、仍可增祿員數之由

下知了、今日使勸盃瓶子取、可用左中將泰通朝臣、

有兼日而忽依內裏召參上、難參會之由所申也、

送於季先例、四位近衛司取役也、而見參之殿上人

中、無近衛次將、經家、信基等朝臣雖爲四位、非

次將、定能朝臣雖爲近衛司、藏人頭也、攝政關白家之外、實首不動

雜役也、粗檢先例、雖爲藏人頭、親昵之人於大臣家

勤所役、非無其趾、治曆三年後二條殿著袴之時、

于時京極殿執政以前也、藏人頭隆綱勤陪膳、又堀川左府上表之時、

以藏人頭宗輔爲使、准據例如此、又天仁元年春日

使、頭修理權大夫爲房朝臣取瓶子、是雖非次將、依

爲貫首、從此役歟者、爲貫首之次將、與非貫

首之四位、以何人可令取瓶子哉、以源納言

問人々、于時、來集之卿相、源大納言定房、土御門大納言邦綱、中御門中納言宗家、藤中納言資長等也、各在四廊殿中、

一同申云、定能朝臣已於家爲親昵、如此事、依人可

有斟酌、雖爲藏人頭、令取瓶子之條、可無其

難者、仍以此旨相含定能朝臣了、舞人陪從未

參、頻相催、及未一刻、申參集之由、余居西廊東第

一間、同問四邊立屏風、爲簾中、使著裝束了、未思同居

此所、次上達部著座、出自西廊殿中、經陪從座前並殿、定西賢子南廣庇等、自座後著之、

房、隆季、邦綱、宗家、資長、實守等卿著之、〔親〕雅

賴依無座不著之、雖設七人座、舊三枚、四座四枚、先例也、雖納言著四

也、六人著之後無其所也、資賢、成範等卿、人々著

座之後來、此三卿在西廊簾中、雅賴卿行事、延久公

卿行事例也、次殿上人頭中將定能朝臣已下、著殿上

人座、各集會中門廊、經同南緣並陪從座前、自座後著之、定能、經家、經房、信基、光長、基親等也、次諸大夫



可著座而不著歟、次余召人、左京權大夫光盛參上、  
余仰舞人陪從可著座之由、光盛申云、舞人三人  
此殿御、未參、始召問之時、申皆參之由、今又申此  
由、不足言也、但隨見參且可著座之由、仰之、  
是延久四、次舞人著座、昇自中門廊西妻、經同南緣並陪從座末及  
年例也、次舞人著座、經殿西座北第一間我座後等者、座、東上南  
面、上落二人著南、次陪從著座、其路同舞人、但我座之後無所  
面、但當時還參、仍陪座上著之、南上東面、  
次酒部所人著座、下家司親重、並諸司、次一獻、中務權大  
輔經家朝臣於中門取盃、獻同之、經陪從座前并寢  
殿南廣庇、入自南庇西四間、居舞人座前、上落三人  
勸之、散位範保取瓶子相從、子也、散位雅亮勸陪從、  
經座前、次五位取瓶子、陪從同時勸之、各巡流了、此獻、  
春日器、舞人不撤盃、於上達部、延久、寬治例也、次二獻、權  
大納言定房卿於南廣庇西第一間取盃、諸大夫、自同  
庇東行、入自寢殿南庇第四間、居舞人座前勸之、  
安房守定長人、取瓶子相從、散位親行、四位可勸也、而  
方、奉行者不召、勸陪從、次五位取瓶子、舞人陪從同  
之、寄五位尤失也、勸陪從、次五位取瓶子、舞人陪從同  
時勸之、源大納言即復座、須第一舞擬第二卿之後  
復座也、舞人擬盃儀、

第一舞人當座、受盃、經座後末等、自西庇、出南  
庇東進、居第二卿前、擬盃、第二卿取盃、此同、  
勸盃

公卿可復座、而今日、自第二舞人、々々進居第一舞  
人西邊、二人相並、其路受盃、此間、第一舞經、即擬第三  
卿、同第一舞人、受盃、本路復座、即擬第三  
卿、次第如此、至最末卿、實守相遇擬之、上八座  
擬也、而依  
日暮略之、

天仁、大治、久安、仁平、已上四ヶ度、初獻有擬  
盃儀、今度須逐天仁例也、而憶事理、臨時祭  
庭座、第二獻有此儀、加之、江次第、賀茂祭使出  
立儀、又第二獻擬之、天仁以後例、頗以有疑、然  
而至春日祭、初獻可擬歟之由、相存之處、延久  
經信記、寬治爲房記等、二獻擬盃之由、有所見、  
以之思之、恐天仁以後例存失儀歟、仍今度  
逐延久寬治例、二獻有此儀、

次勸粉漿、先舞人、次陪從、次上達部、次殿上人、如此可勸也、  
上達部殿上人數別居汁、上達部拾折敷、諸大夫役之、舞人  
陪從料懸汁、五位役之、已上共向折敷、次公卿以下著箸、  
後問、誰人可申上哉、出座有其沙汰云々、先降季卿出、疑實守  
云、仁平度、朝隆卿爲大辨、人頭、在殿上人第一座、申上之、准彼  
例者、殿上人上薦、可申上、獻座季云、殿上人中、辨官可申上、獻云  
云、安定能朝臣云、本所存官、參議可申上、獻云々者、仍實守卿申上、  
即下箸云々、余案之參議可申上、此間檢非違使著座、大夫  
也、殿上人上薦、及辨官、共無理、此時、檢非違使著座、大夫  
著、實長昇、八尺床子二脚、立酒、此時起座、須三獻之後、次三  
部所端南邊、(南北妻)、其後著也、小時起座、須三獻之後、次三  
獻、先光盛進座下、問示降季卿、而依左手加灸治、進邦綱卿勸  
退有煩、勸盃可有恩免云々、仍邦綱卿勸之、

盃、其儀同三獻、此度不疑盃直下、侍從家俊人、取瓶子、散位範保勸

陪從、次五位取瓶子、次陪從發笛筆策〔音〕、二獻欲

加制、次賜插頭花、散位定成、取插頭花草整、件草

止、如器、形彩色也、其居、中門廊西戶內、須居、上

上立、櫻十二枚、款冬八枚、居、中門廊西戶內、須居、上

殿上人經家朝臣已下、次第取之、經陪從座末入

自寢殿西庇北第一間、自殿上人座前南進、自母

屋東進於舞人座前、插各冠、拔笏經本路退下、

先是三獻之間、敦直、次諸大夫範保已下取之進、自陪從

座前插之、次舞人陪從經本路退下、先舞人、次南廣

廟敷背圓座十二枚、次上達部移著、自上、次南廣

此事有兩說、或先北面、勸盃之後南、次居、香物、諸大夫役之、人別

面、或又如今日、若無其難、歟、次居、香物、諸大夫役之、人別

此間陪從進中門內、發歌笛聲、次舞人進庭中、舞

求子舞了、歸入之間、使勸盃於上達部、其儀出自

西廊南面戶、頭中將、於陪從末前程南面跪、突、插、笏

取盃、民部精少、宗雅居、折數、傳、頭中將定能朝臣取瓶子

相從、子細、使經陪從座前并公卿後等、居第一卿定房

座上、瓶子取入酒、使氣色于定房卿飲之、更入酒

擬之、定房受盃擬隆季卿、此間使拔笏、依不、拔隆季取

盃之後、使起〔右〕廻、經本路歸、入自初戶、瓶子取

取、續瓶子云々、使即懸、裾於劔、居、木戶內、延久四年例、後  
今運彼例也、使即懸、裾於劔、居、木戶內、延久四年例、後  
著、公卿座末、今日可、運彼例、而久安如此、寬治、次余出、自同  
天仁不、然、仍今日不、著、公卿座末、尚可、著歟、次余出、自同  
戶、加著穩座上、其路如、使勸盃路、座上、有、次召人光盛參  
上、余仰云、舞人已下可罷渡者、次第渡南庭、  
行列、  
先舞人、爲先上薦二行、今日雖不、仰一舞、余番長下毛  
野原重爲第一、同下薦二人爲第二、第三、其殘皆本府近  
也、  
次飭馬、備左將曹泰兼任、同賴文等、  
次馬副八人、二行、可立之、而二重  
次手振十二人、二行、上薦二人、可持、燈頭、燈而忘却不、持  
次隨身四人、二人、以奇異也、於座雖、尋之忽不能、令、持  
次引馬、備連參、仍舍人居側引之、  
次陪從八人、二行、和琴持、交此中、初先舞人  
次童四人、二行、欲渡、余追隨、令、從陪從後、  
次雜色八人、二重立之、  
〔次〕取物四人、取物如、俱、  
次共人十七人、一行、爲先上薦、  
四位、  
前和泉守源季長朝臣、  
五位、

太皇太后宮前大進源行賴、

前筑前守橘以政、

前皇太后宮大進源季廣、

前皇后宮大進源長經、

上野守藤原賴高、

散位源邦業、

散位源保行、

散位源信光、

散位源兼親、

左馬權助源國行、

散位源正綱、武士、

但馬權守源長俊、

六位、

蔭孫源兼時、皇嘉門院判官代季長子、

蔭孫藤原長正、院非藏人光經子、

勾當源國輔、行賴子、

勾當藤原業清、良清子、

各著布衣半靴、六位同黑塗半靴、國輔著毛  
沓、各童一人相從、又相具馬、皆悉令牽其  
前、正綱獨令引後、共有其說二事也、

渡訖、令渡引馬、備師武、忠武、并隨身二人、依遲、次

公卿起座、余同起、歸入自初戶、相伴中將一師出

〔於〕中門廊西妻、引寄馬、騎之、散位信光、令抱乘之、定成副衣裳、

此間、公卿群立中門廊南緣、余立西面妻戶下、其人

等列居中門外、使出西門之後、余於東門乘車、代

車、牛童道之、其盛、令渡舞人已下訖之後、自閑路馳

參法皇宮、七條、使參院路、自九條東行、自富小路

北行、經川原、有淨、入自七條殿南樓、於御所西門

下馬、頭中將、並信基朝臣等、豫參院、扶

路頭行列

先琴持、本府仕丁、著赤衣持之、

次舞人、爲先下、一行騎馬、本府牧馬不持來、仍各私設之、太異樣也、是先例云々、

次使、騎兼馬、院御馬擬白、

次隨身四人、二行、步行、

次童四人、二行、步行、

次雜色八人、二重、步行、

次取物四人、一重、步行、

次陪從八人、一行、爲先上馬騎馬、

次飭馬、院御馬、青馬、

次馬副八人、二行、步行、



次手振十二人、二行、步行、

次加倍從十六人、一行、爲先上馬、騎馬一員、三人在此中、右十人、左六人、皆著束帶、

次共人十七人、一行、爲先上馬、騎馬、

余先依召<sub>親召</sub>候、寢殿南簀子敷<sub>座</sub>、無<sub>國</sub>使入門之間、

親宗朝臣召<sub>之、降而告</sub>、即入自中門廊西面戶、參、先

候、坤角簀子、依重召進候、南簀子、北面在余西、次覽、傍馬

牽馬等<sub>各、各引</sub>、一匝之後引出了、須、舞人已下、皆悉被

渡也、而東方無可通之路、又皆悉行達南庭之條、

時刻可推移之上、於御棧敷可有御覽、仍被省

略<sub>也</sub>、次伴中將起座至中門、法皇渡御々棧敷

了、余召前駐季長、國行等<sub>御出</sub>、等召仰行列不可

違亂之由、廻東方<sub>自、當上</sub>、南門、轡戶、乘車、直向改裝

束之處<sub>五條南、東洞院西、邦綱卿新造亭也、先例以內藏寮爲</sub>

無可然之家、仍相改<sub>改、裝束之所、里第之時占近邊之家、擬之、今度近邊</sub>

程遠所、借用件家也、蓋車下之、先是女房兩三來會

亭主邦綱卿、參會內裏、待使<sub>之</sub>參內云々、小

時又女房來、其實女院爲使母、同車<sub>密々渡御、不使人知、之、借用人</sub>

也、余退出之後、舞人已下被渡、院御棧敷云々、其行

列如初、自七條殿西大路北行、經川原、自京極大

路北行、自四條大路西行、自東洞院北行、自三

條坊門西行、至西洞院<sub>陣</sub>、即下馬<sub>于、時初乘、燭、皇布</sub>

衣共人留此所、頭中將定能朝臣、中務權大輔經家朝臣、修理權大

輔宗雅、中務權少輔季信等<sub>夫信基朝臣、侍從家俊、右兵衛佐盛定、民部權少</sub>

來會陣口、相從使參入、舞人在使前、陪從、加倍從<sub>謂、左右</sub>

隨身、雜色、小舍人、童、傍馬、牽馬、馬副、手振等、相從

參入、使進立弓場殿代<sub>西中門外</sub>、陪從發歌笛音、藏人

頭左近中將定能朝臣奏事之由、即告召之由、<sub>北殿也</sub>、使

垂裾入自中門北小戶、候中門廊西緣南妻<sub>疑、長</sub>

數圓座一枚、其香<sub>身進寄取之云々</sub>、次舞人入自中門、進前庭、舞求

子、此間賜看物於使<sub>殿上五位二人、成家惟基</sub>、次頭中將定

能朝臣勸盃、五位藏人基親取瓶子、使飲了、置盃於

前、次頭中將取勸祿<sub>紅打御袖一領、後聞、重御單被出之、出</sub>

自殿上之戶、懸使扇、使左手取御衣、右手持笏

下自緣南妻<sub>不著</sub>、進出砌西<sub>四、五尺</sub>、向御所方北、拜

舞、<sub>如</sub>訖、右廻出<sub>自</sub>、初小戶著沓<sub>經家朝臣</sub>、賜祿於

隨身<sub>上、重武子宗雅</sub>、次覽、傍馬已下<sub>此間使從、御</sub>、先傍馬、

隨身<sub>兼任、師武引之、賴文於路</sub>、次馬副、次手振、取物等、路間納

頭<sub>落馬、不參、內裏云々</sub>、次馬副、次手振、取物等、路間納

而還參之、依暗夜不待、次牽馬<sub>健同前、忠武依布衣、各叙覽</sub>

了、引廻前庭牽出了、先是給舞人陪從祿<sub>出納取次</sub>

使經本路<sub>欲</sub>退下之處、使從者可渡北陣之

由、忽以其沙汰出來、此事依無先例、兼不召仰其

儀、但臨期、邦綱卿、定能朝臣、經家等相議、准臨時祭

儀被渡之、共諸大夫留陣外、而可被渡之由、有勅定、布衣之者可憚哉否之由、定能朝臣雖申出是非、被渡御前之儀、只使退出、密々女房等見物之體也、仍不可整行列、不可備威儀、只可渡之由、有勅定、仍皆悉渡北陣云々、於西洞院西北門有御覽、邦綱卿候御前云、便於二條町陣、騎馬、自町南行、自三條坊門東行、自東洞院南行至五條、依及暗夜、於途中乘車歸來、此事非也、雖夜陰、尙可騎馬也、登車於中門廊下、自車、邦綱卿相從、定能朝臣已下殿上人等、同以相從、使即解脫、舞人陪從〔々〕者等皆以分散、爲改裝束、禦飢也、此間使良盛事、余職返奉落花形於關白、納本帶、使未歸來之前、藤中納言資長來、余謁之、又皇太后宮大夫朝方同來、依不聞及、不謁之、件人使出之後、來出立所云々、及戌終、共人等來集、能及小隨身等冠、水干、狩襖袴、股貫帶、小舍人、同水干、裝束、毛沓、舞人、陪從、加陪從、等詞、亥刻、使著直衣、綾直衣、淨文指貫、無出衣、柏夾、帶、車、蓋車、乘之、邦綱卿、中務權少輔季信著布衣、乘車後、寬治二年、大藏卿通良朝臣、天仁元年少將宗能朝臣、大治五年右少辨宗成等乘車後、今依彼等例、所召仰季信也、明日自淀歸京、先例也、即以下向、條、西折至朱雀、南行、總并官人等乘馬在車後、諸大夫同相從、前後、侍同以相從、於七條堀川、官人行除目、政所封戶國成下文給、沙汰官人、天仁例也、阿波越前等國、即彼時例也、其儀右近

廳頭惟宗、清景、將使車傍役馬曰、正禮可知此、而清景遇尤失、藏人頭刑部友貞、人、檢非違使安那定行、五位、藤井國兼、六位、已上同舞人也、看督長石作爲安、伴國延、除目、行除目訖、下家司親弘給下文、越前國、十石、阿波國五石、件下文家司光盛加判、是封戶國也、依天仁例行之、爲隆記云、賜下文云々、其上子細不見、今案事理、示合人々所行也、子刻、着淀休幕、當大路東邊、本府立三間幄、東西四面引斑幔、其內敷疊、先例稱平板敷、今度、立屏風、屏風及疊相具之、件幄後、八幡別當法印慶清立假屋、并松葉、敷帖立屏風、供饌贊殿、卜近邊小屋、御馬同引至小屋、贊殿供御膳、御庄々勤、已下雜事、在別、八幡別當同勤雜事、使不著件假屋、宿本府幄、是先例也、天仁八幡別當雖儲假屋、不宿給云、依降雨降恐、用意件假屋也、豫下家司刑部錄久行、造事、所司内匠允重康、女房、同車、等參候、近習人兩三〔卿〕、御幕邊敷敷皮二祝候、御共侍等、少々同〔以〕祝候、使出後、女房及余、歸九條亭、改裝束之所、鋪設雜事、其儲太過差、今日來會卿、



大納言、定房、隆季、邦綱、

中納言、宗家、資賢、資長、成範、雅賴、

參議、朝方、使出之後來、實守、

殿上人、

頭中將定能朝臣、

經家朝臣、

經房朝臣、

信基朝臣、

宗雅、

光長、

基親、

季信、

棟範、

定長、

家俊、

盛定、

諸大夫、

光經朝臣、

範季、

範保、

雅亮、

親行、

季佐、

朝宗、

邦輔、

良盛、

定成、

〔光盛、奉行、〕

次五位、

親經、

忠廣、

貞光、

今日座事訖、欲移著穩座之間、隆季卿以右中辨經房朝臣示曰、先例、或於院有被御覽帶之事、若可然者、存其旨、可申沙汰者、答云、本所不可申左右、只可在御定、久安有此例歟、其外無所

見歟者、輕易以定能朝臣所傳示也、今日無其事、  
出立所裝束、

寢殿母屋三ヶ間、南庇三ヶ間、西一間爲西廂四ヶ間、及南西廣庇、四廣庇爲敷席、中門廊敷滿長筵、中門廊之簀子等、不敷之、寢殿南四母屋庇之間、并廊長押端有差筵、母屋不區簀子、廊每間置簀子、妻月間不置之、中門廊無差筵及簀子、南廂東鴨柯間、及母屋西第四間西面、并北廂南面三ヶ間、西面一間、同西庇廂南第五間南面、北孫廂、懸壁代、其上懸直御簾、母屋南四兩面、及南四兩面、不懸簾是先例也、九帳、副御簾立留四尺屏風九帖、母屋西第三間副東屏風、敷兩面端疊一枚、南北行、去屏自同間一至西第一間、敷同疊四枚、敷之、依間狹、頗引重、爲舞人座、上藏二人、自南廂西第三間、加西庇、東柱、至同第一間、中著橫座、自南廂西第三間、加西庇、東柱、至同第一間、中火、東西行敷高麗端疊三枚、不及西庇、四長押際三尺餘、其上敷高麗端龍鬚三枚、其上加東京錦茵三枚、高麗圓座四枚、參議座、但雖納言著此圓座、只隨見參也、爲上達部座、東上、自西廂南第二間、加南庇、至同第四間中央、敷紫端疊三枚、依間狹、頗爲殿上人座、東上、自西孫廂南第三間、加南庇、及孫庇等、出廊也、第二至第五間中央、敷綠端疊三枚、依間狹、引間有刻階、南上、中門廊西第一間副北壁、敷紫端疊三枚、頗引、爲諸大夫座、東上、侍廊障子上三ヶ間、副

西北障子引綱、每柱打貳金、南懸舞人陪從裝束、舞人裝束以三、陪從裝束、四等柱打、栗形、懸殿北孫廂西第二三間、加西、敷長筵、無三、北廂北面二ヶ間孫廂、西第三間東北兩面懸、及鋪子、北廂北面二ヶ間孫廂、西第三間東北兩面懸、皆垂、同西第二間西障子、及北遺戶等不懸、副、北底北面簾并西障子、立、廻四尺屏風四帖、東間副、南屏風立、二階厨子一雙、其上並置冠筥、搔上宮、泔坏等、厨子前副、東端、敷高麗端疊一枚、南北四間、敷高麗端疊二枚、寄南敷之、爲、使著裝束、所、寢殿南孫廂南面二ヶ間、同格子遺戶、東、垂、御簾、出、几帳帷、女房不、東子午廊西面三ヶ間、南第一間妻戶、同南面四ヶ間、中二間、東、垂、御簾、出、几帳帷、女房不、西端遺戶、已上爲女房見物所、御見物、竊以渡御、當、中門東屏東妻、立、屏五、子午妻、立、二丈幄一字、爲、酒部所、其內北間、立、火臺一脚、其北立、酒樽、居、床、南間立、二階案一脚、南北上階立、茶碗、瓶子二口、青瓷瓶子二口、下階置、酒盞、土器、繪折敷等、案西立、七尺床子二脚、爲、酒部所人座、車宿屋西二箇間、尋常、母屋及北庇、敷、紫端疊六枚、母屋四枚、東上對座、北、爲、陪從并一員官人座、以、車宿二ヶ間、爲、辨、備饗饌之所、車宿前東西行引、纈額帳、先例、出立所引、暢之由、不見、舊記、仍南廂不引、暢、然而至、車宿前、爲、隱、變、饗、辨、備所尤可引、之、仍以、今案、引、之、

還立日、裝束同前、但舉、掌燈所々、上達部座上下各一燈、殿上人座上下各一燈、陪從座上下各一燈、中門廊一燈、使著裝束所一燈、供奉上下夾名、付裝束、舞人十二人、當府番長已下、勤、之、番長下毛野厚直、近衛下毛野武宗、刑部友貞、石作正次、石作爲安、綾行久、立花武次、已上府者吉上之屬也、裝束、紅梅色袍、白單張半臂下襲、袍外關白所袴、八人之所、課、帶、繪尻鞘、有、懸緒、平、著、糸鞋、陪從八人、當府者勤、之、番長石作國次、大中臣貞弘、秦兼茂、已上余國身、伴國延、安那定行、藤井國兼、紀光次、

菅野國久、

近衛泰國澤、

〔藤井貞正、〕

藤井則友、

伴 垣久、

紀 恒友、

裝束、襷繪袍、青單張半臂下襪、

本左大將所課、而青依服暇、余調之、

末濃袴、著、沓、

加陪從八人、當府者勳之、夾名不載、

差文、異樣之者于云々、

左右加陪從官人十六人、

左近將監伯則近、

將曹大石範直、

豐原俊秋、

伯光重、

府生大石久直、

大石季景、

右近將監多好方、一員、

將曹多近久、一員、

惟宗清景、

多景節、

府生三宅盛正、

玉手宗清、

玉手近清、

紀 爲保、

下毛野武春、一員、

豐原行光、

裝束、束帶、一員官人同前、

童傳官人、

左府生紀重延、

大神是弘、

右府生尾張則兼、

尾張兼遂、

立明官人、左近勳之、右祭無、

右立明、先例也、

左府生豐原公秀、

清原助成、

豐原公久、

物部安國、

秦 重次、

矢田部成吉、

藤井近安、

建部國光、

秦 末次、

建部安茂、

大神光茂、

尾張兼助、

藤井國正、

紀 有行、

大神武次、

建部成安、

紀 光末、

大神武吉、

春日共枝、

清原有里、

礎、

飭馬、

左近將曹秦兼任、候院、

參內謁如例、唐綾襖袴、付五節櫛、

發向、冠、白綾葛水干、狩襖、西衣、末濃〔袴〕、

還立、冠、綾葛狩襖、淺黃、西衣、紺末濃葛袴、

同將曹秦賴文、候院、

參內、袴、唐綾襖袴、付三節櫛、毛沓、挿笏、

發向、冠、白唐綾水干、狩袴、紺葛袴、紅衣、股貫、

還立、冠、柿狩襖袴、末濃袴、西衣、

引馬、

左府生下毛野師武、關白殿御隨身、

參內、冠、白唐綾上下、付反鼻、紅打衣、差帶、掃笏、帶

發向、冠、車輪文紺狩襖上下、黃衣、股貫、

還立、冠、木蘭地狩襖、草袴、齒衣、

左番長下毛野忠武、余隨身、

參內、烏帽子、平禮地蘇芳之青唐綾狩襖、袴、(付樣々冬扇、)

發向、立烏帽子、糸葛水干、狩襖、末濃袴、款冬衣、股貫、

還立、立烏帽子、糸葛狩襖、末濃袴、款冬衣、

御隨身、

中臣重武子、下毛野原澄子、實厚助子、

下毛野忠武子、實師武子、下毛野原直子、

裝束蠻繪袍、獅子文、躑躅半臂下襲、濃打柏、

裏濃蘇芳袴、濃單衣、二藍末濃袴、

合袴葉脛巾、淺沓、繪尻鞘劔、虎皮文衣也、

平文懸緒、樺卷鞭、布帶、

中御門中納言所課、魚惡物、於余許調替之、

發向、藍摺(小加陪天)水干、狩襖、糸葛袴摺、袴、齒衣、冠、帶

還立、紺水干、狩襖、(文、葉、)貫袴、摺(小加陪天)上下袴

四人皆同裝束也、件兩日裝束、雖無先例、

內々調賜之、

小舍人童四人、

藥叉丸、千法師丸、

金法師丸、萬歲丸、

已上皆侍品者子也、金法師、御厩安(司主)

參內、薄物、黃狩襖、袴、結、紅葉、付、薄、款冬打薄款冬袴、

黃單衣、毛沓、有、錦花腰及花帶等、相模日扇付、紅薄

發向、糸葛水干、黃染之紺葛袴、紺卷染衣、

還立、藍摺、魚水干、(裁、入色々草、)糸葛袴、(摺、菊、)

四人同裝束也、件裝束兩日皆調賜之、雖

無先例、內々所賜也、

雜色八人、

武員、余、月宗、友弘、行次、

千與澤、開方、已上、番頭、盛久、盛次、頭中將雜色、

裝束、半蘇芳狩衣、無、袴、濃打出袴、黃袴、青

單衣、造、菊白、付、之、

取物四人、

月行、頭中將雜色、宗里、同、

菊澤、余雜色、國澤、

裝束、朽葉狩衣、朽青打衣袴、薄蘇芳袴、濃蘇芳

單衣、造、龍膽、付、之、





翌日、二藍綾香經狩襖、  
黃衣、薄色奴袴、

還立、淺黃唐綾袴、花款冬衣、  
淺黃奴袴、

橘以政、正五位下、前筑前守、  
皇嘉門院殿上人、

立日、白唐綾狩襖、唐花田衣、  
薄色奴袴、

翌日、薄色綾襖、(二藍裏)黃衣、  
同色單衣、淺黃奴袴、

還立、比曾久唐綾狩襖、(濃裏)款冬黃  
單衣、唐綾淺黃奴袴、

源季廣、從五位上、前皇太后宮大進、  
院殿上人、

立日、唐綾狩襖、(地薄紫文黃唐草)花款冬衣、  
黃衣、同單衣、薄色奴袴、

翌日、白唐綾狩襖、薄色衣、白衣、  
同單衣、奴袴薄色、

還立、薄色狩襖、黃衣、二、  
同單衣、薄色奴袴、

源長經、從五位上、前皇后宮大進、  
皇嘉門院殿上人、

平禮  
立日、薄色田唐綺狩襖、(地白文淺黃)款冬衣、黃衣、同單薄色奴袴、

〔平禮〕  
翌日、比色唐綾狩襖、黃衣、  
黃單、薄色奴袴、

〔立烏帽子〕  
還立、白唐綾狩襖、唐花田衣、  
白衣、白單、淺黃奴袴、

藤原賴高、從五位上、上野守、  
皇嘉門院殿上人、

立日、黃經二藍織物襖、(青裏)濃山吹衣、  
黃單、薄色奴袴、

翌日、顯文紗(虫指)黃綾狩襖、薄色衣、  
白單衣、薄色奴袴、

還立、顯文紗赤色狩襖、濃款冬衣、  
黃單衣、薄色奴袴、

源邦業、散位、已下皆從五位下也、院北面、  
具童二人、其異樣云々、

立日、顯文紗縹狩襖、濃款冬(衣)、  
黃單衣、薄色指貫、

翌日、  
還立、

源保行、散位、院北面、

立日、赤色顯文紗狩襖、  
款冬衣、薄色奴袴、

翌日、黃經二藍縹狩襖、  
款冬衣、薄色奴袴、

還立、浮線縹白狩襖、唐花田衣、  
薄色奴袴、

源信光、散位、  
不經藏人、

立日、黃緯二藍經綾狩襖、唐薄衣、  
薄色奴袴、

翌日、顯文紗山吹襖、款冬衣、  
薄色奴袴、

還立、白唐綾狩襖、紺衣、  
薄色奴袴、

源兼親、散位、  
院殿上人、

立日、紺青丹狩襖、濃款冬衣、  
黃衣、黃單、薄色奴袴、

翌日、顯文紗縹狩襖、濃款冬衣、  
黃衣、黃單衣、薄色奴袴、

還立、浮線縹赤色狩襖、衣單同、前、  
薄色奴袴、

源國行、左馬權助、不具隨身、  
皇嘉門院殿上人、

立日、唐綺狩襖、(地黃文白)款冬衣、  
薄色奴袴、

翌日、薄色綾狩襖、唐薄衣、  
薄色奴袴、

還立、浮線白綾、唐綾蒲萄染衣、  
薄色奴袴、

翌日、二藍布袴襖、(以白糸、如引錦引洲流、)唐款冬衣、紫氎染奴袴、

取物具、雨衣、付舍人、行囊

已上借白川殿用之、代々春日使所騎用也、  
水精地鞍者、宇治左大臣息等不騎之也、

御車、不新調、牛童不賜當色(是先例也)、

引替牛、十三頭、召人々、

御衣櫃二合、在覆青色、付行事下家司有長、

御笠、張筵、

祿唐櫃一合、朱染、無覆、付行事下家司親弘、

當色、外雜色五六人、御車副等召具之、此外雜事等、  
在別注文、

### 十一月[大]

一日、庚申〔天〕晴、此日春日祭也、行事辨左少辨兼光、近

衛使右近權中將良通等也、示昨日來臨之慶於實守

卿、還立口有故障之由、關白被送書云、昨日天晴風靜、兼日所相觸也、

神威炳焉、何況供奉上下皆以美麗、每事珍重之由、奉

感不少云々者、一兩之卿相、今日送摺袴、此日神齋

如常、

路間事、後日傳聞記之、

未明著裝束、先供饌、於黑木屋、直衣、袖、夾、野劔、鹿

皮尻鞆、半靴、辰刻渡淀川、先乘車、伴船邦綱卿相、移乘船、

儲之、季長、行賴、長經、兼親、國行、兼時等候、舳舻、  
此外又設河船一艘、他御共人等乘件船、檢非違使  
久忠催其諸國雜船參上、此外女院御庄々、并美作國  
等、和儲雜船、雜人等以件等船渡之、自夜半漸  
所渡也、又御共人從者各私致沙汰云々、今朝饗雜事  
等在別注文、女房兩人季信等自此所歸洛、次於  
美豆濱、騎乘替馬、二位中將鶴毛、舞人前行、共諸大夫并儲  
等、相從前後、申刻著梨〔子〕原、上下退下、酉刻著  
束帶、乘車向列見辻、宿院指下也、騎三飭馬、手時乘燭、舞人於馬  
上舉炬、次使隨身、馬副、童傳、官人、雜色等、皆  
取松明、於御塔前、令騎引馬、於社頭西鳥居下  
馬、正笏引裾、著被戶座云々、加陪從官人、猶水  
干裝束、一員束帶、先例云々、  
社頭祭祀之禮、仰行事左少辨兼光、令注進之、  
祭禮了、自西鳥居退出、舞人於南門外騎馬、各  
高聲叫喚、皆悉放本鳥、取松明、馳之、爰使騎乘  
替馬、路間舞人亂遊至于梨原、其事不止、深更著  
梨原、舞人已下皆悉行祿、共人次第取之、祿法在  
別、  
今夜燵已下雜事、又在別也、



宿所體、七間萱葺屋、無板敷、府失也、以西三ヶ間、爲使休所、疊屏風等自京相具之、其東四ヶ間爲舞人座、立白木臺盤、女房大貳局豫參候、基輔朝臣同參候云々、

二日、辛酉〔天〕晴、申刻著冠直衣、堂上庭中加檢察、此間光盛參上、余賜今日次第乃祿法注文、未及昏黑之間、辨備饗饌、其法如立日、上達部殿上人左衛門督、舞人陪從右兵衛督、加立孟於折敷、及秉燭、公卿殿上人漸以來集、言等、秉燭以前來、待使之間、於西廊簾中、與卿等清談、及戌四刻、使歸來入西門之間、上達部著座、如立使進立中門廊西上

廂、南面、使直衣、柏夾紅打出衣、紫指貫、帶、家朝臣勸孟於使、謂之立孟、取孟出自侍廊南戶、經中門廊西上、向使、定成良盛、共余等取肴物、高折敷、親行取瓶子、各相從、使飲了、置孟於肴物折敷、禮須、舞人陪從列立也、後無此禮、又久安正禮、法被行、此儀已爲不吉例、仍今度、無巡流儀、余以今案、可置孟於肴物折敷之由、豫舍、使了、即使昇自中門廊西上、入自同西第四間西面簾中、稱西廊中、藤中納言資長、簾、使於著裝束之所、即以解脫、不復出客亭、次殿上人著座、臣已下、次陪從進中門內、發歌笛音、舞人進庭中、舞求子、舞人陪從連、促舞了相共歸、出自中門〔外〕、昇自中門廊西上、各以著座、其路同、次日一獻、修理權大夫信基朝臣勸舞

人、瓶子親行勸陪從、瓶子〔次〕舞人〔擬〕孟於公卿、此不可然、還立日擬孟之由、不見舊記、縱又雖可、次余以光盛、第二獻可擬之、旁以不可然、仍制止之、就上達

部座末一獻者、即以召著之、定能朝臣經、資子著之、所設座七人料也、而所立日卿座末無所、仍無召著貫首之儀、仍今日散彼爵而已、次可下粉熟著、而不下之失也、粉熟須一二獻之後居也、而爲急次第事、兼以居二獻、源大納言勸舞人、侍從兼忠、取瓶子、光經朝臣勸陪從、瓶子次次差汁、先舞人、次陪從、次殿上人、役送汁、余制止之、彼座不居次下著、次賜舞人陪從、依飯、仍又不可蓋汁也、如立日、抑光盛、上達部座欲蓋治天仁例、殿上四位五位賜舞人祿、於中門廊西上、三獻也、其前有地下四位五位賜陪從、自給之、其祿法有差、具注、次舞人陪從起座、經本路退下、

次公卿起座、徘徊中門廊邊、次於西廊南面給儲及左右官人等祿、余示可坐簾中、之由於人々各以固辭、再三請之、兩大納言、定房、入簾中、宗家已下尙在中門廊、殿上人等群集同廊西一間、余居西廊東第三間南面簾中、領卷、先召儲、光盛於中門廊西、兼任、賴文、師武、忠武、次第參入、賜祿有差、束帶大夫布衣共人相交取之、各下立砌下、賜之、賜一人訖、更召他

人也、兼任、賴文等自不取御衣、立明官人等取出之、師武、忠武、自取御衣一起、其殘物等、其子小隨身、出來取出之、立明官人相共運之人々謂以、師武知禮、兼任、賴文不知故實者、次召右官人、好方以下十人給祿、次召左官人給之、次舞人之中、召余隨身三人、賜摺袴、皆悉賜了、人々退出、抑櫛之外左右官人絹祿、於前不賜之、副目錄給沙汰官人、於隨身所座分賜之、又小隨身四人祿、於待邊所司取之、加陪從八人有祿、重傳官人、立明官人等、絹祿、同給廳頭了、又院御廐舍人居同等、同賜祿、於閑所給之今日無經頭事、依新制、近年無此儀者也、今日來集卿、

大納言、定房、邪綱、

中納言、宗家、資賢、資長、成範、雅賴、

殿上人、定能朝臣、經家朝臣、信基朝臣、宗雅、光長、

季信、兼忠、定長、

諸大夫、光經朝臣、光盛、(奉行)親行、忠光、定成、良盛、

依新制、共人不著紅紫二色及錦繡織物等、但於雜色打衣及笠風流者不憚之、今度之刺、不被裁祭使笠、車、及從者過差之條、仍申合關白之處、不可

憚之由、有報狀、於共人者、非祭使一具之事、仍守服飭之制者也、今度諸國所課、依指合御產、存不可有其勤之由、祿物等皆悉用意之、臨期自院廳諸國所課掛等、少々所被催渡也、然而不及十之一、陪從裝束、依左大將服暇、余調賜之、還立日、使陪從變、所宛右兵衛督、和也、而其後聞服暇之由、但除服以後雖須改宛他人、於還立日者、已非神事、仍不改替之、此條且非無先例者歟、今度指合御產之條、兼以成恐之處、其事無爲、加之、日來連日降雨、三々日之間、天晴風和、又供奉上下之中、一塵無恙、皆是大明神之冥助也、何況以孤露之身、苟逐數代之跡、一悅一恐、於神明三寶、彌致謹慎之思者也、

歸路之間事、後日傳聞記之、

早日、使著裝束、色日同昨日、但出紅打衣、行事辨兼光參入、於南面、頗卷簾對面、辰時令起梨原、騎乘替馬、引馬腕等暫取其口、共諸大夫在、前後、於饒能遠、自法華寺島居一町許北、行路、陪從發歌笛、留馬、西邊岸上也、向、行賴師武等付馬口、自余輩候于地上、召府廳、須給祿絹、正、六親弘給之云々、次於奈良坂、有糺盜人一事、路西

有小川、道東留馬、西、行賴師武付口、自路西邊谷方、舞人武宗稱大夫判官、著赤衣、乍騎馬參使馬前、舞人兼茂稱看督長、帶白羽矢、取弓出來、其後持參犯人、下部二人引張之、看督長勘問之、申不犯之由、引入其身之後、稱盜人妻之者又持參了、召問之處、申可被問夫之由、仍重勘問夫、猶不承伏、仍及拷問之時承伏申云、犯用之贓物在所、和泉前司所知也、又大夫尉所知也云々、即引入丁、召應頭給祿絹、次於母蘇杜見隨兵、杜南有野路、西邊留馬、東、付口人如初、隨兵十騎、使馬前、先正綱甲冑、次同調度懸、已上、次武士十騎次第渡之、此中渡邊一文字名輩有六人云々、見了、自此所乘車僅廿卅町許、其後又騎馬、申刻著淀渡、儀如昨日、船中儲破子、大納言所設也、渡之、後著本府幄、即有雷公儀、舞人三人冠上著拾笠、拔劔立匣前庭、其中被赤衣之者一人出來振鈴、于時應頭清景問之、被赤衣之者、出公是也、答之、有祝言等云々、其次給祿絹、御共諸大夫取之如梨原、祿法在別、次乘車入洛、於八條壬生又騎馬、乘、於三善院、八條院御堂、兼中、請替、于院也、門內暫留馬、舞人陪從改裝束、其後歸九條亭云々、

- |        |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 梨原百五疋、 | 十二疋、  | 八匹、   | 八疋、   | 四疋、   | 三疋、   | 二疋、   | 八疋、   | 十六疋、  | 六疋、   | 二疋、   | 二疋、   | 四疋、   | 三疋、   | 一疋、   | 一疋、   | 五疋、   |
| 舞人十二人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 | 陪從八人、 |

一疋、 草預一人料、  
一疋、 山邊預一人料、

已上寬治例也、天仁例無所見、大治以後、不  
賜三罐及我隨身祿、今度因寬治例也、

鱒能岡、六疋、

奈良坂、廿二疋、檢非違使、犯人、下部等料、

淀同三梨原、但止山邊給平張預、其外雷公一人料一疋、  
還祿、仍百六疋也、

還祿、

罐四人、

左將曹秦兼任、院御隨身、

例祿六疋、國絹卅疋、三結、不裂之、

綾掛四領、白掛二領、摺袴三腰、

半臂下襲、使御衣也、蘇芳御衣三領、同、

已上賜次第也、已下效之、

右將曹秦賴文、同、

例祿絹卅疋、

綾掛四領、白掛二領、摺袴三腰、打御柏一領、

黃御衣三領、

左府生下毛野師武、殿上御隨身、

例祿絹廿疋、二結、不裂、

綾掛二領、白掛二領、摺袴二腰、御柏一領、  
御衣二領、

左番長下毛野忠武、右大臣殿御隨身、

例祿絹十五疋、一結、不裂、

綾掛一領、白掛二領、摺袴一腰、御衣一領、

左右官人十六人、先賜當府、次賜左近也、

右將監多好方、

例祿絹三疋、陪從官人祿絹三疋、綾掛三領、

白掛一領、摺袴一腰、濃袴一腰、

同將曹多近久、

例祿絹二疋、陪從官人祿絹二疋、綾掛一領、

白掛一領、

同惟宗清景、

例祿絹二疋、綾掛一領、白掛一領、

摺袴一腰、依沙汰官人結之、先例也、

同多景節、

例祿絹二疋、綾掛一領、白掛一領、

同府生三宅盛正、

玉手定清、

豐原行元、



玉手近清、

紀 爲保、

下毛野武春、

已上例祿絹一疋、單重一領、

但武春加<sub>二</sub>給陪從官人祿絹一疋、

左將監狛則親、

例祿絹三疋、綾掛三領、白掛一領、摺袴一腰、

同將曹大石範直、

例祿絹二疋、綾掛一領、白掛一領、

摺袴一腰、依沙汰官人結之先例也

同豐原俊秋、

例祿絹二疋、綾掛一領、白掛一領、

同狛光重、

例祿絹二疋、白掛二領、

左府生大石久直、

同季景、

已上例祿絹一疋、單重一領、

御隨身四人、各例祿絹一疋、

童侍官人四人、同前、

立明官人廿人、各凡絹一疋、

院御厩舍人二人、

各六丈國絹十疋、綾掛一領、

同居飼二人、各自布三段、

同飼口二人、各自布二段、

舞人十二人、

番長一人、白布四段、近衛十一人、白布二段、

此中厚直、番長、武定、兼茂等、

各摺袴一腰、

陪從八人、

番長五人、各三段、安主二人、各二段、

近衛一人、一段、

加陪從八人、各二段、

并

六丈國絹三百九十九疋、

綾掛廿四領、白掛十七領、

單重八領、濃袴二腰、

凡絹廿疋、白布七十二段、

摺袴卅腰、

諸國勤、白<sub>二</sub>院<sub>一</sub>被<sub>二</sub>依波<sub>一</sub>也、

綾掛六領、白掛十六領、

單重三領、

濃袴二腰、

布六十五段、

凡絹廿疋、

本家儲、美作國動此中也、

絹三百九十九疋、

綾掛十八領、

白掛一領、

單重五領、

布七段、

院奉行人未練之間、皆催<sub>二</sub>凡絹、重仍<sub>二</sub>祿絹、本家所<sub>二</sub>用意<sub>一</sub>也、凡御產之間、諸國指令、如<sub>レ</sub>員不<sub>レ</sub>勤歟、凡近代之習、諸國之體、公事猶以如<sub>レ</sub>例、何況他事哉、

送<sub>二</sub>摺袴一人々、

白川殿、地摺袴、浪色打重袴、蘇芳打袴、

公卿、

大納言、定友、平絹、邦綱、地摺袴、

中納言、資賢、布、兼雅、平絹歟、資長、布、忠親、布、

雅賴、平絹、

參議、朝方、布、教盛、平絹、地摺、定通、布、實守、唐綾美麗、

賴定、布、

散三位、兼房、平絹、隆忠、布、知盛、布、

殿上人、

定能朝臣、布、通親、布、泰通、布、經家朝臣、布、

季能、布、雅賢、布、公守朝臣、布、顯家、布、

伊輔、布、資時、布、兼宗、布、兼忠、布、

盛定、布、師家、布、美麗也、關白息中將也、

三日、壬戌、陰晴不定、未刻微雨下、三箇日天晴、今日陰

雨、神德也、新晴以可<sub>レ</sub>知、及<sub>二</sub>晚景參院、付權辨親宗、

春日使之間條々事、偏爲<sub>二</sub>院御沙汰、果<sub>二</sub>遂神事、畏申

之由奏聞之、儲事、武士事、諸國所課事、役諸大夫事

等也、即歸來之人告<sub>二</sub>召之由、參<sub>二</sub>御前一拜<sub>二</sub>龍顏、預<sub>二</sub>

勅語、小時退出、參內、夜深歸<sub>レ</sub>家、今日送<sub>二</sub>使於兩亞

相<sub>二</sub>定房、示<sub>二</sub>出立日來臨之慶、定房卿加<sub>二</sub>示還立之日

來慶、又送<sub>二</sub>使於邦綱卿、今度出立之間事、多以勤仕、

加之、改<sub>二</sub>裝束、所經營過差、旁以感悅之由、示<sub>二</sub>送之、

隆季卿云、此度四條家云々、而使者及<sub>二</sub>深更、

向<sub>二</sub>東山、空以歸來、仍明日更遣<sub>レ</sub>之、不足<sub>レ</sub>言、又源藤兩納言之

許、同示<sub>二</sub>慶之由、源納言兩日行事、藤納言來<sub>二</sub>出立所<sub>一</sub>之事、

四日、癸亥、天晴、召<sub>二</sub>忠武、厚直、武定、兼茂等、加<sub>二</sub>勘

發、召<sub>二</sub>龍之、依<sub>二</sub>出立日遲參路間如<sub>レ</sub>泥、還立日遲參等

過<sub>二</sub>也、

八幡別當慶清淀儲太以過差、超過先例、仍不<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>感

許一

五日、<sup>甲</sup>〔天〕晴、申刻參女院御所、去二日夜如<sup>本奉</sup>居替一也、資秦朝臣去夜被除籍、又被召<sup>四可及</sup>御座

<sup>若狹國</sup>立石庄、是今度春日使共致對捍之故也、此事、日來有<sup>其</sup>沙汰、余中不可有沙汰之由、是則資秦爲祠候

關白之者、依有其恐也、然而昨日以女房被申

子細於關白、々々快被放申云々、仍所被行歟、<sup>其實、關白尚被結、其懷云々、太無用事也</sup>

六日、<sup>丑</sup>〔天〕晴、昨今物忌也、智詮阿闍梨來示今度

大事無爲介、遂之慶、凡今度仰實嚴<sup>慶染、信助不</sup>智詮、北斗供、等殊致祈請、今已無<sup>王供</sup>違亂、佛法

之効驗也、雖末代凝信力者、盡顯佛德哉、件三僧有智德行、不耻上古人也、

七日、<sup>丙寅</sup>〔天〕晴、申刻參內、依御物忌堅、不參御前、

於三問方謁女房、又頭權大夫光能朝臣出來、招寄

問大衆事、申云、少々有歸住之輩云々、御產事無

他事之間、未及誠惡徒之沙汰、且可歸住之由

被仰下云々、又座主宮被申云、日吉社破壞、加之拜

殿血多付了、早被遣宮使、且加實檢、且可被修

造云々、因之今明之間、可遣官吏、又可拜謝

之幣云々、乘燭之後、詣博陸之第一、一切無人、僅尋出入見參、被示云、

依寸白更發、不能謁、尤有恐云々、即以退出、依

資秦事、有不快之氣色、歟、爲之如何、歸路之次參

八條院、謁女房、亥刻歸宅、

八日、<sup>丁卯</sup>雨下、自今朝女院御方有犬死穢、仍閉中

門不混合、依爲御產之折節也、召廳頭清景、勘

發今度使之間如泥事等、關白今朝被向字縣云

云、法皇自今朝於今熊野被行八講、恒例事云

云、後聞、件穢自去夜事云々、

九日、<sup>戊辰</sup>天晴、賴業來、先日所仰付之雜例、且節會事

許注出所將來也、抄出之體尤優也、仍仰其由、未

終篇、返給、可清書進之由所申也、仰明日可給

由了、俊光朝臣來、

十日、<sup>己巳</sup>天晴、本命日泰山府君祭、恒例事也、

十一日、<sup>庚午</sup>天晴、爲方違參宿女院御所、中將自昨

日聊有不豫事、大畧風病歟、無溫氣、又不及殊大

事、然而卜筮之處、申非重之由、穢限令許也、仍所

參也、

十二日、<sup>辛未</sup>天晴、辰刻、頭中將告送云、中宮有御產氣



者、已刻參<sub>三</sub>彼宮、六波羅、直衣淺黃、指、實、綱代車、前近衣冠、先是關白、左大臣、輕殿座、已上在、左大將已下廿餘人<sub>已上在</sub>、參候、藤中納言、源中納言、左大辨、新宰相中將等、中門廊外緣懸尻列居、余昇自<sub>二</sub>件所<sub>一</sub>、人々降立入自<sub>二</sub>妻戶<sub>一</sub>、加<sub>三</sub>著寢殿西庇座<sub>一</sub>、同南庇諸壇、阿闍梨率<sub>三</sub>番僧<sub>一</sub>、仕加持、御險者等各揚<sub>レ</sub>聲奉<sub>レ</sub>祈、同西庇北障子北、孔雀經番僧等參候、各以讀經、於<sub>二</sub>寢殿南階隱西邊砌下<sub>一</sub>、宮主奉<sub>三</sub>仕御祓<sub>一</sub>、階以東簀子、陰陽師祇候、同奉<sub>三</sub>仕御祓<sub>一</sub>、陰陽師員數交名不<sub>二</sub>見及<sub>一</sub>可尋之、持<sub>三</sub>誦經卷數<sub>一</sub>、侍及下部等、南庭走遶、及<sub>三</sub>午終<sub>一</sub>、僧徒揚<sub>レ</sub>聲如<sub>レ</sub>雷、宮中周章、此間光能朝臣申<sub>三</sub>關白<sub>一</sub>云、五節帳臺御出、依<sub>三</sub>御物忌<sub>一</sub>不可作、然者神事奉行之人外籠候、御產何事之有哉之由、御氣色候<sub>法皇自今朝<sub>一</sub>者、關白許<sub>レ</sub>之、光能向<sub>二</sub>中門廊<sub>一</sub>、觸<sub>三</sub>此由於諸卿<sub>一</sub>、頃之、宮中頗落居、先是依<sub>三</sub>御產御祈<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>行<sub>三</sub>免物<sub>一</sub>、光能朝臣以<sub>三</sub>囚徒目錄<sub>一</sub>、覽<sub>三</sub>關白<sub>一</sub>、々々合<sub>三</sub>爪點<sub>一</sub>、下給、十五人、光能仰<sub>二</sub>別當<sub>一</sub>、々々申云、此中四五人許有<sub>三</sub>重犯之輩<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>隨<sub>三</sub>重仰者<sub>一</sub>、關白云、於<sub>三</sub>重犯之者<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>免、且可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>相計<sub>一</sub>者、光能朝臣又申云、須<sub>三</sub>奏聞之後下知<sub>一</sub>也、而事已火急、法皇御宮中、且加<sub>三</sub>下知<sub>一</sub>如何者、別當所<sub>レ</sub>申也云々、關白云、尤可<sub>レ</sub>然、且早可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>仰下<sub>一</sub>也、其後可<sub>二</sub>奏</sub>

聞<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、即光能朝臣仰<sub>二</sub>別當<sub>一</sub>了、及<sub>三</sub>未終<sub>一</sub>、又宮中騷動、過<sub>三</sub>於先度<sub>一</sub>、僧徒加持之聲殆滿<sub>三</sub>虛空<sub>一</sub>、良久之後、中宮大夫時忠出來告<sub>三</sub>人々<sub>一</sub>云、御產成了、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>降立<sub>一</sub>者、實光能來仰之趣如何、先<sub>二</sub>是太政大臣等加此座<sub>一</sub>、關白以下降<sub>三</sub>立中門內<sub>一</sub>、關白者中門東緣、余太政大臣等立同<sub>二</sub>南窗脫上<sub>一</sub>、他人立<sub>三</sub>中門外<sub>一</sub>、此間、大夫參上申<sub>三</sub>關白<sub>一</sub>云、法皇仰云、已皇子降誕、早可<sub>レ</sub>告<sub>三</sub>申此旨<sub>一</sub>者、人々氣色太以歡娛、尤可<sub>レ</sub>然也、誠是天之所<sub>レ</sub>授、社稷之靈也、即關白退出、相次余退出、參內謁<sub>三</sub>龍顏<sub>一</sub>、關白於<sub>三</sub>御前<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>取<sub>三</sub>出御劔<sub>一</sub>、關白欲<sub>二</sub>早出<sub>一</sub>、而定能朝臣以<sub>三</sub>兼光<sub>一</sub>、兼光<sub>二</sub>一腰<sub>一</sub>、一者鳥羽院御及<sub>二</sub>二者當今御體<sub>一</sub>、今度可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>藏之御劔、入<sub>二</sub>白織度<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>件劔<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>藏也、今<sub>二</sub>表小龜甲淨文織物<sub>一</sub>、裏單文綾、臺<sub>二</sub>物袋<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>銀泥<sub>一</sub>、表伏平紐、又有<sub>二</sub>丸紐<sub>一</sub>、件御劔時<sub>二</sub>虎龍等<sub>一</sub>、又以<sub>三</sub>金彫<sub>一</sub>入<sub>二</sub>日形<sub>一</sub>、乘<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、上<sub>二</sub>、<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>銀、<sub>一</sub>、唐鐙、是皮緒等青革也、自<sub>二</sub>本宮<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>權亮<sub>一</sub>、承曆以<sub>二</sub>後例也<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>奏<sub>三</sub>事由<sub>一</sub>之時、以<sub>三</sub>件使<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>獻<sub>三</sub>御劔<sub>一</sub>、是先例也、即關白退出、小時退出了、殿上人不可<sub>レ</sub>穢之由、被<sub>三</sub>仰下<sub>一</sub>、五節參入夜依<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>七ヶ日內<sub>一</sub>也、於<sub>三</sub>公卿<sub>一</sub>者大略著座了云々、余退出之後事歟、今日於<sub>三</sub>內裏<sub>一</sub>兼光云、浴殿光範朝臣親經等之由所<sub>レ</sub>承也云々、於<sub>三</sub>親經<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>然、彼家爲<sub>二</sub>吉、<sub>一</sub>、例<sub>二</sub>之故也<sub>一</sub>、光範太無<sub>レ</sub>由、彼家未<sub>レ</sub>勤<sub>三</sub>此役<sub>一</sub>、加之、件光範去春遭<sub>三</sub>妻喪<sub>一</sub>、產後入役已一期內也、非<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>事憚<sub>一</sub>、今度於<sub>三</sub>四

位者成光、光經之間可被點也、依人被用先例、是末代至退之政、何爲之、

十三日、壬午天晴、申刻奉幣吉田一如例、陪從光經朝臣、奉行信光、陰陽師憲成也、昨日雖參御產所、即降

去、未穢之故也、人傳云、孔雀經法賞、法印覺成任

大僧都云々、御室被中任、覺成、修驗、摩訶、人也、七佛樂師法座主、賞、圓良

法眼補法印了、件人弟子法眼云、動仕護摩壇也、御驗者實詮僧都轉大

僧都、

十四日、癸酉陰晴不定、早旦、定能朝臣告送云、依御物忌、

不可有帳臺御出、歟云々、又示云、一昨日酉刻中宮

權亮右近少將維盛朝臣、內大臣、嫡子、參左衛門陣外、付定

能朝臣奏皇子降誕之狀、即以同朝臣傳賜御劔、

於維盛朝臣被仰可進彼宮之由云々、納百穢、給銀、佐女、柄云々、又示云、依爲五節間、指所役之外、殿上人不可穢之由被仰下了、又貫首一人不可穢云々、

此日中宮御產三夜也、本宮被儲也、戌刻著束帶先

參院、限廿日可被忌、云々、仍先所參也、以藏人一申入、即以少將資

時被仰云、可見參之處、此間煩咳病之間、念誦

怠轉、不能誦、尤遺恨、後日如可參者、資時私示云、

明日法皇可幸中宮御所云々者、大略三十日可被

忌之儀、有變改歟、素不被甘心事也、次參中宮

御產所、六波、著公卿座、先是關白在端座、其左大臣與在

座、已下以下公卿廿人在座、即內大臣自東方出來、

依左府指示著余次端座、須著與座也、左府、教訓未得其意、次公卿少

々參加、小時太政大臣參入著與座左大臣上、大臣四人

著樣、頗無其謂歟、端座、太相國、余、與座、左大臣、內

大臣、此定可著也、而內府著端之間、依無其處、太

相國著與也、次居關白及大臣四人饌、各折敷高坏四

本、加飯、關白手長季長朝臣、與兩大臣手長隆信朝臣、

端兩大臣手長基輔朝臣、已上役送五位諸大夫也、納言

已下覆素居之、飯間、次采女六人著白裝束、其裝如常、女、房白衣、白單、

同唐衣、經、上達、座南廣庇、參候寢殿南面簀子、次

供御前物、五位大夫七人於中門廊南妻、內方、取之、

經同路、采女參、傳采女供之云々、上騰取折敷參進也、

位七人云々、然而今度如非、次五位大夫四人昇兒御衣

院殿上人、地下、相相交也、

案二脚、有白、立中門廊南第二間、南北、次殿上人四人

座末數、殿上人座、昇三件案、先右中將通親朝臣、右少將維盛朝

座、起、件座也、昇三件案、臣等昇之、上騰在、前如何、次右中

將賴實朝臣、左少將清經朝臣等昇、立寢殿南簀子階東間、各

以退下、先、是御膳役諸大夫退歸了、采女暫、次公卿座一獻、前和

然事也、殿上人取<sub>三</sub>瓶子之時、持<sub>三</sub>參盃之、擬<sub>三</sub>太政大臣、太相  
地下四位不取<sub>三</sub>酌、諸大夫取<sub>三</sub>瓶子者、可<sub>三</sub>然、擬<sub>三</sub>左大臣、左府擬<sub>三</sub>余、余擬<sub>三</sub>內大臣、已下次第巡  
流、<sub>諸大夫取<sub>三</sub>參盃、</sub>次居<sub>三</sub>汁、關白手長季長朝臣、<sub>役送諸相國</sub>  
〔太政大臣〕其左大臣手長前馬權頭隆信朝臣、<sub>院殿上人、院殿上人、役</sub>  
送同、余并內府手長右馬權頭基輔朝臣、<sub>役送同前、須<sub>三</sub>人別</sub>  
有<sub>三</sub>手長<sub>一</sub>也、而今二人不足、仍兼行歟、納言上臈一  
兩居訖、略<sub>三</sub>末以了、次最末參議賴定卿申上、關白以  
下下<sub>三</sub>箸、更食<sub>三</sub>之如<sub>三</sub>例、抑<sub>三</sub>二獻後可<sub>三</sub>居<sub>三</sub>汁也、而  
大進基親誤一獻居<sub>三</sub>汁、希代失也、大夫權大夫等於  
座雖<sub>三</sub>仰<sub>三</sub>此由<sub>一</sub>之、居<sub>三</sub>關白汁<sub>一</sub>了後也、仍隨<sub>三</sub>宜令  
居<sub>三</sub>了、次二獻、藏人頭皇太后宮權大夫光能朝臣勸  
盃、<sub>瓶子藏人</sub>光能不<sub>三</sub>取<sub>三</sub>續酌、希異事也、次三獻、左京  
大夫脩範<sub>散<sub>三</sub>勸盃、</sub>右衛門佐經仲、次又居<sub>三</sub>汁、手長役送如  
初、下<sub>三</sub>箸又同前、次關白被<sub>三</sub>示<sub>三</sub>可有<sub>三</sub>朗詠<sub>三</sub>之由、太  
相國云、先例不同、此獻可<sub>三</sub>候歟、大略被<sub>三</sub>問<sub>三</sub>大夫  
歟、左大臣云、承曆五獻之後有<sub>三</sub>朗詠<sub>一</sub>也云々、然而大  
夫三獻可<sub>三</sub>有<sub>三</sub>之由令<sub>三</sub>申、仍太相國出<sub>三</sub>之、<sub>先令月二反、無<sub>三</sub>助音人、次德是、</sub>  
資賢、家通等助音、次陸周、昭王、穆王、同人々助音、朗詠了、太相  
云、康哉帝道誰不<sub>三</sub>歡娛<sub>三</sub>云々、抑宗家病在<sub>三</sub>座何不<sub>三</sub>助音<sub>三</sub>說、不<sub>三</sub>審、次  
四獻、參議朝方卿勸盃、<sub>取<sub>三</sub>續酌、二獻、脩範同取<sub>三</sub>續酌、</sub>次居<sub>三</sub>  
菓子、<sub>手長役</sub>次五獻、大夫時忠卿、<sub>不<sub>三</sub>取<sub>三</sub>續酌、</sub>次居<sub>三</sub>湯

漬、已上菓子湯漬、大臣之外、納言次置<sub>三</sub>基手紙<sub>一</sub>、<sub>各後下方</sub>  
同前、但四位自<sub>三</sub>次撤<sub>三</sub>座上<sub>一</sub>、<sub>關白及大臣也、手長役送同前、抑</sub>  
持<sub>三</sub>參之<sub>一</sub>、<sub>左大臣前發散々被<sub>三</sub>打散<sub>三</sub>、仍如<sub>三</sub>形</sub>  
撤<sub>三</sub>之也、<sub>座狹之間、大臣之袖悉被<sub>三</sub>打倒<sub>三</sub>也、仍兩度共不<sub>三</sub>被<sub>三</sub>下<sub>三</sub>箸也、</sub>次五位大夫一人持<sub>三</sub>參切  
燈臺、<sub>白、撤<sub>三</sub>本燈臺、</sub>數又用<sub>三</sub>本打數<sub>三</sub>、其色綠色也、打<sub>三</sub>立<sub>三</sub>替  
之、以<sub>三</sub>件灯<sub>一</sub>居<sub>三</sub>切灯臺<sub>一</sub>了、次同大夫一人持<sub>三</sub>參圓座<sub>一</sub>、  
置<sub>三</sub>關白座前、次大進平基親持<sub>三</sub>參簡篋<sub>一</sub>、經<sub>三</sub>關白  
座上間并燈臺北<sub>一</sub>置<sub>三</sub>圓座上<sub>一</sub>、<sub>立<sub>三</sub>之、</sub>次六位進了<sub>三</sub>指<sub>三</sub>笏  
持<sub>三</sub>紙置<sub>三</sub>圓座<sub>一</sub>、<sub>其路同<sub>三</sub>次基親置<sub>三</sub>之、</sub>次權亮維盛朝臣  
置<sub>三</sub>之、次公卿自<sub>三</sub>下臈<sub>一</sub>置<sub>三</sub>之、<sub>爲<sub>三</sub>始<sub>三</sub>脩範<sub>一</sub>其路皆同前、與  
上座上也、經<sub>三</sub>廣鹿<sub>一</sub>、大<sub>三</sub>納言上臈<sub>一</sub>將<sub>三</sub>置<sub>三</sub>座之後<sub>一</sub>、  
內大臣指<sub>三</sub>笏取<sub>三</sub>紙經<sub>三</sub>座中<sub>一</sub>置<sub>三</sub>之、乍<sub>三</sub>插<sub>三</sub>笏復<sub>三</sub>座<sub>一</sub>、  
次余指<sub>三</sub>笏取<sub>三</sub>紙、<sub>件紙上置<sub>三</sub>薄樣<sub>一</sub>帖<sub>三</sub>除<sub>三</sub>膝行進<sub>三</sub>寄圓座下<sub>一</sub>、  
置<sub>三</sub>之、不<sub>三</sub>拔<sub>三</sub>笏逆退復<sub>三</sub>座<sub>一</sub>、<sub>余除<sub>三</sub>關白<sub>一</sub>之外有<sub>三</sub>端座第二<sub>一</sub>、  
次左大臣指<sub>三</sub>笏其<sub>三</sub>實<sub>一</sub>、起<sub>三</sub>經<sub>三</sub>座中<sub>一</sub>置<sub>三</sub>之、次太政大臣<sub>三</sub>笏國  
居<sub>三</sub>寄<sub>三</sub>不及<sub>三</sub>膝行<sub>一</sub>、大略我座<sub>三</sub>置<sub>三</sub>之、次關白<sub>三</sub>笏取<sub>三</sub>紙置<sub>三</sub>  
之、次自<sub>三</sub>下臈<sub>一</sub>參上擲<sub>三</sub>篋<sub>一</sub>、<sub>進<sub>三</sub>紙之人<sub>一</sub>、宗家家通兩卿初  
置<sub>三</sub>紙之後、拔<sub>三</sub>笏復<sub>三</sub>座<sub>一</sub>、令<sub>三</sub>擲<sub>三</sub>篋<sub>一</sub>之時、更<sub>三</sub>插<sub>三</sub>笏打<sub>三</sub>了、  
拔<sub>三</sub>之復<sub>三</sub>座<sub>一</sub>、是大宮右府餘流說也、他人皆乍<sub>三</sub>插<sub>三</sub>笏復  
座、擲<sub>三</sub>篋<sub>一</sub>之後一度拔<sub>三</sub>之也、內府已上作法如初、此  
中失禮公卿二人、<sub>以<sub>三</sub>朝方卿置<sub>三</sub>紙之後<sub>一</sub>欲<sub>三</sub>拔<sub>三</sub>笏<sub>一</sub>、思出不<sub>三</sub>拔<sub>三</sub>之復  
座、太見苦、實網細擲<sub>三</sub>篋<sub>一</sub>之後不<sub>三</sub>拔<sub>三</sub>笏<sub>一</sub>、欲</sub></sub></sub></sub></sub>



起、依左府及實房等指示、次關白退出、次左大臣退出、次更既拔之復座、又以失也、余退出、于時子刻許歟、

今日參入公卿、

關白、大臣、余、太政大臣、左大臣、內大臣、實定、定房、實房、邦綱、

大納言、實國、實賢、(擲以前早出、)時忠、忠親、

中納言、宗家、實綱、(擲以前早出、)時忠、忠親、

參議、朝方、家通、實守、賴定、長方、早出、

散三位、倫範、

已上廿二人、

裝束儀、

寢殿西北廊東第二間以西六ヶ間、敷滿長筵、無差筵、

副北障子、不懸簾、件障子、立亘白綾四尺屏風、緣地白、

例西、底懸簾卷之、二行敷高麗端坐九枚、東第一間端、

無對座、第三間、為上達部座、東第六間、件間西立障、敷紫

端坐二枚、對座、公卿座、為殿上人座、件廊東第一間西

面、向三上達部、懸簾、非掩簾例、放扉、女房出袖、南面并

寢殿南西兩面同出袖、已上文龜甲、白綾、三間、副西壁、敷紫端坐二枚、為諸大夫座、寢殿南

西簀子、上達座南廣庇、中門廊等不敷筵、上達部座

上、殿上人座下舉灯、各一、中門廊同舉之、已上燈、

臺打敷如例、寢殿南面簀子階間東西、立白燈臺、舉

燈、打敷同、件燈臺依簀子狹、刻階第二三程立也、上

達部座大納言已下豫居、各打敷高杯三本、殿上人座

立黑柿机、居簀、諸大夫座前同立机、居簀、車宿前

不引帳、主殿寮啓所官人等、奉仕立明、

十五日、戊、天晴、未刻、長光入道來、申刻、中宮六位

進持來去夜攤紙、戌刻、中宮大進基親送書札於基輔

之許、曰、五夜七夜可令候御遊座、給之由、院御氣

色所候也、以此旨可令申給云々、報曰、近年殊廢

亡、但事闕如者非此限者、今夜明月無雙、今日未刻

法皇幸中宮御所、公卿直衣、殿上人衣冠、康和例云

云、件例不快、

十六日、乙、天晴、此日中宮御產五夜也、戌刻著束

帶參彼宮、著上達部座、先是太政大臣、第一、左大臣

端座第一、但除、已下公卿十餘人著座、余著端座左府下、

同時、內大臣著與座太相國下、須余著與內府著端也、

已寄與座、仍著端座也、良久、亥、關白參上著端一座、次

勸大臣五人、白定、饌、各四本、次采女六人參進寢殿

南面、經上達部、次五位大夫等、第一、持御膳參進、傳

采女供之、次諸大夫等昇御衣案、入自中門廊西

戶立同廊、次公卿四人昇之、立寢殿南簀子、先實家、實守昇之、爲先上膳、次家通、知盛昇之、爲先上膳、第一第三昇一案、第二第四昇二案也、退下之時又上膳先退下也、次同大夫等取威儀御膳、同供之、件御膳、期昇立中門內方、仰件御膳自寢殿西面簀子、供之由、基親行之、而大夫權大夫等命之、令供自南面、是非、次上達部屋一獻、參之、宮內少輔權取瓶于殿上人如何、隆信不取、巡流如三夜、次二獻、權大夫光能朝臣(旁酌、可然々々、大納言兩三居了之後、略已下了、次賴定、末座、瓶取、次居、手長同前、是冷汁也、大臣之外、次賴定、末座、申上之、關白以下々々著之後、更如形食之、次三獻、位中將知盛、瓶子棟範、依五位侍、居熱汁、手長居次第、八無入數、兩度勸之云々、居三熱汁、一皆如三夜、次申上下、著同前、次四獻、見及、瓶權少輔季信、次居菓子、役送同前、次五獻、權大夫忠親卿、瓶子、次居湯漬、手長役送、次置紙、手長如三夜、關白季長、奧大臣隆、次撤關白已下五人饗、手長同、次置圓座、關白座前五、次立切灯臺、白木用、次大進基親持參筒簀、次自下膳、進紙、先六位進、次基親、次盛也、其儀如三夜、但余在端第三、仍指笏取紙、起經座中、跪圓座西邊、置紙、起右廻方也、復座也、不揖左相太相等乍居置之、關白又同、已上不、次置紙之人各進打攤、定房、朝方、初置紙之時、仍懷中打之、家通作法歟、但依、如常、又中納言經、奧座之後、向中納言已下可經末便歟、每度太相入簀、太相欲打之時、關白入之、關

白打之後、太相又入簀了、皆如三夜、今夜於此座、無朗詠、次諸大夫等取菅圓座、敷寢殿南西面簀子、次關白已下移著、懸榻於、次召人著、欄下座、北面六人著之、豫、次上達部屋居肴物、二本、一本八四位取之持參、今一本五位取之相從也、次居召人肴物、次頭權大夫光能朝臣勘盃、大臣肴物著、其路、仍余毛投、瓶子藏人大進基親、次殿上召人六人參進公卿末、上達部屋、廊、次置管絃具、先持參箱蓋、依三人々命持歸座末了、上薦無所作之故也、次持參箱蓋、欲置余前、余讓太相相讓余、順經程之間、役人中云、可置、關白御前之由、奉行人所申也云々、即置余前、去了、余尙指道太相、堅以辭謝、事已延期、仍余慈置前也、次舉、次和琴等也、次系竹合音、呂、安名尊、鳥破、席田、律、伊勢海、萬歲樂、五聖樂急等也、所作人、拍子資賢卿、琵琶余、如形彈、箏侍從資盛、和琴少將雅賢、笛少將賢時、笙少將隆房、篳篥中務權少輔季信、付歌少將維盛等也、實國不吹笛、家通不吹笙、太相不彈箏如何、後聞、資盛必可彈箏、資時必可吹笛之由、有豫議云々、近代事皆如此、余獨彈琵琶、尤輕々也、五聖樂終、頭給公卿祿、頭光能持參關白祿、即持歸了、次少將顯家取太相祿、頭中將賴實取左大臣祿、即持歸了、次少將隆房取餘祿、五位殿上人給納言已下祿、次自下膳、起座退下、餘祿宗雅來受取了、關白最前欲退出、而暫

可被候之由、邦綱卿令申、仍歸入、仍退出了、祿法、

關白女裝束一襲、織物掛一重、大臣四人、女裝束一襲、織物掛一重、大納言織物掛、中納言、人頭尋問、可也、散三位、

殿上人、四位、五位、召人、

今日參入公卿、

關白、大臣太政大臣、左大臣、內大臣、

大納言、定房、實房、邦綱、實國、

中納言、資賢、時忠、資長、(早出、)忠親、成範、(早出、)

參議、朝方、實家、家通、實守、賴定、長方、

散三位、知盛、

已上廿三人、

今夜裝束儀、及打出等、同三夜、今夜事內大臣所役云々、今曉入道相國下、向福原云々、

十七日、丙天晴、申刻、中宮六位進、持來去夜攤紙、

此日大原野祭也、然而依御產穢、不奉幣、又不修、申祓、陰陽師同令穢之故也、

十八日、丁天晴、此日中宮御產七夜也、公家有御養

產、蓋先規也、戌刻著束帶、參中宮、先是左內兩府

在、外座、關白太相等未參、左大將、仍余經、上達部座末殿上

人座上、著奧座、關白已下座居机、饗飯同居、之、關白前二

良久、亥一、太政大臣參著奧座、經殿上人、相次關白參

入著端座、次勅使藏人勘解由次官基親、本官大進奉行人

與、兼光神事奉行、仍基親勅使、欽、尙無、進立中門廊、

事理、內裏不機、而以藏人用勅使、無、謂、進立中門廊、

亮重衡朝臣、承曆、雖被尋、權亮不任、降、自中門外、

相逢、昇、自中門內、進大夫時忠卿座下、奧座、示氣

色、此間時忠自懷中取次第、披見、次經、上達部座前廣鹿、

參進寢殿南簀子、啓事由、之後、暫歸、出中門廊外

方、即五位大夫敷茵、無地、於公卿座末、端座、家通卿在、又

昇立肴物机於其座前、加承曆記、者、勅使、次重衡朝臣降

自中門內方、召勅使、即歸昇出、自中門廊南戶、

畢、次勅使藏人勘解由次官基親昇、自中門外、入、自

同廊西面戶、經諸大夫座前、著上達部座末、次一獻、

藏人頭右近中將光能朝臣勸盃、著、青、色、二獻、三位

中將知盛、版子、三獻、大夫時忠卿、版子侍從成、次權大夫

忠親卿取、女裝束一襲、賜勅使、勸盃及取、祿人、於中門廊、次勅

使起座、祿、經中門廊東緣、下、自同南妻、進出砌

外、丈、向御所方、具、再拜、出、自中門、歸昇行、次撤茵

肴物等、家通卿復座、次內膳官人捧御膳、參進、正取、

打數、官人已下、御膳、又捧、於西中門、稱警蹕、經前庭、



於南階、傳采女供之、先是采女六人參、候南簀子、如先夜、供了、官人采女等歸出了、次八條院御使可參而未參、仍先公卿座一獻、前馬權頭隆信朝臣持參盃、瓶于少納言惟基、殿上人、次八條院被進兒御衣、其儀、彼院別當讚岐守季能朝臣參進中門、次權亮維盛朝臣起殿上人座、降向自中門外方、歸昇參進寢殿南簀子、啓事由退下、暫出中門廊外方、次五位大夫一人取菅圓座一枚、敷上達部座南廣庇東第一間、除違合、間也、南邊、次維盛朝臣降自中門內方召之、即出中門了、實亮作法、次季能朝臣昇自中門外方、入西面妻戶、著廣庇圓座、北面、次賜祿、白大褂、次季能朝臣降庭中再拜、出自中門、作法同勅使、次昇立兒御衣案一脚於諸大夫座前、諸大夫役之、置、次右中將通親、賴實等朝臣昇之、上、前、立寢殿南簀子階東間、即退下、下、先、還著殿上人座、次公卿二獻、頭權大夫光能朝臣、瓶于藏、人仲國、次居汁、手長役迄、如夜々、次賴定卿申上、次著下、次三獻、右兵衛督賴盛卿、瓶于安房守定、長、殿上人、次居汁、申上著下同前、次諸大夫座上敷紫端燈一枚、立肴物机三脚、已上次五、位役之、次讀書儒三人、文章博士光範朝臣、大外記清原真人賴業、前明經博士、宮内少輔親仲、入自中門廊西面妻戶著座、北上面、賴業著退參、勳孟、以後參著、次亮重衡朝臣勸盃、瓶于取可、尋之、次四位大夫二人取

祿給之、四位、出一重、袴、五位掛一重、季次三儒降自中門內方、爲先、上、出砌外列立、北面、東上、再拜訖出自中門、次居菓子、次湯漬、次置紙、已上手長、次撤關白及大臣等僕机、手長同、次立切灯臺、件灯臺如例、三五夜用白灯、次置圓座、次置紙、先藏人仲國、次五位藏人基親、次藏人頭光能朝臣、次公卿自下、人自下薦擲簀、如夜々儀、次敷圓座於寢殿簀子、次關白已下移著、次召人著砌下座、次居公卿肴物、手長、次居召人衝重、次權大夫忠親卿勸盃於公卿、瓶于左衛門權佐、次持參御遊具、等置太相國前、琵琶置、次御遊、呂、安名尊、武德、伊勢海、甘列、所作人、拍子資賢卿、雅賢出歌、資賢取、琵琶余、笋太相國、笛少將維盛朝臣、拍子、又時々歌之、琵琶余、笋太相國、笛少將維盛朝臣、笙家通卿、中務權少輔季信、頭中將定能朝臣、五節參入已後、雖參入退參、和琴少將雅賢朝臣、御遊終、頭給公卿達余退出路也、關白以下大納言已上一重、中納言已下一領、大臣已祿、各大褂也、關白以下大納言已上一重、中納言已下一領、大臣已朝臣取之、置大臣褂了之後、內藏頭經房朝臣持參織物褂、關白祿也、須一度給、即持歸給隨身、次公卿自下薦一起座、余祿、季信、余即逐電退出了、

今日參入公卿、

關白、

大臣、太相國、左相府、余、內大臣、



大納言、實定、定房、實房、邦綱、實國、

中納言、實賢、時忠、忠親、成範、賴盛、

參議、實家、家通、實守、賴定、

散三位、知盛、

已上廿一人、

今日五節參入也、公卿、隆季、(大納言、)受領、上野、左少辨兼賀、權辨親宗、(參議、)實守、(參議、)行光知國也、依御佛忌、無帳臺出御、可備設之、侍臣

等之外、不觸御產之穢也、

十九日、戌、天晴、申刻參女院御方、又參御堂、見

作事懈怠、危惡事等、加催促、入夜歸來、此日殿上淵

醉、殿上人等推參中宮云々、

廿日、己、天晴、此日、童女御覽、井中宮御產九夜也、

御覽可被忿之由、定能朝臣告送、仍未一點著直衣、

出、紅梅堅文織物厚衣、堅文織物薄色指貫、參內、先是藤大納言、花山院中納

言等參候、殿上人頭中將之外僅五六人、殿上淵醉未

始、關白未參、余參御所方、女房等著様々衣居、

對東面并臺盤所廊、皆推出其衣、非打出之儀、少時、關白

參入、申刻、殿上淵醉始、主上御引直衣、於上戶御覽、

立、參年中行事障子於上月也、關白及余祇候、御口口之女房少々同以

祇候、兩貫首定能在奥、光能在端、已下殿上人十人許、分居奥端

座、今日三膳家實險非遠使右衛門尉、左少辨兼光子也、有變應、多者今日二膳有、

爲其人召越、朗詠、今樣、又定能朝臣取肴物、在臺盤、給有、變應、歟、

之祖之時、定能懸手於紉、組誤、又左中將泰通朝臣來

在奥座經上薦、刷袖、惣有五獻、最末之度、定能讓下等後進寄也、

膳貫首光能、仍家實經臺盤上、勸光能也、次萬歲

樂、自下膳、次第亂舞如常、六位等小、板敷也、即殿上人等起

座、主上入御、御座對東面女房等之中、關白余同候、

次殿上人等租者、出、自渡殿、經東北對等緣、廻五節

所、先藏人二薦、基行進行、次六位等爲先、下薦、相從、次殿上人又爲先、下膳、兩貫首在最後、抑殿上人等或

袒右或袒左、人々所爲不同、通說袒右也、而御

所方當左之時、依爲瞻袒左、又一說也、共非失

事歟、定能、賴實、租右、通親、隆房、次余著殿上端座、經上月、

租左、自餘人並不贊禮、先是左大將實定、出、紅梅厚衣、藤大納言實國、出、衣店、

蘇芳、文青裏背色同厚衣也、淺黃織物指貫、花山院中納言兼雅、出、紅梅厚衣、指貫、

等在座、左大將問內辨作法等大略、明日有勤仕之

志歟、問余參否、答不定之由了、頃之、時忠卿出、

黃裏青厚衣、加著、其後猶經時刻、申終、光能朝臣於上

指貫不見及、指貫不見及、戶下告召之由、上薦頭定能可召也、而光能召如何、又入、次

余已下著御前座、厚圓座敷一枚、余著之、其次置

一枚、第三圓座左大將被著之、御殿南廣廣下西第

三間已西敷圓座一如常、抑關白息三品亞相可參候之由、有

關白被候、簾中、次童女參上、等也、親宗室不御覽、經西

長橋、渡邊殿放三板、自廣底一東行、列居御前、東上北面、

西邊四サ、下仕列居候庭中、先一度童下仕參訖、又他所參也、

也、參居也、皆悉居了、后置扇、童下仕、頃之、關白被仰云、早、

次童取扇起東行、左廻經本路退下、下仕同以退下、

次公卿自下臈一起座退下、即余退下、時忠卿意未退以前起座了

今日參入公卿、見端、

付童下仕等人、

隆季童、侍從隆保、任

實宗童、侍從公衡

兼光童、右衛門佐經仲

同下仕、藏人仲國、通榮

同下仕、藏人基行

同下仕、藏人右衛門尉家實一人

今日關白著綾淺黃指貫、不出衣、□□□□□□□□

口秉燭之後歸家、改裝束、帶、隨身前驅同改著裝

束、戌四點參中宮、先是關白已下公卿濟々著座、

殿上人、余經殿上人座末并座後著與座、禮須經殿上人

未著、余經殿上人座末并座後著與座、禮須經殿上人

而其間太狹無路、仍經此道也、左、次殿上人定能朝臣已下著

座、次居大臣候、折敷、高杯、手、次上西門院御使、右近中將

賴實朝臣參進立中門、次權亮維盛朝臣、七口內、宮司、除

玉葉卷二十七

治承二年十一月

夫座下、在、與、示、氣色、進、寢殿南面、啓、事由、歸出、降

自中門內方召之、出中門外了、先是、維盛啓

五位大夫敷圓座於上達部座南廣底、如七夜、八條、次

御使賴實朝臣昇自中門外方、著件圓座、北、次維盛

朝臣取祿白、給之、拔、笏退歸、次賴實朝臣降庭

中、左、手再拜出中門了、次采女六人參進寢殿南面、

次五位大夫捧御膳、第一取折、傳、采女、供、之、次采女

退下、御衣、次一獻、美作守基輔朝臣持參盃、居、折侍從

兼忠取瓶子、次二獻、藏人頭左近中將定能朝臣、依、不

取瓶子、次居汁、手、長同、次申上箸下、次三獻、從三位

太宰大貳親信卿勸盃、宮內少輔棟範取瓶子、親信取、次

居汁、手、長同、下箸又同、次關白被示可有朗詠之

由、太相國云、今夜無術可助音云々、仍按察使資

賢卿出、令月、自、第二反、人々、助音、實國卿、家通卿等也、太相

仍不、國始終不助音、已欲出音之間、實國取之助音、

出也、次德是、二、次隆周、昭王、穆王、三反、第三反、

獻、權中納言實綱卿、瓶子侍從實明、次五獻、大夫時忠

卿、瓶、大、次置紙、今夜不居菓子湯、次立切燈臺、次敷

圓座、次置筒篋、基、次自下臈進紙、先六位進、次基親、次

進、次進紙之人擲篋、與座時忠已上、皆如前夜々、次關

白退出、次左大臣退出、次余退出、今日參入公卿、

關白、

大臣、太政大臣、左大臣、余、實定、內大臣、實房、

大納言、實定、定房、實房、實國、邦綱、

中納言、資賢、(朗詠以後即退出)、兼雅、(神事奉行人也、仍今日初參、)時忠、忠親、賴盛、實綱、

參議、教盛、(今日初參、)家通、實守、賴定、

散三位、親信、

已上廿一人、

昨日可有法勝寺參賀、而延引、來廿二日可有之云云、

今日於內裏、左大將言談之次云、花苑左大臣次第、口打攤之時、膝行者非此限、若不膝行、攤筆者、拔笏揖云々者、此事久我太相國命之由、被記也云云、

今日上達部座立例四尺屏風、又打出蘇芳句也、

今日攤之間、親信卿擲簀之後、不拔笏、雖人警示、猶不得心、仍可拔笏之由關白被示、周章乍立拔之、人々解頤、自又以切腹歟、

廿一日、庚辰、(天)晴、申刻、六位進源兼資持來攤紙、

廿二日、辛巳、(天)晴、定能朝臣示送云、去夜節會無出御、內辨左大將、外辨上卿三條大納言實房卿云々、未刻參女院御所、又見廻御堂作事、

廿三日、壬申、(天)晴、傳聞、此日法勝寺僧徒參賀中宮御產云々、

廿四日、癸未、(天)晴、申刻參女院、又見御堂作事、又余方立贊殿屋一字、本贊殿無便宜之故也、女房及姬君、爲避犯出向、南及晚歸來、

廿五日、甲申、(天)晴、書始大勝金剛院額、實殿閣梨安祥寺堂額也、來月一日可遂供養云々、

廿六日、乙酉、(天)晴、入夜參宿女院御所、依三方違也、今夜雨下、

廿七日、丙戌、(天)晴風吹、參御堂見作事、申刻歸宅、

廿八日、丁亥、(天)晴、早旦頭中將定能來云、去夜亥終許、自院有急召、即以馳參、時忠卿候御前、仰云、立坊事、二歲三歲共只以其例不快、今年被遂行如何、

且被仰關白可有其沙汰之由、只今參內早可奏聞者、即參內奏聞之處、可仰關白云々、向彼亭仰此狀、被申云、如被仰下、二三歲共不吉、被待四歲、頗似延怠、歲內頗雖卒爾、何不遂行哉、

然者今年何事候哉者、歸參奏達了、後參院申此之由、仰云、早可有沙汰之由、重可奏內者、定能申云、奉行職事可被定仰歟云々、仰云、汝早可行行云、事已爲大事、重代之輩奉行宜歟之由、雖達天聽、已無勅許、只今參內可奏去夜院宣云々、即馳走內了、

入道相國一昨夕俄上洛、依此事云々、

廿九日、戊子天晴、酉刻參院、使信基朝臣申入、依護

摩之間、無御對面之由、有其仰、次參內謁女房、戊

刻退出、傳聞、親王宣旨來月二日可被行、而勅別

當未定、仍五日可被行云々、又立太子藏人方奉行、

被仰光雅了、彼家立坊事、能知子細之故云々、豫

來月十四日吉之由、令勘申云々、又人云、十二月其

例不快、寅仁太子延久四年十二月八日立、此外無例、仍可被待四歲歟之由、

有豫議云々、恩案四歲立坊不可、然、但吉事爲先

近日、就中末代之政每事急速也、至此事、強不可

待四歲歟、月之吉凶強之沙汰也、只歲內被行之

條、可叶亂世之政者歟、

卅日、己丑天晴、傳聞、博陸及前太相國參院、有立太

子內議、時忠卿、中宮、光雅、奉行、等參候、又大外記兩人

在憲朝臣等應召云々、前相國豫參、是何料哉、未得其意、此日進發宇佐使左衛門權佐親雅云々、內議可尋記也、

玉葉卷二十七終



玉葉

卷第二十八

治承二年十二月

〔治承二年冬下〕

〔戊戌〕

十二月〔大〕

一日庚〔天〕晴、依恒例春日奉幣、朝間神事、中將同自今月可奉三每月朔日幣也、勸仕使之時、聊有祈願事之故也、今日實嚴阿闍梨、安禪寺邊堂供養云々、  
導師東寺長、本尊名爲其號云々、額字、大勝金剛院、即以此堂、余下筆、依強申請也、邦綱〔卿〕行訪供養之場云々、家勾當源邦輔、所望申東宮藏人一也、仍付定能朝臣一奏院內、又以消息付時忠卿了、藏人雖有者、非職不足歟、  
二日辛天晴、巳刻、頭中將定能來、申刻參女院、入夜歸來、今日若宮被剃御髮、內大臣奉仕之云々、  
三日壬〔天〕陰、傳聞、以當時中宮御所六波、可爲立太子御所之由、豫議定之、而舍屋狹少不能立帳、仍猶於他所、可有其儀之由、云々出來、然而未有一一定云々、  
四日癸〔天〕晴、御堂御八講結願也、秉燭、着束帶先

參內、依御物忌不參御前、於二間謁女房、此間左大將參入云々、余於小板敷談話良久、關白被參御堂了之由告來、仍參御堂、朝座論議間也、次第如例、講師弘雅法眼、朝座問者東大寺惠珠、夕座問者同成實、事訖行香、即余退出、參入公卿、關白、余、中御門中納言、別當六角宰相、左大辨等也、行香今二人不足、頭權大夫光能朝臣、刑部卿賴輔朝臣等、○等下一本有立字加之、今日於御堂別當云、猶以六波羅、可爲立坊御所、御幸事只今不聞云々、又御行始廿八日云々、又立親王八日、侍始同日云々、今日於內裏、左大將語云、去豐明宴會、內辨〔以〕小忌、用宣命使事、○自以至事八字一本爲內辨所存云々之傳註所存無殊失、但以小忌參議實宗用宣命使、其故見參參議如小忌四人、家通、實守、須以實守、可爲御酒勅使、而忘却仰家通、仍以實守、可用宣命之處、先例家禮之人、不用宣命使故實也、而實守有父子之儀、仍不能賜宣命、



又家通不可兼行、賴定〔可〕向祿所、仍依有例示、  
合人々、以實守、爲宣命使也、人定加謗難歟、然  
而小忌勤宣命使、其例太多云々、

五日、甲午天晴、今夕始宿御堂御所、是造改之後所始

宿也、不具女房、乘細代車、烏帽直衣下、自門、每  
事不能威儀、贊殿勸膳西新造廊之外、大略出來了  
也、今日可有院御佛名之由有催、而延引了云々、

六日、乙未〔天〕晴、辰刻參女院、自御堂御所、通中門所參也、即歸家念

誦之後養食、未刻頭中將來、余可任傳之由世間〔謳〕  
歌、禪門相國示此由云々、或說、又左府可任云々、

余雖不能出所望事、依不審、内々頭中將可任形

勢之由、示付了、今日件事令相同之處、仰云、内大臣

可任之由定了、而自身不可任、左府可申任之由、

令申トカヤ、聞食之樣思食云々、大略不許歟、但内

府申任之條、他人不能左右、又非可懸望事歟、

長光入道來、入夜中御門中納言宗家來、余謁之、今

日上西門院御佛名有催、仍參入、而延引了、仍參中

宮、其次所來也云々、

七日、丙申〔天〕晴、申刻、藏人中宮大進基親來、余着烏帽

直衣、謁之、基親仰云、伊勢大神宮宮司公俊遭父喪、

而去年被下重任宣旨了、檢先例、或有拔任之例、

或有改任之例、今度何樣可被行哉、所被、則下宣勅申

之者注、余申云、大神宮司者、只撰器量可被補也、

公俊而在任之間、若有其功者、任復任之例、還補何

事之有哉、若又有不治之聞者、可被改任歟、事理

須重表之者、有神慮之恐歟、左右之間宜在聖

斷、重仰云、若可被改者、以何者可被任哉、功一

俊宗即公俊之弟也、爲同服之者、任天仁例、十三ヶ

月以後、可被任之由令申如何者、余申云、先例不

必依功之次第、勘功之多少、有登用事歟、然者

成功之輩之中、且尋功程、且撰器量可被計任也、

暗難定申者、此次基親語云、御產之後被行等、

去月廿日着御生衣、大夫時忠卿調進之、依康和例、

不被書銘云々、同廿三日法勝寺參賀、同〔日〕被

始佛神事御祈等、神事七瀬御被代、厄御祭、各七ヶ日、佛事不動法、房覺僧

被仰者宮御持僧了、仁王講、僧三口、於御所被行也、各七ヶ日云々、今月二日

被垂御髮、明日親王宣旨、可立親族拜之人有別

催、他人殊不可參歟云々、明後日九侍始、其後於院

御所、立太子定云々、十五日立坊、〔廿〕二日中宮入内、

〔廿〕八日東宮入内、正月六日御五十日云々、頃之基親

退出〔丁〕、

入夜主稅助時晴參來、申天變之間事等、

一去十一月十三日壬申昏戌時、月掩犯畢大星、賢賢

臣死、女后執政、宮室有火、大將死、天下有變

令、兵起、

一同十五日甲戌昏時、月與鎮星同度、相去二尺七寸所、兵

〔起〕、女主惡之、臣強君弱、天子惡之、天下有

畏、

一同十六日乙亥酉時、太白犯哭星、相去七寸所、天子有哭

泣事、

恭帝元熙元年七月己卯、太白犯哭星、同二年七月、

劉裕受宋王、是年六月、帝遜位於宋、

一同十八日丁丑夜子時、月掩犯軒轅右角星、大臣

貴女有憂、有逆臣、有火災、女主有憂、

有亂臣、不出二年、

一同廿一日庚辰曉寅時、月犯太微右執法星、相去七寸所、

宮中亂、君政不行、大臣慎之、天下大亂、

一同廿九日戊子曉寅時、熒惑入犯元星、五穀以水

傷敗、期九十日、天子有祠廟之事、亂臣在朝、

忠臣不可以進、天下不平、多疾疫、

一從去閏六月上旬、填星入東井中、留守、去十一月

中旬以後逆行、今月三日壬辰昏戌時、犯卿伴星、相

一寸、天子有喪、蠻夷來侵、天下大驚走、冬有

大喪、明年春有大切事、民多死、有賜官祿事、

已上七ヶ度、時晴申云、凡十二三許所候也、然而

略常途變等注出、重變等所經御覽也云々、

八日、〔天〕晴、此日若宮親王宣旨也、依例催人々

參入之由、昨日基親示之、仍相待催之處無音、先

例或有外記催、而今度都無催、加之不立親族拜

之人、強不可入、歟、仍不參入、且是康和、元永、上卿

之外、大臣不參之故也、申刻、法皇幸中宮、公卿直衣、殿上人衣冠

云々、日來於最勝光院、被修御念佛、今日結願、秉燭以後陣事

其後有御幸、口口抑此御幸何料哉、可尋之、秉燭以後陣事

訖、關白以下相引參本宮云々、晚頭邦綱卿來、示

世間事等、傳聞秉燭左大臣已下參陣頭、中將定能朝

臣、下御名字文、言仁云々、藤中納言資長卿、稱申之、左大

臣結申之、次被下藏人右少辨光雅、光雅結、次頭中

將仰勅別當、右大將、次左府已下八人親族拜、殿下被立云

次相引參中宮之後、數刻四位別當未參之故云々、

家司、重衡朝臣、經房朝臣、資盛朝臣、

職事、清經朝臣、光雅、光長、

今日資長卿注送御名字勘草、書三體紙一枚、無三體紙裏帶、其奏覽本三體紙也、無三體紙云々、

勘申、

### 御名字事、

知仁、

東宮切韻曰、陸法言云、知、猪移反、爾雅曰、知匹也、又云、仁、如隣反、禮記曰、上下相親謂之仁、周易曰、聖人之大寶曰位、何以守位、曰仁、尙書曰、知人則哲、能官人、安民則惠、黎民懷之、禮記曰、序其禮樂、備其百官、如此而後君子知仁、注云、知仁禮樂所存也、

言仁、

東宮切韻曰、陸法言曰、言、語軒反、說也、

尙書曰、嘉言無攸伏、野無遺賢、萬邦咸寧、注曰、嘉言無所伏、言必用也、如此則在位天下安也、

右勘申如件

治承二年十二月八日

權中納言藤原朝臣資長、

九日、戊午上、〔天〕陰雪降、積地二寸、申刻以後天陰、此日親王侍始也、人々有別催云々、余無催、但近代事進退難測、仍尋遣奉行光長許曰、今日侍始、人々

依催被參歟、先例如此、今度之儀如何、內々所相

尋也、以行賴、奉書仰遣之、申云、尤可有御參之由存候、而未

被仰下、只爲立太子定、自院被催之人々許、可

〔御〕侍始之由、左衛門督所被申候也、但殿下可

有御參之由、仰候旨、同人可語候也云々、爲遁

後日不參之過、遣尋之處、報狀如此、此上不能參

入、且又康和、元永、無大臣參入、強不可奔走之故

也、侍始事訖、即有立太子定、法皇自去夜、御座此宮、渡殿上有此定、〔畢〕還御云々、

子細可尋記之、今日有吉事奏云々、左大臣奏宣、〔貞〕十日、〔天〕晴風吹、自一昨日一五ヶ日、奉幣於春日

御社、仍每朝修祓、一昨日靈成、昨日晴光、今日奏茂、又三ヶ日之間、午上

爲神事、資長卿注送云、一昨日依御名字事、參中

宮、有御幸、公卿侍臣濟々、源大納言襄御車簾、入御

之後、經房朝臣召仰御名字事、即進勘文、入奏法

皇、經房朝臣歸出、召光雅下給、可奏聞者、其後事

不見給退出、御名字聊議定、臨其期、被用言

字候云々、又昨日晚景參宮、殿下御參、左府、左大

將大宮、大納言、右大將、中御門中納言、花山納言、兩

大夫、右兵衛督、右宰相中將、六角宰相等着櫻座、次

第事了、撤此座、爲院殿上、被定立坊雜事、左府與



奪、資長執筆、重衡朝臣奏定文、此間有侍事始云々、抑仁安度、以康和例書定文、天命悠殘、再勸此

事、御名字又同前、山陵御書、同可草進之樣申入

候、如此之間、不顧白髮出仕、萬人屬目候也云々、

已上、資長季長朝臣云、昨日爲所役、昨日依催、申刻消息狀、參宮、晚頭人々參入、殿下遲參、度々被進人、秉燭

之後御參、一切無御隨身、吉上、假一人取御沓、前驅

僅兩三人、每事不具、頗見苦、御參之後、右府生厚景

參入云々、爲順時俗、弄耻被出仕、歎、可然可

然、又役四位不足、仍經家朝臣、勸殿下手長云

云、參入大臣、關白、左府許也、入夜頭中將來、語昨日一昨日事

等、

一昨日儀、最勝光院御念佛了、法皇幸六波羅、其後資

長卿、奏御名字勘文、續增紙二枚書之、經房傳奏之、御

覽了、以光雅被進內裏、此間定能參內、昏黑、左大

臣、藤大納言、實國、中御門中納言、宗家、花山院中納言、

兼雅、中宮大夫、時忠、別當、忠親、右兵衛督、賴盛、平宰相、

教盛、左宰相中將、實家、六角宰相、家通、右宰相中將、實守、

三位中將、知盛、等參入、關白同禮候、宣下之事可爲奉行、職事光雅所役之由、豫存之、而忽關白命云、定

能可宣下者、即書御名字、定能書之、增紙屋紙之間、聊有議定、遂自御所下給增紙書之、無真紙禮紙等、書樣、

言仁、

可爲親王、

治承二年十二月八日

可有今上字、哉否、取關白處分之處、不可書者、

仍不書之、書了、關白取之被披見、返給之後、向

陣就膝突、下左相府、々々被結申、定能仰云、可

爲親王、即退歸、大臣召藏人右少辨光雅、被下

之、先例必被下大辨、而寬弘被下頭左中辨、依無大辨也、以後例康和如此、未聞被下少辨之例、今度光雅之外、無辨官云々、兼可被從諸大辨歟、光雅下知史、次定能就軾、膝突、仰

云、以右近大將平朝臣、可爲親王勅別當者、大臣

召光雅、下知之、但其詞以右近大將平朝臣、可爲親王家別當云々、家字先例不寄、官同傾云々、

次弓場拜、依關白命、忽撤中門外北腋立部、爲擬中門外北腋、東南兩面而立部、而今爲列立此所、被撤南方立部云々、

訖、關白先以降立、先例、然卿列立之後加之歟、保延故殿如此、今作法何例哉、可尋之、次左大臣、花山院、中納

言、中宮大夫、別當、右兵衛督、平宰相、三位中將等列

立、北上四面、上首向無名門代立之云々、或又中門、西上北面列立歟、里內事可隨便、強放立部、不可然歟、付

定能奏事由、拜訖相引、被參中宮、勅別當申三方

慶<sub>院中宮</sub>、此後事不見及云々、抑御名字事、前夜被

經朝臣持<sub>參簡</sub>、先覽<sub>勅別當</sub>、先<sub>次裏</sub>、次持<sub>參御所</sub>一覽

問<sub>前太相國</sub>、左府等、前太相申<sub>言仁宜之由</sub>、左府

之、退下立<sub>公卿座上</sub>、<sub>也</sub>、次親王藏人、<sub>持參袋</sub>

申<sub>可爲知仁之由</sub>、於<sub>言仁者</sub>、不可<sub>然之由</sub>、其

敷<sub>簡下</sub>、次應覽<sub>吉書</sub>、次三獻、<sub>勅孟賴盛卿</sub>、次覽<sub>家司</sub>

其<sub>被</sub>申云々、仍以<sub>知言兩字</sub>、可<sub>被</sub>勘文<sub>之由</sub>、

已下令旨、<sub>藏人進現</sub>、公卿座事了、撤<sub>臺盤</sub>立<sub>侍所</sub>、<sub>立</sub>

內々仰<sub>藤中納言</sub>云々、<sub>據內々等開食伴字</sub>、當日於<sub>內</sub>

立<sub>坊定</sub>、左大臣與<sub>資長卿書</sub>定文、以<sub>經房朝臣</sub>奏

裏、關白被<sub>仰合賴業真人</sub>、賴業申云、言仁反頗勝、於

梨、令<sub>讀妙典</sub>、未刻、史持<sub>來奏報</sub>、家司陸奥守範季、

文<sub>前</sub>者無<sub>勝劣</sub>云々、關白被<sub>仰可用</sub>知仁<sub>之由</sub>、

傳取覽<sub>之</sub>、

而賴業重申云、知字者、知<sub>ハ正也</sub>ト云釋アリ、又屬ト

十一日、<sub>庚子</sub>天晴、午刻參<sub>女院</sub>、入<sub>夜退出</sub>、此日院御佛

云訓アリ、又世俗共人ト申事に混合歟、言字無<sub>此難</sub>

名云々、

之上、其訓我、云々、其意渡<sub>朕之儀</sub>、仍可<sub>被用</sub>言

十二日、<sub>壬丑</sub>天晴、申刻、大外記賴業來、召<sub>籠前</sub>雜談、

仁云々、<sub>仍被用</sub>言仁<sub>了云々</sub>、又親王下書、康和

移<sub>刻退出</sub>、今日上西門院御佛名、云々、

載<sub>令上字</sub>之由、有所見、仍雖<sub>申關白</sub>、不可<sub>然之</sub>

十三日、<sub>寅寅</sub>天晴、此日戌刻、女院渡<sub>御御堂御所</sub>、是非

由被<sub>示云々</sub>、又云、傳聞事大略、左府可<sub>被</sub>補歟云

御渡之儀、召<sub>中將軍</sub>、<sub>牛童遣</sub>候<sub>近邊</sub>之殿上人等、七

云、內大臣懇切申請云々、不<sub>及</sub>左右<sub>事歟</sub>、

八人許步行供奉、余奉<sub>仕御車寄</sub>、<sub>鳥帽</sub>經<sub>九條大路</sub>、

昨日宮始儀、昏黑人々參集、關白以下着座、大臣料折

入<sub>御自</sub>西門、<sub>蓋御車於御堂東面</sub>、下御之後頃之余

敷、高坏、各四本、納言已下假立<sub>侍臺盤</sub>、<sub>足</sub>居<sub>饌</sub>、

退出、明日御懺法、明後日阿彌陀講等、於<sub>此御堂</sub>可

各兼居飯、凡<sub>變皆豫居之</sub>、諸卿着座之後、勅別當右大

被<sub>行</sub>、其後可<sub>還御</sub>云々、西殿上廊未<sub>造畢</sub>、

將參<sub>院御所</sub>、給<sub>侍名簿</sub>、<sub>長已</sub>召<sub>職事上</sub>、<sub>勅孟賴盛卿</sub>

下<sub>之</sub>、次一獻、<sub>勅孟賴盛卿</sub>、次二獻、<sub>勅孟賴盛卿</sub>

光<sub>雅</sub>、次居<sub>汁</sub>、<sub>關白手長經家朝臣</sub>、<sub>雖殿上人</sub>、依<sub>無</sub>次職事清

雅、次居<sub>汁</sub>、<sub>關白手長經家朝臣</sub>、<sub>雖殿上人</sub>、依<sub>無</sub>次職事清

雅、次居<sub>汁</sub>、<sub>關白手長經家朝臣</sub>、<sub>雖殿上人</sub>、依<sub>無</sub>次職事清



〔十四日、癸天晴、不出行、〕

十五日、<sup>甲辰</sup>朝間雪降、午後天晴、此日有<sup>三冊</sup>命立太子事、十二月立坊、實仁太子之外、無此例、尤有<sup>禁諱</sup>、然而二歲三歲立坊、又以不吉、被待<sup>四歲</sup>者、事似延意、其忌之輕重、歲重月輕、因之歲內所被<sup>忌</sup>、依<sup>康和五年</sup>、<sup>鳥羽院</sup>一、仁安元年、當今六歲等佳例、有<sup>沙汰</sup>云々、奉行職事、藏人右少辨立之、院方、隆季卿、并內藏頭經房朝臣、<sup>右中</sup>本宮、中宮大夫時忠、左衛門權佐光長<sup>被補親王</sup>等也、又關白殊被<sup>與</sup>其事、其外前太政大臣忠雅公、萬事口入云々、東宮事、殊被<sup>忌</sup>前官之人々、忠雅何故預<sup>此儀</sup>哉、未<sup>知</sup>其故、人以爲<sup>奇</sup>云々、法皇今日<sup>刻</sup>、渡<sup>御六波羅</sup>第二、<sup>中宮今宮同居、即可爲東</sup>公卿直衣、殿上人衣冠云々、豫於<sup>法皇三條鳥丸宮</sup>、可有<sup>立坊</sup>、依<sup>康和仁安例</sup>、當日早旦、可有<sup>晴御幸</sup>之由風聞、而尙於<sup>六波羅</sup>、可<sup>被</sup>行之由、禪門計中、仍二棟廊東第一二三間、三ヶ間南、廣廂上板敷、鈎<sup>格子</sup>、敷<sup>簀子</sup>、構<sup>高欄</sup>、<sup>中問</sup>階<sup>無</sup>、母屋中間立<sup>御帳</sup>、爲<sup>東宮晝御座</sup>、寢殿不<sup>能</sup>立<sup>御帳</sup>、<sup>母屋分三立柱之</sup>之故也、以<sup>東方廊</sup>爲<sup>中宮御所</sup>、於<sup>寢殿</sup>者、不<sup>被</sup>用<sup>兩方御所</sup>云々、是康和度、高陽院以<sup>西對</sup>、爲<sup>東宮御所</sup>、以<sup>東小寢殿</sup>、爲<sup>院御所</sup>、大寢殿非<sup>兩御所之例</sup>云々、彼者廣博家也、是

狹少之地也、舍屋員少、准據憚多之由、時人所<sup>傾奇</sup>也、但歲末月迫之晴儀、爲<sup>人</sup>有<sup>煩</sup>、爲<sup>世多</sup>費、令<sup>順儉約</sup>之議歟、此條爲<sup>善政</sup>之由、又以謳歌云々、余此兩三日脚氣倍增、雖<sup>不堪</sup>出仕、殊有<sup>其催</sup>之上、今度當<sup>坊官之運</sup>、由、世人稱<sup>之</sup>、而忽以可<sup>被</sup>補<sup>他人</sup>云々、今日不<sup>出仕</sup>者、似<sup>有</sup>此意趣、事體非<sup>釋便</sup>、還以有<sup>其憚</sup>之故、彼以所<sup>出仕</sup>也、末代之法、孤露之身、於<sup>事損</sup>面目、但坊官全非<sup>懇望</sup>者也、是以出仕而已、申刻着<sup>束帶</sup>、<sup>時給螺鈿、紺地平緒、參內、閑院</sup>着<sup>仗座</sup>、先<sup>是</sup>左大臣<sup>端</sup>、已下、公卿五六人在<sup>座</sup>、又相次兩三人着<sup>座</sup>、此後徒經<sup>時刻</sup>、是關白未<sup>被</sup>參之間、萬事遲怠云々、西一點、關白參內、即藏人右少辨光雅就<sup>軾</sup>、仰<sup>召仰事</sup>、<sup>其詞不</sup>大臣召<sup>外記</sup>、<sup>大外記</sup>仰<sup>之</sup>、外記稱唯退下、次光雅又來、仰<sup>宣命之趣</sup>、<sup>其詞以宣仁親</sup>于<sup>康和例</sup>、可<sup>加</sup>大臣以<sup>官人</sup>、召<sup>內記</sup>、<sup>大內記</sup>被<sup>仰</sup>下、<sup>其詞同</sup>次內記持<sup>參宣命草</sup>、<sup>入爲紙屋紙、不</sup>大臣見了目<sup>之</sup>、內記退下、次付<sup>光雅</sup>內覽奏聞、<sup>不</sup>就<sup>御所</sup>、此間召<sup>大外記賴業</sup>、被<sup>問</sup>諸司具否、頗以懈怠、召仰之後、不<sup>被</sup>仰<sup>宣命之趣</sup>以前、可<sup>被</sup>問也、但近代有<sup>此例</sup>之由、大臣自被<sup>稱</sup>之、可<sup>尋</sup>之、次光雅持<sup>三</sup>

卿宣命草、仰可清書之狀、大臣召內記給之、仰同旨、須臾持參清書、大臣付光雅奏聞如草、御覽畢持歸、大臣召內記給之、被仰近可候之由、次大臣被示可就外辨之由、余起座於陣末馬道、着靴、左大將已下、入自東暢門、進立第一元子前、揖之、後着之、頗引寄下襲尻、素第一元子前立床子、置式宮、無下式宮之儀、爲第二大臣外辨之故也、左大將已下同着之、次權右中辨親宗、少納言仲家等、着床子座、親宗越床子者之如常仲家同前着之、最末之人或如此云々六位外記史各一人、寧異角暢、着後床子、史生等不着座、外辨座體、此內裏、今日始著外辨、仍委所注也

殿上廊前立部外、引廻暢於三方、西南東南暢、四端暢一帖、頗南方引去立之、仍東方有暢門、大臣已下經件暢門、兩面元子一、其前立床子、置式宮、當參座副立部西上南面、立元子床子等、記、史、床子等、當參座末立之

次余召三召使、音召使暫時不稱唯、仍人々傳示、其後稱唯趨來平伏地、余仰云、外記召、召使稱唯退出、次在外辨座之外記、經辨官座下、進余前跪地、余問云、大舍人候哉、外記中候之由、又問曰、刀禰ノ列候哉、外記中候由、余仰曰、候ハセヨ、

外記稱唯復座、次開門、即中門也、先是內辨、左大臣、著子歟、不見及、開門次召舍人一歟、大舍人稱唯、此後少之後、關司分居云々納言可進也、而開門聲先以進、頗早速也、聞舍人稱唯之聲、余已下起座、出自暢門、屬列中門外、四上四面、余起座之間、次少納言出自中門、於暢中門外、左大將已下、動座如常、次少納言出自中門、於暢南行、引暢、南端召之、還到中門下、向西稱唯、出自暢南方了、次余已下經暢南、入中門、列之時、余不揖、進立標下、余須練也、然而脚痛更發之上、已及曉陰、各揖、皆悉列畢之後、于時日入、未乘燭之程也、內辨召宣命使、其詞不聞、以左兵衛督成範卿揖離列、經大納言列後、我列前、東行經大納言列末、北行入自軒廊東間、到東階下、一揖即昇階、經東南簀子、於東第一間西柱下一揖、頗向、尚西進指、笏、如次第、於柱下、可指、笏歟、賜宣命、不昇、長拔、笏右廻、若左廻歟、經本路、於階下、如本傍、左廻一揖、右廻立、軒廊西間北邊、南、次內辨起座右廻、降自東第二間東頭、立元子、經簀子、降自東階北邊、有階下揖否、臨晉之間、不見及、後左府於陣被、云云、一件、一切忘却、頗步進之後思出、更向階下、至忽之甚也云々、出自軒廊東間、此軒廊二間也、以西間、擬西二間、以東間、擬西間也、抑與宣命、斜進自南殿異程、練始、南行經大臣列後、大納言列前、經列間、之立加余上一揖、次宣命

使、出、自、軒廊東間、又說、歸立之時、立東間、出之時、南行、用西間云々、但今作法常說也、當、中門北扉程、乍、南向、一揖、更折西行、就、宣命假位、一揖、次指、笏、披、宣命、捧、目上、更引下讀、之、押、合右腋、是宣制一段也、左大臣已下再拜、次又宣制一段、群臣再拜、如北山記、者、可、舞踏、歟、然而代々、多以再拜、延久、康和、共、以、再拜也、次宣命使拔、笏、揖、左廻經、尋常版東、親王標西、當、太政大臣標前方、頗南、西立、親王標、如、常、行更西折復、列、或說、當、大納言列上、作、向、南揖云々、舊、記、以、件、揖、爲、誤、說、今日無、此、揖、也、次左大臣揖離、列、經、余前、不、練、退下、余已下從、之、各、經、也、於、中門邊、改、着淺沓、各着、仗座、左大臣、重自、西方、被、着、端、余已下廻、一人、著、與、參議、不、敬、也、此後可有、坊官除目、而光雅先來、仰、啓陣事、其、詞、不、及、大臣召、外記、々々賴業參、軾、大臣仰、可、召、四府將佐、之由、賴業稱唯退下、此後良久不、參來、大臣度々雖、被、尋催、右近少將候、御所方、不、告得、云々、大臣云、然者只尉可、參也云々、然而猶以、不見、凡啓陣事、奏、下除目、之後、可、被、仰、下、候也、而延久、康和、除目清書之間、被、仰、之、康和、大臣進、申請云々、今除目以前被、宣下、太以早速、大臣同被、傾奇、歟、將佐猶以不參之間、光雅就、軾召、大臣、々々參上了、余頃之起、座參、御所方、於、鬼間方、伺、見除目儀、先是、在、此、所、見、余、來、逐、電、去、了、於、御殿西面、有、其儀、尋常、盤、座上御引

直衣、關白被、候、御座北間簀子敷、南、左大臣候、御座當間、東、同間北頭長押上、立、切燈臺、舉、燈、次第作法如、常歟、余始終不、臨見、參、朝餉方、謁、女房等、小時御前議了、大臣赴、陣、人々少々着、陣、或又立、小板敷邊、云々、須引、大臣、相率可、參、太、宮、也、然而先例不、必然、之上、余有、所存、先以退出、暫參、女院、使人見、六波羅、聞、人々參集之由、參、東宮、于、時坊官拜之間也、余經、其前、昇、自、中門北方、徘徊、同廊、卿相五六人仰、立、此所、關白在、餐座、又公卿等多群、集、東宮登御座、太奇恠也、但舍屋狹少之間、更無、其所、仍忌、憚、群居、歟、坊官拜畢、左大臣以下昇、自、中門外方、余問云、可、被、立、南庭、拜、哉如何、答云、不可、立云々、余率、人々、降、自、中門外方、列、立、中門下、東上、此間垂、畫御座御簾、光、長、役、次亮重衡朝臣進出、示、氣色、參、御所、可、昇、自、中門外、啓、事由、之後、就、此、下、退歸降、自、中門內方、仰、聞食之由、出、中門、了、次余已下列、立、南庭、東上北面、殿上人、在此、列、末、抑、以、四、二、棟、官已下、出、中門外、也、殿上、鄭、爲、東宮、御所、之間、前庭、程、狹、仍、中、納、人在、此、列、末、及、西門下、再拜了、歸、立、中門外、上、臨、兩、三、下如、例、中納言已下、余招、光長、問云、被、下、昇、殿、令、旨、了、先以退、立、本所、了、余招、光長、問云、被、下、昇、殿、令、旨、了、者、今間可、奏、慶、若可、經、程者、暫可、昇、中門邊、歟



如何者、答云、早被下了、申次人只今所參也者、即權

亮維盛朝臣出來示氣色、昇自中門外方、如初參

進簾下、降自中門內方、仰聞食之由、歸出了、次余

已下再拜、不進前庭、乍本所拜也、次余已下昇自中門外、着殿

上簾座、豫闌白、傳、及兩大夫等在端座、余着與座、

自餘人々相分着座、參議不着座如何、次一獻、大夫

痛勸闌白、瓶二獻、勸盃、權大夫兼雅卿、次箸下、汁物兼居之、

子、大進光長、瓶二獻、權大夫進平經仲、次箸下、參議不着座、

之間不申上、晴以下、次三獻、勸盃、權亮維盛朝臣、瓶二獻、藏人山藤光

著座例也、藏人何事之有哉云々、忽不、次余拔箸取、笏退出、此後給

祿、人々退出云々、闌白、辨、坊官等留心歟、次御劔

勅使、頭中將定能朝臣參上云々、後聞坊官除目御前

儀了、光雅相具御膳、參東宮云々、又余退出禁中

之後、左府被奏除目清書、新宰相中將實宗勸之云々、藏人大進基親

奏之云々、又清書之間、被仰啓陣事云々、其後被

下除目、次有坊官拜云々、此等事可尋記也、

宣命、大內記業實、

現神止、大八洲所知須、倭根子天皇我、詔旨<sub>真爲</sub>、勅命平、

親王、諸王、諸臣、百官人等、天下士民、衆聞食止宣、

隨法爾、可有久、政止爲豆、言仁親王平、皇太子止定賜布、

故此之狀平語氏、仕奉禮止詔、天皇勅旨平、衆聞食止宣、

治承二年十二月十五日

坊官除目、

東宮、

傳從一位藤原朝臣經宗、兼左大臣、

學士從四位上藤原朝臣光範、兼文章博士、

學士從五位上藤原朝臣親經、兼宮內權少輔、

春宮坊、今日、於、陳左大臣云、先例、多東宮坊、春宮職也、而康

和度如此、仍可、隨後、(後一本作彼、例也云々、

大夫正二位平朝臣宗盛、兼大納言、右大將、

權大夫從二位藤原朝臣兼雅、兼中納言、

亮正四位下平朝臣重衡、兼左馬頭、

權亮從四位上平朝臣維盛、兼右少將、

大進正五位下藤原朝臣光長、兼左衛門權佐、

權大進從五位上高階朝臣經仲、兼右衛門佐、

少進正六位上平朝臣時兼、兼、

大進正六位上中原朝臣成舉、兼左大史、

少屬正六位上安陪朝臣資成、兼檢非違使左衛門尉、

少屬正六位上安陪朝臣資元、兼、

主膳監、

正正六位上藤原朝臣盛光、

主殿署、

首正六位上惟宗朝臣章資、  
主馬署、

首正六位上平朝臣盛綱、兼、

治承二年十二月十五日

清書之時黃紙、傳、

別紙、兩大夫、學士、亮、已下、

一紙、已上三通也、

昇殿人々、

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定能、藏人頭、

正四位下行皇太后宮權大夫兼右近衛權中將藤原光

能、藏人頭、

正四位下行右近衛權中將源朝臣通親、

正四位下行右近衛權中將藤原朝臣賴實、

正四位下行右近衛權中將藤原朝臣泰通、

正四位下行右近衛權少將藤原朝臣隆房、

正四位下行右中辨兼內藏頭藤原朝臣經房、

正四位下行讚岐守藤原朝臣季能、

從四位上行右近衛權少將源朝臣雅賢、

從四位上行權右中辨平朝臣親宗、

從四位下行左近衛權少將平朝臣清經、

從四位下行右近衛權少將兼參河守藤原朝臣顯家、

正五位下行右少辨藤原朝臣光雅、五位藏人、

正五位下行侍從平朝臣資盛、

正五位下行右近衛權少將源朝臣資時、

已上十五人、康和例云々、

藏人、

親宗子、親能、

泰經子、隆仲、

經房子、真經、

時盛子、平家也、

雜色、逐可書入云々、

一歲立太子例、

清和天皇、嘉祥三年十一月廿五日戊戌、

冷泉院、天曆四年七月廿三日、

鳥羽院、康和五年八月十七日、

近衛院、保延五年八月十七日、

二歲例、

陽成院、貞觀十一年二月一日、

薨、

保明太子、延喜四年二月十日、

華山院、安和二年八月十三日、

薨、

實仁太子、延久四年十二月八日、



三歲例、

堯、

慶賴太子、延長元年四月廿九日、

朱雀院、延長三年十月廿一日、

四歲例、

後一條院、寛弘八年六月十三日、

五歲例、

一條院、永觀二年八月廿七日、

六歲例、

當今、仁安元年十月 日、

七歲、無例、

八歲、無例、

九歲、

廢、

恒貞太子、天長十年二月三十日、

醍醐天皇、寛平五年四月二日、或十四日、

圓融院、康和四年九月一日、

三條院、寛和二年七月十六日、

後朱雀院、寛仁元年八月九日、

十歲、無例、

十一歲、無例、

十二歲、

後冷泉院、長曆元年八月十七日、

後三條院、寛德二年正月十六日、

二條院、久壽二年九月廿三日、

十三歲、無例、

十四歲、

仁明天皇、弘仁十四年四月十八日、

十五歲、無例、

十六歲、

文德天皇、承和元年八月四日、

十七歲、

白河院、延久元年四月廿八日、

十八歲、無例、

十九歲、

村上天皇、天慶七年四月廿二日、

廿歲、無例、

廿一歲、無例、

廿二歲、

嵯峨天皇、大同元年五月、

面縛人、任傳、未曾有事、

康和立坊、爲房可任亮、敦宗可任學士、而共依爲刑人、不被任之、俊信一人、任學士、敦宗追任之、顯季任亮昇進之所、爲房補之、是皆青宮之事、殊避忌諱之故也、流刑之者、猶嫌之、況而縛之人哉、學士、亮等猶撰人、況於傳哉、時移風變、蓋此謂歟、莫言々々、

十六日、乙雪降、今日立太子第二日也、余依不參仕、今日關白以下、大臣等不參、以宗家卿爲上首云、

十七日、丙朝間雪降、辰刻以後晴、立坊第三日也、余猶不出仕、晚頭參女院、入夜歸來、今夜實遍閣梨來、誦法華經、能讀也、今日關白并傳、左大臣已下參入、三獻如例云々、

十八日、丁天晴、十九日、戊雨下、

廿日、己陰晴不定、雨雪交降、今夜有行幸于法住寺、爲御方違也、今日申刻、法皇爲御方違、臨幸宇治、因之關白自一昨日、向其所經營、兼數月有此風聞、仍被新造御所云々、凡其儲莫大云々、關白不候、逢御幸急以上洛云々、余爲方違、向賴輔入

道南直廬、又女院依御方違、渡御御堂御所云々、今夜行幸以後、定能朝臣來、示條々事等、今夜被任中宮亮、四位左衛門佐保盛云々、此外無任人云々、

廿一日、庚天晴、卯刻歸宅、今曉行幸還御云々、又午刻許、法皇自宇治還御云々、中將三品事、自女院被申院、頗有許容之氣云々、

廿二日、辛亥天晴、巳刻參日野、申刻歸宅、恒例每年之參、自然懈怠及于今也、用人車、其人車馬、任意如先々、今夜中宮初入內云々、東宮廿一日可有入內云々、清經朝臣、叙從四位上、官賞云々、

廿三日、壬雪積地二寸、今夕於法皇宮、被行往生講、每月十五日可爲恒例事云々、太相國已下、堪系管之輩應召、但外人不入此列云々、未刻、頭權大夫光雅朝臣來、余着直衣、謁之、仰云、明日可被行京官除目、日來左相府、被申可參之由、而今日俄申所勞、仍可令參執筆給上者、令申承了之由、晚頭源中納言來語、又長光入道來、

廿四日、癸天晴、此日京官除目也、儀、亥刻着束帶、先參女院、依御佛名也、資長卿一人候座、余不待事訖參內、關白未被參、奉行職事、光能朝臣參院、

未歸參云々、余參御所方、謁女房了云々、語云、  
中將殿、今夜可有御慶三位之樣所承也云々、余驚  
悅無極、正月朝覲行幸歟、將叙位歟之間、可有沙  
汰之由申入了、而忽聞此告、誠不慮事也、但光能未  
歸參、其後可有一定歟云々、此間關白被參、余  
申中將所望事、未聞及、若有沙汰者可存此旨、  
云々、女房語云、關白所被承也云々、而今北刻許光能歸參、  
被稱未聞及之由、疑不甘心事歟、北刻許光能歸參、  
其後關白依召被參御前、及寅刻余赴陣、先是、  
報已了、  
左大將已下公卿三四人在座、余先着與、即移端  
座、直履之後、使宮人置軾、頃之頭權大夫光能朝  
臣就軾仰召仰事、次召大外記賴業、右少辨光雅、  
等仰之、其詞如常、此後良久移刻之後、藏人來召、余已  
下揖之、此間左大將起座、不可取、  
文之故歟、實守卿同起了、  
本所候之稱、實定、實國、兼雅、實  
守等也、而兩人起座在陣殿、宮文人數、今一人不足、人々  
曰、殿上方別當權中納言等所候也云々、仍先以官  
人觸之、官人歸來、申旨不足言、大略不示聞歟、  
雖三重相示、官人之體、有若亡也、須付職事、若以  
外記沙汰也、然而彌依可經三時刻、隨宜招着實守  
卿之後、召外記六位候、仰宮文、即外記三人、取宮  
文列立小庭、次余已下列弓場、余、實國、兼雅、  
實守等也、外記立

納言後了、余揖納言、以  
下答揖、着殿上、關白豫被坐奧座、  
關白云、官人來小板敷下、責可寄宮文之山云  
云、切腹次第也、大略忠親、實綱等、隱居片角之間、  
以下關白存件等卿之山、官人相示歟、勿論有若亡事  
也、兩卿隱居太奇怪也、次關白被着御前座、相次余  
參着、次實國、兼雅、實守等、置宮文着座、次主上  
召關白、被引寄御  
座、如例、關白着圓座、傳召下官、下官先  
着我圓座、依重召着第一圓座、引寄裾祓候、依  
天氣奏關官帳、次第如先々、仍不記、次總大間、  
依燈通座、召男  
共、令重立之、今夜用繆置四五枚一度押帖之說、依  
早速說也、次任式兵、次召院宮御申文、實家  
卿、此間關  
白賜御硯宮申文、被撰之、次任民部省奏、次關白  
撰給申文少々、余先取可袖書之申文置前、袖書  
之間、實家卿持來院宮御申文、除上四門院之  
外、悉持來也、余取之  
置硯上、縱可袖書、中  
文置入一莖、拂笏宮奏之、返給置前、  
取袖書申文、先注袖書、通、  
召實守卿、今夜被定、明前  
其役仍召起賜之、令下勘之、實守取之退下、依可有  
所役、即復座、余引院宮御申文裏紙、並置硯左、上、  
也、  
此間關白、撰賜申文十餘通、返上殘申文於御所、被  
早出了、明日、明後日、物品云々、早  
出歟、但先是度々鳴了、余間內覽有無、被答

云、不可有者、余取申文等、分置座前視下等、先任院宮當年給、見合任人注文、件折紙、其申文所賜也。次委見申文等之處、追賜申文之中、有可袖書之申文十通許、仍召實家卿、此問實守讀帳、實家只今無所役之故也。令下勘之、又撰見顯官申文之處、只史申文一通也、仍取笏奏事之由、無分明仰、若御寢歟、仍召奉行職事光能、尋問云、顯官舉必可有也、而關白撰餘申文之中、史申文一通之外、無顯官申文、若大束之中、有申文者、內々申出、可持來者、光能云、素其外不候云々、仍勿論無顯官舉、頗希有事也、然而非執筆之失、後代人勿謗之、但往代粗有此例歟、近代之間、未曾有事也、次欲任課試者之處、宮文之中、無件勘文、又任人注文之中無之、仍任文章生、次任京官等、無指次第、只任注文、計便宜、所任也、此間入日了、此中陰陽寮遠奏、入注文、而與遠奏狀、有相違事、仍以光能朝臣問外記、申云、此遠奏甚異樣、所載僻事等也、爲奇不少、被問太寮之後、追可有沙汰云云、余奏事由、勅云、然者下名之次、可有沙汰云云、仍件申文入一宮、凡任人等之中、三分之二、無申文、仍度々召光能、令書進申文等、此間功過定事

訖、左大將持來定文、余取之、置入第一宮、左大將、并實家卿等退出了、所殘只兩宰相、中將許也、京官等任了之間、實守卿持來下勘申文等、此問天曙、余次日第任也、次實家卿持來追下勘申文等、各任之、此間資長卿着座、清書上卿也、兩宰相退出了、余皆悉任了、奏事由、奏大間入第一宮、次有叙位、余召五位藏人兼光、令進續紙、二卷持來、余取之、置前、取笏候氣色、卷返叙之、書了放紙餘一卷之、入第一宮、次取出成文一封之、普通說、卷大間、返賜之後、可封也、而今用異說、先封成文也、其儀如常封了、寄物取成文、置座下方、橫置替宮、據笏奏大間、返給功過定、并進奏申文、留御所、成殘申文、唯此一通也、復座拔笏置替宮、以成文入第一宮、視宮并第三宮中調入了、又置替宮、據笏取大間宮、叙位、大間、揖起座、於御椅子前、賜資長卿退下、於弓場殿代、招兼光、宣下檢非違使事、又付同人、奏良通叙三品之慶、歸來仰聞食、余拜舞退出、于時晨刻、今日內給名替、不下勘任之、是一說也、又卷重申文等、名替、國替、等之類也、乍重捧成文、是一說也、今日議始、繆大間之間、關白命左大將云、受領文可召云々、實定卿召辨直始行、須申文書候之由、蒙可定申之命之後、可被定歟、見合忠親卿歟、實綱



歟、暗之間、實家書定文、實守護帳、今日始讀之也、又  
盤不見及、實家書定文、實守護帳、今日始讀之也、又  
 居火櫃衝重、關白未被、勸盃、願定能朝臣、關白退出之後  
 也、今日春宮御給、藏人一臈平親能、任大學亮、康和例  
云、重宮坊、余退出之次、參院立中門、付藏人一奏事  
當年御給、由、拜舞、昇候中門邊之間、以候北面之下臈、信盛  
 被仰出云、信盛直不示、以去夜まで一定とも不存、猶  
 不審に思給し爾、成熟し、返々悅申不、可、見參之  
 處行法之間自不申、尤遺憾云々、余招寄信盛一奏、  
 并舞餘身、面目可足、令仰彌添恐悅之由了、良通  
 生年十二歳、家例多十四叙三位、大段已下、至余十二  
 歳叙三位、時人稱之早速、令思忌不、此跡、誠是  
 希有之中希有也、去月勤仕春日使之間、旁有叶神  
 慮之證等、今浴此恩、豈非神德哉、何況素所望、正  
 月行幸賞、并叙位之次、以坊官賞可叙之由也、而歲  
 內成就、法皇今度必可被叙之由、被奏内、自内又  
 尤可然之由、被申院云々、誠運之令然也、抑以  
 余坊官賞所叙也、今夜賴政叙三位、第一之珍事也、  
 是入道相國奏請云々、其狀云、源氏平氏者我國之  
 堅也、而於平氏者、朝恩已普一族、威勢殆滿四海、  
 是依勳功也、源氏之勇士、多與逆賊、併當殲討、賴

政獨其性正直、勇名被世、未昇三品、已餘七旬、尤  
 有哀憐、何況近日身沉重病云々、不赴黃泉之  
 前、特授紫綬之恩者、依此一言被叙三品云々、  
 入道奏請之狀雖賢、時人莫不驚耳目者歟、今夜  
 博陸中將師家、叙四品也、

廿五日、寅辰刻退出、未刻外記持來大間成文、加入硯  
 依無清書一丁、參議左少辨兼光勸之云々、父子勸  
 仕歟、邦綱、資賢、宗家等卿、并定能朝臣等來慶、此外  
 人々多來、大夫隆職來云、今年不堪奏等、未被行、左  
 府依所勞不能出仕云々、可有御參之樣、兼光  
 所申也、明日可被行荒奏也、未被行公事所宛申  
 文、位祿定、施米大糧等也、不堪申文、同定等、素所付  
 官奏也云々、余答云、日來未風病不快、相扶參  
 除目、退出之後前後不辨、如只今者難出仕、但得  
 少減者、可出仕、且可調文書歟、抑不堪奏依一  
 上讓、次大臣所候奏也、若又可、有上催、兩方共  
 未承及、蒙催之時可申左右也者、子刻許、兼光  
 示送可參勤之狀、申所勞無術之由了、今日依  
 日次不宜、中將拜賀事、自明日可沙汰也、關白  
 送書被賀中將三品事、



廿六日、卯天晴、自今曉、風病之上、咳病相加、不知爲術、兼光重催云、今日難參者、明後日廿八日可參仕云々、隨今明有様、可申左右之由返答了、今日召左京權大夫光盛、仰三位中將拜賀事可沙汰之由了、御出事、國行可奉行之由仰之、依天仁三年故殿御例、所行也、問遣日次於在憲朝臣之許了、豫見也廿八日吉也、仍内々仰其旨了、

廿七日、丙天晴、風病猶以不減、三位中將拜賀、明日廿八日爲吉日之由、在憲朝臣所注申也、入夜送使者於兼光之許云、明日官奏、左府參否如何、所勞猶無術、於事宜者、更不能辭遁事也、可被計申者、使者歸來云、明日荒奏、左府相扶所勞、被參入也云々、光盛申明日拜賀雜事等、

廿八日、丁天晴、此日三位中將拜賀也、天仁三年例行之、今夕春宮初可入内給云々、仍殊所怠行也、院御所出、已刻光盛參上、申所々申次散狀、未刻余(參)女院御所、同刻自院賜御牛黑斑牛、右將實素賴文爲御使相具也、於中將曹司、南面見之、和文引退之間、侍左馬允奉賴受取、傳給車副牛童還參、更召賴文於緣際、賜中將衣一領、濃蘇美作守基輔傳取給之、申畏賜事之由、司可參朝觀

行幸、御裝束之、賴文取之退下於門下(閑)所、賜牛童故著衣冠也、併飼口等祿、牛童手作布五段、所司政職行之、申刻、源中納言雅賴、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

納言直衣、來、余於西廊方謁之、相次土御門大納言

散位良盛、

散位兼親、院殿上人、

左馬權助國行、

但馬權守長俊、

次車、檳榔毛、余車也、不<sub>二</sub>新調<sub>一</sub>先例也、

次隨身四人、袴衣、蜜胡露、白狩袴、垂之、

次衛府長、番長忠武、<sub>釋上下、歎冬衣、</sub>

雜色十人、

牛童持<sub>楊、大小院丸、當色、</sub>

赤衣仕丁、持<sub>雨皮張莖、當色、</sub>

舍人持<sub>御笠、</sub>

次扈從殿上人三人、天仁例也、

頭中將定能朝臣、

民部少輔宗雅、

侍從兼忠、

於<sub>二</sub>七條院殿西門外<sub>一</sub>、下<sub>レ</sub>車進<sub>二</sub>中門<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>院部經家朝臣<sub>一</sub>、奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>歸來、仰<sub>二</sub>聞召之由<sub>一</sub>、<sub>此大告</sub>拜舞了候<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、退出、<sub>唯今爲合給之由、</sub>參<sub>二</sub>東宮<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>大進光長<sub>一</sub>、啓<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>歸來、仰<sub>二</sub>聞食之由<sub>一</sub>、<sub>便仰</sub>再拜了、昇候<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、退出、<sub>邦綱卿參合、退出之間、</sub>參<sub>二</sub>內<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>左衛門陣代<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>床子座前<sub>一</sub>、<sub>時上官一人在</sub>進<sub>二</sub>弓場殿代<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>頭中將定能朝臣<sub>一</sub>、奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>歸來、仰<sub>二</sub>聞食之由<sub>一</sub>、<sub>告召</sub>拜舞了後、昇候<sub>二</sub>

殿上、次主上出<sub>二</sub>御書御座<sub>一</sub>、次職事告<sub>二</sub>召之由<sub>一</sub>、即經<sub>二</sub>上戶<sub>一</sub>參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、<sub>御殿西面寶子、豫敷四座、</sub>小時退下、即入御、<sub>中將候四座邊</sub>次參<sub>二</sub>中宮御方<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>堂上<sub>一</sub>、<sub>從者廻北面、于時</sub>降<sub>二</sub>立西中門<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>大進基親<sub>一</sub>、啓<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>再拜、次參<sub>二</sub>博陸<sub>一</sub>、<sub>先是兼光</sub>於<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>、<sub>傳關白命云、依行啓、參東宮了、不</sub>進<sub>二</sub>中門<sub>一</sub>、兼光出逢<sub>二</sub>云<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>東宮<sub>一</sub>給了云々、<sub>其實未被參、然而爲不</sub>仍不拜退<sub>二</sub>出<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>八條院<sub>一</sub>、進立<sub>二</sub>中門<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>別當前兵衛佐光實朝臣<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>拜舞、依<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>重可<sub>一</sub>拜、然而參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、退出之後、給<sub>二</sub>一員并隨身祿<sub>一</sub>、<sub>府生六丈組二疋、番長</sub>又雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>車副<sub>一</sub>、舍人、居飼、牛童等祿、余叙<sub>二</sub>三位<sub>一</sub>拜賀之時、不<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、仍今日隨<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>也、於<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>、頭中將留了、今夜參<sub>二</sub>東宮<sub>一</sub>、行啓仍依<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>遲々<sub>一</sub>、兼示<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>也、宗雅於<sub>二</sub>殿下<sub>一</sub>留了、是關白御共、有<sub>二</sub>先領狀<sub>一</sub>之故也、同兼申<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>兼忠一人始終從<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>八條院<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>沓下襲裾等<sub>一</sub>云々、

抑承保二年、二條殿叙<sub>二</sub>三位<sub>一</sub>、拜賀之時、被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>請關白<sub>一</sub>袍帶等、仍今度遂<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>也、今夕被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>下名<sub>一</sub>云々、又東宮始入內、仰<sub>二</sub>手車<sub>一</sub>云々、右少將維盛朝臣、叙<sub>二</sub>正四位下<sub>一</sub>、家賞云々、又不堪荒奏、左大臣候<sub>レ</sub>之、

廿九日、<sub>戊午</sub>天晴、史持<sub>二</sub>來奏報<sub>一</sub>、家司行賴傳覽<sub>レ</sub>之、今夜

和奏、臣大官所衣位祿定、施米大糧等、被付行云々、  
 卅日、已雨下、追儼、上卿權中納言實綱卿、參議稱障  
 不參云々、傳聞、關白室可參東宮、即可候入內御  
 車後之由、前相國結構事、一定之間、忽以停止、去廿  
 八日行啓、只御乳母時忠卿室、候御車云々、此事素  
 太見苦事也、世間人彈指云々、而忽停止之條、子細不  
 審、或人云、時忠卿厭却云々、凡古來未聞、執政之  
 室爲乳母之例、而棄身口諛權勢之間、自然其事  
 停止、是氏大明神冥鑒歟、雖末代、墮家棄名事、能  
 可有用心事歟、今日返上關白借給玉帶了、

右治承二年戊戌冬此一冊墨付百參拾八枚者以三緣  
 院道教公眞筆松殿右幕下道昭卿被書寫之者也

慶安二年丑巳正月仲旬陶化翁(花押)記之、

# 玉葉卷二十八終





歸家之後、齒固如恒、女房、余出行之間、夫人并姬君等、齒固了云々、次節供、余不着之、陪膳、今日、須候小朝拜也、而自舊年、有歡樂之氣、候院拜禮之間、彌以增氣、仍奏事由所早出也、左大臣、又稱疾、不被參內云々、余退出之後、關白參內、先被所々、其後、有小朝拜節會等云々、內辨三條大納言、外辨上宗家卿云々、今日出仕行列、

先余車、如常、去年車也、次隨身雜色等、其後中將居飼舍人、各二人、次一員、府生番長、如拜賀日、是一家例也、次前驅二人、次中將車、新下、不懸、次隨身雜色、次共殿上人等也、

今日、院拜禮之間、左大將參入、諸卿列立中門外、未進、立南庭之程也、經諸卿前、如例、後無其路、次、隨身不進出列前、可尋之、

二日、辛酉天晴、此日朝觀行幸也、三位中將良通供奉、余參會院、如例年、已刻着直衣、參女院御方、出立、中將令參畢、於五條京極、邊騎馬云々、午刻、余着束帶、蒔繪螺鈿、緋地平緒、參院、行幸以前也、御裝束儀、異例年、寢殿母屋、并東南西庇等、皆放出之、卷三方簾、法皇御坐、并御拜座如常、副母屋北簾立、亘屏風、西第一枚懸、白裕、如常、例年、南庇東第一二間南、西面懸簾、是母屋御座之儀也、仍自去年、改御裝束儀、自余無相

違、未刻臨幸、關白自開路、先以被參、暫語談、臨幸之後、先御拜、法皇押開御座後屏風、出御、隆季卿置三衣宮、先々、大臣勤此役、去年、隆季卿勤之、何依、母后不御坐、改此役人乎、關白敷白裕之後、御拜如例、次改御裝束、垂母屋簾、撤御拜座、敷茵簀子、透渡殿等、敷菅圓座、次立胡床、引陣、次主上重渡御、關白候簀子、頭權大夫光能、召公卿、左大臣以下、着御前、余於南廣庇邊立、加、自余在、上臈兩三着座之間、關白被仰樂行事、左中將奏通朝臣、次振棒、次居衝重、此間、兩方侍、右中將奏通朝臣、次勸盃、頭中將奏通朝臣、瓶先是、萬歲樂、地久、舞了、右一物忠節不候、若所勞歟、次余退出、自舊年有歡樂之氣、昨今相勞出仕、猶依不快、所忿出也、今日、實家、實守等卿、勸觀獵役、今日、中將下馬之後、入自北門、徘徊西對邊、欲着座之處、公卿員多、無其座、仍不着座、余退出之次、相具退出了、此日、中將供奉儀、

裝束、

位袍、紅梅浮文織物、桃散花、牛臂下裳、蒔繪表袴、紅打袖、紅大口、薄色袖二領、紅單、卷腰、緋紫檀地平胡、蘇芳袴丸緒、弓、紫檀地螺鈿、水精柄、紅梅地平緒、有文玉帶、靴、着紅梅下裳之時、不着緋平緒、故實也、於緋地者無懼、

馬、裝白、院御馬也、

鞍、黃地、竹豹襪、蘇芳綾手綱、

隨身四人、襦袢紅打、朽葉袴袴、結柳付之、

童二人、浮線綾梅袴襦袴、濃打、衣取結梅花付之、裏杏、

馬副四人、裝束如常、

雜色二人、白襪、武具、右宗、

舍人、二監上下、濃款冬衣、居飼裝束如常、

行列、

馬副張馬口、次隨身、次童、次雜色也、

歸家之後手水、陪膳光經朝臣、齒固等如例、今日右中辨經房

朝臣來、不謁之、

三日、壬戌天晴、手水陪膳季長朝臣、齒固如常、兩大外

記、大夫史等來、又中御門中納言被來、余謁之、頭中

將來、招入內寢謁之、語云、昨日行幸賞、少將資盛、

資時、侍從清宗等、叙四位、皆不避其官云々、又云、

御遊召人、拍子資賢卿、被點宗家卿子、依不、付歌雅賢朝

臣、琵琶實宗卿、出仕資賢卿之云々、侍從兼宗、忠親卿心、今度、和琴實家卿、

笛少將維盛朝臣、笙家通卿、篳篥定能朝臣、曲、呂、安

名尊、席田、烏破、律、青柳、更衣、萬歲樂、五聖樂急

〔等〕云々、右少辨光雅來、入夜、上官列參、進見參、

又邦綱卿來、余謁之、

四日、癸亥天晴、所司進元三見參、未刻、二位中將兼房

直來、余謁之、元日入夜參院、昨日參內并殿下云

云、今年、強不可被出仕一歟、

戌刻、頭權大夫光能朝臣來、余着冠直衣謁之、光能

云、明日可被行叙位、可參執筆左大臣、申可參

參仕之狀了、此次、示付行賴申四品事了、六位

外記持來十年勞、不知案內之女房等、不觸余、

乍納宮返給云々、尤不敵、

五日、甲子朝間天晴、午後雲掩、入夜雨下、此日、叙位議

也、余奉仕執筆、早旦、召遣大外記賴業、申刻參上、

以職事國行、進十年勞、留文、入視筆墨等妻樣如

於件宮、以家司光經朝臣賜之、又召賴業於簾前、

仰叙位之間雜事、頃之、退下侍所、以光經付橘

氏爵名簿、今年不召氏人等、只長者以政所舉申也、

功過別當員光云々、妻樣如、去年、不載功過別當之由、賴業退出了、

亥刻參內、其後、奉行職事光能朝臣、爲御使更參院

畢、子刻、關白參上、同四刻、關白被示可着陣之

由、仍余向陣、先與、令置帟、即藏人左少辨兼光來、

仰召仰事、余便可仰之、而不仰、兼光退下、更以

官人召弁、依無他弁、兼光參上、余仰云、今日可有叙位、召仰諸司了、永久五年、故殿始候叙位、給、頭弁後被仰外記、今日、召仰、退席之後、更召弁被仰、其逐彼例、先仰弁也、兼光唯退下、此大仰云、中門撤孔、而可、開中門者、次召外記、大外記賴業、參、軾仰云、今日可有叙位、文書相具、候、普通說、不異、仰弁賴業唯退下、次藏人來召、余揖、諸卿、詞、今用一說也、中門、問否也、官人歸來申旨、不足言、大略有若而間、召使於陣腋、申撤畢之由、次余召外記、六位候、仰云、宮文候、外記唯退之後、良久不列、度々被催之後、外記三人、取視宮文等、列立小庭、次余已下、列立東中門、余南面、納言西面、北面上、參議東上北面、外記、立納言後、畢之後、余右廻、自中門內北行、出北腋小戶、昇自小板敷、着殿上端座、關白、先是、在與座、次關白、着御前座、次余着座、次宗家、成範、賴定等卿、置宮文、着座、實房、實國、雖參入、不取、宮文、未知其故者也、次關白、依召着圓座、次余依召、關白傳召、先着第二圓座、依重召、更起進、着第一圓座、引寄裾、正笏候、次被引寄御簾、余小揖置笏、右移一覽宮文書於次宮、殘留十年勞一卷、小披見、以右手取上同宮、以左手押硯於其跡、以十年勞宮置硯跡、又披見、挿笏押硯已下於座下、取

十年勞宮、膝行就簾下、引廻文許、是、一、褰簾奏之、小退拔笏候、主上御覽了、押帳簾給、余忿挿笏、進寄賜宮、又引廻文許、退居本座、置宮拔笏、置替硯與一宮、引寄第三宮、正笏候、次依仰小揖、召男共、藏人來仰云、兼光召、藏人退下、即兼光參上、余仰云、續紙、兼光退下之後、數刻不進之、大略、兼不被沙汰、歟、仍召男共催之、良久之後、兼光持參之、二卷置、余置笏、自座下方取之、不取、橫置座前、取笏候、次依仰小揖、見合續紙取勝、欲返之處、續三枚、仍如本卷之、入第三宮、卷返今一卷、續紙、續六枚、卷返、作法如去年、置座前、橫取笏候、又說、長、候氣色、次依仰小揖、摺墨染筆、二卷如本子細見去年記、置筆臺、取續紙、染筆、一卷、書從五位下、第三枚續目、一寸五分、書之、先、置續紙、欲叙式部之處、省奏不見、仍觸此由於關白、召兼光、問外記、申云、一丞藤原賴經、依辭辭、欲舉第二丞、而一丞無故辭、何可被引越哉之由訴申、如此之間、不能放舉狀之旨、本省所申也云々、關白被示云、雖無省奏、推可叙一丞者、仍余叙之、藤原朝臣賴經、付云、式部、依、無省奏、無懸勾之儀、置、端三行、如、恒、讀申不讀、尻付、次取、民部省奏、三宮、讀申、其儀如、常、見、去年記、



置硯上、取叙位、染筆叙之、三善朝臣盛俊尻付云、民部云、所載奏函第三者也、置第一二筆、中下篇之條如何、只可叙歟、關白云、可問外記、以兼光問之、中云、一二兩未省奏、仍第三亟放奏之由、本省所讀申置叙位、取笏奏云、院宮乃御申文、申也云々、仍叙之、讀申置叙位、取笏奏云、院宮乃御申文、次召權中納言實綱卿、其詞、權中納言藤原朝臣、先例、納言參計云々、余先仰實房卿云、納言下篇誰候哉、申云、權中納言實綱卿、納言云々者、近代多用參議、余存舊例、所用異說也、實綱卿、參進余後長押上、余仰云、院宮之御申文、實綱微唯退下、此間、關白仰實房卿云、受領〔申〕文候哉、實房召兼光問之、申候之由、關白仰可定申之由、即召文書定之、與實房卿、實家續候、實綱退下之後、先實守見合、額定書定文、欲叙王氏之處、無名簿、仍召兼光問之、此間、且叙藏人、關白叙之、源基行尻付云、藏人、書式部上、兼光歸參、申云、顯綱王、仲資王、相論之間、不被仰下左右之間、不可取進舉狀之由、去年叙位之時、被仰下了、仍不進之者、關白云、然者兼可申此旨也、臨期被尋問之時、申此由、尤懈怠也、但今夜不可叙者、次氏爵等、源氏加封、以爪解之、引禮紙、入第三宮、不引裏紙、藤氏之後、叙氏爵、仍去年如此、今年爲異、此間、實綱卿、持參院宮御申文、四通、申云、自余所、自是、可括其所歟、自餘頗荒涼歟、余取之、置硯上、繼、指笏押宮奏之、小退候、返給置前、引寄宮等置笏、申文在硯上、於御所、被解封、引禮紙了、欲叙上

官之處、有外記申文、無史申文、仍先叙外記〔申文〕懸勾、入第一覽宮了、召兼光問、無史申文之由、先關白申云、一史成舉、爲東宮大屬、而忽以叙爵之條、爲無術事、若可有恩者、欲叙留屬、其事不可叶者、可被越次史者、第二史祐重、當時爲初齋院行事史、仍共不進申文者、關白云、依爲神事奉行之史、不可拘叙爵、可問例者、重問之、申云、依神事奉行、不可叙之由、非令申、只第一辭爵、然者可被召越第二哉否、可在御定事也、而當時、有奉行〔事〕之由、申達許也者、關白云、可叙第一祐重者、則叙之、此事被尋問之間、且叙諸宮給、並史所叙也、余先問關白云、一二之間、其儀、先硯上並置必可被叙歟、關白云、然、仍置其所也、隨叙細卷、懸勾、入第一覽宮、不引次關白、給叙位勘文、并府奏一通、叙人注文等、余取府奏、暫置硯下、取叙人折紙、開置座前、取勘文、自端卷寄叙位之所、置硯上、繼、先叙諸司、隨叙注文、引點、勘文には、可取之者、紫被引點、此中、馬允遠房被引點、而不可叙之由、關白被次叙府奏、申文入次叙外衛、只一人也、示、仍不叙之、今日、無外階之者、次取笏、奏曰、入內一加階了勘文、次以男共、召兼光仰之、其詞如三奏聞、



須未叙訖後下一以前、及終頭可召也、而忘却及今、但是非失儀、持參之間、且叙加階但可有三加文、仍從上之所、置一行叙他人、先從五位下、次正五位下、此間、兼光

持來一加階勘文、申云、入内「ハ」可仕者不候、余進勘文於關白、見了返給、余不奏聞、讀申叙之、先例、次從四位上、今日不叙從四位下也、次正四位下、次正二位、兼雅、以院當年給叙正二位、時忠、以建春門院未給同叙之、是等又希代事也、皆叙訖、先卷勘文、返上關白、次書年號月日、向座下、放與餘一枚也、

卷之、入第三宮、叙位、一兩度覆勘訖、卷之置觀上、繼、移成柄十年勞於次宮、入叙位於一宮、暫之

取笏候、相待功過定訖也、頃之、實房卿持來定文、余取之小披見、獻關白了、見了返給、余加入叙位

宮、叙位右、定文左、置替宮、指笏、押宮奏聞、返給、又置替宮

取出叙位、置座前、橫、先返入成柄十年勞等、次返入他文書等、初爲奏十年勞所入之文也、民部省奏、并續紙等、不入云々、取叙位、副笏

深揖退起、於御倚子前授、入眼上卿成範卿退出、于時丑四刻、子四點儀始也、

今日叙位、臨時加級之者、有其數、然而、注文無尻付、余問申關白、答云、臨時歟、但雖不被付、何事之有哉者、仍不注付之、近代有臨時尻付、又關白、

先年所注賜之尻付之中、有臨時、仍去年注臨時尻付了、而舊簿等、檢見之處、臨時加級之者、無尻付、仍以此狀問關白、左右共不可有難云々、今夜、依關白命、不付之、又叙三省之間、居火櫃衝重、依無藏人頭、無勘盃、光能朝臣參院、未歸參也、定能朝臣、今日、依勞事不出仕云々、

叙位書樣、 叙人總三十九人、 正二位、

藤原朝臣兼雅、院當年御給、

平朝臣時忠、前建春門院去承安二年御給、

正四位下、

藤原朝臣光憲、

平朝臣經正、

從四位上、

藤原朝臣基業、策、

正五位下、

藤原朝臣伊輔、

源朝臣兼忠、中宮去年御給、

高階朝臣經仲、

藤原朝臣光輔、策、

平朝臣業房、

藤原朝臣定輔、

藤原朝臣信清、

藤原朝臣盛定、

藤原朝臣定經、父經房朝臣、造源花王院御塔行事實錄、

從五位上、

藤原朝臣範實、從下一、

丹波朝臣伊基、針博士、

藤原朝臣忠季、簡一、

藤原朝臣公經、上西門院當年御給、

從五位下、

一行置之、爲叙王氏置之、而依無叙人不叙之也、

源朝臣基行、藏人、

藤原朝臣賴經、式部、

三善朝臣盛俊、民部、

源朝臣能宗、氏、

藤原朝臣宗國、氏、

橘朝臣貞光、氏、

清原真人良業、外記、

惟宗朝臣祐重、史、

藤原朝臣雅經、太皇太后宮當年御給、

賀茂朝臣有安、皇太后宮當年御給、

平朝臣知宗、春宮坊當年御給、

藤原朝臣賴房、前女御寮子當年給、

藤原朝臣齊方、諸司、七日被止位記了、

橘朝臣近輔、諸司、

中原朝臣賴基、諸司、七日被止位記了、

藤原朝臣盛實、諸司、

藤原朝臣季光、諸司、

佐伯朝臣友賴、諸司、

中原朝臣景盛、諸司、

源朝臣景賴、左近、

藤原朝臣章助、外衛、

治承三年正月五日

六日、乙〔天〕晴、此日東宮御五十日也、於內裏開院

有此儀、東宮五十日儀、古今未有、近衛院儲貳之時、

有百日事、大略被摸但稱不快例、不被仰彼儀被時例之由云々、昨

日、大進光長、內々告可參入之狀、藏人幼少之間遲

參、且所申也云々、藏人童不見今日早日、頭權大夫光能朝

臣、送消息云、可候御遊座者、申左手有所勞之由了、未刻、又送書狀云、可候主上御共者、申承之狀了、申刻、着束帶、參內、先參內御方、定能朝臣云、左大臣已下、候東宮殿上云々、余即加彼座、端座、內大臣實房、邦綱、實綱、宗通、(已上與座)在殿、余雖須着與座、依便宜令着端座也、左大臣、招頭光能朝臣云、殿下有御着座歟、內々可伺者、光能歸來云、且可被始者、左府召宮司大進光長、參進、左府被仰且可初之由、先一獻也、盛朝臣、次二獻、參議教、次參議家通卿、申上上汁、兼居汁、仍只可、臣被示、盛卿、次下箸、次供、東宮御前物、役途可尋記之、其儀不見及、次取居折櫃物、其儀又不見及、次三獻、別當忠、次左大臣、余、內大臣、右大將、若與座、等起座、參內御方、暫徘徊御清涼殿南廣庇(座)邊、次主上出御、御引直衣、出自御殿北障子、立御西面北第一間、關白被候、候、左大臣已下候、四面實子數、定能朝臣取、盡御座御飯、候、二棟廊南實子、召御草鞋之間、經數刻、大略、經、南殿御後、光能朝臣兼不存歟、尤不便也、其久之後持參之、經、南殿御後、入御自北庇東面簾、此間、又光能朝臣逐電、仍無可取御草、慶、定能授御、次左大臣已下、還着東宮殿上、座下方、於女房了、、若、之、寢殿西南、已、爲主上御所之故也、、此後令奉合餅給歟、良久之後、罷出御前物、陪膳不參、此間及乘燭、次改御裝束、

垂母屋簾、卷庇簾、供平敷御座、次主上出御、次頭光能朝臣召公卿、次左大臣已下、着御前座、寢殿西廣庇、敘、管則座、北上東面、關白、左大臣、余、內大臣、大宮大納言、三條大納言、五條大納言等、着廣庇座、實國卿進出之間、依無座退歸了、不着渡殿座、依爲大納言、存凡卑之由、、次居衡重、次勸盃、又、左大將雖參入、不着座、退出了、、次居御前物、陪膳并御卿、指勞解、取、頭中將定能朝臣、五位、、次供御前物、打敷參進、經、四實子、自御座當間、昇廣庇、參進、數、御座前、役途、參議散三位等、從公卿座末、可用陪膳同道、又仰公卿三人不足、仍光能參上申可、令役四位殿上人、之由、關白與左大臣相議、被仰云、下薦一人、可役四位重可、役、今二人藏人頭可、役、四位殿上人不可、然者、光能朝臣、持參御酒盞、被追歸了、是先例也、供了陪膳、拔笏、經本路退下、次置御遊具、先是、地下召人候、透渡見及、、次御遊所候人等着座、實國、賢資等卿、候廣庇座、兼雅定能朝臣、維盛、次御遊、呂、安名、島、律、伊勢海、廣盛、朝臣等許也、、次御遊、破、席田、律、伊勢海、廣盛、承曆御五十日例也、、細川院親王之時、於禁中、召人拍子、資卿、付歌、維盛、琵琶、實國卿、豫光能朝臣、余、申手所勞之由、而實國卿已祇候、着座之後、密示光能朝臣、光能竊申關白、即被免了、然而持琵琶欲置余前、仍以五位(藏)人、令取下實國前了、等、兼雅和琴、實家笛、實國笙、家通篳篥、定能、長慶子之間給祿、關白祿、光能朝臣取之退歸給、隨身如例、已下四位五位殿上人等取之、左大臣祿、賴實朝臣來受取之、余祿定能朝臣來受取之、內府祿清經朝臣來受取之、隆季已下、乍持起座了、次主上入御、關白參進、褰御簾、經、實子、入、御座北間也、、左大臣已下平伏、次左大臣已下、

廻初所、自西面可出御之山、兼光令申、仍欲參西面之間、猶可出御初所云々、仍行立南殿御後、即出御、定能朝臣取御飯、光能朝臣進御草鞋、如初、經本道還御、余謁女房、即退出了、

今日參入公卿

關白、大臣、左大臣、余、內大臣、大納言、實定、隆季、實房、實綱、實家、宗盛、

中納言、資賢、兼雅、時忠、實綱、參議、教盛、實家、宗盛、

非參議、親信、雅賴、實綱、

今日、主殿寮西壺、并南殿庭立明、

七日、寅〔天〕晴、參女院御方、四度、已刻新叙史、祐重

來申云、依第一史成舉辭、得引超下臈、被叙爵之

條、似有賞還爲愁、枉被止位記、暫欲積奉公、

又有欲經極臈之志、此旨可被仰遣職事之許、

云々、余答云、此事、經沙汰被叙爵了、但兼光之

許、可給一行、即以季長朝臣、令書御教書遣了、

其狀如此、

新叙史祐重有申事、參上、彼日次第、粗仰聞了、然

而、其上有申旨歟、可令尋聞給歟者、御消息

旨如此、恐々謹言、

正月七日

季 長奉、

謹上 左少辨殿、

此事、雖不可賜御教書、上官申事、不可默止之上、見任史之中、頗有便奉公之山、隆職所申也、仍所給一行也、抑須付奉行職事光能也、然而、彼夜不候、遂以兼光被尋沙汰、仍所仰遣也、

今日節會、內辨左大將云々、有加叙事云々、

正五位下藤原範能、被止位記者二人、藤原賴基、同齊方、

八日、卯〔天〕晴、定能朝臣、送消息曰、昨日節會、未

刻、公卿參集、依加叙事遲々、及申終事、〔始〕內辨

左大將、有失禮事、不下位記宮、召舍人、外辨列立

之後、更思出、被奏叙位宣命、外辨數刻列立、未曾有

事云々、今日御齋會始、并諸寺修正始〔云々〕、

九日、戌〔天〕晴陰、源中納言、注進一昨日節會違例

事、又左大將送書、陳內辨失禮事、大略無遁方歟、

只有歎息之狀、余報云、於失禮者、古賢不免事也、

強不可令歎息給上者、昔閑院大將朝光、不開門

召舍人、見此失之由知之、甚不便事也、今太相國、取賭

弓奏之時忘弓、失禮之條、古今如此、將軍何強爲

耻哉、但於失禮者、誠獨焉之失也、未曾有々々々、

何況節會守笏紙給之、不可有如此之失、誠非



直也事歟、

十日、巳〔天〕晴、女房、姫君等、參女院御方、今日、催三位中將御齋會加供、檢先例、納言之後、勅此事歟、見長承元年知信記、猶依不審、可檢申之由、仰進信季之許了、宮畔奠、納言之後所行也、

十一日、庚〔天〕晴、入夜、人傳云、齋宮母儀、前少將公重其名輔局、日來伺、死去云々、但實否可尋聞之、

今夕家宮畔奠也、今日依吉日、始念誦、又每月朔日寫經、元日依無便宜、今日書也、

十二日、辛朝雪降、午後雨下、參女院御方、未刻、東宮少進時兼來云、可進帶刀名簿、未廿三日可有試云云、申承之由了、以待資康、訪賴政卿疾、自舊年煩赤痢病、及獲麟云々、三位中將加供事、信季注申云、先例無所見、仍問〔彼卿〕父信範入道之處、納言以前、不可然之由、所申也、又大臣之後、可有加供之由、見政所抄云々、仍今年、三位中將、不致其沙汰者也、

十三日、壬〔天〕晴、此日、女房、姫君、同車、乙童等、參吉田祇園等、密々之儀、恒例事也、基輔連車、侍等五六人在共、

十四日、癸〔天〕晴、御齋會、並諸寺修正終、院幸法勝寺、博陸空被參法成寺云々、今日有僧事云々、光雅問送十六日參否、答依所勞難參之由了、頭中將示送云、除目十七日云々、今夜欲參修正、而依所勞留了、

十五日、甲〔天〕晴、今日月蝕也、酉刻虧初、子刻復、未修金輪、余並女房所也愛染王等、念誦各僧三具、今日未刻、大夫史隆職來語云、去年秋除目、白川殿〔給〕所、被載大間之者、本所不被申、又職事不知云々、仍下名之時、被改任了云々、此事執事全不過、於官者、任注文任了、主殿於姓名者、就申文、藤經光女御給、書載了、本所請文違失、不可懸執筆之過忘一事歟、難堪々々、

申刻、頭中將定能來語云、七日節會之間事、內辨、着堂上元子之節、度々見笏紙、又取出扇、次第見之後、被召舍人、次第凡非直之事云々、其後、外辨參列之間、始以覺悟、忽下殿、實守卿離列、進軒廊相議、其後奏叙位宣命、次密々召二省、無其儀不直召二省、賜三位記筥了之後、被仰敷尹、此間、外辨數刻列之、資賢卿、稱難堪之由、竊以退出云々、古

來、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>如此之違例<sub>一</sub>云々、實定卿、自成<sub>二</sub>奇異之思<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>卜筮<sub>一</sub>々々、

十六日、乙<sub>レ</sub>今日節會也、余不<sub>レ</sub>參、戌刻、頭權大夫光能朝臣來、余着<sub>二</sub>冠直衣<sub>一</sub>、謁<sub>レ</sub>之、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>除目<sub>一</sub>之由、此次語云、近年、大略閣下一身勤仕、此役頗可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>無心之儀<sub>一</sub>哉之由、有<sub>二</sub>院內御氣色<sub>一</sub>、以此旨<sub>一</sub>申<sub>二</sub>關白<sub>一</sub>之處、全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其儀<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>申、仍恐可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御參之由<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也云々、天氣之趣、雖<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>優恕<sub>一</sub>、還不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>食案內<sub>一</sub>歟、雖<sub>二</sub>何度<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>上臈<sub>一</sub>事也、余此次示云、近代除目、無<sub>二</sub>任人申文<sub>一</sub>之間、忽令<sub>二</sub>書進<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>職事間<sub>一</sub>拜任之由緒、如此之間、空移<sub>二</sub>刻甚無用事也<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>今以後、兼日承存、任人可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>置申文<sub>一</sub>也、又不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>々々<sub>一</sub>功等、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>臨時內給也者<sub>一</sub>、光能語云、今度可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>公卿昇進之由<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>承及<sub>二</sub>也云々<sub>一</sub>、頃之、退出了、今日、仰<sub>二</sub>信季<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>進去年秋除目公卿給<sub>一</sub>、後聞、今日、內辨左大將、無<sub>二</sub>違例<sub>一</sub>云々、

十七日、丙<sub>レ</sub>天晴、此日、除目初日也、余奉<sub>二</sub>仕執筆<sub>一</sub>、早旦、修<sub>二</sub>諷誦於十ヶ寺<sub>一</sub>、八幡、加茂上下、稻荷、春日、大原野、吉田、法成寺、廣隆寺、清水寺、六角堂、又仰<sub>二</sub>祈僧等<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>念誦<sub>一</sub>、執筆役雖<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>度々<sub>一</sub>、猶依<sub>レ</sub>恐<sub>二</sub>不慮之失<sub>一</sub>也、未刻、大外記賴業、持<sub>二</sub>來關官

帳、留<sub>レ</sub>文返<sub>二</sub>給宮<sub>一</sub>之次、納<sub>二</sub>公卿給<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>合停任<sub>一</sub>、合三通并硯、筆、墨、裏樣如<sub>二</sub>賜<sub>一</sub>之、家司光經朝臣、若<sub>二</sub>布衣<sub>一</sub>傳之、初例年<sub>一</sub>、度若<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>、後々不<sub>二</sub>必然<sub>一</sub>者也、下名之時、被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>白川准后給<sub>一</sub>、先日、聞<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>成改<sub>一</sub>之由、而<sub>二</sub>去夜光能朝臣云<sub>一</sub>、總所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止也云云、被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>改中宮御給<sub>一</sub>、而公卿給<sub>一</sub>、除<sub>二</sub>白川殿<sub>一</sub>給<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>中宮御給<sub>一</sub>、不知<sub>二</sub>下名<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>大問<sub>一</sub>、戴<sub>レ</sub>之、任人<sub>一</sub>已了也、其御給<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>之、又下名之時、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>任、至于公卿給<sub>一</sub>者、就<sub>二</sub>大問<sub>一</sub>作載之故實也、此子細、同食<sub>一</sub>賴業<sub>一</sub>了、又仰云、今日除目、可<sub>レ</sub>早速<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>也、乘燭之程、調<sub>二</sub>具文書<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>陣頭<sub>一</sub>者、申云、今日政始也、而上卿于<sub>二</sub>今未定<sub>一</sub>、重被<sub>二</sub>譴責<sub>一</sub>之由所<sub>レ</sub>承也、定以及<sub>二</sub>夜漏<sub>一</sub>歟云々、又申云、外記宿官、所<sub>レ</sub>望<sub>二</sub>申能登介<sub>一</sub>也、賴業息、外記良業可<sub>レ</sub>宿官也、即退出了、乘燭着<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>、時給下<sub>二</sub>參<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>閑院<sub>一</sub>、先是、公卿兩<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、光能朝臣云、政未訖<sub>一</sub>、仍外記未<sub>レ</sub>參云々、又關白未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>參、余參<sub>二</sub>朝餉<sub>一</sub>方、實守卿素祓候、余招寄交<sub>レ</sub>語、相公語云、去白馬節、有<sub>二</sub>大違例<sub>一</sub>、內辨左幕下、思<sub>二</sub>失例節會<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>問門力開門之、即召<sub>二</sub>舍人<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>刀補<sub>一</sub>、外辨參列之間、始以覺悟、忽騷下<sub>二</sub>奏叙位宣命<sub>一</sub>、此間、竊以<sub>二</sub>內暨<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>下位記宮<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>東階邊<sub>一</sub>、密々召<sub>二</sub>儲輔代<sub>一</sub>、內辨歸下、返<sub>二</sub>給杖於內記<sub>一</sub>之次、賜<sub>二</sub>位記宮於輔代<sub>一</sub>、一度置<sub>レ</sub>案了之後、內辨被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>敷尹<sub>一</sub>云云、古來未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>如此之失<sub>一</sub>、將軍太歎息云々、此外、公

事難談、殆移時刻、今日、實守問余云、取宮文之時、最末參議  
但今案之、何不揖哉、其故者、若爲答揖、有此事揖、ハ不可不揖之  
之而巳、有取宮之後、不揖之說、愛知、不知、答揖之有無、只就立  
之作法、有此事揖、歟、以之思之、素存、可有此事揖、之由、人、依、無  
可答揖、之人、ハ不可略之、又素存、不可有此事揖、之由、人、ハ、勿  
論也者、相、良久、光能來告、事具了云々、及亥四點、關白  
公稱、參、今夜及三更、即余着陣、先與座、相次實房、實  
國、成範、實綱、家通等卿着陣、余直、沓、令置、軾  
之後、頭權大夫光能朝臣、就、軾、仰、召、仰事、余先召  
外記、大外記、仰之、其詞如常、次召、辨、候、殿上、僮僕運電之  
間、以、仰之、其詞、子二點、藏人來召、次召、外記、  
六、位、仰云、宮文候、外記唯退去、次外記三人、史生一  
人、取、硯宮文等、列、立、小庭、次余已下、列、弓場殿代、  
主殿官人取、松明、余東面、納言西上北西、參議西面、外記  
前行、如、常、余東面、納言西上北西、參議西面、外記  
列、三、納言後、次余揖、答揖、着、殿上、關白兼以坐、奧、次  
關白被、參、御前、余改、轍、同以參着、次四納言置、宮  
文、着座、實房、實國、成、此後參議不、着、類、蒙、催之  
後、家通卿着座、仍余及實房卿、揭、辭、之、次依、召、關  
白着、簾下圓座、次關白召、余、次余進着、第二圓座、法、作  
如、次依、重召、着、第一圓座、更起着、之、次依、仰小揖、  
置、笏、移、置、一、宮、文、書、於、次、宮、下、所、籍、之、留、關官二  
卷、見、小、坡、以、以、右手、取、上、一、宮、以、左手、押、上、硯宮、以、

一宮置、前、更披、見、關官帳、各端兩、三枚、卷之返入、挿、笏  
押、下、硯已下、取、宮、膝行、廻、宮、裏、簾奏之、小退  
拔、笏、敬屈、而、候、御覽了、挿、張御簾、給、余、忿排、笏  
進、裏、簾、賜、宮、引、廻、復座、置、宮、於、前、拔、笏、如、本  
置、替、宮、引、寄、末之宮、取、四所籍、並、置、一宮、懸、藏  
上、耳、其、次、第、內、授、取、笏、候、次依、仰小揖、置、笏、取、出、大  
進、大、以、西、爲、上、取、笏、候、次依、仰小揖、置、笏、取、出、大  
間、置、硯上、卷、取、禮紙、自、與、卷、之、押、平、メ、テ、入、  
硯宮、硯下、小、板、上、次、逃、右、足、繆、置、座、上、付、是、容易、之、說、也、其、長、二  
尺、五、寸、許、次、居、直、取、笏、候、次依、仰置、笏、摺、墨、度、五、百、染、筆、  
卷、取、內、堅、勞、帳、讀、申、其、作、法、如、常、押、合、候、氣、色、無、指、置、硯  
上、見、寄、物、硯宮、開、大、間、染、筆、任、之、置、筆、讀、申  
大、間、取、勞、帳、上、硯、懸、寄、物、又、取、勞、帳、讀、申、任、之、  
已、上、三、人、任、卷、項、次、第、任、之、也、  
攝津大掾正六位上中原朝臣國貞、內堅頭、  
安房大掾正六位上伴朝臣爲助、內堅散位、  
參河大目正六位上藤井宿禰重國、喚、內、堅、  
次余取、笏奏云、院宮ノ御申文、次問、在座之參議於實  
國卿、實房卿、先、是、退、出、了、申云、藤宰相、左宰相中將、先、可、申、上、席、  
也、賦、次、余召、實家卿、其、詞、左、近、中、將、藤、原、朝、臣、件卿進、余後、余仰云、  
院宮ノ御申文、此間居、火櫃衝重、余任、內堅殘二



人、奏時、朱雀院籍等也、如、本卷之、返入第三宮、自觀宮、第三也、

河內少目正六位上藤井宿禰延近、奏時、

信濃大掾正六位上藤井宿禰國兼、內監、朱雀院籍、

次任、校書殿三人、頭、執事、散位等也、進物所、二人、執事、膳部、大舍人、三人、番長、散位、

安和等、作法皆同、仍委不注之、

河內大掾正六位上秦忌寸友兼、校書殿頭、執事、

山城大掾正六位上內藏朝臣重久、校書殿執事、

出雲少目正六位上中原朝臣國貞、校書殿、散位勞、

大和太掾從七位上秦宿禰吉次、進物所執事、

丹後大目從七位上秦忌寸牛用、進物所膳部、

伊賀大掾正六位上安陪朝臣重久、大舍人番長、

下總掾正六位上橘朝臣延次、大舍人散位勞、

石見少目正六位上藤井宿禰行兼、大舍人安和籍、

任、校書殿之間、勸孟、頭中將定能朝臣、關白撤子、

予暫置筆取孟、目實國卿、擬丁又任之也、任進物

所之間、書任人於大間、未勾三勢帳之間也、實家卿持參院宮御申文、

上西門院、從三位平、朝臣等、自是者、余取之、匱置座前、勾二勞帳、置入

第一宮、取御申文、置硯上、機、拆、笏押、宮、取御申

文、奏聞儀如恒、小退、拔、笏候、返給之時、拆、笏賜之、

後、座置御申文、於前、拔、笏引、寄宮、取御申文、置

座前、橫、任進物所大舍人等之後、取御申文、置硯上、機、件御申文、於御所撤、此間、關白、撰給袖書申文等、上、禮紙、被、卷、籠一通之中、此間、關白、撰給袖書申文等、先、是、余返給院宮御申文也、即被取、下大束、余取之、置前、中文、關白取之、置前、撰申文、見目錄也、余取之、置前、取、當年內給御申文、置硯上、自余注袖書、其作法如常、但公卿當年給之內、

「一通、右大將宗盛申文右狀云當年內給云々未曾有也余申關白關白被斷腸同折下方入同宮申」○此條以下至先任外國四人申文上付驗重出蓋衍文仍宜刪

余當年二合申文不下勘事

在座之大臣申文不下勘之故實也雖然審于自申文下勘之云々諸人之所知如此理又可然但長治二年知是院殿永久四年故殿等例雖在座之大臣至于未給名替等者必下勘之雖自給於當年二儀合者不下勘云々又家祕書同注此旨仍今日遵彼耳、

問在座參議於宗家卿件卿置宮文之後追所參也先是實國卿退出了宗家卿申云左宰相中將藤宰相候此申狀存次余召云參議藤原朝臣不召兼國即家通卿進來余賜文仰可令勘申之由此大仰次任當年內給不說申所載掾二人內舍人一人也當年內給望內舍人之例未見然而依爲內



給不難之<sup>但其旨申關白々々同所被傾奇</sup> 先任外國四人申文上付驗

當年二合相交、仍拔取非二合之當年給申文等、置下

硯與一箇之間、<sup>短冊、不付</sup>以一件短冊、付當年二合申

文、注袖書、內給已下名替等、可勘合否二合、可

勘二合年、<sup>巡給未給等、不見也</sup>書了置座前、橫、

此中、難書有三通、

一通ハ、皇太后宮諸國介名替、其年給ハ、注之無<sup>カ</sup>

御字也、雖非巨難、又不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>答、仍示合關

白、可<sup>レ</sup>相計云々、余折下方、入第四箇了、

<sup>第三箇文書甚多、可<sup>レ</sup>餘符之故也</sup>、且是諸國介、多々被任、頗以見苦、

然而無<sup>レ</sup>瑕瑾之申文不<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>故可<sup>レ</sup>留之、今付小

瑕瑾之、如<sup>レ</sup>此事、隨便宜而已、

一通ハ、大宮御申文、被<sup>レ</sup>舉內舍人、而右狀云者、

其年內官未給云々、諸宮內官御給ハ三分也、內舍

人ハ、以二分代、若臨時御給、被<sup>レ</sup>申任者也、而

以內官未給、望內舍人之條、理不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然、仍

申關白、關白云、所<sup>レ</sup>難之旨可<sup>レ</sup>然云々、仍又折下

方入同箇了、<sup>抑近年之間、諸宮內官御給、被<sup>レ</sup>任內舍人之例、同在之、是奇異事也、習其例、所<sup>レ</sup>被</sup>

<sup>申歟、尤不</sup>

一通ハ、右大將宗盛申文、右狀云、當年內給云々、

未曾有也、余申關白云々、被<sup>レ</sup>斷腸、同折下方、入同箇了、

余當年二合申文、不<sup>レ</sup>下勘事、

在座之大臣申文不<sup>レ</sup>下勘之、故實也、雖<sup>レ</sup>然重<sup>レ</sup>于

自申文、下勘之云々、諸人之所<sup>レ</sup>知如此、理又

可<sup>レ</sup>然、但長治二年、<sup>知是院殿、</sup>永久四年故殿、等例、雖<sup>レ</sup>

在座之大臣、至<sup>レ</sup>于未給名替等者、必下勘之、

雖<sup>レ</sup>自給、於當年二合者、不<sup>レ</sup>下勘云々、又家祕

書、同注此旨、仍今日遊彼儀耳、

問<sup>レ</sup>在座之參議於宗家卿、<sup>件卿、置其文之後、追被參也、先是定國卿退出、</sup>宗家卿

申云、左宰相中將藤宰相候、<sup>此申狀、存三、</sup>余召云、參議

藤原朝臣、<sup>不召、兼國、故實也、</sup>即家通卿進來、余賜<sup>レ</sup>申文、仰<sup>レ</sup>可

令<sup>レ</sup>勘申之由、<sup>此次仰文宣了、</sup>次任當年內給、<sup>不讀申、故實也、</sup>所

載據二人、目二人、內舍人一人也、當年內給、雖<sup>レ</sup>內舍

人之例未<sup>レ</sup>見、然而、依<sup>レ</sup>爲內給、不<sup>レ</sup>難之、<sup>但其旨、申</sup>

同被<sup>レ</sup>先任外國四人申文、上付<sup>レ</sup>驗、<sup>付墨、</sup>入第一

箇、

備前大掾從七位上藤井宿禰春成、當年內給、

伯耆少掾從七位上紀朝臣爲里、當年內給、

備後目從七位上藤井宿禰吉次、當年內給、

周防少目從七位上藤井宿禰國村、當年內給、

次取三院宮御申文、置座前、一々放三裏紙、入第

硯上之儀如常、北間、關白返上御硯蓋申文、退出了、同時、在座公卿等、皆起座了、執筆之外、一人不候

座、余奏事之由、依仰召藏人、人々仰可着座之由、歸來申云、皆退出了、一人不候云々、是未會有事也、未代事、每事如此、次

始自院御給、次第任之、仍申文上付、如內給、此中、

八條院御申文、有二三通、一通被申、一不通不載、外

國、只被申、內舍人許、仍入一宮、此一通、不引、

也、此外、一兩通、同有不載、外國之御申文、不覺悟其所存、皆引、

紙了、一通不引、裏紙、事ハ中竟夜、若爲可入之事之用意也、

伊豫大掾從七位上中原朝臣盛保、院當年御給、

但馬少目從七位上立花宿禰行正、院當年御給、

備前少掾正六位上藤井宿禰盛澤、皇嘉門院當年御給、

土左大掾從七位上中原朝臣永清、八條院當年御給、

讃岐大掾正六位上藤井宿禰行兼、中宮當年御給、

播磨大掾正六位上藤井宿禰守次、東宮坊當年御給、

美作掾正六位上藤井宿禰磯廉、太皇太后宮當年御給、

備後大掾正六位上藤原朝臣貞方、前女御孫子當年給、

成文及三三通之時、取所放置第四宮之裏紙一枚、

四倍三押折天、四度破之、如捻ニテ、取替懷中紙

機、大間數入硯宮、是一說也、常法入第一宮也、成

文數、一筋、依成引展天置一宮也、取成文三通、

置其上、片匙ニ結之如常、隨任指添之也、次任

公卿當年給、余二合、此次任之、不下勘之故也、此

中、關白申文二分代也、仍入第一宮了、各隨任懸

勾、注任國、指成文了、

備中少掾從七位上安倍朝臣國久、兼實當年給二合、

丹後少目從七位上藤井宿禰成重、右衛門督藤原朝臣

長門少目從七位上藤井宿禰國次、權中納言藤原朝臣

安藝少目從七位上酒井宿禰國安、參議藤原朝臣(賴)

次任上召使、申文在硯宮、注任所、指成文、雖申、依

例任目了、

攝津少目從七位上紀朝臣國貞、上召使、

次任諸道院々舉等、各立籤、在第三宮、讀申任之、

懸勾、不注任所、返入本宮了、件舉等不定、夜者也、初夜

任之、其例多存、保安元年、保延三年等是也、

安房少掾正六位上品治宿禰國長、明法道年舉、

備後大掾正六位上橘朝臣清次、北堂年舉、

佐渡少掾正六位上清原真人清久、明法年舉、

豐後大掾從七位上藤井宿禰恒貞、算道年舉、

土佐大掾從七位上藤原朝臣月里、勳學院舉、

肥後大掾正六位上橘朝臣拙次、學館院年舉、

薩摩掾正六位上藤井宿禰鶴方、非學院年輩、

下勘申文等、未持參、及深更、奏事由、卷大間、  
置視上、不、入、加、禮紙、逆、卷、之、于、年、記、封之、切緒餘、引  
墨入第一宮、宮、入、次、次〔取〕出成文、置視上、封之  
如例、引墨同人第一宮、次卷寄物、如本入視宮  
了、成殘申文一、〇一之字九本多無、卷籠一通、依、無、短、加、  
之、故此所亦可省歟、

入樣、

成 太 成  
東 間 殘

次置替宮、挿笏、押下視已下、取宮膝行、置宮引  
廻、奏、簾奏之、乍挿笏、復座之後拔笏、引寄視已  
下、調置宮中物等、取笏、深揖退起、右廻退出、于時  
丑一點、

今日參入卿、

關白、余、

大納言、實房、實國、

中納言、宗家、成範、雅和、實綱、不着座、退出了、

參議、實家、宗通、實守、着座、即退出了、

今日政始、上卿宗家、實綱等卿、參議實宗卿云々、

弁長方、兼光等之外、皆參云々、

十八日、丁、陰晴不定、此日、除目第二日也、亥刻、着東

帶參內、相、勢、風、雨、之、欲參御所方之間、於殿上邊、

頭中將定能朝臣告云、相待御參、可有召之由、所

承也云々、仍余即着陣、直、相次宗家、雅賴等卿、着

之、余以令置軾之官人、召外記、爲、同、文、六位參

入、仰五位可參之由、未參之間、藏人來召、人々云、

弓場漏濕、無便、列立云々、仍余召辨、撤孔雀間、

可開中門之山、欲下知之處、辨不候、然之間、藤

宰相賴定着座、仰件人、令下知官、以、官、人、召、史、於、

不候ハ、余以官人、傳、仰、官、而、宰、相、候、座下、仰、之、參、議、若、

着座、官人申、撤孔雀間之由、次余召外記、六位、仰

云、宮文候、次宮文列立小庭、次余已下列立中門、

余、南、面、宗、家、忠、親、雅、賴、外記立納言後、次余着殿上、經、

北、上、西、面、參、議、賴、定、北、面、次關白、相伴着御前座、次置宮文、着座、人、

門、內、辨、北、小、次關白、相伴着御前座、次置宮文、着座、人、

戶、如、常、次關白、相伴着御前座、次置宮文、着座、人、

經、中、門、內、昇、自、次關白、相伴着御前座、次置宮文、着座、人、

同、廊、南、裏、也、次關白、相伴着御前座、次置宮文、着座、人、

直着第一圓座、引寄裾、正笏候、次押張御簾給、

余置笏、押下宮等、取笏膝行、就簾下、指笏奏

簾、賜宮置三板敷、引廻退復座、置宮拔笏置右、見大間成文結目、各取上見之、置替硯與大間宮、引寄末之宮、正笏候、次依仰取出大間、置硯上、繼、以小刀一切緒、可切結目左際也、而切右際小失也、置小刀、引拔紙機、引拔二倍二引機テ、入硯宮下、撤禮紙、自與卷之、入硯宮、上、逃右足、終置大間於座上、許也、居直取笏候、次依仰摺墨、取文章生內舍人等勞帳、在第二實本第一也、而加置大間宮之後、第二也、自硯第三也、並置大間宮、先讀文章生勞帳、置硯上、見寄物、卷合入硯宮、染筆欲任之間、家通卿、持參去夜下勘之申文等、余取之置座前、先任文章生、外國三人、第一候御書所、仍除之、此旨申關白了、次任內舍人、外國三人、各勞帳懸了、返入本宮了、

加賀少掾正六位上源朝臣兼季、文章生、越後少掾正六位上中原朝臣宗弘、文章生、肥前大掾正六位上惟宗朝臣定弘、文章生、遠江大掾正六位上平朝臣家兼、內舍人、上總大掾正六位上藤原朝臣盛成、內舍人、信濃掾正六位上藤原朝臣康義、內舍人、

此間、關白撰給申文一兩、宿宣申文、院宮名替等也、余名替申文、注袖書、召參議賴定、令下勘之、此大可令參議之由仰了、今夜下勘之文、多京官

未給也、自存明日可勘之由、先問在座之參議於左大將、歟、仍仰此由也、云々、但大將申云、藤原相云々、于時候座之參議、家通、召之如例、賴定也、共無派官之參議也、仍混令兩人、令申歟、次任勘進申文等、卷重申文等、乍重任之、隨任取放一枚入宮、及三通之時、放取在一宮之八條院御申文、裏紙用紙機、其作法如常、取替箇中紙機了、去夜成束、并今夜成文三通、結添之、大間數紙、檢入硯宮了、或入一宮、皆悉令任畢、兩說共存、

駿河權介正六位上橘朝臣賴基、停中宮去年十二月臨時御給惟宗季賢改任、武藏介正六位上平朝臣資遠、停去年十二月臨時內給紀清則改任、石見介正六位上伴朝臣知邦、停上西門院去年十二月臨時御給中原信家改任、日向權介正六位上三善朝臣爲清、停去年十二月臨時內給中原爲實改任、已上、名替道、次弟卷重之、

丹後權介正六位上清科朝臣重友、停去年正月臨時內給豐前介中原俊清改任、名國替只一通也、

次余正笏奏云、兼國轉任宿官了、勘文、無指勅許、次召頭光能朝臣、以男共、仰之、其詞、同奏聞、相待持參之間、無所作、正笏候、余申驚顯官舉事、關白撰給申文等、余先仰左大將云、被候候之人々、皆悉可被召着者、大將以藏人被召三人々、此間經程、仍余且目大將給申文等了、無申史文、關白撰給院宮京官未給、之來、



公卿子息二合等、余取之置前、待勘文、無所作之  
間、皆注袖書了、此中、左大臣申文、不載年、余問  
申關白云、不載年之申文、若可書、可勘給否  
之由、歟如何、關白云、只可勘二合年と可書也者、  
去年注可勘給、仍其定注了、又未給二合申文には、注  
否之由、失歟、可勘給否之由、是例也、此後猶不持參勘文等、仍  
以藏人、度々催之、此間、賴定卿、持來名替申文、余  
取之任了、白川殿名替也、

肥後權介正六位上安倍朝臣成種、從三位平朝臣盛子  
去年十二月臨時給平

定俊  
改任、

良久之後、光能朝臣持參勘文、兼國加封、此事先例未  
見、關白同被、或奇、轉  
任宿官、登重、不加禮紙、又史相論轉任事、并  
式部辭申宿官事等、注折紙、副進之也、余取之、皆獻  
關白、々々云、解封放禮紙、見兼國勘文、如本  
加禮紙之後、見轉任宿官勘文、各返給、余取之入  
兩勘文、於大間宮、放兼國禮紙、細卷入第四宮、  
自現第  
四宮也、披勘文、讀中置硯上、見合寄物與所載勘  
文之例國、且相計、且隨關白命任之、隨任懸勾、  
此事大失也、須引點也、以前兩度如此、而今偏以忘却、至愚之甚  
也、他家或用此說云々、然而、全不受師說事也、今所爲奇怪、  
皆任了、卷勘文、獻關白、折紙同返、此中、良通、兼國、所  
載例、近江備後等權守也、而共以無闕、仍任伊豫權

守、知足院殿、令任此國給、逐  
彼例也、申合關白所任也、

伯神祇因幡權守從五位上仲資王、兼任近邊

少納言讚岐權守從五位下藤原朝臣仲家、兼例國

侍從備前權介從五位下藤原朝臣公基、兼例國

頭書讚岐權介從四位下賀茂朝臣在宣、兼例國

士阿波權介從五位上賀茂朝臣宣平、兼例國

助敦加賀介正五位下清原真人信弘、兼例國

木工越前介正五位下平朝臣信國、兼例國

頭大炊備後權介正五位下中原朝臣師尚、兼例國

近衛中將播磨權守從四位下藤原朝臣師家、兼例國

同上伊豫權守從三位藤原朝臣良通、兼例國不闕、相  
計任之、

少將美作介從四位下源朝臣資時、兼任近邊

能登大掾正六位上藤原朝臣敦季、文章得業生(口)  
例國、

加賀少掾正六位上菅原朝臣在高、文章得業生(口)  
例國、

次引放宿官勘文、讀申任之、隨任懸勾如恒、式

部、依辭申不任之、依關白命也、

藏人遠江權守從五位下源朝臣基行、

外記能登介從五位下清原真人良業、

肥後介從五位下惟宗朝臣祐重、

民部武藏權守從五位下三善朝臣盛俊、

今夜、可任之者皆任了、余尋申關白云、可然之難々外任等不候歟如何、關白撰給余臨時申外國申文、余取之、任相摸介了、尻付注、名字了、

相摸權介正六位上藤原朝臣季長、兼實臨時中、

此後、顯官舉未訖、仍且卷大間、卷サニ委見大間、欲卷終之間、左大將持來顯官舉、相定相公書舉、余取之見舉、獻關白、々々見了、即被進御所、返給、被加置大束了、余卷了大間、加禮紙、不開、逆卷、加如常、封之、引墨、入大間宮、次出成文封之、以今夜成文、替藏去夜束、如常、引墨加入大間宮、轉任勘文、加置成殘申文、次卷寄物、如本入硯宮了、次置替硯與大間宮、指笏押下硯已下、取大間宮、氣色關白、進寄奏之、引廻如、復座之後、拔笏引寄宮等、調納物、取笏揖退下、于時子三刻、今日入夜雨甚下、今日任文章(生)之間、置火櫃衝重、任內舍人之間、勸盃、定能朝臣、不取、關白擬余、々擬左大將、往還、今日、參入公卿、

關白、余、大納言、實定、實房、實國、中納言、宗家、忠親、雅賴、實綱、參議、家通、賴定、  
〔今日、入夜甚雨、〕

十九日、戌〔天〕晴、除目入眼也、亥刻參內、參朝餉、及子刻、關白被參、言談之次、被語去七日節會之間事、內辨大失之外、又小失太多、愚眼之所及、每事不審云々、賜下名之間、昇階之後指笏、又不懸膝於階、取下名於元子、〔下〕三省之時、先以披見、此等、皆未見之作法也云々、頃之、光能朝臣歸參、其後、關白、於御前被書任人、此間、余着陣、置外、軾、實國、成範、實綱、實家等卿、同以着之、余先召大外記賴業、問文書具否、申候之由、余目之、外記稱唯退下、數刻之後、于時丑三點、鐘報已了、藏人家實來召、次余召外記、六位外記參候小庭、余仰曰、宮文候へ、外記稱唯退下、宮文暫遲々、仰實家令催之、以官人、次外記三人、史生一人、取宮文、列立小庭、次余已下、列立弓場殿代、如例、外記立納言之後了、次余着殿上、關白豫在、關白、余、相共參御前座、次實國已下、置宮文、奥座、着座、夾名見、次關白、着圓座、次余着圓座、置第二、次賜大間宮、余置笏押下硯已下、取笏參進、於簾下、指笏賜宮、引廻如、退復座、置宮拔笏、見大間成文結目、返入之後、引寄硯於前、以大間宮、夾置硯與一宮之間、引寄次之宮、取笏候、次依仰

徵唯、下效之、已置、下效之、勿取、大間、置視上、繼、以、小刀、切、其緒、自結目右際、自、右方、引拔、二倍、引折、頗、縹、入、視宮、下、撤、禮紙、自、與卷、之、入、視宮、上、次、逃、右足、繆、置、大間於座上、以、去夜、折目、次、取、笏、候、次、依、仰、小揖、置、笏、摺、墨、染、筆、二卷、返、置、筆、臺、取、在、第二覽宮、本一、之、課試及第勘文、讀、申、置、視上、此、關、白、給、任、人、法、文、披、大間、染、筆、任、之、讀、申、大間、懸、句、於、勘文、不、注、返、入、本宮、點、寄物、勾、申文、短冊、入、入、大間宮、仰、件、勘文、所、載、明經道准得業生、問者生、竿道准得業生、并、三人也、而、所、載、注文、只、問者生許也、仍、問、申、關、白、之、處、被、示、可、任、一人、之、由、仍、不、任、殘、二人、

主殿少允正六位上中原朝臣爲宗、問者生、

次、讀、申、文章生散位勘文、在、第二、置、視上、任、之、儀、如、課試、但、所、載、注文、第三、者也、以、此、旨、申、關、白、之、處、就、申、文、之、目錄、所、書、出、也、以、第一、者、可、任、者、仍、隨、此、命、所、被、下、之、申、文、依、不、被、任、乍、付、短冊、返、上、關、白、須、入、外、部、宮、也、然、而、依、近、例、如、此、

大炊少允正六位上大江朝臣國通、文章生散位勞、

此間、賴定卿、持、參、去、夜、所、下、勘、之、京官未給、并、公卿子息二合申文等、余、取、之、件、申、文、卷、一、禮、紙、仍、撤、之、入、第四宮、此、事、先、例、未、見、事、也、

暫、入、成、文、宮、關、白、重、撰、賜、申、文、廿、餘、通、余、分、置、視、上、下、座、前、等、當時、令、任、之、申、文、ナ、視、上、ハ、置、也、自、餘、置、先、任、內、舍、人、等、大、略、無、申、文、仍、問、申、關、白、之、處、只、可、任、大、略、臨時、內、給、也、云々、仍、申、關、白、之、處、任、了、此、中、臨時、內、給、申、文、一、通、有、之、懸、勾、入、成、文、宮、了、又、有、白、川、准、后、二、分、代、當、年、申、文、同、懸、勾、入、成、文、宮、畢、

內舍人正六位上源朝臣肥口、臨時內給、

內舍人正六位上平朝臣業綱、臨時內給、

內舍人正六位上大江朝臣資忠、臨時內給、

內舍人正六位上藤原朝臣貞綱、臨時內給、

內舍人正六位上平朝臣家綱、從三位平朝臣盛子、當年給二分代、

內舍人正六位上源朝臣行長、臨時內給、

內舍人正六位上大中朝臣忠康、臨時內給、

成、文、三、通、積、之、時、取、放、置、第、四、宮、之、禮、紙、所、加、勘、之、禮、紙、也、若、無、可、然、之、禮、紙、如、例、疊、之、破、取、之、二、度、依、不、可、封、大、間、不、儲、其、新、紙、給、之、故、也、卷、殘、紙、入、本、宮、如、縹、シ、テ、取、替、懷、中、紙、機、結、合、兩、夜、并、今、夜、成、文、三、通、如、常、次、任、連、奏、諸、司、奏、諸、道、舉、并、臨時、內、給、等、京官之中、諸、司、二、分、等、不、載、注、文、然、而、任、申、文、可、任、之、由、有、關、白、命、仍、任、之、是、大、略、諸、司、奏、也、雖、五、位、已、上、公、卿、等、

一列之官、一度任之、是早速終事之故實也、此中有平宰相二合中文、仍注袖書、召實家卿、令下勘之、不待持參任之、行轉任之間、持參件申文、取之懸勾、指成文了、件京官等、令任次第、不從、仍任官大書之、

侍從從五位上平朝臣光盛、

侍從從五位上源朝臣雅行、

皇太后宮少尉從五位下大江朝臣家兼、

縫殿少允正六位上藤原朝臣盛賢、皇嘉門院去長承三年御給、

少允正六位上中原朝臣盛房、從三位平朝臣盛子去年給、

陰陽少屬正六位上大中臣朝臣宣盛、

陰陽師正六位上中原朝臣康光、連奏、

陰陽師正六位上中原朝臣清康、連奏、中原季光不任替、

大學少允正六位上藤原朝臣康重、勸學院別當、

少允正六位上藤原朝臣盛時、臨時內給、

玄蕃權助正六位上平朝臣長繁、奏議平朝臣二合請作息子、(作一本作任)

少允正六位上藤原朝臣親長、臨時內給、

諸陵頭從五位上加茂朝臣在忠、

民部卿從二位藤原朝臣資長、

少丞正六位上藤原朝臣行季、

兵部少丞正六位上大江朝臣資政、

木工少允正六位上平朝臣俊重、臨時內給、

掃部少允正六位上惟宗朝臣康憲、明法學、

彈正少疏從七位上大原宿禰友長、奏奏、

西市正從五位下中原朝臣政泰、

春宮太夫正二位藤原朝臣兼雅、兼、

權大夫從三位平朝臣知盛、

修理少進正六位上大中臣朝臣久長、〔奏舉、〕

勘解由主典正六位上中原朝臣朝業、本使奏中原盛倫辭退替、

次諸武官等、一列任之、公卿五位已上、混合任之、如初、此中、多以無中文、注文雖被載功之由、子細

不見之輩一兩有之、然而、依爲遷官之者、無三尻付、此次、總大問、奧入日了、十九之二字、薄墨書入之、如常、

左近衛權中將正四位下平朝臣重衡、

權少將正五位下藤原朝臣基宗、

權少將正五位下藤原朝臣兼宗、

右近衛將監正六位上多宿禰延久、

左衛門佐正五位下平朝臣業房、兼、

少尉正六位上藤原朝臣爲村、

少尉正六位上源朝臣康實、

右衛門督正三位藤原朝臣成範、兼、



右兵衛督正三位平朝臣賴盛、兼、

佐正五位下藤原朝臣範能、

少尉正六位上藤原朝臣俊宣、

少尉正六位上藤原朝臣通遠、

少尉正六位上惟宗朝臣兼定、(初齋院御政功)

右兵衛督從三位平朝臣知盛、

少尉正六位上宮道朝臣清定、

左馬頭從五位上平朝臣行盛、

少允正六位上藤原朝臣重佐、熊野遷宮功、

少允正六位上源朝臣邦範、豐受宮遷宮功、

右馬少允正六位上藤原朝臣助久、院臨時御給、

次相觸關白、取<sub>レ</sub>笏奏云、瀧口所衆ノ勞帳、勅許、即

以<sub>二</sub>男共<sub>一</sub>召<sub>二</sub>光能朝臣<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、其詞、同于奏聞之儀、此間、撰<sub>二</sub>見顯

官申文、一切無<sub>レ</sub>之、雖<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>申關白<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>只可<sub>レ</sub>任之

由、此間、光能朝臣持<sub>二</sub>來<sub>一</sub>所勞帳、依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>禮紙、

返<sub>二</sub>給之<sub>一</sub>、余取<sub>二</sub>出轉任勘文<sub>一</sub>、在<sub>二</sub>成文<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>任之間、光能勞

帳、加<sub>二</sub>禮紙<sub>一</sub>持來、仍返<sub>二</sub>入勘文<sub>一</sub>、先取<sub>二</sub>勞帳<sub>一</sub>、放<sub>二</sub>禮紙、

入<sub>二</sub>第四宮<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>現之<sub>一</sub>、覽<sub>二</sub>關白<sub>一</sub>、々々見了返給、余取<sub>レ</sub>之、先

讀<sub>二</sub>申所衆勞帳<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>視上<sub>一</sub>任<sub>レ</sub>之、勞帳申文、共懸<sub>レ</sub>勾、

指<sub>二</sub>成文<sub>一</sub>、次瀧口如<sub>レ</sub>此、各申文、注<sub>二</sub>任所<sub>一</sub>、勞帳ハ不<sub>レ</sub>然也、

右兵衛少尉正六位上大江朝臣基兼、藏人所、

申文、載<sub>二</sub>成功之由<sub>一</sub>、然而、尻付不<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>其由<sub>一</sub>、縱雖<sub>レ</sub>非

功、所衆直任<sub>二</sub>兵衛尉<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>理無<sub>レ</sub>妨、仍申<sub>二</sub>合關白<sub>一</sub>、

不<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>之、瀧口所衆尻付、加<sub>二</sub>載成功之由<sub>一</sub>事、先跡

未<sub>レ</sub>見之故也、

左衛門少尉正六位上宮道朝臣式國、

申文、同載<sub>二</sub>功之由<sub>一</sub>、然而、尻付不<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>其由<sub>一</sub>、只載<sub>二</sub>瀧

口勞之由<sub>一</sub>、而情案<sub>レ</sub>之、瀧口直任<sub>二</sub>初負尉事<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>先

例<sub>一</sub>之上、理不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、須<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>成功之子細<sub>一</sub>歟、此條、

又先例未<sub>レ</sub>見、凡於<sub>二</sub>顯官<sub>一</sub>者、無<sub>二</sub>尻付<sub>一</sub>、是定例也、然

而、於<sub>二</sub>藏人、并督請、及得業生、給官<sub>一</sub>者、付<sub>レ</sub>之、准<sub>二</sub>

彼例<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>付瀧口之由<sub>一</sub>、後代之人、瀧口直任<sub>二</sub>初負

尉<sub>一</sub>之條、可<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>奇歟<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>此等子細<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>關白<sub>一</sub>、々々

數刻被<sub>二</sub>傾案<sub>一</sub>、遂被<sub>レ</sub>示云、只不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>尻付<sub>一</sub>者、仍

瀧口之上、塗<sub>レ</sub>墨了、保元之比有<sub>二</sub>例云々<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>檢見、

追可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>勘之<sub>一</sub>、抑武官等、一列雖<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>瀧口所

衆<sub>一</sub>者、其次不<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>之、召<sub>二</sub>勞帳<sub>一</sub>之後、所<sub>レ</sub>任也、

次取<sub>二</sub>出轉任勘文<sub>一</sub>、披<sub>二</sub>置視上<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>讀申、每<sub>二</sub>一官<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>轉

任<sub>一</sub>之後、新任如<sub>レ</sub>例、先民部、次史、次外記也、抑式

部轉任之間、聊有<sub>二</sub>不審事<sub>一</sub>、允亟一人、仍關<sub>レ</sub>三也、大間

所載、大頭關二、少頭關一、尤爲少而任勘文一行、轉任、大頭關一、少頭關二也、而新任之者二人、大頭、少頭、各一人任之、可置少頭關一歟、將其任少頭、可置大頭關一歟、兩ヶ之間、有疑、取關白處分之處、彼命云、新任之者、無左右、任大頭、雖不及苦、猶不穩也、其任少頭、可置大頭之關、余申云、應德三年春、雖無新任之者、被行轉任、以之思之、猶可置少頭之關歟者、關白猶被示云、先例、縱雖存、於理不可然、猶置大頭之關、今度被任之時、又可行轉任也、凡諸官之習、不漏員數之時、其關可在上之故也云々、仍隨命任之、勘文懸勾、指成文了、申文一切不見、雖尋申關白、只可任之由、被示也、

少外記正六位上大江朝臣惟景、  
權少外記正六位上中原朝臣貞親、  
右大史正六位上中原朝臣孝周、  
左少史正六位上小槻宿禰國宗、  
右少史正六位上惟宗朝正宣仲、  
式部大頭、

大頭正六位上藤原朝臣宣親、

少頭正六位上源朝臣宗綱、  
少頭正六位上下部宿禰仲道、

關白、初所撰賜之申文之中、諸國權守之申文、四五通有之、而依不入注文、取集返上關白、近代、權守之故也、被命云、只隨關可計任云々、仍任之、須京官以前任也、而不被裁折紙之間、存不可任之由、于今延引也、隨任、申文懸勾、注任所指成文、又雖無申文、關白以口宣有被仰之輩、即任了、

伊勢權守從五位下惟宗朝臣重能、  
下總權守從五位下丹波朝臣基明、  
越前權守從五位下藤原朝臣光章、  
周防權守從五位下藤原朝臣資家、  
筑後權守從五位下藤原朝臣保房、  
次任中納言、參議等畢、

權中納言正三位藤原朝臣實家、  
參議正四位下藤原朝臣定能、兼、  
次余觸關白、仰成範卿云、被參入人々、皆悉可被着座者、成範召藏人仰之、此間、頗經程、余依無所作、徒取笏祇候、關白被命云、且可調成文、暇之隙々調成文、故實也、仍被示此由也、余取出成文置前、橫封成文之時、觀上

權置之、或又前橫置之、今國三便、大卷に成たるをは、拔取  
 テ、卷三堅之、調三首結三固之、片三起返三入成文宮三了、此  
 後、宗家卿着座、了云々、實國早出、余取三笏、仰三宗家卿三云、受領  
 之舉、乍座仰、諸卿、宗家、成範、實家、起座了、次余取出  
 大間禮紙、在視寫下、方小板下、披之、自與外さまに卷返テ置前、  
 取出寄物、披三置硯上、先問三申關白三云、被レ任之受領  
 只一人也、草書、只可レ書被一ヶ國三歟、將就三寄物關  
 國、皆可レ書歟、如何、永久四年、關國之中、不レ被レ任之  
 國、只一ヶ國、所謂大和也、而不レ被レ書草書、以レ彼准  
 之者、可レ書令レ任之國三歟、但彼者、只依レ爲一ヶ  
 國、不レ被レ書歟、今度、被レ任之國只一人也、草書之面、  
 頗冷然歟、又案三事理、先就三寄物書國號、其後依レ仰  
 書三入名、然者、關國皆悉可レ書歟、此事未レ受三口傳、隨  
 命欲三進上者、關白被レ答云、永久之例、慥不レ覺、案三  
 事理、可レ如レ示關國之號、皆可レ書也者、就此命、先  
 書國號了、返三入寄物於硯宮、次草書、入三任人名、  
 只一次披大間三移付了、不待舉任、之故實也、申文懸勾、指三成  
 文了、草書指懷中了、

對馬守從五位下藤原朝臣親光、

此後、待舉之間良久、仍見三合任人注文於大間三了、

徒取三笏祇候、雖須三卷大間、案三道理、不待三受領  
 舉、卷大間之條、非穩便、仍不レ卷之、次四卿復座、  
 各起座、進居余座後進舉、余乍持三笏於左手、以  
 右手取之、置三硯上、縱隨持參、如此皆取集之後、  
 余取三關白氣色之處、被レ示云、執筆可レ被レ奏歟、將又  
 可三傳奏三歟云々、余申云、共有レ例、又所用之說也、左  
 右可レ隨命、但進退無術、欲レ用三略儀、然者、令三傳  
 奏給、可レ宜歟、傳關白、願爲、略儀之故也、關白被レ諾、仍取三集舉  
 冊、獻三關白三了、即被進、次余卷大間、此間、又委入成文  
 宮、不加禮紙并封、次取三笏、召三男共、藏人參上、余仰云、五位  
 藏人誰候哉、申云、兼光候、余仰可レ召之山、此大令、即  
 兼光參上、余仰云、續紙、兼光退下、小時、盛續紙二卷  
 於柳宮、持三來之、余取三之置前、不取、取三笏候、依レ仰  
 卷返一卷、今度、一卷入第四宮、了、向座下、卷返如常、置前、取三笏候、依レ仰  
 更摺三墨、先是、依墨、染筆、逆上叙之、叙人太多、略可、  
 續紙、二卷共一枝半也、若及二枝者、書年號月日了、一返  
 見三合注文三畢、

正二位、

藤原朝臣兼房、

藤原朝臣資長、

從三位、

藤原朝臣雅長、

從四位下、

藤原朝臣資隆、

藤原朝臣高佐、

源朝臣行賴、

橘朝臣以政、治國、

正五位下、

平朝臣信兼、別功賞、

從五位上、

大江朝臣通資、治國、

中原朝臣有安、治國、

治承三年正月十九日

向座下、放<sub>二</sub>弁與餘半枚<sub>一</sub>了、卷之、入<sub>二</sub>第<sub>一</sub>四宮<sub>一</sub>畢、卷<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>大間宮<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>出成文<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>第三宮下方<sub>一</sub>、橫<sub>二</sub>置<sub>一</sub>替硯與<sub>二</sub>大間宮<sub>一</sub>、指<sub>二</sub>笏押<sub>一</sub>硯已下、就<sub>二</sub>簾下<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>板敷<sub>一</sub>、引<sub>二</sub>廻宮<sub>一</sub>進<sub>レ</sub>之、小退拔<sub>レ</sub>笏候、返給之時、指<sub>レ</sub>笏進寄、賜<sub>レ</sub>之復座、拔<sub>レ</sub>笏置、替<sub>二</sub>取成文<sub>一</sub>、硯上縱置<sub>レ</sub>之、其結に結<sub>二</sub>堅之<sub>一</sub>、次以<sub>二</sub>小刀<sub>一</sub>、先切<sub>二</sub>去夜緒<sub>一</sub>、白<sub>二</sub>結目左際<sub>一</sub>切<sub>レ</sub>之、二倍に引折<sub>レ</sub>テ、頗撚<sub>レ</sub>テ、入<sub>二</sub>硯宮<sub>一</sub>、其實<sub>二</sub>中<sub>一</sub>、次切<sub>二</sub>初日緒<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>初、次切<sub>二</sub>今

夜緒餘、引<sub>レ</sub>墨入<sub>二</sub>大間宮<sub>一</sub>、調<sub>二</sub>置宮中納物等<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>替宮<sub>一</sub>、指<sub>レ</sub>笏取<sub>二</sub>大間宮<sub>一</sub>、深揖起座、右廻退下、於<sub>二</sub>御椅子前<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>清書上卿宗家卿<sub>一</sub>、歸<sub>二</sub>出自<sub>一</sub>上戸、小板敷、人々、退出了、左衛門陣代之後、思<sub>二</sub>出檢非違使宣旨事<sub>一</sub>、別當左衛門忠使、宣旨左尉久光、忽以<sub>二</sub>隨身召<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>兼光<sub>一</sub>、乍<sub>二</sub>立下<sub>一</sub>知了、于<sub>レ</sub>時雖<sub>二</sub>天曙<sub>一</sub>、人面慥不<sub>レ</sub>見之程也、人以謂<sub>二</sub>早速<sub>一</sub>、事訖、余歸<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>亭之後、日未<sub>レ</sub>出也、今日、知盛卿任<sub>二</sub>兩宮<sub>一</sub>、春宮權太夫、右兵衛督、共不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>兼字<sub>一</sub>、是家說也、或與宣付<sub>レ</sub>之云々、又資長卿、任<sub>二</sub>民部卿<sub>一</sub>、書<sub>二</sub>本位<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>に叙<sub>二</sub>正二位<sub>一</sub>也、件卿、辭<sub>二</sub>中納言<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>民部卿<sub>一</sub>、叙<sub>二</sub>正二位<sub>一</sub>也、又右少史惟宗宣仲出納云々、余不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>申關白<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>出納之由<sub>一</sub>、仍直任<sub>二</sub>上官<sub>一</sub>了、而歸家之後、初聞<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>出納之由、此事太遺恨也、爲<sub>二</sub>藏人所出納<sub>一</sub>之者、任<sub>二</sub>上官<sub>一</sub>之時、先必外國、諸國據有<sub>二</sub>尻付<sub>一</sub>、藏人所出納者、次任<sub>二</sub>上官<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>尻付<sub>一</sub>、此間、有<sub>二</sub>秘事口傳等<sub>一</sub>、而不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>出納之由<sub>一</sub>、直任了、當時之遺恨、後代之違例也、職事未練之所<sub>レ</sub>致也、縱元雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、出納任<sub>二</sub>上官<sub>一</sub>者、書<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、職事可<sub>レ</sub>持來<sub>二</sub>也、又關白、何不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>哉、此次第雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>執筆之過失<sub>一</sub>、後代之人、定成<sub>レ</sub>疑歟、今日、任<sub>二</sub>課試<sub>一</sub>之間、居<sub>二</sub>火櫃衡重<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>內舍人等<sub>一</sub>之間、勸盃、頭中將定



能朝、關白擬余、余擬實國卿、  
今日、參入公卿、

關白、余、大納言、實國、中納言、宗家、忠親、成範、  
實綱、參議、實家、賴定、

今夜、被仰藏人頭、右中將源通親、定能朝臣、任參議兼  
中將、又不次之恩、過分之慶也、業房任左衛門佐、人  
以驚耳目、非言語之所及、左衛門督時忠、三度任  
別當、物狂之至也、非人臣之所行、

廿日、己〔天〕晴、卯刻歸家、已刻、外記惟景、持來大間  
成文、硯、筆、墨等、余暫令候外記、見成文等了後、  
令退出了、是先々、成文有無四度解事等之故也、未  
刻、新宰相中將定能來、問拜賀之條々、來廿三日云々  
〔廿一日辰〕天晴、申刻、定能卿又來、示合拜賀條々  
事等、

廿二日、巳陰晴不定、此日、院尊勝陀羅尼也、余不出  
仕、三位中將、始進陀羅尼、三百反、置折敷、以美紙裝  
上之時、以隨身爲使、蒲佛布施等是也、以下家司爲使、進殿  
進之時、以下家司爲使、先例也、去比、院主典代所  
來催也、此日、又於東宮殿上、禁中、被定春宮御、白日  
事云々、申刻、宗家卿來、

廿三日、壬〔天〕晴、今日、中宮母儀二品參內、蒙豐車宣  
下了云々、

殿上人十六人前駢、此外、諸太夫四位已下十人、白川  
司職事、此日、新宰相中將定能朝臣拜賀、帶螺鈿劔、有  
文帶、余送御堂餘流、用螺鈿有文、閑院一族、帶詩繪  
無文云々、非此兩流之人所爲、雖問人々、不分明  
之由、豫問送、余檢先例、大藏卿爲房、天永二年二  
月廿三日、任參議、元藏人頭、同廿四日拜賀、申請殿  
下、有文帶之由、見爲隆記、因之、今日所用有文螺  
鈿也、猶々可檢見事歟、車申請關白、牛所望院  
云々、前駢四人、式部大夫二人、諸  
司助二人云々、右兵衛權佐盛定連、車  
云々、亥刻來余第、職事信光、着衣  
冠中次之、呼入內出居、謁之、  
語云、先參院、次參內、次中宮、次東宮、次關白、次八條  
院、次皇嘉門院、次此殿、次可向母尼上之許云々、  
又不具一員云々、此事、兼問余、答云、理須被召  
具也、但一人一族、多相具之、又雖不然、英華之  
輩、所召具歟、且可被尋傍輩者、忠親卿不相具  
云々、仍逐被跡歟、實家、實守、兼雅等、具一員云  
云、此夜、行幸法住寺殿、來廿六日、可有還御云  
云、定能、不供奉行幸云々、今日、長光入道來、  
〔廿四日未〕天晴、申刻、參女院御方、主稅頭定長參上、  
依召也、問醫道事等、

廿五日、甲〔天〕晴、今日、乙童、密々參春日社、  
廿六日、乙〔天〕晴、今夕、行幸還御云々、小童歸來、  
廿七日、丙〔天〕晴、申刻、大夫史隆職來云、今月、可被  
行吉書奏之由、爲權辨親宗朝臣奉行、所被仰  
下也、問日次之處、明日廿八日、吉日之由、令擇申、  
先觸申左府之處、被申所勞之由、今日參陣、以藏  
人通業、奏事之由之處、參上可申事由、旨、所  
被仰下也者、余答云、早可參勤、但先々、如此之  
時、職事奉勅來催者例也、大夫史來、傳綸言事、未  
聞事也、奉行職事、誰人哉者、隆職申云、未承其人、  
只素爲親宗朝臣奉行、被仰下了云々、余云、至于  
此條者、作奏之大臣、不能申是非、令驚遠先  
規事許也、抑大辨、直辨等、早々相催、可令申散  
狀、兼又如法、申刻可參陣者、隆職退出了、酉刻、  
參女院御方、亥刻歸來、  
廿八日、丁〔天〕晴、今日、官奏事、猶非無不審〔事〕、  
仍奉書於關白之許、使者返來云、被向宇縣了云  
云、爲奇不少、又問送藏人辨兼光之許、基輔奉申刻、  
隆職申云、大辨、左大直辨、權辨等、所領狀也云々、酉  
刻、欲着束帶、先是、關白歸洛云々、而猶暫待兼光返事之間、

即持來、報狀云、今日、官奏事、藏人方、一切不承、及  
只今、親宗朝臣參上、申延引之由時、始承及者也云  
云、次第尤不審、以件返事、問遣隆職之許了、此間、  
史仲宗來云、今日、官奏延引了者、問延引之由緒、申  
不知給之由、傳仰隆職可來之由了、入夜、隆職  
申送云、自今曉、何所勞更發、扶得者、明日可參啓  
云々、凡今度官奏、次第違亂、親宗未練之所致也、  
廿九日、戊〔天〕晴、午刻參院、使泰經朝臣入見參歸  
來、傳仰云、可見參之處、今日、始熊野精進之間、  
忿々無他云々、次參內、參御前、申官奏之間次第、  
仰云其間事通親沙汰也、而不觸大臣仰史歟云々、又  
關白、被向宇治之間、去夜所延引也云々、頭中將  
通親朝臣來觸云、來二月十二日、可有祈年殺奉幣、只  
今欲參啓之間也云々、答可參勤之狀、但神事有  
煩、頗臨期、重可被相催者、通親云、日時定當日  
歟、如何、余云、不可然、兼日可定申也者、余欲退  
出之間、女房示云、未奉見東宮、尤不敵、今日可  
奉拜云々、余參彼御方、女房若州、奉抱之、余參  
簾內、奉見之、頃之、歸參內御方、申刻退出了、

玉葉卷二十九終

玉葉 卷三十

自治承三年二月  
至同 年六月

〔治承三年春下二三月、歲次己亥、〕

二月〔大〕

一日、己丑〔天〕晴、未刻、大夫史隆職來、召問去廿八日  
官奏延引、并次第違亂之間事、申狀、大略、親宗朝臣  
未練之所致歟、此間、新宰相中將定能來談、申刻、藏  
人大進基親、送書於季長云、太神宮司公俊、〔依〕三重  
喪、可被改補、其弟俊宗爲功一、依天仁例、天仁三年有  
如此事、而以兄十三  
ヶ月以後、被補替云々、可被補俊宗歟、將又可被  
補功輩歟、可令計申者、報奏云、以季長朝臣、令  
書之、但余等  
消息之且依功程之多少、且撰器量之堪否、可有沙  
汰歟、持疑難決者、可被行御卜歟、凡我朝之大  
事、莫過於神宮、若被補小量之輩、令行大祀之  
事者、神事違例、連綿而不可絕、神慮又難測歟、所  
詮、能可被撰器量也〔者〕、此事、去年有其尋、今  
仰又同前歟如何、  
二日、庚寅自朝天陰、已刻以後雨下、未刻、頭權太夫光

能朝臣、送書於行賴之許曰、日吉社解狀三通、進覽  
之、可令計申者、

解狀云、今一度狀無殊事、  
仍不注載之、

日吉社司等解、申請 天裁事、

請特蒙 天裁被改造大宮神殿已下舍屋等、  
狀、

檜皮葺三間三面神殿一字、

同一間四面拜殿一字、

同中門二字、

同廻廊六十一間、

同十間三面彼岸所一字、

同十間二面雜舍一字、

同三間三面聖眞子神殿一字、

同一間面竈殿一字、

右謹檢案內、去月四日、衆徒合戰之刻、神殿舍屋、穢  
氣出來、仍掃除其所、可行清祓之由、去月廿日、被

下<sub>レ</sub>宣旨<sub>二</sub>了、其所之土、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>不淨、已可<sub>二</sub>掘棄<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>下國司<sub>一</sub>了、然者、神殿舍屋、何不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>改造<sub>一</sub>哉、敬神之禮、清淨爲<sub>レ</sub>先之故也、望請<sub>二</sub>天裁、任<sub>二</sub>解狀旨、被<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>作件神殿舍屋等<sub>一</sub>者、將<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>神事之異<sub>一</sub>他矣、今勒在<sub>レ</sub>狀、謹解、

治承二年十一月廿一日

小比叡神

大社

重解狀云、

日吉社司等解申重請二 天裁一事、

請下特蒙<sub>二</sub>天裁、任<sub>二</sub>先例、被<sub>占</sub>新<sub>三</sub>造大宮神殿、并拜殿、廻廊樓門等<sub>二</sub>狀、

右社司等、謹檢二案內、神殿有事之時、被二新造一者例也、近則、永曆元年、洪水出來、流入二宮、十禪師神

殿雖無穢氣、依恐神慮、仰國司被新造了、至于廻廊樓門等者、不可及新造、可加修理之由、雖被宣下、衆徒頻依訴申、大納言邦綱卿奉別勅所令新造也、自餘之例、不遑觀縷、何況、於今度事者、希代之亂逆也、若不被新造者、神威定及凌遲、欺社家大事、何以如之哉、望請天裁、任先例、被新造神殿已下舍屋等者、將存先例之有限、彌仰神事無止矣、今勒在狀謹解、

治承二年十二月十五日 祝、

神主、

彌、宜、成、仲、

余報奏狀如此、使三人誓之、

日吉社解狀三通、加一見、返上之、如社司申狀者、尤可被改造歟、但如此事、先可被問例於官外記歟、至于此事、縱無其例、准據例尤可被勘歟、隨其趣、可令量申事也、以此旨、且可被洩奏之狀如件、

二月

右大臣在判、

今日、請<sub>二</sub>實嚴閑梨<sub>一</sub>、受<sub>二</sub>祕密之眞言等<sub>一</sub>、又智詮〔閑梨〕



來、〔護身〕、

三日、辛卯〔天〕陰、未刻以後天晴、今日、大原野祭也、陪

膳光經朝臣、行事國行、陰陽師晴光、

頭中將通親朝臣、送書於基輔朝臣許、曰、來十二日

祈年穀奉幣、依神宮穢氣、延引了云々、今日、○旦一大

納言實定卿、〔明回〕祈年祭、依太神宮穢氣、可延引

之由、仰大外記頼業真人〔云々〕、

四日、壬辰〔天〕晴、朝小雪、明日、三位中將着陣之由、仰

遣大外記、大夫史等之許、奉行家司光經朝臣、信季所勞、光盛產穢、

參議散三位着陣、官外記雖無所役、一家之習、豫所

觸仰也、酉刻、參女院御方、此間、依太神宮穢氣、祈

年祭可延引了云々、

五日、癸巳〔天〕晴、此日、三位中將着陣也、吉時午申云

云、仍午刻、可參陣之由、出立之處、陰陽師遲參、欲

過刻限、仍相待申刻、此間、主稅助安倍時晴朝臣參

上、奉行家司光經朝臣、時晴、光經、共東帶、仰陰陽師、令擇申

日時、今月五日癸巳、時中、先覽三位中將、次覽余、入宮、未刻、

中將着東帶、唐草時給叙、紫綾平緒、無文玉帶等也、申刻參內、先是依召、檢

非違使基廣參上、仰可制止路次狼藉之由、是天仁

例也、其路、經高倉七條東洞院三條坊門等、於陣口

下車、入自左衛門陣代、經床子座前、於立部車邊下

從、右方前近殿上人等、于時、大夫史隆職、并六位外記史、

兩三、居床子前、中將、向隆職揖而過、於陣車馬道

立留、召官人、二音、官人參上、仰云、時間、官人退下、

更歸參申之、申時、即着奥座、納言座東一間、中央程也、起居揖如常、

不經程起座、經本路、向隆職、揖如初、退出、不參御前、直退出也、

毛車、車副一人遣之、路不、上、宿、故實也、

前驅三人、上野守藤原高、約豐前守、同能業、左馬權助源國行、

寛治、天仁、共前驅三人也、

扈從殿上人二人、中務權大輔經家朝臣、治部大輔季信、

隨身四人、褐衣、白袴袴垂之、衛府長、着布衣一候之、

雜色十人許、

今日、自女院御方曹司出立、如例、余不向其所以

〔又〕中將又不參余前、不參女院御前、着陣之日、

不敬人、故實也、又僧服者、不參中將方、抑二月五

日、知足院殿叙三位、御着陣之日也、今度、自然相當

彼日、尤以吉祥也、今日、上皇、參籠石清水、給云々、

又內裏有帶刀御覽云々、此日、可被行吉書奏、而

延引云々、今夕、方違如例、乙童、今夜始熊野精進、

余女房、共付御幣、御明經等、仍今日精進也、

六日、甲午〔天〕晴、未刻、參女院御方、入夜歸來、今日、

有太神宮大宮司御卜、上卿實定

七日、乙未〔天〕晴、春日奉幣也、陪膳行賴朝臣、行事保

行、幣取木工助橘經時、陰陽師憲成、今日、新宰相中將

定能來、示祈年殺奉幣之間事、來廿四日、七日之間、

可被行云々、廿二社之外、可被奉加伊都岐嶋明

神云々、又關白室來、十日可被參東宮云々、是

自去年、有風聞事也、此日有政云々、上卿成範卿、

八日、丙申〔天〕晴、春日祭也、近衛使新少將兼宗、春日使

亮重衡朝臣、行事右少辨光雅云々、此日、有平野行幸

定、上卿左大將、參議實宗卿、其後、上卿辨以下、向陰

陽寮、始行幸事云々、今日、法勝寺常行堂修二月

云々、

九日、丁酉〔天〕晴、入夜雨下、今日、猶神事也、但入夜

解齋、是例也、彼岸之間、可念誦、而明日、日次不宜、

仍今夜始所作、此日釋奠也、於官廳被行之、上卿

實定卿云々、

十日、戊戌〔午上、天〕陰小雨、未刻以後、天晴、終日念誦

無他事、今日遠忌也、送佛經布施取等於光明院、如

例年、此夜、關白室參東宮、殿上人、諸大夫、多以前

駟、出車二兩、檜柳毛委可尋記、後開〔十日〕亥刻、關白

室參東宮、其儀、庇車之後、出衣出車二兩、檜柳毛侍各

二人、着束帶副之、前駟殿上人八人、清道朝臣、中將

兼宗、同、忠長、少將侍從、兼經、同、盛定、兵衛佐、兼光、左少辨、光長、左衛門權助、此中、光長、爲

後騎云々、諸大夫十八人、四位四人扈從公卿三人、

春宮大夫兼雅、中宮權大兼雅卿、勤、車寄、檢非違使隨身

等、不供奉云々、先於右衛門陣外、昇放車、向門

立之、立、次藏人家實仰、次引、入車、下家司六人、若

上藏二人、資泰、參入之後、不經幾程退出、有牽出

物、持付之、兼雅卿取之、執政室、爲乳母之例、古今未

有、隨時宜被起始例、歟、誠是可謂順時務、賢

哉々々、竊以可彈指、

十一日、己亥〔天〕晴、今曉、乙童、十一歲熊野詣進發、先達智

詮阿闍梨、男共女房、各兩三相具之、民部權少輔宗

雅、同所相具也、最密之儀、伴宗雅參詣之體也、小

童參詣之由、外人不知之、抑依先達智詮申狀、產穢

七ヶ日以後、不忌之、尤可謂正法、定叶神慮歟、

服假、雜穢之事、不可乖律令格式、而近代、就兒女

士之說、多有違法事、還神慮有恐事歟、今先達之申

狀、賢哉々々、今日、密々相具女房等、巡禮取勝院、中將同相從、晚頭歸來、戌刻、藏人并兼光、送書於季長曰、來十四日可參仕官奏者、至于十六日、有相勞事、若可及其後者、早可參、必十四日可被行者、難參仕之由令申了、依有彼岸之所作也、以私之要事、不可近公事、然而、是爲佛事之上、官奏不可必指日之故也、亥刻、東宮非藏人源兼時職事所來儀也、來云、來廿二日、可有御百日事、可參〔仕〕者、申承之由了、此日、實家卿着陣右中辨經房、勅申云、又被定春日社假殿遷宮日時、上卿成範卿云、

十二日、庚〔天〕晴、〔申〕刻、施樂院使賴基來、給樂種等、仰益多散可合進之由了、此日、春日御社假殿遷宮云々、辨兼光、今朝下向云々、

十三日、辛〔天〕晴、入夜陰、本尊前、焚薰陸香、祈請所求午時焚之、古人云、無不果云々、園轉神祭實家卿經房朝臣等行之云々、

十四日、壬〔終〕日雨下、臨晚殊甚、午刻、參女院御堂、見廻新造廊、女院日來御于此御堂也、今日、前山城守信家配流、伊豆國、上卿實國卿云々、

〔十五日〕癸卯、天晴、終日念誦無他事、主稅頭定長來、示合湯治之間事、時忠着陣云々、

十六日、甲〔天〕晴、彼岸之終也、念誦數遍滿了、〔申〕刻、施樂院使賴基來、令針齒下、又談醫道事等、此日、時忠卿初着陣云々、

十七日、乙〔天〕晴、〔未〕刻、參女院御方、今日、轉輪院修二月、上卿實國卿云々、

十八日、丙〔天〕晴、此日、女院御堂修二月也、戌刻、着

直衣、參御堂、先是、僧已下參集、即事始、先神分導師、次初夜導師、行道兩度、亂聲等如恒、次大導師教化如恒、此間、〔右衛門督〕成範卿參入、束帶、事訖、大導師祿、次給衆僧布施、成範卿同取之、次余退出、

十九日、丁〔天〕晴、依遠忌、參女院御堂、於此御堂、修佛事、年來之例也、導師覺智僧正、忠親卿候座、余同出居、禮時了、忠親已下取布施、次被始恒例御舍利講、論義如常、邦綱卿參會、忠親退出了、事了、余退出、自今夜、被始御懺法、是又例事也、入夜小雨、此日、被勘行幸奉幣、并祈年祭等日時、上卿左大將云々、又被定造立宇佐宮炊殿、立春日社廻廊、日



時、上卿同前云々、今日、平野行幸點地云々、

廿日、戊申陰晴不定、方違如恒、輟輔入道、南直處也、今日、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈

年祭延引之由大祓云々、權右中辨親宗着<sub>二</sub>行之<sub>一</sub>、參議史等不參云々、

廿一日、酉己天晴、已刻、藏人辨光雄、送<sub>二</sub>書於基輔許<sub>一</sub>

云、明日、春宮御百日、渡<sub>二</sub>御宮御方<sub>一</sub>之時、可<sub>二</sub>祇候<sub>一</sub>、又

御遊座、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>所作<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也云々、日來、

風病不快、夜間得<sub>レ</sub>減者、可<sub>レ</sub>參之由令<sub>レ</sub>申了、又御遊所

作、廢忘年久、頗難<sub>レ</sub>叶之由、同令<sub>レ</sub>申了、宰相中將來、

問<sub>二</sub>直物之事<sub>一</sub>、今日、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈年祭<sub>一</sub>云々、依<sub>二</sub>神宮穢<sub>一</sub>

所<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>也、

廿二日、戌戊天晴、此日、春宮御百日也、下官欲<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>

而聊有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>慎事<sub>一</sub>、仍不<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、觸所勞之由於光雅之許

了、又付<sub>二</sub>邦綱卿<sub>一</sub>、內々申入了、今日儀、追可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>、今

日、雖<sub>二</sub>祈年祭後齋<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>、奏<sub>二</sub>絲竹<sub>一</sub>云々、

廿三日、亥辛天晴、此日、參<sub>二</sub>詣日野<sub>一</sub>、是每年例事也、資

長卿參會、暫以言談、申刻歸宅、酉刻、大外記賴業來、

召<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、語曰、昨日、祈年祭後齋也、而依<sub>二</sub>春

宮御百日<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>御遊<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憚哉否之由<sub>一</sub>、大進光長、內

々相尋、申<sub>二</sub>不可<sub>レ</sub>憚之由<sub>一</sub>了、至<sub>二</sub>于舞樂<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憚<sub>一</sub>、

堂上御遊、先例不<sub>レ</sub>憚云々、又云、去十六日節會、被<sub>レ</sub>宣<sub>二</sub>下內教坊別當<sub>一</sub>、左中將泰通朝臣、內辨左大將、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>、

先被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>知官事<sub>一</sub>也、然而、依<sub>二</sub>上卿仰<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>成<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>之

處、職事光雅、暫不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>之由、令<sub>二</sub>相觸<sub>一</sub>、仍不<sub>二</sub>

下知<sub>一</sub>、其後、未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>官之間<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>云

云、

廿四日、壬子天晴、入<sub>レ</sub>夜雨下、源納言、注<sub>二</sub>送<sub>一</sub>昨日東

宮御百日之間事、傳井內大臣已下、濟々焉、拍子藤大

納言、初度、笙笙家通、笛泰通朝臣、蒙<sub>二</sub>兼日之催<sub>一</sub>、而維盛

朝臣、臨<sub>二</sub>期所望<sub>一</sub>、仍忽改定云々、打出紅薄樣、餅百合、

大夫調進云々、依<sub>二</sub>座狹<sub>一</sub>、早出了、委事不<sub>二</sub>見及<sub>一</sub>云々、

定能卿注送云、關白不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>座殿上<sub>一</sub>、初獻重衡朝臣、

左中將、本瓶子經仲、大進、二獻知盛卿、權大瓶子宗賴、中

宮亮也、三獻實家卿、瓶子基親云々、御前座、關白已下着

座、勸盃頭中將通親朝臣、瓶子五位御前物陪膳實國卿、

役人、參議家通、實守、賴定、長方、通親取<sub>二</sub>御酒盞<sub>一</sub>、未<sub>二</sub>進出<sub>一</sub>

之間、陪從起座了、御遊拍子實國卿、琵琶少將隆房朝

臣、爭兼雅卿、和琴實家卿、笛維盛朝臣、笙家通

卿、篳篥定能卿、付歌雅賢朝臣、其曲、如<sub>二</sub>承曆御

百日<sub>一</sub>、呂、此殿、席田、武德樂急、律、走井、萬歲



樂、廻忽云々、件樂、頗不吉云々、然而、依承層例、所被用云々、

余案、之宗家不取三拍子、如何々々、法皇御熊野詣以前、可召三宗家之由、被三仰切了、而實國以三近臣推望云々、件人、催馬樂、資賢弟子也、而其師云、甚未練也云々、又御五十日之時併、被三宛三諸國、是即保延御百日、大夫、權大夫、各五十合調進、依三爲三不吉例、可被三違三其例之故云々、而至三御百日之時、如此、首尾相違歟、素被三忌三保延例之條、強不可然事也、今日、經家朝臣來語云、被三補三齋院勅別當了、甚以難堪云々、

廿五日、癸丑〔天〕晴、臨三晚風吹、巳刻、參三御堂、聽三聞御懺法、申刻退下、酉刻、邦綱卿告送云、主上有三御頭風之氣、但不三及三殊事云々、戌刻參内、謁三女房、語云、自三昨日、聊令三痛三御頭、無三御溫氣、自三今朝、御減云々、小時退出了、

廿六日、寅天晴、此日、女院御懺法結願也、午終、着三直衣三參三御堂、即被三始行、二位中將兼房、三位中將良通、已上皆直衣、候三座、事了、兩中將取三布施、次余參内、依三仰書三詩歌等、謁三女房、語云、今日殊御減云々、及三晚退出、今日、祈年穀奉幣定、上卿實國卿、參議定能朝

臣書三定文、奉行辨經房奏三日時定文等、又今日、右大將被三辭三所職、以三左中將重衡朝臣爲三使、上三辭狀云々、

廿八日、丙辰〔天〕晴、巳刻參三女院御所、未刻歸來、自三今日、始三湯治、自三來月四日、可三始三潮湯、今日先浴三水湯也、但今日依三爲三吉日、如三形浴三始潮了、入三夜、俊成入道來、余謁三之、終夜談三和歌事、曉更入道歸了、此日、乙重至三自三熊野、上下向、一事無三違亂云々、廿九日、丁巳〔天〕晴、入三夜陰、此日、祈年穀奉幣也、上卿藤大納言實國〔卿〕、伊勢一社、有辭別、依三内外兩宮、八幡使、極三祈年祭已下神事延引事也、賀茂、長方、松尾、基家、平野、定能、當日奏三宣命草、闕卜畢云々、

卅日、戊午雨下、俊成入道之許送三消息、自三筆、爲三謝三一日之遺味也、其次和歌抄物、爲三券契三可三傳受三之由、示送、報狀云、

ふりにけるこのしたみつのあさければ  
かきつたふへきことのはそなき

返歌、

ちきりをはあさからすこそむすひしか  
このしたみつのなによとむらん

三月(大)

一日、己(天)晴、今日、法皇至、自熊野、平野行幸御祈、九社奉幣、上卿實定卿、於神祇官發遣使云々、  
二日、庚(天晴)、主稅頭定長來、問湯治之間事、又問云、益多散與、難合食、禁歟如何、申云不然、此外問條々事、

今夜、光物飛行洛中云々、

三日、辛(天)晴、辰刻、關白被<sub>レ</sub>向宇縣、依一切經會也、今年殊被調威儀云々、先室家車、牛、殿上人

前駟十餘人、院內地下君達等侍從忠季、忠親卿二男、關白室

爲後騎、次關白車、諸大夫前駟六人、次出車三兩、半

物、雜仕等車、如恒、次三位中將隆忠云々、

四日、壬(天)晴、自今日浴潮湯、

五日、癸雨下、入夜止、今夕、依御方違、行幸院御

所、七條殿雖凶會、不可有憚之由、有定云々、依

凶會、不被勘日時、是康和四年正月七日、行幸鳥

羽南殿、依凶會、不進勘文之例也、宗家卿仰召

仰云々、留守上卿忠親卿、辨兼光云々、

七日、乙晴、今夕、還御閑院、無反閑、

八日、丙(雨下)、實定卿、仰檢非違使基廣、久忠、可

行平野行幸之事由於外記云々、

九日、丁以大中臣祐成、可爲大神宮大司之由、實

定卿仰左少辨兼光、先日被<sub>レ</sub>行御卜之處、依丙

合也云々、件御卜、入重服之者、被<sub>レ</sub>行之條、奇異也

云々、

十一日、巳晴、今夜、被<sub>レ</sub>行小除目、上卿忠親、參議長

方云々、又侍從藤原忠經、聽禁色、被<sub>レ</sub>仰外記云々、

又忠親卿、聽勅授帶劔之由、頭中將仰實綱卿云々、

內大臣重獻辭表、敦綱作之、使右少將資盛云々、

十二日、庚晴、潮湯、至今日九ヶ日也、此日、密々

女房參籠日野、以母堂尼上參籠爲名、昨日除目

之次、關白中將師家、以皇嘉門院御給、叙正四位下、

二階、今日、平野行幸御祈御讀經定云々、八幡、賀茂、松尾、

云々、今日、平野行幸御祈御讀經定云々、平野、稻荷、春日、

大原野、住吉、日吉、北野、東大寺、興福、其後有巡檢事、辨兼

光、史、檢非(違使)、史生、官掌、左右京職事、參向社

頭、上卿、宰相、外記等不參、依寬治以往例也云々、

此日、平野行幸大祓也、於建禮門行之、外記(史)請

十三日、辛雨下、自今日浴五木湯、每日有政云々、

大神宮司官府請印也、次有止雨奉幣云々、此日、行

幸御馬御覽云々、

十五日、癸酉朝間霧塞、已刻以後晴、此日、平野行幸也、

上卿左大將實定、當日被<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>宣命草清書等<sub>一</sub>、又有<sub>二</sub>召

仰<sub>一</sub>云々、法皇、於<sub>二</sub>一條町口御棧敷<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>見物<sub>一</sub>云々、

關白追被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>社頭<sub>一</sub>〔云々〕、還御之後、被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>賞、

頭中將宣下、

從五位上藤能賴、右少辨光雅、春日行幸行事賞讃、

源兼親、行事辨兼光讃、

從五位下中原孝周、行事史、

次召<sub>二</sub>少外記惟景、仰<sub>一</sub>上卿、實定、參議、實宗、大外記、

賴業等、追可<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>之由云々、

十六日、戊寅自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>浴<sub>二</sub>水湯<sub>一</sub>、

〔十八日、丙子多武峯物忌也、〕

十九日、丁丑〔天〕晴、湯治今已了、女房今日退<sub>二</sub>出自<sub>一</sub>日

野、

廿日、戊寅自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、法皇參<sub>二</sub>籠八幡宮<sub>一</sub>、十々日御共人淨

衣、密々儀云々、

廿四日、壬午〔天〕晴、此日、石清水臨時祭也、使左少將隆

房朝臣、公卿上首隆季卿、不着<sub>二</sub>庭中座<sub>一</sub>、實房卿已下

勸盃、有<sub>二</sub>五獻<sub>一</sub>云々、使馬放之間、以<sub>二</sub>待馬渡<sub>一</sub>大略云

云、今日春日遷宮、今日廿六日甲申、時亥二點、明日兼光可<sub>二</sub>參向<sub>一</sub>云

云、神殿多打<sub>二</sub>加修金<sub>一</sub>、物仍被<sub>二</sub>改替<sub>一</sub>也、此日條事定、攝津、對馬等云々

廿六日、甲申晴、此日、伊都伎嶋奉幣使發遣、先有<sub>二</sub>定云

云、又上卿實房卿、仰<sub>二</sub>右少辨光雅<sub>一</sub>云、安藝國伊都伎

嶋社、二月、十一月、上申日、宜<sub>二</sub>奉<sub>二</sub>內藏寮幣<sub>一</sub>者云

云、奏<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>之後、召<sub>二</sub>使左近中將重衡朝臣<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>軾給

之、去年叙慮思食事、相叶之故、有<sub>二</sub>此報賽<sub>一</sub>云々、又

被<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>奉金銀幣<sub>一</sub>、又二季祭、可<sub>レ</sub>預<sub>二</sub>內藏寮幣<sub>一</sub>之由、被

載<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>、今日酉刻、大炊御門河原西邊有<sub>二</sub>火<sub>一</sub>、巽風

忽吹、齋院卜定所燒亡、中御門南、京極西、宮內權大輔重賴宅、即渡<sub>二</sub>御左少

將有房朝臣宅、冷泉北、室町西、修<sub>二</sub>祓立<sub>一</sub>櫛云々、

廿七日、乙酉雨下、今日、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>軒廊御卜<sub>一</sub>云々、齋院卜

定所燒亡、并平野社枯木折落事也云々、齋院卜定所燒

亡事、官外記勘<sub>二</sub>申准據例<sub>一</sub>、又卜定所雖<sub>二</sub>燒亡<sub>一</sub>、火焰未

付之間、不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>失火穢之由<sub>一</sub>、明法博士勘申云々、

廿九日、丁亥晴、今日列見也、先着<sub>二</sub>官廳聽<sub>一</sub>政、先有<sub>二</sub>申

文、次列見、忠親、實綱、家通、長方等參勤云々、無<sub>二</sub>宴

穩座等、齋院卜定所燒亡之故也、康和四年八月十一日

定考、依<sub>二</sub>伊勢離宮院屬候舍燒亡例<sub>一</sub>也、

此日、左大臣、左大將、實定、大納言、實房、實國、中納言、

實家、等、參詣安藝國伊都伎嶋社、中納言資賢、追參向云々、

卅日、戊子〔天〕晴、今日、春季御讀經定、上卿隆季卿、實網、長方、爲檢校、光雅爲行事云々、

〔治承三年夏〕

四月〔小〕

一日、丑雨下、今晚、女院密々參詣天王寺、給、依今日々次不宜、去夜御出門、渡御御召人車、御共殿上人八人、皆着淨衣、侍六人、三位中將同以參入、着水

干裝束、不具隨身等、依殊恩也、出車二兩、今夜宿御邦綱卿寺江山庄云々、即彼卿候御供云云、平座上卿忠親、參議家通、實守云々、三獻之後奏見參、又被行內官云々、

二日、寅〔天〕晴、午刻、法性寺座主道快被來、千日入堂了、去廿四日下京、今日始被來也、條々有被示合事等、大略世間事無益、有隱居之思由也、余加制止了、

此日、新三位賴政卿拜賀、依申請遣毛車、戌刻來、職事國行申次之、余依浴湯餘氣不快、不謁之、

前騎六人、子息并一族等云々、今日女院、自寺江參御天王寺、有舍利供養、并萬燈會〔事等〕云々、

三日、卯天晴、持來擬階奏、加朝臣返給、今日、女院自天王寺還御寺江云々、

今日有奉幣賀茂、先被定日時使等、上卿源〔中〕納言、雅賴、參議、實宗、是被謝齋院卜定所燒亡事也、次被卜定齋院入御諸司、仰官、先令兼友以下着、小庭座、令卜申之、左近府兵、申又被定御視日時、日、并御前次第使、依參議不參也、辨又覽御視點地日時、今日未刻、中納言宗家、參議定能等、昇進之後、初若聽着廳聽政、依史人數不足、無申文、史三人參入、無座頭之故也有出立云々、

今夕、齋院入給神殿云々、上卿參齋院、被定出車事云々、

四日、辰〔天〕晴、戌刻、女院御入洛、路次、并天王寺等之間事、仰光經朝臣、令注進之、大納言經營、過差莫大云々、余遣書札、示感悅之狀、院藏人來、催灌佛布施、并參入事、

五日、巳〔天〕晴、八條院藏人來、催灌佛事、

六日、午〔天〕晴、院主典代來、催三位中將灌佛布施事、



平野議祭也、參方權宗、朝親宗、辨社頭、參社頭、行社頭、殿屋上假、有白骨、何物即、取却社、家進可、狀不、被之下、之後、被、之、松尾、右少辨、雅參向、之云々

七日、乙〔天〕晴、新宰相中將定能來、余依湯治餘氣不快、隔障子謁之、示合乙童元服之間事、相公云、不可有童殿上者、只童時、先令參院內如何、余案此事、雖不可必然、近代之事、偏可依時議、先入見參之條、何事之有哉、仍內々見日次之處、來十七日吉日也、仍內々致其沙汰、

此日擬階奏云々、上卿成範卿云々、

八日、丙〔天〕晴、物忌也、依當神事、公家無灌佛、院已下出家之所々、被行之、三位中將、依催獻布施

於院并女院、爲使、其銘名二字許也、小童出仕事、

余重案之、不可必然、理須殿上童也、而依在略

儀、無其儀、中間參內、人以不爲可歟、仍思止了、又

以此趣、示相公、之稱善者也、

九日、丁〔天〕晴、物忌也、此日梅宮祭也、依相當吉

日、始奉幣帛、其儀如常、陪膳季長朝臣、奉行國行、

陰陽師有親、抑、去々年蒙是定之宣旨、須即可奉

幣也、而彼年冬祭服假、去年兩度祭當衰日、今年依

當吉日、所奉幣也、是則京極〔大〕殿、治曆元年、

蒙是定宣旨、同二年不被奉幣、同三年四月祭、依

當吉日、始奉幣之吉例也、宇治左大臣、是定以前、依

被奉幣當社、是定之後、祭以前、擇吉曜、有奉幣云々、〔梅宮祭也、〕

今夕、賀茂齋院、自里第一冷泉北、室町西、左少將有房朝臣宅、入御左近

府、上卿雅賴卿、辨朝方朝臣等參入、行事宰相中將定

能爲勅使、即供奉、是例也、

前驅、

左衛門權佐光長、

右衛門權佐親雅、

左兵衛佐範能、

右兵衛佐基範、

左衛門尉平宗貞、

右衛門尉大江範信、

左兵衛尉藤原爲成、

右兵衛尉宮道清定、

已上御前、

左馬權助源國行、

右馬允平季久、

已上次第使、

左右京職、陰陽寮等供奉、

〔十日、戊天晴、神心不快、昨日奉幣之間、觸風之故也、〕

十一日、己〔天〕晴、先內々、問元服日、次於在憲朝臣、

注申云、十七日乙巳者、余重問云、廿三日辛亥如何、依

爲辛日、不注申歟、吉例太多、強不可苦歟者、申

云、雖有例、猶本文忌尤可被忌避歟者、余案之、

辛亥日、村上御元服、此外、辛日元服、其例非一、強不可忌避歟、然而、於有他吉日者、非此限、召少納言信季、且仰元服之間事、件人、所勞灸治、旁不能出仕云々、今夜、隱夜所參入云々、

十二日、庚子(天)晴、今日、問元服日次事於人々、其趣、十七日乙巳上吉也、加之、支干當二條殿御例、仍無左右可用彼日、而祭以前元服可有憚之由、見長元經賴記通房元服之度也、彼度、宇治殿被仰合人々、小野右府被申強不可憚之由、他人之申狀、或可憚、或不可憚云々、遂以延引、七月被行之、其後檢四月元服之例大段、故殿、二位中將、當時殿中將、(師家)、皆以祭以後也、通房例、於家不用也、仍延引于他月之條、不可然、但祭以前憚之條、雖經賴記之外無所見、而度々四月例、多祭以後也、仍頗非無所憚、廿三日辛亥、雖祭以後、辛日可憚之由見文書、但先例如此、

天慶三年二月(二)十五日辛亥、村上、十五、親王時、

應和三年二月廿八日辛亥、冷泉院、十四、東宮之時、

長元四年十月十七日辛卯、大宮右大臣、十三、俊家、

又戊日、并不入吉日之例多存之、如此事、雖有本文之忌、用來事強不憚歟者、此兩日之間、可用何

哉、抑於祭以前、憚條、不可營他事之故云々、而今度之儀、不及經營、最密儀也、仍強不可有憚歟者、民部卿、源中納言、兵部卿入道等也、皆云、祭以前更不可憚、他大事佛事等有例之上、近代、此儀不聞支干相叶吉例、旁可用十七日者、仍隨此答等、

十三日、辛巳(天)晴、此日、召左京權大夫光盛、仰元服事可奉行之由、依保元々年八月、當時殿元服例、可行之、彼度、依爲最密儀也、又元服之夜、可叙從上事、申關白、爲彼獅子可被申之由也、先例有如此之故也、有可申沙汰之報、禁色、昇殿事、元服夜不出仕之人、多後日被行之、然而、當夜又不難者、可被計沙汰之由、同申之、報云、可被許者、雖當夜不可有難、早申事由、可示左右云々、

十四日、壬寅(天)晴、元服夜、從上事、并昇殿之次、可被

許禁色事、付定能(朝臣)申院、御氣色不惡、可申內之由有仰云々、

(十五日、癸卯長光入道來、及晚雨下、)

十六日、甲辰終日雨下、召豐前守成光朝臣、正四位下、前文章博士也、



不書右狀年號署所等、今以如此、不知是非、又署所不書姓、頗不審也、

戊刻、中御門中納言、宗家、宰相中將、定能等來、今夜依行幸、各着束帶、共在尋常上達部座、余依疾不出逢、加冠之時、爲指出所相勞也、宰相中將入來內出居、談禁色之間事、院御氣色趣也、先是、役人等皆參、而依內裏御使遲々、及亥刻、依無心、余示兩卿云、

已以光臨、御志可足、行幸期至、早可被參者、宗家卿參內了、定能朝臣、人數不候、尙申可祇候之由、

然而、早可參內可被還來之由示之、仍同以參內了、而問、自內賜御冠御直衣等、藏人通業持來之件、兼男祇候余許者也、兼光相具之、依密儀無出逢御使之儀、又不賜小舍人祿、只常祇候男共、取之置曹司了、是皆久安例也、定能卿即來云、於路頭逢御冠使、仍所馳還也、於行幸者、雖一身不參、不可事闕者、即賜

御冠於冠師、令放巾子、次余出座、衣冠、指其色指其

以東出居南庇三ヶ間、爲其所、垂母屋簾、不立、依密儀也、雖不可必垂、母屋簾、女院密々波御、有御覽之仰、仍所垂也、東第一間、不敷

疊、依可爲加冠之所也、同第二間、副母屋簾、○慶下恐、高麗燈一枚、爲余座、同第三間、副端長

押、敷同疊二枚、引重敷之、東頭、及第二間中央、爲公卿座、座上下舉燈、此外無御裝束之儀、以西出居西庇二ヶ間、爲曹司、副北立厨子一脚、可立二階厨子二脚、今依略儀、立例厨子一脚也、其間、敷大文高麗三枚、南間敷高麗疊二枚、上庇簾、垂母屋簾、不立屏風、曹司與客亭、其所太遠、然而、依家便宜也、

次召光盛、仰人々可寄座之由、即三位中將良通、直宰相中將定能等、等着座、次諸大夫三人、撤座上燈臺、定成、保、次諸大夫二人、置圓座於東第一間、長經、賴行、信光、次童着直衣、童裝束、裏流蘇芳衣一領、白上、當時上薦也、次童着直衣、生單二重、袖物、袖甲指貫、流下袴、扇、出座、定能卿扶持也、次置雜具、先治部大輔季信置

冠、次散位保能置泔器、次前加賀權守兼綱置櫛巾、季信、內殿上人、殘二人、女院殿上人、共君達也、次脂燭二人、侍從家俊、衣、兼忠、東若白重、等、參候圓座左右、次諸大夫二人、能業、持參如何、替脂燭、次理髮治部卿顯信朝臣、正下四位、內殿上人、參進圓座、

理髮了、退下廣庇、次余進理髮圓座、加冠了、波髮、押如、復座、次理髮人更參、理髮、調雜具、退下、次冠者歸入曹司、定能卿扶持、之、脂燭前行、此間、光盛參上、申云、藏人左

少辨兼光參上、申云、冠者爲關白猶子、叙從五位上、



了、只今於陣頭所宣下也者、此間、初役人等撤雜具圓座等、次余歸入、此間、定能卿、爲供奉行幸退出了、次余歸出座、次大夫改着主上御直衣、自余如進廣庇、今度三位中將扶持、脂燭前行、二拜了歸入、次余又歸入、次於西曹司供前物、折敷高坏十二本、蘇芳織物打敷、陪膳中務權大輔經家朝臣、役送季長朝臣已下家司職事等、件前物不撤之、今夜不補家司職事、余例也、

奉行、家司光盛、職事國行、

大夫、今夜向南丁、

今夕、依御方違行幸法住寺殿、曉更還御云々、

十九日、丁未終日雨下、權中納言忠親卿、參陣行警固事云々、右近、左右兵衛不參云々、

廿一日、己酉〔天〕晴、賀茂祭也、使右少將顯家朝臣云々、過差之至、不拘新制、時人莫不傾奇、天氣不快、雖參內、不被渡北陣云々、又左馬助爲保、頗有不拘制事云々、中宮使大進基親、雜色令着打衣、人以不爲可云々、春宮權亮維盛朝臣、雖存守制之由、猶有過差之咎云々、於近衛使每事過法、因茲關白天氣不快、是依爲彼殿之結構也、

廿二日、戊戌晴、權中納言實綱卿、參陣行解陣事、右衛門、右兵衛不參云々、

廿三日、辛亥晴、自今日、法皇御參籠賀茂社、十日

廿四日、壬子晴、吉田祭也、上卿實家卿云々、余扶所勞、奉幣如恒、

廿五日、癸丑雨下、申刻止、此日、春季仁王會云々、檢校實綱、先參陣、定闕請奏、咒願草云々、次參官廳行事、先於建禮門〔前〕、被行大祓事云々、南殿御殿卿相之分、祗候如常云々、

### 賴業記、

治承三年、

五月三日、庚申權中納言忠親卿、着仗座被行流入事、觸大神宮訴之者六人、大中臣範元、〔配〕〔常陸〕〔遠〕光、〔遠〕阿波、大中臣高範、〔長門〕〔國〕、平家綱、〔出羽〕藤原大

中臣惟範、〔越後〕藤原俊成、〔土佐〕三人、佐伯昌助、〔伊豆〕同昌守、〔安房〕同昌家、〔隱岐〕前左衛門尉源忠清、殺害弟

〔佐渡〕仰左少辨兼光、令仰官符、參議實宗卿、少

納言仲家、向結政請印、

四日、辛酉於禁裏有御作文事、題云、仙家卿相以下獻

之云々、

五日、壬戌圓宗寺御八講始也、右少辨光雅、參寺行

之、今日、上皇自賀茂被還御、

八日、乙圓宗寺御入講終也、右少辨光雅以下參入、

外記史、勸堂童子代云々、上皇自宇治還御、昨

日御幸、昨今御共公卿、着水干袴云々、

十四日、辛申刻許、清水、祇園合戰、各放火、燒堂塔

房舍、其中、清水惡徒、燒八坂塔了云々、

十五日、壬權中納言忠親卿、參議賴定卿、着廳聽

政、與福寺別當主、同卿相參陣被行復任除目云

云、

十八日、乙尊勝寺灌頂也、中納言宗家卿參陣、被

定申尊勝寺灌頂日時僧名、參議不參、權右中辨親

宗朝臣、書僧名云々、

十九日、丙今日、廷尉等群集大理門邊、切強盜之

輩右手云々、十二

廿日、丁宸勝講始也、大納言實定卿以下參入云々、

廿一日、戊權大納言隆季卿、參議長方卿、着仗座、

被定申於法勝寺可被行千僧御讀經事、今月

廿五日、次被定賑給使事、參議賴定卿、少納言仲家、

參結政、行度緣請印了、

廿四日、辛宸勝講終也、事了、被行僧事、權大納言

實國卿召右少辨光雅仰之、此中、以權少僧都藏

廿五日、壬天陰微雨、申刻以後大雨、今日公家於

法勝寺、被行千僧御讀經、圖繪文六十一面觀音

像、轉讀觀音經、午刻、上皇御幸、有惣禮事、大納

言實定卿爲上首、權僧正玄緣爲講師云々、今

朝、內大臣出家、依病惱放留也、

廿八日、乙今夕、依御方違、行幸上皇御所、七條關

白參入給、大納言實定卿、着仗座、有召仰事、明曉

還御、

### 六月

一日、戊左近少將清經朝臣、聽禁色、權大納言實國

卿、仰大外記賴業云々、

二日、己權中納言雅賴卿、着仗座、被定申伊勢太

神宮修造日時、始假殿本作、今月廿八日乙卯、時午、立柱上

八月十七日壬寅、時寅、修理正殿、同日、并可被造三川合社

時辰、奉渡御體於正殿、同日、時戌、立柱上機、同廿八日

日時等、奉渡御體於正殿、今月九日丙申、時戌、立柱上機、同廿八日

十日、丁御卜奏、權中納言實家卿、參陣行之、

十一日、戊月次祭、權大納言實國卿、參神祇官行

雅、少納言仲家等、參神祇官南廳行事、近日、右大將家穰充滿洛下、仍今熊野六月會延引云々、然而、月次神今食被行之、甲乙次第不分明云々、十二日、亥今夕、行幸土御門第、大納言定房卿、行召仰事、內侍所同渡御、中宮、東宮、又行啓云々、依令避祇園神與給、〔頭次〕有行幸行啓云々、東宮行啓、帶刀初供奉、殿上居饗云々、又不令乘移輦給云々、於土御門殿、雅樂奏立樂、近年依月次祭後齋不奏〔云々〕、

十五日、壬祇園臨時祭也、權中納言實家卿參入、奏宣命、侍從藤原朝臣定家爲使、其後被定川合社遷宮日時、奉渡御體於假殿、今月十六日癸卯、時子、立正殿、殿、八月廿七日、柱上棟、同廿八日乙卯、時午、奉渡御體於正殿、壬子、時戌、

十七日、甲辰今夕、春宮自內裏門、行啓院、法住、關白參給、大納言實定卿以下供奉、今度不被仰、燈車云々、夜半、從三位平朝臣盛子薨、年廿四、先出家云々、故攝政適室、入道相國女、准三宮、於主上有養母之稱、

十九日、丙午今夜、白川殿葬禮云々、凶會、廿四日、辛亥國忌也、今夜東宮、自院御所還〔御〕土

御門皇居云々、

廿六日、癸丑中納言實家卿、着仗座、被定申立三日、前國懸寶殿一日時、今月廿八日乙卯、時午、七月九日乙丑、時午、爲用意、裁兩日云々、

廿八日、乙卯、寂勝寺御八講始也、午刻、上皇御幸、權大納言實房卿已下供奉、今夕、自土御門殿、還幸閑院、大納言定房卿召仰、內侍所同還御、中宮、春宮、行啓、

廿九日、丙辰大被也、參議、辨、不參朱雀門、外記、史、又不參云々、勿論云々、

已上、仰大外記賴業真人、所令注進也、依所勞、五六兩月不書日記之故也、

### 六月〔小〕

一日、戊子天晴、小槻有賴、持來爲書寫、先日所下賜之諸國申請雜事二帖、孝信、留新寫返給本、仰下可傳賜隆職宿禰之由、依爲彼宿禰之本也、小僧都尊忠來、今日、依恒例神齋不謁之、令人謝遣、

二日、己丑天晴、申刻參女院、病後始所參也、雖風病未得減、推而可行試之由、定成令申、仍所參也、歸家之後、頗雖有辛苦、無殊事、今日、車副國貞

九、爲問注<sub>二</sub>重出<sub>一</sub>使廳、無<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>尋問<sub>一</sub>被<sub>二</sub>召籠<sub>一</sub>了云云、凡事次第、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、大略時忠卿阿黨歟、然而近代事、無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>于訴<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>之如何、厨家水無音、仍遣尋之處、自<sub>レ</sub>上有<sub>二</sub>抑留<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出云々、太難<sub>レ</sub>堪云々、三日、<sub>庚</sub>天晴、已刻、定能卿來談云、中將清經、被<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>禁色<sub>一</sub>之由、昨日、經房朝臣所<sub>レ</sub>語也云々、又云、去月千僧之時、惣禮上首左大將、於<sub>二</sub>筵端<sub>一</sub>脫<sub>レ</sub>履、更不起膝行、進居<sub>二</sub>是<sub>一</sub>也、筵中央程云々、第二隆季卿脫<sub>レ</sub>履之後、更起<sub>二</sub>是<sub>一</sub>也、過<sub>二</sub>左大將下<sub>一</sub>、進居<sub>二</sub>筵前端際<sub>一</sub>、更見返<sub>二</sub>目<sub>一</sub>大將云々、又進寄<sub>二</sub>筵端<sub>一</sub>云々事、體極以見苦、隆季所爲奇恠、爲<sub>レ</sub>人欲<sub>レ</sub>顯失歟、縱雖<sub>二</sub>目<sub>一</sub>大將、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>進寄<sub>一</sub>歟、大將作法、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>一說之由、偏處<sub>二</sub>失禮<sub>一</sub>歟、尤不便也云々、今日、法皇幸<sub>二</sub>山科<sub>一</sub>云々、〔四日、<sub>辛</sub>天晴、自<sub>二</sub>今旦<sub>一</sub>風病更發、〕五日、<sub>壬</sub>自<sub>レ</sub>夜甚雨、人傳云、山門堂衆、與<sub>二</sub>學徒<sub>一</sub>、今明可<sub>レ</sub>決<sub>二</sub>勝負<sub>一</sub>、一宗之磨滅時已至云々、可<sub>レ</sub>哀々々、六日、<sub>巳</sub>〔天〕晴、今日、法皇還御云々、又關白自<sub>二</sub>去<sub>一</sub>二日、被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>宇縣<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>縷<sub>一</sub>金銅<sub>二</sub>之裝束<sub>一</sub>於田樂法師、有<sub>二</sub>田植<sub>一</sub>云々、今夜歸京云々、七日、<sub>甲</sub>陰晴不定、時〔々〕小雨、依<sub>二</sub>祇園御輿迎<sub>一</sub>、晝之

間爲<sub>二</sub>精進<sub>一</sub>、是例事也、今日風病頗減、〔九日、<sub>丙</sub>天晴、晝之間、神心惱亂、〕

十日、<sub>丁</sub>〔天〕晴、已刻、參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、申刻歸來、及<sub>レ</sub>晚、密々有<sub>二</sub>和歌<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、當座有<sub>二</sub>勝負<sub>一</sub>、山門合戰事、今日、於<sub>二</sub>院有<sub>一</sub>沙汰云々、

十四日、<sub>丑</sub>〔天〕晴、祇園御靈會、所々馬長如<sub>レ</sub>常、春宮御方同有<sub>レ</sub>之、法皇及關白、自<sub>二</sub>見物<sub>一</sub>云々、余不<sub>レ</sub>見、云云、

十六日、<sub>卯</sub>〔天〕晴、所勞猶以不快、仍自<sub>二</sub>今夕<sub>一</sub>、居<sub>二</sub>物付<sub>一</sub>渡邪氣、智詮阿闍梨渡<sub>レ</sub>之、

〔十七日、<sub>辰</sub>天晴、佛殿聖人來、問<sub>二</sub>所勞事<sub>一</sub>、〕

十八日、<sub>巳</sub>天晴、早旦人傳云、白川准后、<sub>盛子、入道前相國女、故中院攝政室爲<sub>二</sub>件人領<sub>一</sub>、生年廿四、</sub>去夜薨去云々、重又聞<sub>二</sub>實說<sub>一</sub>、仍以<sub>二</sub>右馬權頭基輔<sub>一</sub>訪<sub>二</sub>喪家<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>聞及<sub>一</sub>之即弔<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>也、又以<sub>二</sub>季長朝臣<sub>一</sub>、弔<sub>二</sub>二位中將基通<sub>一</sub>、件人即

遭<sub>二</sub>喪觸穢<sub>一</sub>云々、件准后、自<sub>二</sub>去春比<sub>一</sub>煩<sub>二</sub>不食<sub>一</sub>、漸々增氣、典藥頭定成、加<sub>二</sub>灸治<sub>一</sub>、然而猶依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>減、又加<sub>二</sub>護身<sub>一</sub>、渡<sub>二</sub>邪氣<sub>一</sub>、其後雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>少減<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>始終<sub>一</sub>、遂以

亡去、天下之人謂、以<sub>二</sub>異姓之身<sub>一</sub>、傳<sub>二</sub>預藤氏之家<sub>一</sub>、氏明神惡<sub>レ</sub>之、遂致<sub>二</sub>此禍<sub>一</sub>云々、余所<sub>レ</sub>思者、若大明神



答此事者、何十四年之間、不與<sub>三</sub>其<sub>三</sub>爵、何況此後彼<sub>力</sub>資財所領等、豈被<sub>レ</sub>付<sub>三</sub>藤氏<sub>一</sub>乎、計以爲<sub>三</sub>公家之沙汰<sub>一</sub>歟、以<sub>レ</sub>之思<sub>レ</sub>之、神明之爵似<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所據、抑或人傳云、入道相國、先年之比夢曰、自<sub>三</sub>賀茂大明神<sub>一</sub>、賜以<sub>三</sub>一之寶山<sub>一</sub>、其山高大、而難<sub>レ</sub>入<sub>三</sub>門內<sub>一</sub>、心底奇<sub>レ</sub>之、問<sub>三</sub>子細使者<sub>一</sub>、々々答云、我是春日大明神之御使也、假令賀茂春日兩神同心賜此寶山云々、暫可<sub>レ</sub>預<sub>三</sub>置此寶山<sub>一</sub>云々、件山上、藤花盛開、悉以掩<sub>レ</sub>之者、其後與<sub>三</sub>故攝政親呢<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>經<sub>三</sub>幾程<sub>一</sub>、攝政薨逝之刻、以後彼家、可<sub>レ</sub>屬<sub>三</sub>禪門<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>下<sub>三</sub>院宣<sub>一</sub>之日、理須<sub>レ</sub>致<sub>三</sub>遁避<sub>一</sub>也、而以<sub>三</sub>先年之夢<sub>一</sub>案<sub>レ</sub>之、我朝之神明、所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>量定<sub>一</sub>之事、定以有<sub>レ</sub>樣歟、辭<sub>レ</sub>退返以可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>恐、仍愁受<sub>三</sub>取之<sub>一</sub>、暫所<sub>三</sub>守護<sub>一</sub>也、爲<sub>レ</sub>主之人可<sub>レ</sub>受繼<sub>一</sub>者、定其期至歟、以<sub>三</sub>人意<sub>一</sub>輒不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>進退<sub>一</sub>之由、禪門被<sub>三</sub>密語<sub>一</sub>云々、此事雖傳語、余以<sub>三</sub>暫字<sub>一</sub>、真實之說也案<sub>レ</sub>之、假傳預<sub>一</sub>之人已以亡沒、至<sub>三</sub>此時<sub>一</sub>、財主可<sub>レ</sub>出來<sub>一</sub>歟、爲<sub>レ</sub>宗之所<sub>三</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>三</sub>氏長者<sub>一</sub>、其外所々、任<sub>レ</sub>理尤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>配分<sub>一</sub>也、理之所<sub>レ</sub>當、未<sub>レ</sub>處分<sub>一</sub>之地也、故攝政、男女子息有<sub>三</sub>其數<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>配分<sub>一</sub>、二品亞將、已爲<sub>三</sub>成人<sub>一</sub>之息、爲<sub>レ</sub>宗文書庄園、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>傳預<sub>一</sub>之仁也、而此事更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶歟、如公家被<sub>レ</sub>傳預<sub>一</sub>歟、是

以、萬事沙汰之趣、所<sub>三</sub>恐推<sub>一</sub>也、更以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違、努力努力、悲哉、此時、藤氏之家門滅盡了、末代之事、神明天道、不<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>沙汰之限<sub>一</sub>歟、

十九日、丙午天晴、刑部卿賴輔朝臣、民部權少輔宗雅等來談<sub>三</sub>世間事<sub>一</sub>、關白、昨日被<sub>レ</sub>向<sub>三</sub>宇縣<sub>一</sub>、明日、法皇可<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>御幸<sub>一</sub>、爲<sub>三</sub>其經營<sub>一</sub>云々、今夜、葬<sub>三</sub>白川殿中山邊<sub>一</sub>云々、二位中將、并寺僧都等在<sub>レ</sub>共云々、火葬云々、彼兩人拾<sub>レ</sub>骨云々、世以不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>可、

廿日、丁未天晴、或人云、白川殿所領已下事、皆悉可<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>內御沙汰<sub>一</sub>云々、恐推相叶了、可<sub>レ</sub>悲々々、但春日大明神、定有<sub>三</sub>御計<sub>一</sub>歟、

廿一日、戊申天晴、以<sub>三</sub>季長朝臣<sub>一</sub>、大理之許、示<sub>三</sub>遣車副之問事<sub>一</sub>、

廿二日、己酉天晴、今日、以<sub>三</sub>國行<sub>一</sub>、重示<sub>三</sub>遣同事於大理<sub>一</sub>、

廿三日、庚戌甚雨、以<sub>三</sub>檢非違使基廣<sub>一</sub>、相<sub>三</sub>副車副等<sub>一</sub>、遣<sub>三</sub>大理之許<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>糾<sub>三</sub>訴訟之真偽<sub>一</sub>也、入<sub>レ</sub>夜、基廣歸來云、章貞看督長無<sub>三</sub>遁申方<sub>一</sub>、仍預<sub>三</sub>給基廣<sub>一</sub>、重可<sub>レ</sub>誠<sub>三</sub>此事<sub>一</sub>、使廳之耻也、又恐申不<sub>レ</sub>少云々、

廿五日、壬子天晴、以<sub>三</sub>使者<sub>一</sub>、訪<sub>三</sub>信季所勞<sub>一</sub>、文書等、讓<sub>三</sub>

其息信宗<sub>生年八歲</sub>了、其間事、可致沙汰<sub>之由、書證</sub>文進之、今夜、爲違秋節、參宿女院、

〔廿六日、癸丑天陰、早旦歸家、〕

〔廿七日、甲寅天晴、此日、佛殿聖人來、〕

廿八日、乙卯〔天〕晴、此日、法皇幸最勝寺、御八講初日也、入夜、渡御鳥羽南殿、加修理之後、所渡御也

云々、此日追物氣、今日早旦、參女院、

廿九日、丙辰〔天〕晴、前少納言信季、已獲麟之由告送、仍遣使者尋之、未閉眼、大略如無云々、又遣父入

道之許、白川殿奏贈位等事、有其沙汰云々、被問前相國、左府等云々、大略淑子例歟云々、<sub>宇多養母云々、</sub>

六月祓如常、陰陽師晴綱、<sub>時晴</sub>陪膳行賴、役送信光、<sub>已上</sub>衣冠、

白河准后薨逝間事、

養母事、

中宮溫子、<sub>宇多后、延喜繼母、並養母也、</sub>

延喜七年六月八日癸巳、有事、

九日甲寅、葬禮也、

十日乙卯、右大臣、奏諸道勘文、有議、曲情從

恩、錫紵三日、廢朝五日、<sub>今案、爲繼母、錫紵二日也、而依爲養母、爲三日歟、</sub>郁芳門院、<sub>堀河院姉、並養母、</sub>

嘉保三年八月七日甲子、有事、

十六日癸酉、葬禮也、左大臣以下、着仗座、被

定諸道勘申、御錫紵、廢朝等日數事、有議、錫

紵三日、廢朝五日、依延喜七年例也、權中納言

大江匡房卿、留座行事、院別常右近少將源能俊

朝臣、參陣外、申遣令旨、諸衛警固、固關付國

司、

尙侍從一位藤原淑子、<sub>宇多養母、贈太政大臣長良女、右大臣藤原氏宗室、</sub>

延喜六年五月廿八日庚辰、薨、

卅日壬午、召中納言源貞恒卿、令行宣命、并贈

正一位事、參議十世王、中務大輔源治朝臣等爲

使、又仰穀倉院、給絹百疋、調布二百端、止葬

儀使仰令勘詔書、宣命文等、無假母事、而太上

法皇、常稱養母、故宣命文等有此意、<sub>位紀狀云、當上皇龍潛之時、盡阿保供養之勞云々、</sub>

始自今日、下簾、不聞朝政三日、

御錫紵事、

准養母之義者、三箇日無異議、五箇日惣無先

例、祖父母與養母、同五月服、一日又無所據之故也、  
但無三日次之時、或當日着除、或二日着除、或又  
不憚三日時除之、

不祝事日數事、

爲養母之義者、二等已上親也、三日不可聞、  
食朝務、若偏爲三位之儀者、一日也、爲養母之義  
此儀、者不可有、

薨奏事、

爲養母之義者、尤可被行之、縱隨出家之  
儀、猶可被行之、選子內親王、長元八年六月  
元年六月睦子、承久二年三月七日、等也、御服親之人、雖出家  
之後、必奏之、

宣命贈位事、

准淑子并代々外祖母等例者、可被贈正一  
位、歟、准女御等例者、可被贈從二位、歟、但  
三位准后人、并有養母之儀者、可被贈正一  
位、歟、

同使事、

准延喜六年例〔者〕、參議一人、四位一人、可爲  
使歟、

件條近例、出家人止此儀、永久二年三月七日睦  
子、外祖母、有養母、保元三年十二月二十九日追尊母氏  
奏、無贈位、也、公子、依爲出家人、無贈位宣命等事、  
但出家人、見存叙品、并准三宮、祐子內親王、  
六年六月十六日、惠子女王、永觀二年十一月、藤原全子、  
日叙三品、正月廿二日、皆出家之後也、可被相准哉、可在  
准三宮、時議、

當日出家人不用出家歟事、

永延三年六月廿六日、太政大臣賴、薨、先下頂

髮、授戒畢云々、

七月廿日薨奏、有諡號、贈位、正一等事、

警固固關事、

郁芳門院時、嘉保二年八月十六日、諸衛警固固關、付國司、淑  
子時、延喜六年五月、無此事、但養母、外祖母倫子、  
廿二睦子、承久二年三月七日、等、同無其事、可准此等歟、  
右、大略注進如件、

六月廿五日

大外記清原賴業、

右治承三年<sub>丑</sub>己此春夏一帙墨付百十二枚者以三緣院  
道敎公眞痕松殿右幕下道昭卿被臨之丁抑法性寺忠  
通公之有職松殿基房公親面授而傳于後法性寺且加  
日課號玉葉爲後昆之模範不讓他卷藏而可祕之者也  
于時慶安二年<sub>丑</sub>己正月仲旬 陶化翁(花押)記焉

玉葉卷三十終



玉葉 卷三十一

自治承三年七月  
至同年十二月

治承三年秋冬〔歲次己亥〕

七月〔大〕

一日、丁巳〔天〕晴、上西八條兩院幸鳥羽、  
 二日、戊午陰晴不定、早旦、信季之許遣人、使者歸來云、  
 昨日死去了云々、可レ悲々々、入レ夜賴輔入道南直廬  
 有二炎上一、然而即打滅了云々、放火云々、  
 三日、己未雨下、院幸法勝寺、女院達還御云々、入レ夜雷  
 鳴及二曉更一、  
 四日、庚申天晴、三位中將、西寺文珠會捧物催レ之、尋二先  
 例一可二勤仕一、如二八省加供一、納言以後奉二仕之一、可二准  
 據一歟、申刻、大外記賴業來、召二簾前一談二雜事等一、  
 〔今日午刻雨降、〕  
 五日、辛酉天晴、酉刻雨降、參二女院御方一、法皇幸法勝  
 寺云々、  
 六日、壬戌天晴、酉刻雨降、參二女院御方一、外記貞親、持二太  
 神宮心柱卷布〔解〕落事文書、源大納言上卿、被レ廻二

文書云々、

七日、癸亥雨下、入レ夜晴、乞巧奠如レ例、節供範季、陪膳  
 光經朝臣、今日法皇幸法勝寺云々、  
 八日、甲子雨下、自二今日一被レ行二最勝光院御八講一云々、  
 十日、丙寅天晴、入レ夜小雷、自二今日一、法皇於二七條殿御  
 所、被レ行二五十ヶ日逆修一、請僧十口云々、關白及太相  
 國已下、公卿濟々參入云々、余依二疾未一差レ不レ參、  
 〔十一日、丁卯雨下、施藥院使賴基來針二齒下一、又於レ前令  
 讀二醫書一、今日令服二承氣湯一、大黃與厚朴合煮也、厚朴半減也、〕  
 十二日、戊辰陰晴不定、朝間雷鳴、此日最勝光院御八講  
 結願也、申刻、大夫史隆職參、召二簾前一仰二雜事一、  
 十三日、己巳〔天〕晴、此日寅刻、男子所レ生、其母、女院女房大貳、  
 十四日、庚午〔天〕晴、終日念誦、拜二盆送一法性寺兩堂如  
 恒、女院御方御二盆使一、季長朝臣、  
 十五日、辛未陰晴不定、念誦、信性阿闍梨來、談二最勝光  
 院御八講之間事一、證誠玄緣一人云々、或人云、邦綱卿、

去比獻辭大納言之狀、卽有敕許、左京權大夫光盛作其狀云々、又云、此間可有任大臣云々

〔十六日、壬申陰晴不定、自今日服薤〕

十八日戊甲〔天〕晴、依腹痛更發、加灸治十所許、早旦佛嚴聖人來、

〔十九日、乙亥天晴、灸治如昨日〕

廿日、丙子天晴、長光入道來、其孫長正光經子、院被補內非藏人丁、近日諸儒子、可參御書所衆之山、被

責召、長正其內也、而依申入子細、獨被許昇殿、折節爲悅云々、又去比呈述懷詩一首於禪喜僧正、

御持卽備寂覽、頗有哀憐之天氣云々、而今有此恩、旁被優功勞之條、恐悅無極云々、或人云、內大臣入道〔一門〕所勞危急云々、

廿一日丁丑〔天〕晴、辰刻地震、昨日白川殿有贈位事、上卿新中納言實家卿、宣命使右大辨長方卿、位記使橘以政朝臣云々、廢朝三々日、音奏停止事、被仰下賴業

真人云々、昨日贈位之間事、職事基親不仰、官之人、史一人不參、奇異事也云々、

廿二日、戊寅〔天〕晴、返奉日記抄四帖、西宮五卷抄二、東記目錄一卷於關白、件日記抄者、鳥羽院御自抄也、立

甲乙丙丁被抄之、甲、記乙、土右、丙、同、丁、爲房也、但委見之、乙端許土右記也、其奧并丙端等、後朱雀院御記也、丙奧又後三條院御記也、而爲使人迷、以土右記爲號被抄歟、此由無丁見之人、余以此旨、先日申關白、々々始而覺悟、被稱有興、人傳云、主上聊有御不豫事云々、則以消息尋女房之許、此一兩日聊溫氣御云々、

廿三日、己卯〔天〕晴、今日院御逆修第二七日也、關白被參云々、自今日、宰相中將定能病滿、及大事云々、仍度々遣使者丁、

內御不豫事、又問送女房之許、只同事御云々、〔廿四日、庚辰〔天〕晴、入夜小雨、女房示送云、御不豫雖不及殊御事、此四々日溫氣未散御云々、定能卿所勞、大略同前无減云々、〕

廿五日、辛巳〔天〕晴、午後陰晴不定、微雨間下、申刻、頭中將通親朝臣、送書於基輔曰、萬物沽價法、可令定申者、其狀如此、

近日萬物沽價、殊以違法、非唯市人之背法、殆及州民之訴訟云々、寬和延久之聖代、被定其法了、隨去保延四年、且用中古之制、且任延久之符、宜

遵行之由、重被宣下了、今度猶可被用彼法、歟、將又驥駟推移、時俗難隨者、新可被定下哉、就中錢之直法、還背皇憲、雖宜停止、漢家日域以之爲祥、私鑄錢之外、交易之條可被寬宥、歟、其法可用寬和沽價之准直、歟、又可依諸國當時之濟例、歟、〔抑將〕新可被定下、歟、此等之趣、殊可令計申給候者、依天氣言上如件、以此旨且可令披露給候、通親恐惶謹言、

七月廿五日

右中將通親上、

進上 美作守殿、

禮紙狀〔也〕、

追言上、

參入言上之間、且爲御不審、內々所申上候也、於今申給之趣者、企參入可承候、以此旨可令申上給候、恐惶謹言、

請文案如此、

萬物沽價法可被定下事、可令計申之由、謹以承候了、抑如此事、以短慮、輒難定申、歟、去年被下制符之時、此事存爲朝家之要須之由、尤可

被定下其法之旨、令言上許也、於其上之子細者、恐意暗難及歟、先被仰法家及官底使廳等、令注進子細之後、可及議奏、歟、且以此等之趣、可被洩奏狀、如件、

七月廿五日

右大臣、在判、

此事暗不能注進價直事也、代々使廳之沙汰也、先法家勘申本條、并使廳官底、令注進度々制符、且勘申當時官行事所、及藏人所色代檢納之制、諸國濟例等、斟酌彼是、且訪有識、且及群議、可被定下事也、凡我朝衰弊只在此事、仍去年雖令注申、新制之中不被載、此事不叶時議、歟之由、令存之間、今有此沙汰、尤可謂善政、歟、始終之沙汰、能可被計行事也、凡此貫首、萬事糾舊法、申行云々、可謂賢々々々、但過法歟、

今日入夜參女院御方、初夜之後歸家、內御不豫未減給云々、

廿六日、壬朝間天晴、午後雨下、今日秋季御讀經始也、余依所勞不出仕、申刻、民部權少輔宗雅來語云、內裏御樂事、頗六借御云々、去夜於內裏、兼光密語云、

被行御占之處、南東神明崇之由占申、人謂「以」南者春日也、東者吉田也、又東三條當皇居之東、卽角振隼兩神歟、疑藤氏家門、併爲公家之沙汰一條、氏之神豈無其懣哉之由、內々有云々、不可口外云々、今日小兒自產所渡南家云々、凡此間事、余一切不口入、事體非穩便之故也、

今日召檢非違使基廣、明法博士、召問沽價之間事、

廿七日、癸未雨下、風病殊發動、基廣注申錢賣買之間事、近代渡唐土之錢、於此朝恣賣買云々、私鑄錢

者處八處、縱私雖不鑄、所行旨同私鑄錢、尤可被停止事歟、而如先日職事御教書、不可被停止之趣歟、尤無其謂事歟、基廣勘注之旨、叶思存了、又

尋見年々沽價法、天曆、應和、寬和、延久等也、是寬之比、此中雖及此沙汰、無始終之事云々、此中延久尤委細、叶近世之法歟、但猶召市人、可被

行中沽之法歟、謂中沽之法者、賣人者指高直、買人者好減直、折中而有裁斷、謂之中沽之法也、

廿八日、甲申天晴、酉刻、大夫史隆職來、寬和延久沽價注文所持參也、召前問仰雜事、申云、一昨日季御

讀經初日、左大將被定申御前僧、新宰相中將實宗書之、今度季御讀經、不被補闕請、近年皆可被補

也、行事辨重方、再三雖申其旨、上卿中古以來不補季御讀經闕請之由、有所見、仍不可補云々、遂以不被補、頗違例也云々、又申云、去廿五日、叡山凶惡堂衆等、可追討之由、被下宣旨、其狀如此、治承三年七月廿五日、宣旨、

叡山堂衆等、不憚勅制、不拘座主制止、猥成狼戾、欲魔滅一山、仍差遣官軍、可令追却三箇庄、及寄住所々、但於籠橫河無動寺等之輩者、同仰彼輩、守護坂本往反路、可令責落、兼又逃隱洛陽之輩、宜令檢非違使搦進、至于逃移諸國者、仰宰吏召進其身、

奉行職事光能云々、件宣旨、初可遣追討使之由被載、而隆職申云、先例可追討某國住人凶賊某之由、所被載也、只可遣追討使之山、未見先規、何樣可候哉、若爲追討使者、可被載其名也、旁議不審之由、申上之處、於其人、禪門可計遣云云、仍只如此可成之由、被仰下、仍「成」宣旨付職事之處、翌日一昨日朝也、猶改追討使可成官軍之由、被仰下、仍所改成也云々、良久退出了、主上御不豫未令減給云々、



廿九日、酉今晚、入道内府薨去云々、或說去夜云々、

## 八月、

一日、丙〔天〕晴、未刻以後雨下、智詮閣梨來、明後日可入大峯云々、今日午上神事也、仍申刻來也、左京權大夫光盛、可爲政所年預之由仰了、小納言信季之闕也、

三日、戊〔天〕晴、〔早旦〕參女院御方、〔即歸來、〕或人云、延曆寺堂衆追討事後了云々、奉行職事光能、有夢想事云々、但是閭巷之說也、難取實說歟、

八日、癸雨下、此日、院御逆修四七今日也、關白及大相國已下、濟々參入云々、

九日、甲朝間小雨、午後晴、午刻、三位中將參院并内、於院按察資賢卿參會、入見參歸出、傳仰云、雖可見參、只今念誦之間也、後日必可參云々、次參内參御前、賜給披見云々、余依所勞久不出仕、又内御不豫如何之由、即以良通傳女房、歸來云、御樂子無別事云々、今日前驅二人、牛童遣之、共人二人隨身等也、童有隙不出來也、入夜頭權大夫光能來、隔簾謁之、談世上事、良經

侍從所望、及禁色之間事、可奏院内之由示付之、十日、己〔天〕晴、治部卿顯信朝臣、申梅宮領宇多庄内、畠所當事、可免除之由、神主基忠所進請文也、遣顯信之許了、基輔奉相訓以政基忠等文今日時忠卿、送書於基輔之許曰、

春宮御護刀召無障于子息之人七人、小刀可被作候也、其内一柄、可令獻給之由、可令申右大臣殿者、依御氣色、執達如件、

八月十日

左衛門督在列、

## 美作守殿、

即以小刀、裹檀紙二枚進之、請文基輔所書也、凡此事次第、頗以見苦、如此事内々事也、須女房傳仰也、此人之沙汰、萬事如此、爲之如何々々、十一日、丙〔天〕晴、早旦隆職宿禰、注送去夜除目、少納言平信國、元木工櫻頭左近將監源信政、右兵衛尉藤爲成、已上、件衛府兩人、爲令勤仕兩社行幸舞人、所被任云々、上卿兼雅卿、參議長方云々、

午刻、典藥頭定成來、問所惱、申屬涼氣可減之由、未刻、隆職來、申刻、中御門中納言被來、可下向放生會云々、參議實宗可下向云々、今日定成語云、

白川殿被瀉生蛭、其長一尺餘、定成所見也、奇怪事也云々、

十二日、酉陰晴不定、及晚雨下、女房姬君、參女院御所、

〔十三日、戊戌終日甚雨、已刻日景歟、

十四日、己亥朝間雨下、已刻以後天晴、〕

十五日、庚子天晴、外記來云、來十六日可有仗議、太神宮〔心〕柱卷布事云々、上卿源大納言云々、申所勞之由了、

十六日、辛丑〔天〕晴、法性寺座主自江文被出云々、是堂衆等、件所可搆城之由、風聞之故云々、

十七日、壬寅天晴、東宮非藏人兼時來語云々、去比禁中有落書、白川殿內府等事、西光法師怨靈之由云々、以片假名書之、七八枚許續テ書之云々、

又云、昨日內裏御寵犬、爲奴犬等兩三、被咋殺了、仍有犬死穢、又身體頗不穩、爲奇云々、余案之、頗涉禁忌歟、內々可有御占歟、

十九日、甲辰〔天〕晴、此夕家所宛也、年預家司光盛奉行、件人、去一日補年預了、然而補家司之時、申吉書、依年預重不申吉書、只以吉日下文加判云々、

廿日、乙巳〔天〕晴、資賢卿來、隔簾謁之、院邊聊有申入

事、仍所招也、

廿二日、丁未雨下、此日、院御逆修六七日也、又有祈年穀奉幣、上卿藤大納言云々、

廿三日、戊申雨下、洪水成、菩提院御念佛結願云々、

廿五日、庚戌此日良經被下被聽禁色之宣旨云々、

又被仰昇殿云々、然而小舍人不來、依近代之家例、內々不可來之由、觸光能也、

〔廿六日、辛亥雨下、隆信朝臣參、密々有和歌、〕

廿七日、壬子雨下、此日石清水行幸也、左大將供奉、未刻出京、曉鐘之後還御云々、

此日乘燭之程、着直衣參院、去二月以後、湯治并所勞之間、于今不出仕、院御逆修、來晦日可有結願、廿九日又曼陀羅供云々、所勞此十日許有少減、仍可參入之處、彼兩日日次不快、今日宜、仍所參也、如此數月籠居之時、初出仕之日、着束帶參陣、可下吉書、或及申文、而近年服假之外、依所勞籠居、依爲常事、不必然、就中下官之體、常有此事、仍每度不能著陣歟、參上之後、尋近習之輩、皆以退出云々、仍以侍從家俊入見參、以奉時法師申入云々、歸來告召之由、仍參御前、于時長講之間也、御坐御堂之御壺

禪、被<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>天王寺<sub>一</sub>、先<sub>二</sub>是太政大臣按察等、候<sub>二</sub>御前長講<sub>一</sub>了退出、

廿八日、<sub>丑</sub>午上雨下洪水、申刻以後雨止、入<sub>レ</sub>夜邦綱卿來、隔<sub>レ</sub>簾謁、依<sub>二</sub>浴節<sub>一</sub>也、

廿九日、<sub>寅</sub>〔天〕晴、此日、院御逆修相當七々、日曼陀羅供也、<sub>上下</sub>導師前權僧正公顯、讚衆十二口、<sub>此內僧綱三口、未</sub>

刻着<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>參<sub>二</sub>七條殿<sub>一</sub>、先<sub>レ</sub>是事始、余着座<sub>太相國左大臣已下公卿廿餘</sub>

人着座、納言以上在<sub>前座、參議以下</sub>、經<sub>二</sub>僧座後納言座前<sub>一</sub>也、

于<sub>レ</sub>時導師讀師、御願文之間也、度者之使、頭中將通親朝臣、經<sub>二</sub>御堂南東廣庇等<sub>一</sub>、就<sub>二</sub>導師右邊<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、經<sub>二</sub>公卿座前<sub>一</sub>、<sub>後也、</sub>着<sub>二</sub>公卿座末圓座<sub>一</sub>、<sub>先<sub>二</sub>是藏人數<sub>一</sub>之、</sub>即右衛門督成

範卿取<sub>レ</sub>祿<sub>二</sub>給<sub>一</sub>之、通親取<sub>レ</sub>之、經<sub>二</sub>本路并南簀子<sub>一</sub>、降<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>南面刻階<sub>一</sub>、東進於<sub>二</sub>巽角砌外<sub>一</sub>、舞踏退下、<sub>隨身受<sub>二</sub>取<sub>一</sub>、</sub>

隨身令<sub>レ</sub>、說法之終頭、關白參上着<sub>二</sub>座上<sub>一</sub>、<sub>同被<sub>二</sub>經<sub>一</sub>、</sub>說法了、五位侍臣<sub>重季、二人、敷<sub>二</sub>上禮座<sub>一</sub>、<sub>兼不相存<sub>二</sub>歟、數刻不<sub>一</sub>數</sub></sub>

次上禮師一人着<sub>二</sub>件座<sub>一</sub>、<sub>導師<sub>二</sub>禮了<sub>一</sub>、</sub>以復<sub>二</sub>座<sub>一</sub>、誦讚、此間供養法、秉燭之後讚了、導師教化、次行道、導師即著<sub>二</sub>

下座、讚衆復座、<sub>行道之間、爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>、</sub>衆下<sub>二</sub>座<sub>一</sub>、<sub>次導師、其後六弟</sub>次草座、太相國已下起<sub>レ</sub>座、群<sub>二</sub>立南廣庇<sub>一</sub>、五位三人、爲<sub>二</sub>大臣三人手長<sub>一</sub>、各經<sub>二</sub>東廣庇<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>東面南第

三間、<sub>御所際</sub>置<sub>二</sub>導師前<sub>一</sub>、<sub>導師座、南</sub>大臣余<sub>〔直〕</sub>以退出了、于<sub>レ</sub>時戌刻也、

卅日、<sub>卯</sub>〔天〕晴、此日、院御逆修結願也、圖繪釋迦三尊、澄憲僧都爲<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>、未刻參<sub>二</sub>院<sub>一</sub>、先<sub>レ</sub>是事始、關白太相國

已下、<sub>左大臣</sub>公卿數輩、着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>座、余經<sub>二</sub>座前<sub>一</sub>着

座、于<sub>レ</sub>時演<sub>二</sub>說佛功德<sub>一</sub>之間也、說法優妙無比類、事畢賜<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、太相國已下取<sub>レ</sub>之、例時以前、余退出、參

內謁<sub>二</sub>龍顏<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>近代人之所<sub>一</sub>書之卷物<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>之、此間關白被<sub>レ</sub>參、<sub>例時以後所<sub>二</sub>參也<sub>一</sub>、</sub>頃之余退出、今日書<sub>二</sub>先日自<sub>一</sub>院

所<sub>二</sub>下賜<sub>一</sub>、<sub>繪<sub>二</sub>未<sub>一</sub>、</sub>詞<sub>二</sub>相具參上<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>親宗了<sub>一</sub>、此日、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>新制卅二ヶ條<sub>一</sub>、<sub>通親奉<sub>二</sub>行云々<sub>一</sub>、</sub>

## 九月

一日、<sub>丙</sub>微雨下、右中辨經房朝臣參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>丹波國賀舍庄顛倒事<sub>一</sub>云々、今日神事如<sub>レ</sub>恒、

二日、<sub>丁</sub>雨下、終日書<sub>二</sub>內御卷物詩歌等<sub>一</sub>、交筆、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>院供花云々、

三日、<sub>戊</sub>自<sub>レ</sub>夜終<sub>〔日〕</sub>甚雨、酉刻參<sub>二</sub>內<sub>一</sub>、持<sub>二</sub>參先日所<sub>一</sub>下賜<sub>二</sub>之御卷物<sub>一</sub>也、以<sub>二</sub>女房<sub>一</sub>傳奏、頻預<sub>二</sub>勅感<sub>一</sub>、小時出

御、賜<sub>二</sub>能筆十卷<sub>一</sub>、又於<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>書<sub>二</sub>假名<sub>一</sub>進覽、依<sub>レ</sub>勅也、

亥刻退出、此日、賦<sub>三</sub>歌合題等<sub>二</sub>十首、基<sub>輔奉行</sub>

四日、已陰雨不定、臨<sub>レ</sub>晚晴、自<sub>レ</sub>內賜<sub>三</sub>預玄宗皇帝繪

六卷、爲<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>一見<sub>一</sub>也、

五日、庚<sub>申</sub>〔天〕晴、此日賀茂行幸也、今日〔參〕女院御

方<sub>二</sub>已刻有安來談、語<sub>三</sub>白川准后薨逝之間事<sub>一</sub>、

六日、辛<sub>酉</sub>〔天〕晴、早旦大夫史隆職、注<sub>三</sub>送賀茂行幸賞<sub>一</sub>、

正三位隆忠、臨時、實宗、<sub>去奉、平野、行幸賞、</sub>長方、<sub>今度行、事參議、</sub>從五位

下中原仲重、行幸外記、上卿、兼雅辨、光雅、史、檢非違使等、

追可<sub>二</sub>申請云々、俊經被<sub>レ</sub>超<sub>三</sub>越長方<sub>一</sub>了、御侍讀如何如

何、或人云、知盛卿同叙<sub>三</sub>正三位云々、

左京權大夫光盛參上、申<sub>三</sub>舍人之間事<sub>一</sub>、今日返<sub>上</sub>玄宗

皇帝繪<sub>上</sub>、使治部大輔季信、

七日、壬<sub>戌</sub>〔天〕晴、仲綱來申<sub>三</sub>賴政卿返事<sub>一</sub>、九月盡日、密

密可有<sub>三</sub>歌合、件歌可<sub>二</sub>詠進<sub>一</sub>之由、先日以<sub>三</sub>仲綱<sub>一</sub>、所

示<sub>三</sub>彼卿<sub>一</sub>也、此間煩<sub>三</sub>痢病<sub>一</sub>、雖<sub>三</sub>神心不豫<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>相搆<sub>一</sub>之

由所<sub>レ</sub>答也、又隆信朝臣來、當座有<sub>三</sub>和歌<sub>一</sub>、

申刻、外記來催<sub>三</sub>例幣<sub>一</sub>、申<sub>三</sub>灸治由<sub>一</sub>了、

去夕賴輔入道有<sub>三</sub>吉夢<sub>一</sub>、太神宮并春日御體、御<sub>三</sub>坐余家

前庭樹<sub>一</sub>之由云々、

又一昨夜女院有<sub>三</sub>御夢<sub>一</sub>、高<sub>三</sub>長押上<sub>一</sub>、余及三位中將

〔等〕居之、其長押下に、關白并其息隆忠中將等座之、

而之間、隆忠與<sub>三</sub>此三位中將<sub>一</sub>、タケヲクラフ、隆忠事外

にひきなり、彼は年齒兄也、又位階上臈也、而事外に

たけひきなり、爲<sub>三</sub>此中將<sub>一</sub>尤爲<sub>三</sub>吉事<sub>一</sub>之由、心中に思

食之間、關白不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>見、余并中將は、尙居<sub>三</sub>長押上<sub>一</sub>云

云、是又最吉夢也、

去夜又信助阿闍梨、有<sub>三</sub>吉夢<sub>一</sub>云々、

八日、癸<sub>亥</sub>〔天〕晴、早旦浴、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>恒例念佛所<sub>レ</sub>始也、

已刻、佛嚴聖人來、先談語之後、及<sub>三</sub>午刻<sub>一</sub>受<sub>レ</sub>戒、其後

始<sub>三</sub>念佛<sub>一</sub>、亥刻事了、今日<sub>二</sub>一萬遍<sub>一</sub>、

今日美作守基輔朝臣、被<sub>レ</sub>聽<sub>三</sub>內昇殿<sub>一</sub>、日來下官所<sub>三</sub>執

申<sub>一</sub>也、今有<sub>三</sub>恩許<sub>一</sub>、尤爲<sub>レ</sub>悅、

〔九日、甲<sub>子</sub>朝間雨下、午後天晴、今日念誦八萬遍、〕

十日、己<sub>丑</sub>〔天〕晴、〔今日念誦十一萬遍、〕此曉法皇、上

西〔門院〕、八條兩院、皇太后宮等、被<sub>レ</sub>參<sub>三</sub>天王寺<sub>一</sub>云

云、

十一日、丙<sub>寅</sub>〔天〕晴、今日念佛十萬遍、山大衆可<sub>二</sub>參洛<sub>一</sub>

之由風聞、仍遣<sub>三</sub>官兵<sub>一</sub>云々、先日以<sub>三</sub>官軍<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>追<sub>三</sub>討堂

衆<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>下<sub>三</sub>宣旨<sub>一</sub>了後、及<sub>三</sub>數月<sub>一</sub>无<sub>三</sub>沙汰<sub>一</sub>之間、

堂衆彌得<sub>三</sub>其力<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>茲學徒等、尙宣旨無<sub>三</sub>始終<sub>一</sub>之由、



可參洛云々、

十二日、丁卯雨下、〔今日念佛九萬遍、〕傳聞大衆忽不可參洛、來廿二日公卿勅使以後、猶以官兵、可被追討堂衆之故云々、

十三日、戊辰〔天〕晴、今日念佛八萬遍、今日三位中將參內、基輔、秀信等在共、能業、信光前驅、被召御前云々、牛童遣車也、

〔十四日、己巳天晴、今日念佛五萬遍、〕

十五日、庚午〔天〕晴、今日念佛三萬遍、即結願也、申刻佛殿上人來、奉供養訖、哩字二體、一體ハ金色、一體ハ赤色、共弘法大師御筆也、盡未來際、每年七日念佛不可退轉之願也、賜小布施、裝束具也、說法尤貴者也、

十六日、辛未〔天〕晴、自今日一三ヶ日、奉幣春日御社、以陰陽師憲成一修祓、余着衣冠密々々堂上奉拜、雖灸治相亂、非參社頭、強不可憚之故、依有所願等也、

〔十七日、壬申雨下、今日晴光奉仕祓、〕

十八日、癸酉〔天〕晴、今日憲成勤仕祓、此日興福寺唐本一切經供養也、爲公卿御沙汰、可被准御齋會之由、被宣下、雅賴卿奉博陸命、作進次第、件次第、檀紙立紙云

云、上卿權中納言實綱卿、辨、右中辨經房等、可下向之由、豫有其沙汰、而昨日俄停止此等之儀、被付寺家了云々、關白大被壽申云々、然而公卿勅使、御神事之間、被修大佛事、猶不可然之由、有其沙汰云々、大略頭中將通親朝臣之所爲云々、禁中雖神事、散所佛事、先例不憚之由、關白再三被申、然而猶被停止云々、

十九日、甲戌天晴、參女院御方、恒例御舍利講聽聞、二位中將兼房祚候、及晚退出、

廿一日、丙子雨下、法皇并上西八條兩〔女〕院、自天王寺出給云々、

廿二日、丁丑〔天〕晴、此日公卿勅使權中納言實國卿進發云々、

〔廿五日、庚辰天晴、密々有和歌、今日參女院御方、〕

廿六日、辛巳〔天〕晴、定能卿來談公事等〔事〕、

〔廿七日、壬午參女院御方、兼房卿祚候、〕

廿八日、癸未〔天〕晴、入夜參女院御所、御堂也、宿仕、依方違也、是冬節也、

廿九日、甲申〔天〕晴、密々有和歌、題九月也、翌日爲加判、遣大貳入道之許了、

〔治承三年冬 十月十一月 己亥歲〕

十月〔大〕

一日、酉〔天〕晴、昨日歌合、遣重家入道之許、爲加判也、此日平座、上卿三條大納言實房、參議長方、定能等參勤云々、

二日、戌天晴、此日蓮花王院惣社祭、試樂恒例事云々、今日終日調置大間等、相并百卅餘度也、又々可尋書之、或云、廿日比可被行除目云々、

三日、亥〔天〕晴、此日蓮花王院惣社祭也、

四日、子〔天〕晴、此日惣社祭後宴云々、已上三ヶ日、每年事云々、大夫可出仕之日次、在憲朝臣勘申云、今

月七日、十日、十三日、廿五六日云々、

五日、丑〔天〕晴陰、申刻參院、以親宗朝臣申入、歸來云、仰云有咳病氣、不見參云々者、即參內、主上

御坐中宮御方云々、秉燭關白、○關白下頃之余退出、恐有脫文傳聞來九日、可有秋除目云々、又今兩三日之間、可

有官奏云々、又來十日爲御方違、可有行幸于法住寺殿、自十三日、法皇御參籠八幡宮云々、

六日、庚〔天〕晴、巳刻、頭權大夫光能朝臣、送書於基

輔許云、來九日可被行除目、爲申其事、猶欲參入、且所申也云々、答有催者可參之由〔了〕、

七日、辛〔天〕晴、此日女院御懺法結願也、午刻事始、

余、鳥相三位中將、布衣等候座、小時前大納言邦綱參上、見中將在座退歸、更居座前板敷、余雖示可

着座之由、敢不承引、中將可居止之由頻以示

之、中將又辭之、已經數刻、仍余可令起中將之

由、依示亞相、驚而着中將上、事畢亞〔相〕中將、共

以起座、爲取布施也、中將先取被物、次亞相以

之、後聞中將雖固辭、邦綱強請先令取之云々、萬

人褒亞相云々、事了女院還御御所、

此日邦綱語云、雖被遣官兵、堂衆等無引退之氣

云々、

今日朝問神事、依奉幣春日也、

八日、壬〔天〕晴、去夜官奏、去年左大臣、直經房朝臣申刻、史成舉持

來奏報、并圓宗寺寂勝會日時僧名等、此日大外記賴

業、召具式部頭、明日可參之由、仰遣之、光經今夜

俄被行叙位、從三位藤師家、只一人也上卿藤大納言云

云、明日除書、可補中納言云々、生年八歲、

九日、癸〔天〕陰、但不降雨、此日京官除目也、午刻、大

外記賴業真人來、使家司光經朝臣賜公卿給、加三任卷一龍一并可賜式部二合停任勘文件二通卷一龍一等紙結中、并可賜式部二合停任勘文紙二不通卷一龍一等紙結中、式部丞各稱、障不參之由、賴業令申之故也、次賜硯筆墨等、裝樣印、年來一、此次余問云、典藥寮醫師、在被官博士也、加三醫下、舊大間等、每度如此無異途、而陰陽寮陰陽師、或在被官博士也、加三陰陽下、或在被官上、屬下是非如何、申云、外記所存、陰陽師可在被官上也、重仰云、異典藥寮之條、有由緒哉如何、申云、不知由緒、只年來例也云々、所申不分明、申刻、六位外記持來闕官帳、留文返給宮、如常、同刻光能朝臣相觸云、今日除書、殊以可被忍行、秉燭以前可參內者、戊刻着束帶參內、關白只今被退出、了、光能又參院了云々、上下一切未參、余參御所方、謁女房云云、拾遺事被申院了、有沙汰云々、子刻、關白參內、同刻光能朝臣歸參、小時余着陣、先與、令置軾、先是實房、時忠、實綱等在座、右大辨長方參加、次光能朝臣仰召仰、余召外記賴業、辨無光、等、各仰之、次藏人道業來召、次召外記、六位、仰宮文可候之由、小時宮文列立小庭、外記二人、史生一人、次余已下列立弓場殿代、如例年、外記立納言後了、余揖納言已、着殿

上端座、關白在、次關白及余、此間余、着御前座、次實房、時忠、實綱等、置宮文、着座、先是執事座前、切燈臺無可置宮文之所、仍余申關白召男共、五位藏人基親參上、仰之、可直之由、即基親直之、猶雖不正、強不仰之、已宮文公卿、參進之故、次參議一人着座、實宗、次依召關白及余、着圓座、關白傳召余、若我座、如常、次依仰奏關官帳、次繆大間、三寸、次任式兵、次召院宮御申文、右中將實宗、次任民部、次關白撰給袖書申文、先是被給大東申文、次注袖書、書兩三通之間、實宗持參院宮御申文、余取之傳關白奏之、書袖書了、召右大辨長方、令下勘、仰文、關白返給院宮御申文、一度引禮紙、注之如常、任人注文、此中中宮御給御申文、與折紙有相違、申關白之處、可因折紙者、仍件御申文入第三宮了、又八條院二分代御申文、在此中、同入第三宮了、先見合注文、任之者、收、入第三宮也、云々、又皇太后宮御給、書樣雖有違例、依載注文、任之、御申文加成文了、及三通之時成束如常、但箇中紙檢忘却參內、仍忽、次任課試、問者生任文章生之處、不見注文、申關白、答云、下名之次可有沙汰者、仍不任之、次任諸京官、不論五位六位、一列官任之、此由先關白、々々、照善、是及終頭召轉任勘文、光能朝臣、所任只史一人也、外記式



部雖有闕、不被任之、又民部丞二人、今度可叙爵、其替一人被任之、余申關白云、不召轉任勘文、任新任者、恐及少丞四人歟、欲召勘文者、敘位可在除目之後、外記不可知叙人、於理有妨、叙人爲大丞者、暗可轉任歟、此條已此先例、此等之間、持疑難決、但猶可召勘文歟、先規粗存、證事記不覺悟、堀川左府執筆之年也、隨又余執筆、有如此事、依彼例所召勘文也、然而此等子細不申出、爲關白處分所申、時、外記雖不知叙人、依召進勘文、可准據也、此關白云、誠由又不申出、有憚之故也、只中心所准據也、雖無理事、又不召勘文者、爭可行轉任哉、早可召者、仍召光能朝臣、仰叙人名、令進轉任勘文、任之、于時未被下顯官申文、仍余申驚、關白被命云、所在只史申文一通也、民部初負等、雖有任人、無申文、以何可撰上哉、加之秋除目、必無顯官舉云々者、仍今日無顯官舉、余所思、素職事不撰入顯官申文、勿論々々、猶無顯官舉也、此間所下勘之申文等、猶未進、仍相尋之、此間相觸關白、且任公卿官等、凡所載注文之者、皆悉任了、小時長方持參下勘申文等、余取之次第令任、此中皇太后宮未給二分代內舍人在注文、而稱有誤、外記留申文不之上之、仍余申關白云、今

夜不被任之、下名之次可有沙汰歟、將又以女臨時內給可任歟、答云、只可任、仍任了、時內給者、凡名替國替等申文、其數太多、悉令任之間、諸國介、一度除目、殆欲及廿卅人、少々可被略歟之由、觸關白、關白被諾、仍所望國無闕之申文等、不任之、其外一兩申文略之、皆悉任了、取笏伺天氣、卷大間入成文宮、關白二卷、移入次宮、取笏候、依仰召男共、藏人參上、問五位藏人候否、申基親候之由、仰可召之由、即參上、余仰云、續紙、基親退下、盛續紙二卷於柳宮、持參之、余取續紙、不取、置前取笏候、依仰見合續紙、取勝、今一卷入、向座下、第三宮、繆置卷返之、即摩墨叙之、叙人、向座下放紙殘、叙位事、卷叙位入大間宮、放殘紙入、取出成文、置第三宮下方、東西、以右手取上大間宮、左手押硯指笏、更押下硯已下、取大間宮、氣色關白、進簾下奏之、小退拔笏候、返給之時、指笏取宮復座、拔笏置替宮、取寄成文、置硯上封之、加入大間宮、又置替宮指笏、取大間宮、深揖起座、於殿上御倚子前、授清書上卿、實綱卿歸出上戸、退出於弓場殿、忽思出招兼光、下知檢非違使宣旨、此次兩息一度洛朝恩、畏申之



旨、可<sub>レ</sub>奏之由示付、退出了、須拜也、然而事珍重之時、可<sub>レ</sub>如此、常途不可<sub>レ</sub>必然、是近代例也、清書參議定能卿云々、于<sub>レ</sub>時丑終寅始程歟、關白息師家、去夜叙<sub>二</sub>從三位、今夜任<sub>二</sub>中納言、當時執政之息、雖<sub>二</sub>此左右事、年齡八歲、古今無<sub>レ</sub>例、經<sub>二</sub>今一兩年、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任、有<sub>二</sub>何怨<sub>一</sub>哉、但今年可<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>春日使、而爲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>其事、又爲<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>明年上卿、所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>忿任<sub>一</sub>云々、兼房、基通、隆忠、良通、皆被<sub>二</sub>超越<sub>一</sub>了、各更不可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>愁、攝錄之嫡子、先代無<sub>二</sub>相爭之人<sub>一</sub>之故也、就<sub>二</sub>中於<sub>一</sub>良通者、今度被<sub>レ</sub>叙<sub>二</sub>正三位、面目可<sub>レ</sub>足、基通爲<sub>二</sub>權門之親呢<sub>一</sub>、定有<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>爵<sub>一</sub>歟、抑今度良通加級、兼不<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>、又不<sub>二</sub>思寄<sub>一</sub>、暗有<sub>二</sub>此恩之條<sub>一</sub>、若依<sub>二</sub>超越之條<sub>一</sub>、惜<sub>二</sub>歟、全不<sub>二</sub>愁思<sub>一</sub>之處、遮以被<sub>レ</sub>塞<sub>二</sub>爵之條<sub>一</sub>、過分之朝恩也、何況良經任<sub>二</sub>侍從<sub>一</sub>者、今度除書超越、惟非<sub>二</sub>愁恩賞<sub>一</sub>、惟可<sub>レ</sub>悅者歟、兼光叙<sub>二</sub>四品、少辨勞云々、又親經補<sub>二</sub>五位藏人<sub>一</sub>、父俊經辭<sub>二</sub>大辨<sub>一</sub>所<sub>二</sub>申補<sub>一</sub>也、今夜注<sub>二</sub>袖書<sub>一</sub>之間、有<sub>二</sub>勅盃<sub>一</sub>、先是居<sub>二</sub>火櫃<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>常<sub>一</sub>、頭中將通親朝臣、瓶子基親、今夜除目以前、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>邦綱卿辭書<sub>一</sub>云々、余着<sub>二</sub>陣之<sub>一</sub>後、光能招<sub>二</sub>出實綱於陣腋<sub>一</sub>下<sub>レ</sub>之云々、今日於<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>、人々語云、維摩講師成寶、東大寺、興福寺、惟方子、

衆徒、可<sub>レ</sub>退出<sub>一</sub>之由結構、是稱<sub>二</sub>年少之由<sub>一</sub>云々、然而慥可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>遂之由<sub>一</sub>、長者被<sub>レ</sub>命云々、又延曆寺堂衆等、初擲<sub>二</sub>進張本<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>學生之由<sub>一</sub>、進<sub>二</sub>怠狀<sub>一</sub>云々、而猶官兵等向攻之間、於<sub>レ</sub>今者、稱<sub>二</sub>不可<sub>レ</sub>惜<sub>一</sub>身命之由、欲<sub>二</sub>相戰<sub>一</sub>云々、十日、甲〔天〕晴、午刻、外記持<sub>二</sub>來大間成文、硯筆墨等<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>懈怠之由<sub>一</sub>、申云、卯刻清書了、其後路次中間之間、遲々云々、依<sub>二</sub>奇惟<sub>一</sub>暫令<sub>二</sub>召候<sub>一</sub>、申刻給<sub>レ</sub>暇了、此日仁和寺宮、法皇子、御爲<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>戒被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>、殿上人廿人、僧三十人、此中坊官々人、出世者々人、前驅、僧綱五人、公卿五人扈從、車馬連<sub>二</sub>路<sub>一</sub>、見者如<sub>レ</sub>垣云々、今日關白被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>慶賀之狀<sub>一</sub>、余又申<sub>二</sub>中納言中將之慶<sub>一</sub>、又宗家、資賢等之許、示<sub>二</sub>悅由<sub>一</sub>、今夜下名云々、今日、余自作<sub>二</sub>公卿給書<sub>一</sub>、除日記、此夕中宮退<sub>二</sub>出八條亭<sub>一</sub>云々、十一日、乙〔天〕晴、未刻、大外記師尙來、依<sub>二</sub>兩息之慶<sub>一</sub>歟、余仰<sub>二</sub>本朝世紀可<sub>レ</sub>借進<sub>一</sub>之由、申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>持參<sub>一</sub>之旨、件文信西法師作<sub>レ</sub>之、寬平一代國史云々、而給<sub>二</sub>師元朝臣<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>寫之<sub>一</sub>、傳在<sub>二</sub>師尙之許<sub>一</sub>、他人一切不<sub>レ</sub>持云云、仍所<sub>二</sub>尋召<sub>一</sub>也、

見下名聞書、朝方任中納言、光能任參議、經房補藏人頭、朝方任納言、恐心不甘心、參議昇納言者、古來賞任日、不論位階、而八座之中、家通任日之一也、實守兼數々之理、數位之中、兩二品亞將、世之所推、尤當此仁、乍置此等之輩、忽以任除、非道理歟、又賴實爲一上之嫡子、今度之頭尤可補歟、但經房又得其理歟、只賴實微連之令、然歟、今夜爲御方違、幸法住寺殿、明夕可還御云々、今日定能來談、

十二日、丙申〔天〕晴、今日行幸還御云々、去夜行幸、公卿只一人供奉云々、希代事歟、

十三日、丁酉〔天〕晴、今晚、法皇參籠八幡給、十ヶ日可御座云々、

十四日、戊戌〔天〕晴、大外記師尙、持參本朝世紀上帙十卷、信西法師抄〔出也〕、

十五日、己亥〔天〕晴、大夫史隆職參上、入夜季經朝臣來語云、光經所勞大事云々、大略中風云々、

十六日、庚子〔天〕晴、長光入道來談、光經所勞事、自去十日、殊增三四日一切不食、但神心無惱亂、

十七日、辛丑〔天〕晴、今夕遣古歌等於重家入道之許、令

撰之、夜半撰了進之、

十八日、壬寅〔天〕晴、此日密々歌合也、左右分方、撰歌所合也、今日俊惠已下、左方人等、參會殿中、令撰

之、及秉燭撰了、清書之後合之、歌人七八人〔許〕參上、題十首、歌人廿人、左十人、右十人、各數日瀝思、凡今度會、以秀逸出來爲望、心中祈願之、今夜不付

勝負、明日遣俊成入道之許、可令判也、依爲桑門不座列、又依判者不接座、其儀密々也、余詠

稱女房事了、傳聞今日申刻、光經朝臣卒去云々、仍即以使者遣長光入道之許、凡前後不覺云々、余

聞此事、悲歎無限、不能左右云々、

十九日、癸卯〔天〕晴、亥刻、權右中辨兼光、轉任之後拜賀、職事國行申次之、傳聞追討延曆寺堂衆使、更被

仰兩人、知盛、經盛等卿云々、

廿日、甲辰〔天〕晴、今日遣一昨日歌合於皇太后宮大夫入道後成、法名釋阿之許、示可付勝負之由、以使者訪

長光入道、

廿一日、乙巳〔天〕晴、及晚參女院、傳聞右大辨重方、補勸學院別當云々、權右中辨兼光爲執臣、當其

仁、重方強非可被毀應之人、是前相國被申請之

故云々、資長大歎息云々、

廿二日、丙午〔天晴〕隆職注<sub>二</sub>送去夜臨時除目、被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>修理宮城使、造東大寺使、防鳴河使等<sub>一</sub>也、此次中納言〔之〕中將、被<sub>レ</sub>叙<sub>二</sub>正三位、余即以<sub>二</sub>消息、申<sub>二</sub>關白御許<sub>一</sub>了、

廿三日、丁未雨下、入<sub>レ</sub>夜兼光、送<sub>二</sub>書於基輔之許<sub>一</sub>曰、中納言中將、拜<sub>二</sub>賀女院、并右大臣殿御方、申次可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>也云々、黃門可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>來<sub>二</sub>余亭歟、抑大臣家々司、可<sub>二</sub>申次歟、而自<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>就、基輔未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意、然而只可<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>本所命歟、疑者兼光、不<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>知先規<sub>一</sub>相觸歟、仍私重可<sub>二</sub>尋遣一定之由、召仰了、使者歸來云、只所<sub>レ</sub>申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由也、忿々之間、以<sub>二</sub>他筆<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>申、仍如<sub>レ</sub>此僻事出來了、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>云々、

廿四日、戊申陰晴不定、時々小雨、午刻法皇御入洛、日來所<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>龍八幡<sub>一</sub>給<sub>二</sub>也、〔自〕今日、被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>法勝寺大乘會<sub>一</sub>云々、今日中御門大納言之許遣<sub>二</sub>車、相<sub>二</sub>具下簾楊輶等、彼人遣<sub>二</sub>牛取<sub>一</sub>之也、

廿五日、己酉〔天〕晴、此日中納言中將、師案、爲<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>可<sub>二</sub>來臨<sub>一</sub>云々、仍早旦裝<sub>二</sub>客亭<sub>一</sub>、其儀尋常上達部座敷<sub>二</sub>滿弘筵<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>兼<sub>一</sub>鑑、南西北三方立<sub>二</sub>廻四尺屏風六帖<sub>一</sub>、北第一

間敷<sub>二</sub>高麗端盤一枚、爲<sub>二</sub>余座<sub>一</sub>、同第三間北柱下敷<sub>二</sub>同疊一枚、其上加<sub>二</sub>地鋪<sub>一</sub>、記敷<sub>二</sub>青端圓座<sub>一</sub>、座也、爲<sub>二</sub>中納言中將座<sub>一</sub>、件座、苗則座之間、以持<sub>二</sub>疑之處、寬仁之比、長案細圓座等<sub>一</sub>云々、加之案<sub>二</sub>事理、大臣之時可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>苗、納言已下、尤可<sub>レ</sub>敷<sub>二</sub>圓座也、彼祭使出立所、納言座用<sub>二</sub>苗、參議座用<sub>二</sub>圓座者、是享主者爲<sub>二</sub>侍臣、尊客者爲<sub>二</sub>卿相<sub>一</sub>、仍其禮過<sub>二</sub>法、納言用<sub>二</sub>苗、不可<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>今日之儀<sub>一</sub>、又上表勅答使座用<sub>二</sub>苗、是又不可<sub>レ</sub>相比<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>勅使之間、不可<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>凡<sub>一</sub>之儀<sub>一</sub>之故也、弘庇不<sub>レ</sub>敷<sub>二</sub>筵、依<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>夜兩座之間、逼<sub>二</sub>西屏風<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>燈臺一本<sub>一</sub>舉<sub>二</sub>燈<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>打戊刻、中納言中將、來立<sub>二</sub>中門外<sub>一</sub>、家司左京權大夫光盛相逢、歸昇申<sub>二</sub>事

由、余<sub>二</sub>座<sub>一</sub>、殿殿四第一間裏月內、件間即余降<sub>二</sub>立梅樹下<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>出<sub>一</sub>几帳、以東六々間皆出<sub>二</sub>几帳<sub>一</sub>、即余降<sub>二</sub>立梅樹下<sub>一</sub>、南美作守基輔朝臣、殿上四位持<sub>二</sub>次中納言中將入<sub>二</sub>中門<sub>一</sub>、對余來<sub>二</sub>否<sub>一</sub>、隨身等取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>來向、

而立<sub>二</sub>一揖<sub>一</sub>、次相共再拜、次余目<sub>レ</sub>之、納言答揖一兩度之後、余還昇着座、次納言昇<sub>二</sub>自<sub>二</sub>南端<sub>一</sub>着座、次自<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>引<sub>二</sub>出馬一疋<sub>一</sub>、左馬權助源國行、藏人五位左兵衛尉藤原重清等引<sub>二</sub>之、隨身番長忠武、取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>前行一匝之後、於<sub>二</sub>中門下<sub>一</sub>、壹岐守盛業受<sub>二</sub>取<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、此間於<sub>二</sub>中門方<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>隨身腰指<sub>一</sub>、府生二疋、番長以下五人一疋、諸司官次中納言起<sub>二</sub>座、經<sub>二</sub>本路退出<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>了云々、余裝束如<sub>レ</sub>例、藤輪銀紺地平緒被<sub>レ</sub>參所々、

內、東宮、院、此第、皇嘉門院、中宮、前太政大臣等、共人、前駟〔等〕可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>記<sub>一</sub>之、



子刻、中御門大納言宗家、爲拜賀來、職事國行出逢、稱<sub>二</sub>出行之由、是先例也、寬治六年彼曾祖宗俊卿、任大納言、爲拜賀<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>內大臣<sub>二</sub>殿<sub>一</sub>、第<sub>二</sub>稱<sub>二</sub>出行之由、自他吉例也、仍逐<sub>二</sub>彼跡<sub>一</sub>也、次被<sub>レ</sub>參女院御方、余於<sub>二</sub>彼御所<sub>一</sub>對面了、車劔平緒笏等、余所<sub>二</sub>借與<sub>一</sub>〔用〕也、牛關白云々、

後聞、於<sub>二</sub>關白亭<sub>一</sub>無<sub>二</sub>答拜儀<sub>一</sub>、只給<sub>レ</sub>馬、是保安宗忠〔公〕、任<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>〔之時〕、被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>故殿<sub>一</sub>之儀、如此云云、

廿六日、<sub>戌</sub>〔天〕晴、早旦以<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>納言來臨之畏於關白<sub>一</sub>、宰相中將定能來談、

廿七日、<sub>亥</sub>〔天〕晴、右少史倫職、持<sub>二</sub>來大乘會立紙<sub>一</sub>、

廿九日、<sub>丑</sub>陰晴不定、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>有<sub>二</sub>犬死穢<sub>一</sub>、

卅日、<sub>寅</sub>〔天〕晴、法皇自<sub>二</sub>來月二日<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>籠<sub>二</sub>給賀茂<sub>一</sub>、而延引云々、仍侍從來五日可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>、

### 十一月〔小〕

一日、<sub>卯</sub>〔天〕晴、今日、中納言中將着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>所<sub>一</sub>云々、入<sub>レ</sub>夜被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>云々、今夕、權大納言資賢卿拜賀云々、今日四不出日也、然而依<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>、人々不

憚歟、

二日、<sub>辰</sub>〔天〕晴、申刻參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜史持<sub>二</sub>來觀音灌頂立紙<sub>一</sub>、此日所々申次事、各可<sub>二</sub>相觸<sub>一</sub>之由、仰<sub>二</sub>光盛<sub>一</sub>、

三日、<sub>巳</sub>〔天〕晴、光盛進<sub>二</sub>所々申次人請文等<sub>一</sub>、其內親宗朝臣<sub>方</sub>、返事云、法皇御<sub>二</sub>參<sub>一</sub>籠蓮華王院、仍不被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>事無<sub>一</sub>便宜、隨<sub>二</sub>重仰<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、重仰

云、此三位中將元服之時、法皇及建春門院、御<sub>二</sub>參<sub>一</sub>籠寂勝光院、雖然參<sub>二</sub>其御所<sub>一</sub>、遂<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、但依<sub>二</sub>不被<sub>レ</sub>渡<sub>一</sub>殿上、雖<sub>二</sub>無<sub>一</sub>昇殿之儀、藏人於<sub>二</sub>本殿上<sub>一</sub>、竊

書入<sub>レ</sub>簡了、且是依<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>也、今度不可<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>違彼例<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>遣親宗朝臣之許<sub>一</sub>之旨、仰<sub>二</sub>光盛了<sub>一</sub>、即親

宗返事到來、存<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、又頭辨經房之許、光盛以<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>仰遣<sub>一</sub>、重以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>、信光、注<sub>二</sub>子

細於折紙、條々示遣、歸來云、皆存<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、昇殿之間事、<sub>對賀首</sub>當日早旦、以<sub>二</sub>六位藏人<sub>一</sub>、可

被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>御裝束<sub>一</sub>事、<sub>是內々事也、兼日申<sub>二</sub>置女房了<sub>一</sub>、申次之人、無領狀之人者、自<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>可<sub>二</sub>相語<sub>一</sub>事、又今度逐<sub>二</sub>仁</sub>

平元年例、<sub>故攝政殿、元服夜不被<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、後日拜賀、次<sub>有<sub>二</sub>初參<sub>一</sub>、仍其儀同、今度之被<sub>レ</sub>逐<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>耳、</sub>之由等也、</sub>

今夜有<sub>二</sub>燒亡<sub>一</sub>、別當時忠卿家近邊云々、人傳云、山大衆猶以鬪諍、官兵等雖<sub>二</sub>向<sub>一</sub>坂下、不能



攻山上、徒抑留坂東運上之人物等之外、無他事云々、又堂衆等、燒拂學生等城了云々、

〔治承三年十一月〕

五日、己〔陰〕、午上小雨、未刻以後止、此日侍從良經拜

賀也、去八月廿五日、被許禁色、九月依有憚、未遂初賀也、參同、去月九日任侍從、仍今日拜賀、初參所相兼也、未刻、

自院賜御牛、黃牛、左近將曹秦賴文爲御使、於南

庭見之、賴文牽之、即於中門下侍受取之、更召

返賴文賜衣一領、女房衣也、美作守基輔朝臣、傳

之、賴文取之退出、牛童飼口等給祿、宣布五段、飼口二段、

申刻、源中納言雅賴、東帶、須着直衣、新宰相中將定能

東帶卷襪、等卿來、各爲訪侍從拜賀也、余出客亭、欲出立之間、依內裏、

裝束、牛臂下裏、表袴裏赤色打民部權少輔宗雅人、受取

之、傳女房、依爲密々事、不賜祿、先例也、仁平元年四月、

仕之日、自內裏被賜御裝束、即當日早旦、六位藏人爲御使、持

之、依內々事不賜祿之例也、彼度被下、淡色御衣、依幼主則、今

紅色也、本所依寸法相違、頗縫縮之、即刻出立、着相裝束、

位袍、打下裏、黑牛臂、紅打和、萌黃和二領、紅單衣、縮縫裝束、紅

幼雅之者、若淡色也、然而依申、內御裝束所着紅色也、定

成、信光等奉仕之、此間定能卿來着裝束之所、

戌刻、着裝束了、先參院、御參籠蓮花王院云々、須先

拜余及女房也、而依遲之恐、先所令參也、入自

南門、於御所邊、付別當右中辨親宗朝臣、奏事由、

一度仰拜舞之後、依召參御前、定能卿豫參候、親宗相

共扶持、頃之退出之間、親宗朝臣來仰云、着裝束

又可參云々、依不被渡殿上、無昇殿之儀、藏人

直書入簡丁云々、次欲參中宮之處、已行啓入、云

云、仍先參博陸第、於中門付職事親光、保闕、權辨祿

物之所勞、僅件人、申事之由、再拜、依召參簾中、即

退下之間、賜風笙、兼定傳、宗、次參內、於殿上口、付右

少將基範、奏事由、拜舞、依召參朝餉方、頃之退

出、於殿上口、撤劍笏、着殿上、先日被仰昇殿、藏人

通業付簡、頭左中辨經房朝臣對座、湯漬之後、退下、更

帶劍把笏、經堂上參東宮御方、付權大進經仲、

啓事由、再拜、昇殿事、後開、突重衛朝臣、而不次於中宮御

方、付大進右少辨基親、啓事由、再拜、次參皇嘉門

院、付別當基輔朝臣、申事由、舞踏之後、雖可有

昇殿之儀、依及深更略之、且又依召直以參御

前、次來余第、付基輔朝臣、申兩方拜、余及女房共

二拜、先余、次女房、次招入簾中、差食、即歸南宅、

出仕雜事、

車、炭千島、

牛、院御牛、(安女牛、)

牛童給<sub>二</sub>常色<sub>一</sub>、崩木上下款冬衣、依<sub>レ</sub>制不<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>單衣重帷<sub>一</sub>、又用<sub>二</sub>布下袴<sub>一</sub>、

雜色十人、

童一人、前內舍人友成子、給<sub>二</sub>常色<sub>一</sub>、半蘇芳上下、(唐絹也)黃衣、青單衣、依<sub>レ</sub>制不<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>打衣<sub>一</sub>、

衛府番長忠武、標上下、款冬衣、

共殿上人、右馬權頭基輔朝臣、民部大輔宗雅、

同諸大夫、上野守賴高、左馬權助國行、

路頭、雜色二人、乘<sub>レ</sub>燭前行、家例也、

今日拜賀以前、奉<sub>二</sub>幣春日<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例、陪膳行賴朝臣、

奉行信光、陰陽師晴光、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>幣取<sub>一</sub>、職事取<sub>レ</sub>之立、

今日神齋如<sub>レ</sub>常、

六日、庚申陰晴不定、戌刻許人告云、女院御方寢殿內煙

滿、然而未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其燭<sub>一</sub>云々、即馳參、天井上板敷下等、

雖<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>見廻<sub>一</sub>敢無<sub>レ</sub>之、疑風爐薪煙歟、遂無<sub>二</sub>奇事<sub>一</sub>、仍退

出、依<sub>二</sub>此騷<sub>一</sub>、近邊人々多參入、

七日、辛酉(天)晴、此日臨時七社奉幣云々、殿上人爲使、

依<sub>二</sub>梅宮祭<sub>一</sub>奉幣如<sub>レ</sub>例、陪膳行賴、奉行定成、陰陽師有

親、亥刻、大地震無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>、

八日、壬戌(天)晴、此日三位中將拜賀也、早旦修<sub>二</sub>諷誦<sub>一</sub>於

三ヶ寺、吉田、崇神院、所々申次事爲<sub>二</sub>光盛奉行<sub>一</sub>、昨日觸

遣了、乘燭着<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>、色目如恒、時給螺鈿、紫淡平結、有文帶、

也、先々慶賀之時、每度先申<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、申次經、次參<sub>二</sub>院<sub>一</sub>、申次

所用也、不<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>打衣<sub>一</sub>、朝臣、有<sub>二</sub>御前召<sub>一</sub>、御前召、御前召、御前召、次

花王院、定能<sub>二</sub>參會<sub>一</sub>云々、御前召、御前召、御前召、次

中宮御方、申次大進左、次東宮御方、藏人中<sub>レ</sub>之、亮橋亮、并兩大

見參、付<sub>二</sub>藏人<sub>一</sub>、次參<sub>二</sub>關白<sub>一</sub>、家司中宮權大進光綱申<sub>レ</sub>之、被<sub>レ</sub>招

申入云々、入<sub>二</sub>出居<sub>一</sub>云々、依<sub>レ</sub>所勞<sub>二</sub>不出<sub>一</sub>客

卒<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、先以<sub>二</sub>次參<sub>一</sub>八條院、申次別當、經家朝臣、依<sub>レ</sub>召參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>云々、

外、次來<sub>二</sub>余第<sub>一</sub>、共殿上人、申<sub>二</sub>兩方<sub>一</sub>、次歸<sub>二</sub>參女院<sub>一</sub>、

共人、中務權大輔經家朝臣、治部大輔季信、前駟六人、

前皇后宮大進長經、上野守賴高、前豐前守能業、左

馬權助國行、前筑前權守良盛、但馬權守長俊、

隨身三人、今一人不參、仍召<sub>レ</sub>假、(各自垂袴壺胡錄、)無<sub>二</sub>一

員、是天永、故殿、保元當時、等吉例也、

毛車、牛、牛童大小院丸、

雜色十人許、

兩人拜賀、院御物籠等指合、又依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>遲

引也、

九日、癸亥(天)晴、入<sub>レ</sub>夜中御門大納言來、問<sub>二</sub>內辨事等<sub>一</sub>、

所宿候、依三方達也、

十日、甲〔天〕晴、午刻歸宅、申刻、定能卿來、問節會之間〔不審、各々〕所存報答了、多是參議作法也、仍雖有不知案内事等、且加今案、且依舊規耳、

十一日、乙〔天〕晴、此日五節參入也、公卿、中納言朝受領、遠江、入夜甚雨、即晴、今夜不出仕、密々有和歌、抑五節參入、中丑也、而有丑二之時、或用上丑、或用下丑、是用新嘗會、中前丑之故也、有帳臺御出云々、

十二日、丙〔天〕晴、五節殿上淵醉、御前試等、如例云云、

十三日、丁〔天〕晴、此日童女御覽也、申刻着直衣、

出、表香裏青厚衣、其表唐物也、裏平絹也、薄色堅文織物指貫、半葎車、圍身上藤冠如恒、參內、于時殿上淵醉之間也、於年中行事障子許、主上御覽、關白相具

中納言中將被候、余依召同參候、女房一兩候、頭中將通親朝臣已下、殿上人十人許在座、頭辨經房未

參、亂舞了、主上入御、關白、余、中納言中將等候、御共、於對東面御覽、殿上人廻五節所如例、女房等

居出又如例、殿上人廻了、此中、待從時宗、(時忠子)通宗

水置之、共次余着殿上、如常、先、是實國、裏、紅梅、結、衣、薄色綾、

將、時忠、淺黃奴袴、等、在座、次中納言中將、經右青環

門小板敷等、不、出、衣、關白至、右青環門下、被、相具、少將顯家朝臣同被

着端座、出、衣、不、此、此間頭辨經房朝臣參上、頃之頭中將

入、自、上戶來召、余已下參着御前座、今日、以四座數、二

座、小時童女等參上、經西長押、居廣西第二間東邊以

西、各殿上人等付之、新中納言朝方童女、待從實保、少將實明付

人、在下仕同參候庭中、先、一所、下仕參上之皆悉參上了、

甲斐參入御覽、置扇、或直置之、或殿上人小時各取扇、自廣

庇東廻、更左廻退下、遠江童一人、早速退下、仍兼次皆退

下、次公卿自下薦退下、余直參御所方、此間通親朝臣

答可參之關白同被參、各賜櫛兩三鬘、次余退出、今

日關白、淺黃綾指貫、不被出衣、候、簾中付童、殿

上人中實保不出衣、自餘皆出之、他殿上人皆不出

之、但時宣一人出之、

十四日、辰晝間天陰、時々小雨、晚頭以後天晴、此日豐

明節會也、戌刻着束帶、飾、魚袋、有參內、先參御所

方、關白被候、即余就陣與座、相次定房、實房、已上、大

等參着、次參議三人、賴定、實宗、同着座、次頭中將通親朝

臣來仰內辨、次余移外座、令官人置軾直沓、以

同官人召大外記、則賴業真人就軾、仍問云、諸司、



候哉、國栖酒正、候哉、小忌、候哉、外記申云、參議候、次  
仰云、外任奏、候哉、申、候之由、每度申、候、上卿連參云々、外記申、候  
之由、仰云持、參之、次賴業持、參之、余置、笏引、寄宮、  
開、禮紙於宮中、二倍、見了、此間賴業、招、頭中將、付、之、  
乍持、笏、於、右手、押折、退下、、此次奏云、小忌上卿連參、參議、且可  
被、行歟者、頃之頭中將歸來、返、給外任奏、余結申  
如、恒、通親仰、可、令、候、列之由、并小忌上卿雖、不參  
且可、被、始行、之狀、次余召、賴業、下、外任奏、乍持、  
例、如、、仰、可、令、候、例之由、不、仰、小、、次示、可、被、就、外  
辨、之由、於諸卿、次定房已下就、外辨、次余起、座、於、  
陣下屏外、着、靴、令、押、笏紙、笏、上、置、一寸四五分許、是故實、  
也、次取、笏、經、陣前庭、進、中門邊、此間以、隨身、長、忠、武、押、  
之、、見、引、陣哉否、未、引、陣、仍頻加、催、未、御、南殿、仍  
不、引、陣云々、此後及、一時、仍余於、陣邊、休息、數刻  
之後、刻、子、、主上渡、御南殿、近將引、陣、即出御、居、胡床  
云々、仍余入、自、中門、着、宜陽殿代元子、如、例、次內  
侍出、次謝座、參、上之議如、例、今夜、向、西、揖、向、乾、再拜、、次開  
門、順、座、上、、次開司分居、同、順、座、上、先、催、、次召、舍人、二音、次  
少納言小忌、着、版位、預、知、、次仰云、刀禰召、少納言唯  
出、次外辨參、列、小忌、參、議、定、能、爲、上、首、、次仰、敷尹、次外

辨謝座、謝、酒着、座、爲、先、、次人々訪、五節所、小忌、在、座、  
右兵衛督光能一人留、座、此間采女撤、御膳、即供、  
晴御膳、余及光能立、供了居、次供、腋御膳、次仰、光  
能、令、居、粉、此、事、有、兩、說、或、待、諸、卿、歸、着、令、居、之、或、不、  
能、令、居、粉、、待、居、之、故、殿、內、辨、之、時、如、此、仍、不、待、居、之、  
光、能、下、殿、催、之、即、居、之、先、居、小、忌、座、於、粉、、然、而、小、忌、座、  
之、也、、光能申上、余乍、居、候、天氣、御箸鳴、次臣下下  
箸如、恒、次供、御飯、次令、居、臣下飯汁、光能欲、下  
殿、余命、之、不、令、下、殿、仍以、內、豎、催、之、此間諸  
卿歸、着、座、居、飯汁等了、申上下、箸如、常、次供、白  
酒、給、臣下、不待、居、訖、食之、余、定房等如此、他人不  
食、之、光能申、上、之、不、知、案內、歟、次供、黑酒、  
次給、臣下、次供、一獻、次臣下一獻、兩、行、唱、平、、次仰、光  
能、催、國栖、光能下、殿、催、之、一節了復座、次供、二  
獻、此間主上入御、諸卿起、內侍取、劔、歸入之後  
居、寶、宗、御、稱、、次、勸、臣下二獻、次召、賴定、其、詞、政、大、夫、先、  
定、房、、仰、御酒勅使、次三獻、大歌別當定房卿下、殿、此  
後良久不、發、歌、笛、暫而發、之、次余召、寶宗卿、其、詞、  
近、イ、讓、ノ、權、、召、大歌別當、其、詞、大、イ、物、、申、藤、原、朝、臣、、定房復座、次仰、光  
能、令、下、小忌大盤、又問、大歌參哉否於定房、此間舞  
姬參集、大歌發、笛、舞姬舞了退下、次舞姬拜、小忌、余、



讓定房卿着陣、見宣命見參等之作法如例、於  
 軾令外記指宣命見參於一杖、共指之進弓場殿、付  
 基親奏之、返給至軒廊、取宣命見參、則副笏參上、  
 着座召賴定、賜宣命、召光能、賜見參、小忌已下  
 下殿、余不立拜、逐電、密々參御前、(即退出)、  
 抑見參參議四人、家通賴定、實宗、光能等也、而本所思定、宣命使家  
 通、御酒<sup>〔勅〕</sup>使賴定、召大歌、實宗、祿所光能也、而家  
 通早出了、件人着端座之間不知之、仍召大歌之  
 時、須用光能也、而召實宗之間、宣命使、祿所、依  
 難相兼上薦、勸兩役、尤無心也、實宗、賴定、其光能  
 之上薦也、兩人之中、誰人可勸宣命使哉、廻思慮  
 之處、宣命使、上薦所勸也、仍點賴定、又件人先々  
 對揖如此之役、頗奇怪、仍所點兩役也、召大歌之  
 時、不問傍人召之、愚昧之所致也、仍始終違亂、  
 然而又非無如此事之例、

今日座後無所、仍經南庇、入自座當間、着元子、  
 是又例也、

今日入道相國入洛、宗盛卿去十一日首途、令參嚴  
 島、而自路呼還、相共上洛、武士數千騎、人不知何  
 事、凡京中騷動無雙、今夜出仕雖非無所恐、爲

勸公事出仕、不可有橫災之由、深存忠、仍令  
 企參仕之處、果以無爲、凡洛中人家、運資財於東  
 西、誠以物怨、亂世之至也、

十五日、己〔天〕晴、凡世間物怨無極云々、無聞實  
 說、子刻人傳云、天下大事出來云々、不聞委事之  
 間、寅刻、大夫史隆職注送曰、  
 關白藤基通、

內大臣同、

氏長者同、

止關白、

藤基房、

止權中納言中將等、

同師家、

上卿權中納言雅賴、職事中宮權亮通親、

詔書宣命等、權辨兼光作之云々、

余披見此狀之處、仰天伏地、猶以不信受、夢歟非

夢歟、無所辨存、此事由來者、法皇收公越前國、

故入道內大臣知行、并被補白川殿倉預、

前大舍人頭兼盛

已上兩

事、法皇過怠云々、三位中將師家、超二位中將基通

任中納言、師家年僅八歲、古今無例、是博陸之罪科

也、凡此外法皇與博陸同意、被亂國政之由、入道相國榮緣云々、然之間昨曰夕、禪門率數千騎隨兵、入洛之後、天下鼓騷、洛中遑動、敢不可云、今日及昏黑、中宮、東宮〔兩宮〕、忽欲幸八條亭、自被奉相具、可赴鎮西方之由風聞、已兩宮行啓供奉諸司、出車已下、參集禁中、騷動云々、爰禪門使重衡朝臣、奏內裏曰、近日愚僧偏以棄置、見朝政之體、不可安堵、世間蒙罪科之後、悔而可無益、不如賜身暇、隱居邊地、仍爲奉具兩宮、所催儲行啓也者、忽遣勅使、被仰此儀可被行之狀、即以召上卿已下、有詔書宣命等之沙汰云々、其實自今旦、右將軍內々議定之後、及若州等、數還往還、被遣使云々、國家之敗由官邪、誠哉此言、  
宣命、

天皇我詔旨<sup>良高</sup>、勅、御使乎、親王諸王、諸臣百官人等、天下公民、衆聞食度宣、從二位藤原朝臣者、功臣乃子孫<sup>度志</sup>、朝恩乎可蒙支人<sup>奈留</sup>、依天、內大臣乃官爾、任賜<sup>布</sup>勅乎、衆聞食度宣、

治承三年十一月十五日

上卿源中納言、雅賴、作者權右中辨兼光、詔書、

詔、朕以眇身之冲昧、謬受衆人之大寶、臨衆海而涇渭難辨、只任利涉於元凱之舟、理政道而〔安〕危易迷、宜憑扶持於聖賢之教、內大臣藤原朝臣、苗緒子功臣、藻鑑子衆庶、姬旦曲阜之風、遺約傳家、漢霍博陸之月、餘輝照性、熙帝之載非公在、誰夫、萬機巨細百官總已、皆先關白於內大臣、然後奏下、一如舊典、庶叩元二之聖、永施含一之德、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

治承三年十一月十五日

上卿同、作者同、

十六日、<sup>庚午</sup>〔天〕晴、卯刻、隆職宿禰來、余密召籙前問世上事、申旨如風聞、件男殊有其志、仍所對面也、於外人者不可然、凡召仰家中男女、令禁高聲雜言等、今日奉書於前博陸、報狀云、年來無變改、申承本意、候、尙此仰銘心肝、先世之宿報、不能左右、今一度不見參候、口惜候へ云々、披此狀之處、神心如屠、此人年來之間、無會釋事甚多、雖然執筆已下事、〔多〕在彼唇吻、臨此時、今一度面拜、中心所庶也、而下官依此事、自含怨心、歎之由、有所推察、歎、忽行向彼第者、疑似有謀議、爲

自他無用之上、路頭武士遍滿上下、容易不能往還、就中彼殿邊、武士〔守〕護云々、仍旁有恐之故、乍思不參謁、猶如禽獸、悲哉々々、

治承三年十一月十六日庚午今旦奉書於前博陸報狀之趣并兼實公披此狀之處神心如屠此人年來之間無會釋事甚多雖然執筆已下事在彼辱吻臨此時今一度面拜中心所庶也下官依此事自含怨心歟之由有所推察歟忽行向彼第者疑似有謀議爲自他無用之上路頭武士遍滿上下容易不能往還就中彼殿邊武士護云々仍旁有恐之故乍思不參謁猶如禽獸悲哉々々、○此一節原本追書、

申刻、定能卿來、院邊事、如只今者無聞事、於世間沙汰、被停止了、昨日以法印靜賢爲御使、兩度被陳子細云々、其後頗事似和氣、然而猶以有可被擯召院近臣等之由謳歌云々、凡近日之巷說、縱橫無極、難存一定歟、抑此關白之時、家貽瑕疵、職付大疵、於亂代者、天子之位、攝錄之臣、太以無益云々、新博陸許送使、季長朝臣、爲遁不說之恐也、是詔諛之甚也、今夜明雲還任僧正并天台座主等云々、  
前僧正明雲、

還任、上卿權中納言、左少辨光雅等奉行之、還補座主、大内記業實草進、宣命勅使少納言惟基、覺快親王、

辭退座主、口宣也、

治承三年十一月十六日

天皇我詔旨止、山中乃法師留白佐倍宣、勅命乎白、僧正法師大和尚位明雲波、年薦高幾上仁、覺快法親王乃辭退代爾、重天慈覺大師乃門徒仁之、眞言止觀乃業乎兼習利、故是以座主仁、重天任賜布事乎、佐倍宣、勅命乎白、

治承三年十一月十六日

十七日、辛未〔天〕晴、人傳云、前博陸逐電、人不知其行方云々、但謬說歟、

一昨日、任大臣之儀無宣制、只昨日朝、外記持宣命及詔書、參新博陸第、關白自出逢之、受取之云々、

今日有解官除目等載左、

治承三年十一月十七日解官、

太政大臣藤原朝臣、權大納言按察使源資賢、春宮大夫藤原兼雅、右衛門督平賴盛、

權中納言藤原實綱、右近衛權中將藤原隆忠、

參議右兵衛督皇〔太〕后宮大夫藤原光能、

太宰大貳藤原親信、越前守藤原季能、

〔右近衛權中將藤原雅賢、〕

右近衛權中將藤原定能、

大藏卿右京大夫伊豫守高階泰經、右中辨平親宗、

右近權少將伯耆守平時家、備中守藤原光憲、

右近權少將參河守藤原顯家、右近權少將源資時、

陸奥守式部權大輔藤原範季、大膳大夫平信業、

藏人右少辨中宮大進平基親、左衛門佐相模守平

業房、美濃守藤原定經、右馬頭藤原定輔、

加賀守平親國、出羽守藤原顯經、

左馬權頭平業忠、阿波守藤原孝貞、

河內守源光遠、淡路守藤原知光、

周防守藤原能盛、但馬守源信賢、

甲斐守藤原爲明、大藏大輔中原宗家、

佐渡守中原尙家、檢非違使佐大江遠業、

平扶行、

藤 信盛、

上總守藤爲保、

右少將源雅賢、

左衛門佐常陸守高階經仲、

除目、

右中辨藤原兼光、

左少辨藤原行隆、

修理大夫平經盛、兼

大膳大夫藤原濟綱、

右衛門督藤實家、

加賀守藤原保家、

治承三年十一月十七日

正二位藤原基通、

從三位藤賴實、中將女衆

穀倉院別當清原賴業、

殿下

兵仗事、

勅授帶劔事、

一座事、已上賴業奉之、

上卿藤大納言、同日仰之、

〔治承三年十一月十一日〕

十八日、壬申〔天〕晴、寅刻、隆職注云送聞書、解官置卅九

人、除目又被行、此中將〔被〕叙從二位、凡不得其

意、中將賴實被叙三品、凡解官除目叙位等在右、今



夜又關白被配流、其間無指沙汰、而官申驚之、仍被任太宰權帥、有宣命云々、又太政大臣師長解官、〔被〕追越關外了云々、檢非違使範貞、夜中責出了云々、此日吉田祭也、折節無骨、仍自河原立幣、行事國行、資賢卿并子息被追出城外了云々、今日又有除目、

天皇我詔旨、勅、大命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民、衆聞食、宣、

從一位藤原朝臣基房、坐事天、太宰權帥爾退給不、天下之人、此旨乎聞、見懲倍志、勅不大命乎衆聞食、宣、

治承三年十一月十八日

除目、

右少辨源兼忠、  
尾張守平時宗、兼、  
相模守藤範能、兼、  
常陸介平宗實、  
越前守平通盛、兼、  
周防守平範經、  
淡路守平清房、  
伊豫守藤隆成、

春宮權大進〔藤〕時光、  
參河守平知度、  
上總介藤忠清、  
美濃守源則清、  
伯耆守平忠度、  
土左守藤成定、兼、  
讃岐守平惟時、  
左衛門尉藤景尙、

同忠綱、

治承三年十一月十八日

從五位下藤忠清、  
源則清、

檢非違使 宣旨、

藤景尙、  
同忠綱、

藏人 行隆、

辭退、

權中納言雅賴、

流人、

太宰權帥藤原基房、  
有宣命、配流本國、

平業房、伊豆、

被追却關外一人々、

資賢、雅賢、資時、信賢、

已上上卿三條大納言、〔十八日〕、頭辨奉、

救、風雲合契、則一天平以有道、魚水底功、亦四海靜以無波、誠憶哲后之化、皆依良佐之力、內大臣藤原朝臣智賴、淵謀、神叶、岳峰、已累、葉博陸之長嫡、忽居百官總己之重任、柱石協用、家門之風傳、聲、珪壁擅譽、邦國之光添映、仍賜左右近衛府生各一人、近衛各四人、以爲隨身兵仗、庶幾分衛卒於霜仗之

間、増<sub>二</sub>榮輝於星階之下、普告<sub>二</sub>遐邇、俾<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>朕意、主者施行、

治承三年十一月十八日

作者大内記藤原業實、

十九日、<sub>酉</sub>雨下、卯刻、隆職又注<sub>二</sub>送聞書、件事等續<sub>二</sub>加昨日記、前關白被<sub>レ</sub>逗<sub>二</sub>留鳥羽南邊<sub>二</sub>云々、仍自被<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>御書云々、自<sub>二</sub>松殿<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>出之間、子細粗以傳聞、悲淚數行、非<sub>二</sub>言語之所<sub>二</sub>及、

自<sub>二</sub>今日<sub>二</sub>百ヶ日、奉<sub>二</sub>幣於春日社、是日來之願也、而如<sub>レ</sub>此事出來、仍彌所<sub>二</sub>忿進<sub>二</sub>也、今日神事、修祓後<sub>二</sub>不可<sub>二</sub>神事、數日之事先例如此、又於<sub>二</sub>南圓堂<sub>二</sub>、每日奉<sub>レ</sub>摺<sub>二</sub>供<sub>二</sub>養不空羅索經一卷、同百ヶ日也、仰<sub>二</sub>付覺乘得業了、自<sub>二</sub>今夜<sub>二</sub>、使<sub>二</sub>智詮阿闍梨修<sub>二</sub>不動供<sub>二</sub>、又令<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>養心經千卷、件祈等、自<sub>二</sub>去十月之比<sub>二</sub>、所<sub>二</sub>思立<sub>二</sub>也、自然懈怠、今夜又有<sub>二</sub>除目<sub>二</sub>云々、除目、

權中納言藤良通、  
太宰帥藤隆季、  
主殿頭高階爲清、  
備中守平師盛、

右近大將藤良通、  
右京大夫藤基家、  
但馬守平經正、兼、  
若狹守平經俊、

伊勢守藤清綱、 能登守平教經、

阿波守平宗親、

治承三年十一月十九日

右兵衛尉藤基能、今日止<sub>二</sub>位記<sub>二</sub>、

止<sub>レ</sub>使 宣旨、

左衛門少志中原清重、右衛門志同重成、右衛門府生安倍久忠、

辭退、

主殿頭藤家綱、

停任、

伊勢守大中臣忠清、

使 宣旨、

源光長、

藤友實、

廿日、<sub>戌</sub>〔天〕晴、卯刻、入道相國、送<sub>二</sub>書於賴輔入道之許、遽而見<sub>レ</sub>之、其狀云、

二位中將殿、令<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>權中納言、并右大將<sub>二</sub>給候之由、所<sub>二</sub>承及<sub>二</sub>候也、而聞書令<sub>二</sub>書落<sub>二</sub>候了云々、以<sub>二</sub>此旨<sub>二</sub>可<sub>二</sub>令<sub>レ</sub>申給<sub>二</sub>恐々謹言、

十一月廿日

靜 海、

謹上、修理權大夫入道殿、

余披見此狀之處、先仰天之外無他事、生涯之耻辱、於諸身一極了、萬事不及沙汰之間、此事出來、爲被塞余之爵歟、須固辭也、而若辭通之者、忽可當絞斬之罪、加之聊中心有所存、仍只悅恐之由、自書返報遣了、不知子細之人、不知身之耻、存致望之旨歟、何爲々々、惣言之、不堅辭之條、諂諛之甚也、只可失生涯之期也、先是隆職注送聞書、被行除目云々、子細在右、

午刻許人傳云、法皇御幸鳥羽、是爲伐賴盛卿、在六波羅云、御所近々之故所渡御也云々、

未刻人來云、已寄六波羅合戰云々、凡夢歟、非夢歟、未覺悟、又云、伐賴盛事、諸無實也云々、

今日午刻、禪門被向福原了云々、

申刻、大外記賴業來申云、今日午刻、頭中將朝臣奉行、二位中將殿、令任權中納言、右大將等給了、可奉書入、去夜除目之由、所被仰下也、仍所參入也云云、

同刻、大夫史隆職來賀大將慶事、入夜以政朝臣、新博陸被賀大將慶事、光盛明日可參之由、仰遣了、信助阿(閑)梨來、委仰祈事等了、

廿一日、亥(天)晴、未刻光盛參上、仰拜賀已下雜事等、注大概、可經御覽之由仰之、仍注折紙進之、直付返給了、

酉刻、陰陽頭在憲朝臣參上、問次第日次等、政所始侍始等、來月七日庚寅、兵部省持參移文、及拜賀隨身所始等、來月十四日丁酉、此定仰下了、拜賀儲日、十五日戊戌之由、所申也、着直衣出仕、及着陣等日次、大略勘申、然而仰追可定仰之由云々、前博陸今日出家云々、

左大將以使者、被賀右大將慶事、覺智僧正來、今夜檢非違使遠成自然、又其家自放火了云々、

廿二日、丙(天)晴、此日大原野祭也、自河原立之、如

吉田祭、行事良盛、陰陽師晴光、余着衣冠、出家中一拜之、依境節無便宜、自河原所立也、

前關白、昨日出家入道、大原聖人世謂本覺房奉授戒云

云、今日被下向了云々、共人上下、男女七八人許云云、其室同(心)出家、以髮切被獻之、爲令知出家之一定也云々、聞此等事、悲淚難抑者也、

傳聞、賴盛卿所領等、併皆以沒官云々、又業房配伊豆國之間、於路頭逐電了云々、僅本府者一兩、相

具下向之間、此事出來云々、又頭中將通親朝臣、已欲懸其殃、而希有雖免、猶懷怖畏云々、又聞太政大臣去十九日出家云々、又資賢一族、初越會坂關、赴東國之方、而忽遣<sub>○遣</sub>山崎之方、可赴西海云々、後聞相國不出家云々、

抑一昨日除目、隆季卿任帥云々、大宰帥者、親王所任之官也、仍他人無補之、納言已上、知行宰府之時、被任權帥、參議已下所被任大貳也、而前關白任權帥、赴配所、隆季令任正帥、希代之例也、隆季已任正帥、蒙親王之宣旨歟、是職事等、有若亡之所致也、外記又不驚申歟、但如此之亂世、不可及是非左右事歟、

廿三日、丑〔天〕晴、早旦基輔朝臣、依被召、參新博陸亭了、午刻歸來云、故殿令隱給之後、一向相憑御邊所罷過也、然間不慮事出來、年來一切罷居、萬事不審、於今者、彌所仰御恩言也、就中此間、有思煩事等、先如先例者、拜賀之日令覽吉書、仍來廿六日、拜賀吉書可遂之由、致沙汰之間、聊有可延引事、<sub>釋門中可延引之由云々、是非彼被示世之所云々也、</sub>仍可及來月上旬之比、文書奏下之間、蒙關白詔之後、數日不內覽事、

非先規之旨、職事等爵念之由、所傳承也、理可然、仍先以吉日可見吉書歟、將可待拜賀歟、是次當時居所無寢殿、於事無便宜、仍可罷渡六條堀川邊也、而拜賀以前出行如何、是余報云、吉書拜賀等事、雖何更不可有其難、凡蒙關白詔之日、即遂拜賀見吉書定例也、而今度彼日無其沙汰、已經數日、於今者、被待拜賀何事之有哉、又吉書不可必限拜賀之日事也、以前有吉書者、先被覽吉書、更不可及難、兩々之間、尙被尋問人、人可被決歟、至于拜賀以前御行者、更不可有其憚、但當日早旦宜歟、先々於他所、有慶賀之時、爲拜賀當日早旦、被渡東三條、定例也、蓋被准據哉者、以此等之趣答了、入夜基輔歸來云、畏承了、委細之仰爲本懷云々、抑余案之、已被用新關白之扶者歟、世間之人口、皆所察思也、然而依思故殿深恩、雖自今以後、如此之事不可存隔心、於身之遺恨者、全非彼人之過失、只可願宿運歟、

今日已刻、參女院御所、即還來、

自今夜、始愛染王念誦、<sub>七日、可及晦日也、</sub>又令信助阿闍



梨始同供、

廿四日、戊〔天〕晴、前博陸、昨日自河尻被向福原了云々、武士等相具與參迎、所相伴之人々、少々參了、少々留了云々、誠不能左右事歟、今日終日念誦、入夜全玄法印來、隔簾謁之、粗談世間事等、前大舍人頭兼盛自院被付〔付〕白川殿有ハリスン者也被切手了、又爲行、爲保被殺了云々突入海了云々、又云、爲天下安穩、被始卅壇護摩云々、

今夜爲方違、參宿女院御所、

廿五日、己〔天〕晴、早日歸家、基輔依召、參關白殿之許了、歸來云、承保二年九月廿六日、京極殿被〔蒙〕內覽宣旨、十月二日吉書、同十五日有關白詔、即日拜賀者、今度可逐此例歟、明日廿六渡六條、廿八日覽吉書、來月欲逐拜賀如何、猶可被計仰云云、余答云、先被見吉書事、先度申不可有難之由了、況於有例哉、全不可有苦歟、抑拜賀以前、被渡六條之間儀如何、初度御行被用網代、頗可有憚、且天仁三年、法性寺殿叙三位、拜賀以前、被渡東三條當日之時、頗有議歟、見宗忠記、即注進之、爲有斟酌所申也者、入夜基輔朝臣歸來云、

保安被用網代車御前同車之由、信範注申、仍存其旨云々、勿論事也、晚頭中御門大納言被來、依咳病隔簾謁之、入夜邦綱卿來、謁之如初、談世間事等、今日佛殿聖人來、數刻謁之、

廿六日、庚晴、傳聞前博陸、自福原被向淡路國了、共人只一人、殘輩皆追上了、武士等相具〔將〕去了云々、申刻、光盛參上、申大將拜賀、并侍始〔已下〕事、侍政所等臺盤、細工所作之、侍始事、爲女院御沙汰、仍隨主典代重永致沙汰云々、身所臺盤、康平伊豫守邦恒朝臣、元永左中辨爲隆朝臣、候進之由、見下家司宗重注文云々、仍昨日、光盛可造進之由、仰之處、今日尋出爲隆記、引檢之處、全不記造進之由、爰宗重文注頗成疑殆、仍只同可爲細工所沙汰之由、下知了、今夜卒爾之間忽難叶、仍隨身所大盤、可造始日次、重可問之由、仰了、侍政所今日始之也、

或云、太相國未出家、又禪門遣召云々、廿七日、辛〔天〕晴、午刻、宮内少輔棟範、爲新關白使來、使基輔逢之、被示云、法成寺堅義、法相宗分、前長者非成業之者、賜請云々、而先例不詳之由、別當僧正玄緣令申、仍問例於寺家之處、注申旨如此、

紙<sub>被</sub>折<sub>也</sub>、何様可<sub>二</sub>成敗<sub>一</sub>哉者、

一前長者被<sub>レ</sub>請之人、新長者之時令<sub>レ</sub>遂例、

承保二年

法相承縁、

天台兼禪、前長者被<sub>レ</sub>請云々

一長者始不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>一方堅義<sub>一</sub>例、

治曆二年、大二條殿、法相宗、不<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>之、

保安二年、法性寺殿、天台宗、不<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>之、

一不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>法相堅義<sub>一</sub>例、

治曆二年、寛治七年、依<sub>二</sub>金峰山開靜<sub>一</sub>也

天治五年、依<sub>二</sub>探題所勞<sub>一</sub>也、長寛元年<sub>依<sub>二</sub>別當題<sub>一</sub>也</sub>

一不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>天台堅義<sub>一</sub>例、

保安二年、應保二年<sub>依<sub>二</sub>探題所勞<sub>一</sub></sub>

一兩堅義共不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行例、

保安元年、依<sub>二</sub>知足院殿勅<sub>一</sub>也

保延三年、依<sub>二</sub>東大寺一同勝眞訴、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>法相堅義、隨又被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>天台堅義<sub>一</sub>

久壽二年、天台立者、可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>因明<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰下、而三井寺問者、訴中不<sub>レ</sub>參、然之間、兩堅義共以止了、

一非成業奉仕事、

東大寺人、多以不<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>維摩堅義<sub>一</sub>、勤<sub>二</sub>御堂堅義<sub>一</sub>之

由、粗以承<sub>レ</sub>之、然而非<sub>二</sub>本宗事<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、猶可

放<sub>二</sub>本宗之人<sub>一</sub>也、但御堂堅義注記者、以<sub>二</sub>成業者<sub>一</sub>

所<sub>レ</sub>令撰<sub>二</sub>請<sub>一</sub>、而三論法相之學者、未<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>維摩大會業<sub>一</sub>之輩、頻以參<sub>二</sub>勤御堂<sub>一</sub>注記、彼頗可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>准據之例<sub>一</sub>歟、

已上折紙、注<sub>二</sub>載大略<sub>一</sub>也、

余答云、非成業無<sub>レ</sub>例之由、玄縁令<sub>レ</sub>申、又不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>一方堅義<sub>一</sub>之例、多以令<sub>二</sub>勘申<sub>一</sub>、然者今年不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>法相堅義<sub>一</sub>、何難之有哉、但猶法相宗非成業之者勤不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋問<sub>二</sub>歟者<sub>一</sub>、關白去夜始被<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>云々、

大將隨身所望之者出來、故秦兼清子、前博陸下薦云々、

關白去夜、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>六條堀川邊家<sub>一</sub>云々、傳聞、今日被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>執事<sub>一</sub>、權右中辨光雅、年預、春宮亮重衡、既別當、上、參河守知度、下、氏院別當、右中辨兼光、等<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、

廿八日、壬午天晴、傳聞一昨夕關白、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>六條之儀、

網代車、前駟衣冠六人、室家同車、出車三兩云々、其

間次第、違亂多端云々、於<sub>二</sub>件亭<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>、官方、

右中辨兼光朝臣、藏人方、親朝臣、家政所、權右中辨光雅朝臣、其座定房卿一

人祓候云々、凡公卿可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>座之由<sub>一</sub>、兼以無<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、俄被<sub>レ</sub>催之間、及<sub>二</sub>曉天<sub>一</sub>云々、

今日造<sub>二</sub>始隨身所大盤<sub>一</sub>云々、依<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>也、細工所作

之也、

廿九日、癸未〔天〕晴、傳聞前關白、自福原一送淡路國云々、又人云、奈良大衆蜂起熾盛云々、成御寺可放火之支度云々、南北二京、天魔充滿之比歟、

## 〔治承三年冬下 歲次己亥〕 十二月〔大〕

一日、甲申〔天〕晴、基輔語云、去夜依催參法成寺御八講、戊刻事始、公卿源大納言定房、中御門大納言宗家云々、奉行家司權右中辨光雅朝臣、殿上人七八人許云々、傳聞南京大衆、殊以蜂起云々、

念誦事今日終之、七ヶ日之間所作、愛染王一字心三十萬反、不空誦案十萬反、不動十萬反、又自去十九日、至廿八日、每日心經百卷法樂春日大明神、

二日、乙酉〔天〕晴、申刻參女院御方、今夜參宿御堂御所、依女院御方侍犯土事也、今夜新博陸以基輔被問條々等、明日可申御報、

去夜有最吉夢、女房見之云々、

三日、丙戌〔天〕晴、已刻歸宅、念誦之後、以基輔示博陸之報旨了、被問送一條々、

一一員之數事、

報云、左右將監已下、各一人定例也、

一隨身裝束事

報云、府生已上束帶、番長已下、白狩袴、壺、脛巾、狩胡録、是例也、但猶可被檢度々例歟、

一里内儀參弓場路事、

報云、雖里内猶可被經床子前也、隨身同可相從之、

一參東宮御方路事、

報云、南殿御後宜歟、

一參拜所〔々〕事、參女院者、可及四ヶ所如何云々

報云、必可被參女院事歟、但四ヶ所尤可有

憚、長治二年、知足院殿關白之後、御拜賀兩度被申

之、准彼例、後日被申女院如何、但左右可在

御意、

今日光盛參上、大將侍始、及拜賀之間條々雜事、申事、

傳聞、南都大衆和平了云々、或說不然云々、

四日、丁亥〔天〕晴、或人云、頭中將通親朝臣、參博陸

内覽文書、博陸被答云可、在勅定之由、通親嘲

云、依事可待勅定、此答不足言、天下彌暗然、無

術之世也云々、此語風聞世間云々、尤不便事也、此貨首深無思慮人也、必當殃歟、又云、禪門攀緣未止云々、

同十二月四日、亥六日、丑己京官除目任官當座可注進之由

以女房被仰出應制兼實公仍可注進也云々、○本條原

〔五日〕戊天晴、申刻、中御門大納言被來、入夜民部卿

資長來、共謁之、先是教着陣、及行事之間事、於大將

六日、丑〔天〕晴、世間亂之後、今日始參內、秉燭之後

也、謁女房、若密々〔云〕、自去夏比、主上避讓之寂

念雖切、自然遲怠、而今大亂出來了、彌其事念思食、

仍明春可必定云々、且此趣竊可示余之山、有天氣云々、

又以女房被仰下云、京官除目、任官當座可注進

云々、春除目任官一卷、被副下之、有誤者可直

進云々、不審一兩在之、然而不能改直、

如此之事、執政臣可書進、又外記及職事可承事也、

仍粗奏其趣、然而更不可外聞、尚可書進之由、依

有再三之勅、悠注進之、天性雖至恐、頗練習除書

事、仍暗所注進也、定招傍人之嘲歟、然而給旨有

限、更不爲苦、其狀在左、

京官除目任官、相違春除目、事許注之、

三省奏、式部、民部、兵部、

依三省奏、任諸國目、

院宮當年給、

任諸司三分舊例、院宮數多闕官不足之時、召

任年次第勘文、任之、

內給院宮公卿未給已下、

如春申文、雖載當年給之由、猶未給也、

諸道課試者、如春、

當職文章生第一、

春任散位一、秋任當職一也、

諸道舉

明經、明法、

如春、但秋不任外國、

瀧口、

近例秋不任之、中古間有被任之例、多京官

也、但非恒例事歟、

顯官舉、

秋不書舉、只撰上申文許也、

受領、



臨時雖被任無舉、

此外諸京官等、子細同春、

秋無沙汰事等、

四所籍、當年內給、院宮公卿給、外國同之、

內舍人文章生、外國、

諸道諸院年舉、外國、

兼國、宿官、

文章生散位、

受領舉、

女房歸來傳敕云、深祕藏更不可他見云々、小時

頭中將通親朝臣來示云、來八日可有官奏、左大

臣所勞云々、若可有御參、歟、答云、相扶所勞、今

日出仕猶不快、仍難參入者、此頭一切不來、里

第、只待參內之次、催之、太奇怪也、

抑余今日出仕、聊依有冥應也、然而緒面無雙、始

終不可叶事歟、諂諛之甚可耻々々、今夜法眼

道決、被來、自明日可始祈之由、約束了、

七日、庚寅天晴、早旦參女院御所、未刻歸宅、此日新

博陸拜賀云々、子細追可尋記、戌刻被參女院御所

云々、以侍從家俊被示送云、明日着直衣可出

仕、前駟布袴之由存之、又明後日始可宿仕、而件日

官奏云々、其間衣冠歟如何、又其翌日可退出、其儀如

何云々、答云、明日前駟布袴、并官奏之間衣冠、可如

被仰、御退出之時御直衣、上臈冠、前駟衣冠可宜

歟、先例如此之由、所在也者、

今夜始不動供、一七法性寺座主修之、殊有祈願事

等也、今晚女房爲余見最吉夢、可信云々、

左京權大夫光盛參來、執申明日侍始之間雜事、

八日、辛卯天晴、此日大將方侍始也、晚頭光盛參上、兼

召光盛於簾前、仰家司職事已下事、光盛退下、書

合旨之後、覽侍名簿、五通、五位二人、有官二人、無官一人也、

簿三通云々、以之案之、今夜先覽兩三通書、下書歟、仍今度同可

覽三通、而光盛申云、加職事仰書者四通、可有仰歟、仍余仰云、

此事不可有定數、侍名簿五通、且可書下書者、仍所覽余見

五通也、各有裏紙一卷、二禮紙、結中、是先例歟、可尋

了返給、仰云、可令覽大將、先例雖無所見、案

事理、元服夜大夫爲幼年、仍只覽嚴父不覽大夫、今度

已爲納言已上、仍尤可令覽之由所仰也、光盛參大

將曹司、候女院御所也、大將於簾中見之、返給云々、次家

司職事、家司三人、先申慶由於余、余職事信光申之、布

拜、次參女院御所申之、國行申次、即次申大將方、中

同前、次家司等退出云々、此間職事二人、侍十七人、着二侍所一、居二交合子飯一、職事謂之侍始也、三獻之後、下着起座云々、

家司、

季長朝臣、從四位上前和泉守、寬治清長朝臣補、吉例也、

光盛、正五位下、左京權大夫、

光長、正五位下、右衛門權佐、

知家事、

安倍親重、主稅允、重代者也、

案主、

惟宗久行、刑部錄、

安倍親弘、親重子、

件兩人論座次、久行ハ帶一職、親弘雖無官、女院主典代也、久行雖有官、廳官也、仍其品玄隔之由雖申、猶下書之面、以無官不可爲有官之先、仍令旨先書久行云々、

職事、

兼親、敕位、從五位上、季長朝臣子、

國行、從五位下、左馬權助、行賴朝臣子、

侍所司、

木工允藤重永、

政所出納、無令旨、以詞仰、下之、寬治例也、

〔出納〕河俊、

侍交名、

五位、

孝盛、前出羽權守、民部大夫、

重基、檢非違使、大夫、

有官、

大神祐行、大舍人允、

藤原重永、木工允、

宮道式國、右衛門尉、

宮道式房、內舍人、

無官、

藤原厚康、貞親子、入學者云々、

藤原重經、重永子、

豐原奉弘、奉賴子、

厚康依爲入學之者、居無官之上云々、

雜仕女六人、侍始之時、六人參、先例也、

大子三人、娘女、女院御方大子、第一重代者也、今二人余方大子也、

娘女、靈鷲女、福壽女、

已上賜<sub>二</sub>裝束、其式目白衣三領、白單衣、白帷、蘇芳打懸帶、白裳、

連三人、

龜女、<sup>即</sup>乙女、<sup>即</sup>五節女、

乙五節等、本大將樋雜仕也、龜女、女院御方第四大子云々、仍爲<sub>二</sub>連第一云々、已上不<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>裝束<sub>一</sub>例也、

小舍人二人、

清次、清國子、清光、永友子、

家司、下家司、職事侍等、仰書下書等可<sub>レ</sub>續<sub>二</sub>入之<sub>一</sub>、今日關白着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>被<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>、無出衣、但織物指貫云々、其儀秉燭被<sub>二</sub>出立<sub>一</sub>、毛車、懸<sub>二</sub>下簾<sub>一</sub>、

前駟十四人、

四位二人、季長朝臣、以政朝臣、

五位十人、盛業、長經、賴高、季佐、光兼、信清、親光、長俊、仲資、清定、

六位二人、大宮六位進、雅亮子、中宮六位進源經資、(季廣子)皇嘉門院判官代、

四位五位布袴、六位衣冠、兼資依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>女院判官

代、着<sub>二</sub>指貫<sub>一</sub>云々、

扈從殿上人二人、左中將重衡朝臣、侍從家俊、

隨身官人、近衛白襖袴、番長左<sub>二</sub>藍狩袴<sub>一</sub>、右萌黃狩袴、

并褐衣、壺胡錄、皆如<sub>レ</sub>例也、

參內、經<sub>二</sub>左衛門陣弓場殿等<sub>一</sub>參上、今日始宿侍云、今夜有<sub>二</sub>官奏<sub>一</sub>、左大臣作<sub>レ</sub>之云々、

今日酉刻、關白被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>書云<sub>一</sub>、今日始可<sub>二</sub>宿侍<sub>一</sub>、又官奏也、而內覽之間可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>歟、將殿上歟、又出<sub>二</sub>御書御座<sub>一</sub>之時、可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>何所<sub>一</sub>哉云々、余報云、官奏內覽事、共有<sub>レ</sub>例、初度事偏可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>吉例<sub>一</sub>也、無<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>者、案<sub>二</sub>事理<sub>一</sub>、殿上正禮歟、出<sub>二</sub>御書御座<sub>一</sub>之時、執政臣候<sub>二</sub>三尺御几帳之內<sub>一</sub>、恒例也者、

〔去夜有<sub>二</sub>最吉夢<sub>一</sub>、女房見<sub>レ</sub>之、〕

九日、壬辰雨下、關白退<sub>二</sub>出自<sub>一</sub>內裏、直衣、前駟衣冠、毛車、隨身上<sub>二</sub>臈冠<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>臈烏帽<sub>一</sub>云々、未刻被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>皇嘉門院<sub>一</sub>云々、今日、史不<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>來奏報<sub>一</sub>、如何云々、禪門上洛之

由風聞、未<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>一定<sub>一</sub>、

十日、癸巳〔天〕晴、念誦如<sub>二</sub>日來<sub>一</sub>、未刻、大外記賴業、持<sub>二</sub>參

四節雜例、依<sub>二</sub>余命抄<sub>一</sub>出之、先日、進<sub>二</sub>草<sub>一</sub>、今進<sub>二</sub>清書<sub>一</sub>也、并大將御監宣旨、及春日

上卿例等、同刻、兵部卿入道信連來、數刻談語、隔<sub>二</sub>籬逢<sub>一</sub>之、多是新博陸、未練之間〔事〕歎申也、日來籠居人、

俄居<sub>二</sub>重任<sub>一</sub>、每事網然、無<sub>レ</sub>術之由被<sub>レ</sub>命云々、此次語云、御一家習、大臣之後、雖<sub>二</sub>攝錄以前<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>室家<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>北

政所、延久元永例也、補家司、供御供云々、此事未知、尤有與、又云、關白之後、被各別藏人所侍所等事、有山緒、即不分之、一兩年之後、別被置藏人所也、其故大二條關白、最初被問中宇治殿云、先々即不置藏人所之由不見、爲之如何、御報云、必則不沙汰事也、然而尊閑者餘算<sub>于時七旬</sub>、<sub>類降也</sub>、<sub>非幾</sub>、此時不被分者、難期將來、仍只早可被置藏人所也云々、仍關白詔之、即被分置侍藏人所了、彼例非最吉、仍京極殿已後、故殿則不被相分也云々、此事又尤有與々々、

奏報之史來、昨日參關白、依無家司、入夜空退出之間、不持參云々、又入夜史來云、十四日可被行定考云々、

十一日、<sub>甲午</sub>〔天〕晴、資長卿以季長朝臣、兼光家司事披陳、大略可被成之由也、太以嗚呼也、

十二日、<sub>乙未</sub>〔天〕陰、午後時々晴、召光盛補大將方職事、五位三人、<sub>上野守賴高、前豐前守能業、但馬守長俊</sub>、勾當一人、<sub>源國基、賴朝臣子</sub>、

<sub>藤業兼</sub>大將方令旨也、依爲侍始以後也、又隨身等付名、

去夜、余及女房見吉夢、

今日、有小除目解官等云々、

典侍藤原紫子、<sub>內藏頭藤原季能、</sub>

中宮權大夫同實家、兼、<sub>近江守高階爲清、兼、</sub>

甲斐守藤宗隆、<sub>丹波守平清國、</sub>

備後守藤原保房、<sub>安藝守菅原在經、</sub>

治承三年十二月十二日

從五位上佐伯景弘、

解官、

近江守平親房、

丹波守藤行雅、

十三日、<sub>丙申</sub>〔天〕陰甚雨、終日不止、光盛申所々申次

輩返事內、泰通朝臣所勞云々、仍可申沙汰之由、

示遣經房朝臣之許、光盛奉行也、

〔治承三年十二月〕

十四日、<sub>丁酉</sub>〔天〕晴、此日右大將拜賀也、去月十九日、

任權中納言右近衛大將、其後自然日次不宜、又世間

騷動之間、延及今日也、已刻、余參女院御方、<sub>鳥羽</sub>

未刻、大將着束帶、<sub>色目如例、但着紅打和、滿輪螺鈿金襴、紫淡平緒、緒孔裏、有文帶、京極殿御笏等也、</sub>

此間兵部省持參移文、家司左京權大夫光盛相逢取

之、入宮持來、先余見之、<sub>無禮紙、次覽大將、同光盛覽</sub>



大將在<sub>于同所</sub>、留<sub>文返</sub>給宮、光盛取<sub>宮退歸</sub>、給<sub>祿於移文</sub>使、<sub>丞錄各足額、史生二人布二段、使部二人各一段、元申刻裝束了、</sub>  
先降<sub>立西中門內、</sub>東面、右少辨兼忠令<sub>付美作守基輔朝臣、</sub>  
申<sub>事由歸來仰聞食之由、即拜舞、</sub>已下正絹、賜官賜之、  
訖、直出<sub>自中門、於西門外、</sub>乘<sub>車、</sub>此間余乘<sub>三人車、</sub>  
於東門<sub>立九條高倉辻一見物、</sub>  
路頭行列、

先居飼四人、給<sub>當色、</sub>

次御厩舍人四人、給<sub>當色、虫襦上下、薄色、</sub>  
衣、依<sub>新制、不著單衣、</sub>

次一員、將監將曹府生、已上束帶、<sub>森胡錄、</sub>

番長、下毛野忠武、<sub>白狩袴、壺、腰巾、狩胡錄、但番長近在車前、余番長亦渡也、</sub>

次前驅十二人、<sub>承曆十六人、寬治廿一人也、今度折節頗無骨、仍強不盡、人敏、頗撰、人逐、元永任大將同例、</sub>

四位二人、<sub>散位季長朝臣、前大宮大進行賴朝臣、</sub>

五位八人、<sub>前皇后宮大進長隆、上野守賴高、散位兼親、光兼、前豐前守能業、左馬權助國行、散位仲資、但馬權守長俊、</sub>

六位二人、<sub>源國基、(行賴子)、</sub>已上大將勾當也、<sub>藤原業兼、(能樂子)、</sub>

次車、<sub>毛車、上、藤懸、下、藤、黑斑牛、車副二人、(給當色、余長井大將方車副上勝也、)每辻稱<sub>警蹕、</sub></sub>

次下臈隨身五人、裝束同番長、

下毛野武宗、武春子、  
同厚久、<sub>厚助子、</sub>

已上二人、余方第二三也、

中臣近行、重武子、  
下毛野敦久、<sub>敦隆子、敦助子、</sub>

同武賴、<sub>忠武養子、實師武子、</sub>

已上中將<sub>(之時)</sub>小隨身也、今一人清直、敦直子、殊以幼稚、仍暫止之、余方下臈<sub>(今)</sub>二人召加之、

次雜色廿人、其實十餘人、

牛童、<sub>大小院丸、給當色、</sub>  
朽葉上下、朋木衣、不<sub>重單衣、持胡、</sub>

舍人、<sub>持唐笠、</sub>  
仕丁、<sub>持兩皮服、</sub>

次扈從殿上人連<sub>車、</sub>

右少辨源兼忠、乘<sub>八葉車、</sub>

右兵衛權佐<sub>(藤)盛定、</sub>

依<sub>康平元永等例、</sub>無<sub>殿上人前驅、公卿扈從等、</sub>

先欲<sub>參內之、</sub>日已欲<sub>噫、博陸第、今夕可有勸學</sub>

院參賀、仍先向<sub>彼亭、</sub>暫扣<sub>車於門外、</sub>下車、<sub>光雅密々告、</sub>

季長兼忠獻<sub>沓、</sub>大將進<sub>立中門下之間、</sub>主人當<sub>南階西</sub>

圍柱<sub>而立、</sub>執事家司權右中納光雅獻<sub>沓、</sub>康和右大將家

自<sub>中門進立南庭、</sub>當<sub>南階東圍柱、</sub>而<sub>立、</sub>少向<sub>主人、</sub>(<sub>揖</sub>)之後、主客共再

拜、次主人被<sub>目客、</sub>客辭<sub>之、</sub>(<sub>目</sub>)次主人左廻、昇

自<sub>南階之間、</sub>大將揖右廻、昇<sub>自中門內方、</sub>經<sub>中</sub>

門廊徐進、關白着座之後、大將着座、次牽<sub>出馬一疋、</sub>

諸司方五位一人、一匣之後、於中門內砌、右少辨兼忠指  
衛府一人引之、之、給前驅五位上薦長經、〔々々〕賜隨  
身引出之、此間大將揖起座、自中門廊裏戶退出、  
引馬之間、賜隨身腰指將監已下正絹、  
次參內院、於陣口下車、入自左衛門陣代、經床  
子座前、上宣、并仗座小庭、相從、進立弓場殿代、北  
付右少將寶明、奏事由、歸來仰聞食之由、舞蹈之  
後、藏人告召之由、更不拜、昇自弓場殿方、經鬼  
間參御所、主上御引直衣、女小時經南殿御後、禮須經南  
使也、共殿上人相從隨身、降立西中門、先申中宮御方、  
經南庭、前驅自北面參會、降立西中門、先申中宮御方、  
中次亮通盛、朝臣再拜、次於西透廊、申東宮御方、中次大進、次直自  
右衛門陣退出、參八條院、進立中門、付別當前馬  
權頭隆信朝臣、申事由、舞蹈、依召參御前、前、頃  
之退出、來余第、進立中門內、使家司光盛先申  
余一拜、次以同人一申母儀、又二拜、須以盛定申之、  
御共、自路留云々、尤奇惟、無忠一人相從也、此間余賜隨身腰指、侍所司取之、  
將監已下正絹、次招入簾中、勸食、次歸參女院御  
方、先是余召光盛仰云、隨身所別當、季長朝臣、能  
業、代代例被補二人也、康平高房朝臣、行房、元永重仲朝臣、朝隆等也、御所別當行賴朝臣、光  
盛退下、各觸其人之後、召番長忠武、仰隨身所別

當、康平有下書之由、見定家記、然而元永爲大將歸參女院  
之後、始隨身所、四車宿廊西妻二間也、其儀番長忠武已下、取松  
明一來迎、別當兩人相率着其所、別當橫座、東第一間  
南北行數、高麗疊一枚、橫立其末二行、東西敷黃緣帖、立臺  
盤、居饗、着座之後、番長忠武勸盃、武宗取瓶子、一  
獻了、起座退出云々、

先是賜權隨身祿、將監三正、將監二正、府生番長近衛各正絹、  
云、府生已上所司給之、番長已下家司賜之云々、又本府進隨身差文、是又康平元  
永例也、

今日早旦、修誦於七ヶ寺、賀茂、春日、大原野、吉田、  
昨日終日甚雨、今日天顏快晴、天地和合炳焉者也、  
今日大將出、即中御門大納言被來、東、是被訪出立  
所也、遲參之條頻被謝、余相逢、

十五日、戊〔天〕晴、關白以基輔、被問條々事、着陣事、  
臨事客事、大時時、  
十六日、亥〔天〕晴、今日以基輔、欲示關白報之間、  
信範入道入來、余隔簾謁之、信範入道云、着陣之間

事、昨日有申落事、先例關白着陣無申文、而今度可  
有、其儀之由、官所申也、是先例、皆大臣之時有  
申文、今度自散位、直任內大臣、奉關白詔、混合可

有<sub>レ</sub>着陣、尤可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>之故也云々、余所存答<sub>レ</sub>之、  
一着陣事、

關白着陣例、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>、今官所<sub>レ</sub>申、理可<sub>レ</sub>然之上、  
保安三年、法性<sub>〔寺〕</sub>殿轉<sub>二</sub>左大臣<sub>一</sub>給<sub>〔于時爲〕</sub>御着  
陣有<sub>二</sub>申文<sub>一</sub>此例官所<sub>レ</sub>勅申也、尤可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>准據<sub>一</sub>也、又寛仁元年

三月四日、宇治殿任<sub>二</sub>内大臣<sub>一</sub>、同十六日攝政、其後  
有<sub>二</sub>御着陣<sub>一</sub>歟、彼時申文有無、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>檢歟、但保安  
近例、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>外求<sub>一</sub>歟、

一上表事、被<sub>レ</sub>問云、今年歟、明春歟、

今年明春、共不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>難、但年内猶可<sub>レ</sub>宜歟、

一臨時客事、被<sub>レ</sub>問云、明年必可<sub>レ</sub>行歟、

寛仁、宇治殿、承保、京極殿、共蒙<sub>二</sub>關白詔<sub>一</sub>、明年被<sub>レ</sub>行  
之、嘉承、知足院殿、蒙<sub>二</sub>關白詔<sub>一</sub>之後、明後年被<sub>レ</sub>行之、  
法性寺殿、保安二年關白詔、長承始有<sub>二</sub>臨時客<sub>一</sub>餘年<sub>レ</sub>但是聊有<sub>二</sub>由緒<sub>一</sub>歟、知足院御籠居<sub>二</sub>之間、如此之禮、殊不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>執行<sub>一</sub>歟、今度事偏可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>、但白川殿有<sub>二</sub>養母之儀<sub>一</sub>歟、然者其年之内、聊可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚哉、可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>時議<sub>一</sub>者、

一大饗事、問狀同前、

子細同<sub>二</sub>臨時客事<sub>一</sub>、〔但〕大臣初任饗樣器也、關白初  
度饗朱器也、知足院殿、康和元年蒙<sub>二</sub>内覽宣旨<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>

氏長者印、同三年有<sub>二</sub>大饗<sub>一</sub>、樣器、長治二年十二月、  
蒙<sub>二</sub>關白詔<sub>一</sub>、嘉承二年有<sub>二</sub>大饗<sub>一</sub>、朱器、若准<sub>二</sub>此例<sub>一</sub>者、  
雖<sub>レ</sub>請<sub>二</sub>長者印<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>樣器之饗<sub>一</sub>歟、雖<sub>レ</sub>然今度案<sub>二</sub>事  
理<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>朱器<sub>一</sub>也、

已上條々、信範甘心退出了、抑如<sub>レ</sub>此事委細不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>  
示、於<sub>レ</sub>事可<sub>レ</sub>悲<sub>二</sub>身運<sub>一</sub>、然而偏爲<sub>レ</sub>報<sub>二</sub>故攝政殿  
恩<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>願<sub>二</sub>世毀<sub>一</sub>、具以答<sub>レ</sub>之、自<sub>レ</sub>今以後又可<sub>レ</sub>同、  
此間雅賴卿來談<sub>二</sub>世上事<sub>一</sub>、納言辭退之事、未<sub>二</sub>事切<sub>一</sub>  
云々、進<sub>二</sub>納言<sub>一</sub>申、任<sub>二</sub>兼忠於右少辨<sub>一</sub>、而禪閣之邊、  
不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>納言之由<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>其氣色<sub>一</sub>云々、然而自<sub>レ</sub>上不  
被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>、仍如<sub>二</sub>唯今<sub>一</sub>者、唯存<sub>二</sub>辭退之由<sub>一</sub>也云々、  
今晚、春宮行<sub>二</sub>啓入道相府八<sub>一</sub>〔條〕亭、關白已下、公卿  
濟々云々、去夜關白問送云、明日行啓劔、蒔繪歟螺  
鈿歟、又隨身裝束如何、答云、劔螺鈿也、隨身裝束、  
於<sub>二</sub>騎馬供奉之人<sub>一</sub>者、狩胡錄、蕤脰巾也、但猶有<sub>レ</sub>  
執<sub>二</sub>垂袴<sub>一</sub>之人<sub>一</sub>歟、自<sub>レ</sub>車供奉之人、若垂袴歟、可<sub>レ</sub>  
依<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>者、

今日信範來語云、久壽故殿御記、如<sub>二</sub>去夜御報<sub>一</sub>、尤有  
興、隨身裝束垂袴之由、分明被<sub>レ</sub>記<sub>二</sub>之云々<sub>一</sub>、

十七日、庚<sub>〔天〕</sub>晴、〔已〕刻參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、申刻歸來、長光

入道來語「最吉夢、仰而可<sub>レ</sub>信、去月廿五日丑刻夢云、」入<sub>レ</sub>夜大外記賴業來、召<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、美作國賜<sub>二</sub>應宣一枚<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>申事<sub>一</sub>也、今日、有安有<sub>二</sub>來示事<sub>一</sub>、此日有<sub>二</sub>官奏事<sub>一</sub>、左大

〔召<sub>二</sub>智詮阿闍梨<sub>一</sub>、示<sub>二</sub>付祈事<sub>一</sub>、

今夜依<sub>二</sub>方違<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>宿女院御方<sub>一</sub>〕

十八日、丑〔天〕晴、早旦〔歸<sub>レ</sub>家〕、召<sub>二</sub>右近廳頭清景<sub>一</sub>、

仰<sub>二</sub>來廿一日着陣之間事<sub>一</sub>、光盛參上下<sub>二</sub>知之<sub>一</sub>、又大夫史

隆職、申文事、大辨頭辨經房朝臣、吉書大外記賴業真人

殊難、無可<sub>レ</sub>沙汰事、着陣之時、觸<sub>二</sub>官外記恒例也<sub>一</sub>、等之許、來廿一日可<sub>レ</sub>着陣、任<sub>レ</sub>例

可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由、仰遣了、光盛奉也、又可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>本府<sub>一</sub>

之間、次將三人也、吉例可<sub>レ</sub>參、而各稱<sub>二</sub>未刻故障之由<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>

領狀之將<sub>一</sub>、仍以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>、頭辨可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由、仰遣了、

今日史持<sub>二</sub>來奏報<sub>一</sub>、

〔入<sub>レ</sub>夜、法性寺座主被<sub>レ</sub>來、示<sub>二</sub>付祈事<sub>一</sub>〕

召<sub>二</sub>兼清〔子〕<sub>一</sub>、候<sub>二</sub>松殿<sub>一</sub>、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>大將方番長<sub>一</sub>之由、即

仰<sub>二</sub>明日可<sub>レ</sub>參之由<sub>一</sub>、給<sub>二</sub>裝束了<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜來<sub>二</sub>催明日內御

佛名事<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>所勞之由<sub>一</sub>了、

十九日、壬天陰、午後微雨間降、此日右大將着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>

始出仕、余着<sub>二</sub>烏帽直衣<sub>一</sub>、午刻參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、今日依<sub>二</sub>關

白可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>陣<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>刻限<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>尋之處<sub>一</sub>、吉時未刻云

云、先遣<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>、聞<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>了之由、頃之申刻、大將

着<sub>二</sub>裝束<sub>一</sub>、紅打衣出也、溫業浮文織物被袴、(文カラヒシ)、參內、大

參<sub>二</sub>陣口之間、關白着陣了<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>左衛門陣代<sub>一</sub>、另<sub>二</sub>小板

二條町口<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>重<sub>二</sub>車之間云々<sub>一</sub>、

敷、大內之義、納言不用<sub>二</sub>小板敷<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>里<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>綠東行、着<sub>二</sub>殿上

端座、着<sub>二</sub>束帶之時、帶<sub>二</sub>劔笏<sub>一</sub>殿上、不<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、而元永二年故殿任

還<sub>二</sub>被<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>經<sub>二</sub>上戶<sub>一</sub>、今度大經小板敷、經<sub>二</sub>端座<sub>一</sub>出<sub>二</sub>上戶<sub>一</sub>也、大內

爲<sub>二</sub>上戶<sub>一</sub>、鬼間等、參<sub>二</sub>朝餉<sub>一</sub>、數刻禮<sub>二</sub>候御前<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>乘燭<sub>一</sub>退

出、今度退<sub>二</sub>出自<sub>一</sub>、來<sub>二</sub>余亭<sub>一</sub>、招入差<sub>二</sub>食<sub>一</sub>、歸<sub>二</sub>參女院御方<sub>一</sub>、

今日召<sub>二</sub>府廳頭清景<sub>一</sub>、仰<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>秦兼重<sub>一</sub>、兼清子、本名清武、今

可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>番長<sub>一</sub>之由了、

前駟六人、代々吉例也、寬治元永如此、

散位兼親、前豐前守能業、散位保行、

左馬權助國行、勾當源國基、藤原業兼、

〔已上衣冠、〕

共殿上人、美作守基輔朝臣、治部大輔季信、已上束帶、

隨身、

番長秦兼重、今日始所召具一也、(兼清子、)

給<sub>二</sub>當色<sub>一</sub>、二藍上下、濃款冬衣、黃單、依<sub>二</sub>新制<sub>一</sub>不



着打衣、先例皆所着打衣也、狩胡錄、裏脛巾、冠、

近衛五人、交名如拜賀日、

給當色、萌木上下、款冬衣、帶劔、烏帽、

檳榔毛車、車副二人、

雜色十人許、

早旦修禪誦於三ヶ寺、吉田、崇神院、六角堂、

廿日、卯、天晴、入夜小雨、官中、大辨難參之由、仍

以使者、待遣左大辨長方卿之許、示可被參之

狀、有相扶所勞、可參之報、頭辨經房朝臣注送、次

將散狀、右中將隆房朝臣、少將實明等領狀云々、其依

未着陣、（到）當日早旦、可着陣云々、召檢非違

使季光、仰明日路頭掃除事、

入夜宰相定能來、竊來也、談話之後退出了、

廿一日、辰、陰晴不定、時々小雪、此日右大將着陣也、

辰刻、左京權大夫光盛參上、此間史來申大辨直辨散

狀、直右中辨兼光云々、巳刻、右近廳頭清景、持來日奏

并大糧移等、今日可候文書也、光盛取之覽大將、

返給畢、例也、午刻、陰陽頭在憲朝臣參上、東、光盛令

勘申日時、今月今日甲辰、余先見之、次覽大將、未二

點、大將參內、先問刻限於、裝束色目如例、不若打衣、

先是仰檢非違使季光、掃除路頭、又制止狼藉、是

又先例也、路之間不卷箔、故實也、入自左衛門陣代、

經床子座前、隨身相從、右中辨兼光朝臣降、并陣座前小庭、

東中門南庭、西透廊西中門等、前庭等廻、自北西、參會也、

於同中門外、召官人問時、清景歸來申云、時未、

於宣仁門外問之、今先着本陣、仍於右近陣邊問

之、下官今案也、案事理所教訓也、次着本陣、

進日奏、入實有、實明取之置大將前、輕座、次將復座

之後、更取硯、將監傳、置日奏宮、左廂即復座、次大將

披禮紙於宮中、二倍、披見日奏、左手持之、以右手

摺墨、染筆書署、名二字也、大臣、置筆如本卷之、

加禮紙入宮、取笏目、次將、（々々）來取日奏宮、

返給將監、次取移宮持來、大將披見、紙、了返入、

取封紙、細切紙也、加、書封返入、取笏目、次將、（々々）

又來取之給將監、更歸參取硯宮、賜將監、次將監

昇黑案、立小庭、置櫃於案上、昇之云々、是失也、此間大

將居向座末、西、將監申事由、披印概請印了、昇

案退下、此間將監有作法等云々、每度加官姓名、申請可行之也、而今度開闢此三次將等退下、次大將起座、經本路一事許申請云々、  
着陣與座、經小庭廻、次左大辨着横切座、示氣色大將日之後、着床子見文、頃之大將移着端座、令官人置軾、以件官人移刻之後、大辨着座、申申文之由、大將目之、大辨願面左少史、小槻國宗大夫史隆職子也、捧書杖、進居小庭、大將目之、史稱唯、就軾奉文、大將置笏、以左右手取文置前、見史座定、見文之儀如常、鉤匙文二通、常陸美乃等也、史馬料、次引拔禮紙、置板敷端、史取展置杖上、次大將先下、一、通ツ、下之、史每度結中、大將仰々詞、中給へ、次下馬料、史給之、大史取書杖退下、次頭辨經房朝臣下吉書、臨時公川大將結申、經房仰々詞、大將微唯、卷文返下、同辨經房結之、大將仰々詞、宣旨丁辨稱唯退下、次大將起座、經床子前退下、  
隨本陣役次將已下、

中將隆房朝臣、

少將實明、五位、

已上兩人、今日先以着陣、實明雖申衰日之由、儘可着陣之由、被仰下云々、  
抑家例、多ハ次將三人着之、今度各依有障、僅

被催出二人也、本府之催不相叶、仍奏事由、爲經房朝臣沙汰、被催出也、於隆房朝臣ハ、余私相語之、

將監、

將曹、

候申文、辨史、

左大辨長方卿、右中辨兼光、左少史小槻國宗、

下吉書職事、

頭左中辨經房朝臣、返下同人了、

本陣文書、

日奏、

大糧移、

着陣吉書、

常陸、

美濃魁文、

左大史成舉馬料、

今日、令勘日時、陰陽師事、

康平、道平、

嘉保、道言一人、

元永、光平、泰長、宗榮、

今度依嘉保例、召一人、雖須依元永之例、泰

親勤<sub>レ</sub>仕齋籠御祭、時晴所勞、此外上臈之輩、殊無<sub>二</sub>召仕之者<sub>一</sub>、仍逐<sub>二</sub>一人吉例<sub>一</sub>也、

今日前駟八人、

兼親、能業、良盛、國行、長俊、

保行、源國基、藤原業兼、

共人三人、

基輔朝臣、宗雅、季信、

隨身裝束如<sub>レ</sub>常、

番長蒔黃狩袴、不<sub>レ</sub>賜之、

已下白襖袴、各違胡藤、

〔此日關白初度上表云々、付<sub>二</sub>中務省<sub>一</sub>歟、又崇院着

<sub>レ</sub>袴、<sub>典侍結<sub>レ</sub>腰</sub>又有<sub>二</sub>官奏<sub>一</sub>云々、<sub>臣、左大</sub>〕

廿二日、乙〔天〕晴、巳刻、史持<sub>二</sub>來奏報<sub>一</sub>、家司能業申

<sub>レ</sub>之、

廿三日、丙〔天〕晴、佛殿聖人來、又長光入道來、參<sub>二</sub>

女院御方、及<sub>二</sub>亥刻<sub>一</sub>歸來、女房聊不例、仍招<sub>二</sub>智詮<sub>一</sub>

護身、

廿四日、未<sub>二</sub>天陰、及<sub>レ</sub>晚雨下、寶殿阿闍梨來、談<sub>二</sub>吉夢

事<sub>一</sub>、

廿五日、戊〔天〕晴、入<sub>レ</sub>夜成光朝臣來、大將內々可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>書始<sub>一</sub>、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>師匠<sub>一</sub>之由也、召<sub>レ</sub>前文談、移<sub>レ</sub>刻退出、

〔治承三年十二月〕

廿六日、己〔天〕晴、時々小雨、未刻、頭中將通親送<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>內裡穢氣之間行幸事<sub>一</sub>、<sub>白<sub>二</sub>去夜、內裏有<sub>二</sub>五體不具穢<sub>一</sub>云々、其狀如<sub>レ</sub>此、<sub>副<sub>二</sub>外記例<sub>一</sub>、</sub></sub>

自<sub>二</sub>今夕<sub>一</sub>、內裡五體不具穢出來候、而來廿八日可<sub>レ</sub>有

<sub>レ</sub>遷幸五條東洞院亭、穢中臨幸之例、外記如<sub>レ</sub>此注

申候、就<sub>レ</sub>寬弘例<sub>一</sub>者有<sub>二</sub>遷幸<sub>一</sub>、穢限以後、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉

<sub>レ</sub>渡賢所之處、件穢可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>來正月一日<sub>一</sub>、元三間、賢

所各別御之條、其憚可<sub>レ</sub>候歟、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>給<sub>二</sub>〔候〕

之由、內々御氣色候、須<sub>二</sub>參入言上<sub>一</sub>候之間、穢事成

<sub>レ</sub>憚、且所<sub>二</sub>言上<sub>一</sub>候也、以<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申給<sub>一</sub>歟、恐

惶謹言、

十二月廿六日

右中將通親奉、

進上 美作守殿、

〔禮紙〕

追言上、

不參之條得御意、可令披露給候歟了、恐々謹言、

外記例、無勅申字、并右狀署所年月等、

穢中行幸例、

寛弘二年十一月廿七日辛未、今夕從太政官朝所、行幸東三條院、中宮同行啓、寵神自內膳司、奉渡東三條、但朝所有犬產穢、依件穢、賢所不渡御、十二月九日癸未、今夕賢所、自太政官渡御東三條、永保三年十月廿八日庚子、依御方達、從堀川殿、行幸六條殿、從去十三日、內裏有卅ヶ日穢、十一月二日癸卯、自六條殿、還御堀川殿、承暦四年二月廿二日、自內裏、欲遷幸中宮御領、西洞院第、自去七日、內裏穢中雖有行幸、無賢所渡御例、而數日賢所御坐他所、頗可有其憚、仍行幸延引、

安元二年六月、依祇園御輿可渡陣中給、雖可、行幸他所、穢中之間、賢所不可渡御、仍行幸停止、請文狀、

元正賢所各別之條、於先例者不知給、案事理、

尤可有其憚歟、以此旨可被洩奏之狀、如件、

十二月廿六日

右大臣、在判、

禮紙、

外記例返獻之、

今日有安來、有示事等、大將書始事、在憲朝臣注申云、今月廿八日辛亥、時申者、成光朝臣來、廿八日可參之由、仰遣了、

廿七日、庚〔天〕晴、午刻大外記賴業來、召前雜談、讓位二月廿七日之由、風聞云々、又云、明日行幸延引、依穢中、賢所不可渡御之故云々、或人云、件穢、時忠卿構出事歟之由、人々疑之云々、〔大將少有所勞、然而不及大事、及晚參女院〕今夕御佛名也、然而余依所勞不快、不若座、未始以前退出了、

廿八日、辛〔天〕晴、自夜雪降、但不及積地、此日雖可有遷幸五條東洞院亭、邦綱卿宅、內裏觸穢之間、件穢不具云々、但穢體非無疑殆、人々結構之由、有沙汰云々、依賢所不可渡御延引、明年可有遷幸云々、

今日申刻、大將密々有書始事、其儀、曹司南庇三ヶ間、



上<sub>三</sub>庇簾<sub>二</sub>垂<sub>三</sub>母屋簾<sub>二</sub>、二行敷<sub>三</sub>高麗〔端〕疊、奧東第一疊、前無<sub>三</sub>對座<sub>二</sub>、件疊前立<sub>三</sub>黑漆文机一脚、在<sub>三</sub>金物<sub>二</sub>、但其無<sub>三</sub>座巾<sub>二</sub>、其上敷<sub>三</sub>例紙二枚、其<sub>三</sub>左右<sub>二</sub>、其上置<sub>三</sub>五帝本紀一卷、香表<sub>三</sub>黑漆<sub>二</sub>、紙二枚、非<sub>三</sub>其<sub>二</sub>傍方、置<sub>三</sub>角筆文机、南方敷<sub>三</sub>圓座一枚、爲<sub>三</sub>師儒座<sub>二</sub>、申刻、疊前守成光朝臣<sub>四</sub>正下<sub>三</sub>、參上<sub>二</sub>、冠<sub>三</sub>、其<sub>二</sub>後大將着<sub>三</sub>冠直衣<sub>二</sub>、出<sub>三</sub>座<sub>二</sub>、以<sub>三</sub>職事能業<sub>二</sub>、布<sub>三</sub>、召<sub>三</sub>師儒<sub>二</sub>、即成光朝臣參<sub>三</sub>着圓座<sub>二</sub>、置<sub>三</sub>書參進<sub>二</sub>、開<sub>三</sub>在<sub>二</sub>机之書復<sub>三</sub>座<sub>二</sub>、披<sub>三</sub>自所持之書<sub>二</sub>讀<sub>三</sub>之、其詞曰、史<sub>三</sub>弟子受傳<sub>二</sub>、如<sub>三</sub>師<sub>二</sub>、次師卷<sub>三</sub>書退<sub>二</sub>下、次弟子入<sub>三</sub>內寢<sub>二</sub>、密議無<sub>三</sub>祿<sub>二</sub>、日時勘文、兼日召<sub>三</sub>在<sub>二</sub>憲朝臣<sub>一</sub>、是又依<sub>三</sub>密議<sub>二</sub>也、是皆余時例也、抑天仁二年十二月、故殿有<sub>三</sub>御書始<sub>二</sub>、于<sub>三</sub>時御年十<sub>二</sub>、爲<sub>三</sub>逐<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>相待之處、不慮昇<sub>三</sub>納言兼將軍<sub>二</sub>、若專<sub>三</sub>其禮<sub>二</sub>者、可<sub>レ</sub>招<sub>三</sub>違<sub>二</sub>期之嘲<sub>一</sub>、仍密々有<sub>三</sub>此儀<sub>二</sub>也、

又今日召<sub>三</sub>右近廳頭清景<sub>二</sub>、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>府年預之由<sub>二</sub>於<sub>中</sub>將隆房朝臣、於<sub>三</sub>大將方<sub>二</sub>、清景歸來、申<sub>三</sub>畏承之由<sub>二</sub>、府年預者、不<sub>レ</sub>奏<sub>三</sub>事之由<sub>二</sub>、大將進上也、仍相計所<sub>レ</sub>仰也、兼內內告<sub>三</sub>示此由<sub>二</sub>、入<sub>三</sub>夜隆職來<sub>二</sub>、談<sub>三</sub>世上事等<sub>一</sub>、

今年官奏四<sub>レ</sub>度、吉書<sub>三</sub>二度<sub>二</sub>、而荒奏和奏、兩夜依<sub>三</sub>大臣命<sub>二</sub>、史盛景給<sub>レ</sub>文不<sub>三</sub>稱唯<sub>二</sub>、大不審也云々、余案<sub>レ</sub>之、見<sub>レ</sub>文了返給之時、申<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>文、大臣無<sub>レ</sub>答、史不<sub>三</sub>稱唯<sub>二</sub>、定

例也、至<sub>三</sub>奏覽了還<sub>二</sub>陣、返<sub>三</sub>下文<sub>二</sub>之時、每<sub>レ</sub>文開<sub>レ</sub>令見<sub>三</sub>上卿<sub>二</sub>、隨<sub>レ</sub>目每度稱唯、皆下<sub>三</sub>了之後<sub>二</sub>、申<sub>三</sub>成文<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>文退下<sub>二</sub>、是例也、而吉書奏之時、史存<sub>レ</sub>例稱唯、依<sub>三</sub>大臣之答<sub>二</sub>、後兩度一切無<sub>三</sub>稱唯<sub>二</sub>云々、事外唯例、未<sub>三</sub>曾聞<sub>二</sub>事也、

又云、關白着陣之時、無<sub>三</sub>官方吉書<sub>二</sub>、故殿關白御着陣之時、覽<sub>三</sub>官方吉書<sub>二</sub>、即奏下、今度同雖<sub>三</sub>相儲<sub>二</sub>無<sub>三</sub>其尋<sub>二</sub>、又申文以前、被<sub>レ</sub>下<sub>三</sub>藏人方吉書<sub>二</sub>、希代例也云云、

〔廿九日、壬子天晴、及晚參<sub>三</sub>女院御方<sub>二</sub>、入<sub>三</sub>夜有安來談<sub>二</sub>、〕卅日、丑<sub>三</sub>、癸<sub>二</sub>、〔天〕陰、入<sub>三</sub>夜雨下<sub>二</sub>、關白被<sub>レ</sub>送<sub>三</sub>消息<sub>二</sub>云、今日可<sub>レ</sub>參<sub>三</sub>女院御方<sub>二</sub>、必可<sub>レ</sub>見<sub>三</sub>參<sub>二</sub>云々、未<sub>レ</sub>刻許被<sub>レ</sub>參云々、余參會、小朝拜節會叙位等之間事、條々被<sub>レ</sub>尋<sub>三</sub>之<sub>二</sub>、就<sub>レ</sub>中練樣、一切未<sub>レ</sub>習不<sub>レ</sub>知云々、仍委教了、降<sub>三</sub>立堂庭<sub>二</sub>、兩人共練之大略、未<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>練習<sub>二</sub>、及<sub>レ</sub>晚被<sub>三</sub>退出<sub>二</sub>、余歸宅、追憶云々、此次前兵衛佐長房、本名光實、後盛入道子、任<sub>三</sub>右馬頭<sub>二</sub>云々、

右治承三年<sub>丑</sub>己此秋冬一帙墨付百五枚者以三緣院道教  
公眞蹟松殿右幕下道昭卿被繕寫之畢  
抑法性寺忠道公之有職松殿基房公親面授而傳于後法  
性寺兼實公且加日錄號玉葉爲后昆之龜鑑其雲抄不讓  
他祕握而可貯深奧者也

于時慶安二年<sub>丑</sub>己正月仲旬陶化翁(花押)誌焉

玉葉卷三十一終

玉葉

卷第三十二

治承四年正月

三百三十四

治承四年春(上、正月、歲次庚子、)

正月(小)

一日、寅(未)晴、此日無私四方拜、內裏五體不具穢、  
遍滿天下之故也、內裏猶有四方拜、是先例云々、  
於人臣者、有障之時不行之、延久二年依觸禁  
中犬死穢、無四方拜之由見土記、午刻先手水、陪膳  
朝、次齒固、申刻着束帶、色日如恒、防劍、相伴大將、其裝束又  
如恒、防劍、魚參內、子時、魚袋、緋地平結、西上南面、年來例  
袋、紫綾平結、參內、乘燭、諸卿列立中門下、西上北面也、是又  
有先、未進立前庭之間也、予加其列、余及大將、於弓  
即關白已下列立南庭、如例、年關白被練也、公卿兩三人  
未立了之間、左大將實定參入、經列後立(加)余  
下、侍臣等列訖、群臣拜舞、次關白已下右廻退下、關白  
練也、又余離列退下之間、大將前退居、可家禮之人經我前之時、  
兩三步退居者例也、今列雖不過其前、准堂上動座之儀、所居也、  
余及大將於弓場殿、着淺履、直退出了、左相府爲  
勤內辨被着陣了、次參女院、余大將相共進南  
庭、拜舞了參御前、頃之退出、

今日行列、

先余居飼舍人等、

次一員六人、(左右)將監、

次前驅八人、無四位、

次番長二人、

次余車、

次余隨身雜色(也)、

次大將居飼舍人、

次一員、府生已上

次同前驅四人、五位二人、

次番長一人、

次大將軍、

次隨身雜色、

次共殿上人二人、

今日大將可參關白拜禮之由、內々有其告云々、  
此事不可必然、於如大發者、不論親疎、行向例  
也、至拜禮者殊屬之人、并雖爲一族、不異門下  
之客、人々之輩、即是也、所拜也、大將雖可相親強、非  
可行訪、就中如大將之輩、先々爲上首相訪者例  
也、如風聞者大將上臈可及五六人云々、於事似  
無用心、然而近日之事以恐爲先、又倩案、故攝政殿  
遣德、何強避誹謗哉、因茲欲行向之間、關白先以

參內云々、雖有恐又何爲哉、今夜節供、陪膳行、去夜追儼之次、被任右馬頭、前兵衛佐長房、本名光實、後爲入道二男也、兄季能爲內膳頭、今又如繁昌歟、熊野洪政叙法橋、此外無任人、及深更依三方違向南、侍從與祖母同居之家也、翌日早旦歸宅、今夜侍等少々、綏意依有奇怪也、

二日、卯、天晴風吹、午後手水、陪膳行、申刻大將出仕、今日用螺鈿劍、時給螺鈿金襴也、不付魚袋平緒、昨日同物也、先參八條院、次參內裏、次參中宮東宮等、次參博陸、第、申昨日不參之恐云々、酉刻左大辨宰相長方來、余相逢久談移刻、秉燭之後退出、即頭辨經房來、同謁之、語云、今日有東宮御戴餅事、去年依長治例、自院被進餅、今年仰內藏寮召火切餅進朝餉、召東宮亮重衡朝臣、被奉中宮御方、更女房隨身件餅、○更餅之間、恐有脫字、東宮中宮共參上、於內御方東西妻戸、有此儀、博陸奉仕之、女房役之云々、去年大夫參上、今年不然云々、長方、經房、兩人共云、昨日節會、內辨左大臣下名催國栖之節、不復座退出、其後左大將被行內辨事云々、經房又語云、昨日內辨未著宜陽殿兀子、以前、被尋內侍出否、仍不待着兀子、內侍臨檻、其後內辨著兀子云々、次第頗

違亂歟、今夜亥刻許近邊有燒亡、九條北、店橋、宮小路邊云々、頗雖物忿、即打滅了、今年有火事之厄、以之可爲其慎、於今者不可有以此恐者也、召使來催大將可參行幸之由、

今日右少將實明來右大將之許、大將候女院之間不謁、余以人謝遣之、三日、辰、沒日、九次、天晴、參女院御方、先是手水、陪膳、今日辨官少々來、昨日上官列參如恒、

四日、巳、天晴、此日可有行幸五條東洞院亭、而俄延引來十日云々、其間有樣事云々、近日事萬事皆如此、不便々々、戌刻頭中將通親朝臣、以消息催叙位執筆、尤奇怪也、然而依折節不可答如此事、申可參之由了、但基輔奉書也、須自筆書返報、先皆如此也、然而通親忘禮、仍余又用奉書也、此條非忘禮已先例也、今日叙位略次第一通、遣關白許了、依被請也、凡近日之事唯失耳目、還斷腸者也、五日、戊、天晴、此日叙位議也、余候執筆、已刻頭中將通親朝臣來、余着冠直衣謁之、通親仰可參執筆之由、余可參之由、又仰云、皇嘉門院御給々基輔、而依有上薦等難被叙、可被申他人者、余答申本所可示左右之狀、此次語昨日行幸延引之



子細、大略行隆申出事云々、小時退出、午刻少外記定親來云、賴業其人依被忍召參內裏、忽難早參、且令參六位外記也云々、賜硯筆墨等、案據如例年職事定成傳給須家司傳賜也、而各依又付橋氏々爵名簿、不加封先是進二十年勞帳、留文返給宮丁、  
亥刻著束帶、詩給劍、給參內、隨身下襦白襖袴、上臈例地平結、參內、染袴袴各不著紅梅也參御所方、先是關白被參候御前云々、外衛衛之之間、宗盛卿之許忽有被仰合事、只今被遣御使了云云、此間徒然睡眠、關白出來、可今夜作法令見次第、大略余所注與之次第也、又邦綱卿來示行幸延引之子細、及丑刻宗盛之使歸來云々、余著陣、先與、次令置也、令置式、頃之、頭中將通親朝臣來召諸卿、今日置云、依爲式日、不可有召仰之由存之、且可隨仰云々、余云、共無其難也、不被仰何事之有乎、仍無召仰也、抑代始被召者例也、不然之時六位召之、今夜召之、他人存召仰之、可尋先例、但古昔有如此之例歟、余小揖、由歟、不揖、次余以官人召外記、大外記賴業參膝突、仰宮文、賴業稱唯退下、次外記三人取宮文列立、余以下列弓場殿代、次余着殿上、關白豫、在奥座次關白及余著御前座、次實房、實國、朝方等、置宮文著座、參議三人著座之後、後、後實不待著訖、一人著座之後召之、今夜不然、主上引寄御簾給、關白微音稱唯、進著、簾下圓座、東、次關白召余、氣色、余微唯

進著圓座、先著我座、依三座、更重召一更次依仰奏二十年勞、如、次依仰召續紙、余召勇共、即五位藏人親、置前取、旁候、次依仰卷返續紙、其儀用異說、座前橫置之、白端卷之、至第二枚續目、今夜依加陪人員少、至第二枚、恒例三枚也、外サマ二卷、又至第二枚、合四枚也、續目、暫端、卷寄タル方サ前二置天取、與外サマ二卷之、初此說他人一切不用云々、以前兩度用正說、向座下、終今度依有所存、用異說也、此後雖可候氣色、又依存異說不候之、直摺墨、依無硯瓶之水、召、染筆書從五位下、先問叙人數、藏人給瓶、令入水、置叙位座前、叙位定テ、前二橫置也、取式部省奏、第二宮、在也、讀申叙之、次叙民部同前、次奏事由召實守卿、仰院宮御申文事、次叙王氏、名德在親上、付短冊不加封也、余先取笏、奏曰、王氏爵四五年來不被叙、是則正親正顯綱與神祇伯仲資、已上兩人共、顯廣王入道子、祇伯仲資也、顯綱、兄位階上臈也、王氏之長者相論、其事未決之故也、而今上舉狀、顯綱、若被宣下一歟、不然者自由上舉願以不穩、叙否之間可在、勅定者、仰云、可問外記、余召通親云、問外記、外記申云、可舉王氏之山、未被宣下、但去秋奉幣使之時、顯綱王、可爲王氏之長者、山被仰了、加之、父顯廣王在俗之時、雖不蒙可舉氏爵之勅宣、以爲王氏之長者、年來上舉、隨又所被叙來也、但此上

左右可有御定者、余奏此由、敕云、共有何事哉、且又可計奏者、余申云、古昔親王〔蒙〕宣旨舉之、雖然顯廣之時年來上舉狀、又被叙畢、今不可異彼例、何況奉幣之時、五位之王備其役、積年不被叙者、尤不便歟、但今夜不被叙、追宣下之後雖被叙、又何事〔之〕有哉、左右之間可隨勅定者、重〔仰云〕、顯廣之時、〔有蒙〕殊宣旨上舉狀、任彼例可叙之者、仍叙了、先是問外記之間、先叙藏人了、高階仲國、以關白口宣叙了、此間、實守卿持參皇太后宮御申文一通、殘所々自余取副笏、中文員少之時副笏是故實也、進寄置笏奏聞、取笏少退候、返給之時、又進寄置笏、給文副笏復座也、次叙外記史、次叙氏爵等、次叙件御給、次叙勘文、關白給勘文並申文、先是、叙二名〔了〕、自〔了〕通折紙等也、先是、叙二名〔了〕、自〔了〕中、被出視宮蓋申文、關白取之置〔前〕、左、勘文無其中、依余申、自〔了〕中、追被指出也、從下欲叙了之間、余奏事由召殿上辨、兼光、以議、仰云、入內一加階了、勘文并退下、此間叙從下之殘、并叙外從五位下一人了、猶依經程、竊叙加階等了、此間持參兩勘文、有禮余撤禮紙傳關白、々々見了返給、余取一加階勘文入第三宮了、依不可被叙也、讀申

入內勘文叙之、取末、之、或說書取前、然而皆叙了、卷勘文與關白、成文等入第一宮、各不引、次叙位與書年月日、放棄餘紙、卷之入、卷叙位、一兩度、勘文置硯上、縱撤第一宮內物等、成柄十年、入二次宮、取叙位入第一宮、置替宮、挿笏進、簾下奏之、返給、又置替宮、拔笏調宮中雜具等、取出叙位副笏、深揖起座退下、於殿上倚子前授成範卿、參御所方謁女房、奏大將可勤仕春日卿之間子細、勅云、尤可然云々、即退出了、今夜有勅盃一如恒、參入公卿、

關白、基通、余、

大納言二人、實房、實國、

中納言三人、成範、朝方、實家、

參議三人、實守、實宗、長方、

抑今夜史成舉申文、申可叙留春宮大屬之狀、仍余奏事由問外記、康和仁安共有例云々、奏此由、仰云、然者可叙者、仍叙之了、

治承四年正月五日、今夜大將始宮畔奠也、令木工允重永讀祭文、大將著衣冠〔取笏〕、臨祭庭、

家司季長朝臣、候御共一申沙汰也、〔著衣冠〕  
自納言一始此奠一先例也、重永補大將家令也、

仰光  
盛了、

叙位書樣、

從四位下、

藤原朝臣致經、策、

從五位上、

藤原朝臣定家、簡、

藤原朝臣仲家、

藤原朝臣保房、皇嘉門院當年御給、

從五位下、

康信王、寬和御後、

高階朝臣仲國、藏人、

藤原朝臣宣親、式部、

藤原朝臣盛致、民部、

大江朝臣惟景、外記、

中原朝臣成舉、史、

源朝臣信定、氏、

藤原朝臣邦明、氏、

橘朝臣經久、氏、

大江朝臣親實、皇太后宮當年御給、

大江朝臣資弘、內記、

藤原朝臣倫長、東市正、

平朝臣家繼、諸司、

藤原朝臣親貞、諸司、

中原朝臣家經、諸司、

中原朝臣貞久、諸司、

藤原朝臣景康、諸司、

紀朝臣實有、左近、

紀朝臣久光、外衛、

大江朝臣遠清、外衛、

藤原朝臣遠清、外衛、

磯部宿禰行職、入內、

外從五位下、

坂上宿禰忠成、諸司、

治承四年正月五日

六日、己未、天晴、白馬奏之間事、致大將、終日習禮、無他

事、

七日、庚申、天陰、小雨間降、此日白馬宴會也、余勸內辨、

大將可取奏、仍早旦修諷誦、余三ヶ寺、吉田、崇神院、

六角堂、

大將七ヶ寺、賀茂、春日、大原野、吉田、又大將祈仰僧等、終日令致祈念、已刻頭中將問、參內刻限、答、未刻可、參陣之狀、未終余及大將著裝束、余紫綾平結、大將紺地、相共參內、余前驅六人、大將前驅四人、隨身上藤、例參將、下藤、紅梅、袴袴如、常、經宗朝臣、季、信、扈從、各在大將車後、於陣腋、頭中將通親云、御裝束成了、數刻所、被奉待也云々、即余著陣奥座、此間大將在陣腋、余移外座之後、先是左大將已下、公卿五六人在座、次頭中將通親朝臣、懸、來、仰、內辨、其詞令候、余揖之、通親退歸之後移、於殿、來、仰、內辨、其詞令候、余揖之、通親退歸之後移、著外座、召官人、令置膝突、此大以同官、次右大將著陣奥座、次更召官人、召外記、賴業參候、軾、余問、諸司御弓奏、國栖造酒正外任奏等候否、每度申候之由、但左馬頭申、余仰、可、持參之由、最末間、外任奏之、賴業稱唯退下、持參外任奏、余披見之儀如、例、次以官人、招頭中將付之、此次奏、御弓奏可、付內侍所事、并左馬頭申、障事等、通親參上之間、六位外記進、小庭、申、代官、與奪如、例、余以官人、今之間可、申、仰、大外記、而忘却不仰、仍以官人所傳仰也、須是必、此間非、可、申、爲、急、事、所、行、是、又、例、也、次頭中將返、給外任奏、余結申、頭仰云、令候、列云々、次仰云、御弓奏事聞食了、左馬頭代右兵衛權佐盛定者、次余召、賴業、下、之、兩條同仰下了、賴業稱唯退下、此間

大將起座了、余可起座、依、次余起座、於陣腋、陣座、于座之間、出馬道、家禮也、疑、宣仁門外也、著靴、令押、笏紙、經陣座前小庭、相從、先下、跪、在、余、前、左、番、長、進、中、門、邊、相、待、內、侍、出、此、間、大、將、還、一、人、從、後、懸、裾、於、弓、進、中門邊、相待、內侍出、答、陣、了、被、引、諸、卿、爲、著外辨也、小時、內侍持下名、臨東階上、通親扶、余正、笏入、自中門、自砌北行經對前南庭、入、自造合間、自軒廊西進、此間隨身在對、南庭不進出、於東階下一揖、笏、無、揖、或、昇、階、一、級、依、階、短、不、懸、左、膝、取、下、名、退、降、拔、此、無、揖、揖、之、時、揖、者、取、副、下、名、左、廻、經、本、路、著、宜、陽殿代元子、召內豎、音、內豎稱唯、進立砌外、余仰云、式省兵省召、式部立、西、內豎稱唯出、次二省丞入、自中門、列立砌外、式部立、西、余正、笏先召式省、給式部下名、次召兵省、賜兵部下名、其儀、二省退了、次余起座、暫歸入中門方、此間中御門大納言、及實守等卿出來、余示付大將、取奏之間、不可被見放之由、次引陣天皇御帳中、近仗居胡床、次余著宜陽殿元子、次內侍臨檻、次余謝座參上著座、西面一揖、向、乾、廊、四、間、皆、如、常、今、日、日、未、沈、西、山、仍、如、法、練、步、次開門、次關司分居、已上、余、加、健、次、余起座、於東階下、不出、柱、外、尋召內記、取叙位宣命、先、見、之、昇自東階、自簀子、北行、此、皇、居、依、間、數、千、等、及、東、庭、東、邊、依、無、其、路、東、簀、子、東、北、假、構、立、部、爲、路、即、微、東、庭、也、昇自母屋東面北邊、



自與座後西進、到屏風下去三尺許、留立、直取立杖、兩三步進寄、身隱屏風、以左手付內侍、兩三步退歸、應向西北方、拔笏右廻、立母屋北第二柱下、其母屋第一柱也、然而以東庭疑母屋、仍暫稱第二柱也、向西南而立、內侍出御屏風下、余少忿進寄、揮笏、兩三步寄、以左手取書杖、又兩三步退歸、留立、左手取書、右手取杖、以杖打懸書上、左廻經本路、立本所、返給內記、令卷、整宣命、拔笏取宣命、參上著座、即懷中宣命、次召內豎、內豎稱唯參進、此間舉燈、庭上立明、余仰云、式省兵省召、內豎稱唯退下、次輔代參進、余先召式省、給位記宮、下如恒、次召兵省、給之、輔代置庭中案了、次余召舍人、二音、次少納言就版、余宣刀禰召、次外辨參列、余仰敷尹、外辨謝座謝酒、升殿著座、左大將爲上首、左大將、源大納言、藤大納言、中御門大納言、右兵衛督、右宰相中將實宗等皆端座、三條大納言、右大將、右宰相中將實守、堀川宰相、三位中將等著與座、右大將依余在端座、著與座也、次余仰實宗催叙列、次召宗通卿、召詞、右兵舍人、司召之如、賜宣命、宗通復座之後、余已下起座、先是大將下、殿依家列、立左胡床南頭、里內之時可撤胡床、而不撤之禮也、立南頭、仍其南迫、帷榻、無宣命使便宜事也、次宣命使就版、版位東等、如例、宣制兩段、各再拜、宣命使左廻、經尋常版位北東等、復座、無曲、折揖、次

余已下右廻復座、次叙人賜位記、拜了退之後撤宮案等畢、可立親族拜也、而早速下殿之間、叙人未拜云々、然而公卿拜舞了、立所如、復座、此間叙人拜了出云々、次第違亂大失也、余棄耻出仕、天譴也、今致此失、尤可然々々、左右大將不復座、留立、軒廊一見、白馬奏、左大將立西間、右大將立東間、柱外砌也、一二各立此、先左大將參上奏聞了、右廻、土御門流如此、花園受所也、經東實子南庇等復座、右大將昇自東階南頭、自實子西行、彼說、開院之流、又習花也、作法優美、昇母屋北邊長押、副北障子、頗留立、左大將過其前、之間相交代、西進、天到屏風下、取立杖、兩三步進寄、天付內侍、左廻、余家說、但字治左大臣、後年、作法無失、又優美、爲悅不<sub>少</sub>、於軒廊取杖之間、依長、仰、國身、令切之云々、先持杖計寸法、給、隨身、令切之、左大將不切云々、次余仰實宗、令取版標等、次白馬渡、次晴御膳、群臣立、供了居、余仰參議、次腋御膳四盤供了、仰實宗、令催臣下紛熟、即居了、申上余候天氣、御箸鳴、臣下應之、次供飽羹御飯、進物所御厨子所等、御菜汁物等、次催臣下飯汁、各居了、又次第申上下箸如恒、次供三節、次一獻、國栖奏仰實宗催之、次二獻、御酒敕使、賴定、三獻、舞姬奏余取之、儀如恒、依內教坊別當不參也、

次催<sub>二</sub>舞妓<sub>一</sub>、卽進舞<sub>二</sub>々々臺<sub>一</sub>、發樂及萬歲樂之間、余示<sub>下</sub>可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>女樂拜<sub>一</sub>之由於實定卿、著<sub>レ</sub>陣見<sub>二</sub>宣命見參等<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>捧<sub>二</sub>一枚<sub>一</sub>、共<sub>レ</sub>相共進立<sub>二</sub>軒廊<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>東階下<sub>一</sub>取<sub>二</sub>杖奏聞<sub>一</sub>、返<sub>二</sub>給杖於內記<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>宣命見參等<sub>一</sub>、參上著<sub>レ</sub>座、召<sub>二</sub>實宗<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>、須<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>實守<sub>一</sub>、而件人早出、賜<sub>二</sub>見參祿法<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>實守早出<sub>一</sub>、余讓<sub>二</sub>宣命拜於實定<sub>一</sub>、逐電退出了、先<sub>レ</sub>是大將退出、三獻了、未<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>舞姬奏<sub>一</sub>之間也、

今日參入公卿、

大臣、余、

大納言六人、實定、定房、隆季、實房、實國、宗家、

中納言二人、良通、朝方、

參議四人、家通、實守、賴定、實宗、

散三位、賴實、

右大將拜任之後、未<sub>レ</sub>被<sub>下</sub>御監宣旨、是職事未練之所<sub>レ</sub>致也、今日欲<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>白馬奏<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>被<sub>下</sub>御監<sub>二</sub>者不<sub>レ</sub>能取<sub>レ</sub>奏、仍余驚申、節會以前被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>了云々、

八日、辛酉天晴、左大將送<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>賀<sub>二</sub>右大將作法優美之由<sub>一</sub>、人々感歎云々、爲<sub>レ</sub>悅爲<sub>レ</sub>悅、女房參<sub>二</sub>詣吉田崇神院等<sub>一</sub>、姬御前相<sub>二</sub>基輔乘<sub>レ</sub>車<sub>一</sub>、在<sub>レ</sub>共侍三人、寂密儀每年事具<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、

也、但崇神院〔今〕年始參也、

十日、癸亥天晴、此日自<sub>二</sub>閑院第<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>幸五條東洞院邦綱卿亭<sub>一</sub>、去年天下大亂之後、早可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>幸他所<sub>一</sub>之沙汰出來、因<sub>レ</sub>該邦卿網修<sub>二</sub>造件亭<sub>一</sub>、土用以前僅五六日之間、大度成了、人以爲<sub>二</sub>奇異<sub>一</sub>、而之間忽<sub>レ</sub>氣出來、其後去四日又延引、七日〔內〕無<sub>レ</sub>遲<sub>二</sub>幸他所<sub>一</sub>之例<sub>二</sub>之故云々、右大將始供奉、戌刻著<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>、時給<sub>二</sub>綱綱、紺地平結、有文帶、不<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>打衣<sub>一</sub>、卷櫻、此外相<sub>二</sub>具平胡<sub>一</sub>、（時給<sub>二</sub>綱綱、弓綾等、召仰之後可<sub>レ</sub>帶也、參內、御輿出<sub>二</sub>御左衛門陣<sub>一</sub>之間參會、忽帶<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>供奉云々、

陣中行列、

先番長已下爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>下薦、隨身四人前行、馬右方<sub>番長</sub>、一

人、下薦三人、最末持<sub>二</sub>主弓<sub>一</sub>、隨身賜<sub>二</sub>狩袴染分<sub>一</sub>也、

次乘馬、隨身下薦第二張〔ノ〕口馬右方、舍人長貞、〔給<sub>二</sub>當色<sub>一</sub>、崩木上下濕山吹衣、〕居飼〔給<sub>二</sub>當色<sub>一</sub>〕等相<sub>二</sub>副之<sub>一</sub>、

次馬副六人二行、第一者持<sub>二</sub>笏<sub>一</sub>、馬副等不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>也、

次雜色二人、雖<sub>二</sub>陣中<sub>一</sub>依<sub>二</sub>乘<sub>一</sub>馬、追<sub>二</sub>おヤイ前<sub>一</sub>、正法雜色不可追、隨身可<sub>レ</sub>追也、然而幼少隨身等不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>追<sub>一</sub>雜色

之おヤイサキ、仍雜色竊追也、

路頭行列、

於<sub>二</sub>陣口<sub>一</sub>、二條町、番長騎<sub>レ</sub>馬、取<sub>二</sub>弓并松<sub>一</sub>、

前行舍人、當色、赤色、居飼同給<sub>二</sub>當色<sub>一</sub>等在其前、

次馬、張口同前、

次下薦隨身三人、取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>、

次馬副六人、不取松明、

次雜色二人、同前、

御輿出自左衛門陣、自西洞院北行、自二條東

行、自東洞院至五條皇居、入御左衛門陣、大將已下、於左衛門

陣末程、於兵衛陣前、中門外、門內也、右立南、左立北、兩大將

前行、於中門暫相待御輿、兩大將共進立南階左

右、右立、左立、東、各隨身相從發前聲、鈴奏之時、不進之時、諸卿先是列

前庭、北、上、西、次下御、立廻御帳前給之間、左大將已下

稱警蹕、鈴奏等丁名謁、中將隆房間之云々、即公卿

及兩大將、爲先下薦退下、右大將直以退出來

余方、即歸參女院了、今夜行幸、次中宮行啓、出車五兩、檣毛、

次東宮行啓、公卿被指分三方云々、實所御竈神等、

今夜渡御云々、(今夜大將前駟四人、共人二人、)今夜關

白騎馬供奉、在三行幸後行啓前、其後有職事等云々、

十一日、甲子、天晴、此日女房姬(君)御前、共參女院御

所、右大將八省加供、自官催之、付政所申上家令

進奉云々、先例自納言始之所勤仕也、

十三日、丙寅、天晴、今曉家女房爲余見吉夢、已刻參女

院、此間右少將實明來余方、以人示大將云、可申

諸春日祭陪從半臂下襲者、彼少將勤使之故也、對曰、早可調

獻候、此御所無便宜之間不謁(云々)、是大將答也、戊刻大

將參法成寺修正、元服之後今日始所參也、仍擇吉

日所參也、直衣如例、雖須出衣、今年無元、半部車、新、

前駟四人、隨身上薦布衣冠、下薦烏帽、法咒子之間參

入、先是長者被參、中御門大納言、新中納言朝方

等追參云々、及終頭大將退出、今日法性寺座主來、

語去年西塔釋迦堂本佛、并七社御正體、動搖給之間

子細、

十四日、丁卯、天晴、及晚陰雨、春日上卿事(大略延引)、

情案此事、猶折節無骨之上、(世間之人不語)武士、

又難出來之故也、御齋會竟有僧事云々、

十五日、戊辰、陰晴不定、邦綱卿示可遂春日上卿之

狀、然而猶延引了、

十六日、已朝問天陰、午後晴、未刻春宮藏人來催曰、來

廿日可有御著袴、并御真菜事、可參入者、申承之

由、件藏人藤原親家、主稅殿頭爲清男云々、

十七日、庚午、天晴、光盛參上、召前仰大將今年可上年

給任納言、次年二、給合任、據例也、申文、并封戶之間事可尋沙汰之狀、

自內裏被仰云、可書進東宮御著袴、主上御進

退作法、女房、申不知子細之由、重仰云、猶可書



進者、凡知此御作法、執政臣、可備顧問者也、何況此事不知、案內、然而再三之給旨不能、申左右、十八日、辛未天晴召春宮、大進、光長、問御著袴之間、子細、獻物之間事、博陸辭近云々、如何々々、

十九日、壬申天晴、早旦自内裏、被仰下、曰、御著袴之間、被奉結御腰、ハ師鑑歟、片鑑歟、又御直衣はこへ可引出歟、可籠歟云々、申云、雖不知先例、片匙可宜歟、又御直衣可被籠尻、又今日參入可言上子細者、未刻關白以棟範被示送云、永治故殿御記無所見、尤遺憾、兼又左大臣可問獻物云々、而令列庭中給之條、若無骨之由有御存知歟、然者可承存者、報曰、御記事奉了、獻物事、仁安之度左府問、ハ師生爲上首列庭中、今更何可存異議哉、凡以勿論事也、抑今度獻物、尤可令問給歟、長治、堀川左大臣、官位共爲上臈、仍知足院殿子時内覽不被問之、永治、故殿雖可令問給、依優花園左大臣、又不令問給、仁安、前博陸不被問之、已無理、何況於今般者、左大臣已爲傳、而被問獻物之條、豈以可然乎、執政臣問獻物之例、不可勝計、永承御賀、及東宮元服等、度々有此例、者、同刻故攝政殿若君之母尼、以前皇

后宮亮季經朝臣、件尼、此朝臣之姉妹也、有示事、件若君可有首服之間事也、酉刻著直衣、參内、今年余綱代車不調、仍借大將綱代車也、依召直參御前、朝御著袴之間條々、有被尋仰事等、

一御袴腰結様事、

依今朝下官申狀、片鑑之由有御存知之上、頭中將通親朝臣申云、長治之度、堀川院被問仰久我内大臣、而左方ニ片匙ニ可結之由、有所注置、即進證文、彼大臣自筆也云々、而左字誤歟、須結右方云々者、余申云此事尤有興、傳家之人猶貴事也、但左字全以非失歟、ハ已自筆云々、何有書失之疑、何況女房、袴腰「不引廻、仍可結于右、至于男袴腰者、ハ引まはして可結、然者前後左何不被結哉、而結于左方、有謂、表袴腰、後之左ニ結之、以之思之、男袴腰可結左歟、然者引まはして左方ニ片鑑可被結也、不可有異議歟、或說前ニ引まはして師鑑可結云々、然而無可指南之證文、久我相國自筆已可爲規模、於今者、可令付彼牒給歟、□□敕定被申旨可然、明日可存御此儀者、

一御はこへの事、



申云、凡人著袴之時、引直衣造尻、如主上御引直衣、春宮何異之哉、每事可遠主上例者、御拜何因哉、主上諸君共在左右也、何況引直衣、有はこへ之條、古今未聞者、敕云、人々多申此旨、同可存御此儀、一稱事、

長治知足院入道記、不注著御之由、疑不著御、歟、永治仁安共不召之云々、近例已不著御、歟、加之其著御之體、詳無存申之人、不如不著、御所存如此、猶可被尋人々歟、鄙生無所習傳、仍件子細暗難申披者、敕云、仁安度慥不著之由所覺悟也、今度同不可著御者、

一御裝束事、

以指圖中宮大進宗親所圖也、合式文左大臣造進、件式不得、委御覽、其後奉仕御裝束了、大夫忠親等、相共奉仕之云、進定賴等、御共巡覽了還御、此間余謂忠親、議獻物引立之事、長治、永治、仁安、皆入自東中門、東上列立、准彼者、今度自西參進、西上可列歟、大夫云可然、但彼皆以東爲春宮御方、仍雖自東參入、御座以東爲上、故東上列立歟、今般西方東宮御方也、又以東爲上、仍進自西天、東上列

立、道理可叶、次余云、此儀素所存知也、其上重加案、院拜禮小朝拜等不依御所便宜、隨前庭狹少、有東上西上之差別、然者不可依御所之上下一歟、大夫承諾、此後相共臨其所見之、而縱雖西上立南殿進南、仍末列之人可立南殿底下溜上、尤無便宜、仍猶可爲東上之由內々令議了、此後余退出了、經房朝臣云、琵琶事以令申御旨、奏聞之處、敕云、可催實宗云々、昨日可候御遊座之由有儀、而近年荒蕪之上、左手有恙、不可叶之由、八條二品煩禁云々、因之禪門上洛、前大將同下向云々、抑今日博陸所示送之獻物之間事次第、凡不得心奇異也、

廿日、癸酉天晴、此日皇太子有魚味著袴等事、三歲著袴爲吉例之上、來月依可有讓位事、所被忍行也、魚味當于五ヶ月、世俗云廿ヶ月食之云々、然而先例不必然歟、午四點著束帶、時給劍、紺參內、先是候傳左大臣未參、參御所方、小時參著東宮殿上、東宮御魚味事未始云々、參御所方、小時參著東宮殿上、東宮御間角子午御也、以北爲上、西座臺盤居、變、無勳益爲殿上侍臣候所、東有立並、先例也、左大將已下、公卿七八人許在座、頃之傳左大臣參入、招大進光長問獻物人事、可取御氣色之由示之、本左大臣可問之由、較次第、而忽有議、關白可被問之由、有其沙汰、聞被內議、有此奏聞歟、光長云、御真

菜」刻限至云々、傳云、每事可急行、且又可奏、內御方云々、次供朝饌、一御臺盤、陪膳極大夫知盛、仰左二御臺盤、通盛朝臣、隆次四位已下役送、供御座前、供了知盛候、南簀子敷、良久春宮出御、御座、亮重衡朝臣奉抱之、出自御帳東間、奉居畫御座、此間關白著御前圓座、經知盛前次重衡朝臣召左大臣及余、此間春宮無面嫌兩人共參著簀子圓座、他公卿「不」著座先例也、次知盛卿參進、居御座東邊、奉食之、先調、次御飯、次漬汁、奉食之、此間御進退敢非幼稚之儀、兼有成人之量、可貴々々、次重衡朝臣、奉食之間、件朝臣候御帳東邊也、參進奉抱入之、關白已下小平伏、次余先起、座復殿上座、次左府、關白重被參、暫之余起、座參、內御方、此間著御々裝束、御引直衣、紅打衣、重衡朝臣奉仕之云々、此間被進、東宮御裝束、授之敕使、奉通朝臣、余竊見、件御裝束、小葵文浮文織物御直衣、打紅、紅打御衣文、葵白文有、白綾御衣一領、同文、同單衣、單文、紅張三重御袴、有表裏差、御帶、御直衣地也、御扇、泥給、一帖、白練小葵文綾、面白平絹裏三幅也、懸緒弘三寸許帖之裏打、委置衣當蓋、件蓋時、越松置口、主上御裝束了、召御前、有被尋仰一事等、御袴腰結樣、見土御門右府記之由、通親朝臣注申之云々、白川院御著袴、于時後三條院坊御時、即春宮之若宮也、結右之由被記之云々、又昨日如申、堀川院御著袴之時、又我相國自筆

證文、奉結左之由注之、共爲體說、申是非難知之由、爲之如何云々、余申云、左右在御定、余本體不知事也、但須被用土右記歟、而案事理、猶可結左歟、凡男萬事用左、又普通表袴腰左結之、至女房袴有結右、不引廻腰之故也、然者可有男女之差別歟者、敕定云、所申可然、可被用長治例者、此間大將參入、同被召御前、暫問頭辨經房朝臣、申刻限至之由、先是、自內御方被獻御裝束并御膳具、不見及、可即出御々帳西間母屋、出自額間、此間大將參入、關白撤西庇鳥居障子、候其中、无無、便宜歟、經御殿南西簀子、數進入、御自造合間南面、御殿與中宮御所之間造合也、關白著御簾、此間、左大臣、余、相共經中宮御所南簀子、著東宮殿上、相次關白來著、經臺盤上、著與座也、左大臣及余在端、小時右大將參上著與座、經座末也、先是余參主上御共之間、大將無可參東宮御方之道、仍廻北對北、可參之由仰含了、此間御着袴畢、供東宮御膳、并改御裝束云々、良久、通親朝臣告出御之由、關白了、即起座參上、居西階、次公卿等皆悉降立屏中門南庭、東上北面、左大臣已下皆降、自東宮殿上南條、大將余不起、座以前降、依家禮也、次權大進時光、大進光長等、授獻物於左大臣余等、諸大夫等授左





何、左大臣頗以閉口、持疑良久、數刻佇立、誠以無用心、凡忽可還御之由、左大臣示關白、仍職事取脂燭、持參御草鞋之間、忽此儀出來、次第散々、此間公卿等獨在御前座、是又不可然、凡主上未練、關白有若亡、左大臣物總被申行之間、每事違亂、衆人屬目、良久之後遂以還御、余依寸白更發逐電退出、此旨觸女房辨內侍丁、

祿法、關白女裝束、自余大臣白得重、納言已下同掛一領云々、

御遊所候人、

拍子、宗家、琵琶、實宗、一切、等、家通、類、不彈如何、等、彈之、

和琴、實家、笙、陸季、笛、實國卿、

筆策、依無東宮殿上人之地、其能之間、地下召人吹之、

右兵衛權佐盛定、可被許昇殿之由、今日關白執申、然而無許容歟、長治地下召人吹之云云、凡定能卿可出仕者、此時尤可被召出之由、先日有敕定云々、而時忠卿抑留、今盛定昇殿強不可然之上、上薦之季信出仕、何盛定拔群可有沙汰哉、聖主存此旨不被許歟、

今日參入公卿、

關白、左大臣、右大臣、

大納言、實定、定房、隆季、實房、實國、宗家、

中納言、時忠、忠親、實通、成範、朝方、實家、

參議、家通、實守、賴定、實宗、長方、

散三位、基家、脩範、實清、知盛、賴實、

忠親、知盛螺鈿、自余、關白已下皆蒔繪劔也、

良通用紫綵平緒、

良通獻物了、不還昇退出了、依余命也、

今日事子細、可尋訪忠親卿光長等者也、

今日御真菜之時、御裝束白細長也、

廿一日、甲戌天晴、施樂院使丹波賴基參上、針齒下一、

廿二日、乙亥天晴、信助、智詮等來、

有安來云、宰相定能可出仕之由、有沙汰云々、是余先日仰付事也、尤悅思不少、晚頭右近廳頭清景、

持來府奏三通、請大將之判、一通御賀功、一通以弓馬殿功、中兵衛尉云々、一通廳頭

清景依奉公勞、余仰云、任大將最初除目、府奏放數

欲傳將監者、通之條不可然、清景將監忽不可申、又兵衛尉功

先例不審、以左右近府奏任兵衛尉之例、相尋可

申、但成功不空、追可有沙汰、於今度者只可

上一通也者、則御賀功之者府奏、大將加名二字、

賜了、今二通申文留置之、福原禪門今日下向了云々、



廿三日、丙子天晴、傳聞、御著袴之由、關白被著東宮殿

上之間、打散堂燈云々、余退出之後事也、入夜西

京方有火云々、去御著袴日、余祿自取起座、無可

受取之殿上人、仍投給召使等之中、于時隨身等不

也、而余隨身等欲責取彼祿、納言祿召使賜之、大見近邊之故

使參上、今度社申可被許之由、余裁許之、召使喜

悅、再拜而退出云々、伴召使古物云々、

廿四日、丑午上(天)晴、晚頭雨下、入夜甚雨大風、未

刻許藏人左少辨行隆來、余謁之、鳥帽直衣、行隆仰曰、五條

堀川後院町可有造營、而堀川材木商人、依爲陣中可

不通、此條可計奏者、申云、先天子之政、以無人

愁爲先、五條以北永可不通、爲世人爲商客、必

有所愁歎、加之後院町被造皇居、先例未聞、猶重

被尋皇居之地、相計彼是可被左右歎、行隆云、

後院者不付太上皇事也、只天子之被置御物之所

所也、何有禁忌哉如何、余云、所申非指禁忌事、

凡古來彼町、無被造皇居之例、加之偏爭非上皇

之被官哉、太上天皇御座之時、強無此沙汰、只付院

廳有進止歎、太皇不御坐之時、自公家被補別

當有其沙汰、然者何強擇後院之地、可爲天子

之居哉者、行隆諾即歸參了、酉刻參女院御方、亥刻歸來、

廿五日、寅(天)晴、午刻頭中將通親朝臣來傳、敕云、

自明日可被始行除目、可候執筆者、余著冠

直衣謁之、申可參之狀、通親云、日來左大臣被

申可參之由、而去夜俄辭退、右手腫不能取筆云

云、又傳、敕云、給料學生三人爭訴秀才、給料次第、第一

第三通業、而通業勸先例、依爲何樣可被仰下哉、又望

侍中可被補之由、依爲何樣可被仰下哉、又望

申學問料之輩數人、交名在別紙專一誰人哉、同可計

奏者、申云、秀才事、通業依侍中、申可被抽賞之

由、非無其謂、又儒道之習不超次第、兩之(間)、

左右只可在敕定、抑於賴範者爲永範朝臣之孫、

尤當其仁、季光通業之間、所詮可依學生之名譽

歎者、學問料事、又可依才幹之優劣、但如所望之輩

交名者、未舉一子之上、上臈儒士尤可預內舉之

恩、今一人自解之中、以候殿上之者可被登用

歎者、通親云、此事被問左大臣、被申之趣只同前也

云々、又云、式部之輔所望之者太多、於御前可有

議云々、又明經道之輩、上連署之奏狀、申可舉諸

司二三分之由、卒明法兩道課試之者、春秋除書雖給

官、其外猶舉任諸司二三、明經道何有相違哉、  
加之古昔多有此例、而正曆年中當道、被置問者生  
八人以降、課試數多給官不希、而近年敢無遂課  
試之輩、推舉之間還爲道之煩、且依上古之例、且  
任他道之跡、欲預恩容者、此事同可及議定云  
云、又云、侍中可有闕、皇嘉門院藏人被舉三人之  
由、承之如何云々、余云未承及、但自一所被舉  
三人定、僻事歟、各私成其望歟、頃之通親退出了、大  
外記式部丞等、明日可參之由仰遣了、爲下公卿給  
也、申刻三井寺僧都覺尊被來、余謁之談法文、小時  
被歸了、酉刻隆職宿禰來、談世上之事、余問後院  
事、申云、專付太上天皇事也、行隆之案太嗚呼、可  
嘲云々、晚頭信範入道催進公卿給、

廿六日、己陰晴不定、時々雪瀧、此日春除目初日也、  
余奉仕執筆、早旦修諷誦七箇寺、賀茂社稻荷、春日、大原野、法成寺、六角堂、  
午刻、大外記賴業參上、先召藤前問仰雜事、頃之退  
下侍所、以家司行賴朝臣賜公卿給、加二合停任、并三  
中、是給、外記、料也、二合停任勘文、已上二通、卷一籠一禮紙、結  
枝、如、押入上、筆墨、白管筆、二卷、本不、卷紙、平墨一挺、以例美  
下、如、例年、一、筆墨、紙、一、卷、之、如、常、已上、卷、二、枝、檢、上、下、  
非、立、等、式部丞雖催不參、仍傳外記一例也、秉燭着二

束帶、時拾飯、紺地平結、相二伴右大將、唐草時拾飯、參內、  
五條東洞院、皇居、南殿清涼殿相兼、東禮御先參朝餉方、大將同  
前座以西爲上、伏侍座二間太狹少、謁女房、小時著陣與座、大將不著、依家禮不可列、相  
次中御門大納言宗家、左大辨長方等着座、次頭中將  
通親朝臣來、就座下仰召仰事、其詞不分明、余頗居向之  
小揖、通親退下之後、余移著端座、長方平伏、予著座、以  
扇直履、使官人置膝突、此間三條大納言實房、右宰相中  
將實宗等著座、先請益知常、以同官人、使仰可召外記之由、即外記賴業真人  
參軾、余仰云、自今日可有除目、召仰諸司、賴業  
稱唯退下、次以官人召辨、即左少辨行隆來就軾、  
余仰詞同仰外記、行隆微唯退下、次以官人更召  
大外記、仰云、文書相具々々、申候之由、余目之、賴  
業稱唯退下、此間余示人々々曰、宮文者納言所役也、  
此外納言不被候歟如何、實房云、花山納言、右衛門  
督等、各〔來〕著陣〔之〕云々者、余曰右大將祇候、然而  
依家禮不可列立、但人數不足之時、立列定例也、  
參議取宮文、又爲流例爲之如何、人々曰當時人數  
無不足、強不可事闕歟者、仍不召着大將、頃之藏  
人就軾召諸卿、余小揖、諸卿一同可揖、次余以官人  
召外記、六位外記參候小庭、余仰云宮文候、外記稱





和泉掾正六位上藤井宿禰國次、校書殿頭、

肥後大目正六位上藤井宿禰有末、校書殿、散位、勞、

下總大掾正六位上高橋朝臣午包、校書殿執事、

此間家通持參院宮御申文、余取之置硯上、押宮

取御申文、不指、勿如本座下方也進寄奏之小退候、不持、勿返給之

時、進寄取之、復座暫置座前、橫次任進物〔所〕二

人、大舍人三人、四所籍先奏、兩官帳之後、移置第

大和少掾從七位上〔大江〕朝臣有次、進物所執筆、

備中大目從七位上秦宿禰牛里、進物所膳部、

上總大掾正六位上賀茂朝臣吉末、大舍人番長、

下野掾正六位上高橋朝臣國兼、大舍人、散位、勞、

能登少目正六位上藤井宿禰友里、大舍人、本籍、

次余示當年內給、并院宮公卿給可給之由、於關白、

關白撰出之間頗經程、先給當年內給、并公卿給兩三

束、先任內給五人、成文入第一

參川大掾從七位上中原朝臣久廉、當年內給、

丹後大掾從七位上藤井宿禰景澤、當年內給、

大和大目從七位上藤井宿禰久成、當年內給、

上總權目從七位上中原朝臣宗安、當年內給、

請文書中原宿禰、然而依爲、內給不難之、改直戶任之、

備中大目從七位上藤井宿禰友國、當年內給、

次任院宮當年給、此〔中〕皇嘉門院御申文、被加載

二分代、仍任掾一人、申文表付驗加、成束、抑今度隨

任放裏紙置前、卷申文指成束、卷裏紙入第四

宮也、當觀入第三宮是又一說也、自視宮第四宮也、法皇御給無之、尤憐事也、

安藝大掾從七位上藤井宿禰恒松、皇嘉門院當年御給、

周防大掾從七位上藤井宿禰宗貞、上西門院當年御給、

阿波大目從七位上藤井宿禰貞方、上西門院當年御給、

伯耆大掾正六位上藤井宿禰成清、八條院當年御給、

周防大目從七位上中原朝臣近國、八條院當年御給、

伊豫大掾正六位上草部宿禰末光、中宮當年御給、

讃岐目從七位上藤井宿禰正恒、中宮當年御給、

播磨掾正六位上高向宿禰國康、春宮坊當年御給、

伊豫大目從七位上錦宿禰末國、春宮坊當年御給、

出雲少掾正六位上丹波朝臣則行、前女御孺子當年給、

加賀大目從七位上藤井宿禰牛方、前女御孺子當年給、

及三通之間成束如恒、取替懷中紙、精如恒、此間又撰給公

卿給兩三束、余取集置前、橫注、此中事難書太多、仍折下方入第二

四宮、召定能卿、仰可令勘申之由給文、仰文、次

任公卿當年給、只余給一人也、關白不被上三年給申



文如何、若先例歟、將無沙汰歟、

越後目從七位上中臣朝臣則行、兼實當年給、

自給書名字、是又先例也、尋常ハ書官也、

次任上召使、申文在硯宮、雖望據推任目如例、

攝津大目從七位上宗岡宿禰兼次、上召使、

夜未及五更、仍任諸道舉諸院舉等、返入本宮、

安藝小掾正六位上大江朝臣季盛、北堂年舉、

長門大掾正六位上源朝臣國安、明經年舉、

日向掾正六位上藤原朝臣季業、明法年舉、

壹岐掾從七位上大中臣朝臣貞國、筆道年舉、

伯耆少掾正六位上藤原朝臣武次、勸學院年舉、

大隅掾正六位上秦忌寸經久、辨學院年舉、

駿河權掾正六位上橘朝臣武久、學館院年舉、

次取<sub>レ</sub>笏奏<sub>下</sub>皆任了、可<sub>レ</sub>卷大間之由、先氣也、有<sub>二</sub>天

許、即應<sub>レ</sub>動也、即卷大間加<sub>二</sub>禮紙一封<sub>レ</sub>之、件紙檢、設<sub>二</sub>成束<sub>一</sub>之次、入<sub>二</sub>宮<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>取出也、

切<sub>二</sub>緒餘<sub>一</sub>引<sub>レ</sub>墨加<sub>レ</sub>常、次入<sub>二</sub>成文宮<sub>一</sub>、國官移<sub>二</sub>次取<sub>二</sub>成

文一封<sub>レ</sub>之、以紙橫一筋可<sub>レ</sub>封之、成文長少之時故實也、而忘却<sub>二</sub>引<sub>レ</sub>墨加<sub>二</sub>入大間<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>成文左、置<sub>二</sub>替宮<sub>一</sub>、指<sub>レ</sub>笏押<sub>二</sub>硯已下<sub>一</sub>、奏

聞之儀如<sub>レ</sub>常、復<sub>レ</sub>座之後拔<sub>レ</sub>笏、如<sub>レ</sub>本引<sub>二</sub>寄硯已下<sub>一</sub>、取

<sub>レ</sub>笏深揖退下、參<sub>二</sub>御所方<sub>一</sub>、小時退出、

今日有<sub>二</sub>勸孟<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例、頭通親朝臣、隆季卿經<sub>二</sub>簀子<sub>一</sub>來受

<sub>レ</sub>孟、巡行如<sub>レ</sub>常、

今日參入公卿、

關白、

〔大臣〕、余、

大納言、隆季、實房、實國、宗家、

中納言、兼雅、真通、實家、

參議、家通、實宗、長方、定能、

書<sub>二</sub>袖書<sub>一</sub>之程事、

普通說奏<sub>二</sub>院宮御申文<sub>一</sub>、返給之下書<sub>レ</sub>之下勘也、或

說任<sub>二</sub>內給<sub>二</sub>書<sub>一</sub>袖書、又或說任<sub>二</sub>院宮公卿當年給<sub>一</sub>之

後書<sub>レ</sub>之、長治二年任<sub>二</sub>院宮當年給<sub>一</sub>之後注<sub>二</sub>袖書<sub>一</sub>、其

後被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>公卿當年給<sub>一</sub>、今日逐<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>也、

去年任<sub>二</sub>納言<sub>一</sub>人、當年給<sub>二</sub>合下勘事<sub>一</sub>、

他家說依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>事疑<sub>一</sub>、不下<sub>二</sub>勘之<sub>一</sub>、五節二合又同、而

家說皆下<sub>二</sub>勘之<sub>一</sub>、永久四年春除目、故殿執<sub>二</sub>權中納言

重資卿上<sub>二</sub>二合申文<sub>一</sub>、件人去年月日任<sub>二</sub>納<sub>二</sub>注<sub>二</sub>袖書<sub>一</sub>被<sub>二</sub>下

勘、仍今日右大將二合申文下<sub>二</sub>勘之<sub>一</sub>、

件申文書樣如<sub>レ</sub>例、任<sub>二</sub>天喜五年<sub>一</sub>、京極殿去年十月天永

三年、故殿去年正月等例、以<sub>二</sub>出納<sub>一</sub>舉<sub>レ</sub>之、依<sub>二</sub>余時

例一任<sup>二</sup>加賀掾<sup>一</sup>、但明日任<sup>レ</sup>之也。

今日不<sub>レ</sub>放<sub>二</sub>四所籍籤<sub>一</sub>事、

除書之祕事、至極在之、如世間風聞者、讓國已近、御前之儀暫以可中絶、今度可盡執筆之奧事、歟、今夜尤可備此作法、而京極殿已後至于故殿、四代之間已無此事、宇治左大臣兩度有此事、已不快之例也、仍雖存故實、不顯此作法、一者雖似遺恨、又非無所存、堀川左大臣只一度有此作法、故殿於其座有御覽、但頗不似家說云々、

廿七日、庚辰〔天〕晴、除日中日也、早旦修三諷誦等如昨日、戌刻著三束帶參內、先參三御所、以三女房被仰云、明經道申<sub>下</sub>舉三諸司二三分事、今夜可有定歟如何、申云所<sub>レ</sub>申有裁許、入眼之次可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任者、今夜必可有定、又必今度不可<sub>レ</sub>事切<sub>一</sub>者、雖<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>除書之次、只可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>一</sub>人々一歟、兩ケ之間可<sub>レ</sub>在<sub>一</sub>勅定<sub>一</sub>者、重仰云、若今夜可<sub>レ</sub>定者、何程可<sub>レ</sub>有哉、又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>奏狀一歟、申云、其程全不可<sub>レ</sub>有定期、但顯官舉之後宜歟、又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>奏狀<sub>一</sub>也者、此間通親朝臣、觸<sub>一</sub>示人々參集之由<sub>一</sub>、余着<sub>レ</sub>陣直著端先例也、令<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>軾、此間實房、宗家、長方等著<sub>レ</sub>陣、余召<sub>一</sub>賴業一問<sub>一</sub>文書具否、小時藏人來召、欲

仰宮文之處、公卿不足宮文員數、仍以官人令尋殿上方、此間賴定卿著座、次余召外記一位、仰宮文、次宮文列立小庭、次余已下列弓場殿代、如去次余著殿上、關白及余著御前座、陸季卿候坐殿上端座、次實房、宗家、賴定、長方等、置宮文着座、此間陸季卿着座、不取宮文如何、次關白依召著圓座、次余又依召直着第一圓座、正笏候、次以大間宮押張御簾給、余小忿置笏押宮、取笏進就簾下、指笏裏御簾、給宮置板敷、引出復本座、置宮拔笏、見大間成文結目、取出見之、置替宮取笏候、御簾動、余微唯置笏取出大間、以刀切結緒、自結目左切之如常、引拔<sub>自右引</sub>如例、如入硯宮シテ納懷中、撤禮紙自奥卷之、入硯宮下方、繆置大間一寸許、如常取笏候、此間居大櫃衝重等、次依仰摺墨、先取文章生勞帳、在第三宮、讀申、押合候、氣色、無指較許、置硯上披見寄物、卷合還入、披大間一染筆任之、置筆讀申大間勾勘現下方、披大間一染筆任之、置筆讀申大間勾勘文、如本置硯上、置筆更取讀申、今度無押合候氣色之儀、任之如初、如此任三人了、勞帳入本宮候、御書所之輩注付其由、除件輩之外三人、任北陸西海道等也、或先任內舍人、是常作法也、今度依長治二年例、先任文章生外國也、此間勸盃、通親朝臣陸季受盃

如例、

能登掾正六位藤原朝臣公經、文章生、

越後大掾正六位上高階朝臣隆仲、文章生、

肥前少掾正六位上高橋朝臣信尙、文章生、

次任內舍人外國、作法同前、但無押合候氣色之

儀、又任坂東國、皆任了、勞帳返入本宮了、大間取

闕、內舍人、三人中  
務省被官也、

尾張大掾正六位上中原朝臣貞綱、內舍人、

信濃少掾正六位上藤原朝臣俊康、內舍人、

遠江大掾正六位上平朝臣家俊、內舍人、

此間定能卿、持參去夜所下勘之申文等、余取之暫

置前、任內舍人了、任件申文等、此內二分代申文

等、乍付短冊置一宮、自餘皆悉任了、短冊入成文

及三通之時、在第四宮之申文、取、撤短冊置

前、披申文四倍折テ、破其與度、置前、卷申

文、如本付短冊返入本宮、取破置之紙、繕之、如

形取替懷中紙捻、以去夜成文并今夜成文三通、結

添之、今一筋紙捻同入一宮、爲大間也、又說入硯

宮也、勘上文任一兩之間、申驚顯官申文可被下

之由於關白、于時始被撰之間頗經程、撰給申文

等、余取之置前、任殘申文等同所也、但不混合也、取笏目隆季卿、件

卿經實子來居余後、余置笏取集申文等、自座下

方給之、仰可令舉申之由、隆季置笏取之、副

笏復本座、次第見下申文、定能卿書舉、諸卿座前立燈

先例一燈也、而此實首執二燈、然而猶召此間余奏事由、召

通親朝臣召三勘文、兼國、轉任、宿官等也、持參之間任勘上文

畢、

加賀大掾從七位上秦宿禰恒里、右近大將藤原朝臣當年給二合、

安藝掾從七位上藤井宿禰成武、春宮大夫藤原朝臣、安元二年給二合、惟宗信高不

給任符、秩滿、仍改任、

豐前介正六位上中原朝臣盛康、停太皇太后宮、治承二年臨時御給、清原助忠改

任、

良久不持參勘文等、仍召男共令置掌燈之次、早

可持參之由傳仰之、頃之通親持參三勘文、兼國加禮紙、轉

任、宿官、卷重加禮紙、余取之不披見、傳關白、關白一々披見返

給、余取之、轉任宿官暫入一宮、撤兼國勘文禮紙、

入第四宮、讀申次第任之、以所載之例之國計、任

之、隨任一人勘文合點、不懸、勿也、皆任了、付兼字、

卷勘文、不加之禮紙、返與關白、畢、

加賀權守正四位下藤原朝臣定能、兼、

阿波權守正四位下藤原朝臣重方、兼、  
出雲介從五位上藤原朝臣公國、兼、  
土佐介從五位下藤原朝臣兼經、兼、  
阿波介從五位下藤原朝臣家經、兼、  
能登權守從五位下藤原朝臣隆實、兼、  
伯耆權介從五位上菅野朝臣季親、兼、  
美作權介正五位下和氣朝臣定長、兼、  
安藝權介從二位上丹波朝臣康明、兼、  
美濃介從四位上藤原朝臣光範、兼、  
越前權介從五位上藤原朝臣親經、兼、  
美作介正四位下藤原朝臣泰通、兼、  
周防介正五位下藤原朝臣實明、兼、  
伊豫權介正五位下藤原朝臣兼宗、兼、  
伊豫介從四位上平朝臣清經、兼、  
播磨介正五位下藤原朝臣光長、兼、  
次取<sub>下</sub>在<sub>三</sub>成文宮<sub>二</sub>之<sub>二</sub>兩勘文<sub>上</sub>、剝<sub>二</sub>取宿官<sub>一</sub>、轉任宿官、入一宮了、讀  
〔申〕置<sub>三</sub>視上<sub>二</sub>任<sub>一</sub>之、此史成舉不<sub>レ</sub>載<sub>三</sub>勘文<sub>二</sub>、仍召<sub>三</sub>通親  
朝臣<sub>二</sub>問<sub>レ</sub>之、通親問<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>申云、康和仁安申<sub>下</sub>可<sub>レ</sub>叙<sub>二</sub>  
留春宮<sub>一</sub>、遂有裁之由、仍不<sub>レ</sub>載<sub>三</sub>宿官勘文<sub>二</sub>、又不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>  
任<sub>レ</sub>之、仍除<sub>レ</sub>之者、以<sub>三</sub>此旨<sub>一</sub>奏聞了、其外四人皆任了、

隨<sub>レ</sub>任懸<sub>レ</sub>勾了、卷<sub>レ</sub>之指<sub>三</sub>成文<sub>二</sub>了、  
尾張權守從五位下高階朝臣仲國、  
肥前介從五位下大江朝臣惟景、  
越中權守從五位下藤原朝臣宣親、  
相模權守從五位下藤原朝臣盛致、

新叙史成舉、依<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>東宮<sub>二</sub>、不<sub>三</sub>宿官<sub>一</sub>、今夜除目以  
前、以<sub>三</sub>口宣<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>下</sub>也、是康和仁安例也、  
此外有<sub>三</sub>雜々外任等<sub>二</sub>者、可<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>之由示<sub>三</sub>關白<sub>二</sub>、答云、無<sub>三</sub>  
可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>之者<sub>二</sub>云々、此間又尋<sub>三</sub>公卿子息二合<sub>一</sub>、并院宮  
內官未給御申文、關白撰<sub>二</sub>出子息二合申文<sub>一</sub>、通許<sub>二</sub>多<sub>一</sub>、  
給<sub>レ</sub>之、余依<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>所作<sub>二</sub>、此間注<sub>三</sub>袖書<sub>二</sub>了、暫置<sub>レ</sub>前、次余  
奏<sub>三</sub>事由<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>男共<sub>二</sub>召<sub>三</sub>通親朝臣<sub>一</sub>、召<sub>三</sub>瀧口所衆勞帳<sub>二</sub>、  
〔其詞云、〕瀧口所衆勞帳者、多<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>眼夜召<sub>レ</sub>之、而<sub>三</sub>通親退下<sub>一</sub>、頃之  
長治二年春中同被<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>之、依<sub>レ</sub>彼例<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>也、  
置<sub>三</sub>兩勘文於柳宮<sub>二</sub>持<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>之、依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>加<sub>三</sub>禮紙<sub>二</sub>、余返給、  
通親頗雖<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>執之色<sub>二</sub>、終取<sub>レ</sub>之退、各加<sub>三</sub>禮紙<sub>二</sub>持<sub>レ</sub>參、須  
卷<sub>三</sub>籠一禮紙<sub>二</sub>也、而各別加<sub>三</sub>禮紙<sub>二</sub>又失也、然而只仰<sub>二</sub>  
聞此旨、不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>返給<sub>二</sub>、余撤<sub>三</sub>一通禮紙<sub>二</sub>入<sub>三</sub>第四宮<sub>一</sub>、卷<sub>二</sub>  
籠一禮紙<sub>一</sub>入<sub>三</sub>成文宮<sub>二</sub>畢、不<sub>レ</sub>覺<sub>三</sub>關白<sub>二</sub>、抑、隆俊卿爲<sub>レ</sub>頭  
之時、不<sub>レ</sub>加<sub>三</sub>懸紙<sub>二</sub>進<sub>レ</sub>之、其後或有<sub>レ</sub>執<sub>三</sub>此儀<sub>二</sub>之輩、然  
而爲<sub>三</sub>執筆<sub>二</sub>之故實、必令<sub>レ</sub>加<sub>三</sub>進禮紙<sub>二</sub>、是內<sub>二</sub>覽大間<sub>一</sub>之



時、有可入之事、故也、或又無件禮紙之時、有說云々、然而故京極殿、二條殿、故殿、度々返給、被仰可加禮紙之由、仍余守彼例、仰此由者也、此間余取出成文、少々調之如本還入、余竊示關白云、明經道之事可被定者、且可被申出奏狀、進顯官舉之次爲下給也、關白申請此旨、即被下奏狀、關白置前、暫之隆季卿、副顯官舉并申文等於笏持來、余取之置前、給明經奏狀、先余取關白置座前仰云、明經道任<sub>竿</sub>道明法例申可舉任內官之由、可被定申者、隆季取之還座、余以顯官舉并申文等與關白、々々進舉於御所、於御申文指大束了、故實卷籠申文於舉之中進御所今所爲違例歟各見下奏狀、此間數刻從以祇候、仍内々示合關白卷大間、是又非無先例暫不加禮紙、置硯上、權、余取笏祇候、人々見申文了、隆季卿仰定能云、明經道任<sub>竿</sub>明法例申可奏任內官之由、可否之間、宜令定申者、即自下薦次第定申之、參議等述片足申之定能卿發語申云、明經博士等申可舉內官事、成範卿已上取條之狀如此、但各明經道申也、余如定能申狀如奏狀者非無先例、被裁許何難之有哉、

長方申云、明經道申任<sub>竿</sub>明法例可舉內官事、實宗、定賴、如此當道惟重、先規已存、被裁許可宜、但課試之輩、得業生問者生相並令任、近代之例也、若此上被許內官之舉者、恐今度之除書可有三人之給官、仍得業問者之間、任課試次第、可被任一人、其上被許內官之舉、何難之有哉、

賴定卿同定能卿、但不申同之由、各申意趣

實宗、兼雅、成範、宗家、各申可在勅定之由、實

房申難被許之由、子細分明不聞

隆季申云、四道之中以明經爲宗、但至此條者、緯已爲新儀、又可謂過分、加之若被許內官者、恐自今以後課試永可絕歟、除目之時、不<sub>上</sub>課試及第勘文、後歷如何、所存思給者、減定課試之登科者、何有生徒之煩費哉、猶必可有裁許者、慥停止一人之給官、得業問者之間也之由、可被下宣旨歟、凡此事不甘心、此上事可在敕定者、余申云、當道之所申、非無所據、正曆以往其例已存、何謂新儀哉、被置問者生以降、自然不<sub>上</sub>舉狀歟、今任人々定申旨、得業生問者生之間、依

課試次第被任一人、其上被許、內官之舉(者)、何異彼明法竿之兩道哉、仍不可有過分之難、但正曆以後此舉絕久、裁否之間宜在、御慮者、關白申云、可在勅定者、

次隆季卿副奏狀於笏持來、余取之與關白、々々被進御所了、次余問宗家卿、隆季卿退出了召左大辨長方、給京官二合申文、仰明日可勘進之由、次余大間加禮紙一封之、如昨入成文宮、次取出成文一封之、去夜成文ハ良多、今夜成文ハ數少、仍不被裁、竊拔取去、夜成文三四通許、加今夜成文裁之、封之如恒、加大間宮、右成夜申文、中成夜成文、置替硯宮、指笏押硯已下、取大間宮進寄奏聞、復座拔笏引寄宮等、取笏深揖退出、

今夜成殘申文、

院宮二分代御申文、付短冊轉任勘文、二所勞帳等也、

今日參入公卿、

關白、

大臣、余、

大納言、隆季、實房、宗家、

中納言、兼雅、成範、

參議、賴定、實宗、長方、定能、

今夜除書以前被宜下秀才賴範通業第一、季光下薦二人了、給新、大江匡範、(維光朝臣子)藤長、正、故光朝臣子、)內非藏人、

廿八日、辛巳(天)晴、入眼也、戌刻著束帶參內、參御

所方、即主上出御、御直衣仰云、今夜可有式部輔定、其期

如何、余奏云、全定期不可候、只議中間可被仰下

候、此次勅云、先々顯官舉、相加申文所被進也、而

去夜不令進申文如何、申云、定所見候歟、又仰云、

天文密奏封上、執政加名字二字歟、片字歟如何、奏

云、此作法未知給事候、但上字許書之候歟、重仰云、

然也、故入道所爲如、此之由側傳聞、又前博陸此定

也、(而)此關白被書名二字如何、申云、同定所見候

歟、又有勅語等不能委記、此間關白於西南方、被

書任人折紙、主上渡御其所、余著仗座端座、令置

軾之後、召大外記賴業問文書具否、此間、實房、

實國、實宗等卿著座、相次家通卿著座、良久之後

于二點許歟、藏人來召、次余召外記仰宮文、次宮文外記列

立小庭、次余已下列立弓場代、如去夜、次著殿上、

關白相共著御前、四卿置宮文著座、次實定卿著

座、次關白及余依召就、余直著簾下圓座、一如昨日下給

大間宮、見結目、置替次依仰繆、大間一如昨日、又依

仰摺墨、取<sub>レ</sub>出課試及第勘文、讀申置<sub>二</sub>視上<sub>一</sub>、押合候、任之、先關白給<sub>二</sub>任人折紙、余給<sub>二</sub>大問答<sub>一</sub>之、明經問者生一人也、後被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>申文、關白撰<sub>二</sub>分任人申文等<sub>一</sub>、文章得業生雖<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>勘文、如<sub>二</sub>折紙<sub>一</sub>者被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>式部丞、仍轉任之次可<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>之、故暫不<sub>レ</sub>任、卷<sub>二</sub>勘文<sub>一</sub>返<sub>二</sub>入本宮、但不<sub>二</sub>混合<sub>一</sub>又可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>文章生散位<sub>一</sub>、讀申、勘文還入了、取出之故也、

內匠少允正六位上中原朝臣行貞、問者生、

織部佐正六位上藤原朝臣知孝、文章生、散位旁、

次給、諸司奏、諸道舉等、并他申文取<sub>レ</sub>之撰分置<sub>レ</sub>之、見<sub>二</sub>合注文<sub>一</sub>且任<sub>レ</sub>之、先舉奏之類也、此次任<sub>二</sub>內舍人等<sub>一</sub>、此間長方卿、持<sub>レ</sub>參去夜所<sub>二</sub>下勘之公卿子息<sub>一</sub>合申文、余取<sub>レ</sub>之暫入<sub>二</sub>一宮<sub>一</sub>任<sub>二</sub>他京官等<sub>一</sub>之次、見<sub>二</sub>合注文<sub>一</sub>之處、一人不<sub>レ</sub>見、仍返<sub>二</sub>獻關白<sub>一</sub>、須<sub>レ</sub>投<sub>二</sub>入第三宮<sub>一</sub>也、然而近代如<sub>レ</sub>此之申文、爲<sub>二</sub>後日沙汰<sub>一</sub>返<sub>二</sub>與執柄<sub>一</sub>、又一說也、仍所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>也、成文及<sub>二</sub>三通<sub>一</sub>之時、破<sub>二</sub>申文與<sub>一</sub>成<sub>レ</sub>束如<sub>二</sub>去夜<sub>一</sub>、但<sub>二</sub>兩夜<sub>一</sub>成文<sub>一</sub>束、并今夜三通結<sub>二</sub>添之<sub>一</sub>、又如<sub>レ</sub>常隨<sub>レ</sub>任指也、

內舍人正六位源朝臣秀房、臨時內給、

內舍人正六位上源朝臣忠信、臨時內給、

少內記正六位上藤原朝臣業貞、本局舉、

圖書少屬正六位上藤原宿禰宗時、本察奏、

大學少屬從七位上中原朝臣末次、本察奏、  
主計少允正六位上藤原朝臣行政、本察奏、  
主稅少允正六位上紀朝臣職重、依爲<sub>二</sub>還官者<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>尻付<sub>一</sub>、元刑部錄也、  
內膳典膳正六位上中原朝臣季重、明法舉、  
東市正六位上小槻宿禰公尙、東市下忍、服正字

此間式部輔事、可<sub>レ</sub>定申<sub>二</sub>之由被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>、關白撰<sub>二</sub>出申文五通<sub>一</sub>、一通成光朝臣中<sub>二</sub>權大輔<sub>一</sub>、給<sub>レ</sub>之、余一々披見了、傳<sub>二</sub>仰左大將<sub>一</sub>云、人々皆悉可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>召者、有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>定之事<sub>一</sub>者、此間余可<sub>レ</sub>任者少々任<sub>レ</sub>之、此中以<sub>二</sub>內堅奏<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>任<sub>レ</sub>少典鑑<sub>一</sub>之者、而無<sub>二</sub>請文<sub>一</sub>、仍召<sub>二</sub>通親朝臣<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>請文<sub>一</sub>任<sub>レ</sub>之、又任<sub>二</sub>諸國權守<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>五位<sub>一</sub>隨<sub>レ</sub>便任<sub>レ</sub>之、

美濃權守從五位下卜部宿禰兼基、

出雲權守從五位下菅野朝臣季定、

太皇太后宮權大屬從五下菅野朝臣知康、

兵部少丞正六位上藤原朝臣忠兼、

少典鑑從七位上藤井宿禰依時、內堅奏、

中宮大進正五位下藤原朝臣宗賴、件人勘解由次官也、而不<sub>二</sub>付<sub>一</sub>兼字<sub>二</sub>失歟<sub>一</sub>、元權大進也、

人々着座之由、左大將申上、余目<sub>レ</sub>之、大將進居<sub>二</sub>余座<sub>一</sub>後、余賜<sub>二</sub>申文等<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>望<sub>一</sub>申式部輔<sub>二</sub>之輩可<sub>レ</sub>定申<sub>一</sub>之由、大將取<sub>レ</sub>之副<sub>レ</sub>笏復<sub>レ</sub>座、各見<sub>二</sub>下申文<sub>一</sub>、此間任<sub>二</sub>武

官并五位已上官等、但雖五位已上、隨便此大間入日、先、是少々令計任了、兵庫寮奏、任武官等之次任之、是今案也、依有便宜也、勅負尉等此次任之、

左近衛權中將正四位下源朝臣通親、

左衛門佐從五位下藤原朝臣公清、

權少尉正六位上藤原朝臣爲成、

權少尉正六位上藤原朝臣朝綱、

右衛門佐從五位上藤原朝臣隆雅、

右兵衛權少尉正六位上源朝臣信政、

左馬權頭正五位下源朝臣宗雅、

右馬權助從五位下藤原朝臣秀高、

兵庫少屬從七位上藤井宿禰宗清、本寮奏、

次取<sub>三</sub>出轉任勘文、自<sub>レ</sub>奧次第任<sub>レ</sub>之、行<sub>二</sub>一官轉任、新

之、新任者讀申

任之者、之、如、常、申文指成束、凡任官之中、無申文

之者甚多、或尋奉行職事令書進、或又後不然、抑通

親朝臣兼申云、史轉任之間、右少史基康、本官內、倫職、

本官民、去年秋除書同時拜任、基康下名、加之、付<sub>三</sub>本官爲<sub>二</sub>上薦<sub>一</sub>、基康雖爲

上薦、倫職依<sub>二</sub>上日勝<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>倫職<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>轉任<sub>一</sub>者、即

倫職載勘文、任<sub>二</sub>申狀<sub>一</sub>行<sub>二</sub>轉任<sub>一</sub>畢、

民部大丞正六位上源朝臣光行、

少丞正六位上藤原朝臣敦季、文章得業生、

雖<sub>二</sub>頭官課試者<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>尻付<sub>一</sub>先例也、

式部大丞正六位上源朝臣宗綱、

大丞正六位上下部宿禰仲道、

少丞正六位上藤原朝臣範賴、

少丞

左大史正六位上中原朝臣盛景、

右大史正六位上小槻宿禰國宗、

左少史正六位上中原朝臣倫職、

右少史正六位上大江朝臣宗遠、

少外記正六位上中原朝臣俊清、

權少外記正六位上中原朝臣清俊、

此間人々定<sub>二</sub>申式部輔事<sub>一</sub>、所望人等、成光朝臣、申、權大

省之習、大輔之間置、光輔、位階第一、位階第一、

權官一人、仍所申也、光輔、二、無官、尹明、位階第一、位階第一、光

綱、尹範、年齒不及、三十一、位階從下最末、當時爲、兵部輔、

申文其狀不見、又、已上五人也、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>也、

定能卿發<sub>レ</sub>語申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>式部輔事<sub>一</sub>、已上人取、條

也、以<sub>二</sub>成光朝臣<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>權大輔<sub>一</sub>、何事<sub>レ</sub>之候哉、

若可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>少輔者<sub>一</sub>、光輔尹明之間可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>敕定者<sub>一</sub>、



實守、成範、共同之、實國不候座如何、

實房卿申狀不分明、但成光雖被任權大輔之由後聞實

房申云、成光可被任權大輔者、但少輔有權官

關、而被任權大輔如何、可被問例云々、

實定卿申云、成光權大輔可宜、若可補少輔、依

策勞可被補尹明者、

余申云、聖明之世依官撰人、儒官之習可爲先

才漢、成光朝臣被轉權大輔、尤可然、抑當時所闕

正少輔也、被補權大輔者、權少輔可被轉任、此

條雖先規忽不覺悟、何強爲巨難哉、但猶任恒

例可被任少輔者、儒中之習以策勞爲先、尹

明之間所申雖可然、或又依位階被登用、如此

之事依時儀歟、而尹明身爲八省輔、已非無一

職、光輔爲位階第一、其身無官也、被施無逼之

化者、頗可謂當仁歟者、成光權大輔、光輔少輔

之間、可在敕定、

關白被申云、成光々々輔、可在勅定者、

勅定云、權大輔猶非常事、於少輔一同可定申者、

定能申云、依位階上臈、可被任光輔者、實守申

云、依策勞可被任尹明者、長方已上除實定之

外、皆同定能、實定同實守、但各不申同之、余關  
白共舉光輔、

勅定云、就人々多定申、以光輔可令任少輔

者、定說、左大將持來申文等、余取之留光輔申文、

殘四通返獻關白、須入投入第四宮、白視第而返與

關白頗失也、但又非無此例、次任瀧口所衆等、勞帳

懸勾指成束、先放禮紙入第四宮也、所衆一臈申衛府、仍以第

二者任了、依御定也、

掃部少允正六位上中原朝臣知景、藏人所、

左馬少允正六位上藤原朝臣遠明、瀧口勞、

次任光輔并公卿官等了、光輔申文指成文了、但通

親左中將、武官之列竊以任了、通親一度任兩官、仍共

不付兼字、故實也、

式部少輔正五位下藤原朝臣光輔、

權少輔範季雖爲位階上臈、不轉任、先例也、

神祇大副從三位大中臣朝臣親隆、

大祐正五位下卜部宿禰兼貞、

參議正四位下源朝臣通親、

次余仰左大將云、受領舉、先氣色子執柄如常各起座了、此

間取出大間禮紙書受領案、重任國皆悉載案、先

書國號了、更書入任人、披置硯上、

山城、久季、

河內、康綱、

和泉、仲基、

攝津、以政、

伊賀、隆職、

安房、定長、

下野、範光、

陸奥、實雅、

出羽、信兼、

越中、業家、

伯耆、基輔、

播磨、行盛、

美作、公守、

紀伊、爲盛、

筑前、貞俊、

筑後、廣賢、

豐後、宗長、

壹岐、俊光、

次任章書移入大間了、任折紙付兼字、隆職任

伊賀而無兼字、仍余申驚付之、一兩未任了之間、  
人々復座、次第進舉冊、各封之、余乍持笏於左手、  
以右手取之、置硯上、如恒、皆取集氣色關白、置笏  
押下硯已下、取舉冊進寄奏之、留御、復座任了、草  
書指懷中了、申文懸勾指成束了、重〔任載除〕  
目、無尻付、是家例也、

民部、山城守從五位下紀朝臣久季、

大夫、河內守從五位上源朝臣康綱、

藏人、和泉守從五位下高階朝臣仲基、

一、管國攝津守從四位下橘朝臣以政、

大夫、伊賀守正五位下小槻宿禰隆職、兼、

史、安房守正五位下藤原定長、

同、下野守從五位下藤原朝臣範光、

功、陸奥守從五位下藤原朝臣實雅、

功、元和出羽守正五位下平朝臣信兼、

重任、越中守從五位下平朝臣業家、

遷任伯耆守從四位下藤原朝臣基輔、兼、

播磨守從五位下平朝臣行盛、兼、

美作守從四位下藤原朝臣公守、兼、

重任、紀伊守從五位下平朝臣爲盛、從上也、而舊從下失也、

筑前守從五位上平朝臣貞俊、

〔外記〕筑後守從五位下大江朝臣廣賢、

豐後守從五位下藤原朝臣宗長、

式部、壹岐守正四位下源朝臣俊光、

次奏事由一卷大間、不封之、入成文宮、取出成

文、座下方橫置之、以大間宮置替硯宮、指笏押

宮、進寄奏之、拔笏少退候、返給之時、指笏給宮復

座、拔笏置替宮、取寄成文、結固之、四五通許、以

刀一切兩夜結緒、先切中夜緒、自結目左際、自右方、引拔

〔入硯宮レテ〕次切初夜緒、同前、次所拔取之申

文等細卷指之、次以小刀一切緒餘、引墨加入大

間宮、又置替宮、指笏取大間宮、深揖起座、於殿

上御倚子前、授清書上卿成範卿了、拔笏退出了、今

夜無叙位事、清書參議實宗定能等云々、

今夜參入公卿、

關白、余、

大臣、

大納言、實定、實房、實國、

中納言、成範、

參議、家通、實守、長方、定能、

今曉女房及姬君侍從等、密々令參春日社、基輔朝

臣、保能、信光、良清等、騎馬在共、□□□□用人

車、出車一兩、以覺乘得業竹林院房爲宿所、女房姬

君今夜參御社、侍從明曉可參詣也、

廿九日、〔壬〕晴、巳刻、外記持來大間成文硯墨筆等、

入夜女房自春日歸洛、今曉侍從參御社、依密々

儀着衣冠、持良清爲取幣同着衣冠也、正預有

政申祝、元服之後初〔度〕參也、仍給大褂、又幣裘之、

女房姬君等幣不裘之、以待從參爲名、女房等參之

由深以祕之、余及大將、此便付奉幣帛、侍從參若宮、

同有政申祝、又給大褂云々、其後各竊參南圓堂、

由御次參東大寺、同前、巳刻出奈良云々、宇治昨

今良俊法橋致設之沙汰、然而不逗留、直過了云

云、

玉葉卷第三十二終

玉葉 卷第三十三

自治承四年二月  
至同年三月

〔治承四年春下 歲次庚子〕

二月〔大〕

一日、癸未〔天〕晴、大將始可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈年祭<sub>一</sub>、招<sub>二</sub>源中納言<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>教<sub>二</sub>其間作法<sub>一</sub>、宰相定能在<sub>二</sub>此座<sub>一</sub>、又大夫史隆職、〔注進〕神祇官裝束指圖、有<sub>二</sub>不審事等<sub>一</sub>、召寄可<sub>レ</sub>尋也、晚頭立<sub>二</sub>春日幣<sub>一</sub>、陪膳季長朝臣、行事良清、陰陽師晴光、今日、以<sub>二</sub>職事國行<sub>一</sub>、送<sub>二</sub>陪從半臂、下襲、青末濃袴等<sub>一</sub>於<sub>二</sub>春日祭使、右少將實明之許<sub>一</sub>、是大將遣也、國行依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>大將方職事<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>使也、件裝束六具也、

二日、甲申〔天〕晴、巳時許、大外記賴業來、召<sub>二</sub>簾前仰<sub>一</sub>雜事、此次仰<sub>二</sub>大將可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈年祭<sub>一</sub>之間事、申云、祈年祭者、一大納言左大將、分配也、可<sub>レ</sub>觸<sub>二</sub>申此旨<sub>一</sub>云々、此次申<sub>二</sub>明經道可<sub>レ</sub>舉<sub>二</sub>內官<sub>一</sub>之間事<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>隆季卿一言<sub>一</sub>、此事停止、爲<sub>レ</sub>道爲<sub>レ</sub>歎云々、余又密<sub>レ</sub>談於<sub>二</sub>紫宸殿<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>之趣、賴業深有<sub>二</sub>甘心之氣色<sub>一</sub>、但冷泉院依<sub>二</sub>御惱<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>紫宸殿<sub>一</sub>有<sub>二</sub>此禮<sub>一</sub>云々、頗非<sub>レ</sub>吉歟、如此事只可

依<sub>二</sub>時議<sub>一</sub>者歟、今日召<sub>二</sub>光盛<sub>一</sub>仰云、大將可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈年祭<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>官外記<sub>一</sub>、刻限已時者、即以<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>遣隆職、賴業等之許<sub>一</sub>、今日未刻、五位藏人親經來<sub>二</sub>催祈年殺奉幣上卿事<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>所勞之由<sub>一</sub>了、〔前施藥院使憲基來、問<sub>二</sub>醫道事等<sub>一</sub>、又問<sub>二</sub>余所勞<sub>一</sub>〕近日風病十日覺發、事、申云、可<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>少湯治<sub>一</sub>者、今日終日神事如<sub>レ</sub>例、依<sub>二</sub>春日祭<sub>一</sub>也、三日、乙酉〔天〕晴、入<sub>レ</sub>夜大夫史隆職參入、召<sub>レ</sub>前問<sub>二</sub>神祇官正廳座不審事<sub>一</sub>、申云、六位史官掌等相共奉行、五位史殊不<sub>二</sub>尋行<sub>一</sub>之間、分明不<sub>二</sub>覺申<sub>一</sub>、就<sub>二</sub>中宮中之習<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>裝束司記文<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>證據<sub>一</sub>、而彼記文不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>此儀<sub>一</sub>、又年々例不同、只所詮以下被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之趣、可<sub>レ</sub>相存云々、仍注<sub>二</sub>西宮<sub>一</sub>、十卷抄、并十五卷抄等也、北山、江次第等文、相<sub>二</sub>加先日所進指圖<sub>一</sub>、少押紙下<sub>二</sub>給之<sub>一</sub>、今日未刻、右中辨兼光參入、申云、祈年祭所<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>也、若有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>承事<sub>一</sub>者、兼可<sub>レ</sub>存知者、仰云、已刻可<sub>レ</sub>參仕、幣物已下事、不可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>者、大將于<sub>レ</sub>時在<sub>二</sub>此第<sub>一</sub>也、



四日、丙〔天〕晴、此日祈年祭也、右大將奉行之、始從神態也、依寛治六年、中納言殿、于時天永三年、故殿、于時中納言將、等例所行也、早旦修誦誦於七箇寺、八幡、賀茂、(上野吉田、六角)大將自今日二神齋、諸社祭、一日忌僧尼、重輕服、姓者、月水女等、皆如常、辰刻浴、即來此第一神事之日、出立自女院午刻着束帶、色目如常、唐草、御所不可然之故也、新宰相定前駈六人、繪、細地、平、能、長、參神祇官、能來訪、直衣也、後、勾當二人、國基、等也、扈從殿上人二人、基輔朝臣、隨身裝束如例、番長、染袴、等也、已上盡朝、祭儀訖參內、申刻歸來、大將候二內裏之間、官史生、官掌、太政官召使等來、給櫻襪、其間事光盛注進之、申刻、右辨官史生國行、官掌爲宗、已上派召使六人、仰大外記、賴業、人、數相計寛治例、參着、以候、延和氣助安、宗國、同、助員、宗國、吉、御隨身所西壁、敷紫帖一枚、爲史生官掌座、北上、其前居懸盤櫻二前、其下二行對座、敷圓帖四枚、爲召使座、其前居机櫻十前、下家司衣冠勸盃、三獻、出納取酌、居汁食了賜祿、下家司親弘、分賜之、

史生、官掌、美相六丈、各一疋、

召使、國綱(口)六丈各一疋、雖六、人參入、給十人料了云々、

政所對櫻、給料、

史生事、

近代之例、諸家之習、官掌召使給櫻襪、史生不有、此列、就中長承三年、宇治左大臣初度神態、不召史生、而寛治六年、知足院殿御勤仕之度、召史生之由、雖見爲房記、官外記之間不審猶殘、問隆職賴業等之處、各申狀不分明、彼寛治史生名惟任云々、勘同年匡房記之處、元三參入之史生之中、有云是任之者、是與惟其訓惟同、疑字樣混亂歟、仍猶可爲官史生之由、仰隆職宿禰了、

祭儀、以大將口狀記之、

於柳芳門下車、召使向來追、前行、大夫史隆職來門下、申御裝束子細、就衣定仰之趣、入自神祇官北門、自壇上東行、着門內東腋座、先立座下、揖、突、膝、東面、居定、又揖、兼置式宮、初敷、試、作、緣、牛帖、次召召使、二、召使稱唯進立南庭、仰云、外記召也、稱唯退下召之、近例外記先申代官云々、然而、依初度不申之、是又先例也、次大外記賴業入自同門、進就軾、先例五位外記史強不參入、而候、天永三年、大外記師遠、大夫史盛仲等各以誦候、今存、彼等吉、例、各可參入、就、就中五位外記、從、如此之便、可謂、上卿仰云、諸司ハ具タリヤ、賴業申、又仰云、幣物ハ具タリヤ、由、申、候、上卿目之、賴業稱唯退下、或召使問之、或又以家習問、外記、仍隨、彼例、也、又江、次上卿起座、兩揖、如、自、當、次第同注、可、問、外記、之、狀、

間降壇下、或說更西行、自中門降壇下、（云々）其理可然、  
常間之白、（但當中門不登階、又其壇不高、仍隨宜可也）  
所教於、（此被昇壇上、其後）北面、經東南壇上、（隨身）  
自取之、於異角程、（垂之云々）立南面東第一間、（有）長  
抑下一揖、昇天着座、（件座四面副東壁數之、白座後着）此間  
召使取、在北門座之式宮、走來先置此座前、（上卿未着）  
之、次王大夫着西第一間座、（件座東面相對天數之）次上卿召召使、  
二、召使稱唯、進立南庭、上卿仰云、式部省サヲ刀禰入  
マツレト宣へ、（微音仰之、但召使隨聞程也、字末頗不分明）召使稱唯、經幣案  
東、出南門召之、即行事右中辨兼光朝臣、式部少輔  
光輔、（先例多用代官、而寬治在良、天永有光、共正諸司等、入員參入、仍據仰其父長光入道、令參者也）  
自南門着南庭座、先是神祇官人等、率御馬  
着西庭座、此間召使參進、申云、左馬寮御馬未參云  
云、（此事於北門座、問事具否之、其後暫而召使又參上、申時可申也、今申此旨尤奇）  
將參之由、即引立御馬、（左右各十一）又西庭東南邊、繫  
白猪、居白鷄、（入物）次神祇官人降居西庭前座、次上  
卿起座、（兩揖如常、先召之使、問可降座、說否、自當問一降壇下、自砌內西行着砌外座、先立座後、揖如常、南面着之、件座當東二間敷也）王大夫同降座砌前座、（件座當西二間敷之、辨已下同降居南庭前、但被隔幣棚、（□□□□）次祝師進庭中座、申祝詞、十段度別稱、即拍手、段、上卿已下從之、

上卿拍手作法、（不令有聲、手のさきを）次申訖祝詞退座、次御  
豆人抱之出來廻伊勢幣、三匝之後歸去、次頒幣、先  
伊勢幣衛士受取了、使出東門了、（此間可平伏、而余忘却余失也、次頒諸社幣等、召使參進、申春日幣立了由、即大將起座、兩度揖如初、不還著堂上座、直以退下、是又家留立正廳東庭、今度不經）召召使仰云、諸社幣儘可  
奉分之由、可仰辨者、即出北門赴郁芳門之間、  
召使歸來申辨報旨、（長承了）大夫、外記、史、并式部輔  
等、同相從云々、於郁芳門乘車參內、數刻候御前  
云々、今日始終發前壁、伊勢幣出日是廢務也、音奏停  
止、然而隨身不止前壁、是皆先例也、

正廳座事、

西宮十卷抄云、

大臣入自後（戸）、着東第三間北（壁下方）、南、

納言參議着東第一間、（入自西角、西）（王大夫）

西第一間、（東面、入自自坤、或川代官、）

同十五卷抄云、

東第三間北壁下設大臣座、南面、入、東第一

間敷參議以上座、（西面北上、入自自後月、）西第一間敷

王大夫座、（東面北上、入自自、）同廳前庭左右敷參議

并王大夫座、東參議以上、西王大夫座、中央可有三大臣座、皆南面、

北山抄云、

大臣南面、入自北面東戶、參議已上西面、入自東妻着之、王大夫東面、並北上、延長二年伯安則申、先例、大臣入自西戶、納言入自東戶、參議入自東壁下云々、而儀式及元年例如此、

江次第云、

上卿入自東妻、着西面座、東第一間、障置式、大臣者入自北面東戶、自餘入自東妻戶、

王大夫入自西妻、着東面座、西第一間座也、或用代官、

已上納言座、可在東一間之證文也、

長元七年土記云、

着東第二間、入自東第一間、西面、

寛治六年爲房記云、

經東南庭爲西第三間、爲上卿座、南王大夫座、在西第一間、東面、

長承三年知信記云、

入自南面東三間戶、令着同間母屋座、給、西向、先例入自南面東一間、令着第一若第二間、給云々、而所司申云、大臣入自北面東第二戶、若第二間、納言入

自南面東第三間戶、令着同間母屋、仍今日御座此定也、第一二間妻戶不開之者、

已上記等、皆以相違、爰知、行事官等慥不尋行之間、每度有相違歟、仍任三抄之文、可敷一間之由、豫所仰隆職宿願也、

壞同廳東西一間隔事、

隆職申云、太神宮正遷宮之時、以彼廳爲行事所之間、東西一間隔之、其後于今不壞却之云々、仰云、當時無其用者、以行事所之例、不可備常途之儀、但若塗壁者、自閑院當大將軍方歟、當今於閑院、經四十五日、去正十五日、故御忌付閑院、月十日行幸五條院、未及四彼院、可有方角之沙汰也、且依先例、可令致沙汰者、重申云、件隔妻戶也、仍可致屏云々者、今日如此、

上卿不復座事、

寛治爲房記云、

拍手之後、復本座可被分幣物、是式文、而左府示給云、任中納言後、始奉仕日、宇治殿仰云、不着本座、乍薦座、伊勢使發遣之後、早可罷出者、可依其說者、

天永中右記云、



上卿乍庭中座、伊勢幣并春日幣使立之後、自砌下座所退出給也、是殿原行給之儀云云、

就此等之記、不可復座之由、諷諫大將、而於神祇官、大夫史、并右少辨兼忠等、存他家之例、可復座之由、再三令申、然而大將不承引退出云々、長承發遣幣之後、復座云々、尤無證據事歟、

祭主不參事、

長承知信記云、

祭主三位、入自西第二戸、着同間母屋座云云者、

余案、祭主爲公卿之時、可着正廳座歟、但可着第一間也、二間之條、失錯歟、今度親隆卿、依服假不參、仍無此儀、

五日、亥天晴、未刻許、參女院御方、入夜歸來、基輔自內裡退出云、主上聊御風氣御云々、

六日、戌天晴、未時許參內、御風氣別事不御云々、時忠卿祇候、於臺盤邊暫交語、此次語云、大將殿御進退作法、殆過成人之禮、萬人所奉感歎也

之由、則業真人來、談新年祭之間事、深以奉遺狀、無止事也云々、今日主上御覽二品壺禰中宮母儀、進三種引出物云々、晚頭退出、此間謁邦綱卿、

八日、庚天陰、申刻以後雨下、戌刻許、關白以基輔今日被仰可參之由云々、被示云、來十一日、若君可有元服、可然者、爲加冠、有渡御哉如何、且基輔相計、不可無便者、可披露此旨云々、報云、早可參、但日來所勞、今日殊倍增、無別事可參者、去夜聊有夢想、今夜致祈念、明日可左右也、今度加冠、旁難堪、凡近日之愚身爲體、偏奉任神明三寶者也、大明神定有御計歟、

九日、辛午上天陰、未刻以後晴、依大原野祭、奉幣如例、陪膳行賴朝臣、行事定成、幣取木工助橘經說、陰陽師憲成、關白重示送云、御心地事、返々歎申、若無渡御者可延引、早々可承左右云々、內裡御風氣、猶不快御云々、仍女房之許送書札、返報云、于今無御減爲歟、但殊御事不御云、  
十日、壬天晴、此日遠忌也、至申刻、念誦催送、布施取等如例年、內裏御風氣猶不快御、十二日行幸、有延引之儀云々、今夜有炎上、陰陽師泰親、時晴、泰茂



等宅燒失、

十一日、發晝間〔天〕晴、及晚陰、入夜雨下、此日故攝

政殿二郎若君元服也、母顯輔卿女、即彼殿女房也、鍾愛無雙、後

當時現存、件若君生年十七、中古以來未嘗有此例、度々雖有出

家之儀、自、然依違、于今不途之間、去冬大亂之刻、早速可有出

所、被、遂行也、被、遂、保元々年余元服例云々、下官難點加

冠、此事〔甚〕無用心、然而自出仕之日、如弄生涯、加

之聊依有存旨、不乖時勢、當時後代爲招謗之基、

歟、早日雅賴卿自昔扶持彼若君之人也、注送名字等、問其可否、

敦綱擇云、基輔、基良、基賴、此外敎實、忠良云々、余

答云、三基皆不甘心、敎實者大夫史孝信同訓也、忠

良可宜者、申刻、關白被問、余裝束、答可隨本

所之議定之狀、重被示云、直衣々冠之間可宜、可

爲路儀云々、又不可有請加冠之使云々、

戊刻着衣冠、不帶、顯勢、若、乘、檳榔毛車、前驅五位八

人、東、殿上人二人、信、共束帶、扈從隨身、褐衣垂袴如

例、依畧儀公卿不相伴、同刻向博陸第、六條北堀川

門東禮無、透渡殿、寢殿南庇東六箇間并東面二箇間放、出之、卷、庇

廣、垂、母屋簾、副、立四尺屏風、不敷、卷、東第六間南邊、數番四座、

爲、關白座、同第三間、隨問也、以東副、母屋屏風、數、高麗燭、爲、公

卿座、第一疊敷、東京西、無、地鋪對座等、爲、加冠座、同第二三間端、

敎、管、四座、二枚、爲、同座、東庇北二箇間、數、門外扣車、使、前驅

紫端坐、爲、殿上人座、中門廊敷、諸大夫座、見主人已下着座哉否、歸來示着訖之由、即下車昇

自中門〔廊〕外方、經二棟廊件廊垂、不、出、几帳、惟爲、公

南緣、寢殿東〔簀子〕殿上人、座後也、〔等〕入自南庇東面南第一

間妻戶、殿上人、經三與座後、着茵座、關白在第六間、

過西屏風東面、居、須件間東邊、頗向、大納言定房、中納言忠親

北可、居也、轉、遠之間、大無、宜、及余前不着與座、中參議一人尤可、參、此座兼居、飯同、關白

居之、次殿上人隆房朝臣已下着座、見、之、次家司宮

內少輔棟範參上、有申主人之事、不知、頃之居、余

饌、折敷高坏四本、飯同、居、之、陪膳資、朝臣、次居、主人饌、同前、

以政、役送諸大夫、他公卿饌同折敷高坏也、次居主人饌、陪膳

朝臣、次一獻、治部卿顯信朝臣勸盃、瓶子諸、博陸受、盃擬

余、相共居寄受、盃、其間太遠於事有煩、願信取、關白

余擬定房巡行訖、忠親傳盃於殿上人座、來受、之、次

居汁、主客陪膳同前、先居、余汁、如初、雖居訖、依無參

議、無申上之儀、關白已下々箸、次二獻、忠親卿起

座、於寢殿異角簀子取盃、居指、旁、經南簀子一居

關白東頭、北面、勸之、拔笏揖即起了、余如初居寄受

巡行如初、忠親孟渡、殿上、次居第三、手長、此次以政

可直居關白前物、而〔不〕直居退下如何、次關白召

光雅、暫之光雅〔參〕候〔南〕簀子、〔關白被〕仰可問時

之由、光雅退下、歸參申至之由、光雅參退之、次諸大夫二

忠親復座、次主人起座、自西間入簾中、向者裝束之所歟、次初役人撤難具、次撤圓座、次撤替脂燭、次敷加冠座諸大夫一人取高麗盤數冠者一坐跡先上無、次居前物、陪膳季長朝臣例二人取疊歟、次又一人取唐錦茵數其地鋪、生平絹打折歟、折數高坏十二本飯須居左而居也、次居理髮前物机歟、良久關白歸出、被目余、余起座移居加冠座、次源大納言起座、於巽簀子取盃依不指笏、作立取之、經簀子來居余座下方、上無其便立所爲歟、擬余、余再三讓主人、々々無承引、仍余受盃、擬主人、々々目忠親卿、此間定房也座、佇立與角實子、忠親復座之後、歸着座、件卿經三南簀子參上、指笏賜盃復座、其孟不傳殿上人座、隆房爲第一而依爲理髮、不受此孟歟、東宮學士、宮內權少輔、指笏、次余立箸、但不食、次五位藏人由、仰主人、々々目之、親經來余座下、昇長押近進寄也、仰云、冠者可叙正五位下者、余問其名、親經云、可申御名歟、此申狀、太不足言也、余云、不聞名字者、以何可宣下哉、即示云、忠良者、余便仰親經可召辨之由、次權右中辨光雅來、居余前簀子、依其程近不召上、余仰云、正五位下藤原忠良、可傳仰內記者、光雅退下、次大夫降立中門、前駝六人、取松明參進、經家朝臣取裾、二拜了、依雨下、不進、不還昇一直參內、此間依笠遲、數刻經程、先例多還昇加

冠、退出之後參內歟、但又有不然之度、歟、次忠親卿取野劔一腰、入赤地、經三南簀子、置余前、拔、笏、實在此也、退下不復座、次自西屏方、引出馬一疋、蓋毛、五位明前行、衛府一人、五一匝之後引出於東中門內、余前駟能業、第一上、受取之、次基輔朝臣來取劔、次余拔、著起座、經本道退出歸宅、

若君長甚高、其髮及直衣欄頗有髮歟、人頗驚耳目歟、

今夜大夫參內、於禁中、賜禁、色、改着云々、〔中宮、東宮、皇嘉門院等〕有贈物、入、錦袋、件、余所獻也、女院無館之故也、家司職事、并前物陪膳等、可尋聞之、今日關白、冠直衣堅文織物指貫也、府

官人參上、立明如常、

堂上掌燈、關白座北一所、公卿座末過南、東角一所、殿上人座前一所、

〔十二日、甲午朝間天陰、午後晴、今日風吹、秉燭參內、依御風氣不快也、謁女房、雖無殊御大事、御溫氣不散、又每日午刻許發御、其時頗御面赤云々、及更深退出、〕

十三日、乙未〔天〕晴、大將可親關白、兼雅卿女、關白養以爲子、〔云々〕事、雖無日次、只三月可遂之由、自本所被忿云云、此事入道相國結構事云々、兼雅女即入道相國外孫也、然而無吉

日、爲之如何〔々々〕、

十四日、丙申〔天〕晴、晚頭參女院御方、申大將之間事、亥刻、上方有燒亡、五條坊門萬里小路云々、內裏邊五町許云々、余不參、又浴之後依慎風也、五條三位入道之許近〔之〕云々、仍遣侍訪之、

十五日、丁酉〔天〕晴、晚頭參內、左衛門陣之外、頭辨經房朝臣來逢、余過其前之間居地、相共參內、於鬼間之邊示有可申上之事之由、余相逢聞之、御即位之間條々、有被尋問之事、爲申其事參上之間也云々、在憲、泰親等申狀、及外記例、并三通與之、其狀在左、被尋問事等、

一於何處可被行御即位哉事、

一若於官廳被行者、可改立南門於民部省北垣、而七月以前有禁忌之由、在憲朝臣令申、仍欲延七月、又無吉日、爰泰親朝臣、禁忌月被立內裏諸門、其例不可勝計、宮城十二門之外、更無憚之由令申、但治曆例、依此憚、七月被立門了、今度可被忌避哉否事、一若可被忌者、狹少之地、可縮行大議事、一若可有延引者、七月中無吉日、又難及八月



以後敷事、

余於紫宸殿、可被行之由申了、經房注付折紙、後日可給之由令申、折紙狀見經房退出了也、余參御所、但不見參謁女房、御不豫事猶以不快、然而明日行幸、必可然之由、欲慮一決了、萬人可延引之由、雖計奏、更以無御承引云々、及亥刻退出了、

十六日、戊天晴、此日自五條東洞院第、還御閑院、是來廿一日禪讓之日、依應德之例、自他所可被

渡、御指圖之故也、乘獨之程、大將參內、時御指圖、結隨身裝束如常、非必分下、自禪讓、上及深更歸來、次第無殊事、公卿騰朋黃袴、并紫羅中、及深更歸來、次第無殊事、公卿濟々供奉、大略行幸今度許敷、仍人々多參入敷、實房

勤仕召仰云々、今日大將馬副如例、前驅六人也、酉刻、藏人左少辨行隆、送書於基輔之許云、禪讓之日

中宮必可御新主之宮哉否、可計奏云々、余申云、先例忽雖不覺悟、案事理、幼主之禮、母后尤可同

居者、此後行隆尙入來、余候于女院御方之間、於彼御所謁之、行隆云、御報於路頭雖披見、猶所參

入也、凡度々例多御同宿也、而崇德院近衛院等之例、尤不快、彼兩代又以同居也、仍有此儀、若君不可有御同

宿者、今夜可有行啓閑院、且主上御樂之間、各

別之御所不可然之故也、但必可御同宿者、又行啓不可必然云々、余申云、至于此條者、專不可被忌、彼兩代之例、必母后可有同居、今夜雖有行啓、彼以前還御、何事之有哉、又留御此第、更不可有難者、歸參了、此日列見云々、

十七日、亥天晴、傳聞去夜無中宮行啓云々、未刻、召使來催大將云、來廿一日可有讓位節會、可參

者、申承了之由云々、申刻、大夫史隆職、持來太政官應指圖、治曆御即位、於被爲寫取留之、隆職申云、不被退官南門者、庭上裝束一切不可叶敷、勿論事也云々、

十八日、子天晴、外記來、催廿一日讓位可參之由、定能卿來談、御即位之所事、注折紙遣頭辨之許了、有可奏問之報、

十九日、丑天晴、故殿御忌日也、如例參女院御堂、日來御佛事了退出、右大將候座取布施、其後有恒

例舍利講、邦綱、雅賴等卿參會云々、邦綱卿着大將下云々、雅賴卿來此第、余謁之、御即位所事、陳

余所存之趣、納言頗有伏理之色、未刻、藏人辨行隆、明日有可被任之者、直物申行者、明日可宜之由



示之、報云、先日取御氣色之處、追可被仰下之由、蒙仰之後、于今無承旨、仍未下知外記、文書事自懈者、歟、加之大事前日直物、頗無便宜歟者、入夜示不可有直物之由、

廿日、壬寅〔天〕晴陰不定、巳刻、定能卿來、在此第〔之間〕、召使催臨時除目執筆、定能〔卿〕領狀了、申刻、五位藏人行隆來云、入道太相國被修築大輪田泊、件事依延喜例、可被宣下、右大將不可有御奉行之由、入道相國先日所被申也、而猶閣下可有御奉行之由、重有其命、奏事由之處、可奉宣下、旨有天氣、仍所參內也、兼又件解狀、入道前太政大臣家書之、與前筑前守貞能加署、而尤可有令字之由存之處、出家之人解狀、家令加署之例、又以不覺悟、爲之如何、已上事、職事能業簡示之、余相逢報云、上卿事承了、素右大將奉行、一切不可叶事也、改定之條尤可、然、抑解狀〔署〕所事、實尤有疑、理須爲自解也如何、行隆云、官同所申此旨也、雖、然此事必今日可被宣下、至于今不能通福原、又暗不可書改解狀、仍進退谷了、官重申云、以口宣可被仰下云々、余云、口宣猶無其謂、尤可有解狀一事也、自解之條又勿

論於今者、只家令可加署、何事之有哉、行隆即下申文、余結申之、行隆仰詞云、依請、余卷文返下同辨、々結申、余示氣色、行隆卷文退下、此次語云、御即位所事、令申御之趣、人々有響應之上、入道相國尤可、然之由被申旨、所承也云々、又先日被尋問皇居地事、五條堀川、人々皆不甘心、被問人臣、余、左大將〔輔〕帥、大納言、春宮大夫〔云々〕、仍未定云々、晚頭參內、御不豫頗宜御云々、余依召參御前、以應德爲房記御讓位之間事、有沙汰、依仰余書出次第進覽了、今夜參上殊有敬感、頃之退出、于時除目未始、上卿藤中納言成範、新宰相定能等雖參候、事未始、奉行職事未參也、今日女房等問余云、明日取朝服授次將之內侍裝束、節會儀歟、用朝服、紫末渡余云々、行幸之儀歟、余答不知之由、但案事理可用行幸裝束也、女房又云、先可有節會召、仍件內侍不改裝束可役歟之由、人々不審也云々、此條又尤可、然、但主上可渡御南殿、仍只召內侍一人、可着節會裝束、今一人不可、然、仍兩人裝束相違歟、然者行幸裝束可宜歟、猶可被問人々之由答之、

廿一日、癸卯〔天〕陰雨下、酉刻以後、雨脚止雲散、此



外方、進立中門下、左大臣以下、同降欲立之間、先攝政拜舞、依庭湯於中門拜也、不奏事之由歟、抑須降也、而無左右被降、自中門外之間、人々在昇、次諸卿相共拜舞、昇殿勅授混合也、攝政在可奏事、由暫被相待、左大臣云、拜舞、不可被奏、仍即拜舞、此事如舊例、者可奏歟、而仁安度不奏、理須帶弓箭之人不撤之、次攝政已下昇自中門外、攝政不若左大臣、并余已下着殿上、右大將依之者、拜了、即人々僅四五人也、其殘不着之、頃之頭辨令退出、了、人々僅四五人也、其殘不着之、頃之頭辨仰禁色事於左大臣、先例藏人先仰勅授事之時、即召外記於宣下、而今度勅授事、未仰外記、又於次左大臣已下着陣襪殿上、承禁色官、共非先例歟、座、次頭辨來、仰內膳御飯、并御乳母禁色事、內膳御便宜下、次大臣召大外記賴業、爲仰勅授、禁色等事、同辨、此間余退出、先是昇殿拜了之間、自舊主被進、御衣、五位二人、行隆、規經、共昇案經、小板敷上戶等、持參之、此後事依不見聞、不能記、今日隨身裝束事、

式文云、近衛服中儀、

長和小記云、近將服中儀、

縫腋、壺胡錄、

攝政及左大將隨

身狩胡錄、余隨身壺胡錄、

應德江記云、近衛次將縫腋壺胡錄、外衛關腋平胡

錄、六位糸鞋云々、

隨身裝束、事不見、

同爲房記云、近衛次將裝束同江記、但官人褐衣、外衛平胡錄、官人平裝束、云々、隨身裝束、不見之、

已上劔璽渡御他所一例、

永治宇治左大臣記云、攝政已下隨身官人束帶、番長已下壺胡錄、垂袴云々、

久壽記云、隨身等垂袴云々、

已上同居之儀、

永萬、仁安兩度共、攝政左右大將永萬、右大將余不參、隨身、壺

胡錄垂袴、官人束帶云々、是則別所之儀也、但仁安

左大將今左大將臣也、官人褐衣云々、但垂袴也、

就此等例一案之、兩主同居之儀、偏准節會、官人

着束帶、歟、此條猶以不齊、立太子、任大臣等、官人若親衣、讓位之禮、同立太子等例、至隨身裝束、有此相違、但已

爲流例歟、御所各別之時、劔璽渡御之行列、大途同

行幸、仍長和帶狩胡錄、又應德記雖不載隨身裝

束、官人褐衣云々、爰知隨身不着束帶歟、仍別所

之儀、同居之禮、頗有相違歟、而永萬、仁安等、偏

守保安、永治之近例、不尋御所各別之相違歟、

仍束帶之條有疑、次狩胡錄壺胡錄之間事、應德

之記不詳、長和之例炳焉、爲御堂餘流之人、豈

存異議哉、仍余及大將隨身、狩胡錄葦脛巾也、



又以此例示關白、但永萬例、一向難被棄歟、此上可被斟酌之由加示之、而猶被用長和例、左大將又依長和右大將實資跡、用垂袴歟、且是久壽得大將左大臣例云々、彼已同所儀也、不可似今度歟、凡讓位之日、諸衛裝束首尾錯亂、難存一偏、只以古賢之跡、可爲證耳、

發前聲哉否事、

嘉承殿曆云、劔璽出御、余降自對東面、隨身不追前、保安故殿御記云、劔璽渡御、余相從隨身等來會、不發前音、

仁安左右大將、始終發之、口口不止之云々、永萬攝政、亦不止之云々、

今案、參內之時不可止之、劔璽渡御之間、兩宮及路頭、可止之、其後拜舞及退出之時、又不可止之歟、凡今日止前聲之條、由緒不審、讓位之儀多、即大故之時有此事、仍止前聲、非無謂、若慣彼例委不尋歟、將又神璽寶劔顯奉持之、行列于路頭、事已嚴重、准伊勢幣發遣之時、偏恐事之崇重、又止前聲歟、此儀頗非無謂、嘉承保安兩殿御記之意、臨其期似止

之、隨又案事理如此、仍以此狀含關白及右大將、各從命耳、

內裏儀、以右大將及定能卿、隆職宿願口狀記之

未刻、公卿參集、先是、今朝頭并經房朝臣、向左大臣第、召仰可讓位之由、大臣便仰頭辨、又仰大外記賴業云々、次頭辨於藏人所、仰在憲朝臣、令勘申日時、奏覽之後、下左大臣、大臣下外記、次有固關事、大內記、少納言等、未練散々、又仰外記令敷所司座之間、緣事所司不隨所堪、如此之間時刻推移云々、次有警固、秉燭之後、節會儀始、臨節期雨止、仍改御裝束於晴然、主上密々渡御南殿、女房等候御共云々、內辨左大臣、外辨上首左大將、宣命使右衛門督實家卿、有曲折、宣制後段拜舞、次諸卿退下、勅授人撤劔、次內侍二人、裝束持劔璽、出自夜御殿、進立晝御座母屋、先是御帳渡新主宮、晝御座同撤之云々、以外違例也、雖撤御帳不可撤晝御座、或又御帳、先例追渡之云々、此間攝政參進、居御座北間庇、相次左右大將進居西簀子敷、晝御座可改南面之由、隆季卿申行、然而有議、如日來西面也、左大將懸尻、右大將引裾、人々謂左大將失歟、次左中將泰通朝臣、右中將隆房朝臣參進、懸裾歟、乍立受劔璽、立授立受事、左大臣并通親朝臣所申云々、于時兩

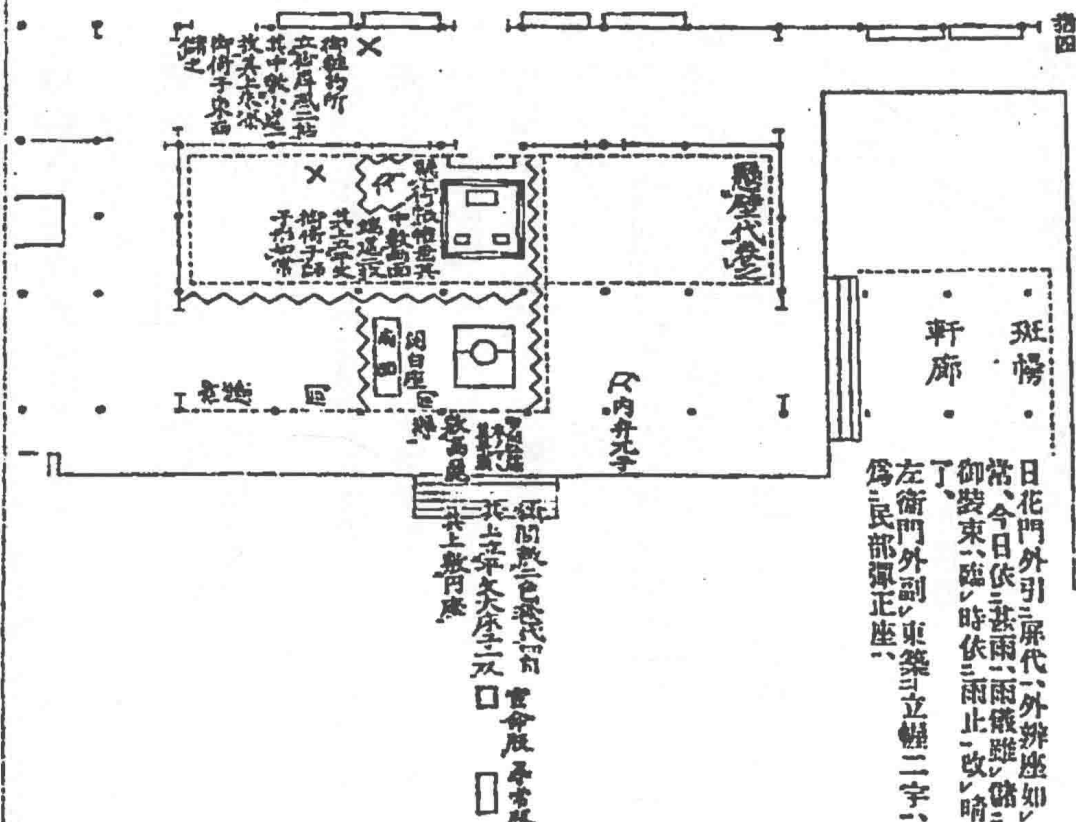
大將降自南階、劔爾相次降同階、右大將於東中



隆職注送狀

讓位且被宣下  
事相備諸司  
官符

朱線



日花門外引屏代、外辨座如  
常、今日依甚雨、雨雖雖、晴  
御裝束、臨時依雨止、改晴  
了、左衛門外副、東築、立懸二字、  
爲民部彈正座、

門懸、攝政從後、其路經西洞院、二條東洞院等  
云々、右大將節會中間參內、仍不加列、隱候御所  
方云々、御所渡御之後、舊主召經房朝臣、被仰下可被  
進御衣之由、即殿上五位二人、治部大輔季信、昇案立  
朝餉御前、次召御使行隆、被仰下可持參之由云  
云、

攝政歸參舊主御所事、以攝政語記之、

先於新主宮直應、有吉書事、次歸宅、又有吉書、其  
後及曉天、參舊主宮、即參朝餉、被下院司交  
名、繼紙、舊院出御、節會御裝束、攝政歸出殿上、下、帥大納  
言院執臣、退出了云々、不審事々等、問大外記賴業、大  
夫史隆職、大內記業實等、各申狀續加之、

太政官符、伊勢國司、

使、散位從五位下藤原朝臣忠廣、

內舍人正六位上源朝臣末宗、

資勅符壹通、

驛鈴貳口、

壹口、

伍姓、

近衛貳人、

從各壹人、

太政官符、近江國司、

使、散位從五位下藤原朝臣懷家、

內舍人正六位上源朝臣貞長、

資 勅符壹通、

驛鈴貳口、壹口、伍社、參社、

近衛貳人、從各壹人、

太政官符、美濃國司、

使、散位從五位下藤原朝臣光景、

內舍人正六位上中原朝臣康光、

資 勅符壹通、

驛鈴貳口、壹口、五社、參社、

近衛貳人、從各壹人、

右爲固守、彼國着、件等人給契發遣、國宜承知、准

固關使依例施行、符到奉行、

左中辨藤原朝臣、左大史小槻宿禰、

治承四年二月廿一日

同日 宣旨、

今日有御讓位、任例宜召仰諸司、

上卿左大臣於里亭被仰下左中辨、

當代勅旨田千町、任例奉充、

上卿同前、固關官符請印之間、被仰之、

已上於閑院被仰之、

同日 宣旨、

太上天皇御飯、宜令內膳司大炊寮如舊供進、

上卿同前、

同日 宣旨、

內藏寮申、臨時公用料米事、

兩藏人頭、各十斛、兩五位藏人六位藏人、四人、

已上各五斛、請奏各別所奏下也、

上卿、堀河中納言、

美作國年料米百斛事、

於殿下御直廄、右中辨兼光朝臣奏之、奉下左大

臣、

加賀國年料米百斛事、

右少辨兼忠、同於御里第奏之云々、

相催諸司、

神祇官、

大殿祭料、中臣齋部等官人祭物、藏人方沙汰、

中務省、

宣命版、并尋常版位、外記相共催之、

內藏寮、

殿上人饗、懸御簾官人、相具懸革、

大藏省、

六丈絹一疋、白布二端、已上內侍所、綱領料、

劔璽并內侍渡御辻々料大帳、綱領料、

式部彈正幄、陣座幕、

大膳職、

公卿料饗、

木工寮、

函三合、長二尺二寸、方一寸五分、木契三切、長三寸、方一寸、

搔板一枚、長二尺、弘二寸、已上檜木、

帷骨、幕柱、外辨床子、

掃部寮、

御裝束役官人、堂上堂下、筵道、路次料、

黑漆案、一脚、內文請印料、雜具運送、

主殿寮、

陽明門代帳、所々帳、掌燈五明、炭鉢、

大炊寮、

飯、

造酒司、

酒、

修理職、

內侍所料漬床脚、

穀倉院、

上官料饗、

左近衛府、

陣座疊、付差鑑、賀與丁、內侍所并腰與渡御料、

右近衛府、

賀與丁、同前、

左衛門府、

賀與丁、同前、松脂一畧、衛士、鈴印、辛櫃、運送料、

右衛門府、

賀與丁、同前、自餘同、

藏人所、

煙革三枚、生絲一兩、

已上、盛三柳宮渡之、充催內藏寮云々、

治承四年二月廿九日

大外記、大內記等未注進、仍不續加也、

廿二日、甲辰天陰、及晚雨下、余不出仕、但未刻參女

院御方、御堂先是關白被參語云、去夜先昇南階

事、依左大將和議也、非所存云々、兼存一定ハ、何依外人之諷諫哉、

如余粗示聞子細了、又不奏事由拜舞事、守左大

臣教訓、非恩案云々、

是又不可依他人之教諭、如何

此條爲近例、

何事之有哉之由示之、又云、於舊主宮、內侍授劔

璽、於近將之時、乍立授之、左大臣、及通親朝臣所

申云々、隆季卿居可授又可受取之由申之、不

知可否云々、又云、東宮御時殿上臺盤二脚、仍一脚

不足、應德大殿被造進、任彼例可造進之由、經

房來觸、彼者外祖之儀也、不可似之由雖答、重貴

別勅之由、仍造進云々、此時從昨日不被仰

昇殿、仍以基輔示經房朝臣、報云、是偏經房卑陋之

隨一也、返々不可申盡、即候院奏聞之處、觸前大

將、早可宣下者、一昨日禁色之人二人被聽了、彼次

仰下之體(ニテ)可仰云々、

廿三日、乙天陰、時々雨下、乘燭着直衣綱代車、前近衣

常出仕也、今日若着束帶、可參敷、然而密々參入、仍夜陰着直衣

參入也、參新院閑院第、壞陣座、床子座等、車宿隨身所如例、

去半町許下車遜讓之、即暫以如此、是例也、參御

所謁女房、御不豫無別事云々、女房尙着唐衣、三

ヶ日可如此云々、或又祗候男共着布衣之後、可撤

女房唐衣、是帥大納言所申也云々、初度御幸、來廿

八日可渡御邦綱卿正親町第、來月四日人々可着

布衣、同五日可有御幸八條院御所云々、申入余

及右大將可加灸之由了、此間右宰相中將實守卿

參上、又文談移刻、件卿語云、今日參內、雖聞可

有陣纓之由、忿出了、昨日又人々參內、爲參着之

間、無着纓之儀云々、堀川中納言忠親、借送小記目

錄廿卷、即件人抄出也、

廿四日、丙天晴、申刻許、雅賴卿來、余謁之談雜事、

納言語云、讓位夜於舊主宮內儀、授劔璽於次將之

時、依左大臣申、乍立授之、而攝政云、慥乍居授之

由、見應德御曆云々者、然者、何不被申其由、被

用左府申狀哉、如何々々、又語云、固關之間、左大臣

手振、不能書木契銘、仍自家懷中木契、於座取替

之、甚見苦、古來未聞、人々觸目云々、戊刻參女院

御堂、今夜修二月也、即事始、余、堀川中納言忠親、右

大將良通、前權中納言雅賴等、參着堂中座、依大導

師遲參、家寬法印勸之(也)、宿裝束白袈裟、紫

出、今夜女房爲聽聞參御堂、余歸家之後、大夫史

隆職來、召簾前仰雜事、申云、今日終日於陣頭、讓

位以後雜事、及次第日時等、有其沙汰、此次御即位等

事議定、人々申狀之中、閣下令申旨、上皇甘心、官外

記又以服膺、大略於紫宸殿可被行之由、豫風聞云



云、此事被問官勘申之狀、内々持來、余見之無殊難、返給了、隆職又云、一昨日昨日無着陣襲、總三ヶ日無盃酌之儀、違例也云々、經房朝臣示送云、侍從殿御昇殿事、一日如令、申竊奉書入簡了云々、

廿五日、丁未〔天〕晴、終日念誦、新院主典代來催右大將云、來廿八日可有御幸土御門第、可參仕者、申承了由、今夜、漏刻博士賀茂憲成奉仕火火祭、又陰陽助濟憲、同於女院御方勤此祭、今日攝政問送云、初度御幸裝束不審、應德束帶、保安直衣毛車、前驅束帶、今度如何、雖須追保安例、案理束帶可宜之由、報答了、

廿六日、戊申〔天〕晴、女院御懺法結願也、余依風病不出仕、公卿只右大將許云々、戌刻、頭辨送書於基輔〔云〕、明日尊號事可奉行者、報云、依所勞不堪參勤者、

廿七日、酉〔天〕晴、此日有尊號事云々、未刻許召使來、催右大將云、明日可參中宮行啓者、依可供奉御幸、不能參仕之由答了云々、今日申刻以後天陰、入夜微雨下、攝政又示云、保安初度束帶也、叶報旨云々、

廿八日、戌終日雨下風吹、此日上皇雖可有初度御幸、依雨延引來月四〔日〕云々、傳聞、昨日院廳始云云、亦尊號勅書上卿三條大納言云々、又御卽位於紫宸殿、可被行之由、被定下了云々、余雖至恐所申協理、仍所被用歟、今夜爲方違向南宅、〔廿九日、辛亥天晴、申刻有聞及吉事、酉刻、定能卿來談、〕

卅日、壬子〔天〕晴、外記史生持來尊號詔書、加朝臣、返給了、今日春日奉幣、南圓堂不空羅索經供養等、各滿百日、仍查問神事、未刻修祓、取冠降庭拜之、入夜左馬權頭宗雅來、談世間事等、

### 三月〔大〕

二日、寅〔天〕晴、午刻、全玄法印來、談世間事、亦信助阿闍梨來、又召前、施樂院使憲基、遣法性寺座主〔之〕許、爲令見彼所勞事也、新院藏人來、催可參明後日御幸之由、申所勞之由了、又主典代來大將方催之、申可參狀云々、入夜藏人左衛門權佐光長、爲拜賀補職事之後來、召簾前、今日開關解陣、上卿左大將云々、

三日、卯〔朝間天〕晴、巳刻以後陰、平等院一切經自女院被催、遣開封院司、別當季長者不被向云々、依白川殿周忌內無舞云々、然而依有蝶鳥及行導等、有樂行事云々、

四日、丙辰朝間陰晴不定、午後天陰、及申刻雨下、今日上皇初度御幸、并尊號之報書、坊官除目等也、右大將依先日催、酉刻着束帶、垂櫻、時給劍、紺地平結、不相具、重胡露等、隨身、重胡露等、如參院、閑院、共人基輔朝臣、季信、前所六人、雜色等也、路頭行列、先舍人居飼、次移馬、次大將馬、不、服口上、差繩、次隨身五人、此中上、藤持、次雜色三人、隨身乘松明、雜色不取之、雖大將任本位、供奉列立〔又同〕、是御幸之例也、亥刻歸來、

御幸儀、

諸卿參集、關白及右大將候、上達部座、候對南廣庇邊、次出御對南面、上、世居庇邊、御裝束御直衣也、濃紫二重織物、(白丸文、)御指貫、紅打御出衣、例御直衣、先、是諸卿右大將、降自中門內方、着履懸裾列立南庭、北、上、次遣御車於對南階、唐車攝政被進也、諸司二分、若束、二人付御車轅、殿上人等乘松明、列居南庭、此間御反問、陰陽頭在案、朝臣奉、次乘御、攝政攝、隨、諸卿列居、次爲先下膳出、自中門、於門外乘馬、殿上人御車懸、

御牛、黑毛、御車訓稱衣冠、召繼等取松明、相從前後左右、

路頭行列、

先六位、

次五位殿上人、

次四位殿上人、次公卿、次移馬、居飼舍人、各四人、

次四位五位院司各十人、院司不足、召加、取松明、供奉、

次御隨身四人、府生、番長、各二人、將曹道、可被召、是自川院例云々、

次召繼取松明前行、次御車、

次後騎左兵衛督平知盛卿、御厩別當、

次檢非違使左衛門督源光長、

次召繼等、

次攝政車、隨身前近如例、但四位前近二人在之、

至正親町第、入自西門、遣御車於寢殿南階、先、是公卿、東面、殿上人等列居前庭、關白昇自中門廊參、

塞箔下御、隨身發、此間雨脚頻下、仍公卿等更向中門、

列居、下御之後、各昇中門廊、徘徊小時、右大將退出、

抑寄御車之間、大將隨身止前聲、依院御隨身可發、御前憚之也、但參退之間皆追之、此等皆故實

也、今日公卿已下、皆束帶也、

御報書儀、可尋記之、

坊官除目儀、以攝政被注送之狀載之、

參入公卿、源大納言定房、皇太后宮大夫朝方、右宰相  
中將、實守、左大辨長方等也、大納言左大辨等着座、自  
餘公卿在休所、先例也、次攝政氣色左大辨參着圓  
座、以五位藏人光長、召視續紙、即持參之、執筆  
卷返之、次召頭辨經房、召帶刀勞帳、此間給申文、  
次持參帶刀勞帳、見了返給、執筆次第任之、中文置  
硯右  
次覽除目、盛柳取柳宮復座、結成柄返上、歸着  
本座、次召清書、朝方卿給除目、於休所各披見  
之、

今日、愛染王百萬遍終功了、自去年十二月二日始  
之、今日九十一日也、今日實嚴閑梨來、告吉夢可  
信、

五日、丁〔天〕陰雨下、但朝間時雲散、早旦隆職注送聞  
書、大進時光任刑部少輔、太以冷  
然歟、此外帶刀等給官、大  
夫已下全以不見、

已刻、攝政被向宇縣、長者之後  
初度也、半薙車直衣、隨身布衣  
冠、下薦布衣帶劔、前駢殿上人、藏人、五位相并廿人

許云々、各衣冠、此中藏人頭重衡相交、淺履、他人  
皆半靴也、入夜  
被還也、

宇治儀、

宇治川渡之間、依無尋常船、昇居車於〔無〕屋形之  
船、渡之、於平等院北面〔大〕門下、車、光雅獻香云々、  
前駢之中有君  
達等、何光雅當此仁哉、  
執事家司必不可取香、先入本堂御所、次阿彌陀堂、次  
口堂、次經藏、見寶物等之間數刻、邦綱卿、信範入道  
等參會云々、信範入道竊可候閑所一歟、而參會下  
車之所、相交前駢之中、太見苦云々、及晚事了歸洛、  
終日甚雨之間、萬事有煩云々、於諸堂皆有諷誦  
云々、〔今日依吉日〕加灸治、不召醫師、灸本路也、  
六日、戊天陰雨下、今日猶灸治、又召大將令讀書、  
七日、己〔天〕晴、今日、攝政內裏八省官廳神祇官、被  
歷覽、密々事云々、晚頭、々辨經房來、催明後日御卽  
位定可奉行之由、依所勞加灸治、仍申其旨了、  
左大臣所勞云々、  
八日、庚〔天〕晴、申刻、頭辨以書告行賴云、明日定  
左府屬夜陰、可參之由被申云々、  
九日、辛陰小雨、此日女房姬君等、密々參稻荷祇園等  
社、只侍許在共能忍也、自今夜始祈二壇、不動供

智詮、愛染王供信助也、此日被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御即位日時定、并擬侍從定、伊勢幣定等、又被<sub>レ</sub>仰、禮服公卿上卿左大臣云々、委事追可<sub>二</sub>尋記、

十一日、癸晴、午刻大外記賴業來語云、一昨日於<sub>レ</sub>陣被<sub>レ</sub>行事等、

先上皇報書勅答、源大納言爲<sub>二</sub>上卿、卽爲<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>參院、

次女官除目、上卿藤中納言成範、

次伊勢幣定、

次御卽位定、同擬侍從定、親王代實宗、賴實等卿云々、

次被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>禮服公卿、

大納言、實定、中納言、朝方、(參議、長方、實守、定能、)

次奏<sub>二</sub>下高御座造始日時、

今日依<sub>二</sub>應德例、不被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>大將代、追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰云々、此外文談移<sub>レ</sub>刻、申刻、藏人少輔親經來、傳<sub>二</sub>上皇仰云、賀茂祭之間、神館屋未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>成功之者、期日漸近、難<sub>レ</sub>終<sub>二</sub>其功云々、何樣可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行哉者、親經內々云、外處密院之時無<sub>二</sub>此例、至<sub>二</sub>于行幸之時、(者、申云、期日尙遠、猶無<sub>二</sub>亦<sub>二</sub>揚屋之時、被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>部屋例也云々、被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>成功之者、被<sub>レ</sub>責<sub>レ</sub>(者)、何不<sub>二</sub>出來<sub>一</sub>哉、但其事猶難<sub>レ</sub>叶者、准<sub>二</sub>行幸之例、被<sub>レ</sub>(用<sub>二</sub>部屋、不可有<sub>二</sub>其難者、同時、右中辨兼光、爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來云、母后幼主須

被<sub>二</sub>同居也、而偏弄<sub>二</sub>射山宮、直禁省<sub>一</sub>之條、於<sub>レ</sub>事似無<sub>二</sub>便宜、仍其事不可<sub>レ</sub>叶、若非常事<sub>火災</sub>、出來之時、出御之間、如<sub>二</sub>御乳母奉<sub>二</sub>相副<sub>一</sub>之條、非<sub>二</sub>無<sub>二</sub>事之憚、爲<sub>レ</sub>之如何、法皇皇女前齋宮、已爲<sub>二</sub>帝之姨、骨肉之親也、中宮出御之際、以<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>內親王<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>其代、令<sub>レ</sub>候禁中<sub>一</sub>之條如何、但非<sub>二</sub>有<sub>二</sub>立后<sub>一</sub>者、不可<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>同與之器重、加<sub>レ</sub>之非<sub>二</sub>母后<sub>一</sub>非<sub>二</sub>妻后<sub>一</sub>、祇<sub>二</sub>候內裏<sub>一</sub>之條、又以不可<sub>レ</sub>穩、又忽立后、不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>物議<sub>一</sub>、此等之間、加<sub>二</sub>斟酌<sub>一</sub>可<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>者、余申云、先乍<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>母后<sub>一</sub>、忽立后之條、一切不可<sub>レ</sub>候、事涉<sub>二</sub>禁諱<sub>一</sub>、亦中宮<sub>レ</sub>之奇、仙洞偏御<sub>二</sub>于鳳闕<sub>一</sub>之條、實以不可<sub>レ</sub>叶、如<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>、前齋宮被<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>、尤得<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>妻后及母后<sub>一</sub>之人參候、強不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>難、且<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>人事也、往昔皆有<sub>二</sub>此例<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>于帝之服親者、更以有<sub>二</sub>何憚<sub>一</sub>哉、卽選子內親王、世稱<sub>二</sub>大<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>村上御遺言<sub>一</sub>、圓融院御時、片時不<sub>二</sub>出避<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>、凡此外<sub>二</sub>其例已多<sub>一</sub>、准<sub>二</sub>彼等<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其妨<sub>一</sub>歟、於<sub>二</sub>非常大事者<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>兼日之案<sub>一</sub>、縱中宮常途雖<sub>二</sub>御同居<sub>一</sub>、一日退出之際有<sub>二</sub>此難<sub>一</sub>者、猶臨時處分也、又雖<sub>二</sub>前齋院后位以前<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>非<sub>二</sub>同與之仁<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>御乳母奉<sub>一</sub>抱<sub>二</sub>天候<sub>一</sub>、御與<sub>二</sub>、不可<sub>レ</sub>似事也、仍內々有<sub>二</sub>御思慮<sub>一</sub>天、以<sub>二</sub>後齋



院被奉<sub>レ</sub>付尤宜歟、愚案如此者、兼光云、左府申狀以同前也云々、又語云、來十七日殿島御幸、上皇御裝束御直衣也、濃<sub>レ</sub>紫浮文織物奴袴、御烏帽<sub>〔子〕</sub>直衣云々、余云、烏帽直衣可<sub>レ</sub>然、至于御指貫者、豎文薄色、若半色宜歟、如何、兼光云、尤雖可<sub>レ</sub>然、已自御服所調進了、強不可<sub>レ</sub>改之由、隆季卿計奏云々、又云、供奉行粧之人、參仕御送之輩、被<sub>二</sub>差分<sub>一</sub>云々、小時退出了、入<sub>レ</sub>夜、參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、

十二日、<sub>〔子〕</sub>天晴、隆職宿禰來、御即位之間、紫宸殿御裝束之間事、内々尋問之、入<sub>レ</sub>夜、爲<sub>二</sub>方違向<sub>一</sub>南宅、今日召<sub>二</sub>大將番長兼重、賜<sub>二</sub>馬<sub>一</sub><sub>〔一〕</sub>正<sub>一</sub>、

十三日、<sub>〔子〕</sub>雨下、攝政送<sub>レ</sub>札云、來<sub>〔十九日〕</sub>可有<sub>レ</sub>行幸<sub>〔八條院〕</sub>可<sub>二</sub>騎馬<sub>一</sub>哉、將乘<sub>レ</sub>車參<sub>二</sub>自<sub>一</sub>閑路如何、可<sub>二</sub>計<sub>一</sub><sub>〔示云々〕</sub>、報云、其不可<sub>レ</sub>有其難、且可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>檢寬治、保安等之例歟者、午刻、佛殿聖人來、有<sub>二</sub>法文談事等<sub>一</sub><sub>〔今日入<sub>レ</sub>夜、轉<sub>二</sub>讀心經數卷<sub>一</sub>法<sub>二</sub>樂諸神<sub>一</sub>、其中春日百卷也、自餘或廿一卷、或七卷也、殊致<sub>二</sub>信心<sub>一</sub>、又今夜滿<sub>二</sub>愛染咒<sub>一</sub>遍、丹誠已至、玄應盡<sub>レ</sub>答哉、〕</sub>十五日、<sub>〔子〕</sub>天晴、終日念誦、智詮阿闍梨來、此日召<sub>二</sub>右近廳頭清景於大將方<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>御即位之間、本府雜事<sub>一</sub>、申

云、職事未<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>、仍不致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、仰云、先例被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>付成功之輩<sub>一</sub>者也、而明後日院可有<sub>二</sub>御物詣<sub>一</sub>、還御之後有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>者、恐致<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>歟、早向<sub>二</sub>年預將許<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>觸此由<sub>一</sub>、隨<sub>二</sub>被命<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>示職事<sub>一</sub>者也者、又騎射之間雜事、尋<sub>二</sub>仰之<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>不宜、不<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>注文<sub>一</sub>、内々召問也、又以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>送<sub>二</sub>頭辨之許<sub>一</sub>、示<sub>二</sub>備後國所領事<sub>一</sub>、國司申狀、條々不當之由也、<sub>〔今日酉刻、一時無言念佛、定<sub>二</sub>酉時<sub>一</sub>、聊依<sub>レ</sub>有所<sub>レ</sub>果也、〕</sub>

十六日、<sub>〔子〕</sub>天晴、酉刻許、左少辨行隆、以<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub><sub>〔送<sub>二</sub>基許<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>伊勢太神宮司可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>改任<sub>一</sub>哉否事<sub>一</sub>、<sub>〔副<sub>二</sub>去年仗議定文及問注記等<sub>一</sub>〕</sub>其狀云、</sub>

伊勢太神宮司、大中臣祐成、神事違例事、仗議并問注記、謹以<sub>〔進<sub>二</sub>上之<sub>一</sub>、可有<sub>二</sub>改任<sub>一</sub>否事<sub>一</sub>〕</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>給<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申<sub>一</sub><sub>〔上<sub>二</sub>給<sub>一</sub>者〕</sub>、院宣如此、行隆恐惶謹言、

三月十六日

左少辨行隆、奉、

謹上伯耆守殿

請文狀、

太神宮司祐成、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>改任<sub>一</sub>哉否事、如<sub>二</sub>問注記<sub>一</sub>者、雖有<sub>二</sub>遁申旨等<sub>一</sub>、遷宮度々延引、頗有不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>神慮<sub>一</sub>、

之疑歟、加之見<sub>レ</sub>仗議之趣、神祇官卜<sub>レ</sub>申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>改任之由歟、云<sub>レ</sub>彼云<sub>レ</sub>是、非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>其恐、但先以<sub>レ</sub>陳申之狀、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>本宮及證人<sub>レ</sub>歟、抑改任之條、若無<sub>レ</sub>疑殆<sub>レ</sub>者、能擇<sub>レ</sub>其人可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>登用歟、至于成功之條<sub>レ</sub>者、何偏守<sub>レ</sub>前後之次第、須<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>功程之多少歟、但是器量相同、優劣難<sub>レ</sub>決之時事也、若有<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>事之輩<sub>レ</sub>者、以<sub>レ</sub>彼可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>先歟者、以<sub>レ</sub>此等之趣、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計奏<sub>レ</sub>之狀、如<sub>レ</sub>件、

三月十六日

右大臣

逐申、

定文及問注記返<sub>レ</sub>上之、

秉燭、院藏人爲<sub>レ</sub>御使、持<sub>レ</sub>來金泥御經三卷、壽量品一卷、心經一卷、已上院御筆、又心經一傳仰云、明日可有<sub>レ</sub>御幸嚴島、於<sub>レ</sub>彼卷、中宮御筆也、社<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>供養<sub>レ</sub>御經也、手可<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>進外題<sub>レ</sub>者、即下筆付<sub>レ</sub>進御使<sub>レ</sub>了、余雖<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>精進<sub>レ</sub>事難<sub>レ</sub>默止、嗟<sub>レ</sub>嘯<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>之、戌刻、人傳云、明日御幸延引了、山大衆蜂起<sub>レ</sub>不知<sub>レ</sub>何事、之間、忽然而延引、只今自<sub>レ</sub>前大將之許、示<sub>レ</sub>禪門之許<sub>レ</sub>云々、武士等充<sub>レ</sub>滿路中<sub>レ</sub>云々、今日長光入道來、申刻、右近廳頭清景來云、以<sub>レ</sub>昨日仰<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>年預將<sub>レ</sub>之處、以<sub>レ</sub>府解<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>職事<sub>レ</sub>之由、依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>其命、今日付<sub>レ</sub>頭辨<sub>レ</sub>之

處、被<sub>レ</sub>召仰<sub>レ</sub>云、院御物詣以前、難<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>沙汰、且可<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>用意、于<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>沙汰、本府懈怠也云々者、清景申云、其日可有<sub>レ</sub>即位<sub>レ</sub>之由、自<sub>レ</sub>宮令<sub>レ</sub>下知<sub>レ</sub>之時、成<sub>レ</sub>請奏所付也、而于<sub>レ</sub>今無相觸<sub>レ</sub>、仍進不及<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>沙汰<sub>レ</sub>之由、陳申了<sub>レ</sub>云々、即以<sub>レ</sub>年預隆房朝臣消息<sub>レ</sub>之許、〔遂<sub>レ</sub>基輔〕所來也、件消息相<sub>レ</sub>副頭<sub>レ</sub>辨返事、余仰云、且<sub>レ</sub>注<sub>レ</sub>功程<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>成功之輩、示<sub>レ</sub>合年預將<sub>レ</sub>、早可<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>職<sub>レ</sub>事、自<sub>レ</sub>官不<sub>レ</sub>相觸<sub>レ</sub>之由陳申、一旦雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、于<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>沙汰、昨日被<sub>レ</sub>召仰<sub>レ</sub>之時始驚申、尤懈怠之由仰含了、又申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>沙汰<sub>レ</sub>之事等繁多、不可<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>將監二人之功、仍可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>副兵衛尉功一人<sub>レ</sub>之由所<sub>レ</sub>申也云々、仰云、兵衛尉事、不可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>本府之沙汰<sub>レ</sub>歟、早只勘<sub>レ</sub>功程、可<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>年預將<sub>レ</sub>者、或云、行幸明日云々、但無<sub>レ</sub>定說、中宮明曉可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>入內<sub>レ</sub>云々、今日有安來、彼事重以辭通、近代之事只以<sub>レ</sub>無爲<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>先、〔以<sub>レ</sub>一旦之榮<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>招<sub>レ</sub>終身之恐、仍再三所<sub>レ</sub>固辭也、件男今日下<sub>レ</sub>向福原云々、〕十七日、已<sub>レ</sub>陰晴不定、時々小雨、自<sub>レ</sub>今日三箇日、奉<sub>レ</sub>幣帛於大原野社、依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>夢想事<sub>レ</sub>也、仍降<sub>レ</sub>庭上<sub>レ</sub>修被<sub>レ</sub>、又遙拜、〔衣冠取<sub>レ</sub>入夜、藏人左衛門權佐光長來語云、〕

御幸延引事、昨日申刻依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>示之事<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>大理第一、以<sub>二</sub>件人說<sub>一</sub>、始所<sub>レ</sub>承也、園城寺大衆發起相<sub>二</sub>語延曆寺及南都衆徒<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>法皇及上皇宮<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>盜<sub>二</sub>出兩主<sub>一</sub>、之由、去八日<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>評議<sub>一</sub>、其事<sub>一</sub>自<sub>二</sub>達前幕下之邊<sub>一</sub>、頗致<sub>二</sub>用心<sub>一</sub>之間、彼日<sub>レ</sub>默止、於<sub>レ</sub>今者可<sub>レ</sub>伺<sub>二</sub>御幸之間<sub>一</sub>者、猶以結構、事已<sub>一</sub>一定、有<sub>二</sub>證人等<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>茲去夜以<sub>二</sub>檢非違使季貞<sub>一</sub>、馳<sub>二</sub>遣<sub>一</sub>攝州了、隨<sub>二</sub>彼申狀<sub>一</sub>、來廿一日可有<sub>二</sub>御進發<sub>一</sub>云々、大理又云、此事法皇自被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>遣前幕下之許<sub>一</sub>、仍爲<sub>二</sub>實說<sub>一</sub>云々者、此事偏天狗之所爲也、佛法王法滅盡了歟、不能<sub>レ</sub>左右、行幸猶明後日云々、此日本命日、泰山府君祭也、精進如<sub>レ</sub>恒、今日清景注<sub>二</sub>進騎射雜事<sub>一</sub>、

十八日、庚<sub>午</sub>〔天〕晴、人傳云、攝州之使季貞、昨日歸洛、御幸猶明曉云々、又法皇自<sub>二</sub>鳥羽<sub>一</sub>、渡<sub>二</sub>御五條大宮之邊家<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>行家<sub>一</sub>、武士等多奉<sub>二</sub>圍繞<sub>一</sub>云々、或云、依<sub>レ</sub>恐<sub>二</sub>衆徒事<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>洛中<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>一所<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>守護、或云、奉<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>上皇<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御物詣<sub>一</sub>之次、可<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>坐遠所<sub>一</sub>云々、縱橫之說、難<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>一定<sub>一</sub>、又傳聞、主上此兩三日御不豫、自<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub>頗六借御坐、御乳一切不<sub>レ</sub>聞食、又言語不<sub>レ</sub>輒、近習女房等難<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>歌、世間騷動之外無<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>御祈事<sub>一</sub>、一

切無<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、萬人無<sub>二</sub>正念安堵之輩<sub>一</sub>云々、〔天魔偏得<sub>二</sub>其力<sub>一</sub>、佛神失<sub>二</sub>威力<sub>一</sub>、歟、悲哉々々、〕何爲、十九日、辛<sub>未</sub>終日降雨、〔今晚上皇御進發了、法皇<sub>一</sub>去夜欲<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>御五條大宮爲行家<sub>一</sub>之間、六條壬生之邊<sub>一</sub>、誰人宅<sub>一</sub>、設<sub>二</sub>鋪設<sub>一</sub>、裝<sub>二</sub>御裝束<sub>一</sub>、法皇不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>食其子細<sub>一</sub>、到<sub>二</sub>四墓邊<sub>一</sub>給之間、前將軍獻<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>日次不<sub>レ</sub>宜後日可<sub>レ</sub>渡御之狀<sub>一</sub>、仍忽以<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>御鳥羽<sub>一</sub>、次第奇異事歟、今一兩日之間、猶可<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>御五條大宮<sub>一</sub>云々、今夕雖可有<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>幸于八條院御所<sub>一</sub>、洞院、依<sub>二</sub>主上御不豫六借<sub>一</sub>、御延引云云、

廿一日、癸<sub>酉</sub>〔天〕晴、大將番長秦兼重相<sub>二</sub>具弟男<sub>一</sub>來、召<sub>レ</sub>前見之、仰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>余方下薦<sub>一</sub>之由、未刻、信助阿開梨來、談<sub>二</sub>最吉夢<sub>一</sub>、又云、來廿七日可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>高野<sub>一</sub>云々、此日二位中將兼房息小童<sub>一</sub>、覺智僧<sub>一</sub>、今日於<sub>二</sub>三井寺僧都覺尊白川房<sub>一</sub>、即爲<sub>二</sub>弟<sub>一</sub>、出家、自<sub>二</sub>父中將北家<sub>一</sub>出立、藏人五位前驅三四人、院<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>道也<sub>一</sub>、隆季卿息兩人在<sub>レ</sub>共云々、出家事訖、被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>云々、廿二日、甲<sub>戌</sub>〔天〕晴、右近廳頭清景來、申云、御即位雜事、以<sub>二</sub>將監二人<sub>一</sub>功、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由、頭辨可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下知也<sub>一</sub>、兵衛尉功無<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>云々〔者〕、



〔廿三日、亥〕天晴、申刻許、中御門大納言來、余謁之、頃之被歸了、今旦辰刻、地震、今曉女房有吉夢、仍俄熊野可立使之由、致沙汰也、

廿四日、丙陰晴、時々雨〔降〕、召大將番長兼重、令乘揚馬〔此日參女院御方〕

〔廿五日、丁〕天晴、左馬權頭宗雅來、談世間事等、去十六七日等之間、依大衆事御幸延引、世間忿々之事等也、不能委記、

廿六日、戊〔天〕晴、右近府生持來月奏、取大將判、智詮阿間梨自今夜始精進、來月朔日可進發熊野也、是余使〔也、余〕今日洗髮着淨衣裳等常小直衣、小袴等也、潔齋、忌三月水妊者等、降庭禮拜廿一反、又心經百卷轉讀、阿彌陀、樂師、千手〔觀音〕十一面、不動等真言、各千遍、此外阿彌陀大咒七反、樂師大咒百反、千手陀羅尼七反等滿之、又招覺乘得業、示付春日祈事等、自來月三日可參詣春日、又同日可奉供養自筆心經一事等也、各能々可密々之由仰了、〔雖無〕內心之過怠、爲遁外聞之恐怖也、意趣等委示聞了、只生涯安穩而不可招災、殊又恐身之爲體、始終不審之由也、

廿七日、己〔天〕晴、取寄右近府騎射雜具、并御即位之間雜具等、見之、光盛參上沙汰之、〔今日定御卿來、一昨日下午向自熊野云々、〕

廿九日、辛〔天〕晴、午刻、藏人左衛〔門〕權佐光長來、傳攝政命云、來月二日平野祭、可被立殿上使、當今初度也、而彼日凶會日也、代初〔惡日之例、被問外記〕之處、天仁、仁安、初度被立殿上使之日、即凶會日也、仍被逐彼例之處、未着御御束帶、凶會日初着御、不可然之上、御不豫之後、未有御浴殿、旁御禊之儀不可叶、爲之如何、可計奏者、申云、雖被立殿上使、無御禊之例、先蹤多存、是雖非初代、今度事已難被行御禊、歟、凶會日始着御御束帶、及御樂之後、惡日御浴殿、若不可候、仍准他時之例、被立殿上使、無御禊、何事之有哉者、申刻許、大夫史隆職來、內々示紫宸殿御裝束之間事、今日奉渡熊野御正體鏡於使〔智詮〕之許、余先奉拜之、晦日、壬〔天〕晴、及晚小雨、早旦智詮〔阿間梨〕來、明曉進發、祈之間事、委仰付了、今夜余有吉夢、今日余奉書金泥心經了、十三卷、爲奉藏熊野三御山、三所、及若宮、王子、瀨下等也、又女房奉書墨字同經三卷、相具送智詮之許了、此外墨字



素紙摺ニ寫法華經三部、并王子心經等、所レ奉ニ相副一也、件法華經三部外題、余書レ之、

今夜余心中詠ニ一首一、

世をおもふニこゝろの中をみくまの一、

神のめニくみをあふくはかりそ一、

須ニ書付ニ進納一也、然而風聞有レ恐、仍中心詠レ之、神明權ニ現定有ニ知見一歟、余自ニ壯年之當初一、鎮ニ欲一世ニ之及ニ澆季一、屢庶政之反ニ淳素一、若奉レ遇ニ社稷之主一者、盡レ守ニ六正之一一哉、故有ニ此詠一、

右治承四年庚子春此一狀墨付百貳拾九枚者以三緣院道

教公圖書松殿右幕下道昭卿被摸寫之畢

抑法性寺忠通公之有職松殿基房公親面授而傳于後法性寺兼實公且加日課爲後見之龜鑑其末苗不讓他之本號玉葉祕握而可貯深奧者也

于レ時慶安二年己丑正月仲旬陶化翁花押誌焉

此一冊者慶安貳年己丑三月廿三日關白昭良公被借用書寫今日返給者也爲後證陶化翁花押誌焉

玉葉卷第三十三終

玉葉

卷第三十四

自 治 承 四 年 四 月  
至 全 六 月

治承四年夏上

歲次庚子

四月〔小〕

一日、〔天〕晴、入夜陰雨、今日重召寄右近騎射具、

仰光盛支配家司職事已下、大途逐元永例、歟、申

刻、持來擬階奏、余加朝臣、大將書名字返給了、

自酉刻至亥刻、有炎上、起自八條、〔至六條〕余奉

使於關白御許、〔依燒亡近也〕又遣長光入道、〔不取出物、并光盛免餘了、等之許、今夜書始理趣經、金泥也、今夜、御

禊前駢定并小除目云々、〔上卿中御門大納言、職事頭辨云々〕

二日、〔天〕陰、終日奉書理趣經、早旦、大夫史隆

職注送去夜除目、被任齋院長官以下、并山城介、馬

助等云々、又藏人親家任右近將監、

三日、〔天〕晴、大風、〔吉夢〕今日、被告申即位之

由於伊勢太神宮、攝政被參神祇官、前中納言雅賴

〔卿〕一人扈從、行事辨兼忠、上卿左大將、職事頭前亮

重衡、藏人左衛門權佐光長等參候云々、御手水了、問

事之具否、之後有拜、召使〔已上、頭被立了云々、已上

事、雅賴所注送也、今日梅宮祭、〔付〕奉幣如恒、  
〔陪膳行賴〕今日、於春日御社、奉供養自筆心經〔金〕五卷、  
〔昨日〕奉又奉幣帛、  
四日、〔丙午上〕〔天〕晴、未刻以後雨下、奉書理趣經了、實嚴〔閣梨〕來、奉書梵字、明曉、可送高野信助阿闍梨之許、來七日於奧院、可奉供養也、〔今夜、爲夏節、向南家〕  
傳聞、平座上卿三條大納言、參議實宗卿、外記不進祿法、仍〔以〕白紙被奏、五位外記、依炎上各早出、六位外記不知案內、申此由、不足言云々、  
〔五日、〕天晴、早旦歸家、今日參女院御所、入夜歸來、  
六日、〔戊子〕陰晴不定、雷鳴、院還御、今日雖可有延引云々、召使來云、來九日可有行幸大內、右大將可參云々、申承之由、

七日、丑〔天〕晴、於弘法大師影前、供養自筆心經一卷、此事忽然而俄所思立也、今日於高野奧院、奉供養金泥理趣經、又於高〔野〕、可奉供養心經之由、所存中心也、請佛殿聖人爲導師、事卒爾之間、只以長絹一疋爲布施、又今日、同聖人受心經秘鍵、右近廳頭清景來、申御卽位當府雜事用途料成功之問事、被宣下將監一人功、而依可不足、可申請二人云々、余云、一人功何不足哉、專不可申請二人歟、但且依先例可進止者、今日奉幣賀茂、齋院不替之由也、

八日、寅〔天〕晴、定能卿注送云、昨日奉幣、上卿中御門大納言、使定能卿、可有幣物哉否、雖有〔其〕沙汰、依攝政被申、有幣帛云々者、余案之、長和治曆、應德、無幣帛、天慶有之云々、不被追近代吉例、如何々々、入夜、藏人左少辨行隆、以書狀問送云、明日遷幸之間、主上可召御束帶、而雖不正、何事之有哉、如何々々、報云、幼稚之君、如法之條、不可叶、雖不正、必可召御束帶者、內々可尋申之由、女房被申之由、載消息、事體太見苦、余返事、以基輔奉書遣之、

內裏無灌佛、出家所々有灌佛、余、及大將、皇嘉門院、八條院等、進布施、各以隨身爲使、大將布施、書名二字、如恒、女院御方奉行、別當經家朝臣、判官代能業云々、

九日、卯〔天〕晴陰、酉刻許、藏人左衛門權佐光長、爲攝政使來云、今夕可有遷幸大內、依例可被用移徙儀、而於御前座有孟酌〔及〕攤事等、其間、幼主獨御書御座之條、專不可叶、先例雖幼主多御、未有如此之例、不御書御座、被行此禮之條、偏以新儀也、又如重衡朝臣、祇候御傍、無例之上、事非穩便、若又可被止擲案之禮歟、彼是之間、進退維谷、迷是非了、欲承御案之旨者、報云、先被停御前之儀、孟酌、及條、一切不可候、只任例可有出御也、而臨時不可叶者、卽以入御、全不可及難、其後被行如在之禮、尤可宜歟、此外不可及異議、節會之時、中間雖入御、御膳猶供之、自餘事、又皆行之、蓋被准據哉者、光長密々云、此事、人々様々有云々等、不設庇御座、可垂母屋御簾歟、將又如除目等之儀、垂庇簾、不設長押上座、於孫庇可有攤儀歟、又今如令申給、如形可

有出御<sub>二</sub>歟、此等之間事不<sub>レ</sub>切云々、余案<sub>レ</sub>之、初之兩儀、共以不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>甘心、只中間入御、全以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其難<sub>二</sub>事也、

此日、新帝自<sub>二</sub>五條東洞院<sub>邦綱宅、</sub>第二、遷<sub>二</sub>幸大內<sub>、來廿二日殿、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>也、</sub>依<sub>二</sub>天仁元年八月例、所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行也、行事上卿、辨權右中辨光雅也、右大將、秉燭以前參內、<sub>螺鈿銀、平胡録、等如<sub>レ</sub>常、隨身者<sub>二</sub>染分務、又舍人、居同、給<sub>二</sub>裝束<sub>、雖<sub>二</sub>夜陰事、依<sub>二</sub>今上初度行幸<sub>也、</sub>先例又如此、普通例、夜行幸之時、隨身者<sub>二</sub>白襖袴<sub>也、</sub>召仰之後、帶<sub>二</sub>弓箭<sub>、</sub>列立、次第存<sub>レ</sub>例、但母后同與、其儀又如<sub>レ</sub>常、主上乘御、安<sub>二</sub>御璽、撤<sub>二</sub>御草鞋<sub>之後、</sub>近將參上、下<sub>二</sub>格子<sub>、除<sub>二</sub>中、時忠、知盛等卿、取<sub>二</sub>几帳<sub>、候<sub>二</sub>左</sub>右云々、到大內、經<sub>二</sub>待賢、建禮、承明等門<sub>、其外、殿、其如<sub>二</sub>例、</sub>大將、下御之後退出、經<sub>二</sub>階下、宣仁門等、自<sub>二</sub>花德門<sub>退出、</sub>依<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>深更、幼稚之者、可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>便宜、仍所<sub>二</sub>忿退出<sub>也、</sub>內裏之儀、可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>記之<sub>、</sub></sub></sub></sub></sub>

今日、新院自<sub>二</sub>嚴島<sub>入洛給、</sub>入<sub>レ</sub>夜云々、今日依<sub>二</sub>熊野御燈、明日遙拜、又有<sub>二</sub>所作等<sub>、</sub>十日、<sub>壬辰</sub>終日甚雨、入<sub>レ</sub>夜天晴、年預中將隆房朝臣、以<sub>二</sub>將曹清景、示<sub>二</sub>御即位本府雜具之間事、仰<sub>二</sub>返事<sub>了、</sub>

今日、以<sub>二</sub>消息<sub>、</sub>問<sub>二</sub>日來不審於<sub>二</sub>新院女房之許、今日新

宮燈明也、所作等如<sub>二</sub>昨日、今日齋院次官來催云、明後日御禊、可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>上車牛<sub>者、</sub>申<sub>二</sub>承由<sub>、</sub>

十一日、<sub>巳</sub>天晴、光盛季長等參、又將曹清景參入、沙汰御即位當府雜事等、以<sub>二</sub>將監成功二人、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>之<sub>レ</sub>、</sub>由下知了、宣旨被<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>一人、然而今<sub>二</sub>人大將、故府奏可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>沙汰<sub>之由仰了、</sub>又騎射雜事等、家司職事等、領狀之不足、充<sub>二</sub>侍等<sub>了、</sub>來十六日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御即位叙位<sub>之、</sub>右大將可<sub>レ</sub>參旨來催、申<sub>二</sub>所勞之由<sub>了、</sub>今日那智燈明也、所作禮拜同<sub>二</sub>昨日、明日齋院禊料、新大納言、<sub>依<sub>二</sub>上、</sub>斯借<sub>二</sub>大將毛車、仍遣了、拜賀之時、申<sub>二</sub>請車<sub>之例、</sub>相<sub>二</sub>加下<sub>、</sub>熊榻等、今度不<sub>レ</sub>然也、今日隆職來語云、十六日左府參<sub>二</sub>內裏、評<sub>二</sub>殿庭裝束之儀、實房賴實等卿相伴、<sub>左府實房直衣、</sub>又頭辨經房兩大外記、隆職等參會、大略被<sub>二</sub>定仰<sub>了、</sub>先去比隆職以<sub>二</sub>今案注<sub>指圖、</sub>內<sub>レ</sub>々<sub>、</sub>覽<sub>二</sub>左府、大都無<sub>二</sub>相望<sub>云々、</sub>又申云、去一日平座了、宗家卿爲<sub>二</sub>上卿、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>齋院御禊前駢定、并小除目、御禊明日而往已道虛、公家御衰日、一日之中、有<sub>二</sub>三ヶ之難、然而依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>式日、不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>忌避、此事兼日被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>日時<sub>之處、</sub>擇<sub>二</sub>申九日、而萬事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>之、仍以<sub>二</sub>式日<sub>可<sub>レ</sub>行之由、</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>了、</sub>仍所<sub>二</sub>勘申<sub>、</sub>



云々、又申云、去九日遷幸之間、公卿祿褂不法、就中攝政祿、可用綾褂之處、諸國不濟之間、所用平絹、以外違例也(云々)、

十二日、<sup>午</sup>陰晴不定、時々小雨、此日初齋院御禊也、余依先日召獻牛、<sup>第三</sup>牛重不給裝束、本所被設之故也、進車之時、車副牛飼等賜褐衣葉等、相副令進者、今度御禊、無六府之前驅例也、自明年可有件等前驅云々、晚頭定能卿來、語去九日遷幸之間事、於宜陽殿有三獻、上卿左大將、其盃乍三獻、不傳辨座、天仁例云々、經房、光雅、行隆等勸盃、少納言早出不候座、只辨官三人許也云々、又臺盤近角立之、依座下無其所、着與座之人、經長押下壇、或乍着、查到與座末、<sup>柱外</sup>揖脫履昇着、或於筵西頭<sup>也</sup>、揖脫<sup>或跪或不然</sup>、進行云々、今夜人多於座末<sup>也</sup>、揖、定能獨於筵外<sup>有兩說也</sup>、但不<sup>或跪或不然</sup>用跪說云々、第二日、上卿實房卿、令立上臺盤、仍座末有路、着與座之人、昇自座末間西面、經臺盤末、着座云々、又攤之間、御裝束如恒例、主上初日如形出御、即入御、第二日無出御云々、人々作法不同、但多分着與之人左廻、而賴實卿右廻云々者、此

事不審可尋、不論與座、惣以有執左廻之人、然而下官、於與座人者、存可左廻之由、<sup>即有</sup>仍定能卿尋問之時、答此旨、從此命云々、未聞着與座之人用右廻之例、但定有所見歟、如此之作法、守株不可加難事也、又即位之間、問不審事等、粗報答了、自七日至祭日、神齋、有御禊、年如此、傳聞、今日禊、典侍不渡大路、參會河原、違例云々、奉行職事親經、只仰可渡祭之由、不催御禊事、親經陳云、令催禊齋之由、典侍盡存哉云々、大略彼是未練事歟、

十三日、<sup>未</sup>天晴、參女院御方、雖爲神事、依不密、不奉忌女院、但於祇候女房等之有障者忌之、余候御前之間在臺禰云々、

十四日、<sup>丙</sup>天晴、參女院御方、入夜歸來、

十五日、<sup>丁</sup>陰晴不定、賀茂祭也、近衛使右近少將基宗、<sup>被許昇殿候云々</sup>、中宮使亮通盛朝臣、馬助源正綱、齋院長

官左少將實教朝臣云々、禊齋、上卿新大納言宗房、并左中辨經房朝臣、余不見物、

十六日、<sup>戊</sup>朝間天陰雨下、午後天晴、祭還也、家中男女少々爲見物一行向、余不見物、攝政密々見物者、信

基朝臣、乘車後云々、太見苦事歟、

十七日、亥陰晴不定、未刻、雷鳴甚雨、申刻晴了、或人傳云、醍醐之邊、有行調伏法之禪門之人之由、世間風聞、未聞其人、大略令調伏禪門邊云々、甚無所據事歟、

十八日、庚天晴風吹、此日告祭也、奉幣如例、陪膳季長朝臣、奉行保行、陰陽師憲成、今日光盛參上、申騎射之間雜事、又先日左兵衛督知盛卿所示之西京地訴事、右近廳頭將曹清景陳狀召進之、可遣彼卿許之由、仰基輔了、以件朝臣、令傳申之故也、

十九日、丑天晴、右大將來二十六日可參臨時祭之由催之、申承之由、季經、賴輔、經家等朝臣來、及晚定能卿來、問即位異位重行之由事等、爲方達向南、

廿日、壬陰晴不定、大將聊有所勞氣、卜筮了、  
廿一日、卯天陰雨降、申刻以後晴、此日御即位叙位也、執筆左大辨長方云々、侍從良經叙正下、臨時也、攝政叙從一位云々、及明朝事訖云々、此御即位記裝束事可記、又可清書也、

廿二日、甲天晴、此日天皇即位於紫宸殿、春秋三歲、大極殿

火災以後、未企出來之故也、粗檢先規、於他所即位之例、古來三ヶ度、所謂陽成院、依大極殿災、於冷泉院、依御臨於紫宸殿、後三條院、仍於官廳有此禮、等也、今度紫宸殿與太政官廳、於何處可被行此儀哉

之由、豫以議定、被問公卿九人、及兩大外記、大夫史等、遂所被用此殿也、于細見、先日記、午刻着束帶、繡繪、其後多以如此、今已無此幸之儀、仍復舊儀、用繡繪、他人又如此、繡身、垂袴、參大內、經陽明、花德等門、向紫宸殿、見御裝束、高御座之外、大略如康保式、康保被用、但少御帳也

々有相違事等歟、具在指圖、仍不勞記、先々天皇御後房、小時母后被參休所、以兩殿北底四第二三四間并等御、取几帳候左、頃之、以藏人左衛門權佐光長、被問時刻、未申至之由、即天皇渡御紫宸殿高御座、其儀出御自仁壽殿、稱之額間、自同母屋際、至于高御座後、數兩而遙道、而今度不敷布、御前命婦左右各二人先行、五人只上敷、兩面、尤遠例也、御前命婦左右各二人先行、二人、光長、親次內侍二人持、御璽、左銀右置、今度式云、內侍候經、此、重子即位之禮者、兩面之上、他人敢不踏、因之御璽內侍相並先行、古來之例也、未見候前後之文、今度式若慣常法、歟、將有、所存歟、衆人、謂以失誤、次攝政奉抱幼主、步兩面之上、○以御原本補謂以二字

頭辨經房持御笏、五位藏人行隆取玉御冠、同親經持御沓、赤色、各以相從、御前命婦、留立高御座後階

玉葉卷三十四 治承四年四月

左右男柱下、入候之、攝政昇、自同階、奉居幼主於高御座上、頭前亮重衡朝臣、兩內侍昇同階、裏御座後帷、裏東面帷、置劔璽於御座左方、退下、次母后出自休所東面、被參高御座、兩廂祇候如始、次攝政參候御座長角壇上、座後立屏、于時雖奉仕殿庭、裝束諸儀未辨備、奉行之輩、左方行事左中弁經房朝臣、右方行事右中弁兼光朝臣、職事光長等也、頻加催促、歟、此間左右中務取物、諸司花樓陣近仗等、各以參列、左右大將代共、右中將代在北、少將代在南、先例右近如此、左近以大將代列北、相互以相違爲事云々、今已相同、還似違例、次典儀少納言藤原仲家率贊者二人、入自月花門、就床子、此後經時刻、仍以藏人、遣內辨休幕、東底爲其所、再三被相催、又左方親王代、右兵衛督家通卿遲參、同以催促、本所被點、右宰相中將實宗卿也、而去夜假稱疾不參、仍打入禮服於彼卿、家平以還食、有卒之問及、申一點、內辨左大臣、着禮服取牙笏、押紙取紙、經敷政、宣仁等門、并宜陽殿壇上、軒廊西二間等、留立柱中、於砌外、練始、足摩如、入自幄北面西間、自元子前着之、先掛後居如常、其前立、意氣洋洋、進退叶度、禮服之器量、誰人如之哉、可感歎々々々、

記二人、已上例束帶淺香、入自日花門、經幄南、入自西面、跪、膝行取廻宮、置机上、大內記取、兵部宮、少內記上、此次第重置故實也、而樂貞取式一、下、藤取式二、如次、第遠、依內辨命、更取替置之、其間作法失度、見者解頤、次內辨召內豎、音、頃之、內豎參上、立幄坤角、上如何、內辨宣、式乃司七兵乃司七召、內豎稱唯退下、小時式部丞藤原資博、兵部丞藤原定家、各例束帶、入自日花門、經幄南、列立同坤角、北面上、內辨宣式、司七、此時取出下名、副笏、式部丞微音稱唯揖、經兵部前、至于幄南面中幄下、左廻、可右廻、指笏頗北、傍行於同柱西頭、入西、跪頗向北、一兩度膝行候、內辨以左手給下名、承以左右手給之、取副笏送、行立左廻、經兵部後、加本列、次內辨召兵部、給下名、儀同前、但於幄南網外、指笏異、式部、抑大極殿儀二名作法、於幄坤柱南頭、指笏入自西面、給下名、今經南面、西面、若依便宜歟、兵部退歸間、式部先以退下、相率出日花門、丁、次內辨召內豎、音、內豎參上某所、如初、內辨宣、式乃司七兵乃司七召、內豎唯出召之、次二省輔代卒允代、入自日花門、列立幄坤角、四上北面、內辨宣、式乃司七、輔代入自幄西面、跪懷中笏、所、給位記宮、退下、給丞飯參給、第二宮又給丞立本所、次召兵部、給位記宮、儀同前、內辨給宮間、臣、笏於前案、給予取笏、更召兵部、



給之、皆如二省率丞、經中務花樓陣等後、置庭中  
正月七日儀、案退下、次內辨召近衛者一人、召儀無別作、左近廳頭  
久直參上候、帷南、內辨被催、外辨被催、其詞不聞及、無  
久直承仰不唯、出日花門了、次執翳女孺著座、先集紫宸殿  
東四座、四座者尋常御膳宿也、仍中有壁、東座、其儀入自北廂  
尋常儀、無中壁、今爲對彼、假壁爲隔、其儀入自北廂  
東西面妻戶、着母屋東西第一間床子、三座就之、如常、  
須取翳參上、寄立座後壁了着座也、而件翳子豫  
以立之、內壁空手參上、尤違例也、大極殿儀、北面東戶  
期、內藏官人傳授之、此殿儀件作法、頗可無便宜、執難無官人  
傳授之儀、雖於東面四座女孺等取之、可參上也、光長云、  
本座立、其例問有云々者、雖難有、次褰帳各出自宿所、  
其例、豈道失儀、哉、甚以無謂、左慈禮門外三々間、假爲其所、入自東西戶、執翳、  
右明儀門外三々間、假爲其所、入自東西戶、執翳、着母屋東  
西第三間座、四面、傳女孺數人、取几帳子相從、若座了退歸、次  
威儀命婦、左右各二人、出自北廂東西面幔、左攝政休  
后休、着母屋東西第二間座、相並、抑威儀命婦着座之  
後、褰帳可着座也、今褰帳先以着座、可謂違亂、次  
左右親王代、左右兵衛督家通、殿上侍從、左治部卿源顯實朝  
朝、少納言、左平信國、右各着服帶劔、兩親王代付玉佩侍  
臣、藤原惟基、各着服帶劔、從少納言不付之、入  
自敷政神仙等門、昇自南廂東西階、經簀子立  
位、其儀親王代、進出南簀子、當東西第二間、  
留立相揖、入自同間、經侍從位、立親王代、

揖、賴實經二間東頭、直北進可、然、家通同可入三間四頭、侍從  
也、而經東頭之間、斜經侍從位、經南四頭、頗似無便宜、侍從  
同經南簀子、無入自同間、立位、已上昇長押之  
足、右爲先左足、大極殿儀、無少納言立、南簀子東西第一  
此作法、依無長押上下也、間、各不揖、次開長樂永安門等、伴、佐伯兩氏各一  
人、着五位禮服、雖不給位記、以率門部各三人、入  
自長樂左、永安右、兩門、坐承明門內壇上、用胡床、東  
門部座壇下、如式、先開門及兩氏着座事、可有執  
翳着座以前、歟、雖然代々例多以如此、所謂應德  
等例也、就中保安、仁安等、內辨不着、帷以前、堂上  
辨備了、殿上事不、必守堂下之次第、歟、次兩氏降  
壇北面而立、依連々、內辨密々被相籠、兩氏復本位、次兵庫頭、立  
座、頗進出、向北敬折申云、刀禰召爪鼓令擊之、  
但不、內辨官令擊、頭微唯復座、仰鼓師令擊之、  
開門之後、可擊召刀禰之鼓也、而開門以前、被擊召刀禰之  
鼓、未曾有之違例、雅賴朝光、大將開門以前、召舍人、歟、如何々々、  
次門部開承明門、皆應、次外辨公卿六人、大納言、實房、宗  
實家、參議、長方、定能等也、朝方、長方、着紫、入自承明門東  
色禮服、定能雖爲四位、依近例、付玉佩、入自承明門東  
扉、各就標位、異位重行、四上北面、上首實房卿練步、其體如左  
多立標、於紫宸殿儀、者、諸節皆用標、加抑異位重行列、中古  
之康保式、載立標位之由、旁以勿論、以來、不守記文、今度又如、此、其立樣位記案異、  
立大納言二人標、其末去南一許丈、立中納言二人



標、其末〔去〕南五尺、立三位宰相一人標、中納言之後者一許丈立四位宰相一人標、就之案、這例有二、先任見任、可立標也、而就見參立之、前庭雖狹、何無立見任標之所哉、是次如記文者、大臣後立大納言標、其後立中納言標、其末續退立三位宰相標其後立四位宰相標、而大納言末頗退立中納言〔標之〕條、頗背記文之心、是但治曆、經信、保安、中右等記所注、并仁安之例如今日、又寬弘行成記云、宣命揖進出給大納言後云々、者此文頗中納言標、似有大納言末、他年々記、可列立之子細就是等記、立今日標歟、雖聖代之例、何必追先儀哉、何況此外代々已載重行由計也、不背記文歟、何非彼用之哉、理不可然、兼日定能卿疑云、大中納言、若就近例、不重行者、四位參議可立何所哉、依治曆保安之例者、三位參議之末、頗退可立歟、如何云々、答云於治曆經信記者、例立之趣、記錄有疑、依事案不不足爲證、至子保安者、無三位宰相、偏不似今度儀歟、猶守記文、可被列中納言後者、今日守命列立耳、次式兵兩省列叙人、不替左右相分參入列立、次兵庫頭申內辨、令擊袞帳鉦、其儀如常、次左右執翳女孺九人各取

翳、經母屋庇西第一間、下簀子追〔行〕、左西行、入自中門、左入自御座四間、其間執自大極殿、仍自中央、列立廂、東以四爲上、西以四爲上、但今、次左右袞帳起座、昇自高御座東西階、進南壇上、采女各一人持針糸、相副御帳、帷左右內さ萬に卷天、以針閉上之、如八字、以小刀一切糸餘、各復座、東右廻、次執翳經本道復座、寄立翳於後壁、宸儀始見、執杖稱警、若甲近杖胡床、式部稱面仗群官敬折等也、內辦不立、諸仗共之也、次主殿圖書各二人、就鑪燒香、主殿先主、次典儀少納言仲家唱三再拜、兩三步進唱之、さいはい四字、贊者相傳、今日相傳音不聞、次外辦公卿再拜、次宣命使權中納言朝方卿、揖頗北進、又揖西折、經大納言後、當同上程、乍西面揖北折、自此所練始、此事甚不得心、自離本列、可練此之例、尤可、經大納言列上、斜進就宣命版位、揖〔指〕、謂失儀、又推合右脇〔右顧〕、制之宣群臣再拜、次宣制又一段、群臣再拜、新造式宣制二段、今作法相違被文、此事先例不宣命文者、三同、寬弘四段、治曆應德二段、延久嘉承三段、如段有、武官不拜、振旗稱萬歲、此間宣命使卷文拔、笏取副文、揖左廻、練行於始所揖東折、已後、自列後復本位、曲折揖、如初、諸杖居一省、式部少輔光輔、兵召

給位記、叙人拜舞、兩氏、典儀云、再拜、一兩步進出唱之、口  
之、初進時立版下、仍、贊者承傳、外辨叙人共再拜、次左侍  
今度不能進出云々、從、親王、參議右兵衛督家通、揖經四位侍從前下簀子、  
代也、爲先、揖西折進行、自東第三間西頭、頗屈行至第四  
左足、間、更申腰揖、又屈北折昇長押、頗屈東爲、兩三步北進、  
先大傍行三度丁、深屈如欲居、小傍行三度、頗與大傍  
何、當御前跪、膝行三度、深揖起揚、又俛伏左右引笏  
頗退、逆行三度許立、敬屈如欲、起揚揖、膝退三度許立、敬屈如欲、小傍行三度申下、  
度許也、奏云禮畢、其音可三高長、而甚微音也、堂下無聞更  
起揚揖、膝退三度許立、敬屈如欲、大傍行三度右廻、可左、中腰、退時無、自初間下簀子、  
經三本路後本位一揖、如折揖、次令擊、重、御帳、之、鉦、  
其儀如、次執翳女孺取、翳進立、如初、永治記云、自初進時  
說、次褰帳參上、重、御帳、小刀、切、上、復座、次執翳引  
還、執杖稱、此間外辨公卿自上、上、退、出、須、擊、退、鼓、  
甚以爲、次天皇還、御後房、次兵庫頭申、內辨令擊、退、刀  
早速、、禰之鼓、此間執翳、威儀命婦、褰帳命婦等退下、次內  
辨立揖右廻、出自、帷西間、練步、去、朝、三、尺許練留、經、軒廊西  
二間、宣陽殿壇上、仙仁、敷政等門、退下、休幕、次殿上  
侍從、各經三本路、退下、次予退出、參新院御所、八條坊  
生二品、謁、女房、自、昨日、有、御灸治云々、七、所、典樂頭

定成候也云々、粗奏今日次第退出、  
今日參入公卿、除、禮服、

攝政、予、左大將、藤大納言、別當、堀川中納  
言、前源中納言、右宰相中將、實守、左兵衛督、

人々俳徊殿坤簀子、見今日儀式、各若、但予及左大將、

前源中納言等、初暨於殿東廂、見內辨作法、雖頗

無便宜、案大極殿儀、人々群立、罪角、壇上見之、

舊記雖替之、中、准、彼、者、此殿儀、可、停、立東階、上簀

子、雖然內辨帷其程甚近、直下了之條、非無所憚、

仍隱居東廂戶內、所伺見也、其後余交居右方執

翳之中、見物、是又雖不可、隨當時之便、左大將後

出來、於同所、見禮畢之儀也、

今日違例事、

一執翳女孺、空手着座事、

一二省丞入、自帷南面、給下名事、

大極殿儀、入、自帷西面、給之、紫宸殿之禮、何可

異哉、是內辨命云々、

一擊、召刀禰、鼓後、令開門事、

此事大違例也、古今未聞、後日大外記賴業云、內辨  
命也云々、

一宣命使練半分、不練半分事、

一自後房至高御座、筵道、不敷布單事、

一外辨公卿、不待退鼓退出事、

御裝束儀見指圖、(仍不委注之、)人々交名及裝

束、(尋官外記、藏人方、及左右近衛府生、以注

狀續加之、

外辨儀定能痴注送之

外辨幄

當鳥曹子南、南北行立之、東無幄、幄南二許丈

引幔、西折至幄巽角、東南有幔內南北行立上官

床子、弁座在前、其後設外記史座

剋限、二條大納言、新大納言、及定能等、入東幔門、經

上官座上、入幄東着元子、定能經床子下着之、不

經幾程、右衛門督經同路着之、隨身持胡笠市中此間近衛

者一人走來、申外辨上卿云、可令打裝鼓者、

上卿先以召使、被催皇太后宮大夫、左大辨等、早可

被着之由、此間遮擊鼓了遠式也、又上卿以召使

上官等、可着之由被相催、爰右少辨兼忠、不若禮服外

記史等、入南幔門着之、數刻之後、皇太后宮大

夫、取副宜命於旁左大辨等、入南幔門着之、依遲參歎、次

上卿喚召使、音二召使稱唯進立、上卿前召兵部省

歎、其詞不同、兵部丞橘經說參上進、被仰可擊

裝鼓之由、先是擊鼓了、頃之擊召鼓了之由、召使來

告、仍各起座、召使、前幔、次第步連經左兵衛陣與左衛

門陣間、當承明門東間、乍向西揖、北居折、皆悉如此

入同門東扉、列立標下、南庭事依御見不注進出承明門、於初

所揖、東折退下、三條大納言不揖之由、後日承之又親王代禮畢作法

了、未擊退鼓以前、外辨退出之條、雖不可然、一

人難留立候、仍退出候了者、

廿三日、乙天晴、借定能卿禮服、及玉佩等見之、冠同

藏人少輔經親來、催祈年穀奉幣上卿、申所勞之

由了、

廿四日、丙朝間小雨、已刻以後天晴、未刻、典樂頭定成

來、召前問醫道事、此次申新院御灸治之間事、申刻

定能卿來、今日相具山階寺禮服、參博陸返奉云

云、召使來二十七日可有國郡卜定、可參之由

催、右大將申所勞了、

廿五日、丁天晴、召宿曜師珍賀、問余慎之間事、又

自明後日、可始北斗供之由仰之、申刻右近廳頭

清景來云、騎射射手事、申年預將了、可申沙汰



之由、所被申也、又本府製料大糧米事、任例可申、沙汰之由、年預將被示、仍以解狀可申上云々、賴輔入道、所勞獲麟云々、

廿六日、戊申天晴、此日石清水臨時祭也、兼日無日次、

因之不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>試樂<sub>一</sub>、即應德例也、使三位中將賴實卿、舞人四位四人、五位四人、六位二人、此中一人新院判官代後

聞、攝政着<sub>二</sub>垣下座<sub>一</sub>有五獻、依<sub>二</sub>納言員少<sub>一</sub>五獻、勸盃參議家通卿勤之、重盃定能通親等卿役之云々、舞人左少將公守乘<sub>二</sub>揚馬<sub>一</sub>云々、

廿七日、己酉天晴、此日國郡卜定云々、晝之間小雨、

後聞、卜定上卿左大臣、〔執筆〕左宰相〔中將〕通親卿云々、定能卿依<sub>レ</sub>催、同以參入、然而依<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>、命<sub>二</sub>通親<sub>一</sub>書<sub>二</sub>定文<sub>一</sub>云々、近江國丹波國等云々、

廿八日、庚戌天晴、未刻參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、申刻、神心不例、歸宅忽企<sub>二</sub>湯治<sub>一</sub>、今日光盛參上、申<sub>二</sub>騎射之間事<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>書狀隨身等可<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>勤騎射<sub>一</sub>之由觸、攝政有<sub>二</sub>可<sub>一</sub>下知之報、

廿九日、辛亥天晴、午刻、廳頭清景來、申<sub>二</sub>射手散狀<sub>一</sub>、當時返奉十五人、進可<sub>レ</sub>催之由仰了、今日申刻上遊、三四條邊云々、廻廻忽起、發<sub>二</sub>屋折<sub>一</sub>木、人家多以吹損云々、又同時雷

鳴、七條高倉邊落云々、今日新文庫將來、依<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>置<sub>二</sub>始文書<sub>一</sub>、又白川邊雹降、又西山方同然云々、

### 五月

一日、壬子天晴、廳頭清景來、申<sub>二</sub>騎射之間事<sub>一</sub>、具手〔結〕日、隆房、實明、基範〔等〕、申<sub>二</sub>可<sub>一</sub>着行<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、荒手結日無<sub>二</sub>可<sub>一</sub>着將<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、猶觸<sub>二</sub>年預<sub>一</sub>可<sub>二</sub>相催<sub>一</sub>、且可<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>大將命<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>仰了、

二日、丑癸終日雨降、未刻、前大納言邦綱卿來、傳<sub>二</sub>新院仰<sub>一</sub>云、一昨日暴風、已爲<sub>二</sub>朝家大事<sub>一</sub>、御祈已下事何樣

可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行哉、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>者、內々語云、只今宗盛卿等候、即前、此事想未及、其沙汰、先念參可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>之由、余申云、先可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>例於<sub>一</sub>外記并天文道之輩、又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>也、隨<sub>二</sub>彼等之趣<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>御祈事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、異常謂<sub>レ</sub>恠、辻風雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>常事<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>有

如<sub>二</sub>今度之事<sub>一</sub>、仍尤可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>物怪<sub>一</sub>歟者、此次邦綱謂云、三井寺被<sub>レ</sub>召之輩、一人已出來、公顯僧正、獨進之殘四人未<sub>二</sub>出來<sub>一</sub>、件張本等、世間云々之上、本寺有<sub>二</sub>落書<sub>一</sub>、其狀如<sub>二</sub>云

〔云〕之說、仍就<sub>レ</sub>彼被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>張本<sub>一</sub>云々、三日、寅甲終日天陰雨下、但未申刻晴、自<sub>二</sub>本府<sub>一</sub>申云、荒多結射手、府官人已下、皆悉辭退、又爲<sub>二</sub>賜<sub>一</sub>物具、無<sub>二</sub>



〔可〕參之輩、爲之如何云々、即以御教書仰遣、年預爲〔隆〕房朝臣、及〔奉行職事親經等之許了、又〕院御隨身事、仰遣兼光〔之許了〕、又攝政隨身事、余以消息聞進了、各可被沙汰之由、有報狀等、今日、行膝、鞍、平胡籙、大路調進之、申刻、賴業真人來、語御卽位之間事、及一日暴風等之間事、午刻、法性寺座〔主〕被來、四日、乙天晴、此日右府府荒手結也、大將賜雜具於射手、依嘉保知足院殿初任、元永法性寺殿初任、應保、余初等例所行也、大將與女院同居、彼御所不能備私禮、非大又不能曹司又無便宜、仍早旦來余第、女院爲御覽、行此儀、已刻、雜具等皆悉調具之、支配所隔日、於前擇分上中下、此間奉行光盛、及役人等、大將方職、本等也、參入、午刻、射手等參集、院御隨身等、只今雖無領狀之者、今日重尋參否了之由、清景所申也、暨雖相待使者、未歸來、仍且懸裝束於寢殿坤〔子午〕廊前廣庇高欄、件屋上達部座也、其儀、先大將坐〔寢〕殿西第〔一〕間南面妻戶〔簾中〕、着直衣、其裝束無定、余密々居同所見之、〔同第二間以東出〕几帳、次大將召人、奉行家司光盛冠、衣參上、仰可懸裝束之由、光盛候座、右行事、次大將方職事、賴業、長俊、國行、〔奉〕等、各取鞍行膝等、懸高欄、以北爲行、藤樂茶〔勾當〕、

鞍不向北云々、仍向南、更取胡籙、倚立長押、初三反從之、懸之、其上懸行膝、隨〔身〕射手之見參、十一具懸之、此間院御隨身、參否未聞、猶暫雖相待、頗向夕陽、仍大將仰光盛、召射手等、次第給之、于時未、余隨身番長下毛野厚直、布衣冠帶、〔有〕二點也、其儀先官人之外、或不、秦兼武、兼成同小男、未給名、等給之、各先取行膝鞍等、左手取行膝、更歸參、職事取胡籙、乍居廣庇、自高欄上、傳給之、如賀茂諸、行裝束、隨身取之退下、余竊仰光盛云、先職事賜胡籙之後、其後隨身自取、鞍等得便、如何、然而光盛稱先例之由、仍余強不仰之、次大將番長秦兼重、帶劍同參上賜之、厚衣、次召大府官人下毛野武次、秦重房等、給之、武春申云、胡籙一度可行、上、取鞍前後退下、〔不〕尤有便之口、取、仍賜之、以胡籙、取行膝、持如、此、但〔納推〕兩人、持得取之、次召大將近衛下毛野〔武〕宗、武治、同厚〔文〕、厚助、中臣近行、故重武子、依幼少、更賜取、下毛野武〔依〕、師武等、賜之、次召府近衛中臣忠友賜之、他近衛、各賜訖、向馬場云々、者殘物具等沙汰給廳頭清景、後聞、清景申可、進人之由、不、數刻之後、于受取、退出云々、尤不厭、申、院番長播磨貞弘參來、遲參奇怪、雖須返遣、依爲院御隨身、更召前賜物具、役人等皆退出、仍布衣之衣冠、相交役之、今度信光只一人布衣也、貞弘一度取之退出、依衣冠之輩皆役之、今依兩如賜之、後聞貞弘申云、騎射雜具、於御前雖賜之、今持從、向馬場之例、全不候、府沙汰、官人皆請取之、於馬場、各所分賜也、仍密

〔之〕預待所司、他人雖不、然、依爲、院御隨身不執論云々、騎射物具、

鞍廿具、〔有〕力革、無下鞍、無文紺或用腹帶二筋手夾

二等也、不具、樹鞍等一也、

平胡繖廿膏、黑漆前後緒青革、胡繖立矢賦等、會矢九、

物、繖矢六、黑漆、有伏龍金物、繖機、各懸羽加カシト、九緒六尺、

熊皮行騰廿懸、一具別在小緒裏緒金物等、但調樣不同也、

亥刻、府生持來手結、少將基範一人、着〔行云々〕、加

封書名上字、大將披之、如本封之、但其〔端〕切、葉之、引墨返

給之、故實也、同刻、陰陽大允安倍泰〔茂〕來、行〔百〕恠

祭、於〔南庭〕、此次去廿九日、飄風事持〔占文〕、依爲〔希代

事〕續加之、兵有〔敗之占〕、尤有〔恐事歟〕、

四月廿九日、亥申時、飄風忽起、所過屋舍多以顛倒、

即成黃氣、如樓至天、其上有黑雲、右旋似蓋、又

雷鳴雹降、

乙巳占云、風者天地之號令、陰陽之所發、示休咎、動

章神教者也、

漢書天文志云、迅雷風妖怪雲變氣、此皆陰陽之精、其

本在地、而上發天者也、政失於此則變見於彼、猶

景之象形、卿之應聲、師古曰、卿、讀曰響、天地瑞祥志云、淮南子

曰、人主之精通于天、故誅暴則多飄風、翼氏曰、君任小人專權、則風觸地、土上也、又曰、廻風發屋折木、飛沙走石、軍有敗、又曰、廻風數起、臣迷君政、春秋緯曰、天亦有三大風、發屋折木、兵大起、京房曰、廻轉風〔入〕宮、人主慎之、太公曰、廻風暴起、營中欲發火、天地災記云、廻風入人室、飛人衣物、有驚恐凶事、師曠秘決云、疾風發屋折木、飛揚沙石、不出三年、五穀不豐、兵革縱橫、民出道路、京房易傳曰、雹下其狀如積氷、此臣欲凌上之象也、

天文決要齊類云、雹下雷俱降、人君科絕失可救之、鮮怨結、招儒士迎和氣而無害、災異占曰、夏雹下大旱、貴人多死、

宋書五行志云、晉元帝太寧三年四月大雨雹、是年帝惡、

治承四年五月四日 陰陽大允 安倍泰茂、

五日、辰午上天晴、及晚陰、自本府持來節供於大

將之許、一折數、先例云々、又昨日所給〔射手〕之雜具之

殘、今日自府進人所請取也、明日清景皆可請取也、

以太以懈怠、奇怪也、

六日、巳天晴、此日右近府眞手結也、未刻許、大將爲

見物、向馬場、乘藤宰相定能卿車、依爲密々儀、先

例召人車也、元永召宮內卿忠長朝臣車、即御車、公卿車先例雖不詳、案事理不可有其難、仍所用也、大將着冠直衣、與侍從良經同車、侍從着布衣、薄生單衣、流女院女房、及余女房、同以見物、女院御方三兩、紫奴袴、女院御方三兩、余方二兩、但無各別之儀、混合乘出車五兩、一車左中將兼通朝臣、二車左馬權用、依女院御也、頭宗雅、三車左少將兼宗、四車右兵衛權佐盛定、五車右衛門佐隆雅、一兩別共侍各二人、衛府、內舍人、瀧口、上日衆等相交、女院侍中衛府不足、仍余侍兩三箇加之、各出彩袖、樣々樣重也、但不若打衣、表着只裳唐衣許也、殿上人已下、君達諸大夫等、連車扈從、又大將共侍三人、左衛門尉經成、右衛門尉重代、路頭行列、先出車、女房見物之時、出車可在、大將車後、共人車、次大將軍、次殿上人等車、次諸大夫車、但諸大夫所前也、到馬場副上手埒、立置車、此時大將軍立北、其南出車及共人次第立並也、共諸大夫等、季長、行賴等朝臣已下、下車列、居大將軍邊、是元永例也、重仲朝臣已下、參御車邊云々、凡見物之輩車馬成市、皆立下手埒方云々、年預中將隆房朝臣、少將實明等着行之、嘉保、元永共次將二人所若行也、乘燭以前、事訖歸來、未有如此早速事訖例云々、今日有所勞之上、有所思不見物、嘉保、元永、荒手結日、殿下共同車御見物云々、但元永真手結不然也、馬場儀、傳聞記之、

先大將殿職事及下家司、次五位等、各交名、在、與、參、馬場、五位家司同參入、今度無可參之輩、仍只職事參入、次大將殿渡御、立御車於埒西、三、北、三、四丈程東西立之、左、近、馬、場、儀、當、三、的、立之、今、國、便、願、立、上、之、御、車、頭、木、可、懸、埒、之、由、頭、頭、清、景、令、中、然、而、被、立、相、也、云々、諸大夫等、列居御車左右、御車南立一許丈、立出車五兩、其南立御共人車、已上、午、懸、牛、立、之、次中將隆房朝臣、少將實明等參入、昇自乙殿屋南沓脫着座、隆房當第二間、着、與、座、實明當第三間、着、端、座、次將曹清景、頭指笏、持參射手交名、納、并、口、祝、宮、等、置少將實明前、次將曹中臣近武、年、預、着、座、稱、衣、襖、袴、帶、次本府居、官、人、役、送、朱、漆、高、杯、次大將殿職事著座、次射手揚馬、次第不同、先例、大、府、上、之、殿、府生下毛野武春、秦重房、同兼仲、番長播磨貞弘、院、下毛野敦直、右大臣殿、秦兼重、大將殿、同恒久、同公次、近衛秦兼秋、院、同兼茂、右大臣殿、同兼助、同、小、男、是、也、下毛野武宗、大將殿、下野厚文、同、中臣近行、同、下毛野敦久、同、同武依、同、中臣忠友、



下毛野厚近、

將監中原資清、

已上廿人揚之、右大臣殿、大將殿等、御隨身各賜

御廐馬一上之、

嘉保十八人揚之、其後左右近(衛)騎射未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>

廿人之例、今度如此、人以爲<sub>二</sub>奇代<sub>一</sub>云々、

次射手等多申<sub>レ</sub>障、

各解<sub>二</sub>胡錄、劍、行騰等上結<sub>一</sub>、跪<sub>二</sub>乙殿屋東庭<sub>一</sub>申<sub>レ</sub>之、

隨<sub>二</sub>年預將命<sub>一</sub>退入、<sub>レ</sub>一切不被免

次立<sub>レ</sub>的、<sub>レ</sub>院御隨身、先例不<sub>レ</sub>懸

一、的右大臣殿御隨身、<sub>レ</sub>近衛泰兼茂立<sub>レ</sub>中、

二、的大將殿御隨身、<sub>レ</sub>近衛下毛野敦直懸<sub>レ</sub>的、

三、的本府番長役<sub>レ</sub>之、

今日關白隨身不<sub>レ</sub>參、縱雖<sub>レ</sub>參不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>之、自<sub>レ</sub>下

可<sub>レ</sub>勘仕<sub>レ</sub>之故也云々、<sub>レ</sub>清景申<sub>二</sub>此由、案<sub>一</sub>事理、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、

時、可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>府者歟、

次持<sub>レ</sub>簡府生、出<sub>二</sub>居胡床<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>乙殿屋北方、

此間隆房朝臣加<sub>二</sub>着端座<sub>一</sub>、

次各射<sub>レ</sub>之、<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>射之眾十三人、而十一人射了、

武春、兼仲、兼秋、院、恒久、<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>一<sub>一</sub>的上落馬、

敦直、<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>一二<sub>一</sub>的、<sub>レ</sub>重房、<sub>レ</sub>武宗、<sub>レ</sub>乍<sub>二</sub>三<sub>一</sub>的、<sub>レ</sub>敦文、落馬、

兼茂、<sub>レ</sub>忠友、<sub>レ</sub>敦近、

此間大將殿還御、<sub>レ</sub>于<sub>二</sub>時日未<sub>一</sub>

次舞<sub>レ</sub>求子、<sub>レ</sub>府者六人立<sub>レ</sub>之、<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>射手等立<sub>一</sub>也、<sub>レ</sub>而或早出、或又雖<sub>レ</sub>候不

次物音、

此間本家居<sub>二</sub>穩座<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>之<sub>一</sub>林歌、

次五位四人、<sub>レ</sub>貞光、重基、役<sub>レ</sub>之、

次一獻、<sub>レ</sub>上野守賴高勳<sub>レ</sub>之、<sub>レ</sub>當座上

次二獻、<sub>レ</sub>兼親取<sub>レ</sub>盃進出之間、<sub>レ</sub>次將示<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>

次々將祿、<sub>レ</sub>各白大掛一領、<sub>レ</sub>兼親國行

六丈絹十五疋、麻布百段、<sub>レ</sub>已上員數

了、清景請<sub>二</sub>取之<sub>一</sub>云々、

六七番射之間、<sub>レ</sub>闕諍出來、<sub>レ</sub>然而無<sub>レ</sub>程和平、<sub>レ</sub>其後四五番

射了還御、不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>事訖<sub>一</sub>、元永記云、<sub>レ</sub>半訖程還御(云々)、

乙殿屋鋪設、年預近武沙汰云々、<sub>レ</sub>又有<sub>二</sub>射手平張<sub>一</sub>、本

府沙汰也、

後聞左大將被<sub>二</sub>見物<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>諸大夫一兩列<sub>二</sub>居車邊<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>殊不<sub>レ</sub>被

忽云々、<sub>レ</sub>左大將見<sub>二</sub>右近衛射<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>時人定有<sub>二</sub>咩言<sub>一</sub>歟、<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>

密々者更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>憚、<sub>レ</sub>頗顯現之條、<sub>レ</sub>可有<sub>二</sub>用心<sub>一</sub>歟、

又院右番長播磨貞弘、與<sub>二</sub>同下薦秦清景<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>兼清、聊口論、



稱國爵  
即是也、其間大將番長兼重、清景兄、頗有<sub>二</sub>加言<sub>一</sub>云々、太以  
奇怪、然而不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>云々、  
今日御共人々、

前皇后宮亮季經朝臣、  
中務權大輔經家朝臣、

右馬權頭基輔朝臣、  
左馬權頭宗雅、

前讚岐守重季、  
治部大輔季經、

右少辨兼忠、  
宮內權大輔親綱、

右兵衛佐親能、  
少納言仲家、

治部卿顯信朝臣、  
右兵衛權佐盛定等、雖<sub>レ</sub>領<sub>二</sub>

〔御〕狀、臨<sub>レ</sub>期故障出來不<sub>レ</sub>參、

前和泉守季長朝臣、  
大宮前大進行賴朝臣、

前皇太后宮大進季廣、  
筑前守貞俊、

散位保行、  
散位信光、

左馬助正綱、  
對馬守親光、

散位仲資、

參<sub>二</sub>馬場<sub>一</sub>輩、

職事、

上野守賴高、  
散位兼親、

前豐前守能業、奉行、  
左馬權助國行、

但馬權守長俊、

下家司、

親弘、

次五位、

貞光、重基、貞親、盛俊、忠廣、

立<sub>二</sub>求子<sub>一</sub>輩、皆府者也、

刑部友員、伴國延、安部定行、

藤井氏安、物部友次、藤井國兼、

吹<sub>二</sub>物音<sub>一</sub>樂人、

拍子、府生三宅守正、笙、府生豐原行元、

筆簞、府生安部季遠、

出車前駟侍、

一車、左兵衛尉忠久、內舍人定景、

二車、右兵衛尉重行、瀧口能時、

三車、右馬允成行、武者所重滿、於女院被<sub>レ</sub>准百官仍在瀧口上、

四車、右馬允保憲、瀧口友弘、

五車、內舍人親資、女院上日衆信親、

射手、御共侍、進<sub>二</sub>出車<sub>一</sub>人〔々〕、

已上交名見<sub>レ</sub>端、

七日、戊午天晴、早旦召<sub>二</sub>兼重<sub>一</sub>問<sub>二</sub>昨日鬭諍事<sub>一</sub>、申刻右中

辨兼光朝臣來、依<sub>二</sub>昨日召<sub>一</sub>也、即付<sub>二</sub>件朝臣<sub>一</sub>召<sub>二</sub>進兼

重於院、與院御隨身有口論之聞、爲謝其恐也、數刻之後、歸來傳仰云、如聞食者、件男無殊過怠、不及被召問、又私不可及、勘當、只誠將來可足者、然而賜既了、件男誠雖無重犯、交喧嘩之中、太〔以〕奇怪、仍殊所加勘責也、院御隨身等、兼平、兼次、清景、明日可被召問云々、今日定能卿來、語臨時祭之間事、參女院御方、少時歸來、八日、己未、天晴、今日召院御隨身等、兼平、兼次、被問〔一〕昨日鬪諍事、清景召籠、兼平、兼次誠將來、被免遣云々、

九日、庚申、天晴、參女院御方、入夜歸來、兼房卿同參女院、自去夜左兵衛督知盛所勞、萬死一生、頗物狂云々、

十日、辛酉、天晴、今曉入道相國入洛、武士滿洛中、世間又物忿云々、今曉有夢想事、

十一日、壬戌、天晴、午刻、佛嚴聖人來、未刻參女院御方、入夜歸來、賴業送廻飄勘文章、依先日仰也、

十二日、癸亥、天晴、申刻以後頗陰然、而雨不下、近日有旱魃之愁云々、知盛卿平滅云々、昨日禪門下向丁云云、今日召兼清子男、賜扇二枚、又付名、助、自今

日七ヶ日、請二口僧修仁王講、又可奉轉讀同經百部也、

十三日、甲子、雨降、參女院御方、及晚歸來、此雨天下爲悅云々、傳聞法皇可渡御京中云々、

十四日、乙丑、雨下陰晴不定、依召參女院御方、即歸來、戌刻、鳥羽法皇出御京、以內藏頭季能朝臣家爲御所云々、乘八葉御車、扈從車二兩、武士三百騎許、圍繞前後左右云々、昨今風病上咳氣相加、頗以不快、

十五日、丙寅、天晴、新院有御馬御覽、其中一疋、以御隨身番長爲使、被遣攝政之許云々、臨昏之間、京中鼓騷、山大衆下洛之由風聞、但無其實云々、今夜三條高倉宮院第配流云々、件宮八條女院御猶子也、此外、縱橫之說雖多、難取信、自今日余咳病殊增、溫氣出來、

十六日、丁卯、陰晴不定、及晚小雨、隆職宿禰、注送三條宮配流事、其狀如此、

源以光、本御名以仁、忽賜姓改名云々、

宜處遠流、早令追出幾外、

高倉宮配流事、被仰下之狀如此、但不被作官

府者、配流人不<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>官府<sub>一</sub>何例哉、然者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>上卿<sub>一</sub>也、

始維光王可<sub>レ</sub>配<sub>二</sub>土左國<sub>一</sub>之由、宣下云々、而後被<sub>二</sub>改仰<sub>一</sub>歟、只今奉行史申旨如<sub>レ</sub>此云々、

傳聞高倉宮、去夜檢非違使未<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>以前、竊逃去

向<sub>二</sub>三井寺<sub>一</sub>、彼寺衆徒守護可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>將登<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>山、兩寺

大衆可<sub>レ</sub>企<sub>二</sub>謀叛<sub>一</sub>云々、又件宮子若宮、候<sub>二</sub>八條院<sub>一</sub>之女、時女院被<sub>二</sub>養育<sub>一</sub>、即<sub>二</sub>其宮中<sub>一</sub>、逐電之由有<sub>二</sub>其聞<sub>一</sub>、仍武士等打<sub>二</sub>圍彼

女院御所、搜<sub>二</sub>求其中<sub>一</sub>、先<sub>レ</sub>是於<sub>二</sub>女院御一身<sub>一</sub>者、奉

出<sub>二</sub>賴盛卿家<sub>一</sub>即件卿妻、上奉<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>、了者、即件若宮、奉<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>出女

院、還御云々、素被<sub>二</sub>隱置<sub>一</sub>、太以愚歟、愚意案<sub>レ</sub>之、我國

之安否只在<sub>二</sub>于此時<sub>一</sub>歟、伊勢太神宮、正八幡宮、春日

大明神、定有<sub>二</sub>神慮之御計<sub>一</sub>歟、於<sub>二</sub>一身<sub>一</sub>者、中心無

過、所<sub>レ</sub>憑只佛神三寶而已、後聞、八條院渡<sub>二</sub>御他所<sub>一</sub>

謬說也、乍<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>女院、賴盛卿父子參入、不<sub>レ</sub>殘<sub>二</sub>一

所、令<sub>二</sub>搜求<sub>一</sub>云々、

十七日、戊辰天晴、傳聞昨日已刻許、八條宮、圓惠法親、王是也、以<sub>二</sub>

使者、示<sub>二</sub>宗盛時忠等卿<sub>一</sub>云々、高倉宮所<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>、三井

寺、平等院也、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>出<sub>一</sub>京之由、所<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>也云々者、因

茲時忠卿、爲<sub>二</sub>彼御迎<sub>一</sub>進<sub>レ</sub>人、內匠助某、實名可<sub>レ</sub>尋、又宗盛卿武

士五十騎許着<sub>二</sub>副彼使<sub>一</sub>遣<sub>レ</sub>之、即八條宮下法師原三人

相<sub>二</sub>具之<sub>一</sub>、秉燭首途、子刻到<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>、但不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>寺中<sub>一</sub>、群

集小關外、先以示<sub>レ</sub>證之、下法師達參<sub>二</sub>御迎<sub>一</sub>之狀、即歸

來云、今日日沒以前、大衆卅人許相率、渡<sub>二</sub>御京御所<sub>一</sub>

畢、早可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>歸<sub>一</sub>云々、仍別當使并武士等、參<sub>二</sub>八條宮<sub>一</sub>、

先申<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>、宮被<sub>レ</sub>答云、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>出洛<sub>一</sub>之由、衆徒相議所

申也、而忽思變、已凶徒等切<sub>二</sub>我房<sub>一</sub>了、其事無<sub>レ</sub>隱、於

今者非<sub>二</sub>力之所<sub>一</sub>及、自<sub>レ</sub>上任<sub>二</sub>法可<sub>一</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、

聞<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>示<sub>二</sub>事之次第<sub>一</sub>於<sub>二</sub>宗盛、時忠等卿<sub>一</sub>、其後重沙汰

之趣不<sub>レ</sub>聞、大略武士之卑陋、不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>言事歟<sub>一</sub>、凡昨日

朝、彼宮逐電之由、聞進至<sub>二</sub>福原<sub>一</sub>了、其使今日可<sub>レ</sub>歸

京、其後每事、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云々、以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>邦綱

卿之許、昨今依<sub>二</sub>所勞<sub>一</sub>于<sub>二</sub>今不<sub>一</sub>參院、爲<sub>レ</sub>謝<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>也、

其次示<sub>二</sub>送云<sub>一</sub>、高倉宮登山、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>籠無動寺<sub>一</sub>之

由風聞、仍被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>彼山、檢<sub>二</sub>校七宮<sub>一</sub>之處、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>與

力<sub>一</sub>之由、件寺住侶等、進<sub>二</sub>請文<sub>一</sub>了、仍七宮之邊、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>

有<sub>二</sub>殊恐<sub>一</sub>云々、武者云、散<sub>二</sub>在于諸國<sub>一</sub>之源氏末胤等、

多以爲<sub>二</sub>高倉宮之方人<sub>一</sub>、又近江國武勇之輩、同以與<sub>レ</sub>之

云々、凡此間巷說縱橫真偽難<sub>レ</sub>云、

十八日、已雨下、雖<sub>二</sub>所惱不<sub>一</sub>輕、爲<sub>レ</sub>謝<sub>二</sub>不忠之恐<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>

新院、上皇出御、若御即小直衣小袴等龍顏憔悴、氣力衰給、去冬以來、御腦無隙、雖非重積旬月之間、筋力疲給歟、尤不便、今日遣門徒僧綱於三井寺等、申其左右云々、隆季、時忠等卿參上、頃之余退出、其後神心彌惱、

十九日、庚午雨下、傳聞、昨日所被遣蘭城寺之僧綱之中、房覺僧正一人去夜歸洛、他僧綱等不出京云々彼宮猶不可奉出之由、大衆申切了、凶徒七十人許、其中律上房尊上房、此兩人爲張本云々、此由今日奏院云々、山門不可與力之由、頻被抑制、仍如只今不然云々、但東光房珍慶一類、猶可與力由云云、或說蘭城寺牒送南都云々、此條未聞一定、又八條宮、可被付使廳使云々、今日物忌也、

廿日、辛未雨下、人傳云、所留守之僧綱、示子細於衆徒、有識二人并房官等被相副云々各可奉出宮之由承諾、仍昨日八條宮爲御迎被進人、就彼宮在所、欲奉出之處、宮作色云、汝欲搦我、更不可惡手云々、爰着甲冑、惡僧七八人出來、追散彼有識已下、殆及凌礫云々、仍空以歸洛、事體不可叶僧綱等之制止云々、又云、在京武士等、懼悚無極云々、昨今物

忌也、

廿一日、壬申朝間天晴、午後雨下、今日可攻蘭城寺之由、被仰武士等、明後日可發向云々、前大將宗盛卿已下十人、所謂大將、賴盛、教盛、經盛、知盛等卿、維盛、資盛、清經等朝臣、重衡朝臣、賴政入道等云々、人語云、大衆一同不可奉出之由、議定早了、宮曰、衆徒縱雖放我於此地、可終命、更不可入人手云々、意氣無衰損、太以申云々、見者莫不感歎云々、此間親昵彼宮之輩、及雖一度參入之人知音等、併被尋搜、人多可損亡云々、但於余者、雖無此恐者也、佛天可有知見歟、蘭城寺佛法滅盡時至歟、可悲々々、但又所詮可依人之運報歟、不若免非道之橫災、不顯怨得病死、末代之人以之可爲望歟、自今夜請智詮阿闍梨、奉始不動供、

廿二日、癸酉雨下、時々天晴、去夜半賴政入道引率子息等、正綱、宗賴不相伴參籠三井寺、已天下大事歟、余尋聞此事、相扶病參院、今夕行幸于當時之院御所、院渡御八條御所云々、攝政被參、即被參內了、其後上皇出御、被仰天下事等、又謁女房若斯、歎息無極



歟、小時余退出之間、邦綱卿於門下、令見消息一通、予披之、處、山大衆三百餘人與力了之由、山僧之消息也、驚思無極、即余退出、入夜自南都一人來云、奈良大衆蜂起、已欲上洛云々、者不能左右、又前將軍以下、京中武士等、偏以恐怖、運家中雜物、令逃女人等、大略可逃降之支度歟、太不吉之想也、〔疑〕彼一門、其運滅盡之期歟、但王化不空、深可憑歟、抑今日行幸、日次不宜、尤以不審、今日滅日也、過今夜明曉宜歟、如何々々、

廿三日、戊天晴、申刻、源納言來、談世上事、官兵引率洛中諸人、可下向福原之由、近日誕奇、即可有行幸御幸、不殘一人、可被相具之由云々、南都大衆來廿六日可入京之由風聞、〔凡世間之事、〕非直也事歟、不過之者、只仰天道、憑神明、信三寶、凝謹慎許歟、

廿四日、乙陰晴不定、後夜室家爲余見最吉夢、又覺乘得業、先日仰付祈爲知生涯之吉凶也、今日送書稿告云、先日御祈事、可成就之由、夢想之告候也云々、依恐路次之落失、不載子細、人傳云、南都衆徒、可寄貴前將軍家云々、仍彼家中大騷云々、

定能卿來、談世上事、

廿五日、丙陰晴不定、昨日座主登山、山僧可攻三井寺之由、爲相語云々、過半有承諾之由風聞、參女院御方、禪門明日可上洛之由云々、去廿三四兩日、或女房爲余見吉夢云々、

廿六日、丁天晴、入夜雨下、卯一點人告云、奈良大衆已上洛云々、又云、衆徒僻事也、坐三井寺宮、賴政入道相共、去夜半許、逃去向南都、依得其告、武士等追攻云々、至于辰時、其說縱橫、未有一定、已刻、余着直衣、參上皇宮、八條坊門大宮、口米御所依爲內裏、去廿二日所渡御此亭也、先是公卿五六人參候、余直參御所、上皇出御、先內々以女房被尋仰云、蘭城興福兩寺衆徒、巧謀叛危國家、仍未寺莊園併可停廢歟如何、余申云、於今者偏謀反之地也、左右只在勅定、但事已大事也、一身難計、早可尋問參入之卿、又可被召遣左大臣歟者、仰云尤可然、又可遣召左府云々、午刻、檢非違使季貞爲前大將使參院、時忠卿相逢、申云、賴政黨類併誅殺了、切彼入道、兼綱并郎徒十餘人首了、於宮者儘雖不見其首、同伐得了、其次第寅刻許、得逃者之告、即檢非違使景高、飛騨守景家嫡男、同忠綱、上總守忠清一男、

等已下、士卒三百餘騎逐責之、于時敵軍等於宇治平等院、羞喰之間也、依引宇治川橋、忠清已下十七騎、先打入、河水敢無深、遂得渡、暨合戰之間、官軍不得進、得其隙引而降去、官軍猶追之、於綺河原、打取賴政入道、兼綱等了、其間彼是死者太多、蒙疵之輩、不可勝計、敵軍僅五十餘騎、皆以不願死、敢無乞生之色、甚以甲也云々、其中無廻兼綱之矢前之者、宛如八幡太郎云々、小時平等院執行良俊、奉使者申云、殿上廊內、自殺之者三人相殘、其中具有無首之者一人、疑者宮歟云々、王化猶不墮地、逆賊遂被擒殺了、非雷王化之不空、又是入道相國之運報也、可恐々々、未刻、左大臣參入、暨而重衡、維盛等朝臣、重衡乍着甲胃參上、侯御前、像語申戰場之子細、件兩人先會合大將之家、景高等寄向之後、猶可分遣大將軍一兩之由議定、欲奏事由之間、此兩人無左右馳向之間、於一坂之邊、見敵軍之首等、相共歸來云々、此後數刻、女房又來云、兩寺事猶如何、余申云、於今者如風聞得勝了、兩寺末寺庄園、不可及停廢、所以何者、依僧徒之凶惡、沒官社寺之所領、於理不可然、只可被懲肅惡徒也、

今日入道相國、可致上洛云々、其後每事可有議定歟、是內々所申也者、良久、明日可有定、已刻可參入之由、被仰下、又行隆仰、左大臣已下人々、皆悉退出、余同退出、參女院御方、申子細歸宅、自今夜大將聊所腦、

廿七日、寅朝間雨下、辰刻以後天晴、此日於院殿上、被定兩寺凶徒罪科之趣、余着直衣參上皇宮、今日於官廳、被行百座仁王會云々、而余不知此事者、以直衣、先是左大臣已下、皆以着束帶、仍余密參御所了、女房奏云、今日仁王會之由不知給之間、院殿上定、先例多直衣也、仍存其旨參入、而人々皆着束帶、一身上着直衣候座、非無事憚、須退出改裝束之處、時刻可推移、可然之輩、多以參候、微臣獨雖不預其議、有何妨哉、但可隨御定者、被仰、暨可候之由、此間經時刻、前大將宗盛、大納言隆季、邦綱、別當時忠等候御前、有內議歟、隆季卿着上達部座之後、藏人左少辨行隆進寄、仰左大臣、其詞不聞及、大臣竊被尋余歟、隆季卿云、依直衣申可憚之由、不可被着座歟云々、候御前之間聞及歟、抑申可隨御定之由、而無其仰、仍不參重仰之大臣云、納言猶以無憚、何況問、不能進者也、大臣云、納言猶以無憚、何況大臣哉、乍參入爭不被候座哉、事已大事也、尤可

預議、早可申可有<sub>二</sub>着座<sub>一</sub>之由者、即行隆來<sub>二</sub>簾下<sub>一</sub>、催可<sub>二</sub>着座<sub>一</sub>之由、余云取<sub>二</sub>御氣色<sub>一</sub>之處、不承<sub>二</sub>重仰<sub>一</sub>之間、所遲々也者、爰以女房被<sub>二</sub>仰<sub>一</sub>、早可<sub>二</sub>着座<sub>一</sub>之由、仍余即着座、與第一座也、左大臣素候<sub>二</sub>端座<sub>一</sub>、先是他公卿等皆悉着座已了、余問<sub>二</sub>仰詞於左大臣<sub>一</sub>、々々示云、源以光巧<sub>二</sub>謀叛<sub>一</sub>、逃<sub>二</sub>籠蘭城寺<sub>一</sub>、彼寺凶徒同意之間、避其所<sub>二</sub>赴<sub>一</sub>南都、興福寺惡徒又以與力、未遂<sub>二</sub>前途<sub>一</sub>之於路次、雖誅<sub>二</sub>殺賴政<sub>一</sub>入道以下軍兵等、彼以光漏<sub>二</sub>其內<sub>一</sub>歟、世之所疑、若移<sub>二</sub>住南都<sub>一</sub>歟、但此條不<sub>二</sub>分明<sub>一</sub>者、彼兩寺衆徒謀叛事、何樣可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>計行<sub>二</sub>哉者<sub>一</sub>、即大臣見<sub>二</sub>遣座下<sub>一</sub>、仰可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>定申<sub>一</sub>之由、左宰相中將通親朝臣發<sub>二</sub>語<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>下薦<sub>一</sub>定申如<sub>二</sub>恒<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>條之詞<sub>一</sub>、或爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>蘭城、或爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>興福、案<sub>二</sub>事理<sub>一</sub>須<sub>二</sub>依<sub>一</sub>寺之次第也、仍余爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>興福、左大臣同<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、各定申趣、不<sub>二</sub>查<sub>一</sub>之、如此之定式、職事注<sub>二</sub>折紙<sub>一</sub>、今日不<sub>二</sub>然<sub>一</sub>、通親發<sub>二</sub>語申云<sub>一</sub>、蘭城寺事、如<sub>二</sub>風聞<sub>一</sub>者、衆徒退散云々、付<sub>二</sub>師主緣者等<sub>一</sub>、尋<sub>二</sub>召張本<sub>一</sub>、可有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>者、興福寺事、與<sub>二</sub>謀反之賊<sub>一</sub>同意、其罪不<sub>二</sub>輕<sub>一</sub>、何況其人移住哉、早遣<sub>二</sub>官軍<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>攻<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>、其上末寺庄園、併可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>停廢者、實宗卿申云、

蘭城寺事同<sub>二</sub>之歟<sub>一</sub>、雖不<sub>二</sub>興福寺事<sub>一</sub>、須<sub>二</sub>被<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>也、但一宗磨滅之條、可有<sub>二</sub>思慮<sub>一</sub>、仍先可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>召<sub>二</sub>張本<sub>一</sub>、惜申之時、可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>官軍<sub>一</sub>歟、賴定、實守、實家、朝方、雅賴、忠親、宗家、實房、已上八人同<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、隆季卿申云、

蘭城寺事、召<sub>二</sub>張本<sub>一</sub>可有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、就<sub>二</sub>中日來被<sub>一</sub>召置之輩候云々、被<sub>二</sub>尋<sub>一</sub>次第無<sub>二</sub>其隱<sub>一</sub>歟、早付<sub>二</sub>後輩<sub>一</sub>尋<sub>二</sub>與力張本之輩<sub>一</sub>、可有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>歟、興福寺事、日來再三經<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>了、而凌<sub>二</sub>礫長者使<sub>一</sub>、氏院有官別當已下、及<sub>二</sub>恥辱<sub>一</sub>、謀反非<sub>一</sub>、罪科惟重、加之、於今者一切不<sub>二</sub>拘<sub>一</sub>於制止、任<sub>二</sub>法可<sub>一</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由、別當權別當共所<sub>二</sub>申也<sub>一</sub>、其上不可<sub>二</sub>及<sub>一</sub>異議<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、然者若可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>追討<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>片時<sub>一</sub>可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>忿遣<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、彼寺兵強之地<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、徒經<sub>二</sub>日數<sub>一</sub>、定其勢萬倍者歟、所謂從<sub>二</sub>賢而遲<sub>一</sub>、不如<sub>二</sub>愚而速<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>之思<sub>一</sub>之、必可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>忿追討<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、此上事可<sub>二</sub>在<sub>一</sub>勅定、余申云、

蘭城寺事、同<sub>二</sub>帥大納言定<sub>一</sub>事、興福寺事、與<sub>二</sub>力於逆賊<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>危<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>、凌<sub>二</sub>礫長者之使<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>通<sub>一</sub>往反之



路、謀反之至、罪涉<sub>二</sub>絞斬<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>追討使<sub>一</sub>之條、尤可<sub>レ</sub>然、但以<sub>二</sub>宣旨若院宣<sub>一</sub>、一旦可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>歟、所以何者、若被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>者、社寺悉可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>灰燼<sub>一</sub>、一宗之磨滅更不可<sub>レ</sub>疑、縱雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>宣旨請文<sub>一</sub>、追討歸其使、經<sub>二</sub>次第之沙汰<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>官軍<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>後鑒<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>宜歟、爲<sub>レ</sub>分表佛法亡滅之條、有<sub>二</sub>御思慮<sub>一</sub>之由也、何況源以光、移<sub>レ</sub>住彼寺之條、未<sub>二</sub>分明者<sub>一</sub>、只依<sub>二</sub>同意之過意<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>滿寺之破亡<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>追討使<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>攻敗<sub>一</sub>者、更非<sub>二</sub>此限<sub>一</sub>、若依<sub>二</sub>賊徒之在否<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>追討之有無<sub>一</sub>者、聞<sub>二</sub>食彼之左右<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>進退<sub>一</sub>歟、是理之所<sub>レ</sub>致也、縱塞<sub>二</sub>路次<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>妨<sub>二</sub>往反<sub>一</sub>、彼人慥於<sub>二</sub>逃籠<sub>一</sub>者、爭不<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>其趣<sub>一</sub>哉、謀叛者凶惡徒黨之所<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>然也、滿寺僧綱以下、併不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>與事歟、今朝之間、自有<sub>二</sub>所<sub>一</sub>風聞歟、今日遣<sub>二</sub>使者者<sub>一</sub>、明日午上可<sub>レ</sub>歸洛、其後被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>、敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>、仍先被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>使<sub>一</sub>、隨<sub>二</sub>其趣<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>追討之沙汰<sub>一</sub>者歟、此上宜<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>聖斷<sub>一</sub>者、

左大臣同<sub>二</sub>余申狀<sub>一</sub>、但此上雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>申旨等<sub>一</sub>、意趣不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之、仍重不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>記錄<sub>一</sub>、爰隆季卿重申云、各議定之上、委披<sub>二</sub>露沙汰之趣<sub>一</sub>、重可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>評定<sub>一</sub>之由、內々御氣

色所<sub>レ</sub>候也、凡此事條々、委細有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>口不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶<sub>一</sub>之由、玄緣、藏俊等申切了、仍何故可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>使哉<sub>一</sub>、此條一切不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>候事也、縱遣<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>、通<sub>二</sub>何路<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>誰人<sub>一</sub>哉、勿論云々者、忠親聞<sub>二</sub>此語<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>行隆<sub>一</sub>云、昨日事以後、猶塞<sub>二</sub>其路<sub>一</sub>、又追<sub>二</sub>歸御使<sub>一</sub>歟如何、行隆申云、不然、此事等、皆昨日以前事也云々、隆季重云、此條無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>據事也、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>昨日之前後<sub>一</sub>、謀叛之由申切了、於<sub>レ</sub>今者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、更不能<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>云々、者先可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>宣旨院宣<sub>一</sub>歟之由、余所<sub>レ</sub>申出也、而隆季不<sub>レ</sub>甘心、殆欲不<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>天聽<sub>一</sub>、緯甚非常、偏守<sub>二</sub>形勢<sub>一</sub>、不知<sub>二</sub>王法破滅<sub>一</sub>、強稱<sub>二</sub>此子細<sub>一</sub>、極以奇恠、仍余作<sub>二</sub>色云<sub>一</sub>、昨日事以後、衆徒之心、爭不<sub>レ</sub>變哉、彼宮移住之由、縱雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其疑<sub>一</sub>、一旦可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>聞子細<sub>一</sub>也、何況其條已不<sub>二</sub>分明<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>彼之在否<sub>一</sub>、暗被<sub>二</sub>追捕之條<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>思慮之所<sub>一</sub>及、只爲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>磨<sub>二</sub>滅法相<sub>一</sub>一宗<sub>一</sub>歟、是又何益哉者、左相同稱<sub>二</sub>此趣<sub>一</sub>、隆季有不<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>之色<sub>一</sub>、即行隆參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>、奏<sub>二</sub>議定之趣<sub>一</sub>、奏聞之後、示<sub>二</sub>歸來云<sub>一</sub>、各暫可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>候、彼宮被<sub>レ</sub>誅伐之由、只今自<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>長者<sub>一</sub>也、猶有<sub>二</sub>不審事等<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>相尋之間也云々、爰左相府目余咲云、塞<sub>二</sub>往還之路<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>通<sub>二</sub>音信<sub>一</sub>之由承之處、今言<sub>二</sub>上此趣<sub>一</sub>如此、



就之案之、彌不知逃隱之實否、被發軍兵之條、可謂庶天大亂者歟、隆季不言、行隆歸參了、數刻之後來、仰左大臣云、園城寺事、付被召置之惡徒、且尋搜張本、可有沙汰、與福寺事、任兩丞相定申狀、先遣使者、且仰謀叛之子細、尋以光之在否、隨狀可被遣官軍者、即左大臣以下退出了、余參御所見參之後退出、參女院御方、大將猶不快云云、次歸家、今日定隆季通親等申狀、可謂不知耻、可彈指々々、只(察)權門之素意、不知朝家之巨害、雖然已不被用其申狀、可嘲々々、今日參入公卿、

左大臣、余、

大納言、隆季、實房、宗家、

中納言、忠親、雅賴、(前官、然而被免本座宣旨了、)

參議、實守、賴定、實宗、

今日仁王會未竟、有伐得彼宮之聞、法驗不空、彼天慶將門、夕講未終之間、得斬首之告、經仁之功、古今所同、以可貴々々、

廿八日、己天陰雨下、爲見大將所勞、女房參女院御方、余同參入、入夜共歸來、未刻、大夫史隆職來、召前

談雜事、持來紫宸殿即位指圖、又談世上事等、廿九日、庚天晴、今日物忌也、

卅日、辛天晴、大將新修泰山府君祭、未刻、邦綱卿告送云、來月三日、可有行幸于福原、上西門院同可渡

御之由有其聞、仰天之外無他云々、申刻、大外記賴業、同示送此由、又晚頭行隆示送云、三日行幸、忽被縮二日了云々、凡非言語之所及、留京洛之輩、併以可恐(事)也、公卿僅兩三人、殿上人四五人許、可候御共云々、天狗之所爲、實非直事、生合亂世、見如此之事、可悲宿業也、昨今物忌也、今夜被行

勳功賞、僧事等、刑部丞藤爲家、忠清、功賞、左衛門尉藤光安、景家、右衛門尉藤景康、忠清、讓、左兵衛尉藤忠光、

□□□藤則綱、景高、右兵衛尉藤友綱、同、從三位平清宗、前右大將追討源以光、并賴政法師已下、從五位下藤景高、使如元、追討、賴政法師、同忠綱、使如元、追討、討以光、賞、

又被行僧事、權大僧都良弘、轉法輪法賞、權少僧都實海、五壇法賞、權律師勝遍、同兼慶讓、

東〔大〕寺修造事、中壇請喜、全玄、覺成、追可、申請、申請、以權少僧都實全、天台本房、妙法房寄進中宮御祈願所、置阿闍梨三口、

### 治承四年夏下 歲次庚子

#### 六月〔小〕

一日、壬午〔天〕晴、午刻參院、明曉、福原遷幸、行幸、及兩院御幸云々、已以一定云々、余以使者、問可參福原哉否於入道相國、報云、無可寄宿〔之〕所、仍忽不可參、追自彼可申案內云々、先是、昨日候上皇之招客之處、仰云、參御共之輩、偏以禪門之左右也、一切不〔被〕仰、是非、只聞食許也云々、仍所問也、今日、於院謁邦綱卿、其顔色頗有怖畏之色、歟、今日大將所惱頗宜〔云々〕、

二日、癸未〔天〕晴、卯刻、行幸於入道相國福原別業、法皇、上皇、同以渡御、城外之行宮、往古雖有其例、延曆以後、都無此儀、誠可謂希代之勝事、歟、敢無知、由緒之人、疑可被攻〔南〕都、大衆猶起、敢無知、由緒之人、疑可被攻〔南〕都、無和不云々、之間、可有、不慮之恐、歟、又餘黨猶不休、爲禦、彼怖畏、歟、云、彼云、是、不可及、洛中之恐、事歟、或說、可

有遷都云々、縱雖可然、忽臨幸如何、事體可謂、物性、必有其徵、歟、又云、留洛陽之輩中、有可蒙刑之者云々、凡異議紛紜、巷說縱橫、縑素貴賤、以仰天爲事、只天魔謀滅朝家、可悲々々、遷幸儀、以見物之傳、自八條連、至草津、武士數千騎、二行並轡夾幸路、先入道相國、駕屋形輿、

次女車一兩、次女房輿二、二品、及攝政之室家云々、

次行幸、皇、供奉人々、公卿四人、

左大將實定、別當時忠、宰相中將、實守、通親、近衛司、

左中將泰通朝臣、右中將隆房朝臣、職事頭前亮重

衡朝臣、頭辨經房朝臣等也、

隆房朝臣着狩裝束、羽衣布帶、白狩袴、(浮線綾云々)是、

城外之儀云々、太以不被甘心、如此事可依時宜、

事也、後聞、隨身狩衣、小袴、烏帽云々、

次攝政、乘車、前近二人、殿上人二人、騎馬在車後、

次內侍所、

藏人左少辨行隆、左少將有房朝臣等候之、各騎馬

云々、

次御宸神、

上卿右衛門督實家、辨右少辨兼忠、各乘車、但辨

依仰、自草津歸京云々、  
次御幸、

公卿、帥大納言隆季、前大納言邦綱、  
殿上人、左少將通資朝臣、同時實朝臣、

右中辨兼光朝臣、已上、可從行裝、

中務權大輔經家朝臣、

右京權大夫信行朝臣、

安藝守在經、已上、京出許云々、或說  
在經可參福原云々、

次出車二兩、

次前大將宗盛卿、忽手與、

今夜就大物、明曉御福原、

內裏、平中納言賴盛家、

上皇、禪門之別座、

法皇、平宰相教盛家、

攝政、安樂寺別當安能房云々、

參入輩多以無宿所、如立道路云々、

三日、甲天晴、源中納言雅賴來、談世上事、或人云、遷  
都不可、然云々、付便脚、送書於院女房、及邦綱卿  
之許、

四日、乙天晴、法性寺座主道快、中御門大納言宗家等

來、各相逢謝遣之、此夕、參女院御方、今日、以使  
者觸白地可參入之、山於邦綱、人々多參入云々、

五日、丙天晴、傳聞、南都大衆成二途了云々、定和平  
歟、民之慶也、

六日、丁天晴、遣邦綱卿許使者歸來云、雖白地無  
御宿所者、御參不可叶、如只今一切無其所、猶  
相尋且又付形勢、自是今一兩日之間、以飛脚可

令申云々、又云、去四日夜、主上自賴盛家遷御  
禪門別庄、太上皇御所也、則居管給云々、家主賴盛叙正二位了、奉超

右大將殿、不可說々々云々、余全不爲苦、物狂之  
世、不足論是非、勿論々々、

七日、戊天晴、興福寺衆徒和平了、所逃籠之者等、上  
下相并廿余人、隨仰早可召進之、由令申云々、又

切院雜色本鳥、并凌礫有官別當、及破長者宣之  
輩、同以搦出了、早可進云々、然而近日、禪府遷都之

外、不及他沙汰云々、今日、參女院御方、祇園御興  
迎如恒、雖天下穢、本社沙汰、先例不憚云々、

八日、己天晴、邦綱卿以書札示送云、御參事伺形  
氣之處、遷都之間事、可被仰合、仍可參住也、而

一切無其處、仍參候寺江別庄、即件卿山庄也、自彼所早旦

參福原、入夜可歸寺江之由、有院宣、又入道相府被存此旨、早可下向云々者、來十三日可省途之由報答了、宗雅來、談福原細、白地此兩三日上洛云々、自今日一七ケ日、屈二口借行仁王講、爲拂災難也、

九日、庚天晴、申刻參女院御方、入夜歸來、此日、花山中納言兼雅卿女子、攝政養以爲子、初參女院、來廿三日可娶大將云々、須待彼日也、而入道相國、先令參入女院、其後密々可會合之由候、或被申女院、仍先以所參入也、件女子、生年十一歲、入道相國外孫也、參上儀偏以密々事也、乘實父納言車、諸大夫二人騎馬在車後、出車一兩、侍從忠經車也、即兼雅卿息男也、侍二人相具之、雜仕二人、小女一人、出立自花山院云々、今夜、女院有御對面、以西子午廊、爲其居處、自今日、侍女院進物所着膳也、此人可親大將之由、此兩三年、雖有其儀、殊不進思、自然逃過之處、去月晦、只可進入女院御所之由、忽然而被申請、其上不能是非、若辭遁者、豈安生涯哉、仍愁所被請取也、

十日、辛天晴、法性寺座主被來、數刻談語、示付祈事

等了、長光入道、季經、經家等朝臣來、談世上事、季經語云、去月十二日大雨下、是則賀茂神主重保、於寶前講祈雨和歌、彼靈驗也云々、雖末代信力之所至不空者歟、可貴々々、雖子細多、不追記錄、傳聞、所逃向南都之輩、少々窮進了、其中有相少納言宗綱云々、件男、年來好相人、彼宮、必可受國之由奉相、如此之風通、根源在此相歟、不可々々、

十一日、壬天晴、及晚小雷、參女院御方、傳聞遷都事、大略雖爲一定、被待下官之參入云々、此事敢無可定申之趣、只可隨形勢也、萬人如此、一身不諂者、其害舉足可待歟、

十三日、甲天晴、此日、余相勞所惱、參福原離宮、申刻出京、侍衣、直衣、網代車、共人最略、定是彼所之風儀也、

季長朝臣、季信、資忠、信光、國行、已上、各打梨布衣也、侍四人、隨身上臈二人、女房車一兩、

到草津、乘船、二尾、邦綱船也、水手八人、所相具之女房四人、同乘此船、雜船等、召女院御庄、終夜浮淀川、近日炎旱、河水干乾、淵變作瀾、船筏滯停、雖急不速、十四日、乙天晴、寅刻、就前大納言邦綱寺江山庄、暫以休息、未一點乘船、女房等不從、到于大物、



與、高屋形與、同所借、用前大納言、共人四人乘馬、安忠留寺江、

侍二人、留寺江、隨身二人同乘馬、此間頭辨以御教

書、問遷都之間三ヶ條事、依爲路頭、不能公

報、子細在戊刻到福原、於湊川邊又乘車、大納言牛車等也、牛

童遣亥一點、就大納言宿所、乍乘遣入之下、車休息

之後、改着直衣冠等、前駐二人、先參新院御所、賴經卿家也、去四

日渡御、以本御所于時及子刻、依御寢、不入見參、

〔參〕謁女房退出、欲參內之處、及深就寢、

十五日、丙申天晴、早旦、大夫史隆職來、談遷都之間事、

持來奈真相次賴業其人來、各謁之、又前大納言來、已刻

着直衣、車如隨身二人同相從、先參內謁女房、主上御座云々、

以藏人兼時、招頭辨經房朝臣、昨日所被尋問之

三ヶ條、示子細畢、

一左京條里不足事、

右南行〔及〕五條、東行及洞院、西大路不足之條、

可何樣哉、其地狹少者、若可被縮宮城一畝、

申云、須依地形之廣狹、被定條里之進退、不

足之條、暗難計中、如被注下者、減於平〔安〕

城、殆可謂〔過〕半一畝、隨而被縮宮城、何難之

有哉、若可被縮者、其町數尤可有議定一畝、南

北五町、東西四町、如何、

一右京、平地不幾事、

右宮城西有小山、隔件山可被用其地、隔山

之條如何、加之平地不幾、山太相交、被用右京、

不可及其難一畝、

申云、如被仰下者、山太相交、高下不等等云々、

專難用京都之地一畝、但非大山、非深谷、漸々

成功者、蓋同平地一畝、又當時於不可及事

之妨者、忽雖無其沙汰、何事之有哉、如此事

隨便宜、可被相計一畝、

一大營會事、

右任式文、今年可被行之處、期日以前、宮城〔若〕

難出來者、於何處可被行乎、遷都大營會、彼

是共大營也、同時被遂行者、諸國煩多、民力定疲

歟、何樣可被進退哉、

以〔前條〕々々、殊加斟酌、可令計言上給者、依

新院御氣色、言上如件、以此旨可令申上給、

經房恐惶頓首謹言、

申云、謂大祀謂遷都、共是國家重事也、相並被

行者、國費多歟、蹙還御舊都、被遂大營會之

後、一向有遷都沙汰尤宜歟、且是表神事之不可輕、欲遷都之無煩之故也、但遷都事、必可被<sub>レ</sub>忤行者、又以勿論雖須<sub>レ</sub>〔延〕行大祀、撰式以來會無<sub>レ</sub>此例、仍新宮之造營、併難終其功者、猶可備<sub>レ</sub>禮儀之所々、成<sub>レ</sub>不日之功、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>早遂歟、其條不可<sub>レ</sub>叶者、縱雖無<sub>レ</sub>例、延引之外又如何、

經房云、外記勘申云、七月以前、即位之〔主〕、明年被<sub>レ</sub>行大嘗會之例、大同、弘仁是也云々、

申云、共是撰式以前事也、不足爲<sub>レ</sub>例者歟、

又云、於<sub>レ</sub>離宮被<sub>レ</sub>行大嘗會如何、是新都造營難<sub>レ</sub>叶、仍當時御在所等、少々造<sub>レ</sub>加舍屋被<sub>レ</sub>行如何云云、

申云、於<sub>レ</sub>離宮被<sub>レ</sub>行大禮之條、縱雖有<sub>レ</sub>〔古昔之〕例、專難<sub>レ</sub>遵行歟、

此外經房有<sub>レ</sub>相語旨等、

次參<sub>レ</sub>新院、依<sub>レ</sub>召參御前、頃之退下、謁<sub>レ</sub>女房〔等〕、此間時忠卿參上、於<sub>レ</sub>御前召<sub>レ</sub>經房朝臣、仰下云、

改<sub>レ</sub>和田都<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>小屋野、可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>其地、早遣<sub>レ</sub>木工寮、可<sub>レ</sub>打<sub>レ</sub>定其地、和田之京、町數狹少、難議萬端、衆人不<sub>レ</sub>

甘心、萬民有<sub>レ</sub>苦色、於<sub>レ</sub>小屋野者、頗有<sub>レ</sub>便宜云々、但恐心案<sub>レ</sub>之、不如<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>遷都、女房等語云、遷都〔萬人〕莫不<sub>レ</sub>歎息、或有<sub>レ</sub>流淚之〔族〕云々、上皇不被<sub>レ</sub>〔仰〕是非云々、又聞相少納言宗綱、被<sub>レ</sub>〔拷問〕之間、申<sub>レ</sub>〔種々〕事等云々、又行隆來示云、都地改<sub>レ</sub>定小屋野了、此旨可<sub>レ</sub>申之由、禪門所申也云々、未刻歸<sub>レ</sub>宿所、此間兼光來、覲以談語、酉刻乘<sub>レ</sub>車出<sub>レ</sub>福原、於<sub>レ</sub>初所改<sub>レ</sub>乘輿、二里許行之間、腰痛太以難堪、仍乘<sub>レ</sub>馬於<sub>レ</sub>廣田社前、改乘<sub>レ</sub>手輿、今度用<sub>レ</sub>陸路也、亥四刻、就<sub>レ</sub>寺江路之間、被<sub>レ</sub>吹<sub>レ</sub>濱風、心神惱亂、仍浴湯、今夜〔汗〕不<sub>レ</sub>發、十六日、<sub>丁</sub>天晴、風病更發、浴湯兩三度、〔汗〕快出、今日送<sub>レ</sub>消息於禪門、及邦綱等之許、又〔御院〕女房之許、十七日、<sub>戊</sub>天晴、昨日返事等到來、各告送云、以<sub>レ</sub>播磨印南野、可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>京云々、邦綱示云、嚴嶋內侍女託<sub>レ</sub>宣可<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>小屋野之由云々、又大夫史隆職、同告<sub>レ</sub>此旨、傳聞昨日有<sub>レ</sub>小除目、故攝政御息大夫任<sub>レ</sub>侍從、又被<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>上官受領等、具不<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之、又有<sub>レ</sub>叙位解官等事、上卿左大將、執筆通親云々、又外記中原俊康、被<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>巡年云云、今日又數度浴湯、

十八日、<sub>己</sub>天晴、今日只一度浴、明後日爲<sub>レ</sub>上洛也、今

日依所勞、可上洛之狀申院了、

十九日、庚子天晴、邦綱卿告送云、昨日左大臣以下、參

近邊之公卿等、參會院御所、被尋問園城寺僧徒、

可被行罪科之趣、各任定申旨、被宣下云々、僧

綱廿七人、解却見任、沒官所領云々、隆職示送云、

雖有此沙汰、未被下宣旨云々、昨日進院御返

事到來云、早可上洛云々、

廿日、辛丑天晴、寅一點乘船、申四刻付淀橋爪乘車、

日沒以後歸家、上下共人同下向之日、今日又浴湯、

廿二日、壬寅天晴、湯治如昨日、所勞又發動、隆職注

送云、三井寺僧徒罪科之趣、被下宣旨了、其狀如

此、

園城寺惡僧等、違背朝家、忽企謀反、仍門徒僧綱

已下、皆悉停止公請、解却見任并網位、又末寺庄

園、及彼寺僧私領、仰諸國宰吏、早々收公、但於有

限寺用者、爲國司沙汰、直付直家、所司經其間

用途、莫令退轉、

治承四年六月廿日

又無品圓惠法親王、宣令停止所帶天王寺檢校職、

云々、

又去廿一日、被行僧事、全玄法印任權僧正、〔土壇〕

此外雖多不記、又座主明雲補天王寺別當、山僧補

此寺別當、往古雖有例、近代多被付園城寺、而今

過絕彼寺、抽賞叡山之間、有此恩、〔歟、凡〕此沙汰

之間、左少辨行隆有、成怖畏事云々、

廿三日、甲辰陰晴不定、此日密々有嫁娶事、右大將良

通、通花山院中納言兼雅卿娘、〔件人、去九日參候女〕非

執智之禮、非迎婦之儀、最略密々沙汰也、元儀關白

爲子、可被迎大將云々、而忽遷都事出來、仍其儀相

違歟、早旦仰家司季長朝臣奉仕裝束、〔於日米女院御〕

女院殿上渡余家、以渡御爲名、〔其實密々御座東方也〕其儀、寢殿南面母屋庇三ヶ間

懸簾、〔上母屋〕母屋中央間立障子帳、〔御渡之時、被立帳也、依略儀不立如法〕

帳、其內南北妻、敷經綢端疊三枚、其上敷例蓮、〔若錦儀數例蓮也、依略儀不敷龍鬘〕同間

同疊二枚、其上敷唐錦茵、〔禮數龍鬘、其上可供茵、依略儀不敷龍鬘〕同間

西頭南北行、〔若北柱、依略儀不敷龍鬘〕立泥繪屏風居其中、〔東也、二階一〕

脚、〔上層北區、火取、南區、掛簾、二階南區、唐匣箱、在〕

其南置鏡宮、〔在、其南立鏡臺、茵前頗東置脇息、其〕

西置硯宮、〔已上依前狹、上置之、〕母屋西第一間母屋際、立几

帳一基、其內南北行、敷高麗端疊二枚、其上加東

帳一基、其內南北行、敷高麗端疊二枚、其上加東

帳一基、其內南北行、敷高麗端疊二枚、其上加東

帳一基、其內南北行、敷高麗端疊二枚、其上加東



京錦茵、南庇東西間副奧端、二行敷高麗疊各二枚、同庇三ヶ間、副庇簾立、几帳各一基、下格也、東間東障子際立燈臺、在打舉燭、西庇三ヶ間、卷庇簾爲出居、南第一間副奧障子、敷高麗端疊一枚、南北行、爲主人座、同第二三間副東障子、立厨子一雙、立屏風、依略不立之、同間副長押南北行、敷高麗疊二枚、南第一間南邊界燈、中門廊敷紫端疊一枚、依間敷、敷二枚、爲諸大夫座、侍障子上等如例、本上達部座如元、凡依略儀、不敷所々弘蓮、晚頭女房參、彼御方、候女院、御所也、秉燭、余同行向見廻、裝束子細載右、以寢殿北面爲常居所、以其北子午廊爲中居、以北對爲女房局、亥刻也、吉時也、先女房一歲、入座帳中、次大將著直衣冠、依略着直衣、但若還袴、禮須着衣冠、若布袴也、經南庇東障子、出立日來曹經、殿外、自、先居帳前茵、此間女房大貳局、持劍相從、彼方女房上臈受取之、置帳中枕上、外柄、又召贊殿打火、燃名塗籠中燈爐、禮用脂燭火、今度無此儀、仍以榻邊用打火、即大將入自帳西面、元永入、自南面、應保入、儀、仍以榻邊用打火、即大將入此間北面居候、禮於南面、今日依應保例、解裝束、單衣下、豐臥之上省略也、仍不供五菜、只於北面供例儀也、居訖、女房申案内、即大將如元着裝束、就之、如食、無其、即罷出侍所、其儀女房、於西面北妻戸叩

手、職事參上取之、次供嗽、次大將出西面出居、即歸入向極殿、在日來曹司、如元着裝束、歸入帳中、脫裝束、今度皆、付寢、職事三人着侍大盤、女房等只着裳唐衣、不着表着、打衣、張袴等、依略儀也、今夜民部卿資長卿、相具其息右中辨兼光來、戶部直衣、兼光束帶、余密々謁戶部、抑今夜、依略儀不調、只可用宿衣云々、而女房方宿衣、爲浮線綾、難用吉事、大將方又兼非可用意之、事、日來宿衣唐綾也、忽雖新調、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>、今夜之要事、已欲闕、然間大將母云、余時余在御倉、是已雖爲吉例之物、爲略儀之上、又難用舊物、仍不及沙汰之處、事已闕如、於今者無計略、儉取出彼衾用之、自然叶吉例、又不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>闕、今夜事歟云々者、事尤可然、仍取出件衾、兼置帳中、即大將母置之、雖須覆衾、三ヶ夜同宿無便宜、此程略儀、有衾覆之儀、還可謂忘禮、是只爲不闕事、所廻權儀也、仍無衾覆之禮、事訖余及女房歸宅、廿六日、丁天晴、參女院御方、入夜藏人左衛門權佐光長、自福原送札狀云、

神今食事、



右今月依<sub>レ</sub>穢延引、來月九日於<sub>二</sub>舊都<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行候、  
采女歸參、奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>之後、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>解齋<sub>一</sub>候、而山海相  
隔、途路有<sub>レ</sub>程、不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>采女歸參<sub>一</sub>、只計<sub>二</sub>其程<sub>一</sub>、先可<sub>レ</sub>  
有<sub>二</sub>解齋<sub>一</sub>歟、於<sub>二</sub>采女<sub>一</sub>者、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>相待<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>行  
程<sub>一</sub>可<sub>二</sub>參奏<sub>一</sub>歟、將又不可<sub>レ</sub>參歟、宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>給<sub>上</sub>  
者、

新院御氣色如<sub>レ</sub>此、以<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>言上<sub>一</sub>給<sub>上</sub>、光長頓  
首謹言、

六月廿五日

左衛門權佐光長奉<sub>上</sub>、

進上 和泉前司殿、

量<sub>レ</sub>程暗有<sub>二</sub>解齋<sub>一</sub>者、采女歸參專無<sub>二</sub>其要<sub>一</sub>之由、令  
<sub>レ</sub>申了、後聞采女猶歸參云々、

廿九日、<sub>庚戌</sub>六月祓如<sub>レ</sub>例、

右治承四年<sub>庚子</sub>夏此一帙墨付八拾一枚者以<sub>二</sub>三緣院道教  
公手澤松殿右幕下道昭卿被繕寫之畢抑法性寺忠通公  
之有職松殿基房公親面授而傳于後法性寺兼實公且加  
目錄號玉葉爲后昆之軌則其雲抄不讓他秘握而可貯深  
奧者也、

于時慶安二年<sub>己丑</sub>正月仲旬陶化翁(花押)誌焉

玉葉卷三十四終

玉葉 卷三十五

自治承四年七月 至全年十二月

治承四年秋冬 〔歲次庚子〕

七月〔大〕

一日、亥〔天〕晴、傳聞、山大衆蜂起、欲拂座主云々、  
二日、壬〔天〕晴、最勝寺御八講結願云々、傳聞、去月  
廿八日有子小除目云々、山城守行隆、左少弁如元、大和守兼  
忠、右少弁此外不記、抑被任大和守、南都事殊可  
有沙汰之故云々、

三日、丑〔天〕晴、法勝寺御八講始、天台座主明雲爲證  
誠云々、凡諸寺八講、併延曆寺僧也、自間自答古來  
無例、云々、

四日、寅〔天〕晴、此日、左大將嫁娶之後始出行、申刻  
來余第、其儀着冠直衣、不帶劔、不取笏、乘半部車、懸下簾、  
如例、隨身、上臈布衣冠、女郎花上下、紅引倍支、下臈五人布衣、其色、  
帶劔前驅六人、五位四人、六位二人、右兵衛佐盛定、殿上、爲扈從、呼  
大將於前、差膳、女房、少將歸了、余行始之時、毛車隨  
身褐衣、又參院內、今度每度每事用器儀之上、無

參公所、只自彼亭來此宅、其程不遠、其儀可  
略、依爲初度引移馬許也、

五日、卯〔天〕晴、自新院爲右中辨兼光奉、可被獻法  
勝寺御瓮哉、將年代相隔、可從停止哉之由、被尋  
問、申不能停止之由了、但鳥羽院御時、圓宗寺御  
瓮、被付寺家、雖然今度不似彼例也、

〔六日、丙晴〕

七日、巳〔天〕晴、節供如常、陪膳季長朝臣、乞巧奠又如例、大  
將方無此儀、大臣以前無先例之故也、又嫁娶之後  
三年、不取入索餅於家中云々、今日拂書籍虫如  
常、法勝寺御八講結願也云々、七夕定式日歟、入  
夜、參女院御堂、爲違秋節也、

八日、午〔天〕晴、此日、大將室始出行、戌刻來余第、其  
儀半部車、車副二人、大將番長兼重、著布衣、在車後、  
雜色十餘人、出車二兩、左馬權頭定雅、右兵衛權佐盛定等、  
少將兼宗朝臣、忠親、連車、扈從前驅、五位八人、差車

於寢殿南面、大將著布衣、自中門來會寄之、頃之歸了、銀鷄入（素物、爲引出物、）今夜、大將女房渡東面也、自（女房取之、入車中也、）今夜、余渡物氣、（智證阿闍梨、）此日、最勝光院御八講初日也、證誠同法勝寺、

〔九日、未〕

〔十日、庚申〕

十一日、（辛酉）天晴、上野守賴高、自福原上洛、來云、爲右中辨兼光奉行、欲持參唐繪御屏風一帖、爲被書色紙形也、而院中無人之間、兼光不上洛、以使者可被申之由、被仰下、仍以賴高所令申也、即持來本文二枚、禁忌之字太多、可計除之由、被仰下云々、屏風、今明之間可持參、且所參啓也者、當時所勞之間、不能下筆之由令申了、

十二日、（壬戌）天晴、今日申刻、行賴頓死、此五六日有熱腫、不及殊大事之間、今日蛭喰之後、不覺成了、忽以出家、臨終尋常、爲悅々、余最前之從、廿五年積奉公、今年六十七、可哀々々、今日、中御門大納言來、依疾不謁、

十三日、（癸亥）天晴、或人云、遠行之輩被召返、勅勘之人優免云々、但前關白及前相國、不入此中云

云、

十四日、（甲子）天晴、及晚拜送法性寺兩堂、如例年、今日爲新院御沙汰、三寺被獻盆供、（法勝寺、安樂寺、最勝光院等也、）法勝寺事、兼日被問人云々、余申不可被停止之由、子細見先日記、今日余依疾加少灸治、傳聞、奈良大衆二鼻成了、別當僧正與一乘院法印爲敵、兩方之大衆相逢爲拂云々、又聞、去十二日、若宮御殿鳴動、御戶開了、自其內鐺二筋被射出、有其聲云々、白晝事衆人見之云々、

十五日、（乙丑）天晴、人語云、去十日夜半、欲奉盜出春日御正體、大衆起合奪留了云々、或云、別當僧正社司等同意、爲奉移福原所爲云々、仍大衆爲拂別當、或云凶徒之所爲云々、眞僞難知歟、誠我氏欲盡、可哀之秋也、

十六日、（丙寅）天晴、大外記賴業告送云、福原暫可爲皇居、開通道路、可給宅地於人々、但不及廣云云、

十七日、（丁卯）天晴、炎旱御祈、來廿五日奉幣云々、凡國土已弊、不可敢云々、

十八日、（戊辰）天晴、今日前豐前守成光朝臣卒去、儒士

之中、云「才學文章」、云「口傳故實」、於「當世」頗得「其名」者也、可「惜可哀」、此日法性寺座主來、

十九日、己「天」晴、此日、姫君着袴也、早旦仰家司季長朝臣、奉「仕御裝束」、其儀、寐殿南庇當「障子帳前」、東西行敷「經綢端疊」二枚、其上鋪「龍鬚」、加「唐錦茵」、爲「姫君座」、同疊西頭南北行、泥繪四尺屏風一帖、其內立「二階一脚」、上層南置「泔杯」、其北置「火取」、下層南置「依」略儀、不「打亂筥」、其北置「唾壺」、二階南置「硯筥」、立「唐匣鏡臺同宮等」、御座前頗左置「脇息」、御座東西副「奧端」二行、敷「高麗疊」、卷「庇簾」出「几帳帷」、女房不「出油」、上達部座、殿上人座、障子上侍等如「例」、寢殿南簀子御座東間、立「燈臺」舉「燭」、反燈爐網「如常」、吉時戌刻、余著「冠直衣等」、出「居上達部座」、右大將同著「之」、著「冠直衣」、先「是來」、此第一、此外不「招他」次奉行家司、左京權大夫光盛參上、申云、皇嘉門院御參、余仰「可召之由」、卽判官代前豐前守能業、持「御裝束」、置「余前板敷」、蘇芳綾單重、(表龜甲、裏單文、)女郎花二重織物、三重表着、二藍二倍織物、小掛、渡引倍支、濃袴、納衣笠、赤、色打髮、被「加」扇色紙數件也、退下之間、家司前和泉守季長朝臣、祿給「之」、白掛、能業取「之退去」、不「拜」、依「着衣冠」、次左馬權頭宗雅殿上人、雖「催衣」、參上、取「裝束」、自「南面妻戶」進「女房」、先「是女房八人」、上薦二人、中薦四人、下薦二人、須「有」中薦六人、而忽故出、仍卒余召「下薦二人也、中薦之中可「然之人二人、勤取入、勤取入、御前物」之役、上薦二人及件役人二人、若「蘇芳單重、女郎花表着、二藍唐衣、殘四人、女郎花單重、蘇芳表着、濃唐衣、并渡引倍支、濃張袴等也、中、姫君同座「帳前」、拍單重、濃袴也、母上同相副、蘇芳單重、結「腰」、向「生氣方」、先例雖無、所「見、以今案所爲也、姫君坐定之後、余召「人、光盛參、簾下、仰御前物可「供之由、申「未持參」之由、仰重可「催促」之由、小時持「參之」、卽陪膳刑部卿賴輔朝臣、依「無殿上四位、用「地下四位、且品秩不「殿之故也、仰件人若「束帶、如何、不可、然、殿上侍臣有「便宜、地下人隨「儀可「若衣冠、取「打敷」、蘇芳織物依「新參上、女房取之傳陪膳女房、京極局、姫次季長朝臣已下八人、持「參御前物」、盤二枚、乳母也、依「姫君不供酒盞也、皆居了、余含之三箸如恒、供了陪膳卽起座、自「外不罷出也、內々撤之遣「乳母之許」例也、事了入「內寢」、姫君脫「裝束」、大將歸「參女院御方」、余及大將隨身上薦已下、皆布衣、立「明」、事了賜「祿於左馬允奉賴」、職事取「之、依「奉仕御前物、也、先々久信勤「仕之」、而候「福原」辭「之」、仍雖「非三重代仰」之、

御前物役人、

季長朝臣、長經、賴高、兼親、貞俊、光兼、仲資、長俊、

過三二ヶ日可「撤御裝束」也、



今日依<sub>レ</sub>有所思<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>招<sub>レ</sub>客、天下騷動未<sub>二</sub>落居<sub>一</sub>之上、遷都之間、世間彌不<sub>レ</sub>穩、就<sub>レ</sub>中取<sub>二</sub>諸身<sub>一</sub>、萬事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>好<sub>二</sub>威儀<sub>一</sub>、仍所用<sub>二</sub>密儀<sub>一</sub>也、

廿日、庚<sub>午</sub>〔天〕晴、典樂頭定成來針<sub>二</sub>齒下<sub>一</sub>、其次語<sub>二</sub>新院御惱事<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>快御云々<sub>一</sub>、又大推<sub>二</sub>年袖之間<sub>一</sub>、憲基進<sub>二</sub>勘文<sub>一</sub>、定成陣勘等持來、申旨巨細不<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>記錄<sub>一</sub>、彼是非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>歟、去比恩免人々、賴業注<sub>二</sub>進之<sub>一</sub>、

前按察資賢、

前少將雅賢、資時、

前但馬守信賢、

前右兵衛督光能、

前大藏卿泰經、

前右衛門佐經仲、

前權右中辨親宗、

已上非<sub>二</sub>職事之沙汰<sub>一</sub>、内々被<sub>レ</sub>仰云々、

今日基輔參<sub>二</sub>向福原<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>其便<sub>一</sub>人々許通<sub>二</sub>音信<sub>一</sub>、

〔廿一日、壬<sub>未</sub>〕天晴、入<sub>レ</sub>夜參<sub>二</sub>宿御堂御所<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>方違<sub>一</sub>也、

〔廿二日、壬<sub>申</sub>〕〔天〕晴、巳刻許歸宅、此日撤<sub>二</sub>御著袴御裝束<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>三々日<sub>一</sub>也、

廿三日、癸<sub>酉</sub>〔天〕晴、〔午刻許、定能卿來談、〕未刻、知康入

道來、語<sub>二</sub>定成與<sub>一</sub>憲基<sub>二</sub>相論之間事<sub>一</sub>、大推項背〔又左馬

權頭宗雅來、談<sub>二</sub>福原之間事<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、聊

依<sub>二</sub>不例御<sub>一</sub>、然而殊事不<sub>レ</sub>及、大將室頗不豫云、

廿四日、戊<sub>戌</sub>〔天〕晴、申刻、基輔自<sub>二</sub>福原<sub>一</sub>歸來、余申旨

付<sub>二</sub>女房<sub>一</sub>申入<sub>レ</sub>了、仰云、所勞事返々不便聞食、屏風色

帟形、強不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忿、以<sub>二</sub>病隙<sub>一</sub>可<sub>二</sub>書進<sub>一</sub>者、女房等語云、

御惱殊重、御<sub>二</sub>不食<sub>一</sub>、惟悴逐<sub>レ</sub>日增給之上、〔日〕來溫氣

御、此間又以御<sub>レ</sub>増、大畧遂不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憑云々<sub>一</sub>、來廿八

日嚴嶋御幸延引云々、關白及禪門之許、同問<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>、各

有<sub>二</sub>返報等<sub>一</sub>、大將室、今日溫氣散了、女院別事不<sub>レ</sub>御云

云、

廿五日、乙<sub>亥</sub>〔天〕晴風吹、傳聞、今上二宮所惱危急云々、

兼又關白不例云々、今日長光入道來、〔此日〕姫君着袴

之後、始參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>行始之儀<sub>一</sub>、只密々〔之〕事也、

酉刻、大將室更發<sub>二</sub>瘧病<sub>一</sub>歟、

〔廿六日、丙<sub>子</sub>〕陰晴不定、未刻、中御門大納言被<sub>レ</sub>來、對

面謝<sub>二</sub>遣之<sub>一</sub>、

廿七日、丁<sub>丑</sub>陰晴不定、此日、大將室祈<sub>二</sub>請十口僧<sub>一</sub>、限山

之、東大〔寺〕、興福、園城寺、公家被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>公請私所、又以<sub>二</sub>不請之故也<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>法橋實顯<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>憑講師<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>百座仁王

講、佛經新圖<sub>二</sub>寫之<sub>一</sub>、又以<sub>二</sub>春寬法橋<sub>一</sub>加<sub>二</sub>持之<sub>一</sub>、又今晚、使<sub>二</sub>泰茂

修<sub>二</sub>泰山府君祭<sub>一</sub>、申刻更發、一昨日未刻云々、無<sub>二</sub>其驗<sub>一</sub>、尤遺憾、西

刻、權僧正全玄來、余謁<sub>レ</sub>之、新院御不豫事、殊所<sub>二</sub>相歎<sub>一</sub>也、大畧始修不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憑云々<sub>一</sub>、

廿八日、寅申刻以前天晴、同四點雷鳴雨降、傳聞、日來雖有御祈等、無其驗、仍佛殿聖人、去比奉禪門命祈之云々、若其驗歟、但無程晴了、〔長光入道來、明日可向紀州、可參詣高野云々、〕

待從發心地、雖參詣蓮華王院無驗、自去廿四日病惱、今日三ヶ度也、明後日事、卜筮之處、可加持者、廿九日、卯〔天〕晴、申刻雷鳴雨下、其後天陰、大將室猶發云々、今日、山僧還阿闍梨祈之、又始觀音經讀經、〔季經々家等朝臣來、前施藥院使憲基來、今日新院被辭、尊號隨身等、依御惱也、俊經卿可書其狀云云〕

卅日、辰〔天〕晴、隆信朝臣來、以二件〔朝臣〕爲使、訪俊成入道瘡病、今日侍從發了、驗者猷勝阿闍梨也、〔僕自今日脚病更發、〕邦綱卿示送云、〔々々〕新院御惱、雖六借御、忽不及危急、然者強病參入、專不可然者、或人云、攝政之病殊重、如瘡病更發、溫氣不散、又有痢病之氣云々、

八月〔大〕

一日、辛〔天〕晴、大將室祈、造立供養一日不動明

王、佛師明圓法眼、宗憲法印、驗者、花山納言被送云々、不知名體、居住參川國云々、物體太異樣云々、果以無驗、未刻發了、今日定能卿來、

二日、壬〔天〕晴、午刻浴湯、此間、花山院中納言來、始來余浴之後暫而出達、于時被參女院御方了、晚頭季信自福原歸來、語云、新院御不例、六借御云々、又攝政所勞瘡病云々、但其體非普通、更發之時其面赤、又間日同以惱亂云々、戌刻、女房除服、母尼上姉陪膳季信役、兼親於門外、除之、陰陽師漏刻博士憲成、今日、侍從瘡病平全、猷勝祈之、

〔三日、癸完晴、今日大將室猶發了、驗者自彼女房方請之云々、中納言阿闍梨云々、〕

四日、甲〔天〕晴風吹、未刻、大外記賴業來、持來帝王略論一部五卷、依借召也、又先日爲加點、所下給之貞觀政要、同進之、召簾前問世間事等、申云、去廿九日出福原、今月朔日入洛、遷都事不可并故鄉之由、被仰下了、福原立離宮、暫可有經廻云々、不及八省大內、又大路小路隨便披之、撰可然卿相待臣等、可〔宛〕其地云々、大禮事延引之由、被仰下了、其後猶今年可被行之由、雖云々、說未聞

一定云々、又云、嵯峨隱君子〔竿〕道命期勘文、〔追〕  
和比有。○本註續此勘文。○一本補之。不可改平安宮之由、有二所見、貞

觀之比、依大極殿炎上、時人可有遷都之由謳歌、  
 且是古昔之例、大途經八十年、有遷都、延曆已後、  
 及八十年、疑其期至歟云云、隱君子聞之云、桓武  
 聖主、鑒此地久可爲帝都之故、新所營給也、東  
 有嚴神、〔初〕西有猛靈、〔尾〕南開北塞、又見地宜  
 足可爲帝都、永代不可變易之趣、具被勘錄  
 了、且是非竿術之所及、以人意不可測、天之令  
 然之地也云々、而今有遷都之儀、我朝若有運者此  
 事不可遂、我朝若可盡者此事可成就歟、國之安  
 否只在此、事遂可見歟云々、又語云、新院有御夢  
 想事、建春門院夢中參院中給、深懷怨心、其故遂弃  
 我遷幸給、尤非本意云々、是又遷都不快之祥也、先  
 是中宮有御夢想、并隆季之靈夢等、〔件夢等見〕不信  
 此等靈告、猶被營新都、誠是天魔所爲不可疑、  
 可悲々々云々、又云、去月廿九日、新院被辭兵仗  
 封戶〔等〕、雖可被辭尊號、可被發遣公卿勅  
 使、〔院御〕而止太〔上〕皇字之事背先例、因此議出來、  
 於尊號者、暫不被辭通歟云々、後聞尊號猶被辭

了云々、使藤大納言、奉書草俊經卿、清書定長云々、  
 五日、陰晴不定、申刻、小雨降風吹、大將室猶發  
 了、驗〔者〕猷勝、〔傳聞〕、攝政所勞殊重云々、〔太略邪  
 氣相加、又本病〕〔寸白并〕不愈事、極有煩云々、〔賴高爲  
 攝政使、持〕來多武案怪異占形、〔御體破給〕長者及氏公卿、  
 己亥歲人可慎病事云々、余及大將、其歲相當之故  
 也、

六日、〔丙〕雨下、入夜、爲方違參宿御堂御所、觀音經  
 讀經、今日且結願了、昨日滿七日、然而依日次不宜、  
 今日且所結願也、

七日、〔丁〕時々雨下、此日釋奠也、〔早旦歸家〕大將室今  
 日宜發、驗者智詮阿闍梨、日來、每度有増、今日殊  
 宜、可謂効驗歟、今日居物付也、今日湯治之後、持病  
 更發、殆及獲麟、忽請僧〔智詮〕加持之間、頗落居、佛法効  
 驗也、

八日、〔戊〕〔天〕晴、寶顯法橋來、酉刻、頭辨經房朝臣送  
 札云、來十二日以前可參入、福原新院御氣色者、禮  
 昏云、大嘗會事、可被豫議云々、申、依疾重不  
 耐參入之狀、傳聞、去朔日、爲時忠卿奉行、召經  
 房朝臣、大嘗會、猶今年可被行、於當時御〔在所〕  
 原



可被行、可申沙汰之由、被仰下云々、而經房朝臣依申、可被問人々之由、可及僉議云々、左大臣、及堀川納言等被召、是在京之輩之內也、實定、隆季在福原、自餘之輩、強不可預僉議、歟云々、又傳聞、隆季卿密語云、遷都事凡猶不可叶ものを、無所據沙汰かな、今始終可、見云々、此語達禪門之聞、太以攀緣被講、不安之由云々、凡此遷都事、頗後々之體有沙汰之間、依此一言、更起勵心被骨張云々、太以無由事也、近日之事、皆天魔之謀畧也、不能左右了攝政瘡病猶不愈、痢病又以不快云々、後聞、今日春寬祈落了云々、

〔九日〕己丑天晴、今日、大將室猶發了、但減自一昨日云々、

〔十日〕庚寅天晴、自今夜大將室祈、始修不動法、女房冷泉局沙梨知詮

十一日、卯辛天陰雨下、左衛門權佐光長來、日來候福原、去六日入洛云々、呼簾前問不審等、先大禮事、一定於福原可被行云々、余問云、彼地可爲帝都之由被仰歟、將又於離宮可被行大嘗會歟、其條專不可然歟、還御古京不可叶、以福原被定

都地之後、可被行此禮歟如何、申云、此條無申出之人、只如承者、如形造營里內、可被遂行歟、凡其間事可被問人々云々、又方角事爲被尋、召在京之陰陽等云々、又語云、新院御不例、聊宜御歟、但不及減、此五六日、昌雲僧正奉祈云々、攝政瘡病、至于六日未致平愈云々、大將室又發了、驗者大夫君圓隆、自女房方被請云々但宜自一昨日、次第有減歟、十二日、辰壬天晴、物忌也、多武峯怪異也、入夜獻福原之使木工九重承、歸來、云、禪門返事云、御不例返々歟承不少、聊も不快者、一切不可有御參之儀云々、新院御減之由承候、殿下已令落居了、旁不可有御不審云々、攝政返事云、希有存命了、又御不例、尤歎思給云々、邦綱卿密々示云、新院御事御減之由、雖云々、全不然、大略一日之中、起居給事不<sub>レ</sub>過一時、御溫氣全不散、殆逐日弱了令見給者也、不可及外聞云々、又去比可有還御古京之議粗出來、隆季時忠等相議、被仰遣禪門之許之處、尤可然、但於老法師者、不可參御共云々、人々忽以興違、其後都以停止了、大嘗會事、日來延引之由、相存之處、禪門被申云、何故不被行哉、太以不得其



心云々、此語自風聞、忽此議出來、凡万事非言語之所及、只以目云々、又持來女房若州返事狀云、御所邊事、只同御事也、無增減云々、

傳聞、八條宮與房覺僧正、依愛童事、忽欲有闕諍事云々、折節尤不便(宜)、不落居事歟、或云、伴童、行乘僧都童云々、

今日、大將室有溫氣云々、不得其心、此日、新院御祈孔雀經法結願、二七日、讀善僧正、於東寺始之、被仰勸賞了云云、

十三日、巳(天)陰雨降、此日、大將室至申刻先々午終發也、

無其氣、仍驗者一昨日給祿、牛一頭、并單重、又相具小僧一人云々、同給、僧退出之後又發了、一昨日同事云云、

後聞昨日溫氣未散、大略無更發、不斷事歟、而無左右給纏頭、太奇異云々、

十四日、午(天)陰、時々晴又雨下、光長稱參福原來、

院御惱事、可問女房之由仰之、又攝政瘡病平愈、神妙之由、可傳申旨同仰之、午刻、法性寺座主來、被示合可(被)籠居之間事、雖制止、頗無承引歟、只生涯無益之由也、邦綱卿送札云、大嘗會猶延引之由、被仰之了、明年可被行云々、是期日近々、造作

不可叶之故也、人々所定申如、此云々、又新院御不豫、聊似有減、但御溫氣未散云々、又攝政瘡病、春寬令祈落之、而不蒙賞之由、大以腹立云々、

十五日、未(天)晴、時々雨下、大將室自一昨日溫氣未醒云々、仍於今者非瘡病之儀、邪氣歟、腹病歟、未決云々、

十六日、丙(天)晴、女房參女院御方、季經朝臣來談、昨日時々雨下、

十七日、丁(天)晴、定能卿室、去夜產了、其後聊不快云云、仍遣使者問之、無殊事、但定能卿入產了云々、

典藥頭定成來、問病子細、自今日、女院御方被始大般若讀經、

十八日、戊(天)晴、院主典代來、催大將方云、來廿三日、於法勝寺爲御祈、可有樂師經千僧御讀經、可調進經卷、又可參入云々、以隆信朝臣、問俊成入道所惱、又(同)院藏人來、催余分經廿卷、今日及

晚雨下、今日以陰陽權助濟憲、問福原方角事、申可有憚之由、

十九日、亥(天)晴、大將室今日溫氣散了云々、禪門今日被參嚴嶋了、自彼可被詣字佐云々、

廿日、庚子雨下、大將室俄煩<sub>レ</sub>胃、殆及<sub>二</sub>危急<sub>一</sub>、然而即復<sub>レ</sub>例了云々、疑邪氣所爲歟、邦綱卿送<sub>レ</sub>札云、新院御溫、自去七月十一日、于今末令散給、又昌雲僧正依持病發動、此五六日不奉祈云々、又云、禪門明曉去十八日文也、仍可被參嚴嶋云々、召主稅頭定長十九日進發歟、問所勞之間事、入夜民部卿資長來、爲訪大將室病、自日野只今出洛云々、余依疾隔障子謁之、爲方違、參御堂御所、依脚氣用輿、竊下乘入之、雖無禮病無飭饒爲之如何、

廿一日、日辛丑〔天〕晴、早旦歸家、自今旦大將病惱、及已刻疱瘡出遍身云々、仍召主稅頭定長女、醫博士經基等、令見之、共申疱瘡之由、俗云ヘナ<sub>モ</sub>云々、廿二日、寅寅雨下、今日物忌也、大將溫氣猶不散、其瘡多出云、

廿三日、卯〔天〕晴、物忌也、寫靈山院額、遣申請上人許、件額權大納言筆也、而其板破損、其字消滅、修造彼堂之間、爲打改新造額板、相副本所送也、事依善事扶病下筆、本額雖字消、大途見其體、仍一座不違點畫寫之、以至愚之暗質、寫先賢之遺跡、一可悅、一可恐、仍仰僧令全八字

文、殊不動明王等、抑件額寫本、素所相持也、伊房人寫取而校正本之處、相違太多、仍新寫留草了、大將今日頗有增云々、仍修鬼氣祭、又行仁王講等、

廿四日、辰〔天〕晴、入夜雨下、此日於法勝寺、被行千僧御讀經、觀音新院御祈也、

〔廿五日、巳〕雨下、經家朝臣來、語福原事等、昨日所上洛云々、新院御不豫、同様御云々、

〔廿六日、丙〕雨下、大將疱瘡出調了、溫氣散了云々、爲悅不少、其室赤痢病、猶不快云々、

廿七日、未〔天〕晴、或人云、今年成菩提院御念佛退轉、禪門講不可有之由云々、偏被領天狗了、不能左右了、

〔廿八日、戌〕天晴、

廿九日、酉〔天〕晴、未刻、頭辨經房朝臣來、日者爲行千僧事上洛、明後日又可參福原離宮、適向京都爭不參哉、且爲承御不例子細可參也云々者、以基輔朝臣答、只今可謁之由、但所惱之間、不耐出簾外、唯隔物乍臥可令申也、兼又光盛申者儒事、可申沙汰之由、仰付之頭辨、又云、備後

御領事、責取國司應宣了、近日被止奏事、於事雖  
 不得便宜、相構所申沙汰也、國司類所澁、然而  
 令申給旨有理、仍所被責者也、今度參上之時奏  
 事之由、書副院宣可進、且所告申也云々者、件所  
 最少所、雖不及執申、隆季所爲奇怪、仍訴申御沙汰  
 次第、殊恐畏申、又私芳恩尤難謝申、就中境節如此  
 事、不及沙汰之比也、殊悅思之由返答了、小時余  
 於西面出居謁（云）、（隔母屋簾、余若小直衣、寄臥也）先余示所勞子細、  
 經房大有驚之（氣）色、又問遷都事、答云、福原如只  
 今者離宮也、明後年可被造八省云々、今年五節以  
 前、可被造皇居、是禪門私造作也、彼人移徙之後、  
 可被借召之儀云々、即件離宮之傍、占置八省之  
 地、并可立要須之所司之跡等、此離宮即可用內  
 裏、於大內者不可移建云々、件指圖、源納言造  
 進之、堀川納言又加潤色云々、凡此儀不能左右、  
 非言語之所及歟、大嘗會事、先度有沙汰延引、今  
 又俄有此儀、又延引之子細、如何之由、問之、答云、  
 先今月朔比以別當時忠卿被仰下云、（於御前、猶今仰之）  
 年可被行大嘗會也、仍可被造管內裏、其間事、  
 早（々）可令申沙汰者、爰經房乍恐申子細云、

大禮今年被遂、是正禮也、而先日有沙汰延引、今  
 迫期日之後、忽有此儀、恐神事懈怠之因緣歟、何況  
 造內裏之條方角禁忌如何、延曆十三年、自長岡京被  
 遷平安城之時、被犯三王相方（十月有遷都、而此京當北方、仍明犯之）  
 以此例不可有八方忌之由、有儀定歟、情見  
 沙汰次第、頗背違彼例、故何者、彼者自延曆十二年  
 有其沙汰、內裏造畢、人家過半移住、同十二年十月遷  
 幸之後、公事併於新都被行之、偏是遷都之儀也、  
 於今度者、六月二日卒爾遷幸、彼時不被仰遷都  
 之由、是其後雖有可被遷都之議、其地度々未定、  
 當時御所、未被定仰可爲帝都之由、已似離宮、  
 是舊都人屋一人未移住、諸公事併於彼都行之、  
 以此等之儀、比延曆例、敢以不符合、至不被避  
 方忌之一事、被追用件例、道理不叶歟、加之、彼  
 延曆例者移徙也、不可同犯土歟、又自長岡京當  
 北之條、未被打丈尺、旁貽疑殆者也、日被尋間  
 陰陽道輩、且被仰合有識卿相、尤宜歟、其議一決之  
 後、可被仰一定歟、言上子細、雖有甚恐、爲後沙  
 汰所執奏也者、時忠云、不可有方忌之由、賴業  
 眞人所申也云々、爰新院御定云、周公營洛邑、無方



忌之由、令稱申云々、忽以漢家攝錄之例、難比本朝帝王之儀、歟、經房申旨、一々有其謂、早以此等之趣、可相觸攝政者、即參攝政第申此旨、被申可被問人々之由、歸參奏此趣、左大臣閣下、左大將都督、堀川納言等許、可召之、不可及廣云々、仍各催申之處、閣下無御參、自餘四人參入、去十二日於院殿上會議、先是、去八日於脇陣召陰陽師等也、在憲迎參并兩大外記大夫史等、內々尋問此事、先方角事問泰親、泰親申云、先日議定之時不參會、雖不承子細、於犯土作事者、尤可被忌、勿論事也、但爲禪門之沙汰、被造可然之舍屋、彼人移徙之後、被借召、被用皇居可宜、公家之沙汰一切不可然者、以此趣問季弘、(定時) 先日議定時中不可有禪之 由者、季弘申云、移徙犯土可同之由存之、而延曆已有移徙、今度犯土何事(之)有哉旨所存也云々、爰泰親大怒作色云、汝受誰人訓說仕公哉、太奇怪也云々、季弘卷舌無申旨、只申可從父申狀之由、初爲諛時議、以詐僞奏君、今被糾決之日、爰詞從父命、誠是謀計之由、不忠之臣也、人以謂可取召息狀、衆庶莫不惡季弘云々、次問齋場所事

(於)泰親、申云忌正方也、仍不可有憚、次問大嘗會之事、又申云先例不忌方角也云々、次問大禮事於兩大外記、大夫、史等、先賴業申云、大事不再舉、先度有延引之沙汰、更又有此儀、非無事之憚、猶可被延引者、師尙申云、孝謙天皇、於離宮有大嘗會、任彼例、今年於離宮被行、何事之有哉、隆職申云、期日已迫、次第神事可遲々歟、今年被遂行者、爲守式文也、而日來無沙汰、今月以後有沙汰者、還違式文歟、猶於今者、明年可宜者、同九日、在憲朝臣參上、申云、泰親申牒狀尤不可有異議、抑福原者、自舊都當申方角、仍非正方、無妨于造齋場所云々、兼又先日議定之場、於方角事者、一切不可有沙汰之由、別當卿有其仰、仍吞舌退出了、以季弘申狀被據用之間、成恐之處、今又有此議、素勿論不足言事也云云、以此等之趣、去十二日被仰人々、忠親卿發語云、方角事、陰陽之兩儒申旨無異、餘人不能加詞、大犯事、於離宮被行、(何)事之有哉、但皇居爲禪門之沙汰、雖可被造、其所未出來、遮大嘗會事、有沙汰之條如何、被造齋場所、又以不可然、此



條何様可候哉云々、隆季云、已爲朝家大事、難申、左右、可<sub>レ</sub>在勅定、人以前、有様左大將、同忠親卿、左大臣、申云、次第神事懈怠有不法之事、歟、於今者延引可<sub>レ</sub>宜、若必今年可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂之由、有靈告者、非此限云云、奏此趣之處、可<sub>レ</sub>延引之由、被<sub>レ</sub>仰下了、次第如<sub>レ</sub>此云々、余雖不<sub>レ</sub>候會議之場、事爲重事、仍以奉行職事御狀、具注<sub>レ</sub>之、爲<sub>レ</sub>備後鑒也、經房又云、昨日參詣十ヶ所、其次見<sub>レ</sub>廻洛陽、一切未<sub>レ</sub>荒廢、恐遂可<sub>レ</sub>還此都、歟云々、季長朝臣歸自福原、入夜來示攝政邦綱卿等返報、新院御惱、殊事不<sub>レ</sub>御云々、女房返札云、〔々〕自來月可<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>食御樂、歟、又可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>御灸治云々、又季長云、逢<sub>レ</sub>大夫史隆職之次、語云、近日天下暗然、余可<sub>レ</sub>內覽之由、有<sub>レ</sub>內議、歟云々、此事不可<sub>レ</sub>然々々々、

## 九月〔大〕

〔二日、庚戌雨下、〕〔三日、辛亥天晴、申刻、覺知僧正來談<sub>二</sub>法文<sub>一</sub>、〕

三日、壬子陰晴不定、申刻以後雨下、主税頭定長、持<sub>二</sub>來醫方抄一帖<sub>一</sub>、即定長抄之、與<sub>二</sub>禪門之書也<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>一見所尋召也<sub>一</sub>、此次

問<sub>二</sub>所勞事<sub>一</sub>、〔申云、脚氣之上氣病之所、致歟、委思慮可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申云々<sub>一</sub>〕傳聞、熊野權別當湛増謀叛、燒<sub>二</sub>拂其弟湛覺城<sub>一</sub>、及所領之人家數千宇、鹿瀬以南併掠領了、行明同意云々、此事去月中旬比事云々、又傳聞、謀叛賊義朝子、年來在<sub>二</sub>配所伊豆國<sub>一</sub>、而近日事凶惡、去比凌<sub>二</sub>礫新司之先使<sub>一</sub>、時忠卿知行之國也、凡伊豆、駿河、兩國押領了、又爲義息、一兩年來住<sub>二</sub>熊野邊<sub>一</sub>、而去五月亂逆之刻、赴坂東方了與力、彼義朝子大略企<sub>二</sub>謀叛歟<sub>一</sub>、宛如<sub>二</sub>將門云々<sub>一</sub>、凡去年十一月以後、天下不<sub>レ</sub>靜、是則偏以<sub>二</sub>亂刑<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>鎮海內之間<sub>一</sub>、夷戎之類不<sub>レ</sub>怖<sub>二</sub>其威勢<sub>一</sub>、動起<sub>二</sub>暴虐之心<sub>一</sub>、將來又不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>鎮得<sub>二</sub>事歟<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>大亂<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>國家之主<sub>一</sub>、必以<sub>二</sub>仁惠服<sub>一</sub>遠者也、今則刑戮猥、而仁義永廢、天下之災、殊舉<sub>レ</sub>足可<sub>レ</sub>待、不<sub>レ</sub>必只以<sub>二</sub>十念<sub>一</sub>〔之〕功力、生<sub>二</sub>九品之上利<sub>一</sub>、庶幾只在<sub>二</sub>期<sub>一</sub>、南無安養教主、阿彌陀如來莫<sub>レ</sub>誤<sub>二</sub>來迎引攝誓<sub>一</sub>、恐身仕<sub>二</sub>朝廷<sub>一</sub>而幾年、丹府雖<sub>レ</sub>思<sub>二</sub>社稷<sub>一</sub>、纏<sub>二</sub>宿疲<sub>一</sub>而多日、黃泉只在<sub>二</sub>旦<sub>一</sub>暮<sub>一</sub>、現即憑<sub>二</sub>春日之明神<sub>一</sub>、當<sub>レ</sub>恐<sub>二</sub>仰西方之教主<sub>一</sub>、佛神合力、現當成願而已、

〔四日、丑天晴、〕〔五日、寅天晴、定能卿來談、〕

〔六日、乙天晴、爲方違、參宿女院御堂、〕

七日、丙辰〔天〕晴、早旦女院渡御御堂、爲訪余所惱

給也、余依行步不通、不能出仕、仍所渡御也、

女院還御之後、余歸宅、主稅頭定長來、余疾疑逆氣之病、持來病患論、其說余病一作、仍注進其藥方等二

八日、丁天晴、請佛嚴聖人受戒、自今日夕始念佛之故也、是恒例所作也、雖所勞殊重、此願不可退、仍枉所始也、凡今般之疾勝於先々、內心極弱非無其恐、入夜始所作、股膝不叶心、行步如不通、左右手健冷、又快難動、仍不能用念珠、只焚香知數遍、依聖人教也、又曰威儀之中、行住坐皆以不可叶、仍偏以臥也、是又依疾重、聖人許之故也、凡今度念誦須延引、萬人制之、然而多年之病疾、餘命在旦暮、若不遂此行終命者、奈後悔何、仍強所始終也、自邦綱卿之許、已賜地了、可請取之由、示送者也、

九日、戊〔天〕晴、節供如常、陪膳季長朝臣、自福原光長注申云、新都兩度小火事去月廿八日僧房、去五日盛後倉、之外、無別事候、新院殊有御減云々、天下之幸也、安藝御

幸十二日延引、十月許云々、未聞定說、禪門十二日又被參安藝云々、關東有反逆之聞、去五日大外記大夫史等、依召參院有評議、可追討之由、頭辨宣下、左大將被成官符、維盛、忠度、知度等、來廿二日可下向云々、但羣賊總五百騎許、官兵二千餘騎、已及合戰、凶賊等遁入山中了之由、昨日六日飛脚到來云々、然者大將軍等發向、若有後于事歟云云者、已上光長札〔今日念佛僅貳萬餘遍、所惱之間、每事不法爲願不少、然而強疾修念佛、在定知見者歟、〕

〔十日、己入夜風吹、今日所修六萬遍許歟、〕十一日、戊申自夜雨降下、去八日所遣福原之返札等持來、經房朝臣注送云、新院御惱、每日更發事雖不御、御溫氣未散云々、又關東事、如光長中狀又云、五節未役五人之中、被催左大將右衛門督云々、先日來臨之時、右大將旁難獻之由、連示付了、仍示此旨歟、大夫史隆職、注送宣旨如此、

治承四年九月五日 宣旨、左大將、左中辨、

〔左中辨、〕

伊豆國流人源賴朝、忽相語凶徒凶黨、欲虜掠當國隣國云々、叛逆之至、既絕常篇〔宣〕令、右近衛權少將平維盛朝臣、薩摩守同忠度朝臣、參

河守同知度等、追討彼賴朝、及與力輩、兼又東海、東山、兩道堪武勇者、可令備追討、其中拔有殊功輩、可加不次賞者、

傳聞、近曾爲追討仲綱息、東云々、遣武士等、大庭三郎景親云々、是禪門而仲綱息逃脫與州方了、然之間忽賴朝之逆亂出來、仍合戰之間、逐龍賴朝等於宮根山了、因茲被追落之由風聞歟、而其後上總國住人、介八郎廣常、并足利太郎故利綱子云々、等餘力、其外隣國有勢之者等、多以與力、還欲殺景親等了之由、去夜飛脚到來、事及大事云々、但實否難知、如此事、浮說端多歟、禪門來十二日可參勢州、又新院來廿一二日之間、同可詣給云々、又熊野洪増、猶事惡逆、別當範智與力了云々、

十二日、辛酉〔雨下、定能卿來、余依念誦之間、不謁之、來十八日參福原、今者、指公事之外、不可還故京云々、〕後聞、禪門安藝詣延引云々、

十三日、壬戌朝間小雨、午後晴、筑前守貞俊來云、罷入東國追討使之中、來廿二日可發向云々、信濃國已與力了云々、入夜基輔還自福原、示人々報旨等、

〔十四日、癸亥天晴、〕

十五日、甲子天晴、今日早旦、女院渡御最勝金剛院、依故御前御忌日也、年來於御所所被行也、自今以後、於御堂可被行云々、事了入夜還御、又例年自今夕、被始三七日懺法、而今年無故延引、未得其心、恒例被定置事、輒不可被進退事歟、今日戌刻、余念佛結願畢、七ヶ日之間、滿三十萬遍了、所惱無術、仍反數不幾、又心神散亂、遺恨多端歟、然而扶厚疾、強修之、三寶必可有知見者歟、又每夜轉讀法華經一卷、自八日到今日、滿一部、是同恒例之勤也、秉燭以前偏念佛、仍不能讀數部也、〔今晚女房夢、〕

十六日、乙丑〔天〕晴、自今夜、又居物付一渡邪氣、依所勞殊無術也、知康法師來、今日女院密々御灸治云々、

〔十七日、丙寅天晴、〕

〔十八日、丁卯天晴、召春寬令讀經、日來渡大將室邪氣、明日可追物云々、〕

十九日、戊辰雨降、召施樂院使賴基、示合療治事、廿一日可加灸治之由令申、但件男所勞無術云々、



氣力衰損、不能參上、歟、憲基定成之間、可賜之由、申院了、而各未來、憲基藝州御幸御共云々、定成定上洛歟、傳聞、筑紫又有叛逆之者、禪門私遣追討使了云々、又熊野事、追日熾盛、然而未及其沙汰云云、

廿日、己雨下、右大將遣馬於少將維盛朝臣之許、在福原、使內舍人依下向追討使也、今日大風、

廿一日、庚午、晴、召知康法師、覺加灸治、廿餘所、依所

勞危急也、定成、憲基、雖申院未來、自明日入土用、待彼等者不可叶、仍付右京所召知康也、

給祿長相三四、雖乏少、依爲常事也、今日、上皇御參藝州云々、

廿二日、辛未、晴、傳聞、東國事追日其勢及數萬、當時七八ヶ國掠領了云々、

廿三日、壬申、晴、右少將維盛朝臣已下、追討關東凶

賊之使等入洛、一昨日出福原、昨日宿小屋、今日入故京、來廿七八日之間可

有首途、但以一昨日爲出門、爲吉日之故云

云、傳聞、高倉宮、及賴政入道等、去朝比經駿河國、

猶向與方之由、有彼人々告札云々、件狀披露世

間、奇異之又奇怪、無物取喻、彼宮子稱三宮、有幼

少之人云々、若以件宮稱父宮歟、將又天狗之所

爲歟、雖虛誕、一旦如此之披露、未嘗有事也、是則禪門失人望之間、於事爲彼欲表凶瑞、天下之士女聞巷、成奇怪之風聞者也、伯州莊園、停廢宣旨到來云々、四ヶ所云々、

〔廿四日、癸酉、雨下、〕

〔廿五日、甲戌、〕

廿六日、乙亥、晴、大夫史隆職宿禰來、只今自福原所入洛也云々、明日爲參定考、所上洛云々、

入夜定能卿來、示五節之要事、

廿七日、丙子、晴、未刻、左大將參女院御方、以基輔

示云、承御不例六借御之由、先所參此御方也、只

〔今〕可參其御所、若中間申候歟云々、報云、雖有

渡御、更不可及、見參所勞殊無術、適御上洛不見

參、尤遺恨者、重示云、於此御所申案內、猶似無便、

參中門邊、可承御有樣云々、努力々々不可被

光臨之由、重再三制之、是則所惱真實無術、面謁不

可叶、又始被立過、空不對面者、事似無義、仍

強制之、右大將於女院御方謁之、數刻被候云々、

入夜依召、乍乘手輿、參女院御方、有被仰事

等、即以歸來、今日申刻、源中納言被來、日來在福



原、爲余所惱訪、去夜上洛云々、隔簾謁之、

廿八日、丁未天晴、傳聞、山大衆蜂起云々、酉刻、大夫史

隆職來、召前仰雜事、（新都之間事、委細有相語事

等、不能具記、昨日定考、今日祈年殺奉幣、共以延

引、諸國不濟料米及幣料等之故也云々、

廿九日、戊寅天晴、今曉、追討使等發向、（丁未）云々、

卅日、己卯天晴、

〔治承四年冬〕 〔歲次庚子〕

十月〔小〕

〔二日、庚辰雨下、定能卿來、只今下向福原云々、〕

二日、辛巳雨下、或人云、上皇昨日御下向云々、或又僻

事云々、又傳聞、（去月晦比、熊野湛増之館、其弟湛覺

攻戰、相互死者多、未落候、云々、又近江國住人之

中、有被召之者、相禦之間、度々合戰云々、凡近日

在々所々、莫不乖背、以武治天下之世、豈以可

然哉、誠亂代之至也、

三日、壬午陰時々微雨、入夜、大夫史隆職來、只今參

向新都云々、自今夜、女院御方被始行御懺法、恒

例九月十五日被始、今年延引也、傳聞、熊野合戰謬

說云々、又傳聞、關東事已及大事、

〔四日、癸未天晴、〕

〔五日、甲申天晴、〕

六日、乙酉陰晴不定、入夜左衛門權佐光長來、明曉參

新都云々、召簾前仰所惱子細可披露之由、後

聞、今旦新院自嚴嶋還御云々、

七日、丙戌天晴、賴輔入道、基輔朝臣等、參福原、爲

令見給地也、以政朝臣參上、申梅宮社司奏狀

可付職事之由、（載三條事、依奏早被行御下之處、下

事違例之由、去七月被宣下、即注進此仰可付光長之由

了、

八日、丁亥天晴、入夜傳聞、高倉宮必定現存、去七月

下着伊豆國云々、當時御座甲斐國、仲綱已下相具

祇候云々、但不能取信、凡權勢之人、依遷都事、

失人望之間、如此之浮說流言、不可勝計歟、誠

不便事歟、

九日、戊子天晴、入夜爲冬節、參宿女院御方、後聞、

去六日禪門參嚴嶋並宇佐宮等云々、

〔十日、己丑天晴、聽聞御懺法之後、及午後退出、〕

〔十一日、庚寅天晴、聽聞御懺法、〕

十二日、辛卯〔天〕晴、今日逐邪氣、明日滿四七日、仍縮二日、今日所追也、

十三日、壬辰〔陰〕、賴輔入道、基輔等自福原歸來、給地猶未定、仍不能打定云々、

〔十四日、癸巳〕

〔十五日、甲午〕

〔十六日、乙未〕

十七日、丙申〔天〕晴、傳聞、追討使於遠江國、爲彼國住人、被射危云々、後聞謬說云々、

十八日、丁酉〔天〕晴、酉刻、右中辨兼光來、召前談世上事等、下向維摩會、明後日可歸參福原云々、一

乘院法印被勤他寺探題、所作優美、萬人莫不拭感淚云々、又衆徒有申長者事、其趣、勅勘之僧綱已

下、可被免之由也、又兼光語云、去八月新院御祈爲行御神樂、參賀茂社之次、神主重保相語云、去比

通夜寶前、眠歟非眠歟之間、御寶殿震動、于時故法性寺殿、正東帶御坐寶殿傍、又歎息而曰、無由

遷都之有天、如此久寶殿令搖動給也トテ、事外思食歎

云、五節臨時祭等之間、有種種難義等、可被問人

人云々、又云、新院御不例雖有少減、未令復尋常給云々、又次余所惱子細示聞了、良久退出、

十九日、戊戌〔天〕陰雨下、或人云、高倉宮被誅伐之由猶有疑、其故、管冠者ト云〔冠〕男、年來參彼宮、住

吉邊居住、宮渡御三井寺之後、〔白地〕參入、依非武勇之者、即欲退出之間忽逃去、不慮之外奉相具、

向南都之間、於路被伐了、件男年齡卅餘歲、容貌非醜、頗以優美、彈和琴吹橫笛云々、稱被誅戮之由、宮若此人歟云々、件男參彼宮之由、世

人遍不知之、被殺害之由、又以日來不風吹、此間知此子細之輩謳歌云々、但宮若現存者、爭數月之

間、其實不風聞哉、猶不被信受事也、

廿日、己亥〔天〕陰雨下、傳聞、延曆寺衆徒、熾盛蜂起、以奏狀付職事了、是可止遷都之由也、若無裁

許者、可押領山城近江兩國之由、成支度之由云々、今日申刻、大藏大輔泰茂來、召前問天變

及新都作事之間事、申云、此間天變少々所見也、就中去九日流星殊重云々、但不見給候、福原之司

天等所見也云々、又新都作事、竹柱之外一切不可候、爲他人之沙汰一條、猶不担任事也、如法爲私沙

汰造畢之後借召者、不可有憚、凡作事指圖以下用途等、一事已上爲御沙汰、只假以他人爲名之條、偏似謀神、矯飾之沙汰也云々、此事猶召在憲泰親等、可尋問也、今夕定能卿入京云々、

廿一日、庚〔天〕晴未刻、中御門大納言被來、隔障子謁之、依所勞猶不快也、語云、去八日攝政上表、候其席、其後暫經廻新都、去十六日歸洛、大乘會事、可奉行也云々、又語云、候福原之間、有被尋問一事、在憲泰親等朝臣、爭申御方違之間事云々、其趣、泰親申云、雖大將軍方之內、一所不留御四十五日者、其忌可浮、仍可御方違、且是例也、在憲申云、以宿不當禁忌之方、所謂方違也、於同大將軍方內者、雖替所、其忌不可浮、其理不當、其例不聞、未曾有事也云々、者召兩方勘文、可決羣議之由、令申了云々、余案此事、在憲申狀有理、泰親申狀、偏諛時議、欺、可謂不忠、申刻、南方有火事、頻雖騷動、即打滅了、此間二位中將來、依物騒不面對面、今日早旦、定能卿息兵衛佐親能來、只今爲方違、相具父卿向大原云々、

〔廿二日、辛〕天晴、定能來、明後日可下向云々、今日

有吉夢

廿三日、壬〔天〕晴、早旦、頭辨經房、送書問新嘗會、及賀茂臨時祭之間事、其狀如此、

新嘗會、并賀茂臨時祭之間事、

一新嘗會事

右五節豐明節會等於此都、可被行、而新嘗祭依無其所、於本京神祇官可被行之、辰日節會小忌、卿相已下輒難參會、欺、何樣可被進退哉、兼又供曉膳了之後、采女參內可奏事由、以參著日、可爲其期、欺、

一臨時祭事、

右任先例、以式日酉日、雖可被發遣、行程不可叶、欺、未日發遣、以酉日可被當參着日、欺、兼又還立御神樂、有先例、雖經日數、以歸參日、可被行、欺、若又准石清水之例、於社頭可被行、欺、

以前條々、早可令計言上給者、攝政殿御消息如此、以此趣可令申上給、經房恐惶頓首謹言、

十月二十二日

左中辨經房上、

進上 伯耆守殿、

逐言上、

大外記賴業、師尙等申狀、進上之、御覽之後、可令返上給上候、爲行大乘會日他昇上候也、事次候者、可令計披露給上候、經房謹言、

〔外記例、可續加之〕以基輔、返事答自是可申之由了、〔定能來、明曉又可下向云々、〕

廿四日、卯〔天〕晴、今日女房參女院御方、此日御懺法結願也、中御門大納言、右大將之外、上達部不參云云、今日、法勝寺大乘會始云々、頭辨經房行之、

廿五日、辰〔天〕晴、先日經房所尋問之兩條、注折昏遣之、其狀如此、

新嘗會事、

卯日曉膳以後、辰日節會以前、推其行程、〔定〕難參會歟、任師尙勘申、於上卿辨者、待曉膳、祇候祭奠之庭、至參議少納言者、供夕膳豫參宴會之席云、後云是禮儀共以不可失、尤可被據用歟、合卜之輩相分着、小忌之條、雖似有便、於禮乖理、何況如賴業申狀者、聖代已貽違例之文、當時爭追失儀之跡、論道理不當、謂先規難用、旁以不可然歟、抑以采

女歸參之日、爲其期之條、非愚意之所及、辰日歸參可相叶者、上卿以下又有何煩哉、不可及他議、件條依難叶、忽此沙汰出來歟、然者節會及巳午日歟、大嘗會之外、未曾有之例也、一切不可有延引之儀、彼采女縱雖不參會於宴會者、辰日必可被行也、

加茂臨時祭事、

未日立使、酉日參社、行程之所及、更以無異儀歟、御神樂事忽改還立之名、被准他社之例、雖有變流例之難、非無尊敬神之誠歟、何況以歸參日被行神宴者、支干相違之條、頗神事違例歟、准石清水之例、於社頭被行御神樂、旁可叶時議歟、

今夕爲方違參宿女院御方、

廿六日、巳〔天〕晴、午後歸宅、稱頭辨他行之由、昨日之使者歸來、仍又遣了、〔隆信來、〕

廿七日、丙〔天〕陰、入夜雨下、早旦頭辨返事到來、以此旨可奏聞云々、昨日祈年穀奉幣之間、返事遲々云々、〔今日物忌也、〕

廿八日、丁未、夜雨下、午後陰晴不定、大乘會結願也、



延曆寺衆徒、訴遷都奏狀、披見之處、頗優美、所申得道理之故歟、左中將清通、今夜初參進名簿、廿九日、戊申天晴、傳聞、坂東逆賊黨類、餘勢及數萬、追討使庭弱無極云々、誠我朝滅盡之期也、可悲々々、未刻許、俄天陰、大雨大風雷鳴、是天變歟、可恐々々、

## 十一月

一日、己酉〔天〕晴、傳聞、追討使維盛朝臣已下、被追歸了、已欲赴近江地之間、山僧可相禦之由風聞、仍更向伊勢地了云々、凡逆黨之餘勢、不知幾萬騎、東山東海之諸國、併以與力、官軍之勢、本五千餘騎、被追落之間、僅不過三四百騎云々、凡不能左右、往昔以來、追討使空被追返之例、未曾聞事也、於今者、重不及相防歟、依人之惡逆、上皇令懸其餘殃歟、誠可悲事也、佛天定有冥助歟、所憑只是許歟、山僧又成種々之支度云々、又聞、熊野湛増彌乘勝云々、鎮西謀叛之者、又以不能征伐、積惡之所、令然、感果時至歟、不與其惡之病士、只所仰三寶神明之護持也、

今日依火事之虛聞、頗騷動、遂以無實、余爲治風焚桑灸之、其煙遙及、出自他屋之上云々、因之見者雖驚、敢不勸搖、存此子細之故也、

二日、戊戌〔天〕晴、主稅頭定長來、今日經房朝臣許送書札、報云、今日參結政、可見官奏之文、明曉龍夜可參新都云々、後聞、今日未刻、入道相國歸來云云、

三日、亥辛〔天〕晴、邦綱卿示送云、新院御不豫、猶以不快云々、經房朝臣、日來在京、今曉下向了、余以消息、所勞之子細示付了、爲令披露也、右近府廳頭清景來云、來十三日可有句之由、自外記所相觸也、舞樂有無不審云々、答云、不可有歟、但可問外記者、

四日、壬子〔天〕晴、傳聞、追討使不向伊勢、只忠清許赴伊勢了、他人可入京云々、

五日、癸丑〔天〕晴、傳聞、前將軍宗盛、可有遷都之由、示禪門云々、不承引之間、及口論、人以驚耳云々、又傳聞、追討使等、今日及晚景入京、知度先入、僅廿餘騎、維盛追入、又不過十騎云々、先去月十六日、着駿河國高橋宿、先是彼國目代、及有

勢武勇之輩、三千餘騎、寄甲斐武田城之間、皆悉被伐取了、目代以下八十餘人切頸懸路頭云々、同十七日朝、自武田方以使者相副送維盛館、其狀云、年來雖有見參之志、于今未遂、其思、幸爲宣旨使、有御下向、雖須參上、程遠隔一日路峻、輒難參、又渡御可有煩、仍於浮嶋原甲斐與駿河之問廣野云々之相互行向、欲遂見參云々、忠清見之大怒、使者二人切頸了、同十八日、富士川邊構假屋、明曉十九日、可寄攻之支度也、而之間、計官軍勢之處、彼是相並四千餘騎、作平定陣議定已了、各休息之間、官兵之方數百騎、忽以降落、向敵軍城了、無力于拘留、所殘之勢、僅不及一二千騎、武田方四萬餘云々、依不可及敵對、竊以引退、是則忠清之謀略也、於維盛者、敢無可引退之心云々、而忠清立次第之理、再三教訓、士卒之輩、多以同之、仍不能默止、自赴京洛以來、軍兵之氣力、併以衰損、適所殘之輩、過半逐電、凡事之次第非直也事云々、今日着勢多、先以使者馬允示子細於禪門、禪門大怒云、承追討使之日、奉命於君了、縱雖礙於敵軍、豈爲耻哉、未聞承追討使之勇士、徒赴歸路事、若入京洛、

誰人可合眼哉、不覺之耻貽家、尾籠之名留世歟、早自路可暗趾也、更不可入京云々、然而竊入洛、寄宿檢非違使忠綱之宅云々、於知度者、先以入洛、在禪門之八條家云々、大略以傳說記之、定有遺漏歟、但是供奉軍陣之輩說也、子細雖多、難及短毫者也、

六日、寅天晴、自福原或人示送云、重可遣追討使、教盛、經盛等之子息云々、豈叶事之要哉、世上之嘲、只在此事云々、實嚴閑梨來、

七日、卯天晴、法性寺座主來、自十一日可籠居善峯寺邊云々、今日、姬君習心經、及眞言少々、於件法眼、雖八專間強不憚之、且先規存之故也、

八日、辰天陰雨降、物忌也、入夜、右近府持來旬番奏簡、大將加名字返給了、傳聞、可有還都之由、雖被仰山僧等、忽不可然、大略被誘仰之體也、始終不可叶事歟、又前大將、並教盛卿等、自可赴云云、凡遠江以東十五ヶ國與力、至于草木、莫不靡云々、

〔九日、丁天晴、〕

十日、戊天晴、爲方違、參女院御所、今夜遣福原

之使歸來、歸都事、頗有沙汰云々、

十一日、己未〔天〕晴、宗雅來云、還都事可被令問、人

人之由、重衡朝臣所示送也云々、此日、遷奉新造

入道相國家、於此第、可被行五節、仍所新造云々、

十二日、庚申〔天〕晴、入夜左中將清通朝臣來、隔簾謁

之、今日、右大將可參、帳臺御出、〔杯〕童女御覽等之

由、頭弁以消息、送基輔朝臣之許催之、大將自書

請文、申可參之由了、傳聞、關東逆黨、已來及美乃

國云々、仍先爲伐美乃源氏、遣禪門私郎從等、其

後可被遣追討使云々、

十三日、辛酉〔天〕陰、或人云、決定可有歸都事云々、

爲悅不少、但凶黨不可依此還御、歟如何々々、此

日、於福原離宮新造皇居、被行萬機句云々、上卿

左大臣、出居左中將泰通朝臣不待內侍出昇殿、希

代事歟、是左大臣命云々、可奇々々、

十四日、壬戌〔天〕陰雨下、此日欲參福原之處、可

有歸都之由、一定已了云々、仍爲聞、慥說、暫以

遲留、入夜人傳云、還都事、雖有沙汰、殆以後〔乎〕、

于今定日不聞云々、仍明曉可首途也、昨日旬御

鑑奏之外、被止番奏庭立奏等云々、

十五日、癸亥天晴、大將相共辰刻出京、余烏帽狩衣直衣

也、大將水干袴、共人七八人許、或車或馬、侍五六人、

隨身等相從、又女房車一兩也、已刻乘船、十餘町棹下

之間、自福原飛脚到來、持來書札、披見之處、大將殿

御下向、隨重令申可候也、縱雖出途中給、必々可

令留給、於子細、追可申云々者、是禪門、雖不知

子細、無左右歸了、近日之事、萬事非無不審、何況

縱橫之浮說、不可勝計、雖然天下之大事、不可

默止、仍強病豫參、且是爲恐憚時議也、而自彼已

被止參入、此上何故可企推參哉、仍以歸宅、牛馬

皆返遣了、以興赴歸途、大將暫騎馬、其後用輿、

于時未刻、經家基輔兩人爲新昇殿之者、仍必可候

五節之上、不參之子細爲令申披、所令參也、於大

將者、可參帳臺試及童女御覽之由、蒙催領狀、而

無音不參之條、人以成言歟、今依此告、自路罷歸之

由、可披露之旨仰含了、

十六日、甲子〔天〕晴、此日、大原野祭也、依脚病不能

拜之間、自河原進發、又以貯劍一腰、奉納春日御

社、去十三日付、禊禊得樂了、又女房相具姬君、參詣吉田

社、依吉日、今日所令進也、祇園等、定能卿五節之間雜事、今日沙汰送



了、先日打出并借物等遣了、已刻自<sub>二</sub>福原<sub>一</sub>重脚力到來、昨日被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>不可<sub>レ</sub>參之由<sub>一</sub>、全非<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>女院御不豫、并余所勞、存<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>心之由<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>止云々、又云、來二十五六日之間、可有<sub>二</sub>歸都<sub>一</sub>、五節於<sub>二</sub>彼新都<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、申刻、靜賢法印、來<sub>二</sub>語賴輔入道宅<sub>一</sub>云、去十四日出<sub>二</sub>福原<sub>一</sub>、彼時遷都事猶未<sub>レ</sub>定云々、時忠不<sub>二</sub>甘心<sub>一</sub>之故云々、

十七日、<sub>丑</sub>〔天〕晴、傳聞、美濃源氏等、皆悉與<sub>二</sub>力凶賊等<sub>一</sub>、美濃尾張兩國併伐取了云々、又聞、熊野權別當湛増、令<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>其息僧<sub>一</sub>、仍有<sub>二</sub>宥免<sub>一</sub>云々、又鎮西之賊、<sub>諸地</sub>無<sub>レ</sub>指放<sub>一</sub>、恩免云々、關東聞<sub>二</sub>此等之子細者<sub>一</sub>、彌察<sub>二</sub>武勇之柔弱<sub>一</sub>歟、

十八日、<sub>寅</sub>〔天〕晴、今曉有<sub>二</sub>最上之吉夢<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>七ヶ日精進、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>轉<sub>二</sub>讀般若心經三千卷<sub>一</sub>、<sub>太神宮、賀茂、春日、各千卷、法樂、</sub>是皆依<sub>二</sub>靈夢<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>始也、邦綱卿送<sub>レ</sub>書云、一日還御事、返々神妙、此都大風、凡無<sub>レ</sub>物<sub>二</sub>于取<sub>一</sub>喻、人家多以破損、因<sub>レ</sub>之禪門被<sub>レ</sub>優<sub>二</sub>申御風病<sub>一</sub>歟云々、又示曰、大將殿還都之日、於<sub>二</sub>鳥羽之邊<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>云々、此日物忌也、

十九日、<sub>卯</sub>〔天〕晴、物忌也、傳聞、還都、來二十六日御

出門、來月二日可有<sub>二</sub>御入洛<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>仰、延曆寺衆徒大悅、始<sub>二</sub>種種御祈等<sub>一</sub>云々、今夜余夢<sub>二</sub>天下動靜事<sub>一</sub>、吉凶未<sub>レ</sub>決、或人云、東亂及<sub>二</sub>近江國<sub>一</sub>云々、

廿日、<sub>辰</sub>〔天〕晴、右中辨兼光來談、還都之間沙汰起、事子細惟多、不<sub>レ</sub>遑<sub>二</sub>記錄<sub>一</sub>、

廿一日、<sub>巳</sub>〔天〕晴、閭巷云、近江國又以屬<sub>二</sub>逆賊<sub>一</sub>了、前幕下之郎從、下<sub>二</sub>向伊勢國<sub>一</sub>之間、於<sub>二</sub>勢多、及野地等

之邊、昨今兩日之間、十餘人梟首了、其中有<sub>二</sub>飛騨守景家<sub>一</sub>、<sub>彼家後見、有勢武勇者也、</sub>姪男、被<sub>レ</sub>伐了云々、甲賀入道、<sub>年來住被國、源氏之</sub>一族、并山下兵衛尉<sub>同源氏</sub>云々、等、爲<sub>二</sub>張本<sub>一</sub>云々、未刻自<sub>二</sub>福原<sub>一</sub>人告云、還都被<sub>レ</sub>縮畢、來廿三日出門、廿四日

著<sub>二</sub>寺江<sub>一</sub>、廿五日着<sub>二</sub>木津殿<sub>一</sub>、廿六日御入洛、必定了云々、愚案、若可有<sub>二</sub>還都<sub>一</sub>者、日來之間、早々可有

也、以<sub>二</sub>官軍<sub>一</sub>於<sub>二</sub>近江伊勢兩國<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>相禦也、而一切無<sub>レ</sub>追討使之沙汰、敵軍已充<sub>二</sub>滿隣國<sub>一</sub>之刻、忽以還都、

豈叶<sub>二</sub>物議<sub>一</sub>哉、莫<sub>レ</sub>言之々々、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>三ヶ日、賀茂春日兩社奉<sub>二</sub>幣帛<sub>一</sub>、仍修<sub>レ</sub>祓、

廿二日、<sub>午</sub>〔天〕陰雨下、傳聞、自<sub>二</sub>關東<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>一院第三親王<sub>一</sub>、<sub>被伐也、</sub>宣、可<sub>レ</sub>誅<sub>二</sub>伐清盛法師<sub>一</sub>、東海、東山、北陸道等

武士、可<sub>レ</sub>與力<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>彼國々<sub>一</sub>、又給<sub>二</sub>三井寺衆徒<sub>一</sub>云



云、其狀、前伊豆寺仲綱奉云々、是等疑詐偽事歟、今日修祓、〔如昨日〕

廿三日、〔天〕晴、入夜雨下、今日修祓如昨日、申

刻人傳云、去夜、手嶋藏人某、元祿三條宮、近年、放火、

福原人宅、遂電向東國了云々、又聞、近江國併一統

了、水海東西船等、悉付東岸、又以雜船筏等、渡勢

多浮橋了、凡北陸道運上物、悉以點取了、大津之邊人

家騷逃、凡鼓動無極云々、三宮御坐遠江橋下宿、

賴朝等在美濃尾張之境、先以美濃近江等國人之

勢可推入大津及山科邊、以三井寺可先陣、隨

形可寄宿法勝寺、及大內等云々、於今者、勿論猶

以無追討使之沙汰、福原之邊人氣色自若、敢無驚之

色、偏以醉鄉、適所在之武士、此兩三日之間爲出立

追討使事、各賜身暇、下向本國、福原之勢僅二千騎

云々、大略運報盡了期歟、新院御惱危急云々、入夜

下人云、歸都停止了、明曉故進人可聞真偽也、傳

聞、山與三井寺有闘諍、依其事延曆寺可燒園

城寺云々、後聞、宮賴朝等在駿河國云々、宮不審

物也、

廿四日、〔天〕陰、傳聞、還都必定了、昨日御出門、今

日着御寺江、明日渡御木津殿、明後日早旦御入洛云々、依近江騷動、還都可有猶豫之由、雖其議出來、猶一定了、法皇禪門同可有上洛、一人不可殘福原云々、今日泰親朝臣來、依先日召也、去今月之間、天變十餘度、其內禪門前將軍等、必定可有事、又天下可有<sub>二</sub>大葬送<sub>一</sub>云々、莫言云々、

廿五日、〔天〕晴風吹、此日、女房及姬君、參詣賀茂社、境節依無骨、能忍之召人、車侍男共、兩三人在共、無出車、又不<sub>レ</sub>褻幣、且依夢想所參也、今晚又爲

余有最吉夢、來月可有吉慶之由也、余去十八日精進潔齋、至昨日一七ケ日之間、轉讀般若心經三千卷、結願之夜有此夢、仰而可取信者也、今日佛殿聖

人來、日來密々件僧祈可有還都之由、已成就、太以有喜悅之色、入夜光長來、五節之間、實家卿蒙可參童女御覽之催、直衣出衣參上之間、依未<sub>レ</sub>被

聽直衣、被追歸了、職事未練之所致歟、尤不便云云、又帳臺試攝政被出、日來領狀、左大臣、右大將、時忠等也、而左大臣俄故障、右大將自路歸了、仍被召

加實守通親也、左大將雖蒙催、素稱病不參云々、今夕行幸御幸、共着御木津殿云々、傳聞、近江勢非

幾云々、又北陸道頗有反氣云々、〔御〕逗留三嶋江之邊、今日入夜可有入御云々、〕

廿六日、戊晴、早旦人告云、昨日大風之間、雜船多以

入海、仍不着御木津殿、御逗留三嶋江之邊、

今日入夜可有入御云々、午刻、藏人兼時送使者云、行幸已過御相摸辻、今暫而可着御草津、

云々、仍右大將着束帶、如常時給螺細劍、同參上、于時

隨身不給染分袴、只例褐襖袴也、上藏者前白晝行幸、

雖須給染分袴、藥事體不能正禮儀、還似守株、

仍夜陰之儀、攝政隨身又同云々、依先日之催、欲參

會鳥羽之處、行幸早成、仍於七條朱雀辻、參會供奉、日

未沉西山、着御五條第、卿家供奉公卿、成範、時忠

等許也、無公卿將、左大將不參、仍右大將稱警、少將

有房役、御璽、中將一人不候敷、尤不便、行幸之體太

以輕云々、右大將退出之便參新院、撤老懸但、謁女房

及邦綱卿等云々、余問御惱之安否於女房、將也、歸

來示報云、逐日有御增云々、余依疾不參上也、院

入夜御入洛、御賴盛卿六波羅第、號池、法皇未刻許入

洛、御故內大臣六波羅第、號泉、武士數十騎、路之間

奉圍繞云々、去六月二日、忽然而遷都於攝州福原

之別業、神不降福、人皆稱禍、依彼不可、致此災異、所謂天變地天之難、旱水風虫之損、嚴神靈社之怪、關東鎮西之亂等是也、而依神明三寶之冥助、今有此還都、一天之下、四海之中、王侯、卿相、縉素、貴賤、道俗、男女、老少、都鄙、莫不歡娛、此事誠是散衆庶之怨、協萬民之望者也、抑禪門相國、忽變中心之惡志、聖主仙院、各歸上都之宮闕、人雖有悅色、世還成奇思、歟、但如云々說者、有條々由緒、歟、先關東之謀叛、絳起自還都云、何者、禁囚法皇、刑罰重臣、洛都占狹少之地、民人懷莫大之愁、皆雖假名於勅宣、其實只任雅意、此等之子細、逆心已炳焉、早達遠境之間、各集近國之兵、伐亡平家之盛勢、欲起源氏之絕跡云々、是則去歲僭上之符、今年遷都之徵也、君王若歸帝都者、賊徒何亡、民烟哉、是次台嶽之衆徒、上度々之奏狀、達面々之醇憤、是則依近都之便、占深山之居、各結方丈之草庵、互學圓頓之花文、然間依遷都事、無人于歸依、偏失活命之計、已爲離山之基云々、所申非無理、尤其是可裁許、是次新院御惱、逐日有增、於邊土之行宮、若大漸之事出來者、欲遣終身之恨、杜可有歸都

之由、院宣及再三、不能默止云々、三、是次禪門深悔、積惡之重、爲落神明之心、此儀出來云々、四、依、如此等之由來、忽不慮之還都、是天下之所謳歌、強非

浮言歟、仍粗錄子細而已、愚意案、此事天地之變異四棄之天殃、何必依遷都、只惡逆之所令然也、若猶不委政於公者、定無還都之證者歟、莫言莫言、今夜爲方達、參宿女院御所、

廿七日、乙、天晴、申刻歸家、以基輔問新院御惱事於近臣女房、逐日有御增云々、今日園城寺僧綱十餘人、依召參、上皇有被尋仰事、若同意關東之山有風聞歟、邦綱卿示送云、山大眾之中、於堂衆者併與近州之賊黨了、勿論之次第也云々、

廿八日、丙、天晴、實嚴阿闍梨來、明日可始修愛染王護摩之事、具示含了、今日使大膳權大夫泰親朝臣如法修泰山府君祭、依無物、賜龜甲地螺鈿鞍一懸、爲祭物、依夢想事也、仰長光入道令草都狀、以基輔朝臣爲使、余精進潔齋、泰山府君咒誦一萬遍、又着衣冠降庭拜之、亥刻、基輔歸來云、泰親殊致信心、奉祈請之由令申云々、必可有御夢想之事歟云々、傳聞、來月二日可遣追討使於江

州云々、又若狹國經盛卿掌吏務、有勢之在廳、與力近州了云々、

廿九日、丁、天晴、午刻、頭弁經房朝臣送書云、東國逆亂事可被豫議、相扶所勞可參、新院御氣色云云、依疾不能參入之由令申了、於今者可被議何事哉、太無所據、只早々可被遣追討使也、申刻、大外記賴業來、依物忌不調、先日所進借之帝王略論五卷返給了、賴業申云、明日可被行仁王會、來月二日可被發遣廿二社幣、以殿上人可爲使云々、入夜人傳、近江國武士數千騎、自今日申刻許打入三井寺云々、依此事、六波羅八條等邊、武士騷動、京中物忌無極云々、入夜時降雨、卅日、戊、陰晴不定、午後小雨、傳聞、昨日近州之武士等不及數萬、只船六艘着西岸、少々打入寺中、僧徒等問子細、爲點定船來之由、返答云々、惣其勢百騎許之中、於半分者點取船等、歸着東岸了、殘五十騎許、着船於前岸、猶留居西岸云々、且爲點定船等、且爲令伺事體所來歟、今日京中頗靜云々、酉刻、定能卿來、談旬五節等之間事、又天下怖畏事、誠萬人不遁之恐歟、人傳云、甲賀入道無



左右欲打入之處、甲斐武田送人云、暫不可寄攻、我可行向、待具テ可寄也、無勢ニテ被追歸者、可有後悔云々、仍爲相具彼、暫迴々云々、謂甲賀入道者、義兼法師也、刑部丞義光之末葉云々、

〔治承四年冬下〕

十二月〔小〕

一日、己〔天〕晴、早旦光長告送云、今夕可有行幸、右大將可令供奉者、出立之間、已刻示延引之由、又午刻使者走來云、猶有行幸云々、然間、酉刻許、一定延引之由、重告示、如反掌、不知由緒、入夜人傳曰、伊賀國有云平田入道者、俗名家繼、故家定法、師男定能兄云々、伴法師寄攻近州、伐手嶋冠者、黨類耶從、相并十六人、泉首二人獨得云々、又追落甲賀入道義重法師也、城丁云々、

二日、辰〔天〕晴、辰刻、追討使下向、近江道方、知盛卿爲大將軍、其外一族輩數輩相伴、慥交名可尋記、信兼盛澄等、同以向云々、伊賀道、少將資盛爲大將軍、前筑前守貞能相具云々、伊勢道、即國司清綱行向云云、今日逆亂御祈、被發遣十六社、奉幣使上卿三條大納言實房卿云々、後聞、依使不足、被立十三社、

云々、使皆殿上人也、行事并兼光勤稻荷使云々、依使沙汰、及丑刻被發遣、未曾有事也、自今夜始祈一壇、不空彌來、此沙門、

三日、辛〔天〕晴、今晚、最勝最上吉夢、傳聞、今晚近州逆賊引楯逐電、到美濃燒邊、仍官軍勢多野地等在家數千宇、放火追攻云々、終日之間餘燭猶不盡云々、美濃源氏等五千餘騎、出向柏原、近江國之邊云々、官兵近江道伊賀道相並、京下之勢三千餘騎云々、又人云、奈良大衆熾盛蜂起、人不知何事、境節尤奇怪事歟、山大衆三方相分丁云々、一分座主方大衆、與方官兵、一分堂衆之黨、與方、越後城太郎助永、於甲斐信濃兩國者、力近州云々、野常陸等之邊、乖賴朝之輩出來云々、依還都之騷、凶賊等頗勢衰者歟、但如此之傳聞、多是虛詐也、難存實說歟、或人云、去晦日院殿上定、左大辨長方奉宥法皇、可被召返松殿之由、再三令申、人々更以不同之云々、長方猶公人也、不諛時勢吐直言、感而有餘、誠是諫諍之臣也、可謂直可謂直、四日、壬〔天〕晴、申刻、大外記賴業來、酉刻、大夫史隆職來、各召簾前仰雜事、賴業退下之後、召隆職、共云、去月晦日、



於院殿上、被議關東亂逆事之間、左大臣、被定、  
 申可改元之由、因之忽其沙汰出來、今月一日申刻、  
 今夕可有改元定之由宣下、而官外記相共改元可  
 有猶豫之由奏聞、外記申云、踐祚明年被改元、恒例也、當  
 吉何況天慶將門之時無改元、彼已爲吉例、又二日可被遣、追討  
 使云々、改元號之翌日被行凶事、其理可然哉云々者、官申云、改  
 元者兼日仰儒士召勅文、有議定、而當日申刻初宣下、未聞如此  
 卒爾之儀、加之三日可被成、追討使官符、凡改元之後政始以前、難  
 被行如此之事、就中於追討凶徒之沙汰、仍爲行隆奉行、被  
 汰哉、云、彼云、是旁不叶物議者歟云々、  
 仰合禪門、禪門申云、素可有改元之由、全不計  
 申、只左大臣被申此旨之由、承許也、左右難定申、  
 但如承者、官外記申狀、其理可然云々、仍忽然而停  
 止了、賴業云、昔將門謀叛之時、爲八幡大菩薩御使、  
 社士一人降自天、來將門之前、件男眼色稱授朕位之  
 由、因茲起謀叛之心云々、先年語此事於信西、信西  
 云、有亡國之天者降自天ト云文、將門不知歟云  
 云、又云、將門者有帝者之連者也、而尊意贈僧正調  
 伏之法驗不默止、雖得將門之首、依降伏有王者  
 之運者、尊意又經五ケ日天亡云々、又云、關東縱雖  
 被征伐、謀叛之儀不可絕、必猶有大事歟、人之  
 氣色太惡、成了云々、隆職云、去月上旬之比、依時忠  
 卿申狀、以權右中辨光雅爲推問使、可被遣美濃

國之由、沙汰出來、即爲彼卿奉行、被召仰光雅了、  
 光雅退出之後、平辭退之、替被召仰竿博士廣房、廣  
 房參禪門申子細、禪門稱不知之由、仍又停止云  
 云、又云、還都依彼卿抑留、暫以猶豫云々、人傳云、江  
 州武士等併落了、三分之二、與力官軍了、其殘引  
 籠城云々、又聞、與州戎狄秀平、依禪門之命、可奉  
 伐賴朝之由、進請文了云々、但實否未聞、此  
 日、右大將參御堂御八講結願、朝座終程參入、行香以  
 後退出、長者已下公卿七人云々、  
 五日、癸未天晴、此日、雖可有臨時祭試樂、被停  
 止了、素如此之時、不可思寄之儀也、傳聞、江州  
 之勢、加美濃源氏等之定四千餘騎、官兵勢二千餘、今日矢合、  
 明日可合戰云々、(去夜或者夢云、自大唐笠之緒、  
 樣々物彫付タル旗、數流付タリ、同白色也、件笠自  
 笠自南北サマへ持向云々、余案之、爲藤氏之一門、  
 全非可怖、其故、自南赴北笠、春日大明神爲  
 護氏之人、令入洛給也、笠是三笠山之義也、爲平  
 家頗不吉歟、其故、白旗入洛之條、非無其恐歟、今  
 日余女房讀岐、令參春日了、是每年例事也、去月八  
 日、參、而卿依有夢想事、今日所令參也、又心經

十二卷、今日於御社奉供養、同每年事也、每月朔日所奉之役若心經一卷、歲末奉供養也、武士等自路次、不令往還難人云々、然而依宿願有限、猶以令首途了、明後日可參賀茂臨時祭之由、催右大將、申可參之狀了、六日、甲天晴、申刻定能卿來、酉刻至玄僧正來、談法性寺座主龍居之間事、又云、彼法眼可被任大僧都之由所存也、而無種字、全玄、僧正欲辭申、以後被任大僧都、爲自他白地尤可宜云々、余答爲本意之由、但此事、示合彼法眼、可左右也、此僧正只今非師弟之儀、得其讓之條如何、願以不相應事歟、故法印最忠以明雲賞讓叙之、時人爲難、彼已爲師弟、況非師弟哉、尤可有用心事歟、但近代如此事、無其沙汰之世也、爲之如何、抑今晚、前源中納言雅賴卿家、有狼藉事云々、不知此由、今旦送札、及午後、報札到來、粗載此由、不能鬱念、遣使者問子細、入夜使飯來云、納言被申云、先賜御使畏申、狼藉之次第、凡不能是非、今朝天已欲曙之程、青侍走來云、讀岐少將殿御參、被申可見參之由云々、即着衣裳、欲出客亭之間、勇士兩三人、稱得タリオウ、即走來眼前、已欲搦捕、凡前

後不覺、言語道斷、正雖不及觸手、大略如圍繞在近邊、此間又他勇士等昇堂上、剩取女房等衣裳、偏如追捕、小時時實少將入來、制止狼藉、其時勇士等退散、希有免虎口、問由緒於時實朝臣、答云、次官親能、申者、候此殿之由有聞、依有可被尋問之事、所被召也、早可令召進給者、爰雅賴申云、此事極安事也、只可召進之由蒙仰、何不召進哉、所澁申之時、可及苛責、無左右顯耻辱之條、不能左右、件男去夜爲宿直入來、定候歟者、時實云、早可被召出者、即相尋之處、此夜半許白地出門外、其後于今不見云々、時實聞此之由、慥在此殿之由、前將軍所被聞也、猶可求云々、即雖搜求家中、敢以不見、仍遣勇士等於父廣季之許、依其身逃脫、搦得雜色一人、卽以此雜色、可尋出之由、雖推懸、納言、父已現存之者也、全不可懸之由、申テ不受取、其後惣率武士等、時實歸了、次第如此、是事先世之宿業也、猶可被付使應使之由、有風聞、此上事左右只可任宿運、件次官凡被召之故者、自幼稚之昔被養育相模國住人、自彼國成人、然間依近々與謀叛之首賴朝年來爲知音、依此

事、爲被尋問子細、所被召云々、已上雅和報旨、凡世間

濫吹狼藉、以辭不可演、以筆不可記、心浮之世

也、此事爲時忠卿奉行云々、懸件人之沙汰事、人

而莫不及耻辱、可彈指之世也、委趣非短毫之

所及、依爲希異之勝事、錄十分之一而已、傳聞、

近江國武士等三千餘騎、爲官兵僅二千、被追散丁云

々、後聞、納言家狼藉事、非使廳之沙汰、只前幕下之

下知云々、

七日、乙酉〔天〕陰雪降、此日、加茂臨時祭也、去月式日、

依還都事延引、未刻、右大將參內、自去二日、被遣、

〔之〕禁裏爲警固云々、而不知其由、不具弓箭

參內、見傍輩取寄壺弓等云々、如此之時、近衛大

將、檢非違使別當等、多用平胡錄云々、但又有帶壺

之例、所存以之爲是、但猶可勘歟、依降雪、用雨

儀御裝束、以中門內、爲使陪從座云々、亥刻、庭座

始、依使遲參也、右宰相中將通親朝臣爲使、舞人四

位四人、五位四人、六位二人云々、有三獻、深夜深雪

之間、公卿僅二人、寄插頭花、自餘殿上人取之云

云、萬事無禮儀、鐘報之後、參社頭、翌日巳刻、有還

立御神樂云々、

八日、丙戌〔天〕晴、此日依方違、參宿女院御所、當寢

所良方、依〔可〕有犯土也、去月二十六日違王相

方、冬至以後以北爲王、節分同月二十七日爲冬至之故

也、仍爲不滿十五日、又今日所違也、王相分別之

方違事、諸人不沙汰歟、余以今案問陰陽大允泰

茂、申尤可然之由、即書進子細者也、至玄僧正以

基輔有示事、無動寺之間事也、

九日、丁亥〔天〕晴、早旦、法性寺座主送札云、七宮依無

動寺凶徒事、忽被登山了、件張本不能被召出、遂

及苛法之沙汰〔者〕、七宮不可被安堵、然者又此

山籠不可叶之次第也云々、又山門僧皆登山、可

祈念追討使事之由、有職事御教書、然而件條爲

大綱事者、一身雖不登、強不可及別沙汰也、忽

出洛之條、所願相違、尤遺恨之由、所示送也、仍以

使者、觸遣子細於邦綱卿許、依候新院御所、不得

謁、空以歸來、明日又可進也、定能示送云、法皇與新

院御同宿、又人々可參入之由、被仰下、定能在其

中、靜賢法印以御教書法皇奉催之、而問日次之

處、十二日吉之由令申、又十一日廢務之由、在憲注申、

爲之如何云々、答云、廢務日、院參不可憚歟者、傳



聞、延曆寺衆徒之中、凶惡之堂衆三四百人許、得山下兵衛尉義經近江國逆賊之報本、甲斐入道與件義經也、語、以園城寺爲城、

六波羅可入夜打、又所進向近江國之官軍等、塞其後、自東西可攻落之由、成結搆云々、因茲經雅

朝臣、清房神門息、淡路守云々、等、追可被遣云々、又興福寺衆

徒、逐日蜂起、稱宮大衆云々、有云四郎房者、堪武勇之徒黨、及四百餘人、是爲禪門之方人云々、

而惡僧等數百人出來、拂件四郎房了、關東之賊徒攻來江州之時、自南京又可伐入洛中之由、成

支度云々、此事不被信受歟、凡近日之事、併以非言語之所及、如此之亂、古今無比類者歟、入夜歸

宅、傳聞、自去夜法皇與新院同居、有御面謁云云、

十日、戊子朝間晴、午後天陰風吹、早旦送使於邦綱卿許、示法眼登山之間事、即飯來云、全不可有御登山、御物籠之由、皆兼所申置也云々、又云、新院御不

例於今者如待日、不及左右候云々、又云、只今自南都脚力到來、衆徒已欲入洛、終夜所走來也、大

衆勢以外云々者、今旦爲追討山惡僧等、官兵行向之間、於山科東邊、衆徒降合、已以合戰、未事切云々、

及申刻、大衆等引退、籠城了云々、入夜自南都告送云、大衆雖蜂起、僧綱以下依加制止、和平了云云、來十八日荷前、廿日除目等、可參之由、催右大將、申所勞之由了、又云、新院御不例、於今者必如待日、不及左右候云々、

十一日、己丑雪白風寒、傳聞、昨日山僧與官兵合戰、

兩方之勢各廿卅人許、堂衆方四人被梟首了、官兵十人許負手云々、堂衆等引籠山中了、或說、可籠

三井寺云々、又聞、南都衆徒、依僧綱等之制止、一旦雖和平、始終不知云々、來十三日可參中宮行啓

之由、催大將、依風病申其由了云々、

十二日、庚寅天晴、傳聞、昨日官兵等寄三井寺、山堂衆昨日引及夜漏合戰、堂衆勢少引退、向江州方了、

官兵等燒拂三井寺近邊、并寺中房舍少々、不及堂舍云々、官兵方七十餘人蒙疵云々、又聞、江州賊徒

等勢甚強、忽不可落得云々、武田之黨、來住遠江、伐取參州了、美濃尾張、又素與力了云々、城太郎

助永、已越信濃之山風聞、謬說云々、雪深而不可及人馬往還云々、又秀平可攻落之由、進請文之旨、有其聞、而行程之所推、其使不及歸參



之期、疑爲<sub>レ</sub>勵<sub>二</sub>士卒之心、頗有<sub>二</sub>虛聞<sub>一</sub>歟云々、(申刻人傳云、)南都衆徒、此兩三日不<sub>二</sub>蜂起<sub>一</sub>之處、俄自<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub>以外興盛、催<sub>二</sub>末寺莊園之武士、五大寺一等、今兩三日之間、可<sub>レ</sub>企<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>之由、議定已了云々、不能<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>事歟、酉刻、定能卿來語云、可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>法皇御所<sub>一</sub>之人々、公卿親信、定能許也、殿上人只資時一人云々、成範卿可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>執事院司<sub>一</sub>云々、昨初參、今日又參<sub>二</sub>兩院<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>彼所<sub>一</sub>來也云々、又云、一日臨時祭次第、每事不可<sub>レ</sub>說、凡古來未有<sub>二</sub>如此之例<sub>一</sub>、事而莫不<sub>二</sub>違例<sub>一</sub>、奉行職事親經、素存<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>夜漏<sub>一</sub>之由、奇異也云々、又攝政稱<sub>二</sub>物忌<sub>一</sub>不參云々、基輔語云、還立御神樂之間、依<sub>二</sub>所作陪從不足<sub>一</sub>、近衛召人奉<sub>二</sub>仕拍子<sub>一</sub>云々、又聞、官兵等伐<sub>二</sub>惡僧<sub>一</sub>之間、邦綱所<sub>二</sub>召仕<sub>一</sub>之入道法師、元木工爲<sub>二</sub>營<sub>一</sub>重衡朝臣設事、兼日行<sub>二</sub>向山科<sub>一</sub>、聞<sub>二</sub>重衡不<sub>レ</sub>向之由<sub>一</sub>、隱<sub>二</sub>居片岡之邊<sub>一</sub>、存<sub>二</sub>惡僧之由<sub>一</sub>、梟首了、嗚呼第一事歟、

十三日、卯(天)晴、南都衆徒、決定可<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>由、半夜半并今日、兩度有<sub>二</sub>告申事<sub>一</sub>云々、但實否難<sub>レ</sub>知、入<sub>レ</sub>夜、刑部卿賴輔朝臣來、數刻談語、傳聞、前右中辨親宗朝臣、與<sub>二</sub>賴朝<sub>一</sub>音信之由風聞、依<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召問<sub>一</sub>云

云、又諸卿除<sub>二</sub>左右大臣<sub>一</sub>之外、左大將已下、併被<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>武士<sub>一</sub>之由云々、是等奇異之政也、時忠所<sub>二</sub>張行<sub>一</sub>云々、右大將漏<sub>二</sub>此列<sub>一</sub>、尤冥加也、資長、俊經等舊故之儒卿、預<sub>二</sub>此催<sub>一</sub>、實是未曾有之沙汰也、朝廷之輕忽、以<sub>二</sub>如此之事<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>察歟、今夜、中宮自<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>行<sub>二</sub>啓新院宮<sub>一</sub>云々、新院此兩三日、聊雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御滅<sub>一</sub>、更無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其憑<sub>一</sub>者歟、傳聞、前右中弁親宗、有<sub>二</sub>通<sub>一</sub>內事於賴朝<sub>一</sub>之風聞、被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>問從者<sub>一</sub>、字六郎、執<sub>二</sub>治<sub>一</sub>之筆者也之處、承伏了云云、

十四日、辰(天)晴、酉刻、民部卿資長卿來、隔<sub>レ</sub>簾謁<sub>レ</sub>之、談<sub>二</sub>世上事<sub>一</sub>、歎息之外、無<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>、傳聞、南都衆徒、十六日出門、十八日入洛、必定了云々、昨日以<sub>二</sub>所司<sub>一</sub>進<sub>二</sub>折帝<sub>一</sub>、其狀云、朝廷有<sub>二</sub>欲<sub>一</sub>滅<sub>二</sub>法相宗佛法<sub>一</sub>之旨、爲<sub>二</sub>問<sub>一</sub>子細、可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>爲公家<sub>一</sub>、專不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>思食<sub>一</sub>云々、此事不知實否、可<sub>レ</sub>證<sub>一</sub>之、又聞、山門凶徒、一旦雖<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>追散<sub>一</sub>、猶結<sub>二</sub>黨學徒<sub>一</sub>多與力了、座主方大衆、追<sub>二</sub>日減少<sub>一</sub>、凶徒等聞<sub>二</sub>南都衆徒入京之日<sub>一</sub>、降<sub>二</sub>自<sub>一</sub>西坂下、自<sub>二</sub>南北<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>攻六波羅<sub>一</sub>云々、禪門前將軍等、氣力衰了、郎從等多以逃散、所<sub>レ</sub>殘又無<sub>二</sub>爭鋒之心<sub>一</sub>云々、閭巷云、近江官兵等、昨日矢合、又<sub>二</sub>伊勢<sub>一</sub>武士等、欲<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>攻美濃國<sub>一</sub>、

云々、今晚有吉夢、可信事歟、

十五日、癸巳〔天〕晴、一昨日、知盛、資盛等、攻敵城、甲賀入道、並山下兵衛尉義經等、徒黨千餘騎、即時被追落了、二百餘人梟首、四十餘人捕得、所殘併追散了、件首中有甲賀入道云々、後同無實、南都衆徒、雖上洛議了、凶徒僅五百人許、惣大衆等、依恐當罰、雖表與力之由、其實不一揆、況末寺莊園等、不及催集、又聞、江州被落之由、者旁不可及忽之上洛歟云々、大略隨事之形勢、巧謀叛歟、太以有若亡、言語不及之次第也、但如此事、多有虛聞、難知實說歟、爲左少弁行隆奉行、女院御庄々、并余〔方〕領等、皆悉可召進武士之由、被仰下、天慶例云々、是又人費民煩也、凡近日被行之事、一而莫不亡國家之事、可悲々々、尊勝念誦如常、

十六日、甲午〔天〕晴大風、南都大衆、已入洛之山風聞、然而無其實、今日重官兵等、攻近江山下城云々、可參十九日御佛名一由、催大將、申所勞之由了、傳聞、禪門委天下事於前幕下了云々、

十七日、乙未〔天〕晴風吹、入夜參女院御方、如例用手輿、松殿去夜歸京、被落付其乳母大貳尼嵯峨亭、

暫以彼所可爲居所云々、

十八日、丙申陰晴不定、此日物忌也、〔知詮阿闍梨來、語爲余有吉夢之由、去十二日傳聞、法皇可知食天下之政之由、禪門再三被申、初雖有辭遁之御詞、遂以御承諾、又讚岐美濃兩國、可爲法皇之御分國云々、今日獻恩札於入道關白御許、嵯峨邊悅入除洛之由也、左中將清通朝臣息給女院、仁安三年御給目之次、可叙五位從上之由、付頭辨經房朝臣所令申也、又自女院、被觸仰攝政云々、晚頭、寺僧都覺尊被來、余依疾隔簾謁之、秉燭之後被歸了、依南都衆徒事、宇縣之邊、物騒之間、此由兩三日出洛之由、所令談也、

十九日、丁酉〔天〕晴、物忌如昨日、傳聞、來廿五日、中宮可有院號事、廿六日故攝政殿姬君、顯輔卿准后宣旨、即可有入內、中宮院號之後、可被常住上皇宮、仍無人于同與之間、忽此沙汰出來、即可爲中宮之養子云々、又聞、南都衆無始終、大略源氏黨類少與力凶惡之輩、雖然惣大衆加制止之間、和平云々、尾籠第一之事歟、又賴朝之勢十萬騎云々、三條宮在坂東之由、極謬說云々、又仲綱決定被伐了、

於平等院、自害之輩、三人之中也、已上布安說今日戌刻、大地震、右大將以消息付御監、申馬允申文於頭弁了、

廿日、戊戌〔天〕晴、早旦、大昨入人足、生足也、仍自今日、七

ケ日、爲五體不具穢氣、女院御方令忌給、大將明日可院參之故也、今日又物忌也、今日外記持來關官帳、此次欲賜去春除目公卿給之處、依穢有憚、

以下不觸此穢之人、於門前忽書寫之、賜外記、式部分國給之、依此日京官除目初日也、執筆左大當時不候也、辨長方卿

廿一日、己亥〔天〕晴、物忌如昨、今日申刻、右大將參新

院、謁女房、問御惱之安否、逐日御増、於今者不

能起揚給云々、即參法皇御方、與新院同居以定能

卿入見參、依御所中間不參御前、次參中宮御

方、時忠卿入見參云々、今日除目竟也、執筆同人云

云、重家入道日來煩喉痺、自今日已刻及獲麟、於

今者、無覺悟之心云々、仍以使者問之、答不覺

之由、今夜夜半許、重家入道入滅、尤足哀慟、重代相

傳之上、頗有其志一人也、即遣使者問之、

廿二日、庚子〔天〕晴、今夜、一院御佛名、左大將已下、公卿十三人、殿上人廿八人參仕云々、傳聞、來廿五日遣

官軍於南都、捕搦惡徒、燒拂房舍、可魔滅一宗云云、先今明之間、以大和河內等國人、守護道々、其後可被寄官兵云々、當我氏滅亡之時、受生之條、只可愧宿業者也、

廿三日、辛丑〔天〕晴、外記大夫師景參、召前問天變事、

有三大喪兵革等、尤可恐云々、伴男志與小一條大將濟時卿自筆記三卷、天祿二年二卷、同三年下一卷、不慮所傳得也云

云、來廿五日院號、并准后等事、延引了云々、是依重家〔卿〕事、准后延引、隨而又院號、明春可被行云々、

余以使者、無動寺七宮被辭退事、此法眼固辭寺

務、仍必可被受取之由、示遣全玄僧正之許、是故

上蓮院座主行玄門跡相承之所也、七宮暗被辭去、他

人令補歟、爲門跡可爲遣恨、暫全玄知行之後、隨

便此法眼被受取、次第神妙歟、仍殊所示遣也、報

云、此事雖固辭、去十九日已被仰下云々、尤悅

思不少者也、明日新院御佛名之由、藏人來催、申所

勞之由、今日、維盛朝臣爲副將軍、下向近江國云

云、

廿四日、壬寅〔天〕晴、傳聞、甲賀入道、山下兵衛尉等、未

被伐、籠山下城、又尾張美濃等武士、欲相加彼云



云、或不<sub>レ</sub>然云々、如<sub>レ</sub>此之說々、皆以相違、難<sub>レ</sub>信受<sub>二</sub>事<sub>一</sub>、歟、明日被<sub>レ</sub>攻<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>、必定云々、此日被<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>遣荷前使<sub>一</sub>、先有<sub>レ</sub>定、元日擬侍從定同被<sub>レ</sub>行、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>定能卿入<sub>レ</sub>夜來云<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>大極殿<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>代始<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>行之云々、宇治使、欲<sub>レ</sub>向之處、武士充滿、有<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>途<sub>二</sub>前<sub>一</sub>途、於<sub>二</sub>河原<sub>一</sub>遙拜云々、

廿五日、卯<sub>二</sub>天<sub>一</sub>晴、今日、藏人頭重衡朝臣、爲<sub>二</sub>大將軍<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>追討南都惡徒<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>、來廿八日可<sub>二</sub>攻戰<sub>一</sub>、今一兩日可<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>廻宇治<sub>一</sub>云々、傳聞、美濃尾張武士等、早可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>征伐<sub>一</sub>之由、牒<sub>二</sub>送官軍<sub>一</sub>、而其勢不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>敵對<sub>一</sub>、故請<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>副<sub>一</sub>下勇士、仍追被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>維盛朝臣<sub>一</sub>、昨<sub>二</sub>日<sub>一</sub>云々、又聞、熊野別當以下、頗有<sub>レ</sub>反<sub>二</sub>禪門<sub>一</sub>之聞云々、<sub>二</sub>後聞無<sub>一</sub>、今夕下名云々、

廿六日、甲<sub>二</sub>辰<sub>一</sub>雨下、未刻參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>行步不<sub>レ</sub>叶<sub>一</sub>、用手與<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>例<sub>一</sub>、亥刻歸宅、南京追討使、今日經<sub>二</sub>廻宇縣<sub>一</sub>云々、隆職注<sub>二</sub>送下名聞書<sub>一</sub>、殊事不<sub>レ</sub>見、穢限至<sub>二</sub>于今<sub>一</sub>日也、傳聞、一昨日、<sub>二</sub>廿五<sub>一</sub>山階寺別當僧正玄緣入滅、是大明神罰歟、但追討之前日遷化、幸運令<sub>レ</sub>然也、廿七日、乙<sub>二</sub>天<sub>一</sub>晴、申刻、史持<sub>二</sub>來尊勝寺灌頂<sub>一</sub>、<sub>二</sub>去<sub>一</sub>寺法華會<sub>二</sub>九日<sub>一</sub>、等立紙、各書<sub>二</sub>四半帛草子<sub>一</sub>、<sub>二</sub>僅五<sub>一</sub>、其上爰<sub>二</sub>帛押<sub>一</sub>折之、此體先々未<sub>レ</sub>見、只如<sub>レ</sub>例書之、加<sub>二</sub>禮帛<sub>一</sub>

所進也、今度之體、定有<sub>レ</sub>所習歟、且問<sub>レ</sub>史之處、申<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>子細之由<sub>一</sub>、不足<sub>レ</sub>言歟、追檢是持<sub>二</sub>來弁官之體<sub>一</sub>也、於<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>者書<sub>二</sub>縱帛<sub>一</sub>云々、傳聞、自<sub>二</sub>河內地方<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>之間、爲<sub>二</sub>大衆<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>射危、三十餘人被<sub>レ</sub>射取<sub>二</sub>了<sub>一</sub>、其後被<sub>二</sub>追歸<sub>一</sub>了云々、宇治地官軍、今日發向、明日可<sub>二</sub>合戰<sub>一</sub>云々、奈良勢六万騎許云々、但不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>一定<sub>一</sub>、今日、刑部卿賴輔朝臣來、尊忠僧都來、依<sub>二</sub>念誦<sub>一</sub>之間不<sub>レ</sub>謁<sub>レ</sub>之、或僧云、三條宮在<sub>二</sub>吉野<sub>一</sub>云々、様々之風聞、實說不<sub>レ</sub>審歟、今日修<sub>二</sub>祓沐浴<sub>一</sub>、遙<sub>二</sub>拜太神宮<sub>一</sub>、春日等明神、

廿八日、丙<sub>二</sub>天<sub>一</sub>晴、傳聞、去夜重衡朝臣寄<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>、其勢依<sub>二</sub>莫大<sub>一</sub>、忽不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>合戰<sub>一</sub>云々、狛川原之邊在家併燒拂、或又欲<sub>レ</sub>燒<sub>二</sub>光明山<sub>一</sub>云々、主稅頭定長來、早旦遙拜如<sub>レ</sub>昨、

廿九日、丁<sub>二</sub>天<sub>一</sub>晴、已刻人告云、重衡朝臣征<sub>二</sub>伐南都<sub>一</sub>、只今歸洛云々、又人云、興福寺、東大寺已下、堂宇房舍、拂<sub>レ</sub>地燒失、於<sub>二</sub>御社<sub>一</sub>者免了云々、又惡徒三十餘人、梟<sub>二</sub>首之<sub>一</sub>、其殘逃<sub>二</sub>龍春口山<sub>一</sub>云々、至<sub>二</sub>于凶徒之被<sub>レ</sub>戮者<sub>一</sub>、還爲<sub>二</sub>御寺要事<sub>一</sub>、七大寺已下、悉變<sub>二</sub>灰燼<sub>一</sub>之條、爲<sub>レ</sub>世爲<sub>二</sub>民佛法王法滅盡了歟<sub>一</sub>、凡非<sub>二</sub>言語之所<sub>一</sub>及、



非筆端之可記、余聞此事、心神如屠、自昔天性之所稟、曾不惜身命、只欲不留遺恨之名、而去冬以後、取諸身極生涯之怨、當此時忽見我氏之破滅、以彼比之、敢不足爲喻、恨還爲悅者歟、凡佛寺堂舍雖滿日域、東大、興福、延曆、園城、以之爲宗、而於天台之兩寺者、度々遭其災、至于南都之諸寺、未<sub>○</sub>曾<sub>○</sub>如此之事、當惡運之時、顯破滅之期、歟、誠是雖時運之令、然事、當時之悲哀、甚於喪父母、慙生而逢此時、宿業之程、來世又無憑歟、天下若有落居之世者、早可遂山林之素懷、臨終正念之宿願、一期之大要也、淳素之世、於今者難期、其時歟、仰天而泣、伏地而哭、拭數行之紅淚、摧五內之丹心、言而有餘、記而無益、努力々々、申刻、光雅送書於基輔之許、關白拜禮問大將之參否、長者已不歎、此事存恒例之儀歟、凡不能左右、長者有出仕者、已次又可從彼歟、可悲、

余元正不可出仕之由、日來存之、彌以無異議者、猶々大佛再造立、何世何時哉、不異會昌天子之跡者歟、

右治承四年<sub>戊</sub>秋冬此一帙墨付七拾八枚者以三緣院道敎公手澤松殿右幕下道昭卿被繕寫之了

抑法性寺忠通公之有職松殿基房公親面授而傳于後法性寺兼實公且加日課號玉葉爲后昆之模範其末苗不讓他秘握而可貯深奧者也、

于時慶安二年<sub>己</sub>正月仲旬陶化翁(花押)誌焉

玉葉卷第三十五終

玉葉

卷第三十六

爲養和元年

自治承五年正月  
至同 十二月

治承五年春夏

正月

一日、戊晴時々雪降、行步不堪之上、天下有穢氣之疑、仍無四方拜事、手水、陪膳季長朝臣齒固如恒、早旦、余送書於邦綱卿曰、今日所々拜禮有無如何、天慶無小朝拜、及節會之出御、何況南都七大寺悉變灰燼、就中、東大寺事、公家專可歎思食、興福寺事、氏之大事也、云彼云是、尤可有哭泣之禮歟、但此之由、不可及外聞、內々所聞達者、及申剋、報札到來、曰、於節會之御出、及小朝拜者、不可候之由、被仰下了、攝政又不被出仕、於院拜禮者未定云云、相次右中辨兼光朝臣、告送不可有拜禮之狀、今日、右大將不出仕、酉刻、藤宰相定能卿來、先是、右大辨重方朝臣、不調之、○臣下恐脫來字今日、大將、侍從共來、後聞、停止小朝拜、并關白、兩院拜禮等、節會無出御、內辨左大臣、外辨上左大將、返給外任奏之次、親經

仰左府云、國栖并立樂、可令停止者、左府仰大外記賴業了、外辨著座之間、內辨讓左大將退出、國栖歌笛共止之、御酒勅使家通、宣命使通親、帶弓箭輩、拜舞如例云々、

參入卿相、

大納言、  
實定、平胡孫、螺鈿釵實國、宗家、

中納言、

兼雅、忠親、賴盛、成範、

實家、盛胡孫、螺鈿釵朝方、

參議、

家通、常服、垂纓實守、同實家、家實宗、同、

通親、同家通

散三位、

賴實、同實家

警固之間、被行宴會之例、天慶三年、平治二年等

也、檢天慶吏部日記曰、因警固、諸衛次官以上、帶弓箭、不用杖槍、但公卿兼武官者、依常儀云々者、此說之意、不帶弓箭、宴會已非解陣、武官何改警固哉、疑節會儀服異他、飭劍、魚袋難改歟、若又拜舞著座之間、可无其便之故歟、但縱雖不知、由緒如此事、偏可依舊規之處、平治之例、已乖彼跡、衛府公卿多帶弓箭、事物騷之間、恐不尋舊例、任意所爲歟、光賴卿獨爲垂纓云々、有識之人猶拔詳歟、今般、大將若出仕者、可依天慶例之由、所存也、其故者、小野宮<sup>于時有</sup>爲內辨之上、九條殿、<sup>衛府</sup>交、辨之中、共是公事之精微、人臣之規模也、所爲之間、推難處、失儀者歟、通親、家通存此例歟、抑、南京諸寺燒失事、悲歎之至、取喻無物、御寺已化灰燼、氏人存而無益、可弃俗塵者此時也、猶繼世路、未交山林、悲哉々々、東大寺者、我朝第一之伽藍、異域無類之精舍也、今當亂逆之世、忽顯魔滅之期歟、天然之理、人力何爲然、而當時之哀慟、不可默止、恐慮之所覃、須有廢朝之儀歟、朝廷之人、敢不存此儀歟、將又恐時勢、專不能識言歟、緯已希代、哭泣之禮、又可超過常篇者歟、遂口

其儀者、奈後鑒、後聞、中御門大納言來、即被參女院御方、口口余即不聞之、不可說々々々、二日、<sup>己</sup>天晴、手水、齒固、如昨日、頭辨經房朝臣、權右中辨光雅朝臣、左少辨行隆等來、各不謁之、上官列參口時、今物忌也、三日、<sup>庚</sup>天晴、手水、齒固、如昨日、五位藏人親經、花山院中納言兼雅卿來、余依疾不謁之、右大將依御寺事、元三之間、不可令出仕之由存之、而長者今日被出仕云々、區々末生、其禮不可遇長者、還有恐歟、仍及晚出行、一員三人、前驅六人、隨身如常、共殿上人基輔朝臣、先參內、於陣中帶弓箭參上、攝政相共候鬼間云々、內裏近邊有<sup>去四</sup>火事、<sup>五町</sup>云々、然而、無程消了、攝政雜談移刻云々、彼殿退出之後、大將參院、<sup>法皇、上皇、中</sup>宮、三所同居、先參上皇御方、謁女房、問御惱安否、御滅之由風聞、世間無極謬說也、追日弱令成給、次參中宮、於殿上邊謁女房、次參法皇、以藏人申入、退出、先來余第、即歸參女院了、出自內裏、即垂纓、撤弓箭、公卿於他所不作衛府故實云々、今日、大將帶蒔繪劍、壺胡鉢、御堂之餘流、元三日帶螺鈿劍之由、人皆所知也、而

殿曆之中、或用<sub>三</sub>蒔繪、爲<sub>二</sub>一說之由、有<sub>三</sub>所見、卽彼殿、時々令<sub>レ</sub>帶<sub>三</sub>蒔繪<sub>二</sub>給也、雖<sub>レ</sub>然、此說非、普通大將、須<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>螺鈿<sub>一</sub>也、而依<sub>三</sub>警固<sub>二</sub>、可<sub>レ</sub>帶<sub>三</sub>弓箭之處、螺鈿劍、帶<sub>三</sub>壺胡錄<sub>二</sub>之條、理不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、延久御讓位、經信匡房等記、具所<sub>レ</sub>見也、平治亂逆、警固之時、人々多螺鈿劍、壺胡錄也、近例雖<sub>レ</sub>存、不足爲<sub>レ</sub>證、仍付<sub>レ</sub>劍者、可<sub>レ</sub>帶<sub>三</sub>平胡錄<sub>二</sub>也、雖然、家已有<sub>レ</sub>用<sub>三</sub>蒔繪<sub>二</sub>之說、當<sub>三</sub>此時<sub>二</sub>、尤可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>彼說<sub>一</sub>也、加之、八省中院等行幸之外、雖<sub>三</sub>大將<sub>二</sub>、臨時警固之時、可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>壺也、雷鳴陣則如<sub>レ</sub>此、而寬德警固之間、臨時祭左大將教通、帶<sub>三</sub>平胡錄<sub>二</sub>、誠雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>證、猶似<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>其謂<sub>二</sub>、仍去年臨時祭、大將用<sub>二</sub>壺胡錄<sub>一</sub>了、且依<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>此等之儀<sub>一</sub>、隨<sub>レ</sub>宜帶<sub>三</sub>蒔繪劍<sub>二</sub>、不知<sub>レ</sub>故實<sub>一</sub>之輩、加<sub>三</sub>謬難<sub>二</sub>、敢不爲<sub>レ</sub>苦耳、爲<sub>二</sub>後鑒<sub>一</sub>、粗錄<sub>三</sub>子細<sub>二</sub>者也、大外記師尙來、語<sub>三</sub>男共<sub>二</sub>云、東大寺、南大門許燒失、大佛殿免<sub>三</sub>餘燭<sub>二</sub>畢云々、後聞太謬說也、

四日、<sub>亥</sub>天晴、傳聞、東大寺大佛殿、猶燒失了云々、入<sub>レ</sub>夜定能卿來云、以<sub>三</sub>中御門大納言行幸賞<sub>二</sub>、<sub>去治承元年、行幸行幸賞也、讓<sub>三</sub>與之<sub>二</sub>、欲<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>一階<sub>一</sub>、<sub>三</sub>品<sub>二</sub>、可<sub>レ</sub>傳<sub>三</sub>示攝政<sub>二</sub>者、<sub>亥</sub>刻、參<sub>三</sub>女院御方<sub>二</sub>、依<sub>三</sub>吉日<sub>一</sub>、相<sub>レ</sub>扶所勞、入<sub>レ</sub>夜所<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>也、</sub>

五日、<sub>壬</sub>天晴、未刻、外記持<sub>三</sub>來十年勞帳<sub>二</sub>、此日叙位儀也、攝政直廬之儀、執筆左大辨長方卿云々、申刻、左少辨行隆、以<sub>三</sub>書狀<sub>二</sub>、問<sub>三</sub>御齋會講筵事<sub>二</sub>、其狀云、

八省御齋會講筵事、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>東大興福兩寺僧<sub>一</sub>候、今以<sub>三</sub>延曆寺僧<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>始行<sub>一</sub>候歟、又可<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>候歟、御計可<sub>レ</sub>候之由、攝政殿御消息所<sub>レ</sub>候也、以<sub>三</sub>此旨<sub>二</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>三</sub>申上<sub>二</sub>給<sub>一</sub>之狀如<sub>レ</sub>件、

正月五日 左少辨行隆奉、

謹上 伯耆守殿、

和<sub>三</sub>副官外記等申狀<sub>二</sub>、具不<sub>レ</sub>載<sub>一</sub>之、返事、基輔之奉書也、五位職事、以<sub>三</sub>攝政命<sub>二</sub>、不<sub>レ</sub>來<sub>一</sub>向大臣第、以<sub>三</sub>書狀<sub>二</sub>、令<sub>レ</sub>通之條、太以奇怪、仍自不<sub>レ</sub>書返事也、

御齋會事、被<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>一紙<sub>一</sub>候、仍進<sub>三</sub>上之<sub>二</sub>、所勞無<sub>レ</sub>術之間、以<sub>三</sub>他筆<sub>二</sub>、令<sub>レ</sub>申之由所<sub>レ</sub>候也、恐々謹言、

正月五日 伯耆守基輔、

折紙狀云、

御齋會講匠事、

春最初之御願、海鎮、齋筵也、式目有<sub>レ</sub>限、難<sub>二</sub>改易<sub>一</sub>歟、何況延引之



例、於不快哉、不用維摩講師之條、雖乖聖代之勅、被請天台僧徒之外、爭叶當時之議哉、

一延引例、

天曆八年正月八日、依太皇太后御事延引、同廿二日被行之、此外無例、

一以天台宗僧爲講匠例、

貞觀十年正月八日、於大極殿講寂勝王經、以延曆寺僧法勢爲講匠、

延曆十三年玄日、

延長七年禪喜、

承平三年信靜、

同七年基增、

天慶三年明仙、

天曆元年勢祐、

同九年房算、

應和三年禪藝、

貞元二年良源、

寬仁四年教圓、

已上、雖天台人、

講師、

御齋會講師、

一以勤維摩講師、必可爲御齋會講匠事、

仁明天皇承和六年十二月癸亥、勅以下經興福寺維摩講師之僧、宜爲宮中寂勝會講、講下恐脫師字自今以後、永爲恒例、

清和天皇天安三年正月乙丑、於大極殿、講寂勝王經、以元興寺僧道昌爲講師、凡每年十月、興福寺維摩會、囑諸宗僧、學業優長、果五階者、爲講師、明年正月、大極殿御齋會、以此僧爲講師、三月樂師寺最勝會講師、又同請之、經此三會講師者、依次任僧綱、他皆效之、

以諸宗僧、可爲講師事見之、已上就外記申狀、畧注之、

官及綱所等申、無延引停止之口、（口口口）三

○此下亦恐闕文

六日、癸丑天陰、午口見、口口雅賴卿叙從口口、被塞三年追抽之怨歟、

定能卿、以宗家卿行幸賞讓、叙三位、誠可謂殊恩、

通親卿、以新院御給、叙三位、院宮御給、被叙上階之例、近自法皇御時出來、

希有此外、季長朝臣、以皇嘉門院御給、叙正四位下、

人以驚耳目、歟、凡諸大夫、叙四位之正下、古來爲

希代之慶、父季兼朝臣、老後被許正下、故殿殊有御

沙汰事也、季長非指權勢之近習、只年來寓直女院

中、奉公不懈之所致也、就中、超越資泰朝臣、可

謂過分之慶歟、兼光、光雅等、叙從四位上、公時、

公守兩將同之、此外無殊事、橘氏之爵、依無可叙

之者、不<sub>レ</sub>上<sub>二</sub>名簿、民部卿資長、送<sub>二</sub>南都燒失注文、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>希代珍事<sub>一</sub>注<sub>レ</sub>之、

注進、

興福寺中寺外、堂舍寶塔、神社寶藏等燒失事、

合、

一寺中、

金堂、

講堂、

南圓堂、

食堂、

東金堂、并塔一基、

西金堂、

北圓堂、

東圓堂、

觀自在院、高陽院御願、

西院、

在堂四字、此內一

乘院、

在長講堂大乘院、在堂三字塔一基、

中院、

在堂

松陽院、

在堂北院、在堂

東北院、

在堂

發志院、

在堂

觀禪院、在堂

五大院、

在五大堂、朱

北戒壇、

在堂唐院、在堂

松院、

在堂

傳法院、

在堂

眞言院、在堂

圓成院、

在堂

皇嘉門院御塔、

總宮、

一言主社、

瀧藏社、

住吉社、

鐘樓一字、

經藏一字、

寶藏十字、

大湯屋一字、但釜不<sub>二</sub>被損<sub>一</sub>、

已上、堂舍三十四字、寶塔三基、神社四所、寶藏、大湯屋等也、此外、三面僧房、四面廻廊、大

小口門、□□□□房、諸院、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其數<sub>一</sub>、力炎  
□所□、尊教院內小房一字、角院內小房二字、  
窪院內小房二字許也、

一寺外、

院御塔、

殿下御塔、

一切經論倉、在經論章疏形木、

率川社、

宿院、

佐保殿、

已上、燒失了、此外、堂舍、諸院、諸房、菩提院、又龍華院內堂舍諸房等、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其數<sub>一</sub>、皆以燒失了、但所<sub>レ</sub>殘、禪定院、并近邊小屋少々、春日山

〔山〕內、新樂師寺西邊小屋少々也、

右、大略注進如<sub>レ</sub>件、

治承五年正月四日

寺主大法師憲口

權上座法橋禪慶

上座法橋重慶

春日神主泰隆注文、

興福寺、所司等注文同<sub>レ</sub>前、

東大寺內、

大佛殿、

講堂、

食堂、

四面廻廊、

三面僧房、

戒壇、

尊勝院、

安樂院、

眞言院、

樂師堂、

東南院、

八幡、

氣比、

氣多、

已上、三箇寺、兩院、内外堂舍、僧房、在家、不知數燒失了、御佛一體不奉取<sub>レ</sub>出之、是依<sub>レ</sub>恐<sub>二</sub>官兵<sub>一</sub>也、

殘、

興福寺内小房二字、東大寺内堂舍少々、寶藏、僧房少々、元興寺内、本堂已下、堂舍少々、僧房少々、龍藏院内、本堂已下、堂舍少々、僧房、在家、三分之一、新樂師寺邊、本堂、并僧房、在家、禪口院<sub>（今カ）</sub>内、堂口、僧房、口野田邊僧房、在家少々、

已上、是等許燒殘也、

於<sub>二</sub>春日御社<sub>一</sub>、官兵一切不入來也、

七日、<sub>（寅）</sub>晴、白馬節、内辨左大將云々、右大將稱<sub>レ</sub>疾不參、持<sub>二</sub>來奏於里第<sub>一</sub>、加<sub>レ</sub>判、名字、返<sub>二</sub>給之<sub>一</sub>、今日、左大將卿送之、平治先人、<sub>（公也）</sub>帶<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、仍元日追<sub>二</sub>彼跡<sub>一</sub>、今日同可<sub>レ</sub>然、左大臣不參之、内辨可<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>仁、而可<sub>レ</sub>撤<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>哉否、<sub>（北山、大將儀之意、可<sub>レ</sub>撤却云々）</sub>若可<sub>レ</sub>撤者、如<sub>二</sub>本可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>螺鈿劍<sub>一</sub>歟、將可<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>帶<sub>二</sub>傍劍<sub>一</sub>歟、若又螺鈿之上、可<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>歟、此等之間、迷是非了云々、報云、永觀讓

位、濟時卿<sub>（右大將）</sub>、不<sub>レ</sub>撤<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、然而至于恒例宴會<sub>（口）</sub>、

不可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>撤、謝座之間、可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>之故也、何況、四條大納言意趣者、可<sub>レ</sub>撤却、旁以無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>歟、劍事、螺鈿劍、不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>之條、一切不可<sub>レ</sub>然、中納言已上、相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>笏紙、參陣云々、就<sub>二</sub>之案<sub>一</sub>之、内辨之條、何無<sub>二</sub>兼日之案<sub>一</sub>哉、然者、相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>傍劍、魚袋、奉<sub>二</sub>内辨<sub>一</sub>之後、垂<sub>二</sub>纓<sub>一</sub>、撤<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、改<sub>二</sub>劍<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>、何難之有哉、抑依<sub>二</sub>天慶例<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>節會服<sub>一</sub>之處、追<sub>二</sub>先公之跡<sub>一</sub>、已被<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>警固之儀<sub>一</sub>歟、然者、依<sub>二</sub>内辨<sub>一</sub>撤<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、猶可<sub>レ</sub>顯<sub>二</sub>彼意趣<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>御存知<sub>一</sub>者、螺鈿之上、被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>議<sub>一</sub>、又非<sub>二</sub>無<sub>一</sub>陳狀<sub>一</sub>歟、於<sub>二</sub>此兩條<sub>一</sub>者、偏任<sub>二</sub>賢慮<sub>一</sub>而已、傳聞、左衛門尉知康、<sub>（法皇、近日第、一近習者也）</sub>并兵衛尉公友等、自<sub>二</sub>禪門之許<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>捕取了、於<sub>二</sub>知康<sub>一</sub>者、重被<sub>二</sub>禁固<sub>一</sub>云々、

今日、遣<sub>二</sub>武士<sub>一</sub>、<sub>（今度不遣<sub>二</sub>大將軍<sub>一</sub>、只私郎、從持<sub>二</sub>下<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>行向<sub>一</sub>云々）</sub>停<sub>二</sub>廢大和國庄<sub>一</sub>、并令<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>塔無罪之僧綱<sub>一</sub>已下、可<sub>レ</sub>征<sub>二</sub>伐有罪之凶徒黨類<sub>一</sub>云々、入<sub>レ</sub>夜定能卿爲<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>來、<sub>（子時、今日節會、依<sub>二</sub>加叙沙汰<sub>一</sub>、子終被<sub>レ</sub>始行云々）</sub>内辨左大將、撤<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、改<sub>二</sub>着傍劍<sub>一</sub>云々、

八日、<sub>（乙）</sub>晴、早旦、隆職注<sub>二</sub>送加叙聞書<sub>一</sub>、資泰叙<sub>二</sub>正下<sub>一</sub>

了、又故中攝政女、去年可有准后之由、有其沙汰人也、被叙從三位、又去四日所被下之宣旨、并解官等、

治承五年正月四日 宣旨、

東大、興福兩寺門徒、僧綱以下、皆悉令停止公請、解却見任并所職、兼又仰諸國宰吏收公所領、

解官、

左衛門尉平成宗、同知親、同知康、

左兵衛尉大江公友、源有義、同重清、藤原成仲、

晚頭、攝政送札云、今夜口可停止咒師散樂并大導師登樂、及三十二相樂等同可止歟、將又如何云々、報云、尋准據例、可被進止歟、但憶事理、被止宜乎者、又被見送、御齋會講匠事、人々申狀、左大臣已下、藤氏公卿十三人也、其狀在別、今日申刻地震、

今日、被始行御齋會了云々、講師、被請東大寺僧云々、相違去四日宣旨狀、如汗之綸言、豈如此哉、爲此儀豈可被請南都僧哉否之條、先可被問諸卿也、次第違亂、首尾相違、近世之事、每事如此者歟、但當時之政、不狂亂者、還不可叶時議者歟、

九日、辰晴、午刻、長光入道來、未刻、中御門大納言被來、余謁之、入夜前施樂院使等、仍憲基來持來大椎第三度勘文也、又語新院御惱子細、御面時々令腫給、御腹御滿動、欲剃止、又雖爲□□、好薄衣、厭暑氣給云々、又御聲頗變、例大略無其憑事也、但心神不異尋常云々、

法成寺修正、被止咒師、散樂、并大導師昇樂、三十二相樂等了云々、諸寺咒師、同被止歟、

十一日、戊午、雪降、傳聞、熊野邊、武勇之者等、五十艘許、

打入伊勢國、射取官兵、三百餘人猶居住有別湯住〔居〕

國內、彼島云々、此事、去四日事云々、仍明日、給宣旨

於伊勢國、起國內之勢、可追拂彼惡徒之由云々、

又筑紫謀叛之者、彌及事惡逆、仍九國與力、可奉

伐之由、同被下宣旨、又延曆衆徒蜂起、自比良

野庄、運上御油之間、近江國官兵、散々打散、煞

害庄民、此上被煙滅南都、即是破滅佛法之條、

全非他寺事、圓頓之遺教、滅盡不違之由、殊以鬱

結、依二件兩條之由緒、雖蜂起、只今不及熾盛云

云、

又聞、御齋會講師、猶被用天台僧侶云々、但謬說



歟、可尋眞僞、後聞、猶被請東大寺成實、

十二日、己晴、申刻、人告云、新院御惱危急御云々、即

進使者、問邦綱卿、及兼光朝臣等、又以書問女房、數刻之後、歸來云、日來御無力殊太、而今日殊有御

辛苦、仍阿證房聖人召、有御受戒、其後頗有御減云

云、又被行御占之處、明日明後日殊可慎御云

云、凡今五六日之內、大事可出來歟云々、傳聞、筑紫

謀叛者高直餘勢、及數萬、仍九國仁可伐之由、被

下宣旨、其狀頗有傾軋云々、可尋聞、

十三日、庚晴、左大將參法成寺修正、先參院御堂、

他人不參云々、大將口須明口參此之間、日々風病更

發、今日口有口隙所參入也、亥刻、余着烏帽、直衣、

參院御所近邊、邦綱卿直處、引入、招出邦綱卿、及兼光

朝臣等、問御惱之子細、余依脚氣不快、日來籠居、猶

行步不可叶、仍乍懷不參入、而昨日及危急御之

由、有其聞、仍今朝、若大漸事出來者、奈後悔何、仍

志之所之、參近邊欲入見參、是則深存忠之故

也、邦綱卿先出來、傳勅云、病至而重、命在旦暮、遂

今一度不面謁之條、殊遺恨思食者也、扶病強參上、

尤悅思食者、奉詔旨之處、不覺之淚浮雙眼者也、

大納言語云、今夜欲被始行五壇法、用途不叶之

上、僧多辭退之間、明日可被行云々、凡御有樣、於

今者、一切無其憑、御面手足頗腫給、又殊令厭熱

氣給、遙去火氣、薄御衣、猶以爲重、身體更不叶

御心、御心但御正念、一切不違統、起日、寂慮有臨

終之御沙汰等云々、余問惜命給哉否、密語云、深有

其御心、因茲、雖不令堪御灸治給、已及數十所

了云々、聞此事、彌悲歎難忍、余云、太神宮、八幡、殊

可有御願、又可被行尊星王法也、但事體決定可

有危者、御臨終之沙汰、不可有他事、近召有智

道心之僧徒、常可被演說往生極樂之至要也、如

此事、近臣之男女房等、偏成忌語、不申出歟、是極

惡事也、此等條々、早可被申行者、頃之、納言歸

參了、相次兼光來、語御惱子細、不異邦綱卿之所

言、余之所示又同前、兼光密々云、若大事出來者、

中宮可納法皇之宮、由、或人和譏、禪門、及二品、有

承諾之氣色、而中宮聞此旨、枉被仰出家事已切、

仍忽變其儀、以至〇恐女腹之女子、世號御子、可替

之云々、法皇平以辭退之故、日來不〇恐一定、猶事成就、

明日十四必定可被遂其儀云々、夢歟、非夢歟、凡

言語不<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>及者也、良久而余歸宅、于<sub>レ</sub>時子終許歟、今夜爲<sub>レ</sub>遠<sub>二</sub>春節、宿<sub>二</sub>基輔朝臣家<sub>一</sub>、

十四日、酉晴、寅刻人告云、新院已崩御者、依<sub>レ</sub>不知<sub>二</sub>

實否、相尋之處、卯刻使歸來云、事已一定、丑終寅始程事云々、欲營參之處、日來黏<sub>二</sub>病牀、夜前參門外、風冷相侵、心神殊惱、仍令<sub>レ</sub>參大將、出立之間、自然及<sub>二</sub>已刻、直衣垂纓如<sub>レ</sub>例、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>謁女房、只慙候<sub>二</sub>公卿座、先是、人々五六人祇候云々、未刻歸來云、御葬今夜被<sub>レ</sub>用最畧儀、隆季卿、兼光朝臣等奉行云々、今夜御齋會終、入<sub>レ</sub>夜被<sub>二</sub>始行、上卿一人不參、右兵衛督家通、左宰相中將實宗等參上、以<sub>二</sub>參議<sub>一</sub>用上卿代官、古今未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>例云々、鎮善勸<sub>二</sub>眞言院法、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>諸寺修正口口行<sub>一</sub>之、

十六日、亥晴、傳聞奈良口口邊事、猶不快、未刻、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>申事、密々參女院御方、申刻、左少辨行隆來云、諸國之勇士、併有<sub>二</sub>謀叛之心、仍先五畿內、及近江、伊賀、伊勢、丹波等國、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>補武士、以禦遠國之凶徒<sub>一</sub>之山、故院被<sub>二</sub>仰置、口口但每國、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>必任<sub>二</sub>武勇之國宰、只件等國、總而可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>置管領之司、口口依<sub>二</sub>新儀、內々被<sub>二</sub>問大外記師尙<sub>一</sub>之處、勘申旨如此、即持來之狀也、此

事是非可<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>者、余申云、故院遺詔、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>異儀、其上事不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>可否、早任<sub>二</sub>外記勘申旨、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計行<sub>一</sub>者也者、余稱<sub>レ</sub>疾不<sub>レ</sub>謁、以<sub>レ</sub>人傳示也、件外記申狀、聖武天皇御時、七通被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>鎮撫使、每道、或一人、或二人、以<sub>二</sub>彼例、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>准據<sub>一</sub>之山所<sub>レ</sub>申也、近日之事、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>善惡左右、只以<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計行<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>是、敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>異儀<sub>一</sub>者也、假令、鎮西之都、管<sub>二</sub>領九國二島<sub>一</sub>之例、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>摸云々、酉刻、天文博士廣元來申、今晚寅刻、流星入<sub>二</sub>河鼓星<sub>一</sub>、天文要錄、大將愼<sub>レ</sub>之云々、余案<sub>レ</sub>之、近日武兵盛興、爲<sub>二</sub>彼大將軍<sub>一</sub>之者、可<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>其愼<sub>一</sub>歟、只以<sub>二</sub>親衛將軍之名、豈應<sub>二</sub>上天之誠<sub>一</sub>者乎、

十八日、丑陰晴不定、傳聞、官兵等入<sub>二</sub>美乃國、攻<sub>二</sub>光長城、相互死者多、遂梟<sub>二</sub>光長首<sub>一</sub>云々、彼國源氏等、光長之外、黨類不<sub>レ</sub>幾云々、而已誅<sub>二</sub>伐爲<sub>レ</sub>宗者<sub>一</sub>了、於<sub>レ</sub>今者、美乃尾張兩國、共以<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>敵對<sub>一</sub>云々、今夜又雪降、今日、攝政被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>云々、後聞、光長被<sub>レ</sub>伐事不定也云々、

十九日、丙晴、庭雪頗積、但不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>昨朝、申刻、大外記賴業來、新院御事以後、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>謁<sub>二</sub>人、依<sub>二</sub>世間不審、竊以召<sub>二</sub>簾前、問<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、申云、來廿四日可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>奏<sub>二</sub>遺詔<sub>一</sub>、

後日可<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>倚廬代<sub>一</sub>云々、御葬送之夜、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>云々、是希代之例也、又云、昨日、左少辨行隆語云、以前大將平朝臣、可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>五畿內、及伊賀、伊勢、近江、丹波等總官<sub>一</sub>之由、已可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>云々者、賴業申云、於<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>總<sub>一</sub>領彼國等<sub>二</sub>之條<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、宣旨之趣、猶可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>思慮<sub>一</sub>歟、只職事爲<sub>二</sub>攝政御使<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>彼第<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰<sub>一</sub>之歟、竹帛之所<sub>レ</sub>載、猶可<sub>レ</sub>耻<sub>二</sub>後鑒<sub>一</sub>、就中、廢帝之時、以<sub>二</sub>惠美大臣置<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>此之官、具見國史云々、其例不<sub>レ</sub>宜、旁可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>猶豫<sub>一</sub>事也云々、其後未<sub>レ</sub>承<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>者、此事、賴業申狀、一旦可<sub>レ</sub>然、但近代之事、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、此上更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>誹謗<sub>一</sub>、後鑒還無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>據事歟、左右只任<sub>レ</sub>法可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行也<sub>一</sub>、就<sub>レ</sub>中、至于如<sub>レ</sub>此之事者、他人不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>得失<sub>一</sub>事也、大將自<sub>二</sub>去冬<sub>一</sub>、所惱不快、今春頻以更發、仍自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>、始<sub>二</sub>千手供<sub>一</sub>、阿闍梨智詮、又居<sub>二</sub>物付<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>邪氣<sub>一</sub>、後聞、總官之宣旨、猶被<sub>レ</sub>下了云々、廿日、丁晴、或人云、賴朝有<sub>レ</sub>病云々、如<sub>レ</sub>此事謬說多端、傳聞、禪門小女、世號御子姬君、巫女腹云々、納<sub>二</sub>法皇宮<sub>一</sub>云々、凡非<sub>二</sub>思慮之所<sub>一</sub>及、彈指而有<sub>レ</sub>餘、實心浮世也、今日故院初七日也云々、廿一日、戌晴、午刻、參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜定能卿來、抄<sub>二</sub>

出節會<sub>二</sub>之間<sub>一</sub>、參議作法持來、披見之處、尤優美也、足<sub>二</sub>稱譽<sub>一</sub>、語云、昨日初七日、左大將以下、公卿濟々、直衣、衣冠、卷纓、垂纓、各別云々、傳聞、賴朝天亡謬說云々、廿二日、戌晴、申刻、中御門大納言來、無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>、傳聞、山階寺兩金堂驗佛、奉<sub>二</sub>取出<sub>一</sub>了、十一面於<sub>二</sub>金堂中尊眉間佛<sub>一</sub>者、未<sub>二</sub>出來給<sub>一</sub>云々、若遂失了給者、誠我氏之滅盡也、廿四日、辛未晴、此日、高倉院被<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>遺詔<sub>一</sub>、大藏卿雅隆朝臣爲<sub>レ</sub>使云々、子細可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>、今夜、主上御倚廬云々、先日、送<sub>二</sub>書於奈良法師許<sub>一</sub>、返札今日到來、曰、正藏院寶物、南圓堂觀<sub>二</sub>口口<sub>一</sub>皆成<sub>二</sub>灰燼<sub>一</sub>了、一切經十三部、自餘正教、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>數燒失了云々、但兩金堂十一面一體奉<sub>レ</sub>出云々、廿五日、壬申、自<sub>レ</sub>夜雨下、美濃國逆賊等、被<sub>二</sub>討伐<sub>一</sub>了、龍舟城、悉被誅了云々、件事、去<sub>二</sub>廿日事<sub>一</sub>云々、官軍被<sub>レ</sub>疵之者、及<sub>二</sub>數十人<sub>一</sub>、傳聞、以<sub>二</sub>法印信圓<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>補<sub>一</sub>山階寺別當、以<sub>二</sub>權少僧都覺憲<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>補<sub>一</sub>別當<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、禪門示<sub>二</sub>送邦綱卿之許<sub>一</sub>云々、今日、依<sub>二</sub>無<sub>一</sub>日次之禪門佛事、并可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>心口之色<sub>一</sub>、日次、於<sub>二</sub>在憲朝臣<sub>一</sub>、着服來月可<sub>二</sub>注申<sub>一</sub>之由問之、而今月廿九日云々、佛事來月廿五日



者、

廿六日、西晴、申時許、攝政以權右中辨光雅朝臣、被問山階寺燒失之間條々事、余依疾不謁、以人傳示之、

一佛像、堂舍、皆悉（師カ）灰燼、其中、西金（師カ）十一面觀音、

高名驗佛也、而件佛一體、不慮奉取出了、（堂衆、其實名按奉要抱出、當可奉安置何處哉、先々雖有此火、時未安件僧口、）

寺中未必悉燒失、仍奉移他堂、是定例也、至于今度者、拂地煙滅、寺中堂舍一字不殘、龍華院、禪定

院等、雖免餘燄、已寺外也、爲之如何、又件佛濫觴、如古老傳者、弘仁年中、有壽廣和尚、（實名不覺、）奉求出、奉安置寺中金堂之處、御體太重、而敢不動搖

給、欲奉居西金堂、天、奉抱出之處、更無煩天奉移了、即輒堆奉動、若可及御占歟、如何、此外、東

金堂釋迦三尊、同奉出了、（當時、右所不分明、）又金堂中尊、眉間銀御佛、（大機冠、被付、即髮之御佛是也、）不知在否之處、舞人光近、翌

日參上、奉求灰中、即奉見付之、件二尊安置之所、又如何、

報云、先佛者、以堂爲所居、縱雖不可奉出寺中、已無堂舍、無止之靈佛等、安置下僧之樊房、付

冥顯有恐、縱雖寺外、豈被安佛閣、何難之有哉、其中、至于十一面像、猶可有思慮者、重可被仰合寺僧等歟、御占、古來之例也、但如此靈佛之進退、容易難決占卜歟、但殘疑者、左右又可在此時議、一修正、修二月已下、恒例佛事、併退轉、猶他堂可被遂行歟、將可斷絲歟、

報云、如此事、可依先例、但廻今案之處、佛像相殘給者、安置他堂、尤可被遂其佛事、佛堂共燒失者、付何可被行哉、此上事、且召問寺家、可有左右歟、

一春日御社、長者御祈、長日維識講、可被繼行歟、然者、可擇吉日哉、將又不可及日次之沙汰歟、先年、（本記不覺、）衆徒與別當不和之時、令斷絕了、其時以吉日所被始行也者、

報云、先例已存、不可及異議者、凡如此之大事、猶召寺家注文、其上被檢燒失之例等、有跡事付跡可被行、其上不決糺事等、注立條々可被尋氏人々也、只今之間狀者、事頗髣髴者歟、且一身難量申廣可及群議者也、此旨同報答了、光雅預法印消息（唯識講事、）於口長、稱追可返給之由、退出



了云々、件狀無別事、只如光雅申狀也、

廿七日、戊申陰晴不定、傳聞、去年冬比禪喜僧正、於乙

訓寺在京邊弘法大師影前、祈請追討使事、其後、江

州平了、彼靈驗歟云、又聞、御齋會竟、無番之僧綱之

上、依故院御事、無論義、又無香水加持之儀云々、

此邊人家等、可爲武士之宿館之由、被點定云

云、是禪門慙可被坐前大將新造堂、件堂在鴨河東、當九條末依

爲其近鄰、有此沙汰云々、事太狼藉也、仍遣觸了、

今日、故院二七日云々、公卿十人許、素服之外、人未

着亮間云々、酉刻許、前大將送使於賴輔入道許、

曰、禪門、并宗盛、可居住東岸之堂邊、仍近邊之地、

殊大切思給、御領之中、河原邊、少々御領申語、

可宛賜郎從之由、所存也云々、即申女院、可計

示返事、由有仰、仍令圖地體、自是可送由答了、

此事、太以難堪之次第也、凡日本國之中、立錫之地、

不可有安穩之歟、可悲々々、法印消息、季長返遣

光雅之許了、返報曰、返賜了、昨日御返事、委申入候

了、子細可注進之由、被仰所司了、申云、僧綱等、

可注申云々、隨被申狀、重可參啓也者、

廿八日、乙亥晴、定能卿來、余奉爲故院、可着心喪服

事、雖不及取御氣色、有事次、可披露之由、示

付了、公事作法之間事、條々有尋問事等、

廿九日、丙子晴、巳刻、長光入道來、午刻、信範入道來、

語雜事、此次語云、此之間、可被補山階寺別當之

由、有其沙汰、任先例、長者付職事、頭弁經房奏聞、即

返仰長者、長者下知權右中辨光雅、光雅仰官、隆職

申先例、攝政之時、被勤如此上卿事、不覺悟、若

可被仰他上卿歟者、光雅申上此旨、長者仰云、

氏事異他、仍先例又如此、於不兼大臣之攝政關

白者、尤他上卿可下知、官之申旨、不存先規歟云

云者、又語云、松殿攝政之間、被坐簾中之時、頗卷

母屋簾、此攝政不然、人以為奇云々、仍尋申之處、御

記之中、可卷簾由不見、松殿所爲有疑、若被守

江次第之說歟云々、良久言語、今日、余奉爲故院、可

着心喪之服、日次先口問在憲、注申今日之由、重

問時之處、子刻、但有憚、不進勘文云々、子刻、

於別棟屋出簾、着之、今日不出仕、

裝束色目、

薄色直衣指貫、各有同色裏、

鈍色衣一重、普通亮間白衣也、而露承、知足院殿、若鈍色張單給、逐被例也、

白下袴、無文冠、卷例、亮闇猶有押、例履、亮押、純色練絹、例、亮闇白衣云、而頗其色透、仍押、純色之、但

例、亮闇猶有押、

實守卿、送書於基輔之許、問可着心喪之服之間、條々不審、粗答了、

傳聞、故中攝政姬君、來月十一日、密々可被參內、侍從忠良可相伴、出車二兩、不可出袖云々、

今月、依爲吉日、於故院御墓所、修諷誦、有誦經文、余加異、

供養阿彌陀經一卷、是則、來月十二日、結緣經供養御

佛、爲余所課、而後日、女院御衰日、尤有其憚、仍先

如形、所奉供養始也、以三昧僧第一、爲講師、布

施一裘、遣侍一人、密々令供養也、入夜頭辨送

書、問中陰行幸事、

其狀曰、

近日、可有遷幸八條第否之由、聊其儀候、仍中

陰之間行幸例、被尋外記候之處、賴業、師尙等、

申狀如此候上、可令計申給之由、內々中宮令

旨所候也、以此趣、可令披露給、經房恐惶頓首

謹言、

正月廿九日

左中辨經房、

進上 伯耆守殿、

禮紙、

逐言上、

欲參入候之處、事已急事也、且可申之由、被

仰下候之間、乍恐言上候也、可令計披露給上

候、經房恐々謹言、

賴業申狀、

中陰內行幸例、注進之、可在時議候、於御周閑

中行幸者、勿論候、延久五年九月十六日、自內裏

遷幸高倉殿、嘉承二年十二月九日、自大炊殿遷

幸六條殿、尤嘉例候、賴業誠恐謹言、

正月廿七日

大外記清原賴業請文、

保元々年七月十一日庚戌、卯刻、御腰輿、自高松

殿一行幸東三條、今日遣官軍於白川、令追散凶

黨、其後還御高松殿、今日有鳥羽院遺詔奏事、去

永萬元年八月廿八日甲辰、自高倉殿遷幸海橋

立事、二條院御事、中陰內也、

師尙申狀、

中陰間行幸例、

保元々年七月二日、鳥羽院御事、

十一日曉、天皇行幸東三條第一、爲禦凶徒也、差遣官軍於白河、凶徒敗績之後、已時遷御高松殿、

永萬元年七月廿八日、二條院御事、

八月廿八日、天皇自土御門第一、遷幸海橋立第一、內侍所同渡御、去比、天台衆燒清水寺之間、南京大衆又以蜂起、世間騷動、若依此事、有遷幸歟、右大略、注進之、非打任事、五十日以後、有遷幸、可宜候歟、但若爲急事者、非此限、師尙恐惶謹言、

返事案、

行幸於八條亭事、爲指急事者、不可及議定一事歟、若非殊事者、中陰以後尤宜歟、保元不足爲例、永萬又難備證之故也、以此旨、可被啓達之狀、如件、

正月廿九日

右大臣(花押)

禮幣、

外記申狀二通、返侍之一、

抑非白地之臨幸者、賢所定渡御歟、而穢中有其憚歟、旁近日之行幸、不叶物議者歟、

今曉、見最吉夢、

卅日、丑陰、雨下、先日、前將軍所申請之御領地事、注指圖、仰遣子細了、未刻、權右中辨光雅、送書於季長之許、申興福寺御佛間事、副寺家注文、其狀如此、

興福寺御佛、安置所事、寺家注文進覽之、內々可經御覽之由所候也、修二月以前、被仰左右候者、可及遲々候、仍乍恐且所申上候也、恐々謹言、

正月廿九日酉刻

權右中辨光雅、

謹上 和泉前司殿、

寺家注文、

金堂釋迦眉間奉籠銀釋迦小像事、

舊記云、康平三年庚子五月四日夜、興福寺金堂燒失、翌日求<sub>二</sub>出釋迦眉間銀佛<sub>一</sub>、容顏自存、敢無損云々、而今度火事之後、正月一日、御寺御監光近、臨壇上、奉求<sub>二</sub>件像之處<sub>一</sub>、丈六烏瑟、雖成灰燼、其形猶如存、自彼中、求<sub>二</sub>出銀像<sub>一</sub>、佛體沸而無形、當時安置春日寶藏、奉渡何處、常樂會、佛生會等、可勤行哉、

東金堂後戶、釋迦三尊像事、脇士、觀音、盧空藏、

件像、自新羅國所貢佛也、前々炎上之時、皆以奉取出、了、而今度、不能奉取出、中尊無首、脇士兩軀、或全體破損、或半身損壞、當時奉渡新樂師寺堂、東大寺末寺、又同堂正丁知大將、希代靈像也、寬仁炎上之時、自踊出、時人號之、云踊大將、而今度、十大師辨基、纔奉取出御首、安置龍花院小房、外、件等像安置何所、可被行修二月哉、自二月于七日修之、萬壽四年始行、至去年無退轉、

西金堂、十一面觀音本緣事、

件像者、壽廣和尚、尾張國人也、住南京、學法相宗、才幹、人也、德行超群、僧綱任和尚、過行拷問坂之前、壽谷池邊之間、暗有音喚己、壽廣令驚詞、瞻視四方、敢無人、于時、存鬼喚由、護身結界、徘徊之間、西田中、又有此音、行彼所、尋求之處、十一面觀音像、額已上自土所出現也、爰壽廣歡喜掘出、洗土泥、自負來、奉立南大門、祈之、何堂可奉安置哉、思惟之間、童子自然出來示云、安置西金堂云々、和尚不信、欲安金堂、負之如盤石、仍欲安西金堂之處、舉動如輕毛、自南端戶奉入之、天長二年乙巳二月五日、別當修圓僧都時、自爾

以降、南扉于今無開、而今度燒失之刻、本師嚴宗、捨身入堂內、自炎中奉懷出、奉安置嚴宗小房、件小房、在西金堂後松院、寺中所殘小房三字內也、件像、安置何所、可被行修二月哉、自二月一日、至于七日修之、自貞觀十一年、至去年、全無退轉、返事案、季長奉書、

御佛等安置所事、寺家注文、經御覽、返上之、如狀者、修二月自明日可被始行事歟、去年有此災、迫期日申上之條、尤懈怠候歟、於今者、有免餘焰之佛閣者、先奉安置其所、可被遂行佛事歟、被差遣御使、寺僧相共、計便宜之所、令致沙汰、尤宜候歟、抑眉間御佛、沸而無形云々、已是大事候歟、如此之時、准據之例、早可被尋候歟、且可令披露此等之趣、給此上事、先日大概被申候了、

猶子細候者、隨其趣、可被申之由、所御消息候也、恐々々々、

正月卅日未刻

季長奉、

禮希、

追啓、

昨日酉刻御教書、今日未刻到來、御使懈怠候



歟、

去廿五日、禪門小女、號安藝御子、納法皇之宮、只如付女也、號冷泉局云々、後聞、名號未付、爲御猶子之儀云々、允此事可彈指、

## 二月

一日、戊寅陰晴不定、時々雪降、攝政被參女院、傳聞、謀叛賊源義俊、爲義子、號三子、率數萬之軍兵、超來尾張國、官兵疲兩度合戰、暫休息近江美濃之邊、忽不可寄戰云々、今曉有夢想、

二日、己卯天晴、晚頭、中御門大納言被來、隔簾謁之、小時歸出了、山階寺燒殘佛像等安置所、并可<sub>レ</sub>行佛事之間事、人々申狀尋出、攝政見<sub>レ</sub>之、被尋問人、

左大臣、被<sub>レ</sub>中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡別院

左大將、被<sub>レ</sub>中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡別院、若未寺之間之由、

新大納言、被<sub>レ</sub>中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡別院、若未寺之間之由、

堀川中納言、被<sub>レ</sub>中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡別院、若未寺之間之由、

者、於當時安置之所、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行候由、

左大辨、被<sub>レ</sub>中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡別院、若未寺之間之由、

大外記師尙、被<sub>レ</sub>中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡別院、若未寺之間之由、

此上被<sub>レ</sub>下知<sub>レ</sub>之趣、重尋了、

傳聞、常陸國勇士等、乖賴朝了、仍欲伐之處、還散々被<sub>レ</sub>射散了、此由、飛脚到來、今明被<sub>レ</sub>遣官兵者、自<sub>レ</sub>彼可<sub>レ</sub>攻之由申上云々、但實否難知歟、

又聞、中陰內行幸事、人々一同、申不可<sub>レ</sub>然之由、仍延引、可<sub>レ</sub>及來三月云々、今日、法皇渡御宸勝光院南御所、件所、故建春門院御所、

三日、庚辰天晴、攝政返事云、修二月事、任例以式日、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂行、御佛安置所、禪定院可<sub>レ</sub>宜、且寺僧可<sub>レ</sub>相計之由、仰下了云々、故院御料、結緣經御佛、可<sub>レ</sub>爲余沙汰云々、仍召範季仰付了、

傳聞、賴朝寄攻常陸國之間、始一兩度、雖被<sub>レ</sub>追歸、遂伐平了云々、是又實否難知、一昨日自彼國上洛之者說云、縱橫之說、隨聞及注<sub>レ</sub>之、但於事外之淨說者、不能

遂可<sub>レ</sub>見虛實歟、

去朔日晚、季長朝臣、爲余見吉夢云々、此中有太神宮御事、彌可<sub>レ</sub>信歟、今曉、同朝臣所召仕之侍、見

同夢云々、

或人云、禪門之女、參法皇之間、有種種事等云々、天下之災難奇異、只在近日、漢家、本朝、往古來無比類之世也、

四日、辛巳雨降、朝間雪下、傳聞、故高松院御庄、并京地等、被讓<sub>レ</sub>獻故建春門院、仍高倉院御傳領、而登霞之刻、被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>分中宮<sub>レ</sub>之由、時忠卿中<sub>レ</sub>法皇、御處分之實否難知、時忠之所行歟、不<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>分明之仰、中陰之間、號<sub>レ</sub>中宮令旨、推以奉行、法皇內心不<sub>レ</sub>說云々、

五日、壬午天晴、申刻、俄陰小雨、即晴了、午刻、佛嚴聖人來、依<sub>レ</sub>請也、未刻、主稅頭和氣定長、相<sub>レ</sub>具苛利勒藥種<sub>レ</sub>參上、於前合<sub>レ</sub>和之、桂心、檳榔子、於余許<sub>レ</sub>儲之、近代、桂心甚不法、仍於余許<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>其氣味<sub>レ</sub>之內方許<sub>レ</sub>削取、用之、申刻、參女院御方、着<sub>レ</sub>心喪服<sub>レ</sub>之後、須<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>本所、而依<sub>レ</sub>行步不通、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>參上、密々以<sub>レ</sub>手與<sub>レ</sub>參女院御方、依<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>連々事、撰<sub>レ</sub>無憚之日、始所參也、今夜子刻、姬君病惱、有<sub>レ</sub>溫氣、

六日、癸未天晴、午刻、泰茂持<sub>レ</sub>來太一定分厄勘文、此次、問<sub>レ</sub>姬君所惱事、惡治身之上、土公成<sub>レ</sub>崇、無<sub>レ</sub>殊大事云々、泰親、憲成等、占<sub>レ</sub>申殊重由、基輔來<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>院云、結緣誦經物事、子細不<sub>レ</sub>分明、嘉承記只注<sub>レ</sub>其員

數、不<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>所課人、謂時隆季卿令<sub>レ</sub>案云、若可<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>御佛歟、是非宛申之儀、內々可<sub>レ</sub>相伺云々、此等旨、棟範所<sub>レ</sub>申也云々者、余云、嘉承誦經物、基隆、敦兼等朝臣、各百家保<sub>レ</sub>五十<sub>レ</sub>正、等、勤<sub>レ</sub>仕之、見<sub>レ</sub>師時記、更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>不審、但先例、縱雖<sub>レ</sub>然、今度可<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>佛者、左右只可<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>本所下知<sub>レ</sub>歟、抑誦經文事如何、願文書垂也、無着所、隨又、嘉承誦誦文如此、但彼度、受領等、備<sub>レ</sub>進其料物、至于今度者、下官可<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>仕者、尤可<sub>レ</sub>加署<sub>レ</sub>歟、而與<sub>レ</sub>願文<sub>レ</sub>相違之條如何、又乖<sub>レ</sub>先例<sub>レ</sub>歟、進退之間、可<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>本所之成敗<sub>レ</sub>也、早承<sub>レ</sub>重議定、可<sub>レ</sub>相存者、以此旨、可<sub>レ</sub>含<sub>レ</sub>棟範<sub>レ</sub>由、仰<sub>レ</sub>基輔<sub>レ</sub>了、此事、奉行之人等、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>師時記<sub>レ</sub>歟、只任<sub>レ</sub>彼例<sub>レ</sub>、有<sub>レ</sub>沙汰、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>事之煩歟、如何々々、又嘉承之例、佛具有<sub>レ</sub>所課人、造花佛供等、付<sub>レ</sub>彼勤<sub>レ</sub>之、而今度不<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>調佛具、仍又付<sub>レ</sub>佛可<sub>レ</sub>沙汰<sub>レ</sub>云々、其由仰<sub>レ</sub>範季<sub>レ</sub>了、傳聞、昨日自<sub>レ</sub>倚廬代、還<sub>レ</sub>御本殿<sub>レ</sub>云々、但今度不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>橡宣旨、依<sub>レ</sub>嘉承例<sub>レ</sub>也、主上不<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>御服<sub>レ</sub>之故也、今夜、依<sub>レ</sub>吉日、姬君祈、修<sub>レ</sub>土公鬼氣祭、依<sub>レ</sub>率爾、召<sub>レ</sub>近邊居住之門生、

七日、甲申天晴、午刻、典藥頭和氣定成參上、依<sub>レ</sub>召也、令

見姬御前身、聊赤小瘡出之故也、申云、非<sub>レ</sub>痘瘡、依<sub>レ</sub>溫氣出來熱氣也、所勞之體、疔氣相交、但不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>殊大事、歟云々、今夜、漏刻博士憲成、修<sub>二</sub>土公鬼氣祭<sub>一</sub>、

此日、相<sub>二</sub>當春日祭<sub>一</sub>、然而被<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止祭<sub>一</sub>了、又爲<sub>二</sub>穢中<sub>一</sub>、仍不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>神齋之儀<sub>一</sub>、歟、而祭付<sub>レ</sub>社猶被<sub>レ</sub>行之由、存之間、猶忌<sub>二</sub>僧尼、服者、月水等<sub>一</sub>、及<sub>レ</sub>晚間<sub>二</sub>祭停止<sub>一</sub>由、然而其後、此輩不出來、如<sub>レ</sub>此之時、有<sub>二</sub>神齋<sub>一</sub>、哉否、重可<sub>レ</sub>檢<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>也、余自<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub>風病、咳氣競發、前後不覺者也、基輔來語云、昨日、中宮被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>佛事<sub>一</sub>云々、又仰旨申<sub>二</sub>棟範<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>、觸<sub>二</sub>隆季卿<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>申也云々、

八日、酉<sub>二</sub>天晴<sub>一</sub>、今曉、姬君祈、使<sub>二</sub>大藏大輔泰茂修<sub>二</sub>泰山府君祭<sub>一</sub>、今日、件所勞頗宜、但溫氣未<sub>レ</sub>散、召<sub>二</sub>憲基<sub>一</sub>令見、申狀如<sub>二</sub>定成<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜、大夫史隆職參來、日者所勞、久不<sub>レ</sub>參云々、去五日、被<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>高倉院御齋會事<sub>一</sub>、又被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>開關事<sub>一</sub>、已上上卿、中納言兼雅卿、但不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>解陣事<sub>一</sub>、去年、東國被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>追討使<sub>一</sub>之刻、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>警固<sub>一</sub>、但無<sub>二</sub>關事<sub>一</sub>、仍被<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>高倉院遣詔<sub>一</sub>之日、有<sub>二</sub>固關<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>警固<sub>一</sub>之儀、故又雖被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>開關<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>解陣之沙汰<sub>一</sub>、歟、又云、昨日被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>下京中在家<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計注<sub>二</sub>由<sub>一</sub>、左右京職官人、官

使、檢非違使等注<sub>レ</sub>之、但國使不入云々、又遣<sub>二</sub>官使<sub>一</sub>、檢非違使於美乃國、點<sub>二</sub>渡船等<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>官軍<sub>一</sub>之由、同以宣下、已上、公卿別當卿、又被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>注出持參也、其狀如<sub>レ</sub>此、治承五年二月七日 宣旨、

頃年以來、諸夏不<sub>レ</sub>靜、災異發呈、兵旁起、思<sub>二</sub>其表<sub>一</sub>示之指、偏是魔緣之所<sub>レ</sub>致歟、自非<sub>レ</sub>假<sub>二</sub>佛力<sub>一</sub>、何以安<sub>二</sub>人庶<sub>一</sub>、宣下<sub>二</sub>知神社、佛寺、諸司、諸家、及五畿、七道諸國<sub>一</sub>、顯<sub>二</sub>不動明王像<sub>一</sub>、寫<sub>二</sub>尊勝陀羅尼摺等<sub>一</sub>、圖<sub>二</sub>等體數遍<sub>一</sub>、數只任<sub>二</sub>其力之堪否<sub>一</sub>、勿<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>其數之多少<sub>一</sub>、遂<sub>二</sub>供養於如說<sub>一</sub>、攘<sub>二</sub>厄難於未兆<sub>一</sub>、

件宣旨、上卿左大臣、職事經房云々、事已爲<sub>二</sub>新儀<sub>一</sub>、各差<sub>レ</sub>使可<sub>レ</sub>觸廻、兼又成<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>京中諸家<sub>一</sub>之由、經房所<sub>レ</sub>申也云々、

同日 宣下、

以<sub>二</sub>前越中守平朝臣盛俊<sub>一</sub>、宣<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>丹波國諸庄園總下司<sub>一</sub>、

件宣旨、上卿時忠卿、職事行隆云々、余密々問云、以<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>庄園下司<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>例哉如何、答云、未<sub>二</sub>曾聞<sub>一</sub>云々者、

今夜、內藏助晴光、修<sub>二</sub>土公鬼氣祭<sub>一</sub>、

九日、丙戌天晴、去夜、姬君溫氣散了、汗快出了云々、爲  
 悅不少、傳聞、今日被渡源義基頸、并其弟二人  
 等、乍生捕得之、仍不刑故院中陰之内、似無其義、如  
 何、但近日事、不能是非歟、又聞、關東反賊等及半、  
 越來尾張國、以十郎藏人義俊、爲大將軍云々、其  
 勢不知幾千萬、官軍疲度々之合戰、頗有弱氣云  
 云、又左兵衛督知盛卿、依所惱、俄企歸洛、來十二日  
 可入洛、其替、頭重衡朝臣可行向云々、大將軍歸  
 洛、爲不吉之徵之由、天下謳歌云々、尤然事也、左大  
 將送札、問亮闇裝束不審等、自今日始小湯治、  
 依風病發動也、

十日、丁亥天晴、此日遠忌也、送遣佛經、布施衆等於光  
 明院南堂、如例年、雖湯治之間、於爐邊唱阿彌陀  
 名號、真言等、申刻、藤相公定能來、節會除目等之間、  
 注出參議作法、爲示合件事等也、粗答了、故院結  
 緣經誦經物事、被宛催舊臣之受領等之由、棟範  
 示送基輔之許云々、是依先日余返答之趣、旨、有  
 沙汰歟、爰知、嘉承之例、人々委不存歟、傳聞、實國、  
 實守等、雖非素服之列、着御服、其色黑隆季卿雖  
 賜素服、著鼠色云々、是依近習之親疎、有服色

之淺深歟、

十一日、戊子天晴、今日、中院攝故姬君、密々可入内、而  
 依每事不具延引、可有來十七日云々、申刻、藏人  
 左少辨行隆來、依疾不出客亭、呼簾外、廣庭長押下也、  
 人不可出、運之由謝之、謁之、行隆云、可有行幸八條第之由、  
 先日雖有其儀、人々下官在被申可被過中陰  
 旨、仍延引、而此間、主上聊有御不豫事、爲御所之  
 凶之由、頗有其驗等歟、如女房、内々殊所鬱陶  
 也、加之、故院於彼内裏、御不豫出來、始終非吉、  
 件御崇、全非五條内裏仍旁遷幸八條亭、所忍思食也、  
 保元、永萬、雖不可爲例、已又非無蹤跡之事  
 歟、何況、帝者之儀、以日易月之禮、於倚廬代、被  
 過十三ヶ月了、於其後者、中陰之前後、強不可  
 及沙汰歟、仍猶有遷幸之條如何、但可爲殊巨  
 難者、非此限歟、兼又若可有行幸者、同與之人  
 如何、中攝政姬君、來十七日内々可有入内、雖然、  
 未有后位、粗被尋我朝之例、非后之人、同與之  
 例、曾無所見、爲之如何、若蒙准后之宣旨者、不  
 可有憚哉、此條同可被計申者、余申云、先中陰  
 内行幸事、先日被尋問之時、申所存了、其上於



殊急者、不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>歟、但偏可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>御樂事<sub>一</sub>者、御祈禱、御療治、全不可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>、今所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>疑者、御所之凶許歟、若然者、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>也、雖<sub>レ</sub>彼趣、若忿、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>遷<sub>二</sub>御他所<sub>一</sub>之由、令<sub>二</sub>占<sub>二</sub>申<sub>一</sub>者、不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、不然者、猶被<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>中陰<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>穩便<sub>一</sub>歟者、行隆重云、密事、非<sub>二</sub>御樂一事<sub>一</sub>、武勇之輩、守<sub>二</sub>護內裏<sub>一</sub>之間、其程遠、而於<sub>レ</sub>事有<sub>レ</sub>煩、又非<sub>二</sub>無事之怖<sub>一</sub>、仍雖<sub>二</sub>一度<sub>一</sub>有<sub>二</sub>其例者<sub>一</sub>、可有<sub>二</sub>忿行幸<sub>一</sub>之樣、禪門所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>存也云々、余申云、素所<sub>レ</sub>申、於<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>殊御用<sub>一</sub>者勿論、只不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>議定<sub>一</sub>、早可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>遷御<sub>一</sub>事也、此上不能<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>者、同與人事、嘉承、二條大宮、道子內親王是也、被<sub>レ</sub>擬<sub>二</sub>母儀<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>同與之沙汰<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>后位<sub>一</sub>、同與不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憚之由<sub>一</sub>、人々議奏、然而、即位之日、載<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>立后<sub>一</sub>、然者、今度依<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>、立后之後、同與雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、事已無<sub>二</sub>止事<sub>一</sub>、可有<sub>二</sub>急速之行幸<sub>一</sub>者、縱雖<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>例、准后之人同與、有<sub>二</sub>何事<sub>一</sub>哉、漢家之禮、不限<sub>二</sub>必后位<sub>一</sub>、霍光同<sub>二</sub>與宣帝<sub>一</sub>之由、匡房卿、嘉承之度所<sub>レ</sub>申也、凡非<sub>二</sub>霍光<sub>一</sub>人、漢朝總有<sub>二</sub>三系之禮<sub>一</sub>歟、然者、當時后位無<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>、中陰及閏月之間、立后忽不可<sub>レ</sub>叶云々、今度之行幸、准后宣下之後、同與不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其難<sub>一</sub>、但退猶可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>立后<sub>一</sub>歟、其故、

於<sub>二</sub>今度<sub>一</sub>者、他儀不可<sub>レ</sub>叶、仍以<sub>二</sub>新儀<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>准后之同與<sub>一</sub>、禮須<sub>二</sub>以后位<sub>一</sub>、備<sub>二</sub>其仁<sub>一</sub>、故退可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>冊命<sub>一</sub>之由所<sub>レ</sub>申也者、行隆、此次、語<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>、伊勢等事、肥後國菊池郡住人高直、有<sub>二</sub>謀叛之聞<sub>一</sub>、仍九國與力、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>伐之由、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>了、又熊野惡徒等、越<sub>二</sub>來伊勢國<sub>一</sub>、伊裝宮近邊、燒失了、已欲<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>內外宮之間<sub>一</sub>、和泉守信兼來逢、希有伐散了、少々伐取、其外逃脫之輩、多以入<sub>二</sub>海云々<sub>一</sub>、此外、於<sub>二</sub>關東事<sub>一</sub>者、委不<sub>レ</sub>聞、此間、廻<sub>二</sub>伊勢國<sub>一</sub>、船、可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>須萬多渡<sub>一</sub>、其後、官軍可<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>攻尾張國<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>聞也云々、小時退出了、今夜、召<sub>二</sub>女院侍等<sub>一</sub>、條加<sub>二</sub>勘發<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>過怠等<sub>一</sub>也、今朝、上日衆五人召罷了、

十二日、丑天晴、此日、故院結緣經供養也、余依<sub>二</sub>先日定<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>御佛<sub>一</sub>、訓送文、件送文、無家令之器所并右大原家字、其書樂也、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>內々之事<sub>一</sub>也、

三尺普賢菩薩像一鋪、二幅、差赤地錦緣、以<sub>二</sub>帟風<sub>一</sub>裏、是雖<sub>二</sub>用<sub>二</sub>白唐綾<sub>一</sub>、軸平文有<sub>二</sub>金物<sub>一</sub>、

佛臺一基、其鉢、如<sub>二</sub>衣荷<sub>一</sub>、平文、有<sub>二</sub>金物<sub>一</sub>、行水棟礎、雖<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>黑漆打<sub>二</sub>臂金<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>懸<sub>二</sub>佛也<sub>一</sub>、

造花佛供如<sub>レ</sub>例、造花、綠色之佛供、染佛供四坏、例白佛供二坏、

佛供等、嘉承例者、付<sub>二</sub>花机等所役<sub>一</sub>歟、而今度、  
無<sub>二</sub>佛具新調<sub>一</sub>、仍付<sub>レ</sub>佛可<sub>二</sub>調進<sub>一</sub>之由、棟範所<sub>レ</sub>申  
也、

被物一重、中陰事、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>過差<sub>一</sub>調<sub>二</sub>綾<sub>一</sub>、而  
人々多調<sub>二</sub>織物被物<sub>一</sub>云々、

絹袋一、布五段、

佛布施一袋、例絹袋也、  
綿五兩歟、

已上、納<sub>二</sub>長櫃二合<sub>一</sub>、赤衣仕丁持<sub>レ</sub>之、衣冠下家  
司相<sub>二</sub>具之<sub>一</sub>、此外、基輔朝臣相具所<sub>レ</sub>參也、件佛  
已下事、一向範季所<sub>二</sub>勤仕<sub>一</sub>也、

今日、御導師、慶智律師云々、御願文、兼光朝臣所<sub>レ</sub>作  
也、人々捧物、皆被物云々、入<sub>レ</sub>夜、二品有<sub>二</sub>佛事<sub>一</sub>云々、  
東國追討使大將軍左兵衛督知盛卿歸洛、依<sub>レ</sub>疾也云  
云、

十三日、庚寅天晴、早旦、女房密々參<sub>二</sub>詣廣隆寺、六角堂  
等<sub>一</sub>、未刻、藏人左少辨行隆來、呼<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、先日  
所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>尋之行幸之間沙汰也<sub>一</sub>、就<sub>二</sub>余申狀<sub>一</sub>、御樂并御  
所事、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>官<sub>一</sub>依<sub>レ</sub>祿中、召<sub>二</sub>祿召<sub>一</sub>藏人  
外、内々問<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、寮所問<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、等<sub>二</sub>之處<sub>一</sub>、申旨各  
別、就<sub>レ</sub>何可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行哉、須<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>官卜申旨<sub>一</sub>也、然而至<sub>二</sub>  
今度<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>必然<sub>一</sub>、事體猶有<sub>二</sub>行幸者<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>宜歟云々  
者、申云、先日被<sub>二</sub>尋問<sub>一</sub>之處、有<sub>二</sub>殊急事者<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可

及<sub>二</sub>議定<sub>一</sub>、早可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>御樂之一事<sub>一</sub>者、御所之  
凶有無之條、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>之由令<sub>レ</sub>申丁、付<sub>レ</sub>之被  
問<sub>二</sub>官寮<sub>一</sub>、申狀各別之時、被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>官申狀<sub>一</sub>者例也、今可  
被<sub>レ</sub>棄<sub>二</sub>其狀<sub>一</sub>之由、難<sub>二</sub>定申<sub>一</sub>、此上事、只可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>  
也、恐慮難<sub>二</sub>定申<sub>一</sub>者、行隆内々語云、若有<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>者、  
來廿日可<sub>レ</sub>宜之山、所<sub>二</sub>擇申<sub>一</sub>也云々、行隆所<sub>二</sub>持來<sub>一</sub>之  
卜形等如<sub>レ</sub>此、

御所吉凶、并行幸事、  
官、

卜吉凶事、

問、五冬皇居吉凶如何、

推<sub>レ</sub>之、吉歟、

問、有<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>幸他所<sub>一</sub>、吉凶如何、

推<sub>レ</sub>之、不快歟、

治承五年二月十二日、神祇權少祐卜部宿禰兼衡

權大副卜部宿禰兼友

寮、

御所吉凶、

占、今日己丑、時加<sub>レ</sub>巳、正月、徵明臨<sub>レ</sub>巳爲<sub>レ</sub>用、將騰蛇、

中小吉、青龍、終大吉、天后、御行年、已上微明、騰蛇、卦遇反吟、

推之、被用皇居、有御樂事、不吉歟、何以言之、用并御年上、帶騰蛇、是主御樂事、又三傳爲無氣、卦遇反吟、是主御所不吉之故也、

資元、

廣元、

業俊、

季弘、

泰親、

在憲、

御不豫事、

官、

ト御不豫事、

問、依何答崇、所致哉、

推之、依御身過、并土公崇所致歟、

問、依御不豫、被加護身吉凶如何、

推之、被加護身、半吉歟、

年月

署所同前、

察、

日來、御心神不例、依何崇所致哉、

占、今日己丑、時加申、正月節、奉勝光臨、卯爲用、將

天空、中河魁、朱雀、終天岡、大裳、御行年、已上傳送、

勾陣、卦遇虎視氣路路、

推之、依御惡治身、土公咒咀成崇、所致之

上、靈氣加答歟、丙丁壬癸日、御増減之期也、

年月

署所同前、

凡、此行幸之沙汰、狂亂也、何強被訪諸人一哉、只任

雅意可被行事也、今日、入夜雨下、長光入道來、

十四日、辛卯天陰雨降、可被奉供養不動尊勝陀羅尼

等事、自官觸女院廳云々、

攝政送書云、行幸、猶來廿日一定也、同與人、來十七

日密々可參內、准后以前同與、何様之事哉、不審云

云、報云、廿日以前、蓋被宣下准后之事哉者、

十五日、壬辰天晴、傳聞、鎮西謀反之輩、逐日興盛、燒

拂太宰府了云々、季經朝臣來、談姬君入內之間事、

萬事不具云々、光盛參上、持來諫言抄四局、件光盛

所抄出云々、件書以假名書之、女房爲易讀

也云々、事太無所據、仍以真名可書、重仰了、件

抄、先年之比抄始、自然不終功、近日抄了云々、主稅

頭定長參上、仰<sub>二</sub>醫道抄物事、可<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>進療治方<sub>一</sub>之由也、件抄所<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>名醫五人<sub>一</sub>也、典藥頭定成、合藥方、前藥院憲基、病源抄、施藥使賴基、藥種功能、去々年、賜證類本草一部、時、未及他抄等之沙汰、去比、各仰一事、可<sub>レ</sub>令抄進所主稅頭思企也、仍定成、憲基等、召仰<sub>二</sub>（後日、仰灸穴事了）、法名覺運、可<sub>レ</sub>仰養性之方、於灸定長、療治主稅入道知康、未召仰之、此間可<sub>レ</sub>仰也、治之要穴<sub>一</sub>者、手自可<sub>二</sub>抄出<sub>一</sub>也、人神所在事、當時依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其要、不<sub>レ</sub>令抄之<sub>一</sub>、何況家々說々不同、古來醫家之論、只在<sub>二</sub>此事、仍一人之抄出、難備<sub>二</sub>指南<sub>一</sub>、旁不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>召仰<sub>一</sub>也、

十六日、已癸天晴、召使來催云、明日、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>行幸八條亭<sub>一</sub>、右大將可<sub>二</sub>參仕<sub>一</sub>者、當時有<sub>二</sub>所勞、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、相扶得者、可<sub>レ</sub>參之由令<sub>二</sub>申了<sub>一</sub>、大將未<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>亮聞之服<sub>一</sub>、連々依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>也、着<sub>二</sub>吉服<sub>一</sub>、供<sub>二</sub>奉行幸<sub>一</sub>、專不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、可<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>美服<sub>一</sub>之由、被<sub>二</sub>宣下了<sub>一</sub>、人定驚眼歟、於<sub>二</sub>內々事<sub>一</sub>者、着<sub>二</sub>吉服<sub>一</sub>出仕、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其憚<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>于行幸<sub>一</sub>者、已大禮也、非<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>之人、吉服之條、甚非<sub>二</sub>穩便<sub>一</sub>之上、日者病惱、當時不快、仍申<sub>二</sub>所勞之由了<sub>一</sub>、攝政以<sub>二</sub>消息<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>告<sub>二</sub>行幸之由於大將<sub>一</sub>、同申<sub>二</sub>所勞了<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>亮聞服<sub>一</sub>之子細、同相示了、又大將、以<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>、觸<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>所惱不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>參之由於頭辨了<sub>一</sub>、傳聞、知盛卿歸洛

了、其替、重衡朝臣可<sub>レ</sub>向之由、有<sub>二</sub>其儀<sub>一</sub>、然而其儀忽變、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>鎮西云々<sub>一</sub>、傳聞、今日被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>賊首<sub>一</sub>、十人、使廳請取云々、中陰內、頻有<sub>二</sub>此事、如何々々<sub>一</sub>、十七日、午甲天晴、此夜、行<sub>二</sub>幸賴盛卿八條亭<sub>一</sub>、先是、故攝政姬君、生年十九、密々入內、即同與云々、我朝非<sub>二</sub>后位<sub>一</sub>之人、無<sub>二</sub>同與之例<sub>一</sub>、然而被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>准后宣旨<sub>一</sub>之後、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>同與之由<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>過日之沙汰<sub>一</sub>、忽立后不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶之故也、事彌倉卒、仍准后宣旨、猶以不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下歟、每事只<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>議、而無<sub>二</sub>始終、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>左右事也<sub>一</sub>、後聞、參內之後、有<sub>二</sub>准后宣旨云々<sub>一</sub>、傳聞、熊野法師原、燒<sub>二</sub>拂阿波國<sub>一</sub>、追捕在家雜物、資材、米穀等之類、不<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>一物<sub>一</sub>、搜取了、又源義俊、爲義子、世稱十郎藏人、居<sub>二</sub>住尾張國<sub>一</sub>、其勢三萬餘騎、在<sub>二</sub>美乃國<sub>一</sub>官兵等、僅七八千騎云々、賴朝未<sub>レ</sub>越<sub>二</sub>足柄關<sub>一</sub>、先以<sub>二</sub>義利之勢<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>四手<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>寄攻云々、又聞、鎮西謀叛之者張本徒黨十六人同意云々、爲<sub>二</sub>余見<sub>一</sub>最吉夢之由、有<sub>二</sub>告送之者<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>太神宮冥助<sub>一</sub>事歟、深可<sub>レ</sub>信々々、□□今日、依<sub>二</sub>七宮不食所勞<sub>一</sub>、法服被<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>自西山<sub>一</sub>也、

十八日、未乙天晴、基輔來語云、去夜行幸、及<sub>二</sub>曉更<sub>一</sub>、同與之人遲參之故云々、自<sub>二</sub>母堂之家<sub>一</sub>、先向<sub>二</sub>攝政八條亭<sub>一</sub>、



其後參內、夜半云々、攝政須<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>彼姬君來臨<sub>一</sub>之處、先以參內、人爲<sub>レ</sub>奇云々、伴姬君入內之儀、侍從忠

良、車前駟、衣冠六人、共殿上人、宗雅、盛定等、出車

二兩、半物一人、雜仕二人云々、基輔參<sub>二</sub>會內裏<sub>一</sub>云々、

自<sub>レ</sub>陣可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下車<sub>一</sub>之處、雨脚如<sub>レ</sub>沃、仍竊<sub>二</sub>輦<sub>一</sub>車被<sub>レ</sub>下

云々、行幸供奉公卿、宗家卿之外、無<sub>二</sub>納言<sub>一</sub>、信範卿

着<sub>二</sub>吉服<sub>一</sub>云々、又近衛司無人、忽被<sub>二</sub>譴責<sub>一</sub>之間、少將

兼宗、元雖<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>諒闇<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>調<sub>二</sub>儲束帶<sub>一</sub>之間、着<sub>二</sub>吉服<sub>一</sub>供

奉、人以<sub>レ</sub>屬<sub>二</sub>目云々<sub>一</sub>、此日、新院五七日也、導師澄憲僧

都、六十僧、此中有七僧左大臣已下、公卿廿餘人參入云々、

或帶<sub>二</sub>劔取<sub>一</sub>笏、或不<sub>レ</sub>然云々、此事、先例不<sub>レ</sub>同歟、

十九日、丙申天晴、已刻、參<sub>二</sub>女院御堂<sub>一</sub>、日來御坐今日、故

殿御忌日也、導師覺智僧正、公卿不<sub>二</sub>參入<sub>一</sub>、季經、賴輔

朝臣等已下也、余佛事、同懸<sub>二</sub>置佛供養<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>例年<sub>一</sub>、酉刻

歸家、

傳聞、主上御不例、大略平減云々、後聞、今日攝政被

<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>淨光明院<sub>一</sub>、公卿、朝方、雅長等、候<sub>二</sub>簀子<sub>一</sub>、攝政司

壺禰、信範入道、祇<sub>二</sub>候其傍<sub>一</sub>、人以<sub>レ</sub>屬<sub>二</sub>目云々<sub>一</sub>、

廿日、丁酉天晴、召<sub>二</sub>憲基朝臣<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>大將所惱事<sub>一</sub>、又明後

日、廿二日、可<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>灸治<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>參之由、召仰了、

酉刻、隆職來、召<sub>二</sub>籠前<sub>一</sub>、談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、世間事、大略相語事等、

一去十七日行幸、大殿祭有無評定、遂准<sub>二</sub>穢中之儀<sub>一</sub>、

不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、凡中陰內、雖<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>三十日<sub>一</sub>、諸社祭

被<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>、准<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、但於<sub>二</sub>中陰以後<sub>一</sub>

者、雖<sub>二</sub>亮闇中<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>件祭<sub>一</sub>也、保元行幸別儀也、

永萬又穢中也、仍不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、觸穢以後、中陰

之內行幸、今度已爲<sub>二</sub>初度<sub>一</sub>、仍有<sub>二</sub>議云々<sub>一</sub>、

一新院中陰之內、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>賊首<sub>一</sub>、未曾有事也、就<sub>二</sub>中<sub>一</sub>、

不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>解文<sub>一</sub>、使應請取之例、古今未<sub>レ</sub>聞、被

<sub>レ</sub>誅<sub>二</sub>謀反之輩<sub>一</sub>之時、先所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>賊首解文<sub>一</sub>也、

如<sub>レ</sub>此程事、職事可<sub>二</sub>相存<sub>一</sub>候、使應又可<sub>二</sub>驚申<sub>一</sub>、彼

是不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>言歟云々<sub>一</sub>、

一去正月五日、東大、興福、兩寺僧綱、可<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>却見

任<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>了、被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>山階寺別當<sub>一</sub>之

時、依<sub>二</sub>不審起<sub>一</sub>、兩條之間、一、主上御倚廬代之

間、如<sub>レ</sub>此事宣下、其例不<sub>二</sub>覺悟<sub>一</sub>、如何、二、可

<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>却見任<sub>一</sub>之由、被<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>之後、未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>下還

補之由、然者、只載<sub>二</sub>綱位<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>除<sub>二</sub>官職<sub>一</sub>歟、如何、

光雅云、凡不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、倚廬之沙汰勿論、又前

官之不審、不可及沙汰、以權大僧都仁圓、爲別當、以權少僧都覺憲、爲權別當之由、繼承攝政之仰、此上不可及異議、早可載此狀云々、仍任命所下宣旨也云々、

一日比、左少辨行隆仰云、有可召東大寺所司之事、別當已解任、付誰人可召哉、隆職申云、付造寺長官兼光朝臣、可被召也者、然而不承引、付綱所召之、曾無例事也、其次、行隆云、禪喜、全稱不被解官旨、頻執行寺領事、凡力不及云々、

一京中在家被計事、大略、公家知食富有之者、可被宛召兵糧米之故云々、但不可限兵糧米、院宮、諸家、併可被奉宛、是天下飢饉之間、割富與貧之義也云々、

良久退出了、

傳聞、關東事、聞宮不御坐之由、多有乖賴朝之者、甚物忿、又其勢雖云數萬騎、全不可叶物要、尤嗚呼也云々、是又不知實說、

廿一日、戊戌天晴、未刻、法性寺座主被來、數刻談語、入夜被還了、傳聞、坂東軍陣、太以物騷、泉冠者、

不知召具十郎藏人義俊請降、來官兵方之由風聞、但義俊被捕之條、果以僻事歟、不被信受、

廿二日、己亥天晴、已刻、俄雪降、即晴了、此日、大將加灸治、前施樂院使丹波憲基朝臣、參勤之、灸所十三所也、醫師賜御衣、并牛等、女房參女院御方、余同參、依此事也、今日、新院藏人來、催來月三日御正日粥時、申承之由了、

廿三日、庚子天晴、小兒頭在西堂、是五體不具、七ヶ日穢也、然而、近日天下皆有穢氣之疑、諸人不參詣神社、仍不及立札、申刻、定能卿來、問公事之間不審、此間注出參議作法等云々、

入夜外記大夫〔師〕史誤師景參上、持來素書一卷、依先日召也、今日依吉曜、持參之由所申也、此書、相傳之人甚少、先年祖父師遠、自白川院下給、深以祕藏、傳在彼家、余聞此由、仰可加一見之由、雖子孫、容易不可傳授之由、師遠書起請、仍恐懼甚多、進退惟谷、竊致祈請之間、夢中有可許之告、其狀在別紙、他事等相次、爲師景爲余總以最吉之祥也仍手自終寫功、今日所持參也、靈告嚴重、殆拭感淚、余謹正衣裳、以讀合之、余披新師景持本也張良一卷書即是也、黃石公於圯上授

子房、傳之登師傅之書也、而余不慮得之、豈可不悅哉、抑張良一弓之書、或稱六韜、或謂三略、其說區々、古來難義也、然而、晉簡文帝說、尤足爲證據、何況、六韜者、卽太公之兵法也、黃公更授子房之條、其理頗不當歟、三略者、張良自所作也、然者、於圯橋之上、自黃公之手、受之書、卽以素書、可謂眞實、彼三略者、傳得此書之後、所制作歟、世人深不悟此義歟、但區々末生、難決是非、只任一旦之愚案、爲後鑒錄子細許也、又此書相承次第、加匡房說者、彼張良末胤、渡我朝、所謂張修理不知是也、件男傳持此書、爲故資綱中納言家僕、仍令進主君歟、在彼中納言家云々、其子家賢卿之時、進白川院、自彼院、師遠所下賜也、余案之、件書端、小野宮右府以此書、有被送入道中納言顯基卿許之狀、資綱者顯基子也、以之推之、彼張修理、祇候資綱卿之許之間、以其因緣、傳此書歟之由、匡房卿致邪推歟、實資公、已傳此書、何必限張修理哉、是又愚案也、定不叶正說歟、

廿四日、辛丑天晴、今日、小御堂修二月也、中御門大納言一人參仕、先被來此第、余及大將、共依所勞、不

候其座、

廿五日、壬寅天晴、申刻以後天陰、雨雪間下、早日、請佛殿上人、習大金剛輪真言、大將加灸治之後、未更發云々、又咳止了、爲悅々々、此日、公家於叡勝光院、奉爲高倉院、被行御齋會、上卿兼雅卿云々、又六七日也、

廿六日、卯癸天晴、此日、叡勝金剛院修二月也、雅賴卿一人參仕云々、傳聞、關東徒黨、其勢及數萬、官兵脆弱、仍俄前將軍宗盛已下、一族武士、大略可下向、來月六七日之比云々、重衡鎮西下向停止了云々、

廿七日、辰甲傳聞、邦綱卿煩二禁、禪門病頭風云々、民部卿資長、一昨日於日野出家、今日使季長朝臣訪之、無指疾、只遂年來之素懷也、雖遇亂世、未會當其殃、次第昇進無怨、昇正二位中納言、又任民部卿、其息、帝者侍讀、四位中辨也、涯分榮望、專爲足、遂以遂本懷、誠末代之幸人也、

廿八日、巳乙雨降、傳聞、邦綱二禁有煩、今日加灸治、百六十帖云々、憲基治之、定成云、物體雖非殊大事、次第療治相違、病者身弱、有其怖云々、憲基云、於瘡全不可有、其恐、只身體衰損、此條難治云々、總以非



無<sub>レ</sub>恐事<sub>二</sub>歟、病者彌以憶、敢不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>飲食<sub>一</sub>云々、又聞、  
禪門頭風、事外有<sub>レ</sub>增云々、又中宮不例云々、

廿九日、丙午天晴、此日、高倉院御法事也、導師公顯僧  
正、攝政已下、公卿多以參入云々、

子細可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>、

今日、余奉<sub>二</sub>爲故院<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>御墓所<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>供養佛經<sub>一</sub>、是、嘉  
承、知足院殿於<sub>二</sub>香隆寺<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>佛事<sub>一</sub>之例也、彼畫  
像、是又繪像、阿彌陀三尊一鋪、二幅、迎接像也、色紙經一部、素  
紙六部、以<sub>二</sub>慶智律師<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>講師<sub>一</sub>、三昧僧六口、爲<sub>二</sub>題名  
僧<sub>一</sub>、季長朝臣、相具參上、誦經文、余自加署也、嘉承、重  
仲朝臣、相具參上、依<sub>レ</sub>彼例<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>進家司<sub>一</sub>也、但季長布  
衣也、兼光、基輔等參入、無<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>云々、入<sub>レ</sub>夜、余着<sub>二</sub>  
冠直衣<sub>一</sub>、心裏服、具色頗薄服也、先參<sub>二</sub>法皇<sub>一</sub>、最勝光院南御所、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>人<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>女  
房<sub>一</sub>申入、即女房令<sub>レ</sub>謁、次參<sub>二</sub>高倉院御喪家<sub>一</sub>、六波羅家、就<sub>二</sub>池謁<sub>一</sub>、女房、問<sub>二</sub>御惱<sub>一</sub>、及御臨終之間事、悲淚難  
抑、心神如<sub>レ</sub>屠、數刻之後退出、前院登霞之後、連日雖  
催<sub>二</sub>參入之志<sub>一</sub>、行步不<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>思而涉、心下恐、脫口字、近日聊有<sub>二</sub>  
其減、仍拋<sub>二</sub>萬事<sub>一</sub>參入、凡去年六月以後、今日始所<sub>二</sub>出  
仕<sub>一</sub>也、用<sub>二</sub>人事<sub>一</sub>、八葉、南上車也、前駟布衣、隨身不<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>前聲<sub>一</sub>、又  
牛童遣<sub>レ</sub>車也、

今日、以<sub>二</sub>基輔朝臣<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>禪門<sub>一</sub>、并<sub>二</sub>邦綱卿等<sub>一</sub>之許、訪<sub>レ</sub>疾、  
出仕以前、刑部卿賴輔朝臣來云、可<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>向豐後國<sub>一</sub>、是  
彼國住人等、企<sub>二</sub>謀反<sub>一</sub>、追<sub>二</sub>出目代<sub>一</sub>了、凡依<sub>二</sub>鎮西謀  
叛<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>追討使<sub>一</sub>云々、但近日、其儀停止了云々、若然者、當國可<sub>レ</sub>  
滅亡、取<sub>二</sub>諸身<sub>一</sub>、任國之外、無<sub>二</sub>他計略<sub>一</sub>云々、賊徒、云々、追  
討使、旁以國中損亡之基也、仍國司下向、可<sub>レ</sub>鎮<sub>二</sub>住人  
梟惡<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>追討使於境內<sub>一</sub>之由、令<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>禪門<sub>一</sub>、  
已有<sub>二</sub>可許<sub>一</sub>、仍所<sub>二</sub>思立<sub>一</sub>也云々、但事已類<sub>二</sub>物狂<sub>一</sub>、萬人  
不<sub>二</sub>甘心<sub>一</sub>、其實又非<sub>二</sub>無恐之故<sub>一</sub>、殊精進潔齋、祈<sub>二</sub>請賀  
茂春日<sub>一</sub>二社、其趣、若下向可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>後悔<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>其  
告<sub>一</sub>、又故障出來、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>此下向<sub>一</sub>也、不然者、存<sub>二</sub>  
有<sub>二</sub>冥助<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>下向<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、大略實物狂歟、王法  
已以廢了、謀叛之邊民、豈叙<sub>二</sub>用國宰<sub>一</sub>哉、還可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>  
非分之耻辱<sub>一</sub>歟、返々不便之支度也、但件人、殊爲<sub>レ</sub>先<sub>二</sub>  
信力<sub>一</sub>、先々、多預<sub>二</sub>佛神<sub>一</sub>之加護之人也、然者、祈請之  
旨、定感應歟、傳聞、尾張之賊徒等、少々越<sub>二</sub>來美乃  
國<sub>一</sub>、射<sub>二</sub>散阿波民部重良之徒黨<sub>一</sub>、相互被<sub>レ</sub>疵之者有<sub>二</sub>數  
官軍方<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>云<sub>一</sub>池田太郎<sub>一</sub>之者、捕<sub>二</sub>件者<sub>一</sub>、乍<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>持去<sub>一</sub>  
了云々、此事實事也、然而、彼邊祕藏云々、



## 閏二月大

一日、丁未天晴、觀性法橋來示祈事、書願書、賜了、自明日可始祈也、家中無物、仍給平緒一筋了、所願意趣、偏思社稷之安穩也、若余在生之間、其事不可叶者、可有夢想之告、又至生涯安否、一向可赴後世菩提之由也、入夜、有安來云、禪門之所勞、十之九者、無其憑云々、又邦綱卿所勞、太以有怖畏云々、又云、筑前國司貞能申上云、兵糧米已盡了、於今者無計略云々、仍爲忿攻、前幕下俄欲下向之間、依禪門之病、後了云々、

二日、戊申天晴、早旦、實嚴阿闍梨來、受一切成就明印、菩薩真言等、及盡、佛嚴聖人來、受愛染王印、余自廿八日潔齋、滿大金剛輪真言一千遍、爲此加行也、自今日、余始念誦、又實嚴、智詮、信助、佛嚴等、各能々可祈念之由、仰含了、同心合力、可顯法驗之時也、侍從所勞、猶未愈云々、佛嚴行向見、申無別事之由云々、今日、真言一萬反、以使訪禪門、邦綱等、

三日、己酉天陰、今日、高倉院七々御法事也、導師覺智僧正云々、

余依催、送咒願粥時於彼院廳、

折敷高坏十二本、折敷面、押白、生絹、無下粉、

同饗四本從僧料、

副物絹、五十疋、代布五段、

差副下家司、送院廳、

有送文、端注右大臣家、月日下、有家人之署、禪門所惱、殊進口、邦綱卿二禁有增、

公家、自昨日御藥、但今日頗宜御云々、中宮又以不例、凡天下之弊、以詞不可云事歟、在美乃追討使等、一切無糧料之間、可及餓死云々、坂東賊徒、勢逐日萬倍云々、大略、萬事至極之時也、今夜、新院御事了、人々分散、女房等少々留候、中宮行啓泉殿云々、今日、咒及五萬反、

四日、庚戌天晴、雨降、傳聞、邦綱卿、去夜渡六條之邊青侍家出家云々、爲素懷之上、依所勞危急也、以基輔朝臣訪之、有恐悅之報、疾之體、非無恐云云、今日五萬反、入夜、傳聞、禪門薨去云々、但實否難知、可尋聞也、

五日、辛亥天晴、禪門薨逝、一定也云々、仍以基輔朝臣、吊喪家、中宮、二品、前大將等、已刻、大夫史隆職來、雖

念誦之間、依世間不審、召前問雜事、語云、今日參陣、左少辨行隆密語云、去夜、法皇宮、武士群集之由、有風聞、人以爲、法皇與前幕下有變異之心、誠是天下衰亡之至也云々、昨日朝、禪門以圓實法眼（亂國家之機、天下之賊也）、奏法皇云、（愚僧早世之後、萬事仰付宗盛了、每事仰合、可被計行也云々者、勅答不詳、爰禪門有含怨之色、召行隆仰云、天下事、偏前幕下之策也、不可有異論云々、非菅東國之寇、又有中夏之亂歟云々、小時退下了、相續、賴業真人來、余始念誦了、仍不調之、

准三宮入道前太政大臣清盛（法名、靜海）者、生累葉武士之家、勇名被世、平治亂逆以後、天下之權、偏在彼私門、長女者始備妻后、續而爲國母、次女兩人、共爲執政之家室、長嫡重盛、次男宗盛、或昇丞相、或帶將軍、次二子息、昇進恣心、凡過分之榮幸、冠絕古今者歟、就中、去々年以降、強大之威勢、滿於海內、苛酷之刑罰、普於天下、遂衆庶之怨氣答天、四方之句奴成變、何況、魔滅天台法相之佛哉、只非、壇滅佛像堂舍、顯密正教、悉成灰燼、師跡相承之口決抄出、諸宗之深義、祕密之奧旨、併遭回祿、如此之逆罪、無

非彼之（唇吻）、倩案修（因）感果之理、爲敵軍亡其身、被懸首於戈鋒、可曝骸於戰場、免弓矢刀劍之難、病席終命、誠宿運之貴、非人意之所測歟、但神罰冥罰之條、新以可知、日月不墮地、爰而有憑者歟、此後之天下安否、只奉任伊勢太神宮、春日大明神耳、

今日五萬反、

此日、請佛嚴聖人、奉供養佛經、

一字金輪、不動明王、

愛染明王、孔雀明王、

毗沙門天、

已上、奉圖一鋪、

守護國界經一部十局、大孔雀明王經一部三局、金光明軍勝王經一部十局、王法政論經一局、仁王般若經二局、新譯、

已上黃紙、朱軸、墨字新也、

件佛經、圖寫供養之旨趣、且爲拂當時之厄難、且爲鎮天下之天殃也、若所願成就、備王佐之器量者、以此佛經、仰五畿七道之諸國、以每年正月八日、爲式日、於國分寺、奉圖寫一供養、即置長日之所

作、可<sub>レ</sub>限<sub>二</sub>未來際、專以<sub>二</sub>上春之齋會、可<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>中夏之安寧也、自<sub>二</sub>今日、每朝供<sub>二</sub>香花、爲<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>期<sub>二</sub>海內安穩、願求成就也、所願之趣、多在<sub>二</sub>社稷、佛天何不<sub>レ</sub>施<sub>二</sub>哀愍給哉、懇地尤深所<sub>レ</sub>仰悲願也、

今日、經房朝臣送<sub>レ</sub>札云、明日、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>議<sub>二</sub>定東國反逆之事、可<sub>レ</sub>參院者、申<sub>二</sub>所勞之由<sub>二</sub>了、

六日、壬天晴、此日、於<sub>二</sub>院殿上、被<sub>レ</sub>僉<sub>二</sub>議關東亂逆之事云々、余依<sub>二</sub>所勞不參、攝政雖<sub>レ</sub>參、不候座、居<sub>二</sub>閑所云々、左大臣已下、公卿十人參候云々、前大將宗盛卿奏<sub>レ</sub>院云、故入道所行等、雖有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>愚意之事等、不能<sub>二</sub>諫爭、只守<sub>二</sub>彼命、所<sub>レ</sub>罷過也、於<sub>レ</sub>今者、萬事偏<sub>二</sub>以院宣之趣、可<sub>レ</sub>存行一候、先關東兵糧已盡、無力<sub>二</sub>征伐、如<sub>二</sub>故入道之沙汰者、西海北陸道等運上物、併點定、可<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>彼糧米云々、此條又何樣可<sub>レ</sub>候哉、若有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宥行之儀者、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計仰下一歟、又猶可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>追討者、可<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>其旨、召<sub>二</sub>公卿等於院、僉議之後、奉<sub>二</sub>一決之趣、可<sub>レ</sub>進退也云々者、依<sub>二</sub>此申狀、有<sub>二</sub>今之群議云々、議奏之趣、可<sub>レ</sub>尋問、余愚案、此定甚無<sub>レ</sub>由歟、被<sub>二</sub>宥行之儀、爲<sub>レ</sub>朝有<sub>レ</sub>耻、太見苦事也、而征伐之條、遂不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶者、聊可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>述<sub>二</sub>其由緒也、所

謂、內亂之逆臣、蒙<sub>二</sub>天罰一夭亡了、於<sub>レ</sub>今者、法皇可<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>食天下之由、普可<sub>レ</sub>告<sub>二</sub>知遐邇一歟、前幕下返<sub>二</sub>權於君、整可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>表<sub>二</sub>隱遁之由一歟、此兩條、共不<sub>レ</sub>然者、被<sub>二</sub>宥行之條、首尾不<sub>レ</sub>相應、又賊徒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>和平、都以無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>據之沙汰歟、縱又雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>此儀、法皇一旦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>受取、再三可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>仰慕下一歟、而一問一答、有<sub>二</sub>御沙汰、果以有<sub>二</sub>後悔一歟、莫<sub>レ</sub>言々々、今日、念誦五萬反、

七日、癸天陰、雨降、昨日僉議、問<sub>二</sub>實守卿之處、返事如此、

昨日群議之趣、雖有<sub>二</sub>少異、大略一同候歟、左大臣、大納言四人、隆季、實房、實國、宗家、中納言三人、忠親、朝方、實家、參議二人、實守、候、殿上座、經房朝臣傳<sub>レ</sub>仰、綸旨云、關東逆亂之間、依<sub>二</sub>天下飢饉、御祈不<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>期、又兵糧已盡了、賊首群<sub>二</sub>集尾張國、猶可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>追討一歟、若又被<sub>二</sub>宥行之儀如何、一同申云、先被<sub>二</sub>下<sub>二</sub>院宣、隨<sub>二</sub>其狀跡、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰云云、御祈云云、兵糧米、隨<sub>二</sub>堪可有<sub>二</sub>沙汰之趣候、重仰云、被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>應御下文、其狀如何、又使者誰人哉、西海有<sub>二</sub>謀反之聞、又如何、人々申云、西海事、同可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下<sub>二</sub>應下文、使者事、兩樣、或主典代、若應官、或四位

院司云々、狀跡事、或一通、載國々、可令廻見、或國各別、付國司可遣、其後、人々退出、今日、左大臣、帥、堀川納言參入、應下文之間事、其沙汰可候之由承及候、大略、暫休征伐、先以院宣可被宥之儀候歟、

傳聞、今日、以僉議之旨、爲使靜賢法印、被仰遣宗盛卿許、於門外、以能圓傳示仰旨、幕下返奏云、猶於重衡者、來十日一定可下遣也、然者、東國勇士等、乖賴朝、可隨重衡之由、可載院宣者、靜賢云、若爲此儀者、被遣院宣無益、只一向不可變征伐之儀事歟、素付令申給之狀、已有群議、今被報奏之旨、依違了、何樣可候哉云々、重示云、招賴盛、教盛等卿相議、重可令申云々、凡次第、切腹事也、余愚案相叶了、大將縱雖有猶豫之申狀、重有問答、不可有後之違亂之樣被定同議了、可及議定也、然者、何有此異論哉、

八日、甲寅雨降、彼岸之終所作滿咒遍了、今日、四萬反、凡七ヶ日之間、卅萬反也、此日奉供養不動尊畫像、并尊勝陀羅尼等、依先日宣旨也、以智詮阿闍梨爲導師、

申刻、法眼道快被來、今日、典藥頭定成來、爲問侍從所勞所召也、無別事云々、此次、問邦綱入道、瘡、申云、萬死一生、無憑云々、

九日、乙卯天晴、傳聞、一昨日、隆季忠親等卿參院、議定應御下文之趣、仰俊經卿、令草之云々、今日、俊經卿持參件草、其趣、已無所據、仍此儀、不可然之由、有法皇之仰、然而、前幕下只賜此狀、先立遣之、相續、可遣重衡之由、申請云々、御使召繼云々、應下文狀、可注載之、

入夜、靜賢法印來、談世上事、每事不足言、天下滅亡期、當此時、太以歎息者也、

應下文、可書入、

十日、丙辰天晴、傳聞、時忠卿所勞云々、重衡朝臣來十三日可下向、今日、先檢非違使景高、相具院宣、以召繼爲使、發向云々、

十一日、丁巳天晴、左馬權頭宗雅來、談世間事、今朝、以季長朝臣、訪邦綱入道所勞、逐日有增云々、定成、憲基、共申怖畏之由云々、

十二日、戊午陰晴不定、訪邦綱卿所勞、只同事云々、今夜、中宮、并前大將等、渡居六波羅喪家、猶本八條河



原云々、經家朝臣來、重喪之後、今日、初召前、問重  
家入道臨終之間事、佛殿聖人、顯真僧都等、爲善知  
識云々、傳聞、關東已欲伐入、官軍陣中物騒、飛脚  
頻到來、申此狀、重衡明日可馳向云々、

十三日、己未天晴、參女院御方、重衡今日出門、明後日  
可發向云々、

十四日、庚申天晴、早旦、遣使於邦綱卿許、今日、憲基加  
針云々、仍所訪也、使者歸來云、膿汁快出、苦痛頗  
減、而無力彌增云々、午刻、全玄僧正來、邦綱入道、大  
略無其憑云々、晚頭、右京權大夫師光來、初參之後、  
今日始所召前也、談和歌事等、件人、和歌之外、無  
他藝、且依此事、所初參也、今日、於高倉院御喪  
家、女房等、奉鑄銀普賢菩薩像、各書一品經、奉供  
養、澄憲僧都爲導師、說法驚耳云々、  
此日、有禪門薨奏、雖爲出家之人、依康和三年例、  
被行云々、從今日廢朝三ケ日云々、

十五日、辛酉天陰、雖有雨氣、未降、今日、追討使藏人  
頭正四位下平重衡朝臣、相具院應御下文、先日、景高持  
向之由風聞、  
云々、所發向也、今日、宿宇治、來十九日、可着美  
乃、尾張之境云々、隨兵萬三千餘騎云々、雖爲重

喪中陰之內、依前幕下命、不願先父之追慕歟、重  
衡堪武勇之器量之故、殊應此撰云々、愚案、重衡  
者、其身向南都、滅亡東大、興福兩寺、法相、三論二  
宗者也、四所明神、七堂三寶、定與冥罰歟、因茲、  
乍在父喪、忘哭泣之禮、赴合戰之場、果以可報  
彼逆罪者也、造意之禪門、已當其罰、下手之重衡、豈  
免彼殃哉、天然之理、得而可知、努力々々、

十六日、壬戌雨下、申刻以後天晴、大納言入道所勞、定  
成、憲基、共申必死之由、憲基、今日得身暇退出了、  
其後、筑紫醫師法師出來、加療治、自本針穴、擲出  
膿汁、五六坏、其後、心神頗落居、辛苦又減氣云々、但  
猶無其憑事歟、今日、參女院御方、

十七日、癸亥天晴、傳聞、越後城太郎助永、依宣旨、已  
襲來甲斐信乃國之由風聞、爲無實云々、及晚、隆  
職來語云、筑前々司貞能郎從、一昨日上洛、私有相觸  
事、來向、語云、官兵其勢萬餘騎、尾張賊徒僅三千騎  
許、剎那之間、可攻落、日來、船遲々間、于今不戰、五  
百餘艘已付了、於今者、賊徒之敗績、不可經程云  
云、今日、光盛持來帝王略論、先讀合第一局、邦綱入  
道、筑紫醫師、雖加療治、無驗云々、

十八日、甲子天晴、長光入道來、談世上事、法性寺座主被來、爲訪邦綱卿所惱、密々、自是可<sub>レ</sub>行向云々、晚頃、前施藥院使憲基來、召前、問邦綱入道所惱事、申云、去十四日加針、同十五日、筑紫醫師法師出來、擲出濃汁惡血等了、其後、苦痛頗減氣、然而、更無其憑、殆依此療治、大事可<sub>レ</sub>出來云々、十九日、乙丑天陰、及晚小雨、早旦、典樂頭定成來語云、邦綱入道必死也、去十四日申其由了、不可<sub>レ</sub>過今月之內云々、筑紫醫師療治、於今者無益歟、病體悉損了云々、又傳聞、賴基同申不可<sub>レ</sub>過今月之由云々、遣訪之處、辛苦頗減之由、有返報、今日、參女院御方、此間、定能卿來、談院邊事、廿日、丙寅天晴、午刻、藏人左少辨行隆、爲院御使來臨、余依疾不出逢、以季長朝臣、稱此旨、行隆云、依爲大事、以人不可<sub>レ</sub>申、只參御緣邊、可<sub>レ</sub>申入云々者、仍招籠前、長押下廣庇謁之、行隆傳仰云、東大興福兩寺惡徒、依謀反事、被追討了、其後、寺領、及僧徒領、併收公之由、被下宣旨了、嚴刑難有之故也、其趣忽雖不可<sub>レ</sub>變、恒例佛事等、併退轉、無過怠之禪侶等、悲歎此事、就中、東大寺大佛御身雖

全、御首燒損遠近見聞之輩、莫不驚眼、雖如形可<sub>レ</sub>造掩假佛殿之由、寺僧等、欲結搆之處、寺領等沒官之間、無力於經營云々、云彼云是、聞食歎不少、因茲、寺領并寺僧領等、如本可<sub>レ</sub>被返付哉、若然者、宣下之趣、似無始終、又惡徒等濫行、向後不可<sub>レ</sub>絕、仍豈不可<sub>レ</sub>及此沙汰歟、兩箇之間、思慮可<sub>レ</sub>量奏、抑於與福寺事者、長者定被計申歟、然而、且爲御存知、所被尋仰下也者、余申云、先衆徒惡行、累世積年、遂依謀叛之聞、被遣追討使、是皆依惡僧之所行、被施嚴肅之刑罰也、敢非佛像正教之過失、又非禪侶堂舍之擁怠、然者、僧徒之所領、猶可依罪之輕重、何況、於佛寺之領哉、然而、已被下沒官之綸旨、不歷幾旬月、忽改易之條、雖有輕忽之難、已被補山階寺別當、權別當了、其上、被返寺領、更有何憚哉、重案事情、關東鎮西謀反事、已大事也、如此之時、祈請佛法、可待彼効驗之處、都無此沙汰、殆似致魔滅、今被返付寺領等者、三論、法相之侶、必專丁寧之祈禱、四海八埏之民、定休辛苦之煩費者歟、但除惡僧等巧無道所掠領之公田、人領等之外、可<sub>レ</sub>被返付歟、至于向後、

濫行不可絕之條者、召彼兩寺門僧綱已下、殊可被  
 誠將來歟、此上左右、且可在時議者、行隆又云、  
 近日、猶南都僧等、與力謀反之由、粗有其聞、此條  
 如何、余云、猶於有此儀者、又忽何及、寬宥之沙汰  
 哉、勿論之事歟、但尋搜真偽、事實者、任法可有沙  
 汰歟者、余問云、兩寺營作事、無其沙汰歟如何、行  
 隆云、先只可被付寺領否、議定了之後、定及如  
 此之巨細歟、如只今者、未及其沙汰云々、歸參  
 了、以季長、訪邦綱入道、大略、如不辨前後云  
 云、

廿一日、丁卯天晴、傳聞、左和府、同申可返付之由云  
 云、左府余兩人許、被尋云々、

廿二日、戊辰陰晴不定、邦綱入道、不覺成了云々、傳聞、  
 熊野法師原二千余人、越尾張了、爲與力也云々、  
 今日、賴輔入道出京自勝尾寺、白去月廿九日、癸龍、即向大納  
 言入道之許了、

廿三日、己巳雨下、申刻、人告云、邦綱卿入道、已入沒畢  
 者、即遣使吊之、棟範出逢云、此未刻許一定了、臨  
 終殊神妙、悅思不少、以黑谷聖人、爲善知識云々、  
 件上人、出家戒師也、邦綱卿者、雖出自卑賤、其心

廣大也、天下諸人、不論貴賤、以其經營、偏爲身之  
 大事、因茲、衆人莫不惜、但平禪門滅亡藤氏、此人  
 頗與其事歟、故有蒙神罰之疑、可恐々々、

廿四日、庚午朝間雨下、午後天晴、傳聞、六波羅邊、一族  
 之輩、自昨日集會、有令內議事等、郎徒等遙去、  
 不令人聞其趣云々、世人懷怖畏歟、

邦綱入道、今夜葬送云々、侍男共之中、爲余多見吉  
 夢、此十余日之間事云々、此日、女房參女院御方、今  
 夜、使大藏大輔泰茂修泰山府君祭、依夢想也、件  
 男、先々此祭施効驗也、

廿五日、辛未天晴、申刻、參女院、晚頭、覺乘得業來、語  
 南都事、去夜上洛、明曉可下向云々、此日、法皇渡  
 御法住寺御所、公卿侍臣供奉云々、愚案、今度御幸、  
 不可被整威儀、只密々可有還御也、如此事、  
 無申行之人歟、後聞、公卿七人、殿上人八人供奉云  
 云、

廿六日、壬申天晴、傳聞、攝政不豫云々、今日、覺乘得業  
 來、只今下向南都云々、此次語云、故藏俊僧都云、  
 春日御社御正體、其實者、金剛般若經也、慥有所見  
 云々、今聞此語、余所見之夢想、正夢之條、更無疑



事歟、仰可<sub>レ</sub>信者也、今多年之所願、決定成就之期也、感淚難<sub>レ</sub>抑者歟、佛神照<sub>二</sub>丹情<sub>一</sub>、垂<sub>二</sub>玄應<sub>一</sub>歟、

廿七日、<sub>酉</sub>自<sub>レ</sub>夜雨下、申刻以後天晴、今日、依<sub>二</sub>夢想<sub>一</sub>

告、受<sub>二</sub>金剛般若經<sub>一</sub>於信助阿闍梨、主稅頭定長來、示<sub>二</sub>合女房湯治之間事<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>明日<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>始也、

廿八日、<sub>甲</sub>物忌也、行<sub>二</sub>仁王講<sub>一</sub>、今日、女房始<sub>二</sub>湯治<sub>一</sub>、五木湯也、

廿九日、<sub>乙</sub>天晴、物忌也、傳聞、熊野那智御山、強盜亂入、常住客僧一人、而不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>跡、已成<sub>二</sub>荒廢之地<sub>一</sub>了云

云、近日、瀧下靈像之石<sub>現飛瀧樞</sub>、碎失了云々、是本山魔滅之徵也、可<sub>レ</sub>悲々々、

前右大將宗盛、有<sub>二</sub>病氣<sub>一</sub>、然而、頗秘藏云々、

卅日、<sub>丙</sub>雨降、入<sub>レ</sub>夜甚下、雷鳴、傳聞、攝政之所惱、二禁云々、其物雖<sub>レ</sub>安、其所有<sub>レ</sub>厄云々、又教盛卿煩<sub>二</sub>二禁云々<sub>一</sub>、近日、此病頻聞、有<sub>レ</sub>樣事歟、如何々々、

### 三月

一日、<sub>丁</sub>陰、風吹、朝間雨下、前施藥院使憲基來、爲<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>合女房湯治之間事<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>召也、此次語云、攝政自<sub>二</sub>去廿八日<sub>一</sub>、煩<sub>二</sub>二禁<sub>一</sub>、然而滅了、今日行水、又被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>六

條亭了<sub>日來被<sub>二</sub>八條<sub>一</sub>云々</sub>、傳聞、秀平可<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>討賴朝<sub>一</sub>之由、進<sub>二</sub>脚力<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>前大將<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>院奏<sub>一</sub>、直示<sub>二</sub>報狀<sub>一</sub>了、早々可<sub>レ</sub>攻落<sub>二</sub>之由也<sub>一</sub>、但秀平全不<sub>レ</sub>動搖、只以<sub>レ</sub>詞、如此令<sub>レ</sub>申許也云々、官兵等、未<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>尾張河<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>水盜<sub>一</sub>也、來五日可<sub>レ</sub>合戰云々、

二日、<sub>戊</sub>陰晴不定、未刻、藏人宮內少輔親經初參、<sub>進<sub>二</sub>字<sub>一</sub></sub>、召<sub>二</sub>藤前<sub>一</sub>談話、此次語云、近日、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>祈年穀奉幣<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>天下穢氣之疑<sub>一</sub>、<sub>進<sub>二</sub>進<sub>一</sub></sub>過<sub>二</sub>其日限<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>發遣<sub>一</sub>云々、又云、高倉院中陰以後、欲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>政始<sub>一</sub>、<sub>改<sub>二</sub>收<sub>一</sub></sub>

之處、依<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>候、于<sub>レ</sub>今未<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>遂行<sub>一</sub>、六位外記、見任只一人也、而現病云々、又云、中下旬之間、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>行<sub>一</sub>春除目云々、此外、暨交<sub>レ</sub>談、其後、退出了、申刻、

參<sub>二</sub>女院御方<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜歸來、傳聞、尾張武士等、引<sub>二</sub>退遠江<sub>一</sub>之由、日來風聞、極無<sub>レ</sub>實云々、義俊<sub>十郎</sub>、以下數萬、皆在<sub>二</sub>尾張國<sub>一</sub>、敢無<sub>二</sub>動搖<sub>一</sub>、官兵明日<sub>日</sub>、可<sub>レ</sub>寄攻云々、是實說也、阪東賊首、以<sub>レ</sub>斯爲<sub>レ</sub>先云々、

三日、<sub>己</sub>朝間小雨、已刻以後天晴、法性寺座主被<sub>レ</sub>來、數刻談話、晚景被<sub>レ</sub>歸了、節供如<sub>レ</sub>常、家司等、皆有所

勞、仍無<sub>二</sub>陪膳<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>例、光明院領、大和國七ヶ庄事、觸<sub>二</sub>國司<sub>一</sub>、國司觸<sub>二</sub>前大將<sub>一</sub>、大將云、可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>證文<sub>一</sub>云



云、

四日、庚辰、天晴、傳聞、三日合戰延引、來七日云々、定能卿來、談除目事等、文書少々借與了、亥刻、女院御所炎上、先渡御々堂御所、大將、并其室同之、其後、余歸家、令禦餘燭、遂免了、誠是佛神之感應也、此間、攝政被參、女院渡御余家、其後、攝政退出了、人々少々參入、頃辨同參、及深更、余渡居南尼上家、先是、女房等渡了、此後、華山院中納言、參女院云々、又女院未渡御余家之前、自院有御使、北面下焉、

五日、辛巳、天晴、去夜火事、不聞及之輩、今日多以參入、左中將清通朝臣來、入夜中御門大納言被來、六日、壬午、天晴、泰茂來、又典藥頭定成來、問余脚氣事、申云、暫不可加療治、只以行步可爲治云々、申旨等有其理、此日小除目、近日、六位外記只一人、又見病、公事等闕如、仍爲補外記、春除目以前、所被恐行也、伊與守信章、院御分、可知行備前之由、有御氣色、與之由、前大然而重衡可國務、仍知元、可知食伊將令申云々、右少將公衡、依祭使闕如、被任之云々、又檢非違使光長、被解官、日來被鼻首之由風聞、或又不然云々、未定之間、有此宣下、爰知、決定現存歟、人以爲嘲哂歟、總以忽不可及此沙汰歟、又

出雲重任、朝方卿知行國也、件卿、日來院御蟄居之間、頻奉音信之由、有其聞、今於事有哀憐、顯其驗歟、傳聞、東國勢甚以強大、容易不可敗散云云、凶黨等相議云、官兵等、併入立尾張國之後、盡員可討伐之由云々、凡官兵兵糧併盡了、更以無計略、事之成敗、近日可見云々、稱宮之人、決定在伊豆國、真偽之間、雖難知、所號如此云々、是等說、皆難被信歟、入夜、左大將被參女院、以藏人示云、只今欲參啓之間、老母家近邊有火事、因恐退出云々、今日除服、新院御服也、出河原、陰陽師漏刻博士憲成、陪膳季長、役兼親、余着例亮間直衣、鈍色也、日來、所着之薄鼠色直衣、指貫等、賜陰陽師了、嘉承之例、除服之由不見、然而、思事理、爭可不除哉、雖亮間中、於其色頗濃者、尤可除之也、仍除服了、七日、癸未、天晴、參女院御方、早旦、天文博士廣元來、火星留舍南斗、及十餘日、大將軍慎也云々、又云、道之祕事、在太白經天、只以晝見奉奏、專不可然事也、不當午而當午、以爲經天、有可得心之樣也、不知口傳之如泰親、只以晝見稱之、尤訛也云々、此外、談道之祕事等、不遑具注、傳聞、今

日、尾張合戰之日也云々、後聞、不然云々、

八日、甲申天晴、物忌也、

九日、乙酉天晴、物忌也、

十日、丙戌天晴、參女院御所、藏人宮内少輔親經來、非

指公事、只所參也云々、傳聞、前大將、有食癩之病云

云、或云、不然、天性大食之人云々、

十一日、丁亥雨降、午刻、頭辨經房朝臣爲院御使來、余

謁之、經房云、鴨社遷宮當今年、而神領等、爲所々

領、被押取事等、度々雖訴申、無裁許之上、關東

神領等、併爲賊徒、被虜領了、社家之力、不可堪

造宮、先例爲本社之沙汰、所被造營也、仍任他社例、被付成功、爲

公家御沙汰、可被成土木之由、彼社司進解狀、此

事、已爲新儀、何樣可被行哉者、申云、於訴訟、任

道理、可被裁許、歟、關東神領等事、所申無疑殆、

但彼社領、不必限坂東、歟、以他領、并神封等之力、

猶可勵勤之由、可被仰下、歟、所詮之不足、又不

可、可止、被付成功、何事之有哉、年來爲社家之沙

汰、偏爲公家御沙汰之條、不可然事歟者、經房云、

左府申狀同前也、此次、經房云、座主明雲、勤仕新

院御祈七佛藥師、修中崩御、其後、公家御祈等、可被禁

忌、歟、而長日御修法、不結願、又追討使御祈猶勤仕、

此事、先例不覺悟云々、非勅問、私事、大所示也、偏可依先

例之由、答了、愚案、若可憚者、彼御祈等、即可結

願、歟、而于今勤仕、忽及此沙汰、如何々々、

十二日、戊子天晴、午刻、權右中辨光雅、爲攝政使來、

余呼籠前、座、逢之、光雅云、造興福寺之間事、條々

可被計仰之由、所候也者、

一燒失之所、可遣使否事、不知先例、又違期了、

強不可遣使之由、有令申之輩、如何、又長者

可下向哉否、如何、

答云、於御使者、必可被遣、全不可依違期、於

長者下向者、今度不可必然歟、

一於南圓堂、維摩堂者、任度々例、爲長者沙汰、可

被造營、其事始今月廿四日之由勘申、而金堂已

下事、可爲公家御沙汰、其間有未定事等、期日以

前難決、其事、儲日四月十日也、而賀茂祭以前如

何、被問例之處、於少佛事等者、雖不可勝

計、如此之大事、猶可有思慮哉如何、

答云、如此事、尤可有忿沙汰也、今月廿四日旁宜

歟、其事難叶者、又祭以前、何事之有哉、散所佛事、先

例強不憚事也、

一於事始者、諸堂同時雖可被行、至棟上者、

六七月之間、金堂已下不可叶、於長者、令沙汰堂者、年內必可造畢、仍

彼兩月之間、必可被上棟也、被上假棟如何、

答云、棟上之時、長者已下、氏公卿可下向歟、而只

被上講堂、南圓堂棟、無金堂之沙汰、專似忘本

體歟、又假棟之條事、可謂輕忽歟、但如此大造作、

神社、佛寺、八省、內裏等之中、有被上假棟之例

者、准據其例、同日被上金堂之假棟、何難有哉、

一火災事、任先例、可被申三社也、而亮闇中、諸

社祭、不被立幣、此條如何、

答云、此事難題也、凡亮闇之間、不被立氏社幣等、

未知其故、公家已有奉幣、臣家何憚哉、然而、行來

已尙、忽難改舊規歟、至于臨時大事者、不可歟

止事歟、但都可被憚奉幣者、又可被發遣之

由、難申歟、進退惟谷、思慮已迷、諒闇中奉幣、若有

上古之例者、可被准據歟、但憶不覺悟、可被捨

歟、亮闇中、無私奉幣、已爲流例、然者、雖不被

立、又非疎神事之儀歟、猶訪有識之士、可被

左右也、

一今度、以何度例、可被遵用哉、永承雖爲吉例、其後無程有火、爲之如何、

答云、康平、金堂燒失、長者不被下向、兩事相似、今

度如何、又嘉保爲吉例、此兩度之間、可被用歟、

光雅重云、於後二條殿例者、他事所被忌避也、

至此事如何、

余云、於有其儀者、勿論也、不及左右者、竊案

之、被忌先祖事、如何々々、

一年來之例、於春日御塔、被行唯識會、而依燒失、

於御社可被移行、御經同燒失、須新寫之處、

御塔新造之時、同可被供養新寫經、其時可被

寄今度新寫經哉、此條可有議、仍於今般者、

只以寺家所在之論、可被遂行之由、欲定仰、如

何、

答云、會釋可然、

光雅又云、依亮闇、可止舞樂之處、於御社被

行者、猶可有舞樂之由、舞人光近等所申也、如

何、

答云、元於御社、被行此會者、可有神事改滅之

恐歟、至于此事者、被移行御塔之法會也、然者、



依亮聞被止舞樂、何難之有哉、但神社法會、雖亮聞、有不可止舞樂之例歟、一旦可被問例歟、光雅退出了、

相次、大外記賴業來、談世上雜事、東大寺勘草所持來也、又語云、秀衡進宣旨請文、其狀云、廻等策於魚麗之陣、拂賊徒於鳥塞之邊云々、然而、專難信用者歟云々、

晚頭、參女院、召施樂院使賴業、令見大將灸治之跡、聊依有不審也、入夜歸南、

十三日、巳天晴、傳聞、去十日、官兵等欲渡墨俣之間、遮尾張賊徒等越來、五千餘騎也、而重衡舍人男金石丸高名告之、因茲相防、自巳刻至申刻合戰、賊黨等千餘人被梟首、其後三百餘人溺河水亡滅了、大將軍等、多以伐取了、猶官兵等渡墨俣河、襲殘賊等云々、是去夜、飛脚到來、稱申云々、十郎藏人行家、本名義俊云々被疵入河了、定天亡了歟、然而、不入梟首之中云々、余案之、重衡無爲無事歸洛者、誠神罰殆似有疑者歟、始終定有樣歟、莫言々々、今日、女房頻加灸治、

十四日、庚天晴、女房姬君、密々參詣廣隆寺、六角堂

等、光盛參上、讀合帝王略論第四卷、

十五日、卯天晴、大將唯頗腫云々、仍召主稅頭定長、令見之、申無別事之由、此次、余問云、神在心之時、曾部通憚之歟、如何、申云、華蓋王堂已下、至于巨穴、憚中心一行也、於三行三行者、不憚之云云、今日、祇園一切經會、依亮聞無舞樂、

十六日、壬辰天晴、和康法師來、仰可抄進灸穴之由、是仰名醫等之抄物中也、先日、欲仰養生事、而倩案之、灸治事猶重、基家殊所習傳也、仍召仰之、五位藏人親經來、非指大事、只所來也、余不謂之、以人問近日公事等、申云、來月可有行幸閑院之由云々、又來廿四日可有除書、廿七日祈年殺奉幣云々、此次、相觸右大將可加灸治之由了、定能卿來語云、來廿七日可有日吉御幸之由風聞、未有一定云々、

十七日、巳朝陰、巳刻以後晴、參女院御方、傳聞、秀平爲責賴朝、軍兵二萬餘騎、出白河關外、因茲、武藏相模武勇之輩、背賴朝了、仍賴朝歸住安房國城了云々、又越後城太郎助永病死了云々、但此等事、難取信、如此浮說、先々皆以虛誕也、然而、後日爲



存<sub>レ</sub>知真偽、隨<sub>二</sub>聞及<sub>一</sub>注<sub>レ</sub>之、

十八日、午天晴、物忌也、傳聞、堀川宰相賴定卿薨逝云

云、經實孫、經定子、無<sub>二</sub>指藝業、爲<sub>レ</sub>朝非<sub>二</sub>殊要人<sub>一</sub>歟、

相傳之家領有<sub>レ</sub>數、頗其家富云々、召<sub>二</sub>清景、仰<sub>レ</sub>除目之

時府奏不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>過<sub>二</sub>兩三通<sub>一</sub>之由、成功之輩、雖<sub>二</sub>其數多<sub>一</sub>、

一度除書、不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>上七八通<sub>一</sub>之府奏、仍尋<sub>二</sub>成功次第<sub>一</sub>、及

功程多少、可<sub>レ</sub>上<sub>二</sub>府奏<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>仰也、

今日、被<sub>レ</sub>實<sub>二</sub>檢興福寺燒失之跡<sub>一</sub>云々、氏院別當兼光、長者家司光雅、勅使行隆等也、

又被<sub>レ</sub>實<sub>二</sub>檢東大寺、勅使行隆也、

廿日、雨天晴、信範入道來、語<sub>二</sub>造興福寺之間事<sub>一</sub>、去十

八日、遣<sub>二</sub>勅使已下<sub>一</sub>實檢、即日、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>仗儀并造寺除

目之處、國宛事、行隆不<sub>二</sub>申定<sub>一</sub>下向、仍延引、來廿四

日云々、廿五日、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>三社奉幣<sub>一</sub>、此事、被<sub>レ</sub>問人々、忠親、雅

奉幣之由、忠親中、只遣<sub>二</sub>使可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>告<sub>一</sub>申之、由云々、宛間中、無<sub>二</sub>奉幣<sub>一</sub>仍有<sub>二</sub>此沙汰<sub>一</sub>也、并多武峯、椎岡等告

文云々、來月九日、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>事始<sub>一</sub>云々、此外、談<sub>二</sub>雜事

等、攝政不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>和漢事<sub>一</sub>之條、頗歎息歟、

法皇、來廿七日、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>日吉御幸<sub>一</sub>云々、世人不<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>之

歟、

廿一日、酉天晴、酉刻、藏人左少辨行隆、爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>

寺、八省、三ヶ大作事、一時相遇、東西國有<sub>レ</sub>亂、水干損  
無<sub>レ</sub>極、如<sub>レ</sub>此之間、秘計難<sub>レ</sub>及歟、總以爲<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>之上、  
先當時、被<sub>レ</sub>尋申<sub>二</sub>事二ヶ條<sub>一</sub>、一者、來廿四日、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>  
行<sub>二</sub>造興福寺除目<sub>一</sub>、并同國宛議定<sub>二</sub>而於<sub>二</sub>講堂、南圓  
堂<sub>一</sub>者、爲<sub>二</sub>長者沙汰<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>造營<sub>二</sub>金堂已下<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>公家  
御沙汰<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>諸國<sub>一</sub>之處、東國、大略不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、  
所殘之國々、多被<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>八省造作<sub>一</sub>了、仍無<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之國<sub>一</sub>、  
歟、此條如何、二者、南都僧徒等申請、大和國、如<sub>レ</sub>元、  
全分被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>寺者<sub>一</sub>、金堂、并築垣等、試可<sub>二</sub>相勵<sub>一</sub>之由所  
申也、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>裁許<sub>二</sub>哉否<sub>一</sub>、如何、余申云、先國家大事無<sub>レ</sub>  
過<sub>レ</sub>之、安<sub>二</sub>民肩<sub>一</sub>、而大厦可<sub>二</sub>成功<sub>一</sub>之趣、并此間子細、  
委曲思慮、可<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>由、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>訪<sub>二</sub>公卿及有識士等<sub>一</sub>、  
歟、以<sub>二</sub>短慮<sub>一</sub>卒爾不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>、抑於<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>問此條<sub>一</sub>、先  
造八省國々、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>除<sub>二</sub>否事<sub>一</sub>、大極殿、朱雀門、小安殿  
等、尤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>除、於<sub>二</sub>廻廊支配<sub>一</sub>者、強不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>避歟、  
此國宛事、須<sub>二</sub>議定之後<sub>一</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>也、而期日已近々、  
然者、只先可<sub>レ</sub>然之國、少々可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計載<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、即大和國  
被<sub>レ</sub>宛之條、未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>其儀<sub>一</sub>歟如何、此條、追可<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、當  
時只猶<sub>二</sub>一旦<sub>一</sub>許也、  
縱雖<sub>二</sub>何國<sub>一</sub>、先被<sub>レ</sub>計宛、議定之後、追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>左右也、  
於<sub>二</sub>講堂<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>維摩會<sub>一</sub>、口仍年內可<sub>レ</sub>造畢<sub>一</sub>之  
由、長者結傳、仍金堂已下事、又有<sub>二</sub>急沙汰<sub>一</sub>云々、次大和國、併免<sub>二</sub>

給僧徒之條、專不可然、於大和國者、委有沙汰、

興福寺事、一向可被付歟、若又東大寺可相營歟、

如此之間、評定思慮之後、可被左右、忽免給之條、

必有後悔歟、凡興福寺之間事、一向被仰合長者、

彼被計申之上、又可有其沙汰歟、且以此等趣、

可被奏也者、口行隆、此上條々、雖有相示旨等、

忽不能左右、大概不過斯歟、御佛被鑄之間事、可

被下知識之詔云々者、丑刻、女院御所燒亡、余

不參會、出自御所之內云々、即幸御堂御所、余居

所希有免了、凡廿日之內、兩度有此災、非言語之所

及、女院御生中、令遭火給事、加今度七々度也、

每度出自御所內云々、於今者、不可有此恐

歟、去比、兩家有狐恠異、共占火災之由、果以符合、

又焚惑守斗、爲大將愼之旨、先日廣元令申、同以

相叶了、余重厄之年、旁以天然之運也、云而有餘、攝

政被參、

廿二日、戊戌天晴、女院御堂御所、四壁不全、有其恐、

仍竊渡御賴輔入道南直廬、未曾有事也、愁生見如

此之事、可悲々々、殿上、留御堂御所、爲表御坐

候之由也、今日、兼雅、雅賴等卿爲訪來、各隔障謁

之、

廿三日、己亥天晴、攝政送書云、興福寺國宛、并造寺除

目等、明日可被行、而高階仲基望申次官、如仰相

計可示云々、又云、八省、東大、興福兩寺、造作等事、

遍可被問人々之由、昨日所傳承也云々、余報

云、檢先例、可被計定也、仲基、重代爲被召仕

之者、何事之有哉、但先例、能被撰器量事也、暗難

計申者、

廿四日、庚子晴、一日晴、女房參院御所、中御門大納言

被來、爲訪也、日來依所勞不能行云々、此次、

談除目事等、今夜除目始、執筆左大辨長方綱云々并有造寺除

目、國宛定等云々、

廿五日、辛丑天晴、參女院御方、攝政被示送云、昨日

除目、今朝事了、又依奉行人懈怠、造寺除目延引、不

便云々、伯耆國稻積庄、去年被付國了、不傳號而昨

日以靜賢法印、申院云、件庄雖不停廢御領、去

年被付國之次第、偏非國司進退、子細不能注載如元

爲院廳沙汰、被仰付可然之人、尤宜歟者、今日勅

報之趣、靜賢示送、其狀云、進申之條、返々神妙、然者、

可宛賜人々、重可觸申之由、有御氣色、其次仰

云、尋常御情性、猶甘心思食、可奉<sub>二</sub>相憑<sub>一</sub>之由、所候也云々、余重申云、件庄可宛<sub>二</sub>給<sub>一</sub>人之條、凡及<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、早々可賜也、抑御定之趣、殊恐畏申之由、同以令<sub>レ</sub>申了、今日、召<sub>二</sub>泰茂<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>火事占<sub>一</sub>、申云、女院御病事、余可有<sub>二</sub>吉慶事<sub>一</sub>云々、但聊可<sub>レ</sub>慎<sub>二</sub>口舌<sub>一</sub>、闕諍、卅日之內、壬癸日、物忌日也云々、

廿六日、<sub>寅</sub>天晴、物忌也、未申刻許、雷鳴小雨、去夜半、重衡朝臣入京云々、法皇、明日欲<sub>レ</sub>幸<sub>二</sub>日吉社<sub>一</sub>、而依<sub>二</sub>天下穢氣之疑<sub>一</sub>、并前幕下制止<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>、但可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>龍<sub>一</sub>今日吉<sub>一</sub>給云々、有<sub>二</sub>穢疑<sub>一</sub>者、雖<sub>二</sub>今日吉宮<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>憚哉如何、除目入眼也、

廿七日、<sub>卯</sub>天晴、見<sub>二</sub>聞書<sub>一</sub>、知盛任<sub>二</sub>參議<sub>一</sub>、親信卿給<sub>二</sub>周防<sub>一</sub>、藏人巡時經、<sub>經房</sub>任<sub>二</sub>肥後<sub>一</sub>、頗不便歟、

安房國謀反之者掠領、其外無<sub>二</sub>他計略<sub>一</sub>、日來所<sub>レ</sub>期、藏人巡年云々、而被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>肥後<sub>一</sub>、如何々々、但被<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>廢新立庄<sub>一</sub>、者、事宜歟、法皇、今度除目、不可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>口入<sub>一</sub>之由風聞、而親信給<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>、又經房頗有<sub>二</sub>不快之事<sub>一</sub>、之由謳歌、今如此者、每事似<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>御意趣<sub>一</sub>、如何々々、尾張相國入道、入洛之慶、內々示遣、以<sub>二</sub>女房<sub>一</sub>、傳<sub>二</sub>憲親法師<sub>一</sub>也、有<sub>二</sub>恐悅之報<sub>一</sub>、

廿八日、<sub>辰</sub>天晴、經家朝臣來、申<sub>二</sub>吉良庄訴事<sub>一</sub>、又聞、坂東勇士等、已超<sub>二</sub>來參河國<sub>一</sub>、實說云々、官兵等併歸洛、又無<sub>二</sub>兵糧<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>其隙<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>襲來<sub>一</sub>歟、尤可有<sub>二</sub>用心<sub>一</sub>事歟、

廿九日、<sub>巳</sub>天晴、昨今又物忌也、晚頭大夫史隆職、來<sub>二</sub>門外<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>造寺除目延引子細<sub>一</sub>、申云、先例、大臣爲<sub>二</sub>上卿<sub>一</sub>、而今度各無<sub>二</sub>御參<sub>一</sub>、又國宛事未<sub>レ</sub>定、并兼光不慮觸穢、<sub>中宮五體不具穢</sub>依<sub>二</sub>此等事<sub>一</sub>延引、只今、其期不<sub>レ</sub>聞云々、早旦請<sub>二</sub>佛殿聖人<sub>一</sub>、示<sub>二</sub>合祈事等<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>夢想事<sub>一</sub>、同示合也、此日下名云々、

〔治承五年夏 辛丑〕

四月〔大〕

一日、丙午〔天〕晴、書心經五卷、傳聞、去比前幕下許有落書、其趣、法皇欲幸日吉者、與山僧同意、爲登叡山也、僧綱一兩并賴盛卿等與此事、即御幸之際、可入夜伐於前幕下之許之由、成謀議之旨、具載件落書、因茲、彼家中用心殊太云々、如此之事、無所據之輩所爲也、太以不便也、見下名聞書、無殊事、

二日、丁未〔天〕陰、雨下、實嚴閣梨來、示合祈事、

三日、戊申天晴、未刻、參女院御所、自院伯耆御厨之間事、有被仰旨等、勿論次第也、大略可棄國之時歟、入夜、上方有火、泰親朝臣來、談天變事、鎮星入犯與鬼、

占文不輕云々、

四日、己酉雨降、伯耆御厨間事、以靜賢申入了、未聞勅報、二位中將兼房被來、余謁之、

五日、庚戌天晴、午刻、定能卿來、申刻、隆職來、召簾前、談雜事、戌刻參院、依御行法之間、無御對面、由、有其仰、即退出、

六日、辛亥天陰、雨降、參女院御所、今夕、爲御方違、

渡御御堂御所、自燒失之所、當塞方、滿十五日不可宿之故也、自今以後、不可有、只一度可違之由、先日泰茂令申也、入夜、右少將公衡、爲請賀茂祭陪從裝束來、大將依所勞灸治等、不謁之、以職事能業申之、答可調送之由、

七日、壬子天晴、物忌也、未刻、頭辨經房來門外、數刻佇立、依不便、開門招入中門邊、但依物忌不謁之、以人示云、今年可被行改元哉否、踐祚次年、被行改元例也、而諒開年例、有古昔〔別〕例、近代不然、可令計申、被制兩大外兼又中宮喪、可有三記勘申例、院號、拜舞、饗祿等有無如何、正曆東三條院例、具趣無所見聞、可令計申者、余申云、寬平、承保爲最吉例、雖及第三年、被過諒開可宜歟、但頃年、東西有亂、中夏不靜、依如此之難、有改元之儀者、被用延曆等例、又何事之有哉、院號事、尋先例可被計行歟、無所見者、愚案之所及、拜舞、饗祿、共以其理不可然歟者、已上、申次男未練、仍注付一帶、內々給之、而頭辨乞取件折紙了云々、頭辨云、改元事、左大臣被申之旨、只如令申給、院號事、被問人々四五人、忠親卿申旨、又以同前、他人申狀未承云々、改元事者、左府、余許被問之云々、



入夜、右近廳頭來、申大神祭使闕如之由、慥不可闕如之由、召仰了、且觸年預、可付職事之由仰了、後聞、新任將監宗景勤仕云々、

八日、丑天晴、依當神事、公家無灌佛、女院御灌佛、於御堂御所被行之、別當基輔、判官代兼親、外記來催云、明日、院號定可參者、申所勞之由了、

九日、寅天晴、物忌也、或人云、坂東武者、已來尾張國云々、大將女房、日來有所勞、大略似瘡病歟、而此兩三日、每日兩三度更發云々、傳聞、明日可被行祭除目云々、天下人云、法皇與前幕下、內心不和、定又內亂出來歟云々、親範卿入道、以寶殿開梨、有示事、余不承引、

十日、卯陰晴不定、傳聞、昨日院號延引、是法皇依御物籠、今熊不可有御幸、仍所延引云々、愚案、御幸何故哉、未得其意、今夜被行祭除目云々、亥刻、見聞書、鎮西住人種直任太宰〔權〕少貳、先例可尋、

十一日、辰天陰、時々小雨、坂東武者等、已越來三河國云々、

十二日、巳陰晴不定、時々小雨、或人云、自去年御即

位之比、進之、紛失云々、未曾有大事也、此事不被信受、然而、定說云々、不能左右〔也〕、

十三日、午雨下、雷鳴、未刻、參女院御所、入夜歸來、十五日、未陰晴不定、佛殿聖人有示合事、

十五日、庚天晴、大外記賴業來、數刻交語、賀茂社司持來葵、及晚、光長來語云、明日賀茂祭、近衛使可給祿哉否、人々不審、延久不行之、天仁爲房記、給

祿如例云々、而亮開年、不可賜御衣、若內藏寮掛歟、然者、又如例如何云々、余案之、不可給歟、如天仁天曆者、不賜祿歟、入夜、右大將、遣陪從

半臂、下重、末濃袴下袴等於近衛使公衡之許、參平參二合、職事長俊爲使、

十六日、辛天晴、賀茂祭也、近衛使右近少將公衡、十七日、壬天晴、物忌也、自今日始念誦、

〔十八日、癸天晴、物忌也、〕

十九日、甲雨下、依吉田祭、神事如例年、但不奉幣、亮開例也、

〔廿日、乙午後天晴、〕

廿一日、丙天晴、或人云、昨日自常陸國、有上洛之下人、四十餘日、遂前途、廻北陸道、入洛云々、件者

相語云、秀衡已歿之由無實也、賴朝可娶秀衡娘之由、相互雖成約諾、未遂其事、凡關東諸國、一人而無乖賴朝旨者、佐竹之一黨三千餘騎、引籠常陸國、依思其名、一矢可射之由令存云々、其外、一切無異途云々、禪門逝事、第八日風聞了、又同心之助永、共以天亡、爰賴朝且雄稱云、我於君無反逆之心、以奉伐君御敵爲望、而遮蒙天罰了、佛神之加被、偏在我身士卒之心、彌可相勵者也云々、因茲、禪門薨去之後、坂東諸國、彌以一統了、於上洛之條者、追討使襲來之時、即追歸、其次可伐入之由、成支度云々者、様々浮說之中、此說頗可備指南一歟、仍粗記之、

廿二日、卯傳聞、坂東之武士等、其意各別、武藏國有勢之輩、多乖賴朝了云々、凡近日之風聞、朝暮有變、遂其動靜如何、

廿三日、辰至今日念誦、

〔廿四日、巳天晴、參女院、〕

廿五日、庚天晴、藏人宮内少輔親經來、非指公事云云、余召簾前、文談移刻、語云、改元可及來七八月云々、

廿六日、辛天晴、參女院、今夜宿御堂御所、可有御作事之地、自當時居所當西、大將仍爲違其方也、

廿七日、壬甚雨、女房參女院御所、

〔廿八日、癸酉〕

〔廿九日、甲戌〕

卅日、乙此間、院有十度御講、其中、證憲僧都、說法之中、多吐世上不可云々、

### 五月大

一日、丙晴、傳聞、賴朝已欲上洛云々、是武藏之有勢之輩等、有異心、凡各不「一統」之間、其勢殊不減之前、爲遂素懷云々、騎射、襲祿事、本府驚申、日來一切忘却、仍忽致其沙汰、依爲諒闇年、今年無荒手結云々、

二日、丁天晴、右近府々生正保來、申騎射將不着之由、即以件府生、隆房朝臣之許、可催沙汰之由、兼又可被着到之旨、大將示送了云々、又召廳頭清景了、今日、請佛殿聖人、令見大將所勞、三日、戊甚雨、大將室、日來病惱、此兩三度、隔日更

發、有發心地之疑、仍驗者立一二卜筮、依令占、請覺寬內供、平愈了云々、悅亦不少、左右近府廳頭清景、仰騎射之間條々事、

四日、己卯終日甚雨、此日、依亮間、無府荒手結也、

五日、庚辛天晴、參女院御所、清景來云、實明朝臣、申可着騎射之由云々、

六日、巳辛晴、此日、右近府真手結也、依亮間、不給祿、又不送饗也、長保、見實嘉承、見宗能記、不賜祿、於饗者、如何之由、所見也、然而、保安故殿大將御時、於初年者被送饗祿、於後年者、只送祿、不賜饗之由、有所見、加之、亮間年又不送饗祿之例存之、就此等案之、不亮間年、猶不賜饗、何況於亮間哉、仍饗祿共不賜也、又大將職事等、不催遣也、左近府又同之云々、入夜、府者持來年結、大將加一見返給云々、傳聞、吉野大衆等蜂起、有稱宮之子之人云々、仍自院被仰奈良大衆可尋出件小宮之由云々、

七日、壬午陰晴不定、日來祈、今日結願、實殿所修也、

〔八日、癸未晴、〕

九日、甲申雨下、此日、今比叙小五月、有競馬五番、但

依亮間、不給纏頭云々、

十日、乙酉雨下、漏刻博士季親來、召問易筮之間事、基輔自春日下向、昨日所參詣也、

十一日、丙戌晴、基輔云、今晚有最吉夢云々、

十二日、丁亥雨下、參女院御所、

法性寺座主註送云、或僧見吉夢云々、

〔十三日、戊子甚雨、洪水、〕

〔十四日、己丑甚雨、同昨、〕

十五日、庚寅陰晴不定、此日、月蝕也、請智詮、北斗念誦、所相具弟子也、今日、余百日所作結願了、今日

奉幣春日社、付幣料於正領也、

十六日、辛卯天晴、自今日服藥、

十七日、壬辰天晴、宗雅來、語世上事等、其中有攝政未練〔習〕事等、

十八日、癸巳天晴、權漏刻博士菅野季親、相具其子季

長〔來〕、所召問五兆占事也、此日、易物忌也、

〔十九日、甲午〕

廿日、乙未易物忌也、

〔廿一日、丙申〕

〔廿二日、丁酉〕

廿三日、戊天晴、此日、余參院、以親宗、被仰念誦之間不謁之由、其實無御念誦、爲稱之、如何々々、

〔廿四日、己參女院御所、〕

〔廿五日、庚天晴、今日物忌也、〕

廿六日、丑天晴、此日、大將參院內、中宮等、直衣如例、單衣、紅下袴、指貫、括籠之、但猶組垂腹白也、此日有小除目、泰經任伊與、雅賢還任少將、重衡叙從三位、任左中將也、

廿七日、寅天晴、自今日、被始行季御讀經、帥三條大納言、上卿藤中納言、左武衛藤相公、源相公羽林等參入云々、此日、參女院御方、

廿八日、卯此日、未申刻許雷鳴、

廿九日、辰天晴、參女院御方、歸宅之後、定能卿息武衛親能來、今日參院云々、今日、晴光持來五行大義、卅日、巳天晴、此日、季御讀經結願、有僧事云々、

## 六月

〔一日、丙午〕

〔三日、丁未〕

三日、戊天晴、女房姬君、物詣吉田、祇園也、密々事

也、今日、漏刻博士季親來、申易筮、五兆等事、四日、己天晴、向覺智僧正六條壬生家、明日、女院可渡御之故也、

五日、庚天晴、酉刻、頭辨經房朝臣來云、院宣云、藏人頭有共闕、所望輩三人、清通朝臣爲近衛司、及三位階第一、尤當其仁、若無恩者、可被許三品之由、令申者、泰通朝臣、先例不依必位階事也、云云、奉公、云云、殿上人〔望〕與清通朝臣、非同日論、上願、爭乍置泰通、被補清通哉之由令申者、維盛朝臣、以坊官、超越數輩上薦、補藏人頭、兼可任中將之由、令申者、三人之所望、一決爰迷、宜令計奏者、申云、清通旁當其仁歟、雖然、泰通所申者、又非無其謂、維盛又被賞坊官之條、不能申左右、惣以此條、專難計申、偏可在勅定〔事〕也者、頭辨云、攝政、左府等、所被尋問也云々、亥刻、女院大將室、渡御楊梅壬生〔之〕邊家、覺智僧正第所進信也、非御幸之儀、殿上人供奉乘車、或自閑路參會、余又借人車、與大將同車、候御供、女院所召大將軍也、及深更歸宅、伴家有堂、本主業景法師云々、而逢事之刻、家地資財等、書契狀、賜檢非違使景高、



云云、遇覺智僧正相傳、伊勢國所領、當時爲彼僧正之領、女院無御所之間、暫可進借之由、所申也、而本主、凡卑之上、又逢事者也、旁以可有其憚之由、余再三令申、又有議定、而當時一切無可渡御之家、此兩三月之間、親疎難借召、或有難之際、或爲凶所、或慘惜、如此之間、已計畧盡了、當時之御所、暑熱之間、片時無可御坐之方法、仍不願衆難、枉所渡御歟、且是非深難之由、重所有議定也、其故者、業景法師、自彼家被擲出、若爲出立所者、尤可被憚、而彼時逐電之間、自他所被追捕得、其後、自下人小屋出立天所、赴遠江國也、仍非重忌、何況三重之本主、強不可及沙汰、覺智僧正、已爲當時之主、無妨於爲御所、加之、如此寶物、家地等、轉々之後、殊不及本主之沙汰之故也、抑件法師、爲院近臣之間、歸洛之時、若可歸預哉、然者、今之渡御、可無骨、仍內々被伺院御氣色之處、早可渡御之由、有御報云々、以定能卿所被申也、

六日、辛亥天晴、及晚、大夫史隆職來、召簾前、談雜事、所持參東大寺勘文也、此次語七月廿日比、自

太神宮奉奏狀、是十郎藏人行家、奉告文於神宮、〔之〕由也云々、

七日、壬子天晴、未刻、參女院御所、壬生入夜歸九條、

〔八日、癸丑〕

九日、甲寅以基輔訪二品、依遣其母喪也、此日、

召陰陽助濟憲、問女院御所可被修造之間日次、前爲手沙汰不快、仍今度、爲女院御沙汰所被造也、今日、中御門大納言被來也、

十日、乙卯天晴、辰刻許、參女院御所、此日、自關院亭、行幸賴盛卿八條亭、爲避來十四日祇園御靈會路也、秉燭之後、右大將參內、其後、手歸宅、及亥終、有行幸云々、

今日、大將供奉事、

裝束、亮間束帶如常、

平胡錄、黑染服、有銀伏櫛、純色九搭、

弓、在柄純色、并組弓柄、同純色組也、

鞍、綠螺鈿、切符、茶席、手綱、緋、

或用蒔繪、梨地無文、蒔繪云々、鞍、而忽不能新調、又無相

持之人、仍付常說所用綠螺鈿也、猶可用蒔繪事也、

隨身、鈍色狩袴、白單衣、

狩胡錄、上帶不改替、只如本、是保元永萬兩殿下例也、他人替之、用鈍色云々、

毛車下籠、淺黃、末濃、如常、

今日行幸、無關司奏、鈴奏等、又不仰邦綱云々、

但於八條亭、有名謁、是皆先例也、

今夜、於八條亭、有除目、少將維盛朝臣、任右中將云々、

十一日、丙辰

十二日、丁巳、天晴、右中辨光雅朝臣、爲攝政使來、隔

障子謁之、被尋問條々等、

一金堂已下、爲公家沙汰、可被造營、於講堂、

維摩堂、南圓堂者、長者可沙汰、食堂、寺僧可沙汰、

而於維摩會者、自被始行其會以來、未曾出

寺外、仍年內必雖可被造畢講堂、其功莫大、其期

既近、若無合期之勤者、可被移行食堂之處、

同以難終其功之由、寺家所申也、若然者、准如

常樂會、於禪定院、當時被安置燒燬御佛等別當房也、被行者、已寺外

也、留會於興福之文、已可相違、仍必於寺中可

被遂行也、縱非講堂、食堂、可然之別院也、如一乘出來

者、可被用其所、而云寺僧云長者、各相營兩

堂之間、不及他沙汰、忽難出來、或者和議申云、

福原之都、入道相國有新造之亭、去年爲皇居、被

行五節已下公事等了、然而、彼都棄置之後、其家

又不及沙汰、壞渡伴屋、建立別院、自終不日

之功歟云々、此條如何、可相計者、

答云、伴家造營子細、棄置之旨趣、皆不知給、偏可

依被沙汰之趣也、若爲內裏被造營者、尤可有

禁忌、又可誘難、偏爲社家被造營之後、暫借

召爲皇居、還都之時、被返賜了云、又有何憚哉者、

一諸堂佛寺、於南都、可被始歟、將於此京、可

被始歟、又御衣木、誰人可加持哉、

答云、可被檢康平之例也、案事理、於南都、可

被始歟、加持之人、無疑東寺真言師歟、其仁在禪

喜歟、

〔一〕事〔始〕之時、行事官已下、可着吉服哉否、

答云、專不可着吉服、神事奉行人、古昔猶有、不

改亮闇之例、如日時定也、何況、非神事、無故改其服、

還可毀禮歟、

已上、興福寺事、

一近日、御社恠異頻示、殊所恐思也、倩案事情、造營廻廊、不叶神慮之趣、付冥顯有其證、而大衆推而造之、其後、長者已下至于造國司、併以有不吉、遂法相之一宗滅亡、疑滿徵歟、仍可被

壞件廻廊哉否、愚案難及、可計示云々、答申云、此事、爲朝爲氏、已第一之大事也、以人意輒難計申、疑難決之時、以卜筮決之、古今之習也、然而、其事猶似普通、所存思給者、限日數、以有智淨信之僧徒、令參籠御社、又殊獻幣帛、長者殊致謹慎、被立御願等、可被祈請也、若日數內有靈告者、可被隨其趣、不然者、其期日、可被行占卜歟、

光雅又云、如此事、一切不知子細、且隨聞食及召光雅、兼光等、尋子細、可被計仰下也、以之可爲本懷云々、

世間事、每事奇異歟、生涯無益、無上菩提之外、他事無由云々、

如此之間狀等、就返答、憚多、實進退惟谷者也、十三日、戊午、口口外記、持來大神宮御領近江國福永御厨文書、爲有仗議、被廻諸卿云々、上卿藤大納言云々、

十四日、己未、口口口前源中納言來、依疾隔障子、謁之、傳聞、自東國送牒狀於山上、其趣、可勸修我方祈者、東國末庄、所領等用途併可沙汰、送山上云々、而座主以件狀、令見前幕下、又經奏聞、大衆聞之、大怒云、先可觸衆徒也、而引籠相觸、所尤奇怪也、仍座主與大衆不和云々、大衆蜂起之次第、太以無其謂事歟、

十五日、庚申、天晴、此日、被行造興福寺行事官除目、并國宛定等、上卿左大臣、其外公卿四五人參候、右兵衛督家通執筆云々

又被行小僧事云々、國宛、只任先例、被宛東國等、悉在此中云々、酉刻地震、此日有行幸還御云々、

隆職注送旨如此、

上卿左大臣、執筆右兵衛督、

源大納言、三條大納言、新大納言、

右衛門督等、被候仗座、

治承五年六月十五日 宣旨、

陰陽寮擇司可被造興福寺雜事日時事、

本作始日時、

今月廿日乙丑、時午二點、若申、

立柱日時、

七月廿八日、壬寅、時寅二點、若辰、

立柱次第、先東、次西、次北、次南、

上梁棟二日時、

同日壬寅、時午二點、若未、

依件行之、

可造興福寺國々、

金堂、

近江、丹波、播磨、美作、備中、

讃岐、伊豫、

已上、各一間、但東西妻、近江、播磨、

廻廊五十間、

攝津、甲斐、信濃、上野、若狹、能登、

加賀、越中、越後、出雲、筑後、肥前、

已上、各四間、但加賀、越後、五間、

僧房、

尾張、參河、美濃、丹後、因幡、伯耆、

安藝、土佐、筑前、肥後、

已上、各十一國、

經藏、

淡路、伊賀、越前、

鐘樓、

和泉、隱岐、

中門一字、

但馬、

此外、講堂、南圓堂、南大門、

內大臣、

食堂、上階僧房、寺家、

東僧房一字、以氏知識造之、

治承五年六月十五日、

造興福寺使、

長官藤原兼光、兼右中辨、元造東大寺長官、

次官高階仲基、兼和泉守、

判官大江仲守、兼左大史、

主典中原盛言、右衛門志、

同日

治承五年六月十五日 宣旨、

陰陽寮擇申於室生龍穴可被行祈雨御讀經

日時事、



今日十五日甲子、時未二點、

讀經日時事

合<sub>二</sub>法印權大僧都信圓率<sub>二</sub>古淨侶<sub>一</sub>限<sub>二</sub>五箇日<sub>一</sub>轉<sub>二</sub>讀仁王般若經<sub>一</sub>祈<sub>二</sub>請甘雨<sub>一</sub>其施供物、用<sub>二</sub>大和國正稅<sub>一</sub>、

同擇<sub>二</sub>申於神泉苑<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>祈雨御讀經<sub>一</sub>日時事、

今日十六日辛酉、時午二點、若申、

依<sub>レ</sub>件行<sub>レ</sub>之、

權大僧都俊朝、院御<sub>二</sub>幸祇園社<sub>一</sub>別當、

權少僧都全真、還着、

出雲、御<sub>二</sub>幸祇園社<sub>一</sub>檢校僧正明雲、

無動寺檢校、

覺快親王、還補、

同日、

國宛定以前、被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之、上卿新大納言、參議右中將、通、

〔十六日、辛酉〕

十七日、壬戌、天晴、參<sub>二</sub>女院御所<sub>一</sub>宿仕、

十八日、癸亥、天晴、自<sub>二</sub>去夜<sub>一</sub>女房不例之由告來、仍午刻退出、大略瘡病歟、大將同相具、入<sub>レ</sub>夜大將歸參了、自<sub>二</sub>

今日、法眼被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>籠葛川<sub>一</sub>了、

〔十九日、甲子〕

廿日、乙丑、天晴、藏人左衛門權佐光長、爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來云、當時太元、阿闍梨勝遍也、尊實弟子、而去年園城寺亂之時、爲<sub>二</sub>鎮<sub>一</sub>其事、五月廿七日欲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>行件法<sub>一</sub>之間、遮<sub>二</sub>廿五日凶徒被<sub>レ</sub>伐平<sub>一</sub>了、雖然、爲<sub>二</sub>銷<sub>一</sub>餘殃、猶被<sub>二</sub>始行<sub>一</sub>之處、其後天下彌騷動、忽有<sub>二</sub>遷都<sub>一</sub>、又東西謀反、于<sub>レ</sub>今不被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>征伐<sub>一</sub>、已如<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>法驗<sub>一</sub>、仍近日爲<sub>二</sub>平<sub>一</sub>東國、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>之處、勝遍不快、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>合仁和寺宮<sub>一</sub>之處、其師尊實如<sub>レ</sub>元可<sub>レ</sub>修之由、被<sub>レ</sub>計<sub>二</sub>申<sub>一</sub>、兩度勤仕、實覺法眼之例也、仍內々召支度、有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>之間、猶一身兩度勤修、爲<sub>二</sub>希代之例<sub>一</sub>之上、尊實行<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>之間、天下又不<sub>レ</sub>穩、傳<sub>二</sub>習此法<sub>一</sub>之人多在<sub>二</sub>世<sub>一</sub>、何如無<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>、強可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>仰舊阿闍梨<sub>一</sub>哉之由、自他宗輩遍以傾申、因<sub>レ</sub>茲、習法之輩、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>申<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>仁和寺宮<sub>一</sub>、并<sub>二</sub>禪喜僧正<sub>一</sub>之處、各注<sub>二</sub>進之<sub>一</sub>、宮六人、太略撰<sub>二</sub>門弟<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>知法<sub>一</sub>歟、然間、常陸禪喜四人、太略撰<sub>二</sub>門弟<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>知法<sub>一</sub>歟、然間、常陸已講隆資<sub>二</sub>實覺之流<sub>一</sub>、殊以望申有<sub>二</sub>申狀<sub>一</sub>、件者、不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>兩人注文、又安祥寺實嚴阿闍梨、雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>懇望<sub>一</sub>、當仁之由進<sub>二</sub>折紙<sub>一</sub>、此等之間、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>誰人<sub>一</sub>哉、可<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>

〔申〕者、〔申云〕、俗家專不知案內、猶宮、長者已下、可然之僧綱等、可計申事歟、實嚴者、粗知其法器、弘法大師之流、無可出彼右之者歟、自餘之輩、又各師主注申之、此上事、且可在勅定、又同於傳受此法者、撰行業知法之輩、可被仰也、至于被改勝遍之條者、理可然事歟、於其人者、依不知子細、不能定申云々、

廿一日、寅女房、午刻發了、知詮所之無驗、爲歎不少、

〔廿二日、卯自夜雨下、〕

廿三日、辰女房已刻發了、今日、驗者同前、又以六口僧、尊勝念誦〔祈〕、音、引

廿四日、辰本命日、泰山府君祭如常、

廿五日、巳天晴、藏人左衛門權佐光長來、傳院宣旨、前參議光能、雖被許出仕、爲四位之前參議之人出仕例、貞信公之外無例、事體尤似有憚之上、彼朝臣申云、籠居之間、於超越之輩者、非此限、今昇進之人々、加座右之條、非無所怨、仍欲被許本座宣旨、其事若難者、被下准參議宣旨、勸仕參議之役如何者、此事無例歟、寂慮不決、宜

令計奏者、申云、准參議宣下、無先例、世上定驚耳目歟、至于本座宣旨者、於四位參議、雖無例、於本座者、近例人別事也、被宣下、強不爲巨難歟、但當時、雖被許本座、頗無其詮歟、抑此條、雖不被仰下之事、被許三品、被召仕、全不可有煩事歟、本已爲卿相、叙三位、不可及御猶豫事歟、此上事、可有聖斷者云々、光長云、被尋左相、攝政等云々、

今日女房瘡〔病〕祈落了、驗者同前、以同人弟子三口、始千手經讀經、智詮賜單重并牛等、他僧給單衣一領、

廿六日、辛未此日、東大寺行事官除目云々、〔造〕佛造寺等長官、共行隆也云々、

廿七日、壬申此日、侍從着始亮開、冠透冠也、并直衣指貫等也、

廿八日、癸酉傳聞、自去廿五日、客星出內天、壬辰、以外變異也、不能左右、天下大事、舉足可待云々、

廿九日、甲戌參女院、攝政會參、談雜事、歸宅、六月被吉服也、陪膳季長吉衣冠也、

治承五年秋冬七月四日改元、爲「辛丑歲」

七月〔大〕

一日、乙陰晴不定、未刻、右中辨兼光朝臣、氏院、爲「長者使」來曰、被始御寺御佛之間、有條々不審、金堂、食堂御佛、爲「公家御沙汰、申事山之處、申合閣下、可致沙汰之由、有院御氣色者、先於何所可被始哉、康平於寺中東室被始之由、有所見云云、是寺家所申也、今度、寺中悉爲灰燼、然者、於金堂前壇下邊、可奉始歟、將必於南都、不可始歟、是次御衣木、可採何處木哉、康平例無所見、憶事理、採寺領杣木如何、是次御衣木加持僧、可被用東寺僧綱、其仁誰人哉、禪喜僧正可然歟、是余答云、被始御佛一所事、康平例煩焉、南都無異議歟、寺內雖成灰燼、金堂壇下邊、打平張被遂行、何妨哉、兼光云、白川諸御願寺御佛、於法勝寺金堂壇下、有被始之例、尤可准據歟云々、兼光重問云、若然者、講堂、南圓堂等、爲長者沙汰、件御佛、各於本堂跡、可被始歟、將於金堂壇下、一度可被始歟、答云、於一所被始、無事妨者、何事之有哉、所々之儀、似有煩歟、何必限本堂跡哉、但可被從便歟、又兼光問云、可被新造之御佛等、其

五百十

數八十餘體、金堂許也、悉同時可始歟、將奉始爲宗御佛、於小佛等者、後日可奉造歟、康平例、只奉始十五體之由、有記文云々者、余答云、於先規存事者、一向可被守其跡、不可及他議歟、次御衣木事、同有先蹤者、可被隨其趣、無所見者、被採寺領杣木、有便無難歟、次加持僧事、禪喜僧正、專當其仁、彼若有障之時、可及沙汰歟者、此大、兼光相語云、越後國勇士、城太郎助永弟助職、國人號「白川御館」云々、欲追討信濃國、依故朝門前幕下等命也、六月十三四兩日、雖入國中、敢無相防之者、殆多請降之輩、於僅引籠城等者、可無煩于攻落、仍各成乘勝之思、猶欲製攻散在之城等之間、信乃源氏等、分三手、サコ黨一手、甲斐國武田之黨一手、俄作時攻襲之間、疲嶮岨之旅軍等、不及射一矢、散々敗亂了、大將軍助職、兩三所被疵、脫甲冑棄弓箭、僅相率三百餘人、元勢萬餘、逃脫本國、殘九千餘人、或被伐取、或落自嶮岨終命、或交山林暗跡、凡無再可戰之力云々、然間、本國在應官人已下、爲途宿意、欲凌礫助元之間、欲引籠藍津之城之處、秀平遣郎從、欲押領、仍逃去佐渡國了、其時所相伴、纔四五十人云々、是

事、前治部卿光隆卿、知行越後國之人也、今日稱健說、於院所相語也云々、

〔後聞、逃脫佐渡國一謬說也、引龍本城云々、〕今日、大將白地來、聊有所勞氣、歸參了、

二日、丙晴、今日、有復任除目事、加賀與紀伊名替云云、是、日前、國懸造宮之間、國司重服、有憚之故云云、

三日、丁晴、今夜、大將參了、一定瘡病歟、仍明後日可加持也、

四日、戊晴、申刻參院、以定能卿入見參、依召參御前、數刻預勅語、多是世間逆亂之間事也、余有疎遠之恐、而天氣甚快、爲悅不少、但末代事、萬々何爲哉、日沒以後、參女院宿候、今日於女院、謁兼雅卿、

五日、己今日請猷勝阿閼梨、令祈大將、未刻發了、尤遺恨、入夜歸九條、

六日、庚晴、今日、泰親來、語天變事等、暴兵、移國、大喪等事爲詮云々、

七日、辛晴、今日、雖請覺寬、春寬等、各不來、然間、猷勝枉所望、仍雖請之、又以發了、今日殊大事也云

云、節供如常、陪膳季長朝臣、乞巧奠又如例、法皇、今日欲幸法勝寺、人々可若吉服云々、而近日世間不靜、天變相頻之上、客星已出、如此之間、殊恐思食、仍停止了云々、

師景、内々注進客星勘文等、

今年、法勝寺御八講、證誠山階寺別當法印信圓云々、八日、壬天晴、此日、最勝光院御八講初日也、今日、大將祈於女院御所、被始大般若讀經、覺智僧正參入發願、

九日、癸天晴、時々陰、早旦、參女院御所、大將發日也、自今日、始千手經讀經、僧三口、皆有驗僧也、智詮弟子、同行等也、智詮祈之、今日殊宜發、仍明後日、猶可請此人也、

十日、甲天晴、大夫史隆職來、召前仰雜事、語云、隆職被相副造佛東大寺也、長官、依無被任次官之例、被加長官、雖面目可足、沙汰不可叶、尤爲大事云々、

十一日、乙天晴、早旦參女院、依召也、大將、今日平愈了、智詮、仍驗者賜祿、紅袴襪重五重、皆顯文紗也、同白單衣、又給牛、左衛門能成、又千手經讀誦僧、各例布施之外、給絹一疋、即



今日結願也、平愈悅思不少、今日未刻、權辨光雅、爲攝政使來、於女院御所謁之、傳攝政命云、御寺棟上日、可下向哉否事、先日見參之時、粗雖議申、其後、公卿少々、親、推賴、宗家、忠不期而會、問此事之處、各任康平例、不可下向之樣令申、又尋左府之處、同被申此旨、猶可何樣哉、重欲蒙處分者、余答云、此事、度々蒙仰、所存令申了、所詮、只任御意者也、但春日詣以前、無下向之例、加之、無可被宿之所歟、佐保殿爲灰燼、禪定院、當時被擬御寺、頗無便宜歟、又今度棟上、講堂、食堂許歟、以金堂可被宗事歟、旁無御下向、無殊難歟、但不願萬事、無左右、可下向之由、有御存知者、又以可謂謹慎、誰人敢問然哉、只可在御意也、光雅重云、若無御下向者、氏公卿可下向哉否、余云、只一向、被就康平例者、不可必然歟、光雅又云、金堂棟上、頗被延引、遂春日詣以後、被行彼棟上、有御下向宜歟之由、人々被申、而左大臣、此條不可然之由被申、如何、余云、人々申狀、專不可然、左大臣被申旨、可然也、雖一日、可被忍出來之處、依長者下向、空被送日月之條、一切不叶

物議事也、光雅又云、無御下向者、勅使之條如何、余云、可依先例、但燒失寶檢之時、雖無長者下向、猶有勅使、被准彼者、勅使下向、何事之有哉、但此條、強不可及御所望、只可被從公家之沙汰也、光雅云、康平例、勅使下向之由、無所見云々、又光雅云、棟上之時、若春日社、可有奉幣歟、永承、事始以後、棟上以前、有奉幣、其外、棟上之日、御下向之時、依無御參社、有奉幣、永長、事始以前、有奉幣、又棟上之時、有奉幣、今度如何、余云、事始以後、已被遂奉幣了、其時、棟上之由、同被載告文歟、然者、今度重不可有歟、永承御奉幣者別儀也、非依棟上事歟、光雅云、今度、以前奉幣、被載棟上事了、但無御下向者、其事若可被謝歟之由、人被申者也、余云、其事必不可然歟、其故、如彼永承、有下向無參社者、尤可在被奉幣、依爲春日詣以前、不被下向御寺棟上之由、專不及謝御社、頗不叶事理歟云々、光雅諾、此外、雖有示事等忘却、仍不記、入夜歸九條了、今夜、前大將送使者、有尋問事、

十二日、丙戌天晴、明法博士基廣來始、召簾前、問法家

事等、相次大外記賴業來、同召藤前、仰雜事、天下事大以〔歎〕息、大略今兩三月之內、一天可滅亡之樣、存申候、實哀事也、申刻、前大將又送使者、酉刻許、頭辨爲攝政使來、余相逢、經房云、公家御覽、今年可被行歟、明年可被行歟、凡人之例、過一期在之、而公家例、天曆八年、年內有此事、天仁元年、次年被行、寬德、延久、無所見、但爲房卿記、承保元年記云、自今年、於圓宗寺被行孟蘭盆云々、以之思之、謂講演歟、被送御覽事、又以同前歟、以此等之趣、可被計申云々、余云、天曆例、上代言例也、天仁、難爲次年、猶一周期之內也、然者、今度、明年被行之儀、不可叶、經房仍案事理、今年可被行也、不可及異議者、經房又云、來十四日、可被行、改元、而翌日被講孟蘭盆講之條、改元最初之公事、似有事憚、爲之如何、余云、此條尤可然、改元、必十四日可被行者、又明年何事之有哉、但猶可被勘先例歟者、經房云、被尋人々之處、左大臣、左大將、被中改元也、帥大納言、已上、申明年可立、但左府就近例、被中明年可立之由、若各無子細、不被覺悟天仁一期之內歟、如何々々、忠親、宗家、被申今年可宜之由云々、余云、不承改元〔之〕事、以

前々、今年可叶道理之由所存也、改元之條、左大將申狀可然歟、若公家御覽、有無講演之例哉、不然者、可被期明年歟云々、經房又云、中宮院號事、何月可被行哉、於六月以前例者、不可叶當時之沙汰也、七月高陽院、八月美福門院、九月東三條院、但依爲御出家之後、十月、無例、十一月待賢門院〔等〕也云々、余云、七八月不快、九月最吉例也、專不可依御出家歟、十月又雖無例、全不可有、若不依被忍者、十一月又無忌歟、彼是共不可及難、只可依時議也者、此次經房語云、代始改元、八月爲吉例、然而、依客星可有改元、仍今月所被忍行也、非代始之時、七月、但代始改元、詔無被載變異事之例、改元例、太多云々、但代始改元、詔無被載變異事之例、又不被行、敕令、依天變有改元之時、必有敕令、此外無、今度、依爲代始、雖不被載變異由於詔書、猶任天祿例、可被行、敕令、且是境節可被施仁德之故也云々、余云、若依客星事、殊有可被行、敕令之儀者、只於改元者、可依普通代始之例歟、於敕令者、被依天變宜歟、經房語、又語云、最勝光院御八講、今年殊被省略、僧十口互爲問答也、公家八講、互爲問答例、殊不聞、又不被召

證誠云々、又參入人々着吉服、是法皇、自今熊野、白地有御幸、仍被禪亮閤之服云々、余云、吉服之條、定驚眼歟、全不可依、今熊野御精進事歟、經房云恐意如此、仍雖申此旨不許、力不及云々、今日結願云々、小時歸去了、其後、余引勘延久注記之處、已有御筥、仍送消息於頭辨、其狀如此、

公家御筥事、引見延久五年七月十四日注記之處、御筥、院御料被送圓宗寺云々、彼太府卿、承保元年記、自今年、被行孟蘭盆講之由、被注置云々、以之思之、年內御筥、似無講演歟、然則今般、十四日被送御筥、改元事、縱十五日、雖無講演、自叶延久例歟、重案先規、無指故、又無日次障之時、空被過一期之條、已以無證據歟、然者、旁今年可被行之由、所存思給也、但此上、猶尋先例、可被計申行歟、依爲被尋問〔事〕、內々聞達如件、

七月十二日、酉刻、

在判、

頭辨殿、

入夜、返報到來、延久例、分明被勘出、尤所悅承、

也、早以此旨、可申沙汰云々、後聞、依此申狀、被送御筥云々、

十三日、陰晴不定、入夜雨下、酉刻、左少辨行隆、爲院御使來、余出逢之、行隆傳院宣云、近日、衆災競起、所謂、炎旱、飢饉、關東以下諸國謀反、天變、客星爲怪異、太神宮已下、每社有希代之怪異、又院中顯示大事、怪異之、又法師寺、有二聖之花之靈、先例皆不快、等也、廻何謀略、銷彼天殃哉、朕已迷成敗、公宜奏所思、敢莫憚時議、努力々々者、余報奏云、依積善之餘慶、雖昇大位、以至恩之短慮、難測重事、早召有識之卿〔大夫〕、咫尺龍顏、而可被獻諫言歟、抑先以民爲國之先、而去今兩年、炎旱涉旬之上、謂兩寺之營造、謂追討之兵糧、計民庶之費、殆過巨萬歟、豐年猶可泥所濟、況及餓死之百姓哉、國失民滅者、雖誅賊首、有何益哉、然則、先省衆庶之怨、暫可從人望歟、此外之德化、不可應時議、兼又猶可被祈請佛神也、御祈等沙汰、法之所指、全不可叶、殊被立御願、可被申請太神宮已下可然之靈神也、又仰合諸宗知法之輩、大法秘法等、隨堪可被修、次尋僧徒法器、正供料之不法、如法如說可被行也、各召阿闍梨於眼前、熱可



被仰御願之趣也、如此有沙汰者、何無効驗哉、又被行敕令如何、但觸謀叛之惡僧等事、能可有沙汰歟、至于追討之沙汰者、一向爲大將軍之策、不能量申、但兵糧之間、〔能〕可有沙汰歟、〔課〕無責之儀、不事行之基〔也〕、百千之計略、所〔詮無〕益、被休衆庶之怨氣、是其詮也、於其中之子細者、專非思慮所及、猶又廻恩案、退可奏歟、且以此等之趣、可被洩奏者、行隆條々有示事等、不能具記、大略、法皇、前幕下、可被悔先非之趣歟、依有恐余不口入、小時行隆退出了、今日、行隆來臨以前、以消息、返遣福永御厨文書了、其狀如此、

近江國福永御厨事、兩方文書、加一見返上之、彼是、其被下宣旨了、用捨之間、宜在勅定歟、但如保延四年明法勘狀者、御厨執行之職、道理在親國、然者、親次尤當其仁歟、至于賴家之條、若猶不分明者、重被下法家、詳可令勘決歟者、以此趣、可被洩奏之狀如件、

七月十二日

右大臣、

左少辨殿、

此消息、昨日夕雖遣、不尋逢、仍今日、又所遣也、即報札到來、有返得文書之由、

十四日、子戊天晴、未刻、藏人左衛門權佐光長、爲院御使來云、依天下不靜、可被行敕令之由、日來思食之上、依客星變、可有非常大赦之旨、有其沙汰、被觸前右大將之處、諸寺惡僧、悉被免者、可爲本寺之亂由、即所搦進之僧徒等、所合申也、此條、可被猶豫歟、但必可被行者、可在御定之由、所令申也、依敕令、雖不可必赦、天下之災、東大興福兩寺灰燼、欲慮深痛思食、仍被赦除彼寺惡僧等者、自可有被謝其過之儀歟、而又前幕下申狀、一旦非無其謂、仍被仰攝政之處、寺僧之歟、進雖可申〔請〕、依思後恐、不能申出、今又同前也、偏可在勅定云々、此事、何樣可被定哉、宜令計申者、余申云、先昨日聊有被仰下事、依有能示其大赦令事、重申出了、所存不可過彼趣、然而、依此仰、重廻思慮之處、各付師主、被致譴責之間、爲遁當時之耻、不知所犯之實、只以搦出爲先之間、無一塵之過怠、輩、多以被獄定之由、世間所風聞也、此條豈非罪業哉、怨氣定答上天、



歟、然者、尋其爲張本之輩、被<sub>レ</sub>寬免自餘、定叶<sub>二</sub>折中之政<sub>一</sub>歟、凡於<sub>二</sub>赦令<sub>一</sub>者、和漢所<sub>レ</sub>誠也、然而、先例多存<sub>二</sub>之<sub>一</sub>上、當時他德化難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之故乍<sub>レ</sub>思、粗所<sub>二</sub>驚奏<sub>一</sub>也、惡僧之張本等之類、被<sub>二</sub>拘留<sub>一</sub>、又何事<sub>二</sub>之<sub>一</sub>有哉、不可<sub>二</sub>必皆悉免<sub>一</sub>事歟、愚案之所<sub>レ</sub>覃如此者、光長、頗有<sub>二</sub>服膺之氣色<sub>一</sub>歟、晚頭拜笠、送<sub>二</sub>法性寺兩堂<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>恒、今日、入<sub>レ</sub>夜雨下、此日、有<sub>二</sub>改元事<sub>一</sub>、養和、敦周、揔中云々戊刻、行隆示送<sub>二</sub>云、昨日申狀<sub>一</sub>〔注〕給、明旦〔可<sub>レ</sub>奏〕、可<sub>二</sub>悉修<sub>一</sub>云々、

十五日、已<sub>二</sub>天晴<sub>一</sub>、早旦念誦之後、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>銷變異<sub>一</sub>之間事、成<sub>二</sub>草案<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>申刻<sub>一</sub>〔注〕一紙、送<sub>二</sub>行隆之許<sub>一</sub>了、其狀如<sub>レ</sub>此、

可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>變異<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>攘災<sub>一</sub>事、

右客星古文之中、有<sub>二</sub>外寇入<sub>レ</sub>國之說<sub>一</sub>云々、而當時、關東、海西、寇賊姦究也、倩案<sub>レ</sub>之、人事失<sub>二</sub>於下<sub>一</sub>、天變見<sub>二</sub>于上<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>戒慎<sub>一</sub>者歟、但銷<sub>二</sub>天譴<sub>一</sub>濟<sub>二</sub>人物<sub>一</sub>者、只在<sub>二</sub>祈請與<sub>二</sub>德化<sub>一</sub>、至于御祈<sub>一</sub>者遮雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、猶有<sub>二</sub>殊御願<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>祈<sub>一</sub>申太神宮以下尊崇之靈神<sub>一</sub>歟、此外、就<sub>二</sub>顯密<sub>一</sub>尤可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>祈供<sub>一</sub>、顯則仁王經、最勝王經、古今効驗不<sub>レ</sub>空、密又召<sub>二</sub>東寺、天台智法之輩<sub>一</sub>、委

尋<sub>二</sub>法之深祕<sub>一</sub>、詳訪<sub>二</sub>道之奧旨<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>何祕法<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計修<sub>一</sub>歟、云<sub>二</sub>僧徒之器量<sub>一</sub>、云<sub>二</sub>供料之沙汰<sub>一</sub>、各止<sub>二</sub>不法<sub>一</sub>、勤行如<sub>レ</sub>說〔者〕、雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>末法<sub>一</sub>、何無<sub>二</sub>冥感<sub>一</sub>哉、德政之條、今當<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>、難<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>號令<sub>一</sub>歟、聖人之道、察機應時之故也、但不<sub>レ</sub>救<sub>二</sub>民憂<sub>一</sub>者、其條逋<sub>二</sub>天譴<sub>一</sub>何、夫國者以<sub>レ</sub>民爲<sub>レ</sub>寶、既是古典之明文、近顧<sub>二</sub>宋景之善言<sub>一</sub>、豈不<sub>レ</sub>優德哉、頃年以來、炎旱涉<sub>二</sub>旬<sub>一</sub>、饑饉累<sub>二</sub>日<sub>一</sub>、加之、兩寺之造營、兵糧之苛資、偏費<sub>二</sub>人力<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>息<sub>二</sub>民肩<sub>一</sub>、萬人抱<sub>二</sub>楚痛<sub>一</sub>之悲、天一合<sub>二</sub>茶苦<sub>一</sub>之怨、然而、兩箇大營、一而難<sub>レ</sub>略、須<sub>二</sub>定<sub>一</sub>折中之法、被<sub>二</sub>施惠<sub>一</sub>下之仁歟、兼又諸人訴訟、委搜<sub>二</sub>真僞<sub>一</sub>、早任<sub>二</sub>正道<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>裁斷<sub>一</sub>歟、是其詮也、彼漢家明王攝后、以<sub>二</sub>斷獄<sub>一</sub>廻<sub>二</sub>治術<sub>一</sub>焉、本朝聖德太子、以<sub>二</sub>理獄<sub>一</sub>載<sub>二</sub>憲法<sub>一</sub>矣、凡天監不<sub>レ</sub>遠、避<sub>二</sub>面咫尺<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>善福來<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>喻影響<sub>一</sub>、然則、下民忽休<sub>レ</sub>憂者、上天還降<sub>二</sub>祥歟<sub>一</sub>、抑依<sub>二</sub>變異<sub>一</sub>行<sub>二</sub>赦令<sub>一</sub>、其例多存、就中、寬弘三年、依<sub>二</sub>客星<sub>一</sub>赦<sub>二</sub>囚徒<sub>一</sub>、果以消<sub>二</sub>妖氣<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>吉例<sub>一</sub>歟、但觸<sub>二</sub>神宮訴<sub>一</sub>之輩、及諸寺惡徒之中、其張本等、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>拘哉否<sub>一</sub>、宜<sub>二</sub>決<sub>一</sub>時議歟者、愚案所<sub>レ</sub>覃、大概如<sub>レ</sub>斯、猶仰<sub>二</sub>有職之人<sub>一</sub>、專可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>豫議<sub>一</sub>歟、微臣材智、元來柴愚也、爭獻<sub>二</sub>蓬星消沒之謀慮<sub>一</sub>、慙<sub>二</sub>華髮靜謐之籌策<sub>一</sub>矣、誠是

謀輕薄、諸重事之謂也者、以<sub>レ</sub>此趣、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>之狀如<sub>レ</sub>件、

七月十三日

右大臣、在列、

藏人辨殿、

此事、承<sub>レ</sub>仰之節申<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>了、而依<sub>二</sub>行隆私命<sub>一</sub>、今日注<sub>二</sub>進之<sub>一</sub>、仍以下<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰下之日載<sub>レ</sub>之、且又敕事、昨日有<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰下之旨、而載<sub>二</sub>今日之申狀<sub>一</sub>云、有<sub>二</sub>其憚<sub>一</sub>、然而一昨日已申<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>注進之狀<sub>一</sub>、又無<sub>二</sub>其謂<sub>一</sub>、仍旁以<sub>レ</sub>眼前令<sub>レ</sub>申之日所<sub>レ</sub>載也、入<sub>レ</sub>夜、行隆有<sub>二</sub>披露之報<sub>一</sub>、

今日、隆職示送云、

去夜、有<sub>二</sub>改元<sub>一</sub>云々、其狀如<sub>レ</sub>此、

改元、

養和、

參仕公卿、

左府、右大將、帥大納言、堀川中納言、

前源中納言、右兵衛督、右宰相中將、左宰

相中將、新宰相中將、

詔書、大内記業實草<sub>レ</sub>之、

被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>中務權少輔伊經<sub>一</sub>、

吉書、上卿左府、

官方、

加賀國年料米解文、左少辨作<sub>レ</sub>之、

藏人方、

内藏寮申<sub>二</sub>臨時公用祈<sub>一</sub>、諸奏頭辨作<sub>レ</sub>之、

年號等、

大應、弘保、

已上、式部大輔俊經卿勘<sub>レ</sub>之、

久承、養和、應曆、已上、文章博士敦周

勘<sub>レ</sub>之、

十六日、庚寅申刻大雨、未刻、右中辨光雅來、傳<sub>二</sub>攝政命<sub>一</sub>云、近日、依<sub>二</sub>天變<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御祈事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>合閣下<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>前大將命<sub>一</sub>、仍所<sub>二</sub>申合<sub>一</sub>也、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>何例<sub>一</sub>哉

〔云々〕、余答云、依<sub>二</sub>天變<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御祈事<sub>一</sub>、陰陽道、真言

宗、各正爲<sub>二</sub>其長<sub>一</sub>之輩、被<sub>レ</sub>尋問、且又被<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>客星之時

例等、勘酌可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>歟、暗難<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>者、此事、不<sub>レ</sub>得

心、次第可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>奇異<sub>一</sub>歟、

十七日、卯天晴、晚頭、定能卿來、昨日、法皇、密々幸<sub>二</sub>

前幕下六羅波第、御馬、御牛、御裝束、殿上人裝束、其

外種々有<sub>二</sub>御引出物等<sub>一</sub>云々、御共、親宗、資盛等許也、

他人一切不<sub>レ</sub>參、午始渡御、申刻還御云々、世人有所

云歟、然而無事還御、或人云、越中、加賀等國人等、

同<sub>二</sub>意東國<sub>一</sub>、漸及<sub>二</sub>越前<sub>一</sub>云々、

十八日、壬辰天晴、雷鳴、及<sub>レ</sub>晚小雨、入<sub>レ</sub>夜、少口時々下、

辰

傳聞、通盛朝臣、可下<sub>レ</sub>向北陸道、他追討使、只今無<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>云々、每月泰山府君祭如<sub>レ</sub>例、

十九日、<sub>巳</sub>午後甚雨、及<sub>レ</sub>晚雨脚頗微、酉刻參院、入<sub>二</sub>見參、被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>云、有<sub>二</sub>取亂事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>調、有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>申事<sub>一</sub>者後可<sub>レ</sub>參<sub>一</sub>云々、即退出了、

廿日、<sub>甲</sub>朝間天晴、已刻以後雨下、攝政送<sub>レ</sub>書問云、明後日、依<sub>二</sub>造興福寺事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>多武峯、推岡等告文使<sub>一</sub>、而拜之間、可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>吉服<sub>一</sub>哉、將可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>亮間服<sub>一</sub>歟、可<sub>レ</sub>計示<sub>二</sub>云々、報云、潔齋之法如何、若可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>忌<sub>二</sub>姓者<sub>一</sub>、月水、服者<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>吉歟<sub>一</sub>、不然者、亮間可<sub>レ</sub>宜歟、非<sub>二</sub>指神事<sub>一</sub>之故也云々、

廿一日、<sub>乙</sub>雨下、傳聞、播磨國、又有<sub>二</sub>乖<sub>二</sub>國司<sub>一</sub>之者<sub>一</sub>云々、凡外畿諸國、皆以如<sub>レ</sub>此云々、

廿二日、<sub>丙</sub>雨下、人傳云、越後助職未<sub>レ</sub>死、勢又強不<sub>レ</sub>減、乃源氏等、雖<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>掠領<sub>一</sub>、未<sub>二</sub>入部<sub>一</sub>云々、

廿三日、<sub>丁</sub>朝間天晴、其後雨、如<sub>二</sub>日來<sub>一</sub>、今晚被<sub>二</sub>結<sub>一</sub>願太元法<sub>二</sub>二七ヶ日<sub>一</sub>勒修<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、實嚴來、語<sub>二</sub>供料不法<sub>一</sub>、凡無<sub>レ</sub>物<sub>二</sub>於取<sub>一</sub>喻云々、護摩壇二壇、聖天、<sub>近例、行<sub>二</sub>太元法<sub>一</sub>之人、不<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>聖天壇<sub>一</sub>、上古修<sub>レ</sub>之、仍今<sub>二</sub>十二天等有<sub>レ</sub>之、伴僧廿口、<sub>恒例十四口、度所<sub>レ</sub>修也云々、</sub>天慶廿口其、<sub>例云々、</sub></sub>

或人云、邦綱卿女子等、所<sub>二</sub>讓得<sub>一</sub>之攝政家領等之中、兩三所、預<sub>二</sub>賜盛經法師<sub>一</sub>、<sub>室家乳母夫、天下第一之貪欲非常者也、</sub>是爲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>興福寺維摩堂<sub>一</sub>也云々、然問、伴女子等、觸<sub>二</sub>訴前幕下<sub>一</sub>、以外有<sub>二</sub>誼譁事等<sub>一</sub>云々、實聞惡云々、今夜、夜半許大雨、此日、故業房妻、堂供養云々、自<sub>二</sub>院被<sub>レ</sub>候<sub>一</sub>遣殿上人等、世人爲<sub>二</sub>奇異<sub>一</sub>云々、

廿四日、<sub>戊</sub>天晴、大將室有<sub>二</sub>煩<sub>一</sub>何事、然而、則平愈<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、人傳云、能登、加賀等、皆與<sub>二</sub>力東國<sub>一</sub>了、能登目代逃上云々、

法眼志度庄事、示<sub>二</sub>付靜賢<sub>一</sub>了、最勝光院領也、

廿五日、<sub>己</sub>甚雨、今日、於<sub>二</sub>家中<sub>一</sub>有<sub>二</sub>合樂事<sub>一</sub>、今案方也、爲<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>宿病<sub>一</sub>也、小兒於<sub>二</sub>女院御所<sub>一</sub>、密々有<sub>二</sub>含<sub>一</sub>魚味<sub>一</sub>事、陪膳基輔朝臣、役人諸大夫四五人、皆布衣、大將含<sub>レ</sub>之云々、

廿六日、<sub>庚</sub>天晴、女房參<sub>二</sub>女院御所<sub>一</sub>、密々、用<sub>二</sub>侍從車<sub>一</sub>、共侍兩三人、基輔朝臣連<sub>レ</sub>車、無<sub>二</sub>出車<sub>一</sub>、晚頭歸來、

廿七日、<sub>辛</sub>陰晴不定、入<sub>レ</sub>夜甚雨、酉刻參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>宿候、<sub>同令中、</sub>

廿八日、<sub>壬</sub>天晴、自<sub>二</sub>攝政之許<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>德政之旨<sub>一</sub>、<sub>同令中、</sub>人々<sub>一</sub>申狀、左大臣、余、左大將、帥大納言、堀川中納言等也、書寫了、返了、左大臣、左大將申狀、殊委細也、帥大納

言、只注<sub>二</sub>側記<sub>一</sub>、子細、眼前示<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>了云々、忠親卿只可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>例於外記<sub>一</sub>之由許也、今夜猶宿候、來月八日可有<sub>二</sub>還御<sub>一</sub>云々、

廿九日、<sub>卯</sub>陰晴不定、此日、申刻參院、仰云、雖有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>申事等<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>念誦<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>謁云々、即歸<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>〔宅〕、卅日、<sub>辰</sub>陰晴不定、時々雨降、今日念誦之次、書<sub>二</sub>起請<sub>一</sub>二箇條了、爲<sub>二</sub>滅罪生善<sub>一</sub>、又二世願望成就<sub>一</sub>之料也、

## 八月

一日、<sub>巳</sub>天陰、大將、侍從、相具參院、自<sub>レ</sub>院參<sub>レ</sub>內、<sub>侍從</sub>不<sub>レ</sub>參、入<sub>レ</sub>夜歸來、

傳聞、前幕下、其勢逐日減少、諸國武士等、敢不<sub>二</sub>參洛<sub>一</sub>、近日奪<sub>二</sub>貴賤之領<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>勇武之輩<sub>一</sub>、万<sub>二</sub>倍於先々<sub>一</sub>、然而、隨<sub>二</sub>其郎從等忿怨<sub>一</sub>、或有<sub>二</sub>違背之者<sub>一</sub>、凡不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>、恐運報傾軋云々、又聞、去比、賴朝密々奏<sub>レ</sub>院云、全無<sub>二</sub>謀叛之心<sub>一</sub>、偏爲<sub>レ</sub>伐<sub>二</sub>君之御敵<sub>一</sub>也、而若猶不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>滅<sub>二</sub>亡平家<sub>一</sub>者、如<sub>二</sub>古昔<sub>一</sub>源氏、平氏相並、可<sub>二</sub>召仕<sub>一</sub>也、關東爲<sub>二</sub>源氏之進止<sub>一</sub>、海西爲<sub>二</sub>平氏之任意<sub>一</sub>、共於<sub>二</sub>國宰者<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>上可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>補、只爲<sub>レ</sub>鎮<sub>二</sub>東西之亂<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>付兩氏<sub>一</sub>天、豈可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御試<sub>一</sub>〔也〕、且兩氏〔孰〕守<sub>二</sub>王化<sub>一</sub>、誰

恐<sub>二</sub>君命<sub>一</sub>哉、尤可<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>覽兩人之翔<sub>一</sub>也云々、以<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>、內々被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>前幕下<sub>一</sub>、々々申云、此儀尤可<sub>レ</sub>然、但故禪門閉眼之刻、遺言云、我子孫、雖<sub>二</sub>一人生殘者<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>曝<sub>二</sub>骸於賴朝之前<sub>一</sub>云々、然者、亡父之誠、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不用、仍於<sub>二</sub>此條<sub>一</sub>者、雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>勅命<sub>一</sub>、難<sub>二</sub>〔請〕申<sub>一</sub>者也云々、此事最祕事也、人以不<sub>レ</sub>知云々、已上事等、兵部少輔尹明、所<sub>二</sub>密語<sub>一</sub>也、件男、祇<sub>二</sub>候前幕下之邊<sub>一</sub>人也、貞能、鎮西下向必定、人以爲<sub>レ</sub>奇云々、大略逃儲之料者、

二日、<sub>丙</sub>天晴、傳聞、自<sub>二</sub>駿河國<sub>一</sub>上洛之下人、<sub>大膳大夫信業之郎從、即件人、知行之庄沙汰者云々、</sub>說云、稱<sub>二</sub>賴朝朝臣儲<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>作假屋數字<sub>一</sub>、凡路次之國、糧米經營之外、無<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>云々、

〔三日、<sub>丁</sub>天晴、時々雨下、〕  
四日、<sub>戊</sub>天晴、女房姬君、密々參<sub>二</sub>詣賀茂社<sub>一</sub>、最密々儀也、申刻、頭辨經房朝臣、爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來、余着<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>出逢、頭辨傳<sub>レ</sub>仰曰、亂逆御祈、諸社可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>寄<sub>一</sub>庄園<sub>一</sub>之由、所<sub>二</sub>思食<sub>一</sub>也、何樣可<sub>レ</sub>有事哉、若可<sub>レ</sub>然者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>何社<sub>一</sub>哉、被<sub>レ</sub>檢<sub>二</sub>先例之處<sub>一</sub>、大外記師尙、所<sub>二</sub>勘申<sub>一</sub>如斯、此中、就<sub>二</sub>保元例<sub>一</sub>者、太神宮、八幡、賀茂、日吉等也、<sub>〔件例、被<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>進退官所<sub>一</sub>也、而今度、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>春日<sub>一</sub>之由、〔○段官所<sub>一</sub>一本作彼宮所〕〕</sub>而今度、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>春日<sub>一</sub>之由、叙慮思食、此外、又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>副<sub>二</sub>何社<sub>一</sub>哉、春日以上三社、



松尾、平野、同可奉加哉、又雖廿二社外、有可被加  
稻荷等也之神社者、可令計申（云々）、余申云、保元四社外、  
 被加春日五社、尤宜歟、若被奉加已上者、三社之  
 中、一而難略、其外、住吉社、殊鎮護國家之神明、其名  
 聞異域、其驗新、我朝有加增之儀者、尤可（被）奉  
 加歟、兼又關東諸社、當時不及其沙汰歟、若不  
 有其告者、鹿嶋、香取等社、可然哉、抑愚案之所  
 及、件等宗廟靈社、各剩飽封戶神領、今割狹少之  
 公田、被寄新立之庄園之條、可叶神慮之由、全  
 以不存知、只限永代、可然之神事、佛事等、殊有議  
 定、可被計置歟、此（社等）外、（預）官幣之神明、  
 不及神稅封戶、殆社壇無其形之類、多以御座云  
 云、如然之神社等、且遂修造、且被置少分之社用、  
 自叶神慮歟、此條、雖有恐、愚案之所及、不申  
 出者、付冥顯可招不忠之恐、相計可被奏達  
 者、經房云、此事、前大將、以靜賢法師、所院奏云  
 云、

經房又仰云、耆儒有其闕、成望之儒士六人、敦任、  
中、彼勢上薦維光、中、三名家餘流敦經、中、稽古井、經、式部光盛、  
井、袁老由、敦經、輔之者有、便之由、光盛、  
中、彼勢上薦、井、他人皆經、儒官、帶一職、猶云、顯業實、中、柱下奉  
官、僅職、俾以被、奏招、尤可有、哀憐、井、稽古由、公之由、

在茂、中、祭酒有、便又此等（之）中、專一誰人哉、可計  
爲、菅氏之由、奏者、余申云、所申各見款狀等、所詮、可被撰  
 稽古、又王化者、以無偏爲先、儒官、顯要、共以無  
 登用之者、尤可有哀憐歟、於光盛者、已微臣推  
 舉之者也、其上不能申左右、雖何輩、只可被計  
 仰下事歟（云々）、經房暨談雜事、其中有鎮西事  
 等、（菊池高直使、給國司、肥後國經房知行、  
即高直住國也、使之全無謀  
 反之儀云々、其後退出了、

今夜、有僧事云々、清水寺別當勝朝、叙法橋、院御幸  
 賞云々、又院御息八條宮弟子靜惠、補一身阿闍梨、又  
 阿闍梨一口加置蓮花王院云々、

五日、西、陰晴不定、微雨下、巳刻、參女院、申雜事、來  
 九日、可有還御九條、依無御所、猶以御堂御所  
 爲名、密々可御座賴輔入道南家云々、近日、群盜  
 盛聞、壬壬御所殊有其恐之上、聊有御夢相事、  
可念起給仍可有念還御云々、入夜歸宅、余出行之  
之由也、間、頭辨來云々、不知何事、

六日、庚、早旦甚雨、終日陰、午後微雨、未刻、頭辨來、  
 傳三院仰云、余著直衣關東賊徒猶未及追討、餘勢強  
出逃也、大之故也、以京都官兵、輒難攻落歟、仍以陸奥住

人秀平、可被任彼國史判之由、前大將所申行也、件國、素大略虜掠、然者、拜任何事之有哉、如何、又越後國住人平助成、依宣旨、向信濃國、依勢少軍敗者、全非過怠、志之所及、已不惜身命、忠節之至、頗可有恩賞歟、且爲令勵傍輩也、而其法如何、忽賜越州者、遂其節之時如何、又如只今者、大略爲敵軍被追歸了、其賞預執國、頗無其謂、若可被任可然之京官歟、進退之間、叙慮難決、宜可令計奏云々、

余申云、追討之間事、偏大將軍之最也、而前大將被申計之趣、不可及異議、然者、秀平任與州、何事之有哉、助職事、或授位、有先例也、或任京官、各定無其望歟、賜越州之條、准秀平者、雖爲同事、兩國空失了之條、實可有思慮、此等之外、恩賞之趣、恐案難及、凡此事等、惣以非道理之所推、事已難治、仍不顧後害、不爲謗難、爲成當時事、可被行之儀也、然者、雖被行百千事、不叶彼雅意者、可無其詮、仍重仰合前幕下、任令計申之趣、雖何事、可被定行也、不可及議定、若猶可任京官者、經房云、其家子之由自稱、維繁等之云々、若存凡卑之由歟、余云、源氏平氏之習、雖諸大

夫、皆任衛府、至于助允、此外、恐慮所不單也者、經房不可嫌事歟、經房伏理、云、左大臣申狀云、可被補郡司、賜官符也云々、余云、秀平任宰吏、助職補郡司云々、其思如何、還可令違背彼心歟、經房有甘心之色、此次語云、諸社被寄田園事、法皇不甘心、然而、依爲前幕下意見、無左右可被奉寄、保元四社之外、被加宇佐、春日、住吉等、於東國諸社者、不可然之由、有院宣云々、即退出了、今夕、御幸鳥羽、彼岸之間、可御座云々、經房語云、御筵事令申、御旨叶時議之上、延久例分明、仍被送御筵於最勝光院了、彼堂素有講演、別爲公家御沙汰、不被行云々、辛七日、亥朝雨下、已刻以後天晴、今日、賴輔入道之女出家云々、及晚、竊自件入道宅訪病、依重煩也、傳聞、今日、經房奏人々申狀、依余申進、被仰合前幕下、即被申云、申請佐渡國、可賜助職云々、於許否者、未聞及、或人所告送也、自今日七箇日、彼岸之間、修少念誦、仍不口入雜事、自今日、被始鳥羽成菩提院念佛、恒例事也、去年如無、今年如例年云々、

八日、壬子天晴、季廣來、申女院御所作事之間事、入夜、前右馬權頭隆信朝臣、爲八條院御使來、伯耆國一宮加納之間事也、傳聞、能登國、如法反了、國司郎從、被斧頸了云々、

九日、丑癸天晴、及晚陰、戌刻、女院自壬生御所、還御九條賴輔入道直盧、余參御迎、與大將同車、候御共、但自七條油小路邊、經閑路、先參會九條御所、御幸之儀最密儀、無前驅〔侍〕等候御共、亥刻歸宅、

十日、寅甲天晴、今日、家中有犯土事、仍女房、姬君參女院、此日女院御所棟上也、陰陽助濟憲參、冠、勘申日時、行事院司季廣冠、覽之、余見了返給、持參女院、令覽之、未刻上棟云々、

申刻、法性寺座主被來、數刻談語、參籠葛川之間、奉見隨喜之九利加羅云々、是希事云々、可貴云云、

酉刻、大膳權大夫泰親朝臣來、示天變事、其中、辰星與太白相犯、先太白犯辰星、辰星者、水星也、次辰星犯太白、此變希代也、占文可恐、我朝有もやしけん、近不覺悟云々、披見奏案之處、占文之體、凡可謂

指掌、實嚴重不可說事也、仍爲後鑒、註付之、謹奏、

今月三日丁未晚寅時、太白與辰星、同度相犯、相去二尺所、同九日癸丑曉寅時、殊迫犯、相去九寸所、

謹檢天文要錄云、太白與辰星、闕、大臣爲變誅天子、又曰、太白與辰星、合、天下爲變謀、有外兵內大亂、又曰、太白與辰星、闕、不出一年、其國將軍失地、天子失位、又云、太白與辰星、闕、必有大戰、四夷勝、主人負、武官之將軍犯不出一年、云、其國軍破將死、又云、辰星與太白相近、將軍大戰流血、又曰、辰星犯太白、急約戰、又曰、辰星與太白相闕、其國大戰、客勝主人死、又曰、辰星守太白、其邦主人慎之、又曰、辰星與太白合、東方天兵大戰、

天地瑞祥志曰、握鏡曰、太白與辰星俱出、東、東方有兵、若欲戰、東國勝西方敗、又曰、辰星守犯太白、將死、

右變異、以申聞、謹奏、

養和元年八月九日

從四位下行大舍人頭兼天文博士五位盛俊

從四位下行掃部頭兼陰陽博士安陪朝臣季弘、

正四位下行大膳權大夫安部朝臣泰親、

以變異之占文、見當時之天下、滅亡只在今兩三日

之內歟、天猶不棄我朝、尤有憑、然而、君臣皆不

思社稷、然者、何因披災難哉、悲哉々々、

十一日、卯、天晴、以下大極殿料所引置、八省之材

木上被宛興福寺講堂料云々、世人傾奇無極、講

堂者、長者私所營造也、豈以大廟之材、宛氏寺

之要哉、神慮不可計、人意不可請、未曾有之事

也、不知誰人之所行、言語不及事也、申刻、大夫史

隆職來、談世上事、天下滅亡、在只今明、可悲云

々、

〔以〕院〔應〕官、被遣紀伊國、越中國等云々、依八

條院仰、只進伯耆國一宮加納奉免應宣了、

十二日、辰、天晴、傳聞、足利俊綱有背賴朝之聞、又

秀平有與力官軍之心云々、因茲、京中武士、昨

今之間、聊有稱雄之氣歟云々、賴朝、爲秀平翌之

條謬說云々、又聞、賴朝伐甲斐保田三郎義貞了、有

異心聞之故云々、

十三日、巳、雨降、時々日景見、彼岸竟也、午刻、念誦數

遍滿了、

十四日、戌、雨下、成菩提院御念佛結願、法皇幸仁和

寺、理趣三昧云々、

放生會上卿兼雅卿下向云々、

十五日、己、朝雨、午後晴、去夜、有除目、隆職注進之、

陸奥守藤原秀平、

越前守平親房、

越後守平助職、

此事、先日有議定事也、天下之耻、何事如之

哉、可悲々々、大略、大將軍等、計略盡了歟、此

中、親房事不得心、通盛爲國司下向、忽被

任他人、如何々々、可尋也、

十六日、庚、天晴、依女院御所堀池、爲避犯土、姬

君、侍從等、參御堂御所、晚景歸來、

〔十七日、辛、陰晴不定、參女院御所、入夜歸來、〕

十八日、戌、天晴、陰陽助濟憲、申九月不可葺屋之

由、依不審、問在憲、泰親、時晴等、在憲葺始憚之、

後々不可忌、泰親、時晴等、惣以申不可憚之由、

重道在憲之許了、

今日、親經來、余對面之、



十九日、癸天晴、在憲、注進守通、道言等之勘文、皆始可憐之由也、以其趣、重問、遣泰親、時晴等之許了、兼雅卿參女院御所云々、

廿日、甲子天晴、侍從良經者布衣、花開袴衣、付白裏若白下袴等也、紅

參院、雖欲被召御前、御雙六始之間、暫可祇候之由、依有仰、數刻祇候、及晚頭、猶御雙六不終、仍依定能卿相計、退出了云々、前驅二人着布衣、騎馬在車後、又侍二人、童一人、衛府長忠武等也、基輔朝臣、宗雅等在共、

入夜、覺乘得業來語云、以大極殿材木、欲被造興福寺之處、依余申行、其事停止了、仍講堂年內不可出來、因茲、大衆等、甚遺恨之由、內々令申云云者、此事無極無實也、自公家、無尋長者、又不被問、付何可申是非哉、以此旨、儘可被披露之由、可傳申別當法印之由、仰含了、此事、內心雖不甘心、依無尋不及申止、而有此風聞、甚以難堪歟、

廿一日、乙丑天晴、泰親朝臣來、申天變之間事、去十八日戌時、月犯畢口星、五寸天子慎、大將軍慎、內裏

火事等也、又有天子誅邊將之文、當此時、尤有其恐者、歟、又君使於道路、可死云々、是又似有追討使之厄歟、同廿日寅時、月犯天關、七寸女主慎之、又天子、將軍等慎云々、申刻、參女院、入夜歸來、

〔廿二日、丙寅〕

廿三日、丁卯

廿四日、戊辰天晴、參女院御所

廿五日、己巳天晴、早旦、實殿阿闍梨來、談世間事等、午刻、大外記賴業持來、群書治要抄三ヶ局、先日、爲直點所下賜也、召簾前、談雜事、公卿意見之中、隆

季申狀云、追鳥羽院御時例、可被行天下政之由云々、此事尤足嘲歟云々、及晚、定能卿來、今夜、大

將女房向大納言許、爲加灸治也、最密儀、侍少々在共、但出車自是催送也、

廿六日、庚午天晴、參女院御所、見作所

廿七日、辛未天晴、今晚、家女房見吉夢云々、此日、家政所侍等、所宛也、以政朝臣、秀廣等、補家司了、下

家司親弘、補大從、雖無官之者、依補年預也、

〔父親重、去六〕月被了之故也、

廿八日、壬申天晴、自今日、有五體不具之穢、七箇日也、

廿九日、癸酉雨下、此日、法皇御子宮、山座主明雲爲受戒、登山、院殿上人廿人前驅、各吉服、盡善、但不着紅紫衣、并繡織物等云々、公卿六人扈從、此外、有識已下僧廿人前驅、僧綱六人扈從云々、見物車挾路云々、天下亂逆之中、亮闇之間、吉服之晴、誠可謂物狂者歟、可彈指之世也、

### 九月

一日、甲戌天晴、申刻、參女院、入夜歸來、  
二日、乙亥天晴、傳聞、北陸道賊徒熾盛、通盛朝臣、不能征伐、加賀以北、越前國中、猶有不從命之族云々、  
三日、丙子天陰、微雨、傳聞、右大辨重方、出家入道云々、  
〔々〕、日來病惱難減氣、猶遂素懷云々、  
四日、丁丑天晴、自今日、院中有供花、如例年云々、  
五日、戊寅天晴、法皇、來十一日、欲參詣天王寺、而依前幕下制止、不能遂其事云々、  
六日、己卯天晴、早旦、全玄僧正來、爲示合法眼灌頂事、所招也、傳聞、熊野權別當湛増、起坂東了云々、  
申刻、參女院、入夜歸來、鎮西謀反殊甚、菊池與原田、元雖怨敵、已和平、同心欲訪貞能、々々逼留備

中國、望申兵糧米云々、

七日、庚辰天晴、大將、侍從、密々有連句、七十自東國、

所奉太神宮之告文、尹明持來、披見之處、文章甚

逆、誠足嘲者歟、但被敵勝親王宣、併卜書載此事、

尤不審、爭進神明之告文載虛誕哉、又其狀云、雖

平家、於順王化之輩者、可施神恩、雖源氏、於

蔑朝威之族者、可蒙冥罰之由、所書載也、此

事、頗非夷狄俘囚之所爲歟、尤有疑、但見狀體、偏

山寺法師之所行也、然而、於意趣者、頗似恐神威

朝憲歟、

今夜、頭目、明日可始念佛之故也、

左大將示送云、文章生宗業申、方略學問料等、若有諸

〔詢〕者、可然之樣、可計申者、

八日、辛巳天晴、申刻、攝政被參女院、雖被示送可

謂之山、稱障不參、酉刻、佛殿聖人來、授戒、恒例事

也、其後入夜始念佛、今夜只千反也、今日、書天王

寺西門額、送座主許了、

今日、招慶俊阿闍梨、七宮弟示送法性寺座主灌頂之

間事於七宮等、條々子細等、具示之、件僧、彼房無雙

之龍人也、

光盛取進宗業款狀、以目解、可被許方略之由也、若又學問料可足云々、

九日、壬午天晴、今日念佛四萬九千反、傳聞、通盛朝臣

爲越前、加賀國人等、頗被敗了、已企上洛云々、但

實說可尋之、又聞、此事一昨日所聞、忘却今日記之熊野湛増、付使

人進書札於院、是雖向關東、全非謀叛之議、奉

爲公不可有僻事云々、此申狀不審尤多歟、

十日、癸未天晴、通盛朝臣之軍兵、爲加賀國人等、被追

降事一定云々、仍引龍津留賀城、申可副軍兵之

由、仍欲遣武士等云々、

今日、念佛七萬反、

十一日、甲申天晴、傳聞、教經、教盛行盛等、爲副將軍、可

下向北陸道、又重衡卿等、可赴東國云々、

今日、念佛七萬反、

十二日、乙酉天晴、入夜雨下、右中辨兼光、爲攝政使

來、然而、依爲念佛之間、稱物忌、自門外歸遣了、

來十六日、可來之由、仰舍了、

今日、念佛七萬反、

傳聞、通盛逃津留賀城、交山林了云々、但實說難

知、經正朝臣猶在若狹、全不越國境、通盛待口

件朝臣、欲寄之間、遲々、遮被追落了、經正不覺之所致之由、世以謳歌云々、

十三日、丙戌雨降、傳聞、北陸道追討使、下向未定者、不

知、由緒、維片時可被忍下事歟、

今日、念佛十萬反、

入夜、右中辨兼光、送興福寺食堂供養、并可被行

維摩會之間文書一結、相副依昨日仰舍也、折紙

十四日、丁亥陰晴不定、今日念佛十萬反

十五日、戊子陰晴不定、今日早旦、請佛嚴聖人受戒、

念佛結願之日、殊可潔齋、又重可持禁戒之故也、

又立大願七ヶ條、誓願出離生死、生極樂之趣、具

在別、今日、念佛四萬反、七箇ヶ日之間、并五十二萬

反也、

十六日、己丑天晴、大外記賴業來語云、去十一日例幣之

次、欲被奉鐵冑於太神宮、而依不調出、於神祇工等所後日、不能進、同十四日、被奉遣了、但不被

載例幣宣命、又無別宣命、又殊儀不聞、只付神祇

官、被送遣了云々、是天慶之例、被進件冑之由、

神宮注進、官文書之中、無所見云々、此次密語云、四

方之賊勢甚強大、官軍非可敵對歟、若然者、奉具

三

至尊時、山已下、爲宗之臣下等、定令西行、歟、萬人只以彼期、可爲限歟、可悲云々、

十七日、庚天晴、自七宮之許、慶俊阿闍梨來被示、先日返事也、傳聞、八條二品女房、於其家春日若宮、令託給、有種種託宣、平家可滅亡之由也、恐此事、以同女房、令參春日、又於寶前、有神託、即鹿島賢所小神也、託宣云々、大明神可令歸鹿島給之由、御使也云々、去朔比事云々、〔又〕三笠山有大光物云云、

十八日、辛天晴、未刻、向新造之所、見作事、次參女院、戌刻、頭辨經房、爲院御使來、問兩條事、

一伊勢太神宮伊裝宮、爲熊野賊徒被追捕之間、寶殿破損、仰官司、可被造替之處、依申、功程莫大、其力難及之由、可被付成功也、而所望之輩六人、各雖有子細、不遠悉注、此中、以何可爲專一哉、宜令計奏者、

下官申云、或本宮司、募還任之功、或先補神祇副之後、可〔申〕造進之由、或權宮司、募申最之闕、皆以難被許、大中臣基親、祭主親基二男、申募神祇副功、可造營之由、尤穩便也、更不可及異儀〔者〕、

一給料季光、文章生宗業等、申方略、但季光申云、其身爲第一給料、而被超越通業、賴範等丁、尤爲訴訟、隨以儒舉所申也、尤可有哀憐者、宗業申云、身雖非重代、學已疲稽古、是世人之所知也、優文之世、豈不求名譽哉、但若方略難被許者、給料可足者、兩人申狀如此、是非如何、將可被登用兩人歟、可令計申者、

下官申云、方略者、奇代之恩賞、又道之規模也、容易難被許歟、季光超越之愁、雖似有余、惜強無名譽之聞歟、恩許之條、難申左右、宗業雖有名譽之聞、無儒譽、以自解被許方略之例、可有尋歟、季光者重代也、給料也、被儒舉列試衆、有四箇之理之上、抱超越之愁、而宗業非其人、無儒譽、乍並帶數箇之由緒、季光被抽賞、凡種〔々〕宗業頗非正道歟、但被崇儒學之習、以秀其道之者、可爲先、百千之理枝葉花葉也、才漢拔〔等〕輩者、登用有何難哉、器量之條、眞僞普可被尋歟、於微臣者、未見之士也、仍難申一定、此上可有勅定者、

此次經房、談語天下事等、余雖有憚、所存粗示聞



了、爲散其辭也、太無山事歟、經房頗有服膺之氣歟、良久退出了、次余歸參御前、其後退出了、今夜、焚惑犯哭〔星〕七寸所、尤可恐之變也、依有必字也、

十九日、壬晴、傳聞、君臣引率、可赴海西之山、已被一定了、然而、故不及他聞、卒爾可有其儀云、天下只在此時歟、可悲々々、

申刻、參女院、此次見廻作所、

廿日、巳晴、晚頭、參女院、入夜歸來、此日、自女院、以定能卿、被歷御覽於法皇〔之〕書御處分狀也、卽有御報、傳聞、東國、北陸、共以強大、官軍壯弱云々、

廿一日、甲晴、早旦、實嚴閣梨來、巳刻、佛殿上人來、各仰付祈事等、實嚴云有最吉夢云々、傳聞、被獻於太神宮、之勅使神祇大副定隆、祭主親隆嫡子於途中頓死云々、未曾有事也、

廿二日、未天晴、昨今精進、轉讀心經一千卷、奉法樂春日、入夜、法性寺座主來、終夜雜談、此日、權辨光雅朝臣爲攝政使來云、爲被遂行維摩會、移安講堂之佛新造、於金堂、牛作、被開眼之間、長者不可被

知歟、如何云々者、余申云、一向被逐永承例者、只可被付寺家也者、

廿三日、丙天晴、今曉、獻幣帛於春日社、加五兩以基輔朝臣爲使、取密々儀、不令人知之、亮闇中、

無恒例幣、中古以來例也、上吉、有然、依別願、臨時率幣、不可憚之山存之、加之、此事、一切不令

知人、仍竊所獻也、余着束帶拜之、先有被、即手自書告文、草同余所作也并願書等付件朝臣、於寶

前可讀申也、

廿四日、酉雨降、定能卿來、談雜事、相少納言入道、又被搦取了、是資賢卿之許、〔件人〕、一兩度來臨、因

茲、兩人成談議之由、世間之人、令沙汰云々、爲恐其思、資賢卿搦出件入道、元爲資賢卿其間、所從

侍自害云々、如此之間、資賢深成恐云々、又云院御祭〔御鏡〕、於途中破〔裂了〕、被行御占之處、重御

慎云々、尤可恐々々、

今夕、基輔歸洛自南都、參詣之間、每事相應、讀申告文之間、信力殊發云々、可悅云々、傳聞、大和國前

大將庄、大福庄也爲源氏稱三川三郎被燒了云々、奈良惡僧少々相交云々、

廿五日、戊天晴、但時々小雨、酉刻參院、依召參御前、被仰天下事等、所存等、粗奏達了、雖有其恐、思而不奏者、不忠之恐如何、愁所奏聞也、

今日、文士一兩會合、大將、侍從等、有連句之興、先五十四

〔廿六日、己天晴、申刻、參女院、先見作所、入夜歸來、〕

廿七日、庚天晴、戌刻、右大辨經房朝臣、爲拜賀來、職事國行申次之、衣冠拜之後、出客亭謁之、今日招

至玄僧正、示合七宮處分之間、法性寺座主、頗有其怨之由、風聞之間事、

今夜有光物云々、行盛朝臣、今日出門、可赴北陸云々、

廿八日、辛雨降、傳聞、熊野法師原、一同反了、切塞鹿背山、因之、賴盛卿爲追討使、可下向之由、被仰

下了、紀伊國、爲被仰知行、又高野御山、聊有騷動、源氏武士、少

少籠件山云々、又聞、東國之輩、上洛在近、已及參河尾張等、仍前幕下郎從等、且遣伊勢美濃等方云云、

廿九日、壬陰晴不定、源中納言來、談世間事等、傳

聞、前幕下西行事、忽不可然、關東已攻來之時、可有其儀云々、又前大將、不可知天下之事之由、令起請了云々、

卅日、癸陰晴不定、大外記賴業來、余令見三略、依申未見之由也、是有張良一卷之書、疑之文也、此

次、賴業云、一昨日自前幕下之許、被送使者、〔剩而〕令謁之處、被示云、天下事、於今者、武力不可

叶、可廻何計略哉、太神宮、被行臨時祭一事如何、又任阿育王例、被造八萬四千基塔如何、此兩

條之外、有善政、可被行者、可計示者云々、答云、臨時祭事、可被尋本宮之輩、祭主、宮司等也、

他人難申左右、又八萬四千基塔事、偏可在御意、此外善政、又不可叶、但變當時之政、可被試驗、不

然者、尤可危歟、於其法者、不能定申、卿相已上、可被計申事也、只以被罷諸人訴訟、可爲詮也、

此事、定有被尋申事歟、且爲御用意、密々所申上也云々、又云、東大寺勘文等、太略付職事了、來

月四日、可有定云々、去比、參左大臣亭、被命云、閣下雖無御參、可覽勘文云々、又可被歸始東

大寺大佛事、先日、被任造寺長官等之次、被勘

日時、來月六日云々、理須發遣八幡奉幣使、并山陵使等、之後、被<sub>中</sub>造始<sub>上</sub>歟、然而、期日已<sub>レ</sub>迫、次第之沙汰、不可<sub>レ</sub>叶、仍可<sub>レ</sub>延引<sub>レ</sub>哉否、職事内々猶豫云々、然而、<sub>レ</sub>左<sub>レ</sub>府猶六日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>鑄始<sub>レ</sub>之由、被<sub>レ</sub>執云々、

〔養和元年冬 歲次辛丑、〕

十月〔小〕

一日、<sub>辰</sub>陰晴不定、今日、女院御所、被<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>門、爲<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>犯士、女房、姬君參<sub>レ</sub>御堂御所、密々、大將、侍從有<sub>レ</sub>連句興、範季候<sub>レ</sub>座、入<sub>レ</sub>夜、攝政被<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>維摩會料幡二流、來七日可<sub>レ</sub>縫出<sub>レ</sub>云々、職事光兼爲<sub>レ</sub>使來、答<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>了之由、

二日、<sub>乙</sub>天晴、申刻、頭辨經房朝臣來、余依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>風病之氣、隔<sub>レ</sub>障謁<sub>レ</sub>之、經房傳<sub>レ</sub>院宣云、天下亂逆、於<sub>レ</sub>今者、及<sub>レ</sub>獲麟<sub>二</sub>年<sub>一</sub>、武略難<sub>レ</sub>及、德政不可<sub>レ</sub>叶、猶可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>別御願等<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>幸於太神宮<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、思食如何、但當時不可<sub>レ</sub>叶、先可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>其由<sub>二</sub>也<sub>一</sub>、而亮闇中、公卿勅使無<sub>レ</sub>例、又發向之間、驛家雜事等、其煩太多、旁不可<sub>レ</sub>然歟、只以如<sub>レ</sub>神祇官人被<sub>レ</sub>申之條事、似<sub>レ</sub>容易、爲<sub>レ</sub>之如何、兼又云、於<sub>レ</sub>太神宮、被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>御神樂<sub>二</sub>如何<sub>一</sub>、此等之子細、宜<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>計奏、<sub>大外記師尙申狀相具、所持來也、其狀令<sub>レ</sub>余申云、行幸之條、無<sub>レ</sub>左右<sub>二</sub>載<sub>レ</sub>宣命<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>申之條、猶可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>其恐、若可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>御願<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、事已爲<sub>レ</sub>新儀、神應之有無、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>靈告<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申歟、但所詮、觀念無<sub>レ</sub>左右<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>臨幸<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>一決<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、更不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub></sub>

議定、早可候也、於〔及〕御猶豫者、以短慮不能申是非事歟、後朱雀院御時、神鏡燒損之時、此條雖似〔有〕短慮、依無先規、不被遂之、又師尙所勘申之聖武天皇行幸伊勢國之例、敢不足因准、行幸伊勢國關宮之次、以使者被獻幣於神宮云々、仍旁今就之思之、若可有行幸者、何被獻幣許哉、仍難申可有行幸之由者也、御神樂之條、又以難申左右、且被問本宮、可被左右歟、抑世上之爲體、已非直之事也、百千之事、全不可叶事要、凡依政之理治、致國之安否、佛天之所照、神明之所鑒、云々君云國、豈棄置哉、今須天下致太平之後、可反政於淳素之由、起自法皇之短慮〔可〕被立潔〔白〕之御願也、此外事、一切不可答天意〔歟者〕、經房有甘心之色、又仰云、法皇參詣神宮之條如何、余云、此條如行幸、只可被任短慮也、不能申左右者、經房退出了〔也〕、及晚、見廻造作之所、又參女院、入夜歸來、今日、蓮華王院總社祭試樂被行、略儀云々、

三日、丙午天晴、及晚雨下、酉刻、大夫史隆職來談云、來六日可被銚始東大寺御佛、仍行隆相共、明後日可下向南都者、今日又有小連句、

今日、蓮花王院總社祭、有相撲等云々、

四日、丁未天晴、傳聞、來十一日、知盛、清經等可向越前國、重衡可向赴東國、東海道、東山道、維盛昨日下午向近江國、是猶可襲北陸道之手云々、賴盛卿、可下向紀伊國云々、

五日、戊申天晴、大外記賴業告送云、去夕、東大寺定延引了、左府、左大將、宰相中將二人、實守、通親、參陣、依公卿員少、令行隆申攝政、延引了云々、明日、六日、可被奉銚始大佛〔螺〕髮云々、晚頭參新造所、即參女院、此間、定能卿來、余先日可奏聞之由、所示付之趣、今日得便宜、具奏達了、是有隱遁之思由也、勅答云、近日、天下不穩、忽不可思立歟云々、余有所思、奏此由也、仰之趣又可然歟、今夕、明經博士仲原廣季初參、今日、以季長返獻幡二流於攝政、先日、爲縫調、所被送之維摩會料幡也、

六日、己酉天陰、時々雨下、大將、侍從有連句〔之〕會、文士四五許遣會合、尤候百韻、大將十八侍從七、又密々有詩、冬〔來〕賢士家、心字、傳聞、海道、山道、共自與、武士等出來之由風聞云々、

自今日、法皇御參、籠蓮花王院云々、

七日、庚戌天晴、參女院、攝津守橘以政、補家司之後、



今日始申吉書、

八日、辛亥天晴、或人云、相少納言宗綱法師、於前幕下許、被<sub>レ</sub>糺問之處、申<sub>二</sub>宮在所不<sub>レ</sub>知之由、但慥御見存之由、所<sub>レ</sub>承也云々、其後預<sub>二</sub>賜左衛門尉定賴<sub>一</sub>、貞能遣備〔中〕國了云々、

九日、壬子天晴、未刻許、參<sub>二</sub>新宮造之所<sub>一</sub>見廻、即參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜歸來、先日或人云、去比有<sub>二</sub>天變<sub>一</sub>、官軍可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>力之趣也云々、依<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>泰茂<sub>一</sub>問<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>之處、申云、法勝寺修行能圓、問<sub>二</sub>此事於業俊<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>承也、若誅<sub>二</sub>邊將<sub>一</sub>之由變異歟、其外、官軍可<sub>レ</sub>勝之變不<sub>レ</sub>見云々者、余粗示<sub>二</sub>邊將之子細<sub>一</sub>、泰茂伏<sub>レ</sub>理、凡謂<sub>二</sub>邊將者<sub>一</sub>、大國之法、爲<sub>レ</sub>鎮<sub>二</sub>四夷<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>京都之外<sub>一</sub>之將軍、以<sub>レ</sub>之名<sub>二</sub>邊將<sub>一</sub>、即唐之安祿山之類也、以<sub>レ</sub>之謂<sub>レ</sub>之、非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>誅<sub>二</sub>賊徒<sub>一</sub>之變、殆追討使、還可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>處<sub>二</sub>謀反<sub>一</sub>之變異也、而就<sub>二</sub>邊字許<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>賊首敗績之祥<sub>一</sub>之由、伺天等令<sub>二</sub>存知<sub>一</sub>歟、太以爲<sub>レ</sub>恐々々、

東大寺奉加之聖人、廻<sub>二</sub>洛中諸家<sub>一</sub>請<sub>レ</sub>之、奉始法皇、不論其說、女院御奉加銅十斤、他所或錢一千貫文、若金六兩云々、

十日、丑天晴、雨息、連句會、密々事也、及晚雨下、或人云、越前加賀等武士、開<sub>二</sub>所<sub>一</sub>切塞<sub>二</sub>之路<sub>一</sub>、國內無人云

云、若可<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>入官兵<sub>一</sub>之謀歟、還有<sub>レ</sub>怖之由、人々令<sub>レ</sub>云歟、明日官軍下向延引、來十三日云々、先日所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>定之手々相違、知盛卿不下向云々、北陸道、知度、清房、已上故禪門、此外、重衡卿、資盛朝臣等、野宇美越<sub>二</sub>同<sub>一</sub>、于息等也、可向<sub>二</sub>北陸<sub>一</sub>云々、維盛、清經等朝臣、可<sub>レ</sub>兼<sub>二</sub>海道<sub>一</sub>、山道、賴盛卿息二人、可<sub>レ</sub>襲<sub>二</sub>熊野方<sub>一</sub>、前幕下、教盛、賴盛、經盛等、可<sub>レ</sub>護<sub>二</sub>洛中<sub>一</sub>、已上勢、相并不過<sub>二</sub>五六千騎<sub>一</sub>、而手々相分、各々行向者、京中〔武士〕僅四五百人歟、頗非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所恐云々、維摩會行事辨兼光、今日下向云云、

十一日、甲寅陰晴不定、傳聞、熊野行命法眼、稱<sub>二</sub>南法眼<sub>一</sub>、熊野輩之中、只一人有志<sub>二</sub>於<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>之間、散々被<sub>レ</sub>伐落<sub>二</sub>了<sub>一</sub>、僅雖<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>身命<sub>一</sub>、子息郎從、不<sub>レ</sub>殘<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>伐取<sub>二</sub>了<sub>一</sub>、其身雖<sub>レ</sub>交<sub>二</sub>山中<sub>一</sub>、安否猶不定云々、是云<sub>二</sub>志賀在廳之者所爲<sub>一</sub>云云、於<sub>レ</sub>今者熊野方一切無<sub>二</sub>異途<sub>一</sub>、一統了云々、又聞、追討使等、今日〔下向〕延引、來十三日猶未<sub>二</sub>了<sub>一</sub>、定云云、越前國無人之由有聞、謬說云々、殆其勢及<sub>二</sub>數萬<sub>一</sub>之由、今日所<sub>レ</sub>逃〔上〕之下人、令<sub>二</sub>談說<sub>一</sub>云々、今日、兼雅卿參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、來<sub>二</sub>大將方<sub>一</sub>云々、

十二日、乙卯陰晴不定、申刻見<sub>二</sub>廻作所<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>其參<sub>二</sub>女院<sub>一</sub>、

入夜歸來、定能卿來、談世間事、

十三日、丙辰陰晴不定、女房參女院御方、

今日、追討使等可下向云々、而延引、來十六日云々、

傳聞、吉野法師原、可向高野釋法論之旨、成風聞、

其實、打入南都、誅伐平家郎從等、其後可入洛之由謳歌、此條、雖不知實否、於衆徒蜂起者一定云云、

十四日、丁巳天晴、及晚少陰、巳刻、院藏人來催云、來月

十八日可被供養八萬四千基塔、其內五百基、可

令造進、寸法五寸云々、各可奉籠寶篋印陀羅尼

一反云々、未刻、長光入道來、日來在播州之所知、

爲營祖父明衡朝臣忌日、并其息光經朝臣忌日共今月十八日也、

等、所上洛也云々、大將、侍從等、有連句會、及晚

見廻作所、又參女院、及三更歸來、

十五日、戊午陰晴不定、兩息有連句會、陽唐百廿韻、長光入

道、光盛已下、文士七八許輩、密々事也、大將、侍從同

數也、共十四韻、

入夜、余及二息除服、余先向川原解除了、更大將、

侍從等同車、同出河原、陪膳皆季長朝臣所勤仕

也、陰陽師憲定、兩人雖同車、於祓者、人別兩度修

之云々、

又女院御方、於御所中在之、并此姬君、家中依無便宜、乘

陪膳、同所除服也、是故中攝政落胤女子去比所死去

也、

十六日、未巳天晴、及晚參新所、見廻、即參女院、入

夜歸宅、或人云、貞能平鎮西之輩召具、可上洛

云々、又所遣秀平許之大宮亮、獻使者、秀平可

候官軍方之由、進領狀云々、

十七日、申庚天晴、早旦以使者、示遣法眼昇進事於

泰經朝臣許、今夜、侍從方、庚申之次有連句和歌等

事、

十八日、酉辛天晴、重宗法師申女院御所作事、其力難

及之由云々、仍尋遣子細、今夜、智詮阿闍梨、下

自熊野、

十九日、戌壬天晴、智詮來、語熊野之間事、委細不能

注、以季長朝臣、示送松山庄事於左中辨親宗之許、

以政欲寄進院御領之間事也、

女房聊不例、

廿日、亥癸天晴、晚景參作所、參女院、即歸家、女房不

例同前、問占之處、土公、鬼氣等祟云々、今日、日次不

宜、明日可修祭、八萬四千基塔事、自院廳催女  
院廳、載院宮於廻文一紙云々、此女院御分五百基  
云々、

廿一日、甲子天晴、今曉、有吉夢、今夜、新御所御祈、陰  
陽助濟憲朝臣、令修王相祭、依吉日也、今夜使漏  
刻博士憲成、令修土公鬼氣祭、但女房今日減了、今  
日、有東大寺定云々、

廿二日、乙丑天晴、申刻、參新御所、并女院、入夜歸來、  
源納言示送云、去夜、東大寺定、依所勞不參、但左大  
臣、左大將、源大納言輔、堀川中納言、右宰相中將、源  
宰相中將等參入、可有廢朝之由有定、又廣季勘  
文、有禁忌之由、左大臣被難云々、

廿三日、丙寅天晴、大將、侍從等、有連句會、〔支脂〕光  
盛、尹明已下、文士六七許輩、其後有詩、〔葉落〕山路、  
光盛作優美也、白今日、於新御所、被始宅鎮法、  
不動、以實嚴爲大阿闍梨、

廿四日、丁卯天晴、大將聊有風病之事、不及殊大事、  
來月二日、御移徙事、有沙汰、依最略、不及定文、  
〔又〕公卿不被催、殿上人不可及廣、可着布  
衣〔吉服〕云々、雖申爲衣冠之由、無御承引、但

可有黃牛、反閑、五菜等云々、奉行基輔朝臣、兼親  
等也、

廿五日、戊辰天晴、參新御所、

今日、濟憲於新御所、修大將軍御祭云々、今日、史  
持來定考餅、并大乘會日時僧名、

廿六日、己巳天晴、本命日泰山府君祭也、五位藏人親經  
來、依疾不謁、非指公事云々、

長光入道來、來月上旬、可下向播州云々、

大將平愈了、爲悅々々、

廿七日、庚午陰晴不定、及晚雨下、見廻新御所、傳聞、  
於天台山所被修之五壇法、〔合戰調伏〕降三世阿闍

梨覺讚法印、去夜頓死、人以成奇、前幕下有興達之  
氣色云々、誠有其恐事也、或人云、賴朝必定已企

上洛、去廿一日、尾張保野宿之由云々、然而、

兩三日延引帳、いかに、入洛は決定、於竹園

者、奉留置相模國、以上總國住人廣常〔稱介〕奉守

護云々、行家已入尾張國內云々、又聞、北陸道去廿

四日欲襲攻、然而、依無勢、又延引、年內不可及

合戰云々〔也〕、

今日、大將獻揚馬於攝政御許、〔以國行爲使〕依被乞也、

自今日、於新所、被行仁王策勝兩講筵、限三ヶ日、  
僧各三口、

廿八日、辛未風吹、陰晴不定、自今朝、有五體不具之穢氣、境節太無骨、然而、御渡之間、有神事御祈等、仍不出仕、今日自攝政之許、賜馬一疋於大將、昨日馬之替歟、

## 十一月

一日、癸酉陰晴不定、乍乘車、參新御所門外、作事未及半、然而、明日猶可有御渡云々、

二日、甲戌天陰、雨下、但入夜雨止、此日、女院新御所御渡也、非、管不用移徙之禮、遷幸之儀、殊以省略、上達部無催、殿上人不及廣、僅十餘人、各着布衣、雖作事未成、世間物騷之上、今日爲上吉日、仍強所渡御也、且又於來月者、依先度例不快、被忌避之故也、余自申刻、及亥刻、乍乘車參門外、沙汰雜事、畢歸宅、

亥終有渡御、大將半部車、車副牛童各布衣、依程近、人々步行也、大將着直衣、在御車後、召基輔一頭、忠武、敦直等、爲備、先例、近衛官人勅之、然而、略儀之時、若布衣、隨身引、故殿御時、度々例也、仍追被跡、反閑濟憲朝

臣、引導判官、基輔一人付御車、依可申吉書、季經朝臣、代能樂、四位別當季經一人也、仍雖五大將寄御

光長等、取松明、依例、當召加光長、車下御之後、於南面供五菜、其後、基輔申吉書、

人々退下、大將雖須今夜宿仕、依衰日、不宿也、

余依穢氣不參、攝政雖可被參、依密儀被止

歟、無所々變膳、基手帝、女房衝重、凡萬事、略之中略

也、御所之體、又以輕々也、只雖如形出來、渡御以

之爲事歟、今日、出車二兩、顯信朝臣、盛定等也、

女房不著打衣、表著等、只狩衣、濃袴許云々、

三日、乙亥陰晴不定、寒氣殊甚、拂曉、女院還御、依半

作、可急造畢之故、一宿之後、即有還御也、先例如

此之時、更不撰日次云々、

四日、丙子雨下、及晚天晴、參女院御方、泰經、親宗等、

各告送云、此法眼昇進事、昨日雖奏驚、不許之由、

示送之、

五日、丁丑天晴、早旦、送書狀於泰經朝臣、示法眼所望

事、頗書載子細者也、只今參院、伺御氣色、即可參

啓云々、申一點、泰經朝臣來、依穢氣、於緣邊、謁

之、余在簾中、泰經云、以今朝之書札、具以奏聞、

法印事、已有勅許云々、恐悅無極、此次、示七宮門



跡之間事、寔以談語、泰經退出之間、以基輔傳院宣云、伯者國御厨年來、故女院御領也、被付國之條、不當事也、然而、國體不便、仍不及沙汰、而近年、院中無物、於事失便宣、件御厨、可令進年貢、若又可被縮町數、可被仰付他人歟云々、左右、只可在勅定之由、令申了、此事、甚奇異也、不能是非歟、入夜、親宗、泰經等、告送法眼被叙法印之由、悅思無極者也、

六日、寅天陰、雨下、早旦參院、付泰經朝臣、申入慈圓被叙法印之慶、仰云、此事、素非不許之儀、故不能畏申、又可調之處、今夕入今熊野精進屋之間、有取亂事云々、即退出、戌刻、七宮入滅之由、法印被告送、即遣使者、兼親、歸來云、今夜竊奉渡圓良法印雲林院房、是遺言云々、明夕可有葬禮云々、僧事、昨日依不催出、上卿、今夕被行云々、

法印慈圓、

權少僧都實圓、

權律師忠快、

玄理、辭少僧都、申任之一

今日、大將、侍從有連句會、眞珠、百韻、又密々講詩、題云、白雲飛詩席、七日、卯雨下、參女院御所、未作之所甚多、加催促、

今日申、七宮門跡事、無動寺、三味院、成就院、可被宣下之由於

八日、辰陰晴不定、七宮門跡事之內、三味院、成就院、且可被宣下無動寺事、實寬有申事、可被尋決云々、

九日、巳雨下、參女院御方、御覽新御所、候御共、今朝、全玄僧正來、示七宮後房之間事、

十日、午陰晴不定、今日又兩息有連句會、先仙、百韻、又密々有詩、題云、寒月映籠帷、取觀、七宮門跡兩方事、今日被宣下云々、

十一日、未雨下、依亮閣、雖不獻幣帛、依先例、嘉承、云、神事、猶神事也、

十二日、申天晴、奏無動寺事法印有理之由於院、本願相應和尙起請文、不論上下薦、以常任之人、可執當之由、所被載也、實寬申檢校可付一和尙之由、有本願之起請之旨、爲詐僞之條、爰而炳焉者歟、仍以此趣奏聞、以季長遣泰經朝臣許也、即歸來云、此事、更不可及、議、實寬儘可付一和上之起請、在寶藏之由令申、仍所被尋彼狀也、若有其狀者、此申文可無所據、又無彼起

請者、此申文尤可爲證、早以此旨、可申披、所詮、只可依實寬申起請之有無也云々、藏人權佐光長來、召簾前、談雜事、給料季光、成光方略文章生〔生〕宗業、凡卑者也、但有才名聞、給學問料云々、其以天下之所不許也、但宗業者、才學文章相兼、名譽被天下、仍被抽賞、〔優〕文學之道可然云々、春日祭行事辨、被催行隆之處、申依兵糧〔米〕奉行事不能下向之由、然而被追下了云々、

今日、遣職事一人、其清并陰陽師等於河原、修由被例也、去一日、梅宮祭、忘却不由被、尤不敵々々、傳聞、依憚大將軍方、年內關東之賊、不可入洛、節分以後、無左右可入洛云々、

十四日、丙戌天晴、及晚風吹、午刻、大外記賴業來、呼前談雜事、語東大寺勘文之間事、明經道勘文有兩條難之由、左大臣被示、其難甚無謂云々、又賴業勘文、實守卿難之云々、通親卿讀勘文、書定文、發語、一身兼三役云々、又所持來一羣書治要抄三局九十一、也、先日爲直點下給之也、又自十二至十五、四ヶ卷給了〔也〕、

申刻相具女房、參新御所見廻、此間隆職來、云々、

十五日、丁亥天晴、參新御所見廻、即歸來、相應和尚起請文、法印被尋出了、披見之處、不可依上下薦之由炳焉、於任所司之條、可守薦次之由載之、但除被衆讓之者云々、然者此條猶偏難、因薦次、況於寺務領掌之職者、勿論々々、實寬謀計、言而有餘、不可說之事也、仍內々以此子細、示遣秦經之許畢、

十六日、戊子天晴、大原野祭也、仍遣職事陰陽師等於河原、由被如例、神齋又如例、

十七日、己丑天晴、參新御所、無動寺事、法印申狀以基輔、示付秦經朝臣了、

〔十八日、庚寅天晴、參女院新御所、猶半作、甚不便々々、〕

十九日、辛卯天晴、午刻許參新御所見廻、大略作事、未終功之事、裝束等事調具了、及晚參女院、即歸宅、猶以有之、

戌終許、更着烏帽直衣、參御所、即御幸、余及大將、寄御車、大將冠直衣、亮間也、總人々皆着亮間服、殿上人、常祇候男共十人許也、御車、大將網代車也、殿上人乘松明前行、余及大將候御車後、

行、於新御所、又兩人寄御車如初、下御之後參御前、兩人共預酒膳、於大將方、召御所行事季廣、給衣一領、余衣、又召重宗法印、森殿已下、御所遣替之、

也。子小冠、兵衛〔尉〕給馬、隨身兼重爲令、感重宗巧莫大之由也、亥終許退出、今日出車二兩、基輔、盛定、大將女房候御車、大將方出車又二兩、召家司職事車也、今日非渡御之儀、不申吉書也、未作事等漸々可終功也、

近日之天下爲體、上下忘安堵之計、而僅兩三月之中、雖如形造畢御所、被逐渡御之條、頗不思議事也、

廿日、壬辰天晴、申刻參女院御所、秉燭、頭辨經房朝臣、爲法皇御使來、聞余候女院之由追來、余出逢之、經房仰云、來廿五日可有中宮職院號事、而其號雖可決仗議、豫一兩可計申者、余申云、被用御所號、是定例也、而近代偏被用門號、雖無謂已爲流例、然者若可被用宮城門者、安嘉門可宜、北門之條不可有殊憚也、又就近例、御建春門被用內裏門者、建禮門如何、但六波羅相當五條末、然者〔號〕三五條院尤宜歟、此等之間可在時議、抑於中〔重〕門者不可、然、偏是中門也、猶此三之內、五條院可宜歟者、經房語云、新嘗祭上卿闕如了、參議光能卿一人參勤云々、又解齋御粥陪膳、四位侍臣、各稱無吉服

之由不參、仍經房所勤仕也云々、又云、殿上始之日、臺盤可居、饗、而盃酌之有無如何、進表之例無饗祿事、而又居饗無盃酌如何、是私相尋歟、答云、偏可依先例、不覺悟、若有所見者、追可令申者、

廿二日、甲午天晴、大將、侍從有連句會、或換長光入道在座、光盛、光長以下文士十餘輩、頗有其興、又有詩、醉中不識此日、高倉院周閑、御齋會定云々、

廿三日、乙未傳聞實寬僧正被補無動寺檢校了云々、

乖本願起請、忘相承之道理、不能左右事歟、余立次第之道理、令申入之處、仰云、全非依理被補之儀、只被超越至玄之條、殊愁申、是朕并實寬等、成怖畏之比也、依朕〔之緣〕座、有此怨、尤可令謝其遺恨、因茲有別恩所補也、於此後者、慈圓法印之外、又誰人可競申哉、不可有異議云云、〔今日、余參女院御方〕

廿四日、丙申天晴、侍從望少將事、以定能卿申院、有不許之御返事、勿論々々、

廿五日、丁酉雨下、此日、中宮職院號定也、左大臣、左大將已下公卿十許輩參陣云々、右大將遲參、且是幼年者候、定座、無便宜之故、只今參新女院也、女院之

儀依<sup>進表</sup>、全無<sup>別事</sup>、攝政、左大臣已下參入、數刻不被<sup>仰</sup>院司之間、非<sup>院司</sup>之人々退出、大將同退出、奉<sup>號</sup>建禮門院云々、

今日參<sup>女院</sup>御所、

廿六日、<sup>戊</sup>天晴、今日有<sup>令</sup>申<sup>入院</sup>事、字細不<sup>記</sup>、

廿七日、<sup>己</sup>天晴、朝小雪、定能卿來、其妻昨日產<sup>男子</sup>云々、明日除目、實守卿可<sup>勤</sup>仕執筆云々、語云、院

號定、人々申詞、大略建禮門也、但左大臣申云、五條院

之外、春華、脩明門之間云々、小門如何、不甘心々々、

廿八日、<sup>庚</sup>天晴、此日京官除目也、執筆右宰相中將實

守卿、攝政被<sup>出座</sup>云々、清書上卿別當實家、宰相通

親卿云々、後夜以後被<sup>始行</sup>、顯官舉之間天曙、明日申

刻儀畢、人以爲<sup>遲々</sup>云々、又或人云、覽<sup>大間</sup>了起

座之時、不<sup>別直</sup>視以下宮等、頗爲<sup>失</sup>云々、今日參

女院御所、

廿九日、<sup>辛</sup>天晴、見<sup>聞書</sup>、每事非<sup>據</sup>近代之例也、不

可<sup>驚</sup>、有房任<sup>中將</sup>、殊奇異々々、入<sup>夜</sup>、女院女房告

送云、聊御風氣御云々、仍馳參、殊六借御、仍所々修

御誦經、又有<sup>護身</sup>、暫而令<sup>落居</sup>給、女房等語云、自

此酉刻許、頗令振給、其後別事不<sup>御</sup>、之料如<sup>例</sup>、而之

間、只今午<sup>居令</sup>顛倒<sup>給</sup>、其後不<sup>覺</sup>御云々、及<sup>深</sup>更<sup>歸宅</sup>、去比可<sup>有</sup>御<sup>慎</sup>之由、有<sup>夢</sup>想事、尤有<sup>其</sup>恐々々々、

卅日、<sup>壬</sup>天晴、早旦、女房告送云、今朝猶不快御云々、

卽辰時許馳參、御心地雖<sup>無</sup>殊事、御食事不<sup>通</sup>、又

殊辛御坐云々、極以爲<sup>歎</sup>、自<sup>今夕</sup>被<sup>始</sup>御懺法、

僧<sup>今夜</sup>宿候、今日二位中將、山僧都尊忠等參入、二位

中將被<sup>退出</sup>了、

## 十一月

一日、<sup>癸</sup>天晴、今日聊有<sup>御減</sup>、然而不<sup>退出</sup>、今日攝政

被<sup>參</sup>、自<sup>是</sup>被<sup>參</sup>御堂云々、今夜猶宿候、入<sup>夜</sup>有

御增、及<sup>危急</sup>、仍請<sup>大原聖人</sup>、令<sup>受</sup>戒給、及<sup>曉</sup>御

減、今日、新女院殿上始也、

入<sup>夜</sup>忠親卿參上、余謁、

二日、<sup>甲</sup>天晴、昨今御有樣、同前事宜御也、今夜猶宿

候、令<sup>受</sup>戒給如<sup>昨日</sup>、今日召<sup>信範</sup>入道、沙<sup>汰</sup>御役

後雜事、

三日、<sup>乙</sup>天晴、自<sup>今日</sup>、攝政被<sup>修</sup>不動供、余修<sup>北</sup>

斗供、今日殊有<sup>御減</sup>、御受戒如<sup>昨日</sup>、今日殊令<sup>念</sup>



佛給、日來之間雖奉祈、御邪氣之體事、一切不令見給、又仰云、年來所存爲漸病者、先七ヶ日許居物付早追之、臨終之時、念佛之外、不可有他事之由所思也、而今度已無其憑、加之偏中風之所爲也、邪氣之體、更以不覺悟、若令渡邪氣者、必可爲臨終之違亂、此事更不可勸申者、然而攝政余等、今日攝政參上、猶申可居物氣付之由、御內心雖不說、又強非御不請、今日々次不宜、仍明日推可召物付之議定已了、又自去朔日、每日兩度、令浴樂湯給、殊有其御好之故也、今夜猶宿候、昨今奈良法印參入、今日下向了、御有樣非忽事之由被存歟、又南京物忌事等出來、依長者命、忍下向云々、今日源中納言雅賴參上、余謂之、

四日、丙午天晴、余竊令卜之處、靈基經口口今日可爲御慎之由成推、而今日近參上委奉見、死相不令現給、去一日危急御坐之時、御眼精卒倒、而今朝奉見、復例了、爲悅之處、及申刻頗令病惱給、自日中時欲居物氣付、而遲參之間、令辛苦給、仍忍召之處、事及危急御辛〔苦〕忽減、殊弱令見給、忽奉祈者、御臨修可散亂、大略御終焉之刻歟、又御眼精

頗令替給了、於今者〔無〕其憑、請聖人、余相共奉勸念佛、能令唱給、但不出御聲、微音令唱給也、召懺法僧於障外合殺、此後不增不減、及丑刻少御汗出、御汗不出也、成奇之處、寅刻遂以崩御、御心神安穩、手取五色旗、心係九品望、安然而令入滅給了、聖人及余祇候左右、唱念佛、尊忠僧都候御傍、滿不動咒、御臨終之次第、如思實神妙也、昨日仰旨相叶、可然事也、抑自去朔日、每日令受戒給、又給布施、今日自院以女房文、被訪申、御返事分明令申給、其中只被申大將事之外、無思置事之由、哀憐之思彌切、聞者拭淚、

五日、未天晴風吹、寅刻御閉眼以後、聖人退出、猶暫不止合殺、二位中將自去二日祇候、崩御了刻不候合御前、即被退出、了、僧都猶籠候、近習女房一切祇候御邊、即可直御座之處、御身猶溫、仍暫相待、此間今夜御葬禮、并籠僧已下事被沙汰、偏以鳴咽、敢不能成敗、只溺淚慈行雜事、御沒後事、先年併被書置了、仍不出異議、不可憚土用之由、雖載遺言、明日可入土用、仍今夜可有葬禮也、且是二ヶ日之内、可有此儀之由、同有御遺言〔之〕故也、

山候所事、僧都奉行遣人、經光法師此兩三日致沙汰、

余備遺先日以吉日掘始其穴、仍不及日次之沙汰、

今度御惱之時、兼日有沙汰也、今日差遣遺照前守能

業、御乳母爲行事、能僧等遣請了、又可能候御忌

之輩定仰了、又素服之人、并役人等定仰了、有御遺言也及

已終御體冷給了、仍奉直御座、

其儀、先改御衣、撤綿御衣、奉覆新合御衣也、先奉著者、淨、依平生仰、仍奉著替新御小袖也、御休之下、漸拔取元小袖、奉覆新御小袖、左右并下方、能奉押合了、此間御休之上、引張御衣、不使御身奉顯也

新御小袖之上、置日來令懸給御袈裟、并菩提子

念誦、其上奉引覆新合御衣、奉引隱御首也件事等女

房二人別當殿、役之、次撤御座傍御燈、他女房人役之

〔乍〕御筵、素御坐、着緣之御筵也、若御座坐之時、切放南御筵許一例也、今御座御筵、仍無其儀也、副

南西障子、北首奉置之、僧都并初役女房二人役之次御座東方、

立唐紙屏風一帖、御枕上方副西、立燈臺舉

燭、北其東居不斷香火蛇焚香、三尺阿彌陀佛

奉渡御持佛堂、五色旗撤之納之、屏風與北

障子之間、立三尺几帳、此間余已下、役女房等、

殆及叫喚、大將失泣、見者彌添悲哀、此後女房

擬近兩三人相替祇候屏風〔之〕外、又念佛僧一人、

相替候南障子外、唱光明真言、及阿彌陀名號等、

又常祇候男共兩三、相替候東緣、不上御在所

部也、如此雜事等定仰了、午刻退直廬、先是

攝政被參門、以人被傳示、余悲泣之間不能

謁、只答不覺之由、又早旦兼雅卿被參、付件人

申、依此事父子共龍居之由於院、即送使者云、

奏聞之處、殊驚歎御云々、退出之後、忠親、雅賴、定

能等卿來門外、各以人謝遣之、披日記等、注

出葬禮、略定於一紙、先日信範入道注申、先日信範入道注申、其大上猶取捨之、給基輔

季長等了、凡奉行此兩人也、

初日御佛事、

戌刻着烏帽直衣、相具右大將、亮間布衣也參御堂御

所、以此所、可爲御寢家、御遺言也、御平生之時、須奉渡也、所、又有其御意趣、而依爲王相方、奉制不令渡御、然而、依御遺言、用喪家之例也、又四條宮之例、於院不崩御、以法定院、爲喪家、叶役例也

〔先〕始行初日佛事、講師忠玄、堂童子二人、衣冠給布施之後、其法

歸參御在所、先是修七ヶ寺御誦經、殿上人爲

使、

御入棺事、

歸參之後、持參御棺、先是、御在所南障子外昇居、侍六人役之役人五人昇

之、居御傍板敷、南北次基輔之外四人、暫退出、此間

若、次尊忠僧都、基輔朝臣、并女房四人、洞院殿、則當  
履、次尊忠僧都、基輔朝臣、并女房四人、洞院殿、則當  
內侍、已上、各以紙綾、爲脇帶結之參、先撤屏風几  
帳等、開御棺帊蓋、其上被出雜物等、並置之、  
以北爲上、  
僧都役之、

先眞言筒、次御護、年來令持給云々、依御遺言入之也、

次野草衣、年來被備置、大原聖人本、覺房、寺梵字、唐綾單也、

次三衣、

次香、次土砂、已上妻、

次針糸、押帖紙、女房、必入之云々、次帊衣、單生衣、四幅也、

此中御護、眞言、三衣等、素置御所棚上、此時  
取具置之也、若同兼可入御棺歟、可尋之、

次膝布、六丈一切、故殿并北政所例、

次入香於御棺底、皆入之、次入土砂、少分殘之、爲、散御墓所也、

已上僧都役之、

次役人六人參上、乍御筵、奉昇入御棺、役人等、不、當袖於御

也、次僧都取野草衣、奉覆之、奉押合左右御頸、

引覆御首也、次自御下方、漸奉引拔合御衣、

元奉也、御小袖、袈裟、念誦等如本、次其据方、

同能奉押合、次入眞言、次入御護、已上入御、枕上方也、次

入三三衣、元裏紙、撒之置御、傍并御体上等也、次掩御棺蓋、次打釘、上、

渡、御御墓所之事、

奉乘御車、畢、余及大將同車、出自東門、用南底、上車、入墓古車也、

參會軍勝金剛院御所、共人七八人許、騎馬在車、奉待、後、筑前守與俊、在此中、

之、依爲尋常御幸之儀、路間、不步行、先例也、

且又其路有程之上、隔河水、依便宜也、即御車、

牛羣牛等、基輔進之、此外侍六人、付御車、車副二人、遺之、差綱也、牛羣持綱也、余綱代取新綱進之、廻御車

北面、出御自東門、例也、但在之禮之時、不壞築垣、仍用東門、自御

所南小路、號今、東行、自富小路、南行、自河原、東

行、至于大和大路、東折、入御自、軍勝金剛院西



面、北四足路之門、殿上人十人許、并僧都等步行、各着藁履、用白木杖、侍少々同候、御共、右衛門尉能召使二人舉松明、在御車前、其外四五人、候御車左右及後方、念佛僧卅人、寺僧都被進、兼令進御臺所、又御前僧六口、同以兼參會、不候御共、是等皆先例也、余及大將參門內際、先是着藁履、用白木杖、同之、共上、御車過御之時、居地、今生之禮、只令持人、大將、棺槨例也、御車過御之時、居地、悲泣之至、無物取喻、即步行、御共々人等、乘燭在前後、他殿上人、并僧都、同候、余後、殿上人等不舉松明、依殊略儀也、雜人等多欲入門內、仍余暫立留、能加制止、敢不得令入、閉門了、自御所并御堂之前、南方東行、自南山路南行、自此路口、除役人之外、共人皆悉留之、御車至穴南際、爲南暫立之、余、及大將、僧都、資長、賴輔入道、經光法師等候之、其外役人六人也、又侍役人六人、此外一切不參入也、雜人等猶交樹林、仍遣侍等、悉加檢知、追拂了、先是山東南兩面、仰武勇之輩、令守護、爲不令通雜人也、兼能被其沙汰之故、今夜一切無狼藉、尤爲悅不少、出御之後、勘解由判官祐俊、以竹帚拂御在所、先例也、

御葬禮事、

立定御車之後、於御車後、穴南有導師咒願事、導師左、下藏動之、伊覺、事訖、各給布施一裹、殿上人、次僧咒願右、上藏動之、忠立、徒頗退、立御車西南方、他念佛僧歸還了、此間消近邊松明等、次放御車トコ、奉居穴際、仍役人五人、其外加、奉昇出御棺、道懸、暫奉居穴南際、解三膝侍等、奉一切中、懸御棺上下、又儲他布四懸中、役人五人、侍一人、取布端々、他侍等又扶持之、漸奉沈穴底、北畢、次余取鋤入土、度、次大將同前、此後役人等次第如此、雖不可必然、只各勤仕之、其後侍等埋之、寄三人夫、早速爲終也、漸及終頭、且立廻釘拔、其上立石卒都婆、白御平生黃被遺備、御手令書銘給也、此間例時僧等且退歸、其後余及大將歸宅、依俗說、用他道經山中、出自西面八足門也、於欲乘車之所、洗足、是又例也、大將同以小桶小段、共人令洗之等如形也、於路次河邊、僕從進草人形、意氣了返給了、大將、同之、直參御堂、乘馬也、僧都乘賴輔入道車云々、於御堂、始每日佛事、先佛經供養、導師忠立律師、著甲次例時調聲、同、同前事了、自今夜、宿候此御堂御所、大將同之、舊臣女房一兩、洞院殿、別當殿、同以伺候、爲聽聞也、以新御所北對、



并東僧房等、爲籠僧宿所、又女房一兩、祇候彼御所東對、自今夜、於彼御所御終焉之所、始修阿彌陀護摩、公衆阿彌陀、開梨、僧名、六口、是御遺言也、

律師忠玄、

阿闍梨伊覺、公豪、

行家、觀明、

長宗、

忠玄、觀明之外、御遺言也、〔元〕被入覺〔智〕家寬等、而覺智爲僧正、家寬入滅、〔仍〕今度御惱之時、申事〔之〕由之處、覺智分可示其人、今一兩口可計入云云、此兩人依非外人所入也、此中無能說人、尤遺恨、且是能說なれば、若僧綱なればとて、不思議之人不可入之由、有御遺言之上、又可然之輩、多入高倉院御忌、辨邦綱卿忌等之間、有憚不請、其外又殊無能說之聞歟、爲之如何、

初日御佛事、

大日一鋪、二幅、法華經一部、摺寫、

布施、導師、被物一重、布施一裹、（絹裹也、布三段）、題名僧、今夜依卒爾、只給長絹一疋也、布施一裹、布二段、

供米、導師五斗、題名僧三斗、

每日分、

阿彌陀像一鋪、被寫七體、每七日可懸改、是御遺言也、

法華經一卷、是又御遺言也、雖有全少之難、爲不違御誡、守其御訓而已、

布施、導師二段、餘僧二段、

七ヶ寺御誦經、

珍皇寺、極樂寺、法性寺、寂勝金剛院、

淨光明院、東寺、西寺、

使二人、國行、長後、依不足兼行也、殿上人也、

分素服事、

御出以前分、之、然而今日依日次不宜、各不着之、余并大將分安置宿所、人々皆給之置宅云云、

六日、戊申、天晴、早旦、懺法依爲發願、有奉請之段、

調聲忠玄、前律師、籠僧之中第一薦也、僧等各着例鈍色裝束、依布裝束未調出也、件布裝束、依大治以後例、自上司給也、申刻有

每日佛經供養、今日第一局也、講師伊覺阿闍梨、第二局也、給布施

之後、有例時、如、此、自今日、余〔奉爲〕聖靈、奉始

阿彌陀大咒、今日之悲泣、無物于取、噉、憂心不休、悲淚無乾、

七日、己酉天晴、朝懺法、夕例講例時等、如昨日、(巡)講師公豪勤之、依爲密宗、說法之後供養法、行家稱密宗、辭而不勤、公豪勤本寺堅義、仍頗有顯宗之需云々、今日木工頭棟範、爲攝政使來門外、吊喪家、僧供米料五千石有沙汰云々、尤爲本懷之由令答了、大外記賴業來門外云々、

八日、庚戌天晴、懺法例時如例、巡導師觀明也、行家雖當巡辭遁、子細見昨日記、今日奉滿阿彌陀大咒遍數了、反、雜事等沙汰之間、依無其暇及今日也、自今日、奉始彌陀百萬遍、

九日、辛亥天晴、例講、々師長宗、

十日、壬子天晴、例講、々師忠玄、

十一日、癸丑天晴、例講、々師伊覺、

抑日來之間、每日布施物不法之由、有其聞、去夜(始)聞之、仍召出其布施、加檢知之處、實以不足言、仍奉行之輩加勘發、定下式法了、是猶雖非如法、停止殊不法也、凡上下沙汰人、無所子披陳、大略同意之沙汰歟、末代之人意可彈指、今日初七日也、(仍)付

物忌、然而強不堅固、今日僧侶皆着甲袈裟、是先例也、但講師不着表衣也、

十二日、寅卯天晴、懺法之後、白地退出南家、御葬送日、即不問日吉凶退出了、仍不及日次之沙汰也、然而今日自然又無障之日也、

浴湯梳髮、大將同所相具也、泰經朝臣、參御堂御所門外云々、基輔謝遣之、入道關白送使者云、依無日次、及今日不申案內、尤懈怠也云々、入夜歸參御堂、今日佛殿聖人來、示合故女院御著提之間事、

十三日、卯乙天晴、二位中將兼房、今日始參籠、但不伺候、自居宅可被參云々、即今日退出之後、可着鼠色云々、申刻、寺僧都覺尊被參、於東面緣邊閑所方也、謁之、例講、々師觀明、今夜院御所御渡云々、又建禮門院入內云々、子細追可尋記、

十四日、丙辰天晴、例講、々師長宗、未刻許、前源中納言雅賴卿來、於東面緣邊謁之、數刻談語之後退出了、十五日、丁巳天晴、例講、々師忠玄、佛殿持來(沒後)追善之要文一通、

十六日、戊午天晴、例講、々師伊覺、二位中將參入、夜陰

定能卿來、於緣邊調之、今夜院御佛名云々、

十七日、己未天晴、例講、々師公蒙、

十八日、庚申及晚小雨、懺法次有例講、今日第二七日

也、講師觀明、阿彌陀三尊、今日巡役公蒙也、而三七日

不空絹索、可充伊覺、依爲南都僧也、四七日不

動、可充公蒙、依爲密宗也、因茲召越觀明、今日

所令勤仕也、今日二位中將參入、被着鼠色練狩

衣、無信範入道來、大將狩衣可切尻、依非從余履

可黑之由、所令申也、入夜資長入道來、件人籠候

御忌、今日着御色、即參宿近邊也、於御堂調之、

今日酉刻、余及大將着御服、陰陽師有親、共濃色也、余

先於家小着直衣、紙無裏、出郭外、外也、於乙方

向同方着素服、紙帶麻、歸入之後、大將於同

所着之、先是於家中着布衣、依余例、輕服帶麻布、布

卷紙也、其色雖黑、用輕服帶、四條宮御時、知足院

殿例也、又今日召陰陽師有親、問御法事日次、即進

勘文、正月十八日、未時、又仰遣御願文事於兼光朝臣之

許、又七僧十二僧仰了、又今日改御裝束、御堂壺禰

懸黑簾、黑其中敷鈍色綠疊、僧座公卿座等不改

之、自餘所伊與簾也、疊同前、殿上鈍色綠疊、日給辛

櫃如例、簡入袋立辛櫃上、黑漆臺盤、抑余須改居  
所也、而一切無其所、仍只本居所改鋪設也、大將  
方殊不改之、頗依輕也、又長寬之度、孝子宿所等、  
不改之例也、又余及大將膳、用黑高坏土器也、不  
用黑器、非實之二親之故也、

十九日、辛酉天晴、例講、(々)師長宗、

廿日、壬戌晝以後雨下、例講、(々)師忠玄、

廿一日、癸亥例講、(々)師伊覺、

廿二日、甲子天晴、懺法之次、(有)例講、々師公蒙、

此日奈良法印被供養佛經、導師忠玄、有願文、  
後經(釋)草、釋迦等身木像也、木像佛殊不可然之由、

故院有仰、不被聞、及此狀之間、有如此歟、

廿三日、乙丑今夜依節分、方違東山邊、御墓所爲遠

小堂也、

廿四日、丙寅

廿五日、丁卯陰晴不定、此日於御墓所、供養隨意曼陀

羅一鋪、件佛等、故院殊令、自筆奉書八名經一卷、依夢想

也、請大原聖人爲導師、以六道僧爲請僧、余

參御墓所、聽聞之後、所作了歸參、

廿六日、戊辰

廿七日、己巳

廿八日、庚午

廿九日、辛未 廻燈蓋一如例、

此日山僧都佛經供養、講師忠玄、基輔朝臣同佛經供養、講師伊覺、

右治承五年辛丑冬秋此一帙墨付九拾五枚者以三緣院

道教公手澤松殿右幕下道昭卿被繕寫之了

抑法性寺忠通公之有職松殿基房公親面授而傳于後

法性寺兼實公且加口課號玉葉爲后昆之儀範其末苗

不讓他祕握而可貯深奧者也

于時慶安二年、己丑正月仲旬

陶化翁(花押)誌焉

# 玉葉卷三十六終



玉葉

卷第三十七

爲壽永元年

自養和二年正月  
至同年十二月

養和二年〔五月廿七日〕丙改元、爲壽永元年也。

正月〔大〕

一日、壬晴、例講、々師忠玄律師、依爲喪家之內、不

見鏡、不服藥、依長元々年經賴記也、雖備進齒

堅、不取出前也、進、手水節供共以停止、但政所

供藥物如例、去夜追懺之次被行、除目叙位僧事

等云々、資盛任中將云々、南家不改鋪設、只如

舊年也、少將雖亮闇見鏡云々、大將方同停止、元

正之禮也、

二日、癸天陰雨下、例講、々師伊覺、

三日、甲天晴、懺法之次有例講、講師公豪、今日四七

日也、講師同人、依相當不動尊、密宗人勤之、余、僧

都、大將皆着素服、逢講演如例、

四日、乙天晴、例講、々師觀明、

五日、丙天陰雨下、例講、々師長宗、二位中將兼房參

入、今年始所參也、今日穢氣滿三十日了、依諒闇

不被行叙位、先例也、

六日、丁天晴、依爲三年始之吉日、大將白地退出沐浴、

歸參、例講、々師忠玄、

七日、戊陰晴不定、例講、々師伊覺、停止家節供、覺智

僧正來、余對面、無白馬節、依亮闇也、

八日、己天晴、例講、々師公豪、今日、余白地退出、入

夜歸參、大將同之、

九日、庚天晴、例講、々師觀明、今夜爲方違向東山

邊、報鐘之後歸參、去夜有僧事云々、見聞書、覺尊

僧都任大僧都、二位中將息少僧叙法眼、其師覺智

辭僧正所申叙也、

十日、辛天晴、例講、々師長宗、

十一日、壬雨下、例講、々師忠玄、

十二日、癸天晴、朝間小雨、此日、舊臣女房等、奉供

養結緣經、講師澄憲僧都、籠僧之中、無堪說法之

輩、而於今之一品經者、聊有可演旨趣之事、故

院御平生之昔有此御願、即近臣女房等手自書之、其中藥王品、自筆所令書給也、然間、其功未及半、自然涉年月、其願遂默止、今遇此崩御、恨之尤切、不知手足所措、爰近臣之陪妾仕女等、開彼經等、拭紅淚、嗚咽、往年之結衆、或有終命之者、或有遁世之類、當時祇候之輩、各補其闕、又添莊嚴、此中余女房、自筆書寫般若心經、爲答芳恩也、普賢菩薩、并十羅刹女、一編女房等手自所奉圖也、依有如此等之子細、殊所請能說也、式部少輔草願文、昨日持參其草、依意趣不詳、再願文、三令改直、猶難不快、慈以清書、右中辨光雅清書之、今日、女房參入聽聞、

十三日、甲天晴、例講、々師公蒙、

十四日、乙天晴、例講、々師觀明、此日依吉日、攝政始被參直廬、於孝子聽聞之所、謁之、小時被參高倉院了、今日御正日云々、御齋會竟如例、但依御國忌、無論義、并香水加持之儀云々、

十五日、丙天晴、例講、々師長宗、停止節供、

十六日、丁天晴、例講、々師忠玄、入夜左中辨兼光、持參願文草、文章優美、一兩所有改直之所、乍候直付了、

十七日、戊雨下、此日、大將修佛事、以辨曉律師爲講師、說法優美也、副供養一日經、件經、書寫之法、過普通之儀、囑禪侶卅口、今晚、先行水之後、始懺法、依爲聲明師、以行案、六根段之禮拜、如法經之儀、爲調聲、卅口之外也、其後、同時摺墨、令書始懺法、以後賜小施物、未刻、終寫功、曉鐘以前、余向其道場、以女院新御所爲其所、即崩御之所、筆立以後歸來、於廿八品之題名者、先仰書手令闕其行、余、及大將令書之、爲結緣也、皆終寫功、調卷了之後、於御堂御所令書也、跡門十四品、本門十四品、大將書之、雅賴定能兩卿來、共吉服布衣也、今日、亮間竟之由大被也、仍兩卿着吉也、女房爲聽聞參御堂、今日、左大將以其息少將公守爲使、余喪依無所便不謁、以人謝遣之、今夜退去一宿、早日歸參、例講、（々）師伊覺、

十八日、己天晴、朝懺法之次、女房供養佛經、永久京極北政所御事之後、仁和寺北政所有佛經供養、彼度、同法事日之朝有此事、今度自然當吉曜、叶嘉例者也、道師忠玄、

此日御法事也、七僧、十二僧、大治之例也、願文、諷誦、共兼光草之、忠親卿清書之、朝佛事訖、堂莊嚴、未刻、



也、

已刻、堂莊嚴、未刻、公卿僧徒參集、執蓋役人同以參入、而奉行季長朝臣、内々申沙汰兼日本之人也忘却不召設蓋、仍忽雖尋最勝光院之邊、借用法勝寺云々、難叶楚忽之用、仍准此御堂供養時之例、略庭儀、可爲堂上之例之由、召仰兼光了、季長、日來之間一事無解怠、至于今日、現此卑陋了、不敵之事具了、兼光〔申〕事由、仰可始之由、次公卿着座、權大納言宗家、衣冠權中納言兼雅、忠親、已上束帶參議定能、直衣、本所備如此經房等也、次導師、率讚衆十口參着、匠行道之後、直着禮盤、次導師啓白、次揚御經題、次誦誦、玄理僧都爲誦誦導師、先本所、次所々口次說法、次三禮、依度々例、不數座次供養法、出讀次導師着下座、次賜布施了、自御所方、給御手箱一合、納給袋、季長朝臣取之大治之例賜御衣、今度依無其物、給御手箱也、次公卿、僧徒等退下、次僧侶不改裝束、例時結願之後賜布施、次余參御墓所、大將同之見廻御堂了、後歸南家、今夜、女房等留候御堂也、日來之間、不斷念佛、御周閑、不可退轉之由、召仰了、女房侍僧侶等、可結番之由仰了、大將宿賴輔入道南家、此宅無其所之故也、七々之

忌景已滿、綿々之愁彌切、今日之哀傷、殆勝彼遷化之曉、神心如屠、悲哉〔云々〕、

今日、曼陀羅供之外、無七々日之佛供養、長寬故殿御例也、

廿五日、丙申天晴、今日、徒然悲歎、更不可堪忍、溫顏在眼、戀慕之思、不知所謝、言而有餘、

廿六日、丁酉天晴、參御堂、此日、御月忌始也、導師忠玄、二位中將僧都等被參、大將同所相具也、今日早旦、山法印來、即被向西山之別所了、

廿七日、戊戌雨下、

廿八日、己亥天晴、藏人宮内口口來、

廿九日、庚子天晴、全玄僧正來、示合法印灌頂之間事、又佛殿聖人來、

卅日、庚子陰晴不定、傳聞、自昨日、內裏有五體不具穢、卅日、七日之間有沙汰、遂被定七々日了云々、

## 二月〔小〕

一日、壬寅天晴、靜賢法印來、余對面、

二日、癸卯天晴、此日、院尊勝陀羅尼也、定能卿來、依內裏穢、大原野祭延引了、以中卯可被行云々、



三日、甲辰天晴、自今日、大將風病、仍爲訪行向、頗有辛苦之氣、仍自今夜行土公見氣、招魂等祭、又修仁王講、及晚女房同爲訪行向、傳聞、院中有卅日之穢、是乞食法師、於門內餓死云々、今朝見付、疑自昨日在之者云々、

四日、乙巳天晴、今日又爲訪大將一行向、泰經朝臣來、示付山法印事、又仰付國事等、但國事以人傳仰也、泰經云、勝安樂院領事、松殿姫君、候八條院也、可知行之樣、有其沙汰云々、

余早速申事由、避此堂之沙汰了、尤可自愛々々々、泰經又有盛氣者也、

花山納言來示云、可有三大納言關、今度、兼雅無望、以大將可被任之由申院了、閣下同心可令申給云々、芳志之至、本懷已足者歟、

五日、丙午雨下、依御月忌參御堂、二位中將不被參、今日、講師伊覺也、事了後暫候、念佛轉經等之後、及晚頭來、今日、大將女房、自法住寺來大將第、自女院御崩日、所寄宿父納言法住寺家也、

六日、丁未天晴、依爲年始之吉日、大將白地退出、沐浴歸參、例講、々師忠玄、依不奉幣、不神齋、

七日、戊申雨下、此日、依春日祭神齋、雖重喪之間、猶忌僧尼、服者、月水等如何、但同服并從服之輩、不忌之、

八日、己酉天晴、神齋如昨、秉燭之後、大原聖人本成來、數刻語後世事、及子夜退歸、今夜方違如例、山僧都來、向方違之所、今夜、大將祈始修普賢延命供、靜退阿闍梨、是法印、每月七ヶ日可修之、新圖繪之尊像也、

九日、庚戌天晴、已刻、法性寺座主來、大略終日談語、自他巨細事等也、秉燭之後被歸了、同刻、二位中將來、小時被歸了、申刻、頭辨親宗爲院御使來、依觸院穢、南面緣懸片尻、余在簾中長押上調之、是入道關白被訴申、有假名消息、井庄々目錄、最勝金剛院事也、余申子細了、未曾有事也、不能左右之、理非之間、只仰蒼穹、所詮、全非執申其所、奉爲前院、及如此之沙汰之條、悲歎猶有餘之趣也、

十日、辛亥天晴、遠忌也、遣佛經布施取等於光明院、如例、親宗朝臣仰進院宣云、猶少々々可分與松殿云々、猶申子細了、

十一日、壬子天晴、依召、故女院處分狀案、進覽院、實

是沒後之御耻辱、言而有餘者歟、入道關白之訴、猶々未曾有事也、此事、女院御存生之時、被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>置院<sub>一</sub>事、勅報之趣、分明之事、件案内、同進覽之處、法皇頗有<sub>二</sub>伏<sub>レ</sub>理之御氣色<sub>一</sub>云々、素蒙<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之趣、尤奇氣也、慈生見<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>此事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>悲云々、

十三日、<sub>寅</sub>陰晴不定、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>彼岸初日<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>七ヶ日、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>寶篋印陀羅尼<sub>一</sub>、<sub>留候僧</sub>三口也、故院、平日被<sub>レ</sub>圖<sub>二</sub>寫<sub>二</sub>二鋪之眞像<sub>一</sub>、<sub>一鋪如意輪、而今日、奉<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>養中不動像、并寶篋印陀羅尼經一卷<sub>一</sub>、<sub>余自筆書之</sub>、導師公蒙、於<sub>二</sub>如意輪<sub>一</sub>者、來十八日、以<sub>二</sub>覺智僧正<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>也、余今日參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、</sub>

十四日、<sub>卯</sub>雨下、申刻參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、

十五日、<sub>辰</sub>天晴、酉刻參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、典藥頭定成、參<sub>二</sub>問所勞事<sub>一</sub>、大將、自<sub>二</sub>今夕<sub>一</sub>、渡<sub>二</sub>邪氣<sub>一</sub>、智詮修<sub>二</sub>不動供<sub>一</sub>祈<sub>レ</sub>之、

十六日、<sub>巳</sub>陰晴不定、及<sub>レ</sub>晚參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、傳聞、入道關白、猶可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>訴<sub>二</sub>申最勝金剛院事<sub>一</sub>、云々、此事、奉<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>故女院、沒後御瑕瑾歟、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>事也、

十七日、<sub>戌</sub>天晴、大外記賴業來、召<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>、談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、其次語云、自去正月十四日<sub>一</sub>至晦、七箇日之間、火星守<sub>二</sub>犯歲星<sub>一</sub>、是治承三年逆亂之時變也、殊爲<sub>二</sub>執政之愼<sub>一</sub>

云々、及<sub>レ</sub>晚參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、傳聞、最勝金剛院事、已以<sub>二</sub>顯家<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>頭辨<sub>一</sub>、々々仍遣<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>、相尋之處、事已實也、大將今日沐浴、

十八日、<sub>未</sub>微雨下、午刻參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、今日供<sub>二</sub>養百種<sub>一</sub>於<sub>二</sub>舍利之次<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>佛經供養事<sub>一</sub>、佛者如意輪繪像、御平生之時、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>圖寫、未<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>、今日、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>吉曜<sub>一</sub>、遂<sub>レ</sub>之、經者蛤貝書之、聖靈、平日殊令<sub>二</sub>好<sub>一</sub>貝覆之戲給、仍爲<sub>二</sub>翻<sub>二</sub>彼罪<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>寫<sub>二</sub>眞實之妙文<sub>一</sub>也、且先例多存故也、以<sub>二</sub>覺智僧正<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>留候僧三口<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>請僧<sub>一</sub>、事起<sub>二</sub>率爾<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>兼日之沙汰<sub>一</sub>、又有<sub>二</sub>飲食、衣服、臥具、醫藥之四種之供養<sub>一</sub>、事了、分<sub>二</sub>賜僧等<sub>一</sub>、講演之或、如<sub>二</sub>普通舍利講<sub>一</sub>、先總禮、傳供之後、說法式等也、此次、女房三位局、有<sub>二</sub>佛經供養事<sub>一</sub>、導師同人、今日、二位中將、僧都等參上、大將又扶<sub>レ</sub>病參入聽聞、

十九日、<sub>申</sub>雨下、此日、故殿御忌日也、女院御沙汰之御佛事猶修之前、院廳沙汰也、是先例也、午刻參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、兩座佛事、同時供養如<sub>二</sub>例年<sub>一</sub>、導師覺智僧正也、先參<sub>二</sub>淨光明院<sub>一</sub>、<sub>攝政被參云々</sub>、云々、源中納言參入、講演了、念對面、及<sub>レ</sub>晚寶篋印陀羅尼轉讀結願了、給<sub>二</sub>小布施<sub>一</sub>、件陀羅尼、彼岸之間、每日一時、以<sub>二</sub>三口僧<sub>一</sub>、各廿一反令<sub>レ</sub>滿

也、七箇日之間、三百八十一反也、

廿日、酉天晴、大夫史隆職來、召前談雜事、語申云、東大寺大佛御首事、以土可造形云々、用途大略以智識物成寄之由、重源聖人令申云々、入夜大將不例之由告來、即行向、無殊事、智詮祈之、落居了、亥刻歟、

廿一日、壬戌天晴、今日、聊有立願之事、

廿二日、癸亥天晴、早旦、信範入道來、自未刻許、風病更發、浴湯之後、彌增溫氣、加火、東西不覺、服訶梨勒丸、瀉之後、入夜少減、溫氣少散、

廿三日、甲子天晴、今日、風病頗宜、食事不如例、無力無術、午刻、泰親朝臣來、去比、火星犯歲星、近日、又金星犯同星、共常事、但火星之變、治承三年大亂之時變也云々、又云、此間、金星欲犯昂宿、若如存犯之者、殊勝大事之變也、仍兼所申也、占文不快云々、相次、典藥頭定成來、問大將灸治之間事、申來月四日爲吉日之由、左中辨兼光、爲訪大將來、

廿四日、乙丑陰晴不定、所勞今日增自昨日、然而不及一昨日、余有今來月可慎命之夢想、若大漸之期歟、

全不爲歟、只恨罪障多積、無冥途資糧、可悲々々、今夜、小御堂修二月也、公卿式部大輔俊經卿一人、殿「上人」五六人云々、大導師實顯法橋云々、余依疾不參、遺恨々々、

廿五日、丙辰雨下、入夜雷鳴、已刻計、法性寺座主來、依疾乍臥、謁之、談萬事、及晚、被歸了、

廿六日、丁巳天晴、及晚雨下、佛嚴聖人來問疾、余乍臥對面、示更無命厄之由、又招大將令見口口、依所申云、有小邪氣歟、同不及其恐、渡邪氣之後、可加少灸治云々、此日、最勝金剛院修二月云云、公卿不參云々、

廿七日、戊午陰晴不定、

廿八日、己未雨下、

廿九日、庚申雨下、法皇幸仁和寺法親王房、法親王被供養五部大乘經、請僧廿口、以澄憲僧都爲導師云々、布施卅八云々、近代之施物還非功德、傾國家之產、太以無二世之益事也、法皇被行勸賞、實任僧都敍法印云々、是又何故哉、

三月〔大〕

一日、<sup>辛</sup>天晴、申刻、頭辨親宗朝臣來依、今朝招引也、余在湯之間也、暫經程汗入之後隔簾謁之、示付大將大納言所望事、<sup>資賢卿、辭大納言、年未闌、雖強上</sup>可<sub>レ</sub>忿思、帶將軍之<sup>二</sup>納言<sup>一</sup>、空無過亞相之闕、加之、兼雅卿先日相觸云、今度大納言之闕、拜任之仁、在兼雅一歟、法皇之御氣色如此云々、而枉以右大將可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任之由申入了、天氣雖不惡、頗年齡幼若之由、有其仰云々、其條勿論也、兼雅無其望之旨、早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申入也、今度、以大將之拜任、爲身之大望云々、會釋之旨、尤爲本懷、但大將只今不可<sub>レ</sub>事闕、猶早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>任之由、粗雖令答、重被示云、我爲中納言之第一、又爲院近臣、然者只今不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>超越下薦、此時故不奉<sub>レ</sub>超<sub>レ</sub>幕下者、向後被<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>諸人之濫望、御昇進無期歟、仍殊所避申也云々、條々之事、爲親昵之本意之上、近代之事、實非無向後之不儀、仍慙付頭辨所奏達也、但先達件納言、面目其然、可<sub>レ</sub>奏聞之由相合了、人意無盡也、自爲恐變心也者、此次、禪門訴訟之間、相尋之處、親宗朝臣云、此事欲<sub>レ</sub>申入子細之處、詞未了、勅云、此事元能聞食了、只今不可<sub>レ</sub>及沙汰云々者、然者彼訴狀無許

容歟、尤神妙也云々、此人以被申狀、爲理之由令存旨、本所聞也、仍面謁之次、立條々道理、具以示聞、覽有疑殆之氣色、委聞極之後、頗伏理了歟、所詮、彼訴訟之狀、偏爲前院御瑕瑾、如此事雖有先蹤、不沙汰者、設而止、於今<sup>〔者〕</sup>、當時後代、雖一人聞漏之人、不可<sub>レ</sub>令聞之由示了、答尤可<sub>レ</sub>然之由、小時退出了、

二日、<sup>壬</sup>陰晴不定、定能卿來、

三日、<sup>癸</sup>雨下、今日、依重喪停<sub>レ</sub>節供、五七九<sup>〔等〕</sup>月皆同、先例也、

四日、<sup>甲</sup>天晴、此日、大將加灸治、典藥頭定成奉仕之<sup>〔十五〕</sup>所、賜女房衣三領、并牛一頭、今日、中御門大納言被<sub>レ</sub>來、余湯治之間、不謁之、以人謝遣之、又五位藏人親經來、

五日、<sup>乙</sup>此日、故院御月忌也、余依湯治不參、大將又依灸治不參、今日大將來余第、加灸治、

六日、<sup>丙</sup>天晴、明日、少將欲拜賀、而院、明曉可<sub>レ</sub>參、今熊野給云々、仍延引了、大將來、加灸治、如昨、今日灸了、此日、除目始也、執筆左大辨經房卿、



七日、丁雨下、除目中日、執筆同人、

八日、戊陰、大將、大納言所望事、問遺頭辨親宗朝臣

許之處、昨日申驚、御氣色不惡、只今可參奏、其後

事可切候也云々、入夜、兼雅卿送札云、大將殿御所

望事若沙汰歟、覺候也、一切無承及事、棄思給云々、

今日入眼也、先被行敕位、執筆同人、

九日、己天晴、未刻見聞書、權大納言兼雅卿、權中納

言實守卿、參議不被任、定能卿、中將、光能卿、右兵衛

督、泰經朝臣大藏卿等、皆以還任了、凡去治承三年解官

之人々、去冬今春除目、過半還補了歟、此外事雖多、

不追記、

抑大將所望事、情案先例、已爲理運、然而年少之者、

不可怨之由、令存之處、兼雅卿遮有示旨、且存親

昵本意之由、就彼狀、令奏達之處、無勅許、即被

補彼卿了、次第未得其心者歟、

十日、庚天晴、

十一日、辛天晴、亥刻衣始、

經家朝臣來語云、除目入眼、亥刻被始行、而翌日午刻

事訖、甚遲云々、去年秋除目、申刻訖、然而晚鐘之後被

始、然者校量彼是、無幾之勝劣云々、今夕被行

下名云々、

十二日、壬天晴、入夜人傳云、今日午刻許、頭辨親宗

朝臣、爲院御使、向<sub>二</sub>前幕下第<sub>一</sub>、不知何事大將以人示

親宗云、天下之亂、君之御政不當等、偏汝所爲也、故

禪門者、有遺恨之時、直報答之、於宗盛者、存

尋常、萬事如不存如不知、仍於事損面目、頗

所怨申也云々、親宗迷惑、逐電退出之後閉門了

云々、又天下之亂出來歟、凡不能左右云々、去夜

下名無別事、

十三日、癸未

十四日、甲申

十五日、乙天晴、沐浴、入夜參宿御堂御所、自今日初

夜時、可始如法懺法其間、如法可讀誦法花經也前、方便之懺法

之故也、自來廿三日可始正修也、須始自明日

廿二、可滿七箇日也、而依日次不宜故、自今夜

所始加行也、此事、前僧都顯真、并大原聖人滿

教、本淨山智海法橋等之勸進也、其所求之意趣、廣爲

利群生也、殊又爲直天下之亂、又爲消戰場終

命之輩怨靈也、其外廻向、可任各々意趣云々、爲

始台岳、山洛、一同多以結緣、余病受身、且暮雖難

知、深有所思、強所始、此行也、依勞病、自然經時刻、子刻許始之、智詮阿闍梨、長宗阿闍梨件長宗、爲故院、龍僧、候、禪房、等也、公衆、行家、各稱病不參、依此行、頗強之、但行家見病云々、且又此願上分、欲資故御菩提、仍殊於此御堂所修也、廣大之善、莫過此、行、若始終果遂此事者、過教之本意、冥途之資糧也、竊仰三寶、深我一心、如來冥助、早救病患、如思令遂三七日之讀誦、給へトナリ、今日、自行儀、天台、并補助儀、妙樂所作、之中、抄出要文、十六日、丙雨下、三時懺法如常、余竊立僧後行道、且爲如法、且爲療病也、十七日、丁終甚雨、三時懺法如常、十八日、戊天陰、三時懺法如常、十九日、己天陰、及晚少晴、此日、少將良經拜賀也、余日中懺法了、白地向南家、定能卿來、爲少將出立也、申刻、兵部省持來移文、左京權大夫光盛、余家司、非少將、傳取覽少將、余依有、不、見也、少將留文返給宮、於中門、給省掌下部等祿、如例、次着束帶、色目如常、唐草、繪、紫、不結、大殿賜笏等、各先所用也、先參院、無申次之人、兼日語、秦經之處、近日依病不出仕、忽依

其人不候、經家朝臣在少將共、依執事院司民部卿成範卿、令申之、依御所中間、無召云々、次參建禮門院、依時忠卿和說、忽被聽昇殿云々、此事全非、臨期不能、又依召參殿上、謁女房云々、然者又可、有奉、次參內、左少將兼宗、爲申次、無召云々、次參准后方、以季經朝臣申之、次參攝政第、光雅申、於客亭、被出逢、又被引馬云々、降砌下一拜、經家朝臣受取之云々、入夜歸家、先以光盛申余方、依、不、拜、次以基輔朝臣申女房、即二拜了、次給本府隨身腰指、三人也、二人召其共、一人留隨身所、行、要、政所勤之、若定例也、車、新調、牛童、給、彩色、給、彩色、標上、下、款、冬、共殿上人二人、中務權大輔經宗朝、臣、加賀橋守顯兼、同諸大夫三人、經光、長、俊、信政、各騎馬、在車後、如常、雜色七八人許、隨身、召其本府隨身也、時初、號等、自、納殿、給之、不給裝束也、入夜歸參御堂、初夜懺法如常、廿日、庚天晴、此日、請大原聖人、受、并三衣等、先受戒、子細給、心府、派、次傳、受三衣、先五帖、次七帖、次九帖、次座具、抑、在俗傳受三衣事、正教許之、但用單縫之三衣、訓、單、カヘシ、ヒニ、ヒス、而余所持之三衣、故北政所出家之時、反宇治僧正被進云々、

縫也、仍忽欲闕如、宿運未至歟、信心又不及歟、大願已欲破、悲歎尤深之處、借遣尊忠僧都之許、付便借送云、是慈覺大師御三衣也云々、即披見之處、已單縫也、誠是誠精之至、已叶聖意歟、感應之所、仰而可被信、往古、大師所持之三衣、單縫之條、更以非、可思寄之事、試檢知之處、已以爲單縫、大願成就、爰而炳焉、歡喜之至深、無物于取、喻者歟、聖人又以大悅、若新調之三衣有ましかは「と」、今此證驗者なからまし、尤可隨喜云々、此次、尼女房二人同傳受三衣、他三衣等也、被經法名眞理、正元々年號、然則非此人、余又先祖亦名眞理歟、不審基通法名行理、後改名歟、密々付法名、眞理也、雖爲在俗、付法名、又有先蹤事也、入夜、初夜懺法如常、

今夜、被行小除目、臨時祭舞人、新藏人一人補衛府云々、

廿一日、卯天晴、三時懺法如常、入夜花山大納言兼雅被來、余對面、及子夜被歸了、大將所望之間事、示合也、

廿二日、辰天晴、今日懺法、後夜日中許行之、初夜不行之者、去十五月初夜始之故也、今日、重嚴淨道場、余洗頭、衣裳已下、食膳器等、皆新調也、同如法

經之儀、藏人少輔定長來、又大藏卿泰經朝臣來云々、廿三日、巳天晴、此日、後夜時其實及巳刻、依之沙汰雜事等也、始修、三七日一心精進、法花三昧、懺法、誦經等也、山僧都尊忠自去夜參宿此御堂、日來於法性寺、行前方便云々、其外僧三口也、行家所勞平減、自二日、昨日、所僧等給淨衣料、供米同給之、自去十五日、所給也、廿四日、甲三時懺法、反、禮拜、懺悔、讀經等、隨分各致精誠、初夜時之後、有伽隨事、一句、但亥五也、

廿五日、乙陰晴不定、晝以後天晴、懺法讀經等〔如〕昨日、

廿六日、丙天晴、懺法讀經如昨、以此讀誦爲加行、可書寫如法經之由自今日思立、但每事卒爾之間、未一定者也、

廿七日、丁天晴、懺法、

廿八日、戊天晴、懺法讀經如日來、

廿九日、己天晴、懺法讀經如日來、今日滿初七日也、

卅日、庚天晴、女房爲聽聞來御堂、

今日、信範入道爲攝政使來、此行之間、一切不能他事、仍示其旨、而爲急事之由強令申、仍悠調之、示云、攝政內舍人隨身、來月所被仰下、而先例第三

度表、必被<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>內舍人事、今度同可<sub>レ</sub>然、來月可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>上表也、同月即上表之條、若可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>難哉如何、又內大臣可<sub>レ</sub>辭<sub>二</sub>通<sub>一</sub>之由存<sub>レ</sub>之、三箇事可<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>一表、未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>如何、件兩條可<sub>レ</sub>計示給<sub>二</sub>之由、所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申合<sub>一</sub>給<sub>上</sub>也云々、余云、兩條共可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>難、同月上表、并一表被<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>三箇事、共以不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>難事也、先信範歸參了、大將方五體<sub>二</sub>不<sub>一</sub>具穢、今日滿<sub>二</sub>七箇日<sub>一</sub>了、今日、懺法讀經如<sub>レ</sub>常、

#### 四月

〔二日、<sub>壬寅</sub>天晴、傳聞、來九日可有<sub>二</sub>大嘗會<sub>一</sub>云々、〕

五日、<sub>乙巳</sub>陰晴不定御月忌也、親明爲<sub>二</sub>導師、大將相<sub>一</sub>扶灸治<sub>二</sub>參入、傳聞、隆季卿、大納言師共被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>辭書<sub>一</sub>了〔云々〕、

八日、<sub>戊申</sub>陰晴不定、入<sub>レ</sub>夜雨下、此日、奉<sub>レ</sub>迎<sub>二</sub>如法經料紙、爲<sub>二</sub>僧都沙汰、圓實聖人相具所<sub>一</sub>來也、申刻許、渡<sub>二</sub>給此道場、僧衆等出<sub>二</sub>堂中<sub>一</sub>相<sub>レ</sub>待之、先庭上立<sub>レ</sub>案、其上奉<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>料紙、<sub>納</sub>與<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>之聖人等頌<sub>二</sub>伽陀<sub>一</sub>了、入堂中聖人頌<sub>レ</sub>之、<sub>不<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>同<sub>一</sub></sub>其後開<sub>二</sub>堂障子、下<sub>二</sub>簾<sub>一</sub>二人出

奉<sub>レ</sub>昇<sub>二</sub>入之<sub>一</sub>安<sub>二</sub>机上、<sub>前日來</sub>又開<sub>レ</sub>戶、經圓阿闍梨披<sub>レ</sub>與奉<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>出料紙、奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>銅筒、奉<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>寶座、<sub>本尊寶座也、即奉<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>前也、在<sub>二</sub>蓮花座也、</sub>此間合<sub>レ</sub>剃<sub>二</sub>釋、奉<sub>レ</sub>居了、聖人等退歸了、此僧衆等行道數匝、合<sub>レ</sub>剃不<sub>レ</sub>止、<sub>釋迦、法華、經、彌勒、</sub>後唄之後各着座、凡自<sub>二</sub>伽陀之間<sub>一</sub>散花也、先是、釣<sub>二</sub>紙天蓋、<sub>創<sub>二</sub>付羅網、花機等、又創<sub>二</sub>摺懸<sub>一</sub></sub>

九日、<sub>己酉</sub>雨下、此日、被<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>大嘗會事、又有<sub>二</sub>直物、小除目等事、<sub>已下三ヶ事、執筆左大辨經房云々、</sub>

十日、<sub>庚戌</sub>陰晴不定、傳聞、昨日參陣公卿、左大臣、藤大納言、前源中納言、三條中納言、梅小路中納言、<sub>長源宰</sub>相中將、左大辨等也云々、

十一日、<sub>辛亥</sub>天晴、爲<sub>二</sub>法性寺座主沙汰、自<sub>二</sub>橫川<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>根本水山上、聖人五六人相<sub>レ</sub>具之、奉<sub>二</sub>受取<sub>一</sub>〔之〕儀、同<sub>レ</sub>迎<sub>二</sub>料紙、

十三日、<sub>丑癸</sub>天晴、今日、如法轉讀滿<sub>二</sub>三七日<sub>一</sub>、仍入<sub>レ</sub>夜有<sub>二</sub>結願事、導師智詮阿闍梨、〔今日早旦〕、送<sub>二</sub>卒都婆於山上顯真之許、件卒都婆寸法、一丈二尺、弘一尺二寸也、<sub>件卒都婆、余自筆書<sub>レ</sub>之、梵字、法性寺座主被<sub>レ</sub>書也、</sub>

十四日、<sub>寅甲</sub>天晴、自<sub>二</sub>今曉<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>始如法經、懺法之後有<sub>二</sub>啓白、<sub>僧都被<sub>レ</sub>勸<sub>二</sub>之、</sub>後御筆立也、子細在<sub>二</sub>別次第、



十五日、卯朝間、大雨大風、早旦、天下騷動事出來、以外謬事之故、有此事出來云々、昨日、法皇御登山之間、山僧等可奉<sub>レ</sub>〔盜〕取法皇之由、今日得<sub>レ</sub>其告、洛中武士騷動、忽率<sub>二</sub>數多騎<sub>一</sub>向<sub>二</sub>坂下<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>僻事<sub>一</sub>空歸了、嗚呼第一事云々、

十六日、<sub>丙</sub>陰晴不定、此日、如法經終<sub>二</sub>寫功<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>埋<sub>二</sub>最勝金剛院山<sub>一</sub>、故女院御墓<sub>所近邊也</sub>、先奉<sub>二</sub>書終<sub>一</sub>之後、余書<sub>二</sub>願文并名帳<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>筒了、入<sub>レ</sub>筒之後、書手各付<sub>レ</sub>封、其後補<sub>二</sub>關分<sub>一</sub>、<sub>經國阿闍梨</sub>、次十種供養、<sub>日來道場、依<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>便宜、導師智詮</sub>、<sub>梨勤<sub>レ</sub>之</sub>、<sub>奉<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>御經於御堂</sub>、導師智詮阿闍梨也、十種兩方儲<sub>レ</sub>之、其外供<sub>二</sub>養八燈<sub>一</sub>、其後奉<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>法性寺<sub>一</sub>、聖人四人之外、有<sub>二</sub>假聖人等<sub>一</sub>、御經奉<sub>レ</sub>出之後、余、大將、僧都同<sub>レ</sub>車向<sub>二</sub>法性寺<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>他道<sub>一</sub>參會也、自<sub>二</sub>御所門內<sub>一</sub>步行、與傍奉<sub>レ</sub>埋之後、以<sub>レ</sub>石<sub>〔兼運之〕</sub>築<sub>二</sub>垣<sub>一</sub>、其上立<sub>二</sub>石五輪塔<sub>一</sub>、<sub>法性寺座主被<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>梵字<sub>一</sub>也</sub>、其後於<sub>二</sub>御墓所<sub>一</sub>讀<sub>二</sub>阿彌陀經<sub>一</sub>了、歸<sub>二</sub>參御堂<sub>一</sub>之後歸<sub>レ</sub>宅、今日十種供養、有<sub>二</sub>小捧物<sub>一</sub>、道場荒涼之人不可<sub>レ</sub>入、仍只自<sub>二</sub>後戶邊<sub>一</sub>送<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>也、余歸宅之後、又以<sub>二</sub>別捧物<sub>一</sub>、送<sub>二</sub>僧都之許<sub>一</sub>、日來、此行之間、殊被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>力之故也、

〔十七日、<sub>丁</sub>日來、持病殊不<sub>レ</sub>發、是三寶之加護也、〕

十八日、<sub>戊</sub>無<sub>二</sub>御禊<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>齋院不<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>也、

十九日、<sub>己</sub>傳聞、十五日浮言、全玄僧正告<sub>二</sub>〔前〕大將<sub>一</sub>之由風聞、山僧等大醉、欲<sub>レ</sub>拂<sub>二</sub>件僧正<sub>一</sub>云々、大無<sub>レ</sub>由事歟、

廿日、<sub>庚</sub>陰晴不定、賀茂社司持<sub>二</sub>來葵桂<sub>一</sub>、聞<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>重服<sub>一</sub>之由、稱<sub>レ</sub>可有<sub>レ</sub>憚、故進<sub>二</sub>少將方<sub>一</sub>、家不<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>葵、但少將姬君等方懸<sub>レ</sub>之、

廿一日、<sub>辛</sub>天陰、此日、賀茂祭、祭使左少將有盛、<sub>故重盛子也</sub>、院有<sub>二</sub>御見物<sub>一</sub>云々、昨今神齋、是例也、

廿二日、<sub>壬</sub>天晴、此日不<sub>二</sub>神齋<sub>一</sub>、齋院御座之時、朝間猶神齋也、是依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>還儀<sub>一</sub>也、大外記賴業來、召<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、

廿三日、<sub>癸</sub>天晴、大將來<sub>二</sub>此第<sub>一</sub>、密々有<sub>二</sub>詩<sub>一</sub>、連句等、

廿四日、<sub>甲</sub>賴業進<sub>二</sub>大嘗會定々文<sub>一</sub>、披見之處、人々申狀不<sub>レ</sub>同歟、

廿五日、<sub>乙</sub>雨下、入<sub>レ</sub>夜、大藏卿泰經朝臣來、依<sub>二</sub>相招<sub>一</sub>也、示<sub>二</sub>付兩息所望事<sub>一</sub>、<sub>大將望<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>、明日示<sub>二</sub>御返事<sub>一</sub>、大將事必可<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、少將事又何強難哉云々、</sub>

廿六日、<sub>丙</sub>天晴、此日攝政賜<sub>二</sub>內舍人<sub>一</sub>、即拜賀云々、被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>件內舍人<sub>一</sub>之次、有<sub>二</sub>小除目<sub>一</sub>、主計頭資元、奇異奇特事也、又陰陽頭泰親、是理運也、但兼<sub>二</sub>大膳權大

夫、專不當也、自今日有五體不具穢、

廿七日、丁卯天晴、此間、大將除服、着無文鈍色布衣、

用三人車、前驅一人、隨身在共、出川原除之、陪膳

光盛、陰陽師泰茂、賜著始裝束布裝束也、一具於陰陽師、是

例也、今日隆職來、謁之、雖穢中昇堂上、雖制止、

申云、近日無不觸穢之所、仍所昇也云々、

廿八日、戊辰天晴、大將來、此夜、密々有詩連句等、長

光入道候其座、此日、新三品賴輔來、依穢中不謁

之、

廿九日、己巳天晴、大將來、昨今猶着鈍色、今月許着

也、

## 五月

三日、壬申天晴、參御堂、及晚歸來、大將召清景、仰

射手、并將等事、皆對捍及闕如云々、仍以同男示

遣隆房朝臣許了、

四日、癸酉此日、右近府荒手番也、又今比叙競馬、新御馬

馳云々、因茲、府沙汰者等被召籠之間、及夜半

有其儀、大將馬兩三疋向馬場云々、少將公衡著行

「云々」、自今夜精進、滿佛眼真言、此日法印來、

五日、甲寅天晴、御月忌也、仍參御堂、二位中將、僧都等  
參候、大將又參、著吉服布衣、白顯文紗、持襖、長宗爲講  
同瑞瑠色奴袴、師、

隆房朝臣、示送基輔之許云、明日將依辭退、申事

由之、處、爲頭辨奉行、被催出公時了云々、以

基輔書札、示返事了、須大將自書也、而伴人、一切

不來大將第、是可謂「忘」禮、仍以奉書示返

事也、喪家所之外、雖重喪家、葺當蒲也、

六日、乙亥此日、右近府真手結也、大將、職事二人、并祿

大掛二領、絹十纏等、遣馬場、又遣馬四五疋、如例、及

五疋、布百段、纏等、遣馬場、又遣馬四五疋、如例、及

晚有其儀、大將隨身一人之許、一切無揚之者云

云、公時少將一人著行云々、有勸益云々、府擬須

以大糴米、本府可沙汰也、而依申、無用途之由、

大將沙汰送、頗非例也、

九日、丙寅此日、今比叙競馬云々、五番云々、此間、有早

魃之愁云々、今日、佛嚴聖人來、

十一日、辰辰雨下、傳聞、菊池歸降來貞能之許云々、

西海安穩、天下之悅歟、自今日始佛眼行法也、每

日三時也、實嚴園梨受之、

十六日、乙酉天陰、今日、余始出仕、橡直衣、練指貫、白

帷、重服冠、黑沓等也、用人車、前駢不衣冠、又不著服也、參院許也、入見參、仰云、去夜出自今熊野窮囑、仍不謁云々、又申入八條院御方、退下了、

十八日、亥自今日被始恒例供花云々、

廿日、丑以使者、訪靜賢所勞、自行云々、答無術之由、又訪中御門大納言、不知何病也、

廿一日、寅陰晴不定、法性寺座主被來、向西山之便也、今晚、余有吉夢事、

廿二日、卯天晴、今日、藏人左少辨光長來傳院仰云、

依疾疫欲行改元如何、大嘗會以前兩度可有其難哉如何、申云、依改元可拂厄難者、雖及三四度、不可有憚、有沙汰已被行之、其上度數之條、不可及沙汰歟、但依改元可退災之由、愚案不存、可被行御祈歟、此上事可在御定、

廿四日、巳實嚴來、重受略行々法、

廿五日、午天晴、此日、佛眼行法結願也、仍先請佛嚴

聖人受戒、日中時所結願也、聊書所願意趣、於佛前讀申之、又件狀遣西山了、小施物同所遣也、

廿七日、申雨下、此日、改元也、左大將上卿、公卿七八

人許參入、被用壽永、後經卿擇中云々改元全不可叶物

用事歟、

卅日、亥雨下、基輔語云、去比、夢想云、近日之病者、滿破業障陀羅尼可免云々、即是千手陀羅尼也、件人、本不知千手陀羅尼也、有此名之由、而見此夢、實可謂不思議歟、仍余自今日、每日七遍滿之、祈自身親族天下等也、

### 六月〔小〕

一日、子甚雨、自今日、滿愛染王真言、可迄來十五日、但朝許精進也、傳聞、靜賢法印所勞又更發云々、又源中納言雅賴所勞云々、未聞何事、

今日、佛嚴聖人來語云、去比、或僧夢想云、舊堂人々集會、議定世間事、其中、疾疫事、來六月也、今月中〔臆〕可

病、七月上臆可病、一人不可殘、但三尺十一面觀音像、造立供養人、可免此難云々、雖見此夢、暫

不披露之間、更又夢云、先日之夢者、爲流布世間、

所告示也、而無音之條、甚奇怪、然者、汝可與此病云々者、仍驚披露、院中以下每家有此營、但事體

皆龜荒也、頗致謹慎、能可有沙汰、抑、夢雖見三尺之由、義軌并經之所〔說〕、一尺三寸也、夢はかく

も見ユル事也、猶就三經說、一尺三寸、可被造立云云、

〔二日、辛丑、甚雨洪水〕

三日、壬寅、雨下、大臣解退事、書子細、付定能卿了、

四日、癸卯、天晴、此日、奉始一尺三寸十一面像、智詮阿

闍梨加持御衣木、此佛、如法可奉造、仍佛師授五

戒、以栢木可奉造、不可加膠、又不可押薄

并綵色、是依近日之夢、所奉造也、殊以有存旨、如

法可造立、即於智詮壇所、每日受戒、滿咒遍、來十

三日可奉造出也、勸進家中男女、給其料物、是又

〔爲〕先化他二也、即以結緣衆名帳、可奉籠尊像

之中也、

五日、甲辰、陰晴不定、依御月忌、參御堂、二位中將、僧

都等參候如例、大將同參入、講說如常、今月雖當

忠玄巡、依〔不〕○不字據七月四日條補之參伊覺勸之、堂童子、長

俊一人也、依無傾狀之人也、及晚歸宅、

十一日、戊戌、院今日自今比叙出給云々、雖欲參御今

熊野、依夢想告有御卜、依不快不參社給云々、

姫君聊有病氣、似瘧病歟、

十二日、辛亥、今日、姫君猶發了、

十三日、壬子、陰晴不定、〔時々雨下〕、今日、外記史生將

來改元詔書、余依重喪不加署、大將加之、余可憚

哉否不審、仍問賴業之處、雖不檢得例、不加何

事有哉云々、大將方有連句、并密々詩云々、今日、姫

君猶發了、右衛門權佐親雅爲攝政之使〔來〕、以基

輔傳申云、來廿八日可有上表、其以前可被立

〔封戸〕勸學院、崇神院、鹿嶋、香取等使也、多先被

立三兩院、追被立三〔社〕、今度如何、又件二〔社〕在

坂東、爲之如何、告文暨可置氏院歟、如何者、答

云、同時兩度共有〔例〕、可在御意、兼又〔兩社〕分告

文、被置氏院宜歟者、

十四日、癸丑、天晴、早旦、請佛嚴聖人受戒、今日、愛染

王念誦結願也、此日當可慎之日、仍殊所受戒也、

姫君同受之、今日終日念誦、姫君在余傍、今日不發、

悅思不少、此日祇蘭御靈會也、

十五日、甲寅、此日、依祇蘭臨時祭神齋、年來殊不〔神〕

齋、依〔障〕不奉幣也、

十六日、乙卯、陰晴不定、入夜、奉供養一尺三寸十一面

觀音像、以栢木造之、其中奉種種字真并同經一卷、寄千手

陀羅尼一千反、以智詮爲導師、伴佛造立之間、如



法造之不加膠、每日佛師受戒、〔佛〕造立之間、僧等滿神咒、即於智詮壇所造之、

廿一日、庚申、天晴、參御堂御所、入夜歸來、

廿二日、辛酉、及晚、雷鳴降雨、

廿三日、壬戌、此日、家大般若結願也、今日雷鳴落唐橋東洞院邊云々、

廿四日、癸亥、及晚、雨下小雷、定能卿來、談雜事、大臣辭退子細可覆奏之由、示付了、

廿五日、甲子、天晴、酉刻許參院、以定能卿申入、渡御八條院御方之間、無御對面之由云々、余入八條院御方、見參女房、三位局出逢、頃之退出、兼親爲余見最吉夢、無左右事也、

廿六日、乙丑、天晴、八條院煩瘡病給云々、

廿八日、丁卯、此日、攝政、被上攝政第三度表、作者敦周朝臣云々、使少將兼定、勅答時實、上卿定房卿云々、被返攝政內舍人、被許內大臣云々、

廿九日、戊辰、天晴、女房等參御堂、終日、供花於法華經、一夏之間、舊臣男女營此事、〔爲〕結緣、女房所參也、余同參入、及晚歸來、大將同所參也、入夜、爲迎秋節、向大將第、今夜、大將、少將共有連句之

興、又密々有詩、抑、余依重喪、無六月秋、但女房姬君等有之、陪膳家司有障、仍基輔朝臣勅之、大將少將等方各有之、

## 七月

一日、己巳、天晴、辰刻許歸來、傳聞、八條院瘡病、此兩三日每日發給、仍不召驗者、隨又御卜趣、加持不快云云、而法皇推而奉祈給、即御平愈云々、以慈惠僧正五鈔爲御布施云々、

二日、庚午、天晴、院渡御鳥羽、依御國忌也、御幸儀密密云々、

三日、辛未、天晴、此日、法皇幸法勝寺、攝政供奉、被具內舍人隨身云々、於法勝寺講演之間、召入攝政於簾中云々、此事未得其心、先々近習之人祇候御座之邊、先例也、雖執天下之柄、未有院中之功、若是御追蹤歟、抑留之謂歟、

五日、癸酉、天晴、依御月忌、大將相共參御堂、導師忠玄律師雖當去月巡役、依不參、伊覺勤仕了、仍所勤今度導師也、國行、長俊爲堂童子、二位中將不參、僧都祇候、

六日、甲戌、天晴、藏人兵部權少輔定長爲院御使來、余

招<sub>二</sub>藤前<sub>一</sub>謁<sub>レ</sub>之、傳<sub>二</sub>仰旨<sub>一</sub>云、大嘗會御禊、同與之料、前齋宮可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>立后<sub>一</sub>、院御女而今月難<sub>レ</sub>叶、八月例無<sub>二</sub>近例<sub>一</sub>如何、兼又、大嘗會御禊日次廿一日之由注申、一條院二條院等例也、晦日白川院例云々如何、又大藏省申云、御禊、大嘗會等爲<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>、一切無<sub>二</sub>省納物<sub>一</sub>、仍以<sub>二</sub>諸國齋王頓給料<sub>一</sub>、三年一請是定之也、欲<sub>レ</sub>宛<sub>レ</sub>之、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>例<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>省<sub>一</sub>當時煩<sub>二</sub>也云々<sub>一</sub>、余申云、立后月、八月雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>例<sub>一</sub>、全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>苦、御禊日廿一日可<sub>レ</sub>宜、被<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>晦日<sub>一</sub>之間、若有<sub>二</sub>非常之難<sub>一</sub>者、後日如何、二條院例、強不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>忌、仍一條院已寂吉也、大藏省申事、左右可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>、但諸國難<sub>レ</sub>濟<sub>二</sub>納物<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>禮資<sub>一</sub>歟、近年衆災競起、國土不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>安堵、而<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>返<sub>二</sub>付頓給料<sub>一</sub>、定爲<sub>二</sub>諸國之愁<sub>一</sub>歟、省申旨又可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>哀憐<sub>一</sub>、只可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>聖斷<sub>一</sub>者、其後談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、小時退出了、其後基輔語云、大藏省事、一口於<sub>レ</sub>院所承也、泰經申云、東北兩國納物之分、以<sub>二</sub>不塞之國<sub>一</sub>々頓給料、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>之山所<sub>一</sub>申也云々者、而如<sub>二</sub>定長仰詞<sub>一</sub>者、已無<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>、只依<sub>二</sub>諸國難濟<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>此議<sub>一</sub>之由也、不<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>其詮<sub>一</sub>之條如何々々、  
七日、乙亥天晴、依<sub>二</sub>重喪<sub>一</sub>無<sub>二</sub>節供<sub>一</sub>、及乞巧奠等事、此日、法勝寺御八講結願、有<sub>二</sub>御幸<sub>一</sub>云々、左大臣被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>會御

寺云々、

八日、丙子天晴、最勝光院御八講初日、有<sub>二</sub>御幸<sub>一</sub>云々、自今熊野有臨幸修國忌之黨人以難例方例也云々、今日、女房參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>供花、未刻、大外記賴業真人來、召<sub>二</sub>藤前<sub>一</sub>談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、攝政第三度奏、數周作之有<sub>二</sub>難之由<sub>一</sub>云々、此日、與樂頭和氣定成、依<sub>レ</sub>召參來、問<sub>二</sub>眼樂之間事<sub>一</sub>、  
九日、丁丑傳聞、昨日、入道關白息、公教下女腹也、上西門院爲<sub>二</sub>猶子<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>彼女院<sub>一</sub>今夜可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>首服<sub>一</sub>、而加冠左大臣忽所惱之間延引云々、  
十日、戊寅定能卿告送云、大臣辭退事、重奏聞之處、猶被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>意之由<sub>一</sub>、大略不<sub>レ</sub>許云々、此事不得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>風聞<sub>一</sub>者、任大臣在<sub>レ</sub>〔近〕云々、於<sub>レ</sub>今者其後可<sub>レ</sub>上表<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、  
十一日、己卯天晴、今日、實寬僧正入滅云々、無動寺檢校事、此法印於<sub>レ</sub>今者無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、仍可<sub>二</sub>驚奏<sub>一</sub>之由、以<sub>二</sub>書狀<sub>一</sub>付<sub>二</sub>泰經朝臣<sub>一</sub>了、  
十二日、庚辰天晴、泰經示送云、奏聞之處、いつゝなるやうなれば、經程可有<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>云々、此事不得<sub>レ</sub>心、何可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>滯停<sub>一</sub>哉如何、參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、隆職來云々、依<sub>二</sub>懺法<sub>一</sub>之間不<sub>レ</sub>謁<sub>レ</sub>之、

十三日、辛巳天晴、明日、明後日爲物忌、仍入夜參籠御堂、女房大將姬君等、皆相具之一、

申刻、前大將〔宗盛〕、以使者示送云、今年大嘗會年也、而追討可有憚哉否、密々可計示者、答、今年偏營大禮、被罷征伐、可謂正道、但若可及大事者、又非此限者、

十四日、壬午天晴、此日、奉爲故女院、奉供養畫像釋迦如來像一鋪、并反故色紙故女院御手跡也、妙法蓮華經一部、

在具件經任去正月中陰內例、請卅口禪侶、終一日之書寫、先拂曉行法華懺法、一如去正月儀、午刻終

寫功、未刻遂供養、忠立律師、僧皆隨也、件經內外題、大將相共書之、跡門余書之、本門大將書之、外題惣余書之、

大將入夜歸南家了、今夜故女院御食供、如例年一被送法性寺、依大治例也、但無院司使、只付寺家了、〔余拜盆供送兩堂如例、故女院御祈過期年行之例也〕、

〔十五日、癸未天晴、終念誦〕、十六日、甲申天晴、早旦退出自御堂、少將病惱、若瘧病歟云々、一昨日聊有其氣云々、法性寺座主被來、數刻之後入夜被歸了、又定能卿來、示大臣辭退之間

事、覆奏之、勅報猶不許云々、爲之如何、十八日、丙戌陰晴不定、大將來有小連句、并詩等事、十九日、丁亥天晴、大外記賴業來、召前談雜事、持來群書治要抄四卷、

廿日、戊子雨下、此日爲故御匣殿忌日、例參御堂修之、女院同令修此忌日給、然而自今年止之、余自年來修、今年同之、且爲同事之故也、申刻歸宅、及晚大將除服之後始出仕、先參院、仍參建禮門院、次參內、着陣、與藏人宮內權少輔親經下吉書、結

申之後、移着外座、置軾之後、召左少辨光長下之、

後參御所退出云々、親經光長等告示之、今日番長兼重、大將退出之後、改裝束歸私宅之間、於八條

高倉邊、爲敵被殺害了、凡非言語之所及、五更、兼重所相具之從者二人、并其弟兼助少將小等來、

申子細、凡可爲敵之人不覺悟、疑人違歟云々、件男、容貌非醜、又揚馬、競馬、共得其骨、兼弘弟兼清

子、已於舍人英華也、忽遭此事、歎而有餘、今年、大將重厄年也、若是轉重輕受歟、

廿一日、己丑雨下、大將來、歟兼重之事、女院御領兵糧米事、以季長朝臣示遣行事辨行隆等了、歸來云、

行隆明日下<sub>二</sub>向南都、依<sub>二</sub>東大寺大佛沙汰<sub>一</sub>也云々、

廿二日、庚寅天晴、佛殿聖人來、鳥羽尼上方、供<sub>二</sub>養佛三

體<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>件聖人<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>云々、入<sub>二</sub>夜兼助<sub>一</sub>來、仰<sub>二</sub>

彼夜兼重所<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>之所從二人可<sub>レ</sub>進之由了、爲<sub>二</sub>尋

問<sub>一</sub>也、

廿三日、辛卯天晴、隆信朝臣來、召<sub>レ</sub>前、件人能知<sub>二</sub>當時近

衛舍人等子細之人也、仍兼重之替、誰人當<sub>二</sub>其仁哉之

由問<sub>一</sub>之、申云、兼繼、武友、敦繼、敦景、敦佐子、但

文子男、末子云々、候、院北面云々、此等之外、可<sub>レ</sub>然之輩一切不<sub>レ</sub>候云

云、大將密向<sub>二</sub>賴輔入道雲林院亭<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>山居之體<sub>一</sub>也

云々、

廿四日、壬辰天陰雨下、傳聞、攝津國爲<sub>二</sub>法皇之御沙汰<sub>一</sub>、

國內之庄園併<sub>二</sub>停廢<sub>一</sub>、其所出可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>六萬餘石<sub>一</sub>、一所家

領、多在<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>云々、又聞、東大寺大佛奉<sub>二</sub>鑄加<sub>一</sub>事、

依<sub>二</sub>重源聖人之功<sub>一</sub>、已欲<sub>レ</sub>成、宋朝鑄師年來渡<sub>二</sub>此朝<sub>一</sub>、且

今年渡而在<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>、而欲<sub>レ</sub>歸<sub>二</sub>宋朝<sub>一</sub>之間、忽船破損不

<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>前途<sub>一</sub>、度々止了、而之間、此事出來、依<sub>二</sub>件聖人之

請<sub>二</sub>京上<sub>一</sub>、廻<sub>二</sub>種々之祕計<sub>一</sub>莫大之功、無<sub>レ</sub>煩欲<sub>レ</sub>終、誠是

神之助、天之力也、世欲<sub>二</sub>滅亡<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>憑只在<sub>二</sub>斯歟<sub>一</sub>、彌致<sub>二</sub>

勤慎、可<sub>レ</sub>庶<sub>二</sub>政化之反<sub>一</sub>淳素<sub>一</sub>也、今日已刻、大將不例、

大略瘧病歟、

廿五日、癸巳天晴、自<sub>二</sub>院被<sub>一</sub>仰下<sub>二</sub>云、季時法師奉行、御教書書<sub>二</sub>遣基輔之許<sub>一</sub>、敦

助子男、助、所<sub>二</sub>望大將<sub>一</sub>、折節可<sub>レ</sub>然者、可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>覽<sub>一</sub>、覽<sub>二</sub>覽<sub>一</sub>、歟

云々、此事、兼重天亡之時、付<sub>二</sub>兼雅卿<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>之

由示了、仍申<sub>二</sub>其旨了<sub>一</sub>、件助廉、天下第一之惡男也、

廿六日、甲午天晴、大將大事發了、殊無<sub>二</sub>術之由<sub>一</sub>、女房告

送、仍申<sub>二</sub>刻許行向<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>病重不<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>恐、女房同來、入

<sub>レ</sub>夜歸宅、夜半、大將溫氣散了云々、而忽氣力弱見之由

告來、周章欲<sub>レ</sub>向之間、復<sub>レ</sub>例了云々、今日、修<sub>二</sub>泰山府

君祭、并土公鬼氣祭<sub>一</sub>、又始<sub>二</sub>行仁王講<sub>一</sub>、此日、季御讀經

初日也、

廿七日、乙未雨下、今日無<sub>二</sub>別事<sub>一</sub>、土公鬼氣祭同<sub>二</sub>昨<sub>一</sub>、今夜

有<sub>二</sub>僧事<sub>一</sub>、俊堯本名、顯智、任<sub>二</sub>僧正<sub>一</sub>、奇異了、〇了恐云々

廿八日、丙申天晴、早旦向<sub>二</sub>大將亭<sub>一</sub>、今日以<sub>二</sub>六口僧<sub>一</sub>、法性寺住持

去弟、始<sub>二</sub>行觀音經御讀經<sub>一</sub>、又一日奉<sub>二</sub>圖<sub>一</sub>寫<sub>二</sub>不空經<sub>一</sub>、如

意輪<sub>二</sub>菩薩<sub>一</sub>、二菩薩像、奉<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>養<sub>一</sub>之、行珍已講勸之、三井寺僧也、須

請<sub>二</sub>東寺人也、然而忽不<sub>レ</sub>候、仍因便、件行珍密宗也、今日宜發了、悅思不<sub>レ</sub>少、入<sub>レ</sub>夜、

花山大納言訪來、余謁<sub>レ</sub>之、此次大納言<sub>二</sub>云<sub>一</sub>、隨身事

今日申了、助廉事、御辭退道理之由、有<sub>二</sub>天氣<sub>一</sub>、御所望

輩事案、追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰之由、有<sub>二</sub>勅報<sub>一</sub>云々、



廿九日、酉天晴、早旦、全玄僧正來、大將訪也、語云、前幕下年來所召仕之侍兩三人、引率逝去東國、奉具三條宮子宮云々、而於路頭皆悉被擄留了云云、又或人云、讚岐前司重季向北陸道了、事若實者不能左右事也、已刻、秦經朝臣送書於季長朝臣云、無動寺事、可爲法印御房御沙汰之由被宣下了、尤神妙云々、實悅思無極、全不劣自身之慶、即自書返事、殊畏申之由可披露旨示遣了、又告法印了、

八月

一日、己天晴、入夜、余病惱如例、風病歟、溫氣如火、終夜惱亂、天曙、汗出溫氣散、  
二日、庚天晴、宰相中將定能來、相具息兵衛佐也未刻、右衛門權佐親雅爲二院御使來問云、前齋宮可有立后、而伴齋宮自野宮退出之間、依無群行、歸京之儀、無難波被令備后位之時、不被行彼被之條如何、被問例之處、外記各勘申寫子內親王口

前齋院、不入木院、

自所司退有議、修辛崎被之後、有入內之例、依彼出云々、例可行被哉否、可定申者、余申云、准據例尤可然、但難波被者、歸京之便所被修也、而不遂群行、無歸京之儀之前、齋宮經十餘年之後爲立后、更被修難波被之條、專不叶物議、何況修解齋被者、爲從佛事也、而數年之間、能不被從佛事了、彌以〔此〕被無所據歟、又入內而立后、聊可有差別歟者、親雅云、此事、左大臣、余、左大將、堀川中納言、長方卿等、被問此五人也、而左大臣、長方等申不可修被之由、忠親申可被行之由、左大將未見返事云々、余依疾不調、以人所傳示也、

〔四日、壬天晴、今日神心不快、〕

五日、癸天晴、故院御月忌也、余爲瘧病之發日之上、又當物忌、然而拋萬事參御堂、於報恩捨身命也、先例講、次有具一品經供養事、導師觀明、此講中間退去、依神心不快也、今日所勞體、聊以宜歟、二位中將僧都等參候、女房參入、大將相具之、  
早旦、招定成欲加灸治之處、稱瘧病之最初、加

灸治、非穩便之由、不灸、〔退出丁〕、

六日、辰、甲及晚暴雨、法性寺座主被來、今日雖間日、無術計、泰茂來、卜筮之處、申、今明平癒之期、又可加護身云々、

七日、巳天晴、智詮阿闍梨祈之、又請法印弟子六口、行觀音經讀經、今日不發、仍驗者賜單重、又自大將方給生衣、近日依無可然之牛馬、不引之、讀經僧〔都〕例、布施之外賜扇紙、智詮驗德可謂殊勝、今日、隆職參上、數刻祇候、平癒之後、退出丁云々、

八日、午天晴、召典藥頭定成、加灸治、十二、賜單重、瘡病之後、不經程灸治、人以不甘心、然而依本病無術、強所灸也、

九日、未陰晴不定、法印被來、只今向西山云々、自來十二日、可始如法經懺法前方便、自十八日正懺法云々、〔清談之〕後被向西山了、

十日、申陰晴不定、定能卿來、

十一日、酉天晴、傳聞、讃岐前司重季使、定入越前國了云々、故宮子若宮、一定奉相具云々、

十二日、戌雨下、花山大納言示送云、番長事、右大將隨身、兼重也、重奏驚之處、兼繼、武友共御秘藏、可遣敦景次

男敦次、之由、有御氣色云々、雖非本意、敦助子男、助康、事被仰下、而辭申之趣、被許容歟、以之可爲悅之由答了、重又有示送旨等、依委細不能記、入夜、宰相被來、示合隨身事等、今夕、前齋宮渡御法住寺殿、依明後日立后也、日來同居法皇宮、

十三日、亥天晴、番長事、大納言申、恐報之趣了、仍可被召仰敦景云々、而件男父子共在河內國、被仰遣丁云々、

十四日、子天陰、午後雨下、此日、前齋宮亮子內親王、法皇女、母、有立后事、皇后宮、依天仁一條同仁和寺宮、大宮例被行之、內辨左大臣云、余不出仕、右大將可參入之處、雖番長事申院、

日來無沙汰、俄一昨日被仰下、而件男敦景、在河內國、今日不參會、又假番長、本府無其人之間、空籠居、番長參會之時可出仕歟、仍明後日可令出仕之支度也、今日事、追可尋記、此日、小兒女、密々有百日事、依余障、於大將第二有此事、陪膳基輔朝臣、役人三四人、常祇候男共也、各布衣也、大將含之云々、其事了、來此第、

十五日、丑天陰、早旦、大夫史隆職、注送〔宮司除目〕

云、

〔皇后宮〕大夫藤原實房、兼、

權大夫藤原實守、兼、

亮高階泰經、兼、

權亮藤原公衡、兼、

大進藤原親雅、兼、

權大進藤原定經、兼、

藤原長經、兼、

少進藤原家實、兼、

權少進藤原光茂、

大屬大江景宗、兼、

少屬中原基康、兼、

權少屬同清重、兼、

壽永元年八月十四日

〔宣命、〕

現神止、大八洲國所、知須、倭根子天皇大命<sub>其萬</sub>、勅大命

乎、親王、諸王、諸〔臣〕、百官〔人〕等、天下公民衆聞食止

宣、無品內親王者、禪定法皇乃息女爾天、於朕天爲、姑

太利、朕〔力〕幼稚乃身乎惠賜天、已如所生、志、故是以尊登

慈天、皇后止上奉利崇奉留、此事、只取加恩慮爾、始行不

事爾、非須、往代乃聖主、舊跡有利、故此狀乎悟而、供奉止勅布、天皇御命乎衆聞食止宣、

壽永元年八月十四日

參入公卿、

左大臣、內辨、

左大將、外辨上、

源大納言、

三條大納言、

藤〔原〕大納言、

左衛門督、

新中納言、<sub>宣命使、除目</sub>

修理大夫、

五條宰相中將、

源宰相中將、<sub>除目清書、</sub>

左大辨、<sub>除目執筆、</sub>

藤三位中將、<sub>親實、</sub>

平三位中將重衡、

外辨上官、

右中辨光雅、

少納言重綱、

權少外記師親、

左少史能光、

甚雨之間、以中門東面南腋、爲外辨座、同門內北廊、

立、標置三版位、

已上、隆職注進狀、

問遣實守卿、返報云、

昨日、左大臣、午刻參陣、奏宣命之後、數刻被相待

大理之參、<sub>可爲宣命使、</sub>迴參之間、申事之由、且被始行、于

時雨下、殿庭奉<sub>レ</sub>仕雨儀裝束、左大臣行<sub>二</sub>內辨事<sub>一</sub>、左大將已下就<sub>二</sub>外辨〔中門〕<sub>一</sub>、〔中門〕以前壁外東面、實守爲<sub>二</sub>宣命使<sub>一</sub>、內辨進退插<sub>レ</sub>笠、實守同前候<sub>レ</sub>儀了、於<sub>二</sub>攝政直廬<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>除目<sub>一</sub>、左大辨執筆、左大臣已下、群卿參集、事々如<sub>レ</sub>例、及<sub>二</sub>秉燭<sub>一</sub>儀了、實守行<sub>二</sub>清書事<sub>一</sub>、參議通親、相具着陣、左大臣已下參<sub>二</sub>本宮<sub>一</sub>、啓<sub>二</sub>陣事<sub>一</sub>、實守同行<sub>レ</sub>之、今日、本宮役等候歟、而納言不<sub>レ</sub>候、仍於<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>所役重疊候、冊命使中將通資朝臣、攝政不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>本宮<sub>一</sub>、候<sub>二</sub>兩女院<sub>一</sub>、法皇密々渡御之山承<sub>レ</sub>之候、一獻、左大臣、源大納言、左大將、二獻、源大納言、三條大納言、藤大納言、中御門大納言、穩座勸盃、別當、御遊拍子、中御門大納言、藤大納言、左兵衛督、納<sub>二</sub>笙<sub>一</sub>、左兵衛督、筆<sub>二</sub>策<sub>一</sub>、盛定、和琴、別當、琵琶、右宰相中納言、資盛、付歌、雅賢、無<sub>二</sub>別事<sub>一</sub>候、委事可<sub>二</sub>參啓<sub>一</sub>候云々、申刻、大外記賴業來、召<sub>二</sub>簾前<sub>一</sub>談<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、語云、昨日、內辨參內之後、實家卿遲參、件人可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>宣命使<sub>一</sub>云々、奏<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>之後、更奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>使於里第<sub>一</sub>之間數刻、猶不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>彼使之歸來<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>始行<sub>一</sub>、實家兼留<sub>二</sub>宣命使作法於<sub>二</sub>左大臣<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>其役人<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>豫議<sub>一</sub>、而臨<sub>レ</sub>期稱<sub>二</sub>疾遂不<sub>二</sub>參內<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>候本宮<sub>一</sub>、人以爲<sub>レ</sub>奇、若<sub>二</sub>〔有〕<sub>一</sub>所思<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何事<sub>一</sub>云々、今日、立后所第二日、上首源大納言云々、今夜爲<sub>レ</sub>遠<sub>二</sub>秋相方<sub>一</sub>、戌亥、宿<sub>二</sub>大將南宅<sub>一</sub>、先<sub>レ</sub>是有<sub>レ</sub>詩、題云、勝地翫<sub>二</sub>

明月、  
十六日、寅天陰雨下、巳刻、相具大將、歸北家、申刻、  
右大將參新皇后宮、立后第三日也、秉燭歸來云、事未  
始之間參入、左大將已下、公卿六七人許、以對南庇  
爲座云々、一獻亮泰經朝臣、瓶子諸大夫二獻參議通親朝  
臣、瓶子殿上五位次居汁、一度、次三獻右大將、二三獻、共經南東廣庇、入自東面  
南第二回、居奧抑、所參之中納言時忠、大將實守等也、  
而時忠昨日勤仕、實守於左大將、有家禮、仍無可  
勤仕之人云々、大夫實房、權大夫實守等、無其人之  
由、令沙汰、更親雅欲催民部卿云々、爰大將聞此  
沙汰、闕如者盡勤仕哉之由示實守、人々稱善、仍  
勤之云々、人々頗有感氣云々、且幼稚、且又有憚、  
各得而難點其役歟、而進而勤此役、有成人之量  
歟、三獻之後又居汁、其後欲勸菓子之處、遲々、仍  
略之云々、次有啓陣還祿事、一獻權亮公衡、二獻大進親雅、三獻權大進定經云々  
事了、右大將退出、今日、新番長下毛野敦次參入、則  
參仕御出、生年十九歲云々、容貌無過失、但不可  
及兼重歟、又頗得馬意歟、  
十七日、卯天晴、左大將送書於右大將云、昨日御渤  
盃之間、人々感申事候き云々、又云、一井、大臣殿不



有御出仕一歟、然者、節下事可<sub>レ</sub>用意云々、可<sub>レ</sub>答下不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出仕之由之旨示了、

十八日、丙辰天晴、成菩提院彼岸初云々、去夜、院御幸鳥羽云々、

十九日、丁巳天晴、此日、家所宛也、加<sub>二</sub>補家司、左中辨兼職光朝臣、職事<sub>二</sub>兼時、季長等、抑、兼光朝臣者、大將政所始之時、可<sub>レ</sub>補家司<sub>一</sub>之由、故女院有<sub>レ</sub>仰、而稱<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>執柄<sub>當時</sub>、家司<sub>一</sub>之由、辭退、其後補<sub>二</sub>彼家司<sub>一</sub>之後、猶寄<sub>二</sub>事於左右<sub>一</sub>辭通、故院深思<sub>二</sub>食奇性之由<sub>一</sub>、然而天下物騷馳過、知行之兩庄可<sub>レ</sub>改易之樣、有<sub>二</sub>內談<sub>一</sub>之間、關東北陸爲<sub>二</sub>謀

兼光付<sub>二</sub>法性寺座主邊<sub>一</sub>、謝<sub>二</sub>申此恐<sub>一</sub>、但可<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>余方家司<sub>一</sub>之由云々、事體雖<sub>二</sub>奇恠<sub>一</sub>、又如<sub>レ</sub>此令<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>、強不能<sub>レ</sub>貽<sub>二</sub>意趣<sub>一</sub>、仍今夜所宛之次所<sub>レ</sub>補也、

〔廿日、天陰、每事神妙、〕

廿一日、己未天晴、申刻、花山大納言被<sub>レ</sub>來、日來候<sub>二</sub>鳥羽<sub>一</sub>、今日所<sub>二</sub>退出<sub>一</sub>也云々、數刻言談之後、及<sub>二</sub>日沒<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>大將之方<sub>一</sub>了、又定能卿來、昨日、季長逢<sub>二</sub>兼光<sub>一</sub>云々、家司事悅申之由、可<sub>レ</sub>申入<sub>二</sub>之旨申云々<sub>一</sub>、

廿二日、庚申天晴、故季行卿忌日也、催<sub>二</sub>遣布施取等<sub>一</sub>、女

房具<sub>二</sub>尼上<sub>一</sub>、密々行<sub>二</sub>向其所<sub>一</sub>、法性寺邊堂也、余參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜歸來、

廿三日、辛酉天晴、傳聞、來月五日、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>除書<sub>一</sub>、前幕下〔宗盛〕可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>大納言<sub>一</sub>、其後、可<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>〔之〕故云云、

廿四日、壬戌天陰、此日、進<sub>二</sub>念珠十連<sub>一</sub>納<sub>二</sub>於〔院〕<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>追從<sub>一</sub>也、付<sub>二</sub>定能卿<sub>一</sub>有<sub>二</sub>御感<sub>一</sub>云々、

廿五日、癸亥雨下、傳聞、北陸道追討使又猶豫出來、每事只無<sub>二</sub>支度<sub>一</sub>之沙汰歟、不便々々、成菩提院彼岸結願云々、

廿六日、甲子雨下、女房密々灸治、余指驗、

廿七日、乙丑天晴、此日、法皇御<sub>二</sub>參八幡<sub>一</sub>云々、入<sub>レ</sub>夜爲<sub>二</sub>方遠<sub>一</sub>參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、今日、大將少將有<sub>二</sub>當座詩<sub>一</sub>、文士少々會合、不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>夜、

廿九日、丁卯天晴、入<sub>レ</sub>夜、中御門大納言被<sub>レ</sub>來、大將習<sub>二</sub>始催馬樂<sub>一</sub>、伊勢海、先三句宰相中將定能卿同在<sub>二</sub>此座<sub>一</sub>、余依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憚<sub>一</sub>、暫不<sub>二</sub>指出<sub>一</sub>、彼對面後、語談被<sub>レ</sub>歸了、無引出物也今日、

二位中將被<sub>レ</sub>來、定長來、年來所<sub>レ</sub>祕之〔新〕渡醫書名、今日申<sub>レ</sub>之、王氏篇類單方云々、

# 九月

一日、己天陰雨下、傳聞、明日、法皇欲參詣賀茂、而一昨〔日〕夜、信業法師死去、仍依哭〔其〕事、被停止御參詣云々、

三日、辛天晴、中御門大納言被來、大將習伊勢海殘三句了、

四日、壬天晴、午後陰、今日、法皇參籠今熊野云々、此日、臨時有除書、前大納言兼右大將平宗盛還任大納言、可任大臣〔之料云々〕、

五日、癸天陰、已刻、御月忌如例、導師親明、其後密々、大將同車、向賴輔入道雲林院亭、依爲如法經十種供養也、導師隆憲遲來、仍入夜歸九條、

七日、乙天晴、參御堂御所、入夜歸來、今日、大將少將各加少灸治、余指驗各四五ヶ所也、

八日、丙天晴、自此日始恒例念佛、但爲向如法經所加讀懺法、又非一心不亂、依沙汰十種供養事也、

十二日、庚天陰、有雨氣、然而未降、此日、大將少將同車參院內、於院被召御前云々、大將車去弊、仍用少將車〔但車副遣之〕、

十三日、辛天陰、小雨、日來有雨氣、今日已降、恐天魔妨明日事、歟、爲歎云々、中御門大納言被來、教催馬〔樂於大將〕、

十四日、壬天晴、寅刻出京、辰刻到着西山草庵、所相具之男共、皆淨衣也、余用人車、又着鈍色小直衣指貫等、是淨衣之體也、前源中納言雅賴卿聞及此事、進而被示可結緣之由、仍所相伴也、勸僕

〔納言在座〕之後、始供養之儀、十種供具、下官所調具也、美觀調之、抑、件經三箇年之間植紙麻、觀性法橋行懺法、法印爲願立、所被書寫〔也〕、自寫經之所到堂場〔於別堂場有供養例〕、余及納言降庭居地、加陀之

段々有樂如例、盤食調也、其音合物、興味無極、事了納言歸了、其後奉禮如法佛〔佛眼受陀羅也〕、先是、如法

經六部筒上、以木筆、石墨奉書銘〔大神宮、八幡、賀茂、春日、日吉、天王寺、〕、件六所々願成就之後、可奉埋也、次手自奉植紙

麻、善根時至、植種種之勝因、誠是非一世二世之宿執、可悅可尊、隨喜之淚、千行萬行、其後休息、酉刻

飯京、戌刻到家、

十五日、癸甚雨、以今日之雨、彌悅昨日之願、何況、或不信之侶見、可信仰之夢、所和語也、其趣非直也

事、二世之願求成就不可疑々々々、此日故北政所御忌日也、仍參御堂、慶智律師爲講師、自今夜參宿此御堂、卽始念佛、七ヶ日可有也、今夜千反、

十六日、申雨猶不止、今日、念佛十萬反、

十七日、乙酉〔猶〕雨同、念佛十六萬遍、

十八日、丙戌陰晴不定、念佛十四萬遍、今日、有指掌之

吉夢、可信仰者也、

十九日、丁亥陰晴、不定、念佛十六萬反、〔及〕此日、六

部如法經奉送、橫川、余所調之十種供具、同奉安、

法界房慈覺大師御房也云々、

廿日、戊子天晴、念佛十四萬反、

廿一日、己丑雨下、念佛廿萬反、頭中將泰通朝臣來、可

獻五節之由來、催大將、申女院御周忌經營有憚

之由了、

廿二日、庚寅雨下、念佛十萬反、今日結願也、五節事、重

申子細於院及攝政了、

廿三日、辛卯天晴、懺法已後歸宅、法橋觀性來、

廿四日、壬辰天晴、大將大嘗會御禊供奉事、奉行仰國

行、

廿五日、癸巳天晴、法性寺座主被來、數刻言談、有被示

事等、大將所望祈、使智詮修北斗供、基輔朝臣沙汰、廿六日、甲午天晴、入夜、定能卿來、少將御禊供奉事、奉行仰長俊、佛師明圓參上、申御法事御佛之間事、傳聞、今日、泰經朝臣眼前突、鼻、蒙院勘了、籠居云々、大將所望事可祈請春日御社之由、示法印之許、又仰覺乘了、

廿七日、乙未天晴、大外記賴業來、召簾前談雜事、任大臣事、大略、彼人滅亡在近之由令存歟、始大將

所望祈、法印修之、不動供、

廿八日、丙申天晴、傳聞、泰經朝臣觸逆鱗籠居、然而、

卽被召出了云々、大將祈愛染王供、實嚴修之、

廿九日、丁酉雨降、皇后宮權少進光茂、〔御禊所念〕可修

理進之由來、催、申重喪之身有憚之由了、

### 十月〔大〕

一日、戊戌朝間陰、午後晴、自今日三ヶ日、大將奉幣春

日社、爲所望成就也、但公卿之後、未奉幣當社、每月朔日

外、今日凶會也、仍只付幣帛於社司、有推、然而修祓、

又遙拜、衣冠、入夜、宰相中將定能卿來、問宣命作

法、其次談雜事、

二日、己天晴、此日、自三閑院第二行幸大內、爲三大會御禊也、右大將戊刻參內、時繪螺鈿、于刻歸來語云、攝政爲三方違、可被向宇治、仍被<sub>レ</sub>忿行幸、雖被<sub>レ</sub>待中御門大納言遲參、仍大將勤<sub>レ</sub>仕召仰、無殊失云々、先於三奥座、藏人大輔定長下<sub>二</sub>日時勘文、大將結申、定長仰<sub>二</sub>々詞、或只仰召仰詞云々、今不然、大將微唯、卷<sub>レ</sub>文置<sub>レ</sub>前取笏、定長仰<sub>二</sub>召仰、其詞、召仰諸司與、不仰可中日時、常例取副笏也、而故殿令勤<sub>二</sub>仕召仰給之御記納懷中云々、仍隨其例也、移<sub>二</sub>着端座、以扇直沓之後、使<sub>二</sub>官人置<sub>二</sub>軾、以<sub>二</sub>同官人<sub>二</sub>召<sub>二</sub>外記、大外記賴業就<sub>レ</sub>軾、大將下<sub>二</sub>日時、□□賴業取<sub>レ</sub>之、大將仰<sub>二</sub>々詞、依勅申之、并召仰、可有行幸內裏、召仰諸司與、職事雖召仰之由、大策路、出御自左衛門陣、二條、西行大宮城東、將所<sub>レ</sub>語也、策路<sub>二</sub>大路<sub>二</sub>北行天、入<sub>二</sub>御自<sub>二</sub>陽明建春門<sub>二</sub>云々、賴業奉<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>了、一度稱唯退下、次以<sub>二</sub>官人<sub>二</sub>召<sub>レ</sub>辨、此問、權大納言宗家奧座<sub>二</sub>陳<sub>二</sub>官人歸來云、辨未<sub>レ</sub>參云々、行幸殊被<sub>レ</sub>忿、仍不能<sub>二</sub>相待<sub>二</sub>起座、於<sub>二</sub>中門之邊<sub>二</sub>帶<sub>二</sub>弓箭、次陣引、次右將渡<sub>レ</sub>東、次公卿列立、左大將不參、大將立<sub>二</sub>南階西、渡<sub>二</sub>階前、隨身經<sub>二</sub>池江、次關司奏、次鈴奏、少納言賴房、次寄<sub>二</sub>御輿、鳳、次源宰相中將通親、取<sub>二</sub>御劔<sub>二</sub>安<sub>二</sub>轡中、次安<sub>レ</sub>璫、次左將下<sub>二</sub>階以東格子、其<sub>二</sub>下<sub>二</sub>恐有<sub>二</sub>說字<sub>二</sub>、數刻不下<sub>二</sub>以西格子、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其故<sub>二</sub>云云、良久、右將下<sub>レ</sub>之、次乘御、大將稱<sub>二</sub>賢、次公卿前行、大將

同行御輿前右方、於東中門外溜內、東面而立、橫弓召三大舍人、二音、依不見三路、以大舍人稱唯、大將仰云、御綱張、大舍人又稱唯、於中門外、懸裾於劍、於左衛門陣、騎馬乘輿、幸大內、於建春門外下馬、入御自宜陽日華等門、先是、公卿列立南庭、大將立南階西、次寄御輿、次通親取劍璽、授內侍、次下格子、次下御、稱舞、次退御輿、次鈴奏、次名謁、次經階下、宣仁門、花德門等退出、先是、余爲方違參、御堂御所、此間大將來也、今日奉渡興福寺講堂、佛於南京云々、

三日、戊子天晴、懺法之後、沙汰可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>御法事佛<sub>一</sub>之間事、又念誦讀<sub>二</sub>心經百卷<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>法<sub>二</sub>樂春日<sub>一</sub>、又滿<sub>二</sub>不空

羈索咒千遍<sub>一</sub>、是皆大將祈也、頗發<sub>二</sub>勇猛之信心<sub>一</sub>、能<sub>レ</sub>〔々〕

祈念、未刻、定能卿、自<sub>レ</sub>院<sub>〔依總社祭院御蓮華王院〕</sub>告送云、大將殿

御事、一定沙汰候歟、承<sub>レ</sub>旨候也云々、仍以<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>示<sub>二</sub>

法印及智詮、無障可<sub>レ</sub>遂之故也、即歸宅、余候<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>之

間、雅賴卿來<sub>二</sub>余第<sub>一</sub>云々、酉刻、頭辨親宗示送、大將事

有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、又大將催<sub>二</sub>外辨<sub>一</sub>〔令<sub>二</sub>辭申<sub>一</sub>〕了、此日、任大

臣也、以<sub>二</sub>權大納言平宗盛卿<sub>一</sub>任<sub>二</sub>內大臣<sub>一</sub>、右大將良通

任<sub>二</sub>權大納言<sub>一</sub>、正三位知盛任<sub>二</sub>中納言<sub>一</sub>、從三位基家任<sub>二</sub>參



議云々、内辨權大納言實房卿、外辨上卿皇后宮權大夫實守卿云々、夜半許、大外記賴業、大夫史隆職同時來臨、依大將慶一歟、後聞、宣命使源宰相中將通親卿云々、

四日、丑天晴、依大將慶、人々少々來、又有賀札等、入夜參院、爲恐悅申大納言慶〔事〕也、依令逢愛染王護摩時給、不令逢給之由有仰、即退出了、今夜、大納言宗家卿被來、

五日、壬天晴、依御月忌參御堂、二位中將、僧都等候、大將依爲拜賀以前不參也、導師長宗、大將拜賀事可致沙汰之由、仰遣光盛之許了、又問遣日次了、

六日、卯陰陽頭泰親注申云、七八九日皆爲吉日云云、明日可遂之由致沙汰之處、自今日院中有穢氣云々、

七日、辰天晴、入夜中御門大納言被來、大將習催馬樂、此日、内大臣給兵仗番長已下、大將還宣旨、又被行除目云々、

九日、丙此日、内大臣欲申拜賀云々、然而依院穢延引、來十三日云々、智詮阿闍梨、相具宗賴參詣熊

野、余付幣物、雖重喪無憚云々、十二日、酉天晴、今夜、女房爲余見最吉夢、信助阿闍梨、出自高野始來、

十三日、戌天晴、此日、内大臣拜賀、并皇后宮入内云云、皇后宮即退出云々、内大臣扈從公卿十二人、殿上人十五人云々、三位中將賴實扈從、可彈指々々、十四日、亥陰晴不定、唐鞍修理今日了、實嚴園梨來、猶候院中、護摩延行云々、今日、女房見〔最〕吉夢、依此夢、奈良法印之許可謁之由示送了云々、

十七日、寅光盛申所々申次返事等、

十八日、卯天陰、然而雨不降、此日、右大將任大納言拜賀也、已刻、花山院大納言被來、數刻言談、大嘗會御禊、大將作法不審事等、余問之、彼父相國、仁安元年令供奉之故也、罷歸可注獻之由被答、及申刻被還了、晚、頭宰相中將定能卿來、爲訪大將拜賀也、秉燭、大納言着裝束時給螺鈿、有文帶、紫綾平緒、大股御笏等也、先降立

中門、以家司季長朝臣先申余、余不拜、光盛依所勞、今日是季、次以同人申女房、再拜、次參皇后宮、大進親經次也、

申上西門院、御同宿也、以次參院、依長緒之間、無御前召、云々、申次内藏頭季能朝、次參建禮門院、光綱、之、謁女房云々、次參攝政亭、臣、

棟<sub>中</sub>之、有<sub>二</sub>答拜、引出物馬等<sub>一</sub>云々、馬主立<sub>二</sub>寢殿前座<sub>一</sub>、儲棟廊<sub>一</sub>云々、屬從殿上人左少辨兼忠、受<sub>二</sub>取馬<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>前驅<sub>一</sub>、五位上臈前驅、給<sub>二</sub>隨身<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>例、次參內、經<sub>二</sub>陽明、建春、敷政等門、并階下等、進<sub>二</sub>弓場<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>造合間<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>西第二間<sub>一</sub>、頗向<sub>レ</sub>乾立、頭中將泰通朝臣申<sub>レ</sub>之、依<sub>レ</sub>召參朝餉方、其路經<sub>二</sub>無名神仙等門<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>沓脫下<sub>一</sub>、揖昇<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、直經<sub>二</sub>下戶<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>鬼間<sub>一</sub>參<sub>二</sub>大盤所<sub>一</sub>、女房等謁<sub>レ</sub>之、主上御寢云々、次經<sub>二</sub>本路<sub>一</sub>退出、來<sub>二</sub>余亭<sub>一</sub>、皇后宮再拜也、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>母后<sub>一</sub>之儀、先例元正拜禮之後可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>舞蹈<sub>一</sub>云々、仍今度再拜也、歸宅之後、賜<sub>二</sub>隨身腰指<sub>一</sub>、將監三匹、將曹二匹、府生已下一匹、是先例也、

隨身垂袴、番長着<sub>二</sub>方色<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>壺胡錄也、  
例、下臈襖袴、  
一員如<sub>レ</sub>例、

前驅十二人、

季長朝臣、

賴高、上野守、

國行、前馬助、

長俊、

經泰、

貞俊、筑前守、

兼親、

保行、

信政、

兼時、

藤光茂、皇后宮權少進、

源國基、大將勾當、

寬治知足院殿、自<sub>二</sub>中納言大將<sub>一</sub>拜<sub>二</sub>任大納言<sub>一</sub>、御拜賀之日、諸大夫前驅十二人也、今追<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>、但彼度、殿上人前驅有<sub>二</sub>六人<sub>一</sub>、今度有<sub>二</sub>所思<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>殿上人<sub>一</sub>、內大臣拜賀、爲<sub>二</sub>時之珍事<sub>一</sub>、似<sub>二</sub>一舞<sub>一</sub>之條、見苦<sub>レ</sub>之故也

共殿上人一人、

左少辨兼忠、

十九日、丙辰自<sub>二</sub>院賜<sub>一</sub>大將可<sub>レ</sub>騎之馬、黑鹿毛、飾<sub>レ</sub>之敢無<sub>二</sub>驚氣<sub>一</sub>、明後日拂曉、可<sub>レ</sub>持來<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>召<sub>二</sub>仰之<sub>一</sub>、陰陽頭泰親朝臣來、召<sub>レ</sub>前問<sub>二</sub>天變事<sub>一</sub>、密々令<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>奏案<sub>一</sub>、

廿日、丁巳天晴、入<sub>レ</sub>夜向<sub>二</sub>定能卿六條坊門大宮亭<sub>一</sub>、明日爲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>立兩息<sub>一</sub>也、余兩息同車、女房姬君同車、共召<sub>二</sub>人車<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>前驅<sub>一</sub>、常祇候之男共乘<sub>レ</sub>車在<sub>二</sub>車後<sub>一</sub>、出車二兩不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>衣、每事最密儀也、

廿一日、戊午天陰、此日、大嘗會御禊行幸也、三條末北邊、節下內大臣宗盛<sub>有<sub>二</sub>兵仗<sub>一</sub></sub>、御前長官別當實宗卿、御後長官右兵衛督光能、裝束司長官左衛門督時忠、次官左中辨兼光等也、

已刻、兩息着<sub>二</sub>束帶<sub>一</sub>、兵衛大夫忠光奉<sub>二</sub>仕之<sub>一</sub>、件男在<sub>二</sub>二位中將兼房許<sub>一</sub>、余兼日願<sub>レ</sub>之、家無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>此役<sub>一</sub>之人、

故也、大將裝束如例、不着<sub>二</sub>打衣<sub>一</sub>、沉地銀襪、少將裝束、網腰襪、黃單襪物半臂、同色紅裏下襪、(文共爲形)、濃蘇芳襪物表袴、雖可着打衣、數重有<sub>二</sub>着<sub>一</sub>用之煩、仍略不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>着<sub>一</sub>之、紫壇地螺鈿野、紫壇地螺鈿、平胡蘇、<sub>二</sub>口口(卷弓不口口)魚袋、如例、平胡蘇丸緒、淡也、相具參內、別車、

共人基輔朝臣一人、前驅大將四人、賴高、兼親、國行、兼時、少將二人、長俊、信政、

大將依<sub>レ</sub>未<sub>二</sub>着陣<sub>一</sub>、俳<sub>二</sub>侗南殿御後邊<sub>一</sub>、少將於<sub>二</sub>左衛門陣座邊<sub>一</sub>、相待出御、騎馬供奉云々、先是、節下內大臣參入、今日即着陣云々、而依<sub>レ</sub>無便宜、無申<sub>二</sub>文<sub>一</sub>、丞相着文例、古來未聞、只有<sub>二</sub>藏人方吉書許、頭辨親宗下<sub>一</sub>之、便返<sub>二</sub>下之云々<sub>一</sub>、大辨賜<sub>二</sub>藏人方吉書<sub>一</sub>、一件事等、左大臣今案隨<sub>二</sub>時議<sub>一</sub>之計云々、次女御代參入之後、節下就<sub>二</sub>節旗<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>行<sub>一</sub>鼓<sub>一</sub>、不待<sub>二</sub>出御<sub>一</sub>、不奏<sub>二</sub>仰<sub>一</sub>之、康治例歟、

次出御、右大將一人立<sub>二</sub>階坤<sub>一</sub>、乘御了、欲<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>昇<sub>一</sub>出御與<sub>二</sub>鳳皇之間<sub>一</sub>、左大將參入云々、無<sub>二</sub>鈴奏<sub>一</sub>、閑司奏、警蹕、御綱等、出<sub>二</sub>御自<sub>一</sub>承明建禮待賢等門、經<sub>二</sub>大宮二條京極三條等路<sub>一</sub>、御<sub>二</sub>頓宮<sub>一</sub>、未刻出御、日沒之後着<sub>二</sub>御頓宮<sub>一</sub>云々、節下大臣兩度落馬、待賢門前一所、節旗柄折了、是不吉之兆也云々、

入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>頓宮西幔門<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>公卿幄北<sub>一</sub>、先例多經<sub>二</sub>南<sub>一</sub>、今日依<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>北云々<sub>一</sub>、

着<sub>二</sub>御膳幄<sub>一</sub>云々、次第事了、亥刻還宮、大將子終來<sub>二</sub>九條亭<sub>一</sub>、余相<sub>二</sub>具女房<sub>一</sub>、大將女房同前、「最密々見物」、行列次第散々、近代之例也、  
法皇有<sub>二</sub>御見物<sub>一</sub>、二條鳥丸南時、

左大臣、大納言兼雅、中納言朝方、知盛等、着<sub>二</sub>衣冠<sub>一</sub>祇候、

御<sub>二</sub>棧敷<sub>一</sub>云々、左大臣之外三人不<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>奉行幸<sub>一</sub>、祇候御棧敷、未曾有事也、

又上西門、八條院、建禮門院等、同有<sub>二</sub>御見物<sub>一</sub>云々、傳聞、關白入道被<sub>二</sub>見物<sub>一</sub>云々、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然事歟、後聞今日違例等、

一未<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>御禊幄<sub>一</sub>之前、供<sub>二</sub>查御膳事<sub>一</sub>、

一公卿先列<sub>二</sub>西幔門外<sub>一</sub>、次列<sub>二</sub>御膳幄幔內<sub>一</sub>事、

一獻物無<sub>二</sub>其實<sub>一</sub>、仍折<sub>二</sub>松紅葉等枝<sub>一</sub>代之事、古來未聞、

一狂物一人亂<sub>二</sub>入御膳幄<sub>一</sub>、吐<sub>二</sub>種種狂言<sub>一</sub>事、途擲<sub>二</sub>得之<sub>一</sub>、之詞等、皆不快事云々、

一節旗柄折事、  
大將供奉儀、付裝束已下雜事、  
少將供奉儀、付裝束已下雜事、  
廿二日、已山階寺別當法印被<sub>レ</sub>來、依<sub>二</sub>先日之招請<sub>一</sub>也、

竊示付祈、依夢想告也、

廿三日、庚申天晴、左中辨兼光補家司之後始來、及晚、大夫史隆職來、語頓宮狂男之間事、未曾有之珍事也、誠是亂世之至也、

廿四日、辛酉大外記賴業來、語御禊之間違例等事、

廿五日、壬戌天晴、法性寺座主被來、

廿六日、癸亥入夜、右少將雅行來、大將第、申〔春日〕使陪從裝束事、答可調送之由云々、

廿九日、丙寅午刻飯宅、入夜大夫史隆職來、○來下恐脫談或語字、

世上事等、及深更歸了、

卅日、丁卯雨下、祈願文清書、遣法印之許、於寶前可讀申之故也、自明日一十箇日可參籠御社也、今日、佛殿聖人來、

## 十一月

一日、戊辰天晴、洗頭行水、自今日一七箇日可始不空羅索念誦、今日五千反、又心經百卷、

二日、己巳午上雨下、未刻以後天晴、念誦萬五千反、三時、五千反、每日、之別、如此也、心經百五十卷、奈良法印返事到來、自朔七箇日可參、心經最勝王經等、可奉講讀也云々、

四日、辛未天晴、奈良法印返送願書、示云、此御願爲殊勝事之故歟、殊信心罷發、決定成就歟云々、見此狀、彌增信力者也、右大將春日祭使右少將雅行之許、遣陪從裝束六具、中將八具也、

青色單、半臂、下襲六具、裝平裝二、

青末濃袴、布、濃色合下袴引重之六具、一袋、

已上二袋入長櫃、以大將職事信政冠、爲使、出納相具也、例也、或以侍爲使、依便歟、近代多用職事一歟、

此日、依重服、不奉幣、仍又不神齋、

五日、壬申晴、春日祭也、神齋如常、雖重服爲神事、

先例也、仍不參御月忌佛事、於心經不空羅索咒等者、依爲御社事猶修之、雖憚僧尼、於奈良法師者不憚、爲先例之故也、

六日、癸酉三時念誦如日來、明日着陣之由、仰官外記及頭辨等爲光盛奉行、

七日、甲戌三時念誦如日來、

天晴、此日、右大將任大納言着陣也、不着本陣、只着仗座、承德元年知足院例也、余又如此、申刻出立、依吉時也、先仰光盛、使陰陽師勘申日時、今月今日申時、



陰陽頭泰親朝臣可參入、而依候今熊野御次參內、時給銀、紺着精進屋、今進其忌泰茂、仍勘文父子連署、地不結、陣之日、不向可禮之人、仍不來余第、自商家所出立也、隨身裝束如例、前驅六人、上野守賴高、前馬助國行、但馬權守長俊、散位信政、安藝權守經泰、散位兼時等也、永久例、伯耆守基輔朝臣、六人也、共殿上人二人、右兵衛權佐盛定等、承德、永久有扈從公卿、仍相觸宰相中將定能卿之處、依候今熊野御共不來、須延引之處、來十八日女院御法事、尤可豫參、而着陣以前可有憚、彼十八日以前無日次、仍今日不延引、仰檢非違使基廣、洒掃路次如例、亥刻歸來、依大辨遲參懈怠云々、抑、今日着陣、大將失禮、是余過怠也、非參議大辨先不着橫切座、直着床子座、文見之後着座、有申文、先例也、或說、雖非參議、先着候氣色、而不教此議、都忘却之故也、愚頑餘身、殆及子孫、彈指而有餘者也、但其間、大辨作法又希異也、大將遲着端座者、須着座之後、先問不審之處、無左右申之申文之由、即顧盼、仍史捧書狀、入宣仁門、于時、大將追歸着移着、移着二字一本作端座、此間、親宗起座、當背於我座、敬屈而立云々、未曾聞之作法也、

今日、自奈良法印許、參社滿七箇日了之由、又所作目

錄等示送之、又殊信心罷發、先々度々雖參龍社頭、未有如、此信心起事、御願成就不可疑云々、可悅々々、

八日、乙亥天晴、今日々中結願念誦心經千百卷、念誦十一萬反也、

十一日、戊戌此日、被行國司除目、被加任衛府少々云々、法性寺座主被來、

十四日、辛巳天晴、此日、月蝕也、虧初寅刻、復末明日辰刻云々、大將「方」、智詮「率三三口僧修三」「字」金輪念誦、同女房方「請僧都弟子三三三」修如意輪念誦、又大將祈、令經圓阿闍梨修八字文殊供云々、余方、實嚴闍梨率「三三三」三三弟子、修一字金輪念誦、各慎之由、勘申故也、

十五日、壬午天晴、此日、月蝕也、明曉寅刻虧初、辰刻復末、然而依爲今日之月、爲望蝕也、今日、於院被行清暑堂御神樂、拍子合也、實國、實家取本末柏子云々、

十六日、癸未天晴、爲見明後日御法事堂莊嚴、參御堂、依明日神事也、今日早旦、泰親朝臣來語「天變事、有希代變等云々、子細在別紙、俊經卿進願文

草、

十七日、申天晴、吉田祭也、神齋如恒、有安來、大將習

笛、遣願文草於忠親卿許、爲清書也、誦誦同之、

權右中辨行隆爲院御使來云々、大神宮禰宜等同意

東國之由有風聞一條、被尋問、文書如此、可有罪

科哉否、可計申者云々、余申云、縱雖祭主、同意謀叛之

如文書者、雖證據不見、猶被尋問、疑之者、隨所犯之實、可有沙汰歟、但如此浮說是

十八日、酉天晴、此日、故女院周閔御法事也、依大治

四條宮例、修曼陀羅供、中陰雖爲七僧法事、周閔如

此、又奉供養御墓所小堂、仍卯刻着烏帽直衣、伴

大將、衣、布參御墓所、八葉車、前驅二導師大原聖人、號本

件人依爲御善知識、殊所請也、請僧三口、留候僧、淨房、

塔中、素奉安石卒都婆、其外無別佛、又奉副供養

法華經一部、說法供養法樂了、引布施、其後、直參御

堂、奉居御佛、中丈六、依無所、便立微座、奉佛師明圓給

祿、被物次導師之承仕等參上、傍曼陀羅供壇、此間、

山法印僧都、二位中將等參上、其後、女房爲聽聞、參

入、午終、上達部少々參上、相續導師參上、未一點事

始、先召院司基輔朝臣、問事具否、申具了由、仰可

始之由、即進殿上座、告示之、即中御門大納言已

下、公卿着廣庇座、次導師權僧正公顯率讚衆廿口、

此中、僧綱四口、導師所相具十五口、經南庭、有達道、不用參

度五口、本御前僧也、忠立不參、上、昇自南階、執蓋如常、自門前灑水了、越香象、行道

三匝了、導師着禮盤、讚衆各着座、次惣禮、次啓白、

次讀願文、件願文、置次誦誦、本院三百段、余二百段、女房及右

僧都等、無別導師也、次說法、次三禮、雖可敷座、井

同前、無次九方便、次供養法、此間、誦誦、次後鈴了、行

道三匝之後、導師着下座、次撤經机等、又僧綱從僧

等、撤草座、香爐宮等、初欲着之時、次引布施、宗家卿先

諸院司不取布施也、兼雅卿已下取、賜導師、布施了、讚衆

布施中間、別當經家朝臣自御所方取御衣、賜導

師、大治、賜讚衆布施之終頭、導師早出之由、執蓋之

者遲參、又讚衆等、隨賜布施、且退出之由、狼藉無

極、導師早出、尤違禮也、于時日沒之程也、事了、人

人退出之後、法印、二位中將等退去、次女房歸宅之後、

余相具大將退出了、

今日、參入公卿、

大納言宗家、兼雅、

中納言忠親、前中

參議、定能、經房、

## 散三位賴輔、

御願文、作者式部大輔俊經卿、清忠親卿、

諷誦文、同前、

余、及大將諷誦、共加自署、但御墓所堂供養諷誦、家司加署、大將不修之、是又先例也、事未始以前、僧等申云、籠僧五口、其座可在別歟、將任膺次、可居歟、先例共存、可隨、仰云〔云〕、仰云、不知案內、只存例可進止、但別座之條、其所狹少之間、各難計歟、只任膺次、別座行、其不可苦歟者、仍任膺次着座了、佛經、布施等目錄在別、

此日、大將候篋中不出座、永久三年三月十二日、京極北政所、別座行、能有議定、猶爲子孫之人、所周闕法事、故殿爲大納言、不寢案之習、不願座之故也、仍隨其例也、

十九日、丙戌去夜於攝政第、有清暑堂御神樂拍子合事云々、

廿一日、戊戌大原野祭也、神齋如常、

廿二日、己丑隆職、送今度大嘗會式、左大臣造云々、紫宸殿儀、委可被載歟、而不審甚多、

廿三日、庚寅此日、大嘗會叙位也、於攝政直廬行之、執筆源宰相中將通親、參入公卿、中御門大納言只一人云々、件人早出之間、無入眼之上卿、及曉更之所、

間、攝政逐電退出、腹立云々、親實朝臣捧叙位、雖催上卿、敢無指出之人、空曙了云々、希代之勝事也、近世之爲體、悲而有餘者歟、今夜、左大臣被聽、

盤車、明日、駕盤車可參內云々、

廿四日、辛卯天晴、大將少將密々見標、余不酉刻歸來見物、

云、標申刻引云々、悠紀行事左中辨兼光、國司重章、主基右少辨兼忠、國司清邦、故邦綱于云々、悠紀標在前云々、此日、廻立殿行幸也、

後聞、戌刻行幸、前行左大臣云々、左大將雖不合

卜、着小忌供奉云々、近代例也、中古以往雖爲大

將、不合卜者、多候大忌、右大將依故女院昔年、揭

焉之出仕、大將必可備職、掌事之外也、有憚之故、不參童女御覽、

今夜行幸雖無揭焉之儀、又不可必備其儀之上、

聊有相勞事、不出仕也、仰湯殿右少將實明云々、

大忌公卿僅三人、各不着幄、俳侖便所云々、又左

大臣候御在所邊之間、前驅等列居其前、雜人圍繞

云々、古來不聞事也、大嘗會、鳥居之內、一切不入

大忌人也、末代之陵夷敢不可云者歟、昨日叙位、攝

政早出、叙位空在其前、及曉更、朝方卿參上、參空

所、自取叙位、向陣云々、〔事〕涉諱忌者歟、未曾有



例也、今日、大將進膳部代三人、各着私裝束、其色目、

冠、垂櫻、日小忌、青櫻、非所司小忌、私所儲也、

柳色、裏青、面白、半臂下襲、例表袴等也、

〔傳聞、左大臣先蒙登車宣旨、而忽不能調車之由被申、仍被改下牛車宣旨云々、甚過分事也、依自由申狀被改宣旨、朝廷之輕忽、爰而炳焉者歟、〕

廿五日、壬辰天晴、此日、大嘗會辰日也、內辨左大臣云

云、戌刻、右大將參內、飾劍魚袋如例、亥刻事始、大將勸外

辨云々、其座如例〔節〕會、兩度就外辨等、等如

式、近代、八省宴會、全不就外辨云云、仍必可着之由、無所相含也、又近例、大嘗會外辨不

被問諸司、寬治、康治例也、寬治上卿右大臣顯房、康治上卿中院右府雅定、此事

無理、勘舊例、長和、齊信卿問諸司之由、見權大

納言〔記〕、仍仰可問之由、其詞、中臣大舍人刀禰列等也、但中臣、長和問之由、見同記、

始就外辨之時、上官不着床子、仍不能問、後就

外辨之時、上官着座、仍問之云々、此事頗失也、〔其

故〕者、事不始以前可問也、何況中臣者、已終其役、

退出之後也、主基着座之間早出云々、大將語云、祭主

奏壽詞之時、諸卿跪候如例、辨奏目錄之時、諸

卿成疑、大將稱不然之由、諸卿從之云々、又供御

膳之時、自東階供之、仍諸卿可起哉否有沙汰、遂猶立云々、此事太失也、八省之儀、南面有三階、或用中階、或用東階、而紫宸殿之儀、南面階一也、東面階者、已雨儀之路也、大極殿之儀、雖無中階之說、南殿之儀、猶可用南階也、況彼已有中階之說、是〔豈〕不用南階哉、何況用雨儀之路、旁無所據事歟、又渡主基之時、被渡階前了云々、此事如何、須經階下也、大極殿、無階下之路、紫宸殿之習、未聞〔渡〕階前之例、里內渡階前之時、先奏事之由、或申執政蒙許、經此路者也、今於大內被行大禮之時、雖其所、便宜可有進退也、就八省之例、渡階前、可謂守株者歟、又主基內辨兀子立孔雀間、尤可然、但愚案、暫可放右近陣板敷歟、若雨儀之時、公卿壇可立校書殿之故也、如此事、已大事也、〔委不〕被搜行、後鑒可耻者歟、紫宸殿大禮今度始之、後代之主、偏取今例歟、八省之造營、土木難被終功之故也、凡宴會之儀、見新式、標引立承明門內、門小、山大、仍兼有沙汰、欲縮寸法、有禁忌、不引入承明門者、可毀禮、仍別々造山天、取放天引入天後、如本指合云々、殿



庭裝束見指圖、仍不記、

今明兩日、進膳部代、午日不進也、

廿六日、巳天晴、今日內辨、左大將云々、

御膳自南階供之、可謂存禮、宴會了、有清暑堂

御神樂、於露臺、有拍子、本實國、中將雅賢朝臣、前笛、

泰通、筆策、定能、和琴、忠親、御遊、笙家通、等兼雅、自今日、

參御堂、讀懺法、每日三時、來廿八日口經加行也、

廿七日、甲天晴、內辨左大將云々、親宗朝臣、內辨事

催右大將、然而辭申了、今日、山僧都被修少佛事、

導師性圓、說法無可無不可、今日、三時懺法如昨、

今度一日經殊致如法潔齋者也、依有等夢想

事、加六根四悔之禮拜、可信可貴、

廿八日、己雨下、寅刻懺法了、書始之條、大將已下舊臣

之男女倍從等廿餘人、手自書之、書手皆三日潔齋、

讀懺法、各於家、讀之也、申刻書了、酉刻、導師參上、禮部、即事

始、說法優美、衆人拭淚、於澄憲可謂得日、誠珍

重也、此中釋云、一切女人、三世諸佛真實之母也、一

切男子、非諸佛真實之父、故何者、佛出世之時、

必假宿胎內、縱爲權化胎生之條無論、於父者

無陰陽和合之儀、身體髮膚不受其父、仍無父子

之道理之故也、依之言之、女者勝男者歟云々、此

事、尤可謂珍事有與之言、

廿九日、丙晴、懺法之後歸宅、自今夕、滿愛染卅萬

遍、大咒、

## 十二月大

二日、戊天晴、此日、自大內幸閑院第、右大將供奉、

左大將、其後參法成寺御八講、今夜、南京堅義之日也、

探題別當法印、精義東大寺辨曉律師云々、

三日、己天晴、今日、奈良法印被來、數刻談話、先日祈

之間有夢想事、仍令聞其事、有隨喜信伏之色、

四日、庚法成寺御八講結願也、

五日、辛天晴、此日、故院御正日也、依大治例、無別

法會之儀、導師覺智僧正也、雅賴、定能等卿參入、依

爲密事、不觸他卿等也、殿上人已下衣冠、公卿直

衣也、但雅賴卿、兼示之、直衣、自故院、若必可參、先布衣如何、

堂童子二人、今日此次申上、一閱之間、妙經三千部轉

讀、事訖、例時結願、又賜小施物、護摩、同今日結願、

事訖參御裏所、右大將相伴、悲淚難抑、大將有難

忍之色、見之彌焦、肝膽、慙而歸宅、

六日、壬天晴、入夜、密々向法性寺座主房、廿人、皆乘車、爲結緣灌頂也、若淨衣鉢色直衣、指其等也、若烏帽、于時、胎藏供養

〔法〕中間也、于刻打胎藏、先法印被打了、至門前、着袈裟、五條、於七條三條、塗香、合香、灑水、覆面、已上教授人授之、者、入袋懸左臂、法橋觀性動之、

越香像入堂場、先結金剛薩埵印、教授之人引、其中指之端、令到壇前、令夾花枝於中、其中指起信心、

奉打之、〔其〕後登蓮臺、受法冠、師主僧正全玄、授印、真言等、其後解法冠、歸出、撤覆面三衣等、

歸休所、寅刻、打金剛界、其儀同前、

其後、謁法印、被見布施目錄、大過差也、余相其野、密々相加法、印布施給之、之後歸宅、天漸曙程也、

抑、今日〔之〕結緣、非一世二世之宿緣、誠成佛之勝因、何事過之哉、可恐可悅、

七日、癸此日、秋除目也、執筆左大辨經房云々、少將

任中將、尤悅思不少、大將自四位侍從任中將、不經五位、中將此散其遺恨、如存拜任、尤可悅

可悅、今日、請實嚴習愛染王法之間事、自今夜、始其供養法、

八日、甲辰三時行愛染王供養法、

十日、丙午日中時結願供養法、今曉、女房見吉夢、折節

尤可悅々々、今夜被行下名云々、經家任宮內卿、左衛門權佐親雅補五位藏人、檢非違使明基來、申犯人之間事、於別當門前被問之處、申狀有相違云々、別當之沙汰、甚有偏頗、如忘耻云々、今夜有仗議云々、神服使空歸洛事云々、上卿左府、職事頭中將云々、

十二日、戊申雨下、入夜爲方違參御堂御所、觀性法橋來、法印使也、

十三日、己酉陰晴不定、午刻歸宅、傳聞、親雅依補五位藏人者、攝政廐司、所望之人繁多云々、又聞、去夏國

司除目執筆經房、兼國任近江權守、其事院不知食、執筆謀計之由有沙汰、今度叙位、漏加級之恩了、其事攝政爲自失、非執筆枉惑之由被稱云々、

十六日、壬子入夜、左大將以使者遣基輔之計、示兼重犯人之間事、子細返答了、

十七日、癸丑史持來法勝寺大乘會日時僧名、

十八日、甲寅陰晴不定、大將教節會內辨事、有習禮、申刻、靜賢法印來、多談世上事、

十九日、乙卯天晴、此日、於御堂修彌勒講、年來、故女

院御時、雖被行此講、關東北陸御領等、依路寒、用

途不通之由間被止、每月御講等之中、同以停止、而

故院御遷化、適相當五日、自明年正月、每月行三件

講、可用御月忌也、仍以吉曜、今日所始行也、申

刻、參御堂行之、僧三口、各布施一袋、捧物一也、是

年來例也、已刻、信範入道爲攝政使來云、明春可行

臨時客、爲尊者者可來云々、答曰、故院御服、一

期着之、今月御忌月也、仍不能出仕、元三之間、除

服之後、始出仕、無先例之上、非無憚、仍不可出

仕之由、素存知之間、忽出仕不可叶、又此條無矯

飾事也、仍不能參入者、信範退歸了、今日、頭辨親

宗傳院宣云、以書札示、女房淨土寺堂可有額、淨金、國行之許、可令書進者、申承了之由、女房、御愛物、也、其名丹波、

此日、臨時祭也、使基輔朝臣、給馬鞍、平緒等、上卿內

大臣被奏宣命、大納言不候庭座、及秉燭云々、

廿日、丙辰天晴、此日、中將拜賀也、兼日告兵部省、并

仰本府、又觸所々、申次皆家司季長朝臣奉行也、申

刻、着束帶、色目如常、茶手、御給、大股、御旁、瑞雲帶、此間、兵部省

持參移文、給祿如例、酉刻、先參院、申次判官代經仲、仰、院自昨參、龍清水、

寺、七々日可有御參籠云々、其後、年內無日次、仍今上西門院、

日、存如在之禮、所參入也、件御參詣、密々之故也、申次經仲、宮職事也、宮、已上皆

宗朝臣、八條院、朝臣、皇后宮、司等、皆稱、障之故也、

同居八條院御方、有女房召、次參建禮門院、申次判、官代光

綱、次參攝政第二之間、依官奏被候內云々、仍直

參內、申次少將、顯家朝臣、參御前、攝政被候御前、被稱同事

之由云々、其後退出、基輔、宗雅等朝臣扈從、賴高、國

行、保行等、騎馬在共、本府差進隨身五人、番長一人留、候、垂袴也、

近衛四人者、各狩胡錄、自納殿、共宣也、本隨身二人布衣、候雜色

列、不帶銀、一人花田、一人袴、葉、不賜當色、各令着也、

廿一日、丁巳天晴、大將方有密々詩講、余行向、入夜歸

來、

廿二日、戊午天晴、早旦、親性法橋來、未刻、法性寺座主

被來、晦日可登山、即無動寺拜堂云々、

廿四日、申庚大夫史隆職來、召前談雜事、

近日公事陵遲、不可已敢云々、

廿五日、酉辛天晴、左大辨經房來、余調之、數刻談雜

事、今日、右衛門權佐定長申畏云々、其所行向、忠

親、朝方、兩卿相訪、過分也云々、入夜、光長來、召藤

前仰雜事、

廿六日、戌壬天晴、定能卿來、大將密々有會之習禮、此

日定考云々、

廿七日、亥癸天晴、中御門大納言被來、又宰相中將定能

卿來、大將在<sub>二</sub>其座<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>小盃酌事<sub>一</sub>、大納言有<sub>二</sub>故障<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>臨時客<sub>一</sub>云々、仍大將所<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>用意<sub>一</sub>也、然而猶有<sub>二</sub>未練之恐<sub>一</sub>、猶大納言相構可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>參之由示了、

廿八日、<sub>子</sub>甲今日、光長補<sub>二</sub>余方家司<sub>一</sub>、季長朝臣成<sub>二</sub>令旨<sub>一</sub>、政所事可<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>之由、同仰<sub>二</sub>下之<sub>一</sub>、光盛寵居辭退之替也、

卅日、<sub>丙</sub>此日、大嘗會御調度、<sub>○以下</sub>追儺之次、有<sub>二</sub>除目僧事等<sub>一</sub>云々、

右養和二年<sub>壬</sub>改為壽永元年此一帙墨付百拾三枚者以三緣院道教公眞蹟松殿右幕下道昭卿先年被繕寫之了抑法性寺忠通公之有職松殿基房公面授而傳于後法性寺兼實公且加日錄號玉葉爲後昆之軌則不讓他十襲而可祕之者也、

于時慶安二年<sub>丑</sub>己正月仲旬陶化翁(花押)誌焉

右養和二年<sub>壬</sub>一冊者慶安二年<sub>丑</sub>己三月廿三日關白昭良公被借用之同年季夏朔日返給者也陶化翁(花押)記焉

玉葉卷三十七終



玉葉

卷第三十八

自壽永二年正月  
至同九月

壽永二年癸春夏秋

正月〔小〕

一日、丁卯陰晴不定、自去夜痛肩、仍不拜天地四方、但備裝束如例未刻、手水、陪膳範季朝臣、齒堅如例、已

剋、大將來此第〔直衣〕申刻、着束帶〔飭銀魚袋、紫綾平結〕參院、一

員如常、前驅五位六人、基輔朝臣爲扈從、攝政家無

拜禮、未知其故、後聞、長承二年故殿初被行臨時

客、無拜禮云々、被追彼例、歟、及子刻、大將歸

來語云、院拜禮、攝政〔被〕、左大臣內大臣以下公卿濟

々、次建禮門院拜禮、〔六波羅〕攝政不練云々、次參內、先

小朝拜、〔左大臣雖參、早出、內大臣未參之〕次節會、內辨內大

臣、頭辨親宗朝臣、仰內辨之次、可停止音樂、并國

栖笛聲之旨仰之云々、大將爲外辨上首、問諸司

云、參列之間、左大臣、三條大納言等加上、國栖奏之

間、大將退出了云々、

除夜追儺次、有除目、僧事等云々、今日、隆職注送

聞書、家俊任少將、可謂過分云々、

備後國收公、帥入道、素院御氣色不快之人也、尤不便

不便、又三井寺道證法印被任權僧正、度々天變御祈

施効驗云々、又山階寺別當法印信圓任權僧正、是又

雖爲理連、年齡太少歟〔今年廿一、〕

節供如常、〔以政朝臣勤仕之、季長朝臣陪膳、〕

二日、〔戊辰〕陰晴不定、手水陪膳季長朝臣、齒堅如昨、此

日、攝政家臨時客也、〔天下無爲之時、可有如此之宴飲也、故殿攝政之後、數年不行給、近日之天下、〕

不相、〔歟、〕左大臣、內大臣爲客、申剋、右大將參彼第、亥

刻歸來云、參入已後及半時、內府參入、左大臣、大將

參以前被參、數剋、〔及三時、〕被立門外、奇代之珍事

也、大將沓、兵衛佐親能取之、〔定能細息也、〕每事如例、但不

敷改大臣齒云々、又五獻、併先主人取、一度も無

客先受之度云々、是又未曾有事也、內大臣着火色下

重、紅梅地平緒云々、今日午時、花山院大納言被來、

余調之、

三日、已天晴、手水陪膳高佐朝臣、齒堅如例、申刻、左大辨經房來、余着鳥帽直衣、謁之、數刻談雜事、入夜定能卿相具其息兵衛佐親能來、謁之、又頭辨親宗朝臣來、又謁之、此次親宗仰云、御齋會內論議可被行哉否、正月十四日高倉院御國忌日也、被問例之處、寛德三年正月十四日御論議如例、固關內、正又永祚之比、延喜御國忌日、被行御讀經仁王會等、是雖廢務、猶被行殿重佛事、加之、依遣詔被停止國忌、荷前等了、但依圓融院御國忌日、非廢務被延大原野祭了、是爲神事、故歟云々、已上、外記申狀大概也、委載勅文、悉不覺悟、余申云、云加持香水、云御論議、鎮護國家御祈也、今度被止此儀者、已永可被止也、萬歲之寶祚之故也、被遂行之條、旁可無其難、故何者、寛德例雖非正日、固關之中憚之、輕重殊無差別、雖爲國固關之後、今被停國忌之故、非廢務被行公事之例、已以廢務、校量彼是其憚可同歟、然則、兩方之例、蹤跡共存、何炳焉、雖非當時之國忌、廢務被行、他事尤可准據、況事非遊興、被遂行之條、可無殊難歟者、此次、右大將正二位事、示付頭辨了、此後〔行隆〕來、謁之、東大寺大佛奉饗事、去年依爲大嘗會年、可有憚之由有沙汰、頗屬和暖可遂其事云々、但法皇

可臨幸之由先日奏聞、頗有可然之御氣色、覆奏之後可一定云々

四日、庚天晴、大將來、有節會習禮、今日不違方、依吉曜、今日初念誦、不憚衰日也、

五日、幸天晴、此日參御堂、依彌勒講也、即歸宅、叙位執筆左大辨云々、頭辨、大將可勤、七日內辨之由催之、幼年者不可叶之由、人々答了、

六日、壬陰晴不定、時々小雨、披聞書之處、大將叙

正二位、悅思不少、中將入勘文云々、而不被叙、職事不驚奏歟、尋遣頭辨之處、大略不足言、仍以定長申入之、今日、大將明日內辨習禮也、花山大

納言、源中納言、宰相中將等來會、宰相早出了、有忍事云々、其後、大納言、數刻言談、深更歸了、五位藏人親經來云、明日

節會有可承事者、可存知云々、未刻可參陣之由答了、又大夫史隆職來仰同旨了、頭辨重催云、內

大臣物詣、內辨如法闕如了、必可參云々、申承畢之由了、大將祈、自今日、使實殿阿闍梨修不空羅索

供、三ヶ又仰至玄僧正、信助等、合祈念、示送無動寺法印之許了、當時被住又明曉、春日社可奉幣帛、

〔大將〕依叙正二位、可立叙列、此事大事也、仍今

日與人々、終日議此間作法、

七日、酉朝間天陰、午後晴、此日、白馬宴會、右大將始

勤仕內辨、即立叙列、近年、位記案立樣、相違記文

意、仍仰遣子細之處、猶稱爲三代々例之由、不承

引、追可尋證文、叙人標事、尋大外記賴業、可隨案

立樣之由令申、其理可然、申刻、大將參內、裝束色目如

魚袋、紫綾平、丑刻、歸來語云、依攝政通參、戌訖被仰

內辨、經、先有加叙事、使左大辨經房書入之、通親

云々、入宮奏聞、召大外記、問諸司、六位外記持參

外任奏、今日不申馬、申代官、未返給外、次下外任奏

之後、着靴押、笏紙、給下名、下三省、着元子、內侍

出受叙位宣命、給位記宮、謝座、昇殿等儀皆如常、

但依不解位記宮結、下殿催叙列、復座之後、諸卿列

立、宣命使未降以前、宣命使實守廟、依有上階、用納

自東階、右廻向階揖、寬治八、出自軒廊東間、練口

練行南、雖入夜、爲初度之上、又爲參、到二位三位標東、

未一揖、曲折揖、天慶、折西經三三位標、一列、後先立本

位標、今日、不分別正從、只立二位三位、揖、次宣命使、下

殿就版、宣制兩段、共可再拜、而後段拜舞云々、上

首賴盛卿、失儀可然、叙人、公卿復座之後、輔代取位

記之間、大將揖、離列進立輔代東、少後、無揖、余廻、最接

也、輔代相共跪、置笏於右、取位記、乍居一拜之後、取

副笏一起、無、左廻、宣命使作法、自後立新叙標、同量

從、可立、標、揖、次他叙人等、給位記畢、輔代退之

間、大將已下相倚馳道、去留共無揖、惟南所乎、依予人々相

也、拜舞、依天永例、進、公、之後揖、右廻經、列前、出、東中

門、丁、軒廊程、練止、常、抑、天永例、左廻出、承明門、今度

可、出自、東中門、仍右廻也、猶可、左廻之由、定有、令、存之

親族拜畢、復座之後、寬治、天永、更下、殿見、白馬奏、進

弓場、奏聞、一府奏無、禮紙、仍以、懷紙、用之云々、此事兼不、教、

之時用之、三獻之後、讓、賴盛卿、退出、不取、笏、

〔內辨立叙列一例、〕

抑、內辨立叙列一例、延喜、貞信、天慶、宮、寬治、堀川、左

永、相國、等也、事已希代、人稱、珍重、就中、天慶例爲

大納言、右大將一族之嘉例也、年齒僅十七歲、白馬節

者、第一之大事也、先例多勤、豐明、今度依、闕如、有

催、且爲、不失、珍事、愁令、出仕之處、云、節會禮

儀、云、叙列作法、無、一失之條、家之冥加、神之助也、

可、悅々々、後代定爲、希代之例、歟、

中將良經今日叙了、兩息同時浴、朝恩、可、謂、面目



歟、

八日、戌天晴、藏人少輔親經來、示二去夜大將內辨人々感歎之由、又實守卿送レ札感レ之、又人々多感歎之由所傳聞也、左大臣以二其子賴實說一具聞レ之、被レ拭感涙云々、

九日、亥雨下、中御門大納言被レ來、大將謁レ之、問二政之間作法、今日、召二陰陽頭秦親、問二政始日、及中將拜賀日次等、光長奉行、政始十六日、中將拜賀廿二日廿八日云々、

十日、子天晴、少納言重綱來、示二一日大將內辨事、經房卿殊感申之由、

十一日、丑天晴、大將供二奉修正御幸、法皇幸、直衣出衣、紅梅織物三重表、薄色堅文織物奴袴、隨身上臈布衣、冠如例、唐衣上下、下臈布衣帶劔又如常、已上裝束、頗遲參、出、門給之間參會、即帶劔、着半靴、騎馬供奉、舍人居飼裝束又給レ之、御馬、舍人黃香、移馬舍人、青丹、內大臣同供奉云々、上臈隨身等、或打金付レ之、或裁入レ錦云々、過差之至、同二花見御幸等一歟、未聞事也、御幸之後、頃之、參二法成寺、而事了云々、仍歸宅、

十二日、寅天晴、仁和寺宮被レ送レ札、被レ賀二大將內辨

事也、此事已爲二世間之鼓騷、實悅思不少者也、

十三日、卯天晴、智詮阿闍梨、自二今日一七ヶ日參二籠賀茂、依レ有二夢想告一也、今日定能卿來、余、大將、定能卿、同車參二御堂御所、政習禮、依二庭廣、立二幕柱竹柱等、引二暢幕、外記廳指圖也、歸來之後、花山大納言來、及二深更一議二政之間事、今日定長來、余申二兼房卿中納言事、

十四日、辰陰晴不定、今日、又參二御堂習禮、此日、御齋會終、加持香水、內論義等、如二例年一云々、

十五日、巳天晴、此日、右大將叙二正二位一之後着陣也、吉時申刻、依レ無二大辨一、左大辨未着陣、今日可着、右大辨院御共參日吉、左少辨光長作申文云々、先使大舍人頭業俊勘申日時、家司光長余、及大將、兩覽レ之云々、前驅六人、共殿上人宗雅也、今日雅賴來、即向二大將亭、依レ爲二着陣日、大間事評定、有二少習禮云々、其後參陣云々、大外記賴業依レ召來、明日事不可二懈怠一之由、以二光長仰一之、今日、院參二詣日吉給云々、

十六日、午天晴、此日、年始政也、右大將初着二行之、去康治元年未着座、公卿可着二行列見、定考、尋常政之由、被レ下二宣旨以來、無着座レ之人、但字治左大臣、及兼長卿等着座云々、誠雖被レ許未着座、非レ停止着座、然者、專正禮法、雖可レ遂二着座、近年此禮絕了、又無二其用、加之、余未嘗臨二官外記之廳、年來恨此事、



仍口以俟守宣旨之所着行一也、且是在奉公之故也、

辰刻、大將來此第、着束帶、色目如恒、薛給銀、紺地平緒、笏又大殿、前驅六人、上野守賴高、前馬助國行、散位保行、長後、隨身御筋也、

垂袴壺胡錄也、僕從等來集、雖欲忍參、陰陽師遲參、參已終參入之後、先令勘申日時、入宮先覽大將、次覽余、依有政刻限、不擇申、可參給政一日、

今月十六日、壬午、

壽永二年正月十六日 大舍人頭安陪業俊、

其後參衛、左少辨光長連車扈從、嘉保三年有信候御共、天永三年爲隆應從、皆依

定能、並右少辨兼忠連參、各參會路頭云々、于時已四點也、

未初參着云々、酉刻、歸來語云、次第無違亂、參議三人

右京大夫基家、左宰相中將定能、左大辨經房、參入云々、中納言一人不參、兼日

觸忠親實守等之處、實守卿爲上西門院御共、參三日

吉、忠親稱病不參、昨日候御會竟、今日不參、其無其訓、奇怪々々、少納言重綱、

左〔右〕少辨立申文、少納言有家勸請印云々、應及南

所儀如存云々、每事無違亂、無懈怠、爲悅々々、抑、

宇治左大臣入陽明門、自門際至壬生、併用此路、而嘉保三年、匣小路以西、經路北、以東、經中路之

由、見御記、又天永自中路一步入給之由、見雅兼卿記、仍今日、匣以東用中路、以西用北路了、參退同前也、政之間、作法見大將記、歟、又改沓之處、前驅國行、番長敦次等參候、是又嘉保例、前驅重仲、番長厚清等候例也、事了、相引參陣、左大辨候申文、無藏人方吉書、依嘉保、天永等例也、天喜六年、京極無申文、然而、承曆三年、二條以後、皆有申文、又近代政始多有申文、仍用近代例也、

十八日、甲雨下、入夜止蓮華王院修正也、有御幸云々、仍大將參入、今日不出衣、自餘公卿濟々皆步行御

車後云々、大將供奉還御、參御宿云々、

十九日、乙陰晴不定、光長來語云、經房卿云、左大臣被

奉褒譽大將殿云々、又如此令勤公事給、是朝

家可直立之先表也、殊悅申云々、余先日招定長、

奏二位中將中納言事於院、今日、承御返事之趣、雖

無分明事不惡云々、此日、奉爲高倉院、於策勝

光院被始修八講、

廿日、丙雨下、此日、除目初也、執筆左大辨經房朝臣云

云、公卿僅三人云々、

廿一日、丁天晴、除目、執筆同人、

廿二日、戊子天晴、除目入眼、執筆同人、右馬頭長房朝臣初參、召前、即起座了、後聞、若蒙仰者、可申御返事之樣不覺、仍忿起了云々、此日、寂勝光院御八講結願、左大將已下公卿十餘人參入云々、

廿三日、丑天晴、見聞書、時忠、忠親任大納言、八大納言歟、不能左右、家通、善政、實宗、善草等任中納言、兩貫首拜參議、後聞、兼房卿事、御氣色不惡、大略、一定可拜任之由風聞、而自上西門院、實宗事枉被申之間、忽改定云々、微運之至、爰而顯然歟、但年來未曾達素意於天聽、余申披子細了、是不存爲彼人、爲報先聞之遺德也、

今日、右大將密々向宗家卿第、爲習催馬樂也、此事近代之禮、雖不必可然、知足院殿向經信第、聽琵琶、又故殿時々向中御門右府第給、拜大臣之日、爲於家有其例、爲親昵之上、又非趨權勢之儀、仍所令行向也、歸出之間、大納言降立庭中、其子息大夫褰車簾、可轡車之由、再三雖被示、大將不承引、猶於門外乘之云々、翌日、大納言被賀昨日大將向彼第之悅之由、自一昨日夕風病發動、廿四日、庚子天晴、東大寺勸進聖人重源來、余依相招

也、聖人云、大佛奉鑄成一事、偏以唐之鑄師之意巧可成就云々、來四月之比可奉鑄云々、件聖人渡唐三箇度、彼國之風俗委所見知云々、仍粗問之、所語之事、實希異多端者歟、五臺山被打取大金國了、渡海之本意爲奉禮彼山也、仍空敷歸朝之處、天台山阿育王山等可奉禮之山、宋人等勸進、仍暫經廻、詣件兩所、天台山有石橋、破戒罪業之人無渡得、其橋事、本國之人十之八九、不遂前途、但於日本國之人者、多分渡之、令感依此願渡海之志歟云々、即此重源聖人所渡其橋也、尤可貴々々、其橋體廣四寸長三四丈、大河上、北橋自東、其橋西邊有大巖、縱廣共六尺許也、其左右無人之可通之路、仍不知其與云々、如傳聞者、自石橋六町入與天有銀橋云々、與有金橋云々、其與、正身證果之羅漢五百十八人見住、人致信心備供具、祈念之時、顯現石橋西頭、奉禮彼正身之人、萬千萬人之中、一人猶難云々、又云、謂阿育王山者、即彼王、八萬四千基塔之其一被安置彼山、件塔四方皆削透云々、其上奉納金塔、當時帝王所被造進云々、其上銀塔、其上金銅塔、如此重々被奉納云々、件

舍利現三種々神變、或現三丈六被攝之姿、或現小像、或現光明云々、此聖人兩度奉禮神變、一度ハ光明、一度雖末代、此事不陵遲云々、但彼國人心、以信心爲先、或道、或俗、徒黨五百人、若千人、如此同時始精進、起猛利之淨信、三步一禮、成テ參詣、其路雖不遠、或三月、若半年之間、遂其前途、參着之後、皆悉奉唱釋迦之寶號、一向成奉禮神變之思、其中隨罪之輕重、有神變之現否云々、實是重殊勝之事也、我朝之人、比彼敢無可及之者、可悲々々云々、數刻之後、聖人歸了、此聖人之體、實無餘詞、尤足可貴敬者也、件聖人又云、大金國欲伐漢朝之意趣ハ、爲取三ヶ之寶也、所謂、其一ハ、難定眞本、是祕傳也、此傳之得、金銀絹織、及布絹、米穀之類、凡盡期、此祕藏之說等、令其字之所、其物化現、足用之、更無顯之書也、第一之寶云々、其二ハ、金帶、不知其功、其三ハ、玉印、即下和玉、漢朝之習、以此三物爲寶云々、

廿五日、卯天晴、召中將於前、脂燭、詩兩度令作、一度二寸口口、開山花未、一度五寸、竹間鶯語、共終篇、又存題意、無瑕瑾、尤足感歎、其後又有無題之勅、約六韵、廿六日、壬辰陰晴不定、中御門大納言被來、余依風病、隔物謁之、即被向大將第了、依方違、參宿御堂

御所者也、

廿七日、巳天晴、此日、中將叙四位一拜賀也、兼日爲光長奉行觸所々、申次今日酉刻出立、裝束如恒、時給先申余及女房兩方、共光長申之、參院、皇后宮依朝覲行幸定、不能付簡、後日可書入云々、其後、參八條院建禮門院等、參內、攝政被候、仍又付簡云々、但不差湯漬云々、四位之後不差之由、光長等示親雅云々、內申次不催得近衛司、仍親雅申之云云、參御前、退出之間、逢內大臣、叙一位之後、拜賀并三位忠良、前驅四人云々、同亥始程歸來、今日共殿上人、基輔、宗雅、諸大夫信光、兼時、隨身三人、一人不足、蘇芳袴、垂壺胡錄、狩袴、或着三藍也、衛府長忠武者、布衣二候、童兩人共稱病不參、此日下名也、

廿八日、甲午已刻許、院參詣八幡給、人々雖着束帶、猶寂密義也云々、

廿九日、乙未天晴、早旦、隆職來、相次、賴業來、共召前仰雜事、仰官廳釋奠裝束之間事、各有甘心之氣、歟、此事與源中納言所示合也、今日、春日奉幣如例、陪膳季長朝臣、奉行賴高、依無奉取、六位行事取之、



## 二月

一日、丙申天晴、春日祭也、神齋如恒、源中納言雅賴、左中辨兼光朝臣、裝束司辨也、左少辨光長、大夫史隆職等來會、議定明日釋奠、官廳裝束可改直之間事、大略相定、召仰隆職宿禰了、人々有甘心之色、及晚大將習禮明日作法、納言兼光等出了、光長一人殘候、今日、釋奠之間條々事、仰遣在茂師尙等、光長奉行、

二日、辛酉天陰、此日、釋奠也、大將爲上卿參入、申刻、着東帶、時給銀、具靴、參官廳、安元火災之時、大學寮爲灰燼、其後例仍換本寮之儀之間、有失便宜之事等、入待賢門、仍仰官任恩案所改直也、于細在左、、仍其便歟、然而列見定考之時、、官東門等、着北廊座、戶內四、先多川此門、仍隨彼例也、、是、源宰相中將通親在同廊座、戶外東、次廟拜、上古不列、近代列也云々、、次着寮廳帷、東廳跡打之、次三獻了、着都堂、講論三問之後起座、更着百度座、三獻了起座、着宴座、不改、三道授記之後、着穩座、詩講了退出、經房着寮座、、凡今日儀式、具見大將記、

### 一、改裝束事、

以<sub>二</sub>北廊<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>上卿已下座<sub>一</sub>事、

本以<sub>二</sub>南門<sub>一</sub>擬<sub>二</sub>廟門<sub>一</sub>、便宜雖相似、道理不可然、故何者、大學寮者、廟堂之邊、無可然之所、

廟門<sub>中門</sub>之外、依無可設此座之便所用來也、於<sub>二</sub>官廳<sub>一</sub>者、正廳東西有迴廊、列考之時、以<sub>二</sub>東廊北面<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>公卿座<sub>一</sub>、釋奠之時、何固強可用<sub>二</sub>南門<sub>一</sub>哉、仍以<sub>二</sub>北廊<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>公卿座<sub>一</sub>、但列考之時、廳西腋、北向西上設座、而釋奠之時、聊可顯其意趣歟、仍以廳擬<sub>二</sub>門內外<sub>一</sub>、所立<sub>二</sub>上卿參議座<sub>一</sub>也、

以<sub>二</sub>東廊東面<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>辨少納言已下上官座<sub>一</sub>事、

本南門東腋、打<sub>二</sub>帷<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>上官座<sub>一</sub>、甚無便、若暴雨之時、無所立隱之便宜、加之、公卿座已在<sub>二</sub>北廊<sub>一</sub>、仍上官又可候<sub>二</sub>東廊<sub>一</sub>也、是如<sub>二</sub>御齋會之時<sub>一</sub>、

東廳跡打<sub>二</sub>帷<sub>一</sub>用<sub>二</sub>寮廳<sub>一</sub>、

南北妻打之、北上對座、上卿西面、參議東面、本大炊御門大路打<sub>二</sub>此帷<sub>一</sub>、太無便宜、本寮已灰燼、被<sub>二</sub>移行他所<sub>一</sub>之時、隨其所之便、可有<sub>二</sub>裝束之儀<sub>一</sub>也、大路儲<sub>二</sub>卿相座<sub>一</sub>、尤無其謂<sub>二</sub>事歟<sub>一</sub>、

南門內、打<sub>二</sub>六位<sub>一</sub>二字事、

本東廳跡、打<sub>二</sub>帷<sub>一</sub>一字擬之、是又無其理、本寮之儀、都堂前東西有堂、以<sub>二</sub>上爲<sub>二</sub>六位<sub>一</sub>、東上宣、西學生、而以<sub>二</sub>西廳<sub>一</sub>擬<sub>二</sub>都堂<sub>一</sub>、東廳跡其程遠、更以無便



宜、仍南門內副、南打卯酉妻幄二字、須於一宇二者打北方也、而廟堂前依無骨、乍二字一副南打之、是彼所之便宜也、

都堂西南北面、兩方共、儲公卿兀子床子事、

本寮之說、正禮、都堂之後立公卿兀子等、近例、東壇上立之、共有例、今以西廳用都堂、移行本寮之儀者、正禮須立後壇上、而北面講論座事了、經北壇上可着後座之處、件壇上有壁無路、仍付本寮之近例、北壁外儲此座、於後座者、百度座事了、可着座之故、兩方儲此座也、近年只儲後床子、不立北壁外座、仍講論了、猶出後戶退出云々、是尤違例也、仍仰子細、儲兩方座也、

一五位博士令勤問者事、

舊例、助教直講勤問者、定例也、而近代只異樣、學生一人勤問者、仍五位博士一人、其外兩三人可催出問者之由仰本道、而晴儀之外、無五位勤問者之例之由、各以對捍云々、仍仰云、釋奠、晴儀者、齊信卿行之後、仁平被興行、其前數代、博士等皆勤之、近代久安元春、五位博士三

人、助教大外記師安、直講師元師長等也、六位五人、勤問者、全非晴儀、各所澁之申狀、尤奇怪也、但本道事各可執思事也、上卿強不可及、骨張歟者、此上無申事、直講近業勤問者、其外六位二人、合三人也、近日無此例一歟、廟之中興之由、人々令稱云、

一百度座、六位上官不令着座事、

近例着之、違例也、仍今度、兼誠仰、令着座也、以前三ヶ條、依思公事之陵夷、仰官外記、本道等、所誠沙汰也、豈非忠勤哉、

三日、戊戌晴、自去夜、有五體不具穢、仍立札、

五日、庚子參御堂、逢御月忌、彌勒講也、

九日、甲辰參御堂、謁法性寺座主、去夜自山下京云、

云、

十一日、丙午天晴、此日、女房窠密々詣春日、

十二日、丁未今日甚雨、入夜、女房歸洛、今日參東大寺、奉禮燒損之大佛云々、

十八日、癸丑天晴、大原聖人本淨房、來、數刻談語、

廿一日、丙辰朝間甚雨、已刻以後天晴、此日、今上始朝觀

行幸也、正月依御忌月、無此禮、後冷、後三、烏羽院

等例也、依<sub>レ</sub>雨持<sub>レ</sub>疑、人々遲參、未刻出御、依<sub>二</sub>路次逗留<sub>一</sub>、申終幸<sub>二</sub>法住寺殿<sub>一</sub>云々、兩息供奉、午刻參內之後、人々參集、攝政未刻被<sub>レ</sub>參云々、大將裝束、

浮文樺櫻下襲、櫻柳枝丸、白浮文表袴、

沉地螺鈿劔、紺地平緒、付銀平胡錄、

弓、卷纓、老懸如<sub>レ</sub>常、黃地鞍、蘇芳綾手綱、小豹下

鞍、舍人裝束、蘇芳裏形木、萌黃衣、移馬舍人、

萌黃口裏形木口、濃欸冬衣、隨身、狩袴口、村濃伏

組口、造<sub>二</sub>櫻花<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>之、

上臈着<sub>二</sub>紅打衣<sub>一</sub>、下臈濃打衣也、須<sub>二</sub>皆着<sub>二</sub>紅打衣<sub>一</sub>也、然而、若<sub>二</sub>濃打<sub>一</sub>又例也、

中將裝束、

紅梅下襲、梅散花、萌黃表袴、紫檀地螺鈿劔、無<sub>二</sub>尻紅梅地

平緒、付銀平胡錄、弓纓如<sub>レ</sub>常、黑地鞍、小豹下鞍、

紫綾手綱、

隨身着<sub>二</sub>濃打衣<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>梅花<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>之、紅梅、白梅、〔箱〕交<sub>二</sub>付<sub>一</sub>之、

童二人、結髮上括、着<sub>二</sub>葵履<sub>一</sub>、大嘗會御禊之時、雖<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>

垂袴<sub>一</sub>、常行幸之時、上括例也、朽葉上下、顯文青打

衣、同柏、蘇芳單衣、削<sub>二</sub>鶴咋松<sub>一</sub>、透<sub>二</sub>裏面<sub>一</sub>之間、

件、鶴、紙薄上彩色之、地萌黃上下裏頗濃、

舍人、青唐紙、地萌黃ノ上下、裏具<sub>二</sub>院ノ居<sub>一</sub>、御御廐舍人<sub>一</sub>也、雖<sub>レ</sub>申請御馬、依<sub>二</sub>異樣<sub>一</sub>用<sub>二</sub>私馬<sub>一</sub>也、

院司、

正二位成範、雅賴、朝方、

正三位光能、

從三位通盛、泰經、

正四位下公時、公守、

從四位上基範、正五位下有隆、

皇后宮、

從四位上公衡、

八條准后、

從五位上平能宗、

攝政家司、

正五位下平經清、

從三位完子、攝政室、

廿四日、己未天晴、此日、小御堂修二月也、仍余參入、但

不出<sub>二</sub>簾外<sub>一</sub>、公卿大將許也、今日依<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>、樂人左近將

曹大神宗賢<sub>也</sub>、笛師參入、大將依<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>習<sub>二</sub>笛所<sub>一</sub>召也、習<sub>二</sub>

始平調音取了、

廿五日、庚申天晴、中御門大綱言、左大辨等來、余共謁

之、經房語云、去正月叙位之時、攝政<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>叙位於

宮<sub>二</sub>賜<sub>二</sub>入眼上卿忠親卿、頗傾奇云々、又同除目之時、

大間宮加<sub>二</sub>入兼國勘文、並成殘申文等<sub>二</sub>返上、而<sub>レ</sub>乍<sub>レ</sub>入

給<sub>二</sub>清書上卿、又以傾奇云々、如<sub>レ</sub>此事、委不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>

歟、尤不便事也

廿六日、辛酉天晴、大將參<sub>二</sub>院御逆修、及<sub>レ</sub>晚飯來、

今日、法性寺座主被<sub>レ</sub>來、親性法橋相共議<sub>二</sub>定住山之間

事、入<sub>レ</sub>夜依<sub>二</sub>最勝金剛院修二月、大將參<sub>二</sub>彼御堂、定能

卿經房卿等同參入、依<sub>二</sub>日次不<sub>レ</sub>宜、余不參也、大將隨

身、只布衣也、

廿七日、壬戌天陰、樂人宗賢參上、大將習<sub>二</sub>樂<sub>二</sub>、三蓋急、五

也、始所

廿八日、癸亥雨下、此日、法皇御逆修、曼陀羅供也、導師

公顯僧正、讚衆八口、非本諸僧云々、左大臣已下公卿及<sub>二</sub>三十

人云々、大將參入、半部車、隨身<sub>二</sub>上簡冠也、左大將、隨

身布衣、網代車云々、公卿直衣、侍臣衣冠、

廿九日、甲子天晴、御逆修結願也、大將參入、今日、公卿

以下布衣如<sub>二</sub>日來云々、但大將直衣也、網代車、不

引移馬也、自<sub>二</sub>昨日、院中有<sub>二</sub>五體不具穢云々、參

三月

一日、丙寅天晴、傳聞、法皇自<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub>有<sub>二</sub>御不豫事、然

而未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>披露云々、

二日、丁卯天晴、大將中將密々有<sub>二</sub>作文、題云、花色薰冠

佩、卷字、院別事不<sub>レ</sub>御云々、

三日、戊辰天晴、家節供如<sub>レ</sub>常、季廣勤仕之、陪膳秀長朝臣、行事國行、傳聞、院

猶不<sub>二</sub>快御、仍以<sub>二</sub>昌雲僧正、自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>邪氣云

云、年來無<sub>二</sub>如此事、仍人々頗雖有<sub>二</sub>驚駭之氣、其實別

事不<sub>レ</sub>御云々、明後日臨時祭延引、院穢、穢物經<sub>二</sub>兩三

日<sub>一</sub>取出、仍可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>六日云々、

四日、己巳本命日、泰山府君祭如<sub>レ</sub>例、

五日、庚午天晴、依<sub>二</sub>彌勒講<sub>二</sub>參<sub>二</sub>御堂、及<sub>レ</sub>晚大夫史隆職

來、今日、大將參院、依<sub>二</sub>御不豫事也、

六日、辛未午後暴雨、此日、女房、姬御前等、密々參<sub>二</sub>詣廣

隆寺六角堂等、

七日、壬申天晴、樂人宗賢參入、大將習<sub>二</sub>萬歲樂、入<sub>レ</sub>夜宰

九日、甲戌天晴、來十三日法勝寺千口御讀經、中將可進經四卷、之由催、觀音經也、申承了之由、

十日、乙亥天晴、樂人宗賢來、大將習笛、入夜爲三方違、參宿御堂御所、

十一日、丙子天晴、飯宅、入夜着冠直衣、乘大將綱代車、前驅布衣、隨身同之、參院、定能卿參會、以件人見參、仰云、修

逆修之間、殊依有念誦事、風病更發、令企小湯

治之間、不謁之、兼又女院御事無程過了、尤悅思

食、後日必可給謁者、以基輔申八條院御方、女房

謁之、推刻退出、

十三日、戊寅天晴、此日、密々大將中將來此第、有詩

興、惜花忘言日學、分一字、又當座有勅韵、光長已下、殿上人、並儒者惣十人

許、兩忌詩、人々有威氣、

十四日、己卯天晴、藏人少輔親經爲院御使來云、可被

發遣公卿勅使、驛家雜事、爲省事煩、以平家公卿、

可爲勅使之由、豫議已了、是前內大臣家可被扶

持之故云々、而或不合ト、或又辭退、如此之間、自

然遲引、沙汰雖起去年十一月、徒及今年三月了、

代始吉例正月、依如此之懈怠空過了、三月又爲吉

例、而月內難調出神寶、一切不可叶、仍四月可

被發遣之處、代始四月例、即二條院也、頗爲不快、可被延五六月之處、依追討使事、可被忿立之

由、內府計申、可被憚四月之條、同又被家所申

也、兩ヶ之間、寂念不決、兼又神寶、縱雖不法、月內

猶可被忿立一欺、抑、彼二條院例、故平相國爲參議、

勤勅使、今度、平家公卿之中、賴教、知盛、已上三皆堅辭、經盛

卿可當仁、然者即云勅使、官發遣月、共可叶不

快例、然者若可被定他人一欺、驛家雜事、可及闕

乏、如此等之間、委可被奏者、申云、先依何事可被

發遣勅使哉、只當今御時未被行此事、仍可被

進發者、尤可被忌諱、又可撰人、若依追討事、可

被忿謝申者、全不可忌四月、不可憚平卿、但

雖他人、驛家雜事不可有煩者、又何事之有哉、

於不被顧神寶之不法違例等之條者、一切不可

然者、

十七日、壬午今日、送故女院御處分狀於奈良僧正信圓、

二所、一所八幡前通、並二位中將兼房、二所、一所、但馬上等

半、一所八幡前今泉、立衣、一所石見益田、等

之許、各副余書狀、依爲吉日也、

十八日、癸未天晴、招藏人右衛門權佐定長、有申入



文士七八許輩、不期而會、光長、定長共在此座、題云、春深貴賤家、中、長光入道獻之、即候座也、泰山府君祭如例、前右馬頭長房來、

十九日、甲申天晴、大外記賴業來、入夜三位入道、俊成也、

來、數刻談和歌事、能入其境、當時此道之棟梁也、

廿日、乙酉天晴、此日、季御讀經初日也、未刻、大將參內、

秉燭歸來、語云、御前僧定了、參上人々着殿上之間

也云々、攝政雖被着座、不被立行香云々、尤不

審々々、上首三條大納言候御前、行事上卿忠親卿候

南殿、納言上卿之時、定例也云々、行香如例、不昇

庇長押、自廣庇經僧前也、又行香公卿不足、仍召

藏人頭、然而不參、出居顯家朝臣加之云々、

廿二日、丁亥及晚甚雷雨鳴、終夜不止、

廿三日、戊子天晴、午刻、暴雨雹降、定是異變歟、依有夢

想事、今日獻幣帛於春日御社、仍神齋修祓、大將中

將等、有掩豹事、

傳聞、前右馬頭長房、出家入道云々、無指過失、

停任所帶、其身無思置事、今之遁世、恐心感歎無

極也々々、季御讀經結願之次、有僧事、覺乘叙法

眼、

廿四日、己丑天晴、招法性寺座主、有示合事、今日依有夢想事也、

廿五日、庚寅天晴、請親性法橋、傳授祕法、

廿六日、辛卯天晴、自今日限以三ケ日、始行法、

廿七日、壬辰行法三時如昨、

廿八日、癸巳今日、行法結願、隨分致信心、此日、中將密

々參詣法輪寺、歸路之次見廻大內云々、

廿九日、甲午天晴、此日、大將、中將有三月盡會、題云、春

盡舟車裏、各分一字、五位藏人兩人、定長、親經已下

侍臣、大內記業實已下、儒士相並十人會合、詩講之後

有連句、先仙百韵、

今日、奉幣帛於春日御社、又立使者、仍終日神齋、但

奉轉讀心經一千卷、今百卷、今日不終功、仍明日

結願了、

今日、定長密々語云、來月五日、可有任直相事、不

可有三大饗云々、是平家例耳、此事未曾有也、下官

依重喪不儲饗祿、敢不可爲例、平家一族、他人

可爲規模哉、始起於希代之例、不重職之條、奈

天意何、

壽永二年夏

四月

一日、乙未平座、上卿權中納言家通云々、依恒例春日朔幣、午上神齋如例、

二日、丙午行向大將亭、其間、隆職宿禰來云々、來五日任大臣一定云々、依不可儲、禮祿不可有兼宣旨云々、此日、平野祭、家通奏宣命、使木工頭棟範云々、

三日、丁酉天晴、中御門大納言、宰相中將等來、大將習催馬樂<sub>庭</sub>、於亞相、定能卿密語云、今度中納言、三位中將賴實可任云々、爲二位中將實哀事也、不能左右云々、去春已欲被任、臨時改易、今被補他人、運報之至不能左右歟、先日示付定長、然而未申達歟、凡此人於余殊有遺恨、敢無會釋、然而依憶家、取再三推舉、無許容之條、又非愚兄之過失耳、定能又語云、余可讓大臣於大將之由、世間謳歌、一定之由遍令申云々、此事可有許容者、尤大望也、去年雖奏聞、而相辭退事已不許、殆觸逆鱗、況讓與之條、更不可叶、仍不申出之處、世之所推、大將之面相已當仁歟、退猶加思慮、可左右、猶

年齡幼少也、今一兩年可相待歟、今年重厄也、旁可謙讓歟、今日、梅宮祭、上卿中納言賴盛卿、

四日、戊戌雨下、依彌勒講參御堂、今日、佛殿聖人來、示法文之間事、今日、任大臣也、無大饗、希代之例也、

內大臣藤實定、

大納言實房、轉正也、權大納言平賴盛、

中納言藤成範、朝方、平教盛、已上轉正也、

權中納言藤賴實、參議藤脩範、

今日儀、大外記賴業注送之狀如此、

五日、己亥自朝雨降、申刻止、今日在任大臣事、先左相府召大外記賴業、仰可有任大臣事、可召仰所司之由、未刻、權大納言實房卿、新權中納言家通卿、參議

親宗朝臣着仗座、藏人頭左近中將隆房朝臣出陣仰內辨事、上卿移外座之後、更進仰宣命趣、內大臣藤原實定、大納言

書同實房、權大納言平賴盛、中納言藤原成範、同朝方、平教盛、權中納言藤原賴實、參議同脩範、即召大內記業實仰之、上卿進弓場代、隆房朝臣奏宣命了、權大

納言忠親卿、權中納言實家卿、家通卿、參議經房卿、親宗朝臣着外辨座、依降雨、中門外南殿設座、少納言有家、外記史以下

着之、辨座不近仗陣階下、左中將清經朝臣立中門內南殿、右少將顯家朝臣立西邊廊內、

內侍臨東權、內辨實房卿、昇殿召舍人、少納言有  
家代進就版、中門內承內辨宣召之、權大納言忠親  
卿以下列立中門內北版、北版、第二間內辨召經房卿、給  
宣命、內辨復列之後宣制云、內府申詣大宮白河御  
所被坐、無變祿、又無勅使云々、

六日、庚子天陰、以基輔朝臣、遣內府家、示慶賀事、出  
行之間、示置云、置飯了云々、

八日、壬寅灌佛如常云々、

九日、癸卯此日被行祭除目云々、上卿家通卿、參議  
泰通朝臣云々、又內大臣被仰大將還宣旨、大外記賴  
業奉仰云々、今日、依北陸征討事、太神宮以下被祈  
申云々、伊勢以下十六社、神祇官人等各參籠、五ヶ日  
祈申云々、

十日、甲辰披見聞書、驚耳目事、超過先々、中務少輔  
兼親、此事、下官可推舉之由得三令申、依不當少將宗長、  
利部卿和輔孫、豐後前守等、未曾有事也、凡末  
代之人、官位之望、敢無其詮一事歟、可彈指云々

十三日、丁未武者郎從等、刈取近島之間狼藉云々、警  
固上卿實宗卿云々、

十四日、戊申雨下、武士等狼藉如昨日云々、凡近日天  
下依此事、上下騷動、人馬雜物、隨懸眼路橫奪取、  
雖訴前內大臣、不能成敗、雖有制止、更以不  
拘制法云々、於他所事者不可知、近邊濫吹、  
太有怖畏、仍示遣前內大臣許、雖有可制止之  
報、更無其始終、實可悲之世也、

十五日、己酉賀茂祭也、內藏助清科重榮、右近少將藤成  
定、右馬權助朝房、皇后宮大進親雅等供奉云々、

十六日、庚戌解陣也、忠親卿行之、頭中將隆房已下直  
列云々、

十七日、辛亥時忠卿着陣、左大辨經房、右少辨兼忠等、  
有申文云々、

十八日、壬子吉田祭也、上卿權中納言家通卿、

廿日、甲寅公卿勅使定、上卿宗家卿、五位藏人親經奉行、  
右中辨光雅為行事辨云々、今日、召大內記光輔、  
仰宣命趣、勅使參議通親卿、參殿上承仰、宸筆宣  
命草、文章博士光範承之云々、

廿一日、乙卯晴、石清水臨時祭也、左近權中將平清經為  
使、權大納言宗家卿奏宣命、去月依穢氣延引之  
由、被載辭別云々、右大將參入、

廿二日、丙辰今日、余參院、此日、權大納言賴盛卿拜賀云、

廿三日、丁巳征討將軍等、或以前、或以後、次第發向、今日皆了云々、

廿四日、戊午此日向、堂、賀茂幸平來、有、切立事、依、大將命也、女房等行向、

廿五日、未神宮有、穢疑、公卿勅使可、延否有、御卜、藏人宮內權少輔親經召、官寮於中門邊、令、占、申之云云、官申、吉之由、寮申、不快之由云々、

又左大臣仰、左中辨兼光朝臣云、源賴朝、同信義等、廢、掠東國北陸、仰、前內大臣、可、令、追討者、

廿六日、庚申晴、今日、公卿勅使進發、上卿宗家卿、使宰相中將通親卿、攝政清、書宸筆宣命、但攝政不、參、神祇官、上卿已下參向發遣、御願意趣、今年御厄、並近日變異、及追討事等也云々、

廿七日、辛酉雨下、今日、攝政被、上、辭、內舍人隨身表、兼光作之、忠親卿行、勅答事、大內記光輔作之、表使右少將成定、勅答使左中將通資朝臣云々、其後有、吉書、如、例、內大臣拜賀、扈從公卿大納言實房、中納言實家、實宗、參議經房等云々、

廿九日、癸亥此日向、堂、少將親能、定能親息、年十五歲、來蹴鞠、容貌美麗、又爲、堪能、尤足、歎美、

### 五月

一日、甲子傳聞、去月廿六日官軍攻、入越前國云々、  
三日、丙寅有、軒廊御卜云々、鴨御祖社羽蛾出來事云云、

四日、丁卯公卿勅使歸參云々、  
五日、戊辰依、月忌、參、御堂、此日、圓宗寺御入講始也、

上卿不參、右少將兼忠參而行之云々、  
十二日、乙亥傳聞、去三日官軍攻、入加賀國合戰、兩方多、死傷之者云々、

十五日、戊寅今日、被、立、佐保山陵使、被、謝、申東大寺大佛燒損、並近日修補事云々、上卿權大納言宗家卿、參議親宗卿、參、着使座、先被、定、時日、今日已大內記光輔進、宣命使、參議親宗朝臣、前和泉守季長朝臣位、等參向云々、藏人二人叙爵云々、院供花如、例云云、

十六日、己卯去十一日官軍前鋒乘、勝入、越中國、木曾冠者義仲、十郎藏人行家、及他源氏等迎戰、官軍敗績、過



半死了云々、今夜月蝕、既、於內裏被行御讀經、上卿實家卿云々、

十七日、辰、庚此日、被立八幡奉幣使、被告申東大寺大佛燒損、並近日修補事也、上卿權大納言實房卿、先有日時定、大內記光輔進宣命草、行事辨右少辨兼忠、使權中納言實宗卿云々、

十九日、壬午宸勝講始日也、攝政、及內大臣已下參入云云、右大將參入、此日、實房卿着仗座、定申賑給使事云々、又今日奉鑄東大寺大佛之面云々、

廿一日、甲申今日、於院御所、被始修五壇法征討御祈云々、

廿二日、酉、乙早朝、良方有赤雲、其體似紅旗云々、此日、忠親卿着仗座、被行減服御常膳詔事、頭中將隆房仰之、大內記光輔進詔書、攝政加御書云々、下給中務少輔兼親了、其後、家通卿着陣、給位記請印、

廿三日、丙戌宸勝講了、右大將參入、事了後參入、不敵也、但申刻以前夕座了、攝政今夜依可有方違、被忍行云々、頗過法歟、

廿九日、壬辰自今夕三ヶ夜於內侍所被行神樂、被

祈請征討事、並治承四年奉渡攝州事云々、

## 六月〔小〕

四日、丁酉傳聞、北陸官軍、悉以敗績、今晚飛脚到來、官兵之妻子等、悲泣無極云々、此事去一日云々、早速風聞雖有疑、六波羅之氣色事損云々、

五日、戌、戊依故院御月忌、參御堂、前飛驒守有安來、語官軍敗亡之子細、四萬餘騎之勢、帶甲冑之武士、僅四五騎許、其外、過半死傷、其殘皆悉弃物具、交山林、大略爭其鋒、甲兵等、併以被伐取了云々、盛俊、景家、忠經等、已上三人、彼家第一之勇士等也、各小帷前結テ、本鳥ヲ引クタシ天逃去、希有雖存命、不伴僕從一人云々、凡事體非直也事、誠蒙天之攻歟、口口敵軍纔不及五千騎云々、彼三人郎等、大將軍等、相爭權盛之間、有此敗云々、

今日、自院有召、爲被定北陸官軍敗績事也、然而稱病不參、雖非重、不及稠人之出仕之故也、

六日、己亥大藏卿泰經卿、爲院御使來、扶疾謁之、仰云、北陸官軍等、空以歸洛、此上何様可被行哉者、

申云、百千萬事不可叶、只天下落居之時、可施德化之由、法皇起自叡慮、可被立御願也、此外他計、一切不可叶者、

七日、庚祇園御輿迎、如例云々、

八日、辛自今日渡物氣、依病厚也、

九日、壬寅泰經卿示、先日申狀、可注送之由、仍注遣了、其狀如此、

可被鎮關東北陸亂逆間事、

重追討事、

征討之謀、將帥之策也、就彼議奏之趣、重可及評定歟、但如被仰下者、士卒其力疲、追討、忽難叶云々、若然者、伊勢近江兩國各置邊將、可守中夏歟、

當時可被施仁惠事、

神社佛寺、及諸人之願、或寄事於武威、以無道押領之、或假力於權勢、以非據奪取之、非管佛意神慮之恐、抑又衆庶萬民之愁也、任理可被糺定歟、但社寺司等、當此時爲貪利、於掠申無道之事者、一切非裁斷之限、熟可被尋搜歟、此條爲待冥感、爲協人望也、夫仁德之所

玉葉卷三十八 壽永二年六月一七月

單、非當時之至要哉、且被決斷、何有滯滯哉、此外德化、難備卒爾之要旨歟、

神事御祈事、

云奉幣、云神宴、遮以有其沙汰云々、然而猶備如法之幣帛、重可被祈申廿二社也、幣物之不法、使等之如在、殊可被加其誠歟、此外、彼神領等事、任理有沙汰者、神應盡及乎、

佛事御祈事、

顯密御祈彼是有數歟、猶訪知法之輩、可被修祕法歟、亂逆之時、殊可行其法之由、粗有所見云々、委可被尋行也、於顯教者、論鎮護國家之大綱、在宸勝王經之功用、殊致精誠、可被勤行歟、抑、內外御祈、國費民疲、雖不及莫大之功、於佛神之納受者、只可任歸敬之淺深歟、已是朝家第一之大事、不可准近代不法之流例、伴用途等、少諸國之煩、殊可被廻權議歟、可被立御願事、

此條、客星變異之時上奏、先年若其事默止者、此時可被遂歟、於旨趣者、偏在叡慮、但政道之反素、是其肝心也、何必尋上古之風、隨時立法、

六百五

非<sub>二</sub>聖代之德猷<sub>一</sub>哉、近則法皇之御宇、末代之中興也、治教不可<sub>二</sub>外求<sub>一</sub>、尤足<sub>二</sub>遵行<sub>一</sub>者歟、海內令<sub>レ</sub>屬<sub>二</sub>和平<sub>一</sub>之時、天下可<sub>レ</sub>施<sub>二</sub>德化<sub>一</sub>之由、宜<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>御願書<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>太神宮<sub>一</sub>歟、凡國家之廢興、在<sub>二</sub>政教之理亂<sub>一</sub>之故也、

廿日、<sub>丑</sub>今日又所勞大事發、大略如<sub>二</sub>發心地<sub>一</sub>、

廿二日、<sub>卯</sub>今日、大將女房、瘧病祈落<sub>レ</sub>了、知詮阿闍梨祈<sub>レ</sub>之、

廿三日、<sub>辰</sub>大將女房、今日、間日又發云々、

〔廿四日、<sub>巳</sub>余疾凡不<sub>レ</sub>減、然而如<sub>二</sub>發心地<sub>一</sub>、體事昨今事宜、

廿五日、<sub>午</sub>人々訪來、

廿六日、<sub>未</sub>人々訪來、

廿七日、<sub>申</sub>人々訪來、此中有<sub>二</sub>刑部卿<sub>一</sub>、

廿八日、<sub>酉</sub>今日、法皇參<sub>二</sub>御八幡<sub>一</sub>云々、御一宿、明日可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>還御<sub>一</sub>云々、

廿九日、<sub>戌</sub>六月祓如<sub>レ</sub>例、

## 七月〔大〕

一日、<sub>亥</sub>〔天〕晴、賊徒今日可<sub>二</sub>入洛<sub>一</sub>之由兼日風聞、然

而無<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、傳聞、貞能議申云、不可<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>追討使<sub>一</sub>、只於<sub>二</sub>勢多邊<sub>一</sub>可<sub>二</sub>相待<sub>一</sub>云々、今日、所勞殊無<sub>レ</sub>術、法皇今日御<sub>二</sub>參賀茂社<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御通夜<sub>一</sub>云々、

二日、<sub>子</sub>〔天〕晴、巳刻、右大辨親宗爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來、雖<sub>二</sub>物忌<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>呼<sub>レ</sub>入之、依<sub>二</sub>疾厚<sub>一</sub>隔<sub>二</sub>簾謁<sub>一</sub>之、仰

云、賊徒可<sub>二</sub>入洛<sub>一</sub>之由風聞、其事若實者、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>院御所<sub>一</sub>歟、而內侍所御京外之條如何、兼又仙洞定物

騷歟、其故平家武士等爲<sub>二</sub>守護<sub>一</sub>、定候<sub>二</sub>御所邊<sub>一</sub>歟、而賊

徒打入者、縱於<sub>レ</sub>君無<sub>二</sub>害心<sub>一</sub>、與<sub>二</sub>守護之武士<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>決<sub>二</sub>雌雄<sub>一</sub>、致<sub>二</sub>狼藉<sub>一</sub>云、已可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>戰場<sub>一</sub>、此條如何、兩條可<sub>二</sub>計

奏者、申云、賊徒亂<sub>二</sub>入花洛<sub>一</sub>之程事、別段事也、院內同居之事、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>有樣<sub>一</sub>也、若有<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>者、賢所各

別之儀、不可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>京外<sub>一</sub>之條、一切不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>憚<sub>一</sub>、是尋常之時之儀也、仙洞狼藉之事、臨<sub>レ</sub>期左右也、兼日之案

不可<sub>レ</sub>叶、此條已大事也、短慮難<sub>レ</sub>及歟者、親宗云、左大臣同有<sub>二</sub>此問<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>、彼亟相申云、內侍所差<sub>二</sub>副所司<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>御座溫明殿<sub>一</sub>歟、賊不可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>內

侍所<sub>一</sub>之故也云々、此申狀聊有<sub>二</sub>所存<sub>一</sub>歟、而然余不<sub>二</sub>廿

心<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>行幸<sub>一</sub>者、劔璽可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>具、賢所許雖<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>離

君、可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>詮之故也、

今日、午後天陰、申刻、中御門大納言、前源中納言、左大辨等爲訪疾來、各不謁之、以人謝遣、病重之上爲物忌〔之〕故也、今日依鳥羽院〔御〕國忌、法皇、今日、白賀茂、直幸鳥羽也及八條院御鳥羽、傳聞、賴朝忽不可出、只木曾冠者、十郎等分手於四方、可寄之由議定云云、

去夜有僧事、法印澄憲、前權大僧都覺憲、山階寺僧都權大僧都覺憲、權別當共爲法勝寺御八講證誠也云々、

三日、乙〔天〕晴、昨日物忌也、今日、八條院渡御仁和寺御所、或云、秋節以前、賊徒可入京、或云、待關東之勢、九十月〔之〕比可入洛云々、閭巷縱橫之說、彼是難知、今日、依浮說、武士騷動、

四日、寅天晴、去夜有小除目云々、內藏頭平信基、左京權大夫藤光綱、從三位平資盛、元藏人頭藏人頭藤兼光、左中辨又有僧事云々、權律師公胤、已講

五日、卯晴、依疾不參女院御月忌、定能卿來語云、有遣推問使可和親之議云々、然而未一定云云、

六日、辰晴、右衛門權佐定長、示師量文書之間事、定長云、推問使事如定能談、

七日、巳晴、節供、陪膳季長朝臣、分配配季辭退、仍年預光長勤仕之乞巧奠等如例、佛嚴聖人來、今日遣使者等於師量堂、示文書目錄、法勝寺御八講結願也、

八日、午晴、入夜雷鳴、最勝光院御八講、初日有御幸云々、

九日、未〔天〕晴、今日、又遣使於師量之許、重令取目錄、今日終功了、今日、大夫史隆職來、召簾前談世間事、

十一日、酉〔天〕晴、大外記賴業來、呼簾前、此夜、爲違秋節、參宿御堂御所、

十二日、戌晴、已刻許歸宅、

十四日、子時々雨下、送饗供於三所淨光明院、殿光

明院、先西御堂、故女院各禮拜如例、

〔十六日、寅晴、靜賢法印來、談世上事、可被遣院御使於江州之間事、被問左府內府等、各被申可被遣應御下文之由云々、〕

十七日、卯陰晴不定、右衛門權佐定長來依召也、申師量文書紛失之間事、雖境節中間爲後恐也、定長云、院御使被遣江州之間事、下官同可被問之由有仰、而依御不例、稱無骨之由、泰經不參云々、此



事無謂、來亭問之、不可依所勞事也、但如此事、偏顧問、可悅也、

十八日、庚辰雨下、恒例泰山府君祭也、

十九日、辛巳天晴、右衛門權佐定長來、仰師量文書之間事、先日奏聞之勅報、任師量契狀、早可致沙汰、

夫文書撰正可進也、自餘書籍、汝進止也、抑、文書紛

失事、早可尋沙汰、自院御沙汰、不可然云々者、

廿日、壬午天晴、召知康法師、問病之間事、請佛殿上人、示文書之間事、

廿一日、癸未天晴、午刻、追討使發向、三位中將資盛爲大將軍、肥後守定能相具、向多原方、經予家東小路、

路、家僕等、密々見物、其勢千八十騎云々、云々、計之日

來、世之所推、七八千騎、及萬騎云々、而見在之勢、僅

千騎、有名無實之風聞、以之可察欺、今夜、法皇臨幸

法住寺殿、事火急之時、可有行幸之故云々、

廿二日、甲申朝間天陰、辰刻以後晴、卯刻人告、江州武

士等、已入京、六波羅邊、物騒無極云々、又聞、入京非

實說、而地武士等登台嶽、集會講堂前云々、日來登

山之僧綱等併下京、但座主一人、不下京云々、無

勅寺法印、同以下京、又聞、十郎藏人行家入大和國、

住宇多郡、吉野大衆等與力云々、仍資盛、貞能等、不

赴江州、相待行家之入洛云々、貞能去夜宿宇治、

今朝欲向多原地之間、有此事、仍止彼前途、相待

此入洛云々、又聞、多田藏人大夫行綱、日來屬平家、

近日有同意源氏之風聞、而自今朝、忽謀反、橫行

攝津河內兩國、張行種々惡行、河尻船等併點取云々、

兩國之衆民皆悉與力云々、又聞、丹波追討使忠度、其

勢非敵對之間、歸大江山丁云々、凡一々之事、

非直事欺、今日、上皇宮卿相參集、有議定之事云

云、予同雖有其召、依疾不參、今日可有行幸同

宮之由、雖有其議、依爲復日延引、明後日可臨

幸云々、

廿三日、乙酉雨、六波羅之邊、歎息之外無他事云々、今

旦、法皇渡御法性寺御所云々、依世間物忿也、

廿四日、丙戌天晴、此一兩日、江州武士登台嶽、今夜

可有夜打之山風聞、仍忽行幸法性寺御所給、及

曉天云々、依此邊有恐、余女房相具渡法性寺

家、

廿五日、丁亥天晴、寅刻、人告云、法皇御逐電云々、此

事日來萬人所庶幾也、而於今次第者、頗可謂

無支度〔歟〕、子細追可尋聞、卯刻、重聞一定之由、  
 仍女房等、少々遣山奥小堂之邊、余法印相共他僧達同之、  
 向堂、最時金剛院候、佛前、此間、定能卿來、尋出幽閉之  
 所、密々隱置了、及已刻、武士等奉具主上、向定地  
 方了者、在籠鎮西云々、前内大臣已下一人不殘、  
 六波羅、西八條等舍屋不殘一所、併化灰燼了、一  
 時之間、煙炎滿天、昨者稱官軍、縱追討源氏等、今  
 者遠三省等、若指邊土逃去、盛衰之理、滿眼滿耳、  
 悲哉、生死有漏之果報、誰人免此難、恐而可恐、慎而  
 可慎者也、攝政自然遁其殃、逃去雲林院信範入道堂邊、  
 方了云々、或人告云、法皇御登山了、人々未參、暫之  
 有祕藏云々、平氏等皆落了之後、定能卿登山了、付  
 件卿申參入如何之由了、申刻、落武者等又歸京、  
 敢不信用之處、事已一定也、貞能稱一矢可射之  
 由云々、或又奉具主上及劍聖賢所等、欲趣鎮西、  
 而不可無臣下、仍爲取具可然之公卿也云々、  
 怖畏雖無限、忽不及計略、仰天任運、奉念三  
 寶之處、歸京之武士等、以此最勝金剛院、可搆城  
 郭之由、下人來告、仍遣人令見之處、已少々來趣云  
 云、非可同居、非可追却、仍周章相件女房少々、

其殘隱山奥向日野邊之處、源氏已在木幡山云々、仍  
 忽宿稻荷下社邊、狼藉不可勝計、然而、參社頭奉  
 法施了、自然之參詣、可謂機緣歟、此邊猶有  
 怖畏云々、仍明曉欲向日野、今朝此事已前、法印  
 被歸白河房了、今之間送使者云、可來我房、  
 今夜相具欲登山者、依有路次之恐、不行向、寄  
 宿家之爲體、凡卑之至、未曾有、身無一過、今遇如  
 此之難、宿業可悲、

廿六日、戊子〔天〕晴、拂曉欲向日野之間、依切塞其  
 路、不能首途、此間、昨日歸京武士〔等〕、無成而又  
 逃去了、歸京之本意、未知其詮、武勇之庭弱、所行之  
 尾籠、奇異之至、取喻無物、辰刻、歸法性寺、已刻、  
 定能卿送札云、御參事、奏聞了、早可有御參、入道  
 關白同所被參入也云々、楚忽出立、未刻登山、  
 鳥羽、前驅共人相并八人、各騎馬在車前、季經經家侍  
 直衣、自九條下手與遲引之間、暫  
 四五人、申終就西坂下、三頭也、無功寺法印沙汰也、即乘與登西坂、  
 經程、酉刻、與、々昇等到來、坂口五六町、猶騎馬也、前驅等步與前、於路頭、  
 共人皆悉步行、和具其息兼思、居與、退共人、調談、納言云、神  
 逢源納言、息兼思、居與、退共人、調談、納言云、神  
 璽、寶劍、内侍所、賊臣悉奉盜取了、而無左右、可

追討平氏之由、被仰下之條、甚不便、先可有  
 劔璽安全之沙汰、仍奏聞此旨、有勅許、以親宗、御  
 教書遣多田藏人大夫行綱之許了、此事猶荒沙汰也、  
 仍內々可被仰遣女院、若時忠卿件細之許之由、  
 重以奏聞、可然之由有仰云々、即過了、戌刻、到東  
 塔南谷青蓮院、先是、院主法印被座、自無動寺、只今  
 被渡云々、件房傳領之後未渡、今日依爲吉曜、即  
 用移徙之由所被談也、余暫休息之後、參法皇御  
 所、圓融房、是座主房也、路之間、前驅等取松明前行、其程四五町  
 許也、余烏帽直衣乘手輿、以定能卿入見參、依召  
 參御前、暫祇候、粗申所思了、劔璽、及源氏入京之  
 間事也、雖有和說之恐、蓋是存忠、於納否一者在  
 叙慮、勅定曰、依聞可被引率西海之由、所密  
 行也云々、余奉問兩條之不審、一者、神璽紛失事、  
 去治承四年之比、被盜取之由、有其間、一者、三條宮存否事、仰、兩事共不  
 知真偽、但風聞之旨、共以不實歟、存之由也、宮不  
 退出了、

廿七日、巳天晴、依風病發動、今朝不參御所、定能  
 卿來、又定長爲御使來云、前內大臣已下追討事、內  
 內雖被仰下、猶可給證文、而宣旨歟、應御下文歟如

何、余云、人主已伴賊、宣旨之條已謀書歟、應御下文  
 可宜、定長又云若可爲法皇之詔書歟、余云、此事雖  
 爲大事、不似被下攝政詔歟、只應御下文可宜、  
 余問云劔璽之沙汰如何、定長曰、主上劔璽共可有還  
 御之由、定長書御教書、相具主典代景宗、可遣平  
 大納言之許、余曰、此事甚厖弱沙汰歟、縱雖遣御教  
 書、於御使者可被止、如召使兩三人可差遣  
 歟、凡此劔璽事、以別奇謀、尋彼緣邊人、可被誘  
 語歟、事雖似有私、安穩出來事、甚難有之故也、  
 余又云、於今者、義仲、木行家等、停止士卒之狼  
 藉、早可入京歟、其後早速可有還御、不然者、京  
 都濫吹散不可止、此等之趣早可奏聞、定長歸了、未  
 刻、定能卿告云、連々依無日次、今日俄還御、  
 明日復日、明後日御衰日、至晦日之際、甚可懈怠之故也、即以出御、余御幸之後、同以  
 出山、戌刻、到法性寺、依爲歸忌日、宿僧房、法皇  
 同依歸忌日、還御蓮花王院云々、今度可參中堂  
 之由、相存之處、日次不宜之上、事卒爾之間、空以下  
 洛、所願成就之時、可散此恨之由、中心祈願了、  
 廿八日、庚天晴、今日、義仲行家等、自南北義仲北、行家南、入  
 京云々、晚頭、左少辨光長來語云、召義仲行家等於蓮



花王院御所、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>遣追討事、大理於<sub>二</sub>殿上緣<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、彼兩人跪<sub>レ</sub>地承<sub>レ</sub>之、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>也、參入之間、彼兩人相並、敢不<sub>二</sub>前後<sub>一</sub>、爭權之意趣以<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>知、兩人退出之間、頭辨兼光仰<sub>レ</sub>京中狼藉可<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>之由云々、今朝、定能卿來、法印昨日下午<sub>レ</sub>京、

廿九日、卯天晴、申刻、相<sub>二</sub>伴大將<sub>一</sub>參院、以<sub>二</sub>定長<sub>一</sub>申入、歸來示<sub>二</sub>覽可<sub>一</sub>候之由、數刻之後、定能卿來云、被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>御念誦<sub>一</sub>了、早可<sub>二</sub>退出<sub>一</sub>云々、仍退出、直歸<sub>二</sub>九條亭<sub>一</sub>、先是、女房等歸了、

卅日、壬辰天晴、早旦、泰經卿送<sub>二</sub>書於季長朝臣<sub>一</sub>許<sub>二</sub>曰<sub>一</sub>、今日、於<sub>レ</sub>院可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>議<sub>二</sub>定大事<sub>一</sub>、已刻可<sub>二</sub>豫參<sub>一</sub>者、午一點、着<sub>二</sub>冠直衣<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>蓮花王院<sub>一</sub>、先是、左大臣、大納言實房、忠親、中納言長方等、在<sub>二</sub>御堂南廊東面座<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>風吹<sub>一</sub>垂<sub>二</sub>簾<sub>一</sub>、余同加<sub>二</sub>彼座頭<sub>一</sub>、辨兼光朝臣奉<sub>レ</sub>仰來、仰<sub>二</sub>左大臣<sub>一</sub>云、條々事可<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>者、其事三ヶ條、具載<sub>二</sub>左<sub>一</sub>、

一仰云、今度義兵、造意雖<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>賴朝<sub>一</sub>、當時成功事、義仲行家也、且欲<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>賞者、賴朝之爵難<sub>レ</sub>測、欲<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>彼上洛<sub>一</sub>、又兩人愁<sub>二</sub>賞之晚<sub>一</sub>歟、兩ヶ之間、叙慮難<sub>レ</sub>決、兼又三人勸賞可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>等差<sub>一</sub>歟、其間子細可<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>者、人々申云、不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>賴朝參洛期<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>彼賞<sub>一</sub>、三人同

時可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、賴朝賞、若背<sub>二</sub>雅意<sub>一</sub>者、隨<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>改易、有<sub>二</sub>何難<sub>一</sub>哉、於<sub>二</sub>其等級<sub>一</sub>者、且依<sub>二</sub>勳功之優劣<sub>一</sub>、且隨<sub>二</sub>本官之高下<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>計行<sub>一</sub>歟、惣論<sub>レ</sub>之、第一賴朝、第二義仲、第三行家也、

賴朝、京官、任國、加級、左大臣云、於<sub>二</sub>京官<sub>一</sub>者、參洛之時可<sub>レ</sub>任、余云、不可<sub>レ</sub>然、同時可<sub>レ</sub>任、長方同<sub>レ</sub>之、

義仲、任國、叙爵、但以<sub>二</sub>國之勝劣<sub>一</sub>任<sub>レ</sub>之、尊卑可<sub>レ</sub>差、別云々、實房卿云、義仲從上、行家從下宜歟、

一仰云、京中狼藉、士卒巨萬之所<sub>レ</sub>致也、各可<sub>レ</sub>減<sub>二</sub>其勢<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之處、不慮之難、非無所<sub>レ</sub>恐、爲<sub>レ</sub>之如何、兼又縱雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>減<sub>二</sub>人數<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>兵糧<sub>一</sub>者、狼藉不可<sub>レ</sub>絕、其用途又如何、同可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計奏<sub>一</sub>者、

人々申云、於<sub>レ</sub>今者、餘黨之恐、定不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>群歟<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>減<sub>二</sub>士卒人數<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>上計<sub>一</sub>、兵糧事、頗有<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、忠親、長方等云、各賜<sub>二</sub>一ヶ國<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>宛<sub>二</sub>其用途<sub>一</sub>、余難<sub>レ</sub>曰、勸賞任國之外、更賜<sub>レ</sub>國之條如何、

兩人云、其用訖者、被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>何難<sub>一</sub>、余曰、理可<sub>レ</sub>然、但彼等定含<sub>二</sub>收公之恨<sub>一</sub>歟、只沒官地之中、擇<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之所<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>宛給<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、不然又以<sub>二</sub>一ヶ國<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>賜兩<sub>一</sub>人<sub>一</sub>歟、但此條頗爲<sub>二</sub>喧嘩之基<sub>一</sub>歟、猶賜<sub>二</sub>沒官之所<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>宜、左大臣云、兩方之議各可<sub>レ</sub>然、可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>、頗被<sub>二</sub>同<sub>一</sub>



余議一  
歟、

一仰曰、神社、佛寺、及甲乙所領、多在關東北陸、於  
今者、各遣其使、可致沙汰之由、可被仰本  
所歟、

一同申云、不可有異議、早可被仰者、

兼光聞人々申狀、參御所了、其後經數刻、此間、余  
問左府曰、若被行勸賞者、除目儀如何、左府曰、此  
事難題也、一昨日、議定之時雖被問、可有除目  
否、於其間儀者、未及其沙汰、但所存者、於院殿  
上、可被行於下名者、如春秋除目、於官外記應  
可被下、余曰、於應可被下々名者、只於陣可  
被行除目歟、凡以宣旨官符、被施行事等、皆  
被改應御下文了、斯即爲院御沙汰、成宣旨、請  
印官符之條、不可然之故也、何至下名可破其  
儀哉、惣院殿上除目、甚不甘心、左府云、此事自本  
希代之權議也、然而、依無他計、存此儀、余云、於  
勸賞者、只内々仰其人、新主踐祚之時、可被載除  
目歟、左府云、諸國多以有闕、併口宣之條不穩便、  
余云、於他任人者、豈可被相待歟、長方卿云、抑、  
被相待主上還御之條、尤以不定、立王事、以何時

六百十二

可期哉、余云、事之肝心只在是、左府云、就勅問  
可評定也、此條不被尋問、進申之條可無便歟、  
如、此議定之間、兼光歸來云、勸賞除目其儀如何、宜  
令計申者、忠親卿云、准據之例、可被問外記  
歟、左府稱善、即以兼光問之、歸來申云、賴業、師  
尙等申云、如諸社行幸、御幸等賞、先被仰其人、後  
日被載除目宜歟、又嘉承攝政詔、先帝崩御、新主未  
御、以法皇詔、於仗下被下了、然者、以新儀於  
殿上被行、又可御在御定、但初議穩便歟、且是時中  
任參議例也、四院院、太井川追遠、依舞賞、被仰在參議之  
由、後日被載除目、此事見小野宮記、彼記意、  
以上皇宣被任參  
議之條、甚難之、人々皆以此儀爲是、左府又破執  
同之、兼光歸參了、即出來云、各議奏之趣、皆以可  
然、早此定可被行者、於今者、各可有御退出  
者、余即退出了、攝政今日下京云々、數日在山上、人  
以爲奇歟、今日、法印被來、如日來居住西家、自  
今日、籠僧一人於吉田社、七々日之間令修仁王講、  
又奉幣帛、

八月

一日、壬天晴、今日、以八條院内々有申入事、御報

分明、

二日、<sup>甲</sup>天晴、傳聞、攝政有二ヶ條之由緒、不可<sub>レ</sub>動搖云々、一者、去月廿日比、前內府、及重衡等密議云、奉<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>法皇、可<sub>レ</sub>赴<sub>二</sub>海西、若又可<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>住法皇宮云々、聞<sub>二</sub>如此之評定、以<sub>二</sub>女房、<sup>故邪卿愛物、白川殿女房冷泉局、</sup>密告<sub>二</sub>法皇、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>報<sub>二</sub>此功云々、一者、法皇詔<sub>二</sub>攝政、依<sub>二</sub>其愛念、可<sub>レ</sub>抽賞云々、雖<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>祕事、希異之珍事、爲<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>知<sub>二</sub>子孫、所<sub>二</sub>設置也、又聞、入道關白、乍<sub>レ</sub>帶<sub>二</sub>病、<sup>癩</sup>參<sub>二</sub>宿院御所北對、以<sub>二</sub>前中納言師家、<sup>生年十歲、</sup>可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>攝錄之由注<sub>二</sub>所望、天氣不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>之云々、

今日、前源中納言來、談<sub>二</sub>世上事、此次語云、去六月一日、主上自<sub>二</sub>南殿南階、令<sub>二</sub>落<sub>二</sub>溜下<sub>二</sub>給、以外怪異也、藏人親資奉<sub>二</sub>抱上陣邊、上官一兩見<sub>レ</sub>之、深以祕藏云々、三日、<sup>藏人長正</sup>天陰、傳聞、去比、內裡板敷上牛昇臥、及<sub>二</sub>數剋、長正見<sub>レ</sub>之、追下了云々、又晝御座上狐糞をまり置云々、今日午刻、頭辨兼光、爲<sub>二</sub>御使<sub>二</sub>來云、解官事、法皇勅歟、又內々可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰歟、問<sub>二</sub>大外記兩人<sub>二</sub>之處、賴業申云、只可<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>宣奉勅、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>法皇字、師尙申云、只內々被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>外記、追可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>宣旨云々、申云、師尙申狀穩便歟、猶可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>宣旨者、可<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>法

皇勅也、只奉<sub>レ</sub>勅之條不<sub>二</sub>甘心、此次、申<sub>二</sub>京中畿外狼藉可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>止之子細、立<sub>二</sub>條之理、令<sub>レ</sub>申了、是和說也、更不<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用之由、只爲<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>忠也、

四日、<sup>丙</sup>今日、大原野社、內々奉<sub>二</sub>幣帛、又自<sub>二</sub>今日限<sub>二</sub>七ヶ日、修<sub>二</sub>仁王講、今日、神齋修<sub>二</sub>祓、

五日、<sup>丁</sup>天晴、依<sub>二</sub>彌勒講、參<sub>二</sub>御堂、經家朝臣云、玄上出來了、檢非違使知康許女持<sub>二</sub>來之云々、

六日、<sup>戊</sup>京中、物取追捕、兼日陪增、天下已滅亡了、山嶺巖穴、無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>閑之所、三界無安之金言、誠哉此言、

此日參院、以<sub>二</sub>定能卿<sub>二</sub>申入、以<sub>二</sub>頭辨兼光<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>仰下云、立王事、所<sub>二</sub>思食煩也、先可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>主上還御哉、

將又且雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>劍璽、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>新主哉之由、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御卜之處、官寮共、申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>主上之由、而猶

此事依<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>思食、重被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>官寮、各數人<sup>官二人、寮八人、</sup>申狀、彼是不同、但吉凶半分也、此上事、何樣可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰

哉、可<sub>レ</sub>計申者、申云、先次第沙汰、頗以依違歟、先有<sub>二</sub>議定、人意不<sub>二</sub>一決、偏可<sub>レ</sub>訪<sub>二</sub>占卜之由、議奏之時、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御卜也、而遮以被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御卜、今又被<sub>レ</sub>乖<sub>二</sub>彼趣之

條、太以無<sub>二</sub>其謂、卜者不<sub>二</sub>再三云々、而及<sub>二</sub>度々之

條、又以不可<sub>レ</sub>然、而於<sub>レ</sub>今者、偏可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>卜者、重

隨良將吉神等之趣、可有斟酌歟、但愚案之所及、立王于今懈怠、愚心所傾思也、其故、先京華狼藉于今不止、是人主不御座、令然也、是次須被急征討之處、平氏等奉具主上、及三神、已赴海西、不立主有征伐、於議有妨、是次我朝之習、不得劍璽踐祚、曾無例、而繼體天皇爲臣下被迎之時、如國史文、書之踐祚、甲申、天皇移樟葉宮、辛卯、得璽符鏡劍即位云々、往古雖無讓位即位之分別、如今文者、即位以前、已稱天皇、又謂踐祚、即被移皇居、其後得劍璽即位云々、然則、准據尤可合之由所存也、是凡天子之位、一日不可曠、政務悉亂云々、于今遲々之條、萬事違亂之源也、早速可有沙汰、不可有異議者、左大臣同參候云々、非一所兼光參上、小時歸來云、所申可然、就中、爲征伐可奉立人主之條、事之肝心也、仍早可有立王之事云々者、愚案次第之沙汰、悉以違亂散々、凡不能左右々々、未曾有之事也、天下滅亡、只此時也、可悲々々、

七日、己亥、今日、春日社奉幣、又同社獻細劍一腰、紫檀二筋、地銀、修祓遙拜、又自讀心經千卷、法樂御社、又今

日進鏡箱二於大神宮、社料、內外來十一日、可參着也、

八日、庚子、自今日始祈、

九日、辛丑、今日、修百度祓、傳聞、去六日、有解官二百餘人云々、時忠卿不入其中、是被申可有還御之由之故也云々、朝務之庭弱、以之可察、可憐々々、

十日、壬寅、天晴、依昨日召、申刻、着直衣、參院、先是、

左大臣內大臣在西對代南庇座、余加其座、昨日催之時、申依所勞參入不定之由、仍余參入以前、大略議定了云々、兩府粗語其趣、各云、兼光爲奏聞評定之趣、參御所了、未歸來之間也云々、此間、三人交語、兼光猶不來、仍左大臣召藏人、觸余參入之由於兼光、覽之兼光來、仰左府曰、條々聞食了、但親王宣旨事、重可計申者、左大臣被目余、余曰、可被下親王宣旨之間儀歟、將彼宣旨可有否之議歟、兼光曰、兩條共可定申者、余云、任光仁天皇例、雖無親王宣旨、何事之有哉、且宣下之間、無便宜之上、寶龜例爲最吉者、左右兩府同之、此事余參入以前、兩府被申可有親王宣旨之由云々、而今爰其儀被同余議也、此後、兼光問條々事於余、兩府以前

申了事等也、

一皇居事、

申云、大内如何、閑院又宜歟、兩府云、閑院可<sub>レ</sub>宜之由申、且爲<sub>二</sub>吉所<sub>一</sub>之故也云々、余云、善、但內心所<sub>レ</sub>思、強不可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>吉歟<sub>一</sub>、

一大刀契、鈴印等在大内、奉<sub>二</sub>渡<sub>一</sub>閑院之間、緣事諸司可<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>歟事、

申云、可<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>、

一漏刻、陰陽寮可<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>歟事、申狀同前、

一御椅子、多在<sub>二</sub>蘭林坊<sub>一</sub>、是大嘗會之時御物也、大略螺鈿也、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>彼歟<sub>一</sub>、將可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>新造<sub>一</sub>歟事、

申云、累代之物、出來之間、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>借<sub>二</sub>用舊物<sub>一</sub>、專不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>新造<sub>一</sub>、

一時簡事、

申云、新造無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、抑、被<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>日時<sub>一</sub>之間、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>議歟、寬和二年例、一條院於<sub>二</sub>新主宮<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>勘<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>渡<sub>一</sub>御椅子時簡<sub>一</sub>、日時、准<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>者、新造日時又可<sub>レ</sub>同歟、此事、兼人々不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申歟、余令<sub>二</sub>申之時<sub>一</sub>、人々有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之氣色<sub>一</sub>、兼光又甘心、

一傳國璽宣命、於<sub>二</sub>何所<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>哉事、

申云、院殿上歟、仗座歟、可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>時議<sub>一</sub>、左大臣曰、院殿上

無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>、內府曰爲<sub>二</sub>當日事<sub>一</sub>、猶於<sub>二</sub>仗座<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>歟、余此事不<sub>二</sub>思得<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、退案<sub>レ</sub>之、內府議可<sub>レ</sub>然、

一藏人瀧口所衆等、任<sub>レ</sub>例可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>渡歟事<sub>一</sub>、

申云、可<sub>レ</sub>然、

一可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>渡<sub>一</sub>御裝束歟事、

申云、多是所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>渡也<sub>一</sub>、但今度不可<sub>レ</sub>然、內府曰、御笏許可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>渡<sub>一</sub>、余云可<sub>レ</sub>然、

一劍璽事、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召<sub>一</sub>諸道勘文否事、

申云、可<sub>レ</sub>然、但如<sub>二</sub>當時議<sub>一</sub>者、立王可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>待<sub>一</sub>劍璽、賢所等<sub>二</sub>之議也<sub>一</sub>、然者、遂紛失之時、可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>如<sub>一</sub>此沙汰歟、兩條可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>、兩府云、猶可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召<sub>一</sub>諸道勘文、余不言、

一勘文事、內々以<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>可<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>歟、將可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>上卿<sub>一</sub>歟、此事始所<sub>レ</sub>仰也、

左大臣云、御教書可<sub>レ</sub>宜、他人不言、余追案<sub>レ</sub>之、猶可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>上卿<sub>一</sub>歟、

一若宮御渡議事、此事始所<sub>レ</sub>問也、

內府云、法皇渡<sub>二</sub>御高松殿<sub>一</sub>例、不可<sub>二</sub>外求<sub>一</sub>、余、及左府云、善、



此後、左大臣退出、兼光云、除目事、猶於院殿上移、  
 仗座、可<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之由、左大臣作<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>、內々給<sub>二</sub>兼  
 光、經<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>之處、其定、可<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之由有<sub>二</sub>御定<sub>一</sub>、余云、無<sub>二</sub>  
 異議<sub>一</sub>、內府云、猶於<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>朝親行幸賞<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行  
 也、余云、行幸賞者、不可<sub>レ</sub>似<sub>二</sub>此議<sub>一</sub>、只如<sub>二</sub>殿上定<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>  
 行也、內府同<sub>レ</sub>之、頗似無意趣內府又云、猶可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>破左府  
 議<sub>一</sub>也、兩人一同之由早可<sub>レ</sub>奏、移<sub>二</sub>仗座<sub>一</sub>之儀、專可<sub>レ</sub>見  
 苦<sub>二</sub>之故也<sub>一</sub>、余云、此事不可<sub>レ</sub>然、恩意之所<sub>レ</sub>及經<sub>二</sub>奏  
 聞<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>用捨<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>余者、全不可<sub>レ</sub>執申、  
 若未<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>天聽<sub>一</sub>者、尤可<sub>レ</sub>奏聞、兼光云、具奏聞了、余  
 云、彌以不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>々々、內府又諾、其後、暨以  
 言談、余先退出了、今日、院參以前、大外記賴業來、談<sub>二</sub>  
 世上事<sub>一</sub>、上御沙汰遠亂之上、源氏等惡行不止、天下忽  
 欲<sub>二</sub>滅亡<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>悲々々、拭<sub>二</sub>紅淚<sub>一</sub>、摧<sub>二</sub>丹心<sub>一</sub>、賢哉々々、小  
 時退出了、今日、除目俄延引、只被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>勅賞許<sub>一</sub>云々、  
 經房書<sub>レ</sub>之、實房下<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>、但非除目之議云々  
 十一日、癸卯雨下、先日、所<sub>レ</sub>進太神宮之劍箱等、今日參  
 着日也、仍神齋、修<sub>レ</sub>祓遙拜、衣冠、見<sub>二</sub>去夜聞書<sub>一</sub>、  
 義仲、從五位下、左馬頭、越後守、行家、從五位下、備後守云々  
 十二日<sub>甲辰</sub>雨下、傳聞、行家稱<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>厚賞<sub>一</sub>、忿怨、且是與<sub>二</sub>

義仲賞<sub>二</sub>懸隔<sub>一</sub>之故也、閉門辭退云々、

一昨日夜、所<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>時忠卿許<sub>一</sub>之御教書、返札到來、其狀  
 云、京中落居之後、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>還<sub>一</sub>幸劍聖已下寶物等事、  
 可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>前內府<sub>一</sub>歟云々、事體頗似<sub>二</sub>有<sub>一</sub>嘲哂之氣、又  
 貞能請文云、能樣可<sub>レ</sub>計沙汰云々、當時在<sub>二</sub>備前國小  
 島<sub>一</sub>船百餘艘云々、或說云、鎮西諸國補<sub>二</sub>宰吏<sub>一</sub>云々、大  
 略、天下之體、如<sub>二</sub>三國史<sub>一</sub>歟、西平氏、東賴朝、中國已  
 無<sub>二</sub>劍聖<sub>一</sub>、政道偏暴虎與<sub>二</sub>庭弱<sub>一</sub>也、甚似<sub>二</sub>無<sub>一</sub>其惡歟、  
 征伐遲引、院中諸人、懸<sub>二</sub>心於闕國<sub>一</sub>、及庄園等、君又貪<sub>二</sub>  
 着此欲<sub>一</sub>、上下逢境、歡喜無<sub>二</sub>他<sub>一</sub>、不知<sub>二</sub>天下之亡弊<sub>一</sub>、不  
 顧<sub>二</sub>國家之傾危<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>嬰兒<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>禽獸<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>悲々々、今夜、  
 爲<sub>二</sub>方達<sub>一</sub>向<sub>二</sub>大將宅<sub>一</sub>、

十四日、丙午入<sub>レ</sub>夜、大藏卿泰經爲<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>來、先是有召、依疾申其由、仍所來余隔<sub>二</sub>簾謁<sub>一</sub>之、泰經云、踐祚事、高倉院宮二人、  
 一人義範女腹五歲、一之間、思食煩之處、以外大事出來了、  
 人信隆、女腹四歲、義仲、今日申云、故三條宮御息宮在北陸、義兵之勳功  
 在<sub>二</sub>彼宮御力<sub>一</sub>、仍於<sub>二</sub>立王事<sub>一</sub>者、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>之由  
 所存也云々、仍重以<sub>二</sub>俊堯僧正<sub>一</sub>、與義仲爲親昵之故被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>子  
 細云、我朝之習、以<sub>二</sub>繼體守文<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>、高倉院宮兩人御  
 坐、乍<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>其王胤<sub>一</sub>、強被<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>孫王<sub>一</sub>之條、神慮難<sub>レ</sub>測、此

條猶不可然歟云々、義仲重申云、於如此之大事者、源氏等雖不及執申、粗案事之理、法皇御隱居之刻、高倉院恐權臣、如無成敗、三條宮依至孝亡其身、爭不思食、忘其孝哉、猶此事難散其爵、但此上事在勅定云々者、此事如何可計奏者、申云、於他朝議者、不願事之許否、每有諮詢、述恩歟、至王者之沙汰者、非人臣之寂、昔法皇御宇之始、近衛上皇御事之後、以誰可爲主哉之由、鳥羽院被問、仰此法性寺（忠通）入道相國、即奏以我君御事、從彼言、踐祚已了、彼時猶依恐冥鑒、兩三度不言、是非、只請勅斷、微問及再三之時、以道理奏達、朝之重臣、國之元老、猶恐重事之不輕、屢不能自專、況區々之末生、不肖之愚臣、得而不可言上、偏任微慮、須被行御占之由、雖可令計奏、其條猶有恐、只以微念之所欲、可令存天運之令、然之由、御歟者、秦經退出了、

十五日、未天晴、晚頭、光長來、傳院宣云、成勝寺之內、可被立神祠之由所思食也、其故者、近曾以來亂逆連綿、天下不靜、依彼冤靈、有此災難之由、世之所思也、仍爲令湧其靈魂、立神祠、可待

影降之由、微慮所一決也、其間之儀可計奏者、申云、此事暗難計申、被問例於外記、隨勘申、可有其沙汰歟者、（光長云、可問左內兩府云々、此事、社歟廟歟、准八幡宮、及北野宮例等者、可爲廟歟云々、此次語云、平家餘勢非○非或幾百餘艘、當時在備前國小嶋云々、鎮西間、母字關、仍不能通鎮西、可領南海山陽兩道之由雖結構、定不叶歟云々、入夜向御堂、法印率弟子等、令修廿五三昧念佛、源信僧都始此行云々、最上功徳也、此法印、年來於住房修之、今月被座此邊、仍使參御堂被修、余爲結緣、率女房所聽聞也、爲聽聞所參也、天曙之後歸宅、大將同參入、余扇少々欲施僧達、（法印相如八口、而依別願、無如此事之由、法印被示、仍翌日送彼房也、

十六日、申長光入道來、談古事等、今夕有受領除目、於院殿上一行之、上卿民部卿、參議右大辨親宗書之、（無清書、召外記下之、又有解官等云々、任人之體、殆可謂物狂、可悲々々、十七日、酉申刻、頭辨兼光送札云、明日可參院、神鏡飯聖等、諸道勘文之間事、並雜事等、可被豫議也云々者、稱疾不參、今日、法印被來、或人云、入道關白被申院云、經東宮傳之人、不任攝錄云々、此

事不被信受之處、以兩人說一聞之、可奇々々、十八日、庚戌終日雨降、今日議定之趣、追可尋記之、定無異議一歟、近代之作法而已、靜賢法印以人傳云、立王事、義仲猶爾申云々、此事先始以高倉院兩宮被卜之處、官寮共以兄宮爲吉之由占申之、其後、女房丹波御愛物遊君、今號三保殿、夢想云、弟宮四位信隆、御外孫也、有行幸、持松枝行之由見之、奏法皇、仍乖卜筮、可奉立四宮之樣思食云々、然間、義仲推舉北陸宮、仍入道關白、藤基房攝政、藤基通左大臣、藤基宗余、四人應召、三人參入、余依病不參、彼三人各被申云、北陸宮一切不可然、但武士之所申不可不恐、仍被行御卜、可被從彼趣、松殿一向不及占、可被仰御子細於義仲云々、余只奉勅定之由申了、仍折中被行御占之處、今度、第一四宮依夢想事也、第二三宮、第三北陸宮、官寮共申第一最吉之由、第二半吉、第三始終不快、以占形遣義仲之處、申云、先以北陸宮可被立第一之處、被立第三無謂、凡今度大功、彼北陸宮御力也、爭默止哉、猶申合郎從等、可申左右之由申云々、凡勿論之事歟、不能左右、凡初度卜筮、與今度卜筮、被立替一二之條、甚

有私事一歟、卜筮者不再三、而此立王之沙汰之間、數度有御卜、神定無靈告一歟、小人之政、萬事不一決、可悲之世也、又聞、攝政被鐘愛法皇事、非昨今之事、御逃去以前、先五六日密參以女房冷泉局爲媒云々、自去七月御入講之比、有御艷氣、七月廿日比、被遂御本意、去十四日參入之次、又有艷言御戲等云々、事體、御志不淺云々、君臣合體之儀、以之可爲至極一歟、古來無如此之蹤跡、末代之事、皆以珍事也、勝事也、被報密告之思、其實只起自愛念云云、今日、大將送札云、去夜夢想、春日大明神告仰云、不審申事、余運事、日來之間、中心疑之、乞其告云々、更不可有疑、即夢中思之、信伏無極云々、幼少之心底思此事、尤可憐々々、此夢又可信々々、

十九日、辛亥陰晴不定、早旦、問昨日定子細於兼光朝臣許、國行奉書、注送旨如此、參入公卿八人、

左大臣、實房、忠親、成範、  
雅賴、長方、通親、親宗、  
神鏡事、

左大臣、皇后宮大夫、前源中納言、

如<sub>二</sub>諸道勘申<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>如在之儀<sub>一</sub>、然者、立<sub>二</sub>濱床<sub>一</sub>、設<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>儼<sub>二</sub>恒例臨時之神事<sub>一</sub>、忽不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>御辛櫃<sub>一</sub>、歟、兼又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>申諸社並山陵<sub>一</sub>、堀川大納言八條中納言、源宰相中將、

神鏡忽不<sub>二</sub>全紛失<sub>一</sub>、暫御<sub>二</sub>中<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>如在之議<sub>一</sub>、還似<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>、女官等候<sub>二</sub>內侍所<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>祈請<sub>一</sub>歟、凡可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>伊勢已下諸社<sub>一</sub>歟、且行<sub>二</sub>德政<sub>一</sub>、且致<sub>二</sub>祈請者<sub>一</sub>、定令<sub>二</sub>還坐<sub>一</sub>歟、但任<sub>二</sub>勘文之趣<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>如在之禮者<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>天德之例<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>三年料辛櫃<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>安置<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>內侍所<sub>一</sub>歟、神鏡縱不<sub>レ</sub>御、何可<sub>レ</sub>棄<sub>二</sub>內侍司<sub>一</sub>哉、民部卿、親宗朝臣、

事出<sub>二</sub>不慮之外<sub>一</sub>、更無<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>准之例<sub>一</sub>、但如<sub>二</sub>諸道勘文申<sub>一</sub>、致<sub>二</sub>如在之禮<sub>一</sub>、專可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>祈請<sub>一</sub>歟、御辛櫃已下任<sub>レ</sub>例可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>作儲<sub>一</sub>、先於<sub>二</sub>明後日<sub>一</sub>者、召<sub>二</sub>大藏省辛櫃<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>驛鈴<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>之歟、

劔璽事、

已上、諸卿一同申云、於<sub>二</sub>踐祚<sub>一</sub>者、恐可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂行<sub>一</sub>、一日曠<sub>レ</sub>之、庶務悉亂云々、其後被<sub>二</sub>祈請<sub>一</sub>者、何不<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>還坐<sub>一</sub>哉、

源中納言、

其趣同上、但無<sub>二</sub>劔璽<sub>一</sub>者、行幸之夜、頗可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>禮儀<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>累代御劔<sub>一</sub>、暫可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>御護<sub>一</sub>歟、源宰相中將、

後漢光武、晉元帝、即位之後、經<sub>レ</sub>年得<sub>レ</sub>璽、彼既爲<sub>二</sub>明時<sub>一</sub>、何不<sub>二</sub>因准<sub>一</sub>乎、但於<sub>二</sub>本朝<sub>一</sub>者、敢無<sub>二</sub>其類<sub>一</sub>歟、

固關事、

於<sub>二</sub>新帝仗座<sub>一</sub>、上卿召<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>、傳<sub>二</sub>仰警固事<sub>一</sub>、又三關便成<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>本國<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>、

宣命事、

嘉承之例、頗雖<sub>二</sub>相似<sub>一</sub>、偏難<sub>二</sub>准據<sub>一</sub>、彼者、自<sub>二</sub>皇太子<sub>一</sub>有<sub>二</sub>登極事<sub>一</sub>、此者、即日定<sub>二</sub>皇太子<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>帝位<sub>一</sub>、然者、太上天皇詔<sub>二</sub>天<sub>一</sub>、皇太子並踐祚、前主不慮脫履、攝政如<sub>レ</sub>舊事等<sub>レ</sub>、可<sub>レ</sub>書載<sub>二</sub>於<sub>二</sub>院殿上<sub>一</sub>奏、清書可<sub>レ</sub>傳<sub>二</sub>給中務<sub>一</sub>之由、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>、

時簡事、

自<sub>二</sub>院廳<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>所司<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>之、伊經染<sub>二</sub>筆天<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>新宮御物等<sub>一</sub>、

御讓位日時定事、

或勘、或不勘、今度不<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>勘申<sub>一</sub>、何事有哉、



先主尊號事、

尤可<sub>レ</sub>作之由、一同議定、若無<sub>二</sub>其議<sub>一</sub>者、定有<sub>二</sub>兩主之疑<sub>一</sub>歟、

踐祚夜內侍事、

如<sub>レ</sub>例、理髮二人可<sub>二</sub>伺候<sub>一</sub>歟、

御即位事、

其所官廳、其月十月可<sub>レ</sub>宜、紫宸殿儀、安和、治承甚以不快、十月例、上者光仁天皇、近者法皇御時是也、

二代同輿事、

全不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有其憚、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>、攝籙之例、尤可<sub>二</sub>相准<sub>一</sub>歟、早以<sub>二</sub>皇后宮<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>母儀<sub>一</sub>者、

新帝渡<sub>二</sub>御內裏<sub>一</sub>御裝束事、

常御直衣、二藍織物御指貫、生御單衣等可<sub>レ</sub>宜、抑、雖<sub>レ</sub>幼主不<sub>二</sub>着袴<sub>一</sub>之例、六條院頗以不快、明後日必可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御着袴<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>結<sub>二</sub>御腰<sub>一</sub>人、攝政被<sub>レ</sub>參者、頗可<sub>レ</sub>及大儀、院外戚公卿一人參<sub>二</sub>簾中<sub>一</sub>、儉可<sub>レ</sub>候<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、皇后宮大夫、得<sub>二</sub>其便<sub>一</sub>歟、

大刀契行列事、

如<sub>レ</sub>舊、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>、

此日、頭辨送<sub>レ</sub>札、院<sub>宣</sub>問<sub>二</sub>新主御名字可否<sub>一</sub>、<sub>副</sub>勅永仁尊成云々、<sub>式部大輔俊經</sub>余請文狀如<sub>レ</sub>此、<sub>卿撰中之一</sub>

御名字事、

近代多雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>仁字<sub>一</sub>、中古以往不<sub>二</sub>必然<sub>一</sub>、尊字後三條院、成字天曆聖主、件兩字、已彼二代之御諱也、加之、六府三事允治、即是非<sub>二</sub>禹之功<sub>一</sub>哉、帝王之功、始<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>禹云々、今已可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>草創之主<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尊<sub>二</sub>大功<sub>一</sub>歟、右愚意所<sub>レ</sub>及、大概如<sub>レ</sub>斯、永字、又無<sub>二</sub>殊難<sub>一</sub>歟、左右宜<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>聖斷<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>此等趣<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計披露<sub>二</sub>之狀如<sub>レ</sub>件、

八月十九日

右大臣、

壽永二年、八月廿日、<sub>壬</sub>天晴、此日、有<sub>二</sub>立皇事<sub>一</sub>、<sub>高倉院第</sub>四歲、母故正三位修兼日、頻有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、先以<sub>二</sub>高倉院兩宮<sub>一</sub>、<sub>理大夫信隆卿女</sub>三四、被<sub>二</sub>卜筮<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>三宮<sub>一</sub>之處、官寮共申<sub>二</sub>一吉之由<sub>一</sub>、其後、女房有<sub>二</sub>夢想事<sub>一</sub>、<sub>子細見</sub>宮可<sub>レ</sub>立給<sub>二</sub>之由也<sub>一</sub>、又義仲引<sub>二</sub>級坐<sub>一</sub>、加賀國之宮、<sub>子細見</sub>如<sub>レ</sub>此之間、更又有<sub>二</sub>御卜<sub>一</sub>、<sub>今度、以<sub>二</sub>四宮<sub>一</sub>立<sub>二</sub>第三<sub>一</sub>、又卜<sub>二</sub>申一吉之由<sub>一</sub>、第二半吉、第三不快云々、以<sub>二</sub>卜形<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>義仲之處<sub>一</sub>、大忿怨申云、先次第之立樣、甚以不當也、依<sub>二</sub>御歲次第<sub>一</sub>者、加賀宮可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>第一<sub>一</sub>也、</sub>

不然者、又如初可被爲先兄宮、事體似矯矯、不  
思食故三條宮至孝之條、太以遺恨云々、然而一昨  
日重遣御使、備正俊興、木曾之定使也、數遍往還、愁申可御定  
之由、仍其後一決云々、今日之事、依爲新儀、左大臣  
造進次第、就彼趣一行云々、問刻限於兼光之處、  
申秉燭之由、然而人々已參院云々、仍酉刻、右大  
將着束帶、舊給服、無文帶例、讓位細細有文也、然而無宣命宜  
新造次第載、制之儀事又非晴、仍可爲無文之由、人々存知之、上  
此由云々、先參院、以西中門廊爲公卿座、二行敷、不立蓋盤  
等、于時、御名字定間也、大將着座之後、經房發語、此  
事、兼一切不存之間、進退雖失度、左大臣頻被目、  
仍無所存、只申同其人<sub>丁</sub>之由<sub>丁</sub>、同通親云々、  
定趣、

左大臣、皇后宮大夫、左大辨等、申尊成可被用之  
由、

右大將、實宗、長方、通親等、申永仁宜之由了、

兼光聞人々申狀、參御所了云々、

次有傳國宣命、奏問事、外記內記<sub>大外記</sub>、等注、自反

砌、外記敬屈稱唯、大臣大咎、被仰可居之由、然而  
賴業不居、又參上之時、猶不居云々、其後、人々引率  
參開院、先是、若宮於院御所、密々御着袴之後、

實房病結腰、渡御開院、以後、殿上人衣冠前驅云々、公卿、  
徘徊對南廣庇邊、此間、大刀契、鈴印等、共在、被渡  
之、緣事所司供奉如例、其後經數刻、殆及一時許  
云々、子終、主上出御、攝政着御前、以東對四、補藏  
人、先朝又仰公卿昇殿、勅授等皆如例、先攝政拜之  
後、公卿昇殿、拜又如例、左大臣已下、納言等皆退出、  
家通卿爲上卿云々、是皆大將口狀也、子細見左大  
臣次第、續左、不得劍璽踐祚之例、希代之珍事也、  
仍續加之、

踐祚次第、左大臣造、

早旦、於院職事<sub>職事頭辨兼光也、</sub>召陰陽師、令勘踐

祚日時、於便宜所、今度攝政不參、刻限、攝政以下被參院、無文帶、大

臣以下着殿上、次職事下踐祚日時於大臣、仰云、

今日可有踐祚事歟者、

次大臣召大外記、左大臣爲上卿、大外記賴業奉行、下給日時、仰云、

今日可有踐祚事、諸司仁召仰與、

次職事、兼光、奉院宣、可令作傳國宣命之由仰

大臣、此間、職事又奉院宣、頭藏人昇殿、人々交名

獻攝政、

次大臣召大內記、內記、仰宣命事、可載太上法皇

詔旨之旨、可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>下之<sub>一</sub>、又攝政事可<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>之、先帝不慮脫履事、同可<sub>レ</sub>載歟、

次內記進<sub>二</sub>宣命草<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>宮、

嘉承之例、无<sub>二</sub>草奏<sub>一</sub>、直進<sub>二</sub>清書<sub>一</sub>、但今度、宣命之趣、殊可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>思慮<sub>一</sub>、然者、先可<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>草歟、

次以<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>、內覽並院奏、攝政若不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>參者、以<sub>二</sub>內記<sub>一</sub>內<sub>二</sub>覽之<sub>一</sub>、一度先無<sub>二</sub>內覽<sub>一</sub>之儀、彼可<sub>レ</sub>覽之由、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>云々、

次職事返下、

次大臣召<sub>二</sub>內記<sub>一</sub>仰云、令<sub>二</sub>清書<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>進、

次內記進<sub>二</sub>清書宣命<sub>一</sub>、其間儀如<sub>レ</sub>先、以<sub>二</sub>職事<sub>一</sub>內<sub>二</sub>覽院奏<sub>一</sub>、

次大臣召<sub>二</sub>大外記<sub>一</sub>給<sub>二</sub>宣命<sub>一</sub>、作<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>宮給<sub>レ</sub>之、仰云、中務仁可<sub>二</sub>傳給<sub>一</sub>、

次攝政以下相引、被<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>閑院<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>、仍此間、大刀契以下、自<sub>二</sub>大內<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>閑院<sub>一</sub>、緣事諸司任奉、大刀契置<sub>二</sub>內侍所邊<sub>一</sub>、引<sub>二</sub>立陣座<sub>一</sub>、南庭置<sub>二</sub>版位<sub>一</sub>、

立<sub>二</sub>炬火屋<sub>一</sub>、

攝政以下、參入之後、勅授公卿、可<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>解<sub>一</sub>、新帝着<sub>二</sub>御畫御座<sub>一</sub>、直衣、不<sub>レ</sub>攝政者、同御座邊圓座、

次攝政召<sub>二</sub>藏人<sub>一</sub>一薦、先朝一薦、藏人候<sub>二</sub>地上<sub>一</sub>、仰<sub>二</sub>可<sub>一</sub>、

罷登<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、即候<sub>二</sub>簀子敷<sub>一</sub>、

次攝政仰云、藏人仁可<sub>レ</sub>補、下<sub>レ</sub>地拜舞退歸、候<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、

次攝政又召<sub>二</sub>藏人<sub>一</sub>、初、自<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>參入、

次攝政被<sub>レ</sub>仰云、公卿牛車、勅授昇殿如<sub>レ</sub>舊、頭藏人、

昇殿人々、雜色、非雜色、出納、瀧口等事、又禁色、雜色、雜袍事、同被<sub>レ</sub>仰、

次藏人、牛車勅授、禁色雜袍事、仰<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>、

次大臣於<sub>二</sub>弓場殿邊<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>外記<sub>一</sub>仰<sub>レ</sub>之、或於<sub>二</sub>伏座<sub>一</sub>此間、勅授公卿帶劍、

次攝政起<sub>レ</sub>座進<sub>二</sub>弓場<sub>一</sub>、奏<sub>二</sub>慶賀拜舞<sub>一</sub>、

次大臣以下公卿、於<sub>二</sub>弓場<sub>一</sub>拜舞、攝政加<sub>二</sub>此例<sub>一</sub>又拜舞、

次攝政以下着<sub>二</sub>殿上<sub>一</sub>、居<sub>レ</sub>膳、三々、

次攝政歸<sub>二</sub>參御前<sub>一</sub>、

次藏人<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>殿上口<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>出納<sub>一</sub>仰<sub>二</sub>頭藏人<sub>一</sub>、昇殿人、

雜色、非雜色、出納、瀧口事、

次頭藏人、殿上人拜舞昇殿、

次立<sub>二</sub>御調度等<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>例、

御笏、若先帝令<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>御<sub>レ</sub>、可<sub>レ</sub>然之人<sub>二</sub>、兼可<sub>一</sub>

召<sub>二</sub>牙笏<sub>一</sub>歟、

此間攝政於直廬覽吉書、

次大臣以下、大臣已下多以退出、仍中納言家通卿爲上卿、着仗座、令舍人所司

兼備膳、辨少納言勳孟、三々日有此事、有申文、職事下吉書、大臣召

次職事來、仰警固、固關事、

次大臣召外記、警固事可傳仰六府三寮之由被仰之、

次召辨、三ヶ國固關、可付國司之由、被仰之、

次供內侍所御供、三ヶ日有此事、先是、可裝內侍所宿床〔御〕座等、

次御膳、朝夕、主上不可着御、幼主之時例也、藏人頭爲陪膳、

次藏人書陪膳記、

次懸鈴繩於殿上、

此間、書所之簡、

次殿上日給畢、封簡入袋、

次內豎奏時、

次瀧口申問藉、

次問諸陣見參、

次殿上名謁、或無之、

次近衛夜行、

翌日、不審事等問兼光、返事如此、

劔璽事、

諸道勘文進上之、書寫返、

時簡事、

被新調候、伊經令書銘候、

御倚子事、

被用細殿螺鈿御倚子候、但螺鈿彩色隱候也、

御笏事、

累代御笏候、

御乳母事、

未定候、

御即位事、

來十月廿七日之由、其聞候也、

藏人頭、

左中將隆房朝臣、左中辨兼光朝臣、

藏人、

五位、

左衛門權佐親雅、右衛門權佐定長、

宮內少輔親經、

已上、皆先朝職事也、

六位、



源清實、先朝下萬、成實子、藤原範綱、民部卿子、同光親、光雅子、

高階泰家、資泰子、源家光、行家子、

殿上人、

正四位下、

內藏頭雅隆朝臣、

左中將通資朝臣、

右中將雅賢朝臣、

右中將實教朝臣、

右中辨光雅朝臣、

從四位上、

左少將基宗朝臣、

右少將實明朝臣、

權右中辨行隆朝臣、

右少將定輔朝臣、

右少將基範朝臣、

從四位下、

左少將兼宗朝臣、

左中將良經朝臣、

正五位下、

左少辨光長、

右少將成定、

侍從成家、

右少將伊輔、

右少辨兼忠、

右少將範能、

出雲守朝定、

右少將親能、

左少將兼經、

所乘、瀧口等各三人、被渡自先朝云々、

內侍二人、

美作、勾當、

伊與、已上先朝、

廿一日、丑自今夜受重病、萬死一生、寸白所爲也、

今日、大原本成房來、數刻法文談、

廿二日、寅時々雨下、所惱同前、女房依忌日、密々向東山小堂、母尼公相具、布施取少々催送之、

廿三日、卯所惱同前、及晚汗少出、辛苦少減、

廿五日、巳此日、除目云々、伯耆守基輔、推被任安藝守、勿論々々、兼光以院宣先被觸仰、申左右可也、

御定、但於藝州者非望之由申了、然而猶推以被替

之、過意尤不審々々、又或人告云、入道關白〔之〕息八

歲、中納言師家、生年十歲、直可加左大將云々、仍內々

申訴訟之由於院了、今度無此事、若被容訴狀一

欺、將又自本無其沙汰事欺、追聞、此事雖有沙

汰、忽然而止了云々、

廿六日、午見聞書、權大納言師家、權中納言兼房、此

外事不記、又良經叙從上、太冷然々々、定能卿來、

談世間事、

廿七日、未今日、獻假名書於八條院、以大臣可讓

大將之由、可令申院給之趣也、今日、佛殿聖人

來、談<sub>二</sub>法文事、

廿八日、庚申天晴、申刻、院別當式部權少輔範季爲<sub>二</sub>御

使來、自<sub>レ</sub>院被<sub>レ</sub>發遣公卿勅使之間、條々御不審事、

可<sub>レ</sub>計奏云々、

一奏<sub>二</sub>公家召馬事、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>歟、將應御下文

歟事、

申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>寬治、天承例、無<sub>二</sub>所見<sub>一</sub>者、只應御下

文宜歟、

一神璽之外、五色幣可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>獻哉否事、

申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>獻、此事、或人內々申云、忌部等參入猶有<sub>レ</sub>恐云々、余云、中臣可<sub>レ</sub>參、何憚<sub>二</sub>忌部可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>金銀幣、何憚<sub>二</sub>

五色哉、範季服臂、

一自<sub>二</sub>進發之日、至<sub>二</sub>歸京、御行法不可<sub>レ</sub>退、而御拜如

何、

申云行法以前可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御拜<sub>一</sub>、

一神璽御覽之間、神馬誰人可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>懺哉事、

申云、可<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>府之中候<sub>レ</sub>院之輩、

一宣命御署所、可<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>阿闍梨家<sub>一</sub>哉事、

申云、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>載、

余和說申云、脫履之後、雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>發遣勅使<sub>一</sub>之例、皆是

非<sub>二</sub>御出家、太神宮事、其齋殊密、以<sub>二</sub>法體<sub>一</sub>下<sub>二</sub>宸筆<sub>一</sub>、

書<sub>二</sub>宣命、奉<sub>二</sub>幣帛、有<sub>二</sub>御拜<sub>一</sub>之條、曾無<sub>レ</sub>例、又乖<sub>レ</sub>理、

今已踐祚之後、猶自<sub>二</sub>公家可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>立歟、若有<sub>二</sub>別御願<sub>一</sub>

者、付<sub>二</sub>加祭主可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>祈申、又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>然之僧

徒歟、此事雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>恐、偏思<sub>二</sub>冥鑒<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>申也、範季云、已

被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>神寶<sub>一</sub>了、忽默止如何、余云、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>公家行事

所、尤可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>善政、若又猶有<sub>二</sub>進物之御志者、非<sub>二</sub>幣物<sub>一</sub>

之外物付<sub>二</sub>祭主、若御使之僧徒等、密々奉納等、何難之

有哉者、後聞、依<sub>二</sub>予申狀、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占、猶申<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>立吉

之由、仍被<sub>レ</sub>立了云々、今日、頭中將送<sub>二</sub>札於基輔<sub>一</sub>云、

來月二日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>瀧口、右大臣殿御給名簿可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>申

進<sub>二</sub>給<sub>一</sub>云々、申<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>進之由<sub>一</sub>了、基輔奉書、貫首之返事、自可

<sub>レ</sub>書、然而此人白物也、仍以<sub>レ</sub>人令<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>之、傳聞、今日

於<sub>二</sub>七條河原、武士十餘人切<sub>レ</sub>頸云々、

廿九日、辛酉天晴、午後雨下、大外記賴業來、談<sub>二</sub>世上事、

歎息之外無<sub>二</sub>他事、實可<sub>レ</sub>悲之世也、

卅日、壬戌天晴、及<sub>レ</sub>晚、大夫史隆職來、談<sub>二</sub>世間事、今夜

家所宛也、如<sub>レ</sub>常、自<sub>二</sub>今夜、法皇令<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>公卿勅使御精

進屋<sub>一</sub>給、明後日發遣、明日爲<sub>二</sub>前齋<sub>一</sub>之故也、

九月〔小建〕

一日、癸亥雨下、明日、瀧口大寄云々、仍付余分三名簿於頭中將隆房朝臣了、名簿書様如常、

正六位上豐原朝臣章資、

壽永二年九月一日

此男、先朝瀧口也、先例無〔可〕憚者也、依口熱、齒下喰蛭、今日、依三方遠向大將方、今日、大將教除目、余遁世之志內催之故、如此事忿思之故也、

二日、甲子天晴、自今日、大將夫妻共始服祿、余未刻歸宅、女房少々加灸治、余指驗也、今夜、女官除目、政始云々、

三日、乙丑天陰、時々雨降、自隆職之許、注送去夜被

行之事等、

政始、上卿堀川大納言忠親卿、參議三人、(基家、定能、親宗)

女官除目、上卿左兵衛督家通、執筆右大辨親宗、

開關、解陣、上卿同人、

除目、

勅旨、

內侍司、

六百二十六

典侍從五位下藤原朝臣眞子、  
典侍從五位下藤原朝臣公子、  
掌侍正六位上藤原朝臣憲子、  
掌侍正六位上藤原朝臣積子、

壽永二年九月二日

或人云、賴朝、去月廿七日出國、已上洛云々、但不信受、義仲偏可立合支度云々、天下今一重暴亂出來、凡近日之天下武士之外、無一日存命計略、仍上下多逃去片山田舍等云々、四方皆塞、四國、及山陽道安藝、征討以前、不能通達、北陸山陰兩道、義仲押領、院分已下、宰吏一切不能更務、東山東海兩道、賴朝上洛以前、又不能進退云々畿內近邊之人領、併被刈取了、段步不殘、又京中片山、及神社佛寺、人屋在家、悉以追捕、其外適所遂不慮之前途之庄上之運上物、不論多少、不嫌貴賤、皆以奪取了、此難及市邊、昨日失買賣之便云々、天何棄無罪之衆生哉、可悲々々、如此之災難、出自法皇嗜慾之亂政與源氏奢逸之惡行、然間、思社稷之忠臣、遁俗塵之聖人、各遭非分之橫難、殆意成佛之直道、可哀者、只前世之宿業而已、

四日、丙寅陰晴未定、前源中納言雅卿賴來、余依疾隔

簾謁之、世上事等、多以談說、其中爲余有無用事等、去比、義仲之許有落書、即義仲所行不當非法等、悉以注載、其次余不被登用、尤不便、爲朝之重器之由、具以載之云々、此事、余邊事不快、存之輩、所爲歎云々、誠此事甚無由事也、又語云、賴朝必定可上洛、次官親能<sup>廣季</sup>者、與賴朝甚深之知音、當時同宿、件者又源中納言家人、即左少辨兼忠之乳母夫也、件男一昨日以飛脚示送云、十日餘之比、必可上洛、先爲賴朝之使、有申院事、親能可上洛也、萬事其次可申承云々、如此等之事、多以談語、推刻之後歸了、明日、公卿勅使參着之日也、而被始供花、世之所傾也、入夜觀性法橋來、乍出謁之、件人籠內大臣母堂之忌之故也、語云、賴朝今月三日出國、來月一日可入京、是必定之說也云々、但猶不被信受事也、

五日、丁雨下、早旦、或人云、平氏黨類、餘勢全不滅、四國、並淡路、安藝、周防、長門、并鎮西諸國、一同與力了、舊主崩御之由風聞、謬說也云々、當時在周防國、但國中、無可用皇居之家、仍乘船泛浪上云々、貞能已下、鎮西武士菊池原田等、皆以同心、鎮西已立

內裏、隨出來、可入關中云々、明年八月可京上之由結構云々、是等皆非浮說也、未刻、依彌勸講、參御堂、及晚歸來、

近日、京中物取、今一重陪增、塵之物、不能持出途中、京中之萬人、於今者一切不能存命、義仲院御領已下併押領、日々陪增、凡緇素貴賤無不拭淚、所憑只賴朝之上洛云々、彼賢愚又暗以難知、只我朝滅亡、其時已至歟、法皇敢不知國家之亂亡、近日被始大造作云々、院中之上下、歎息之外無他事歟、誠佛法王法滅盡之秋也、

六日、<sup>辰</sup>天晴、自今日院供花云々、自昨日欲被始、而依爲勅使參着之日、忽延引云々、召女醫博士經基、齒下加針、傳聞、入道關白、基房、以少將顯家爲使、被示送行家之許云、<sup>院御逐電之刻事也</sup>先於攝籙職者、非家嫡者、雖及二男、未有及三男之例、而下官當仁之由、世間謳歌太不當也云々、又被奏院之旨同前云々、此事日來雖聞及、不信用之處、今日聞定說、驚奇不少、凡天子之位、攝籙之運、全非人力之所及、結構之體、事似輕々、加之、不及三男之由如何、貞信公、大入道殿、御堂、此三代之例



棄置歟、法皇不辨黑白、源氏不知是非、只以一言之狂惑、欲惣萬機之巨務、謀計之至、冥罰定速歟、可彈指々々々、但於余者、亂世之執柄非所好、七日、己今日、洗頭、自明日可念誦爲深齋也、八日、庚天晴、早旦、法印被來、已刻、佛殿聖人來、即余渡御堂、自今日、爲始恒念念佛也、先受戒、爲戒師、午終許、始念佛、今日二萬遍、

九日、辛天晴、今日、念佛十四萬遍、此日、藏人宮內權少輔親經來、傳院宣（云）、余依念佛不調之、使人傳中云、去七月十七日、太神宮有奇代之怪異、而已爲先朝之御時事、當今有沙汰如何、可計奏者、余申云、且被尋准據例、可有計沙汰歟、若怪異之體、爲奇異之事者、默止之條如何者、依爲念誦之間、不見文書、又不申子細也、

十日、壬申此日、念佛十七萬遍、

十一日、癸酉此日念佛廿一萬遍、今日、頭辨兼光來、余南家云々、然而聞念佛之由、不來此堂、示置祇候之男退出丁、〔事〕非急事、仍御念佛以後參上、可承之由示云々、入夜所聞也、御即位之間條々事被尋問、已念佛以後、委見披可申子細之文書等、書寫之、

此曉、女房夢云、余相共渡新造宅、頗以半作云々、見廻之後、相共欲就寢之間、人告女房云、其殿余也、大職冠之後身也云々、女房、夢中思樣、極有恐事也、年來立種種大願、祈社稷安全、佛法興隆等、事體不似近代之風、奇思之處、今聞爲彼後身之由、尤其謂ありけりと思ひて覺丁云々、法成寺入道殿ハ、聖德太子、並弘法大師之後身也、先代も有事也、可信仰々々々、

十二日、甲戌今日、念佛十八萬反、

十三日、乙亥口口念佛十二萬反、

十四日、丙子陰晴不定、今日、召寄師量文書等、惣二百七十餘合也、內府雖有示旨、伏理避了、今日百萬遍了、今日十二萬反、

十五日、丁丑天晴、今日酉刻、念佛結願、其以前念佛一萬遍、其中、一千遍、高聲念佛也、阿彌院大咒一千遍、禮拜百遍、未會修數反之禮拜、今度始致此禮拜、然間、脚氣陪増、殆難遂其功、然而偏爲佛法捨身命、滿數遍丁之後、偏以平臥、如存如亡、此夜、如例法印於此堂、被修廿五三昧、女房〔等〕來聽聞、

十六日、戊寅天晴、文書等、分櫃目錄了、即自今日、仰

付男共、分、部可、取、目録、也、今日、入、夜歸、家之次、向、大將方、依、所勞、也、

十八日、庚天晴、今日、大將更發、殆及、危急、仍余、女房及法印等、遞以行向、立、種々願、信助阿闍梨等、願書、讀上之、又請、佛嚴聖人、令、受戒、又使、法印修、樂師供、入、夜歸了、

十九日、辛陰晴不定、今日、宮內權少輔親經、五位、藏人、來、余隔、簾謁、之、親經云、御即位、藏人方事所、奉行、也、然

而、條々事、被、問、人々之間事、爲、兼光朝臣奉行、而依、有、病者、近日不、出仕、仍渡、文書了、先日於、攝政直廬、人々議定、然而未、事切、若、十月被、遂、即位者、明日可、有、即位定、仍今日、承、令、申御狀、可、奏、院、先日議定も、未、奏聞、且、兼光朝臣參上可、承之、由依、令、申、所、參上、也云々、此事先日兼光來問、而十五日以後可、急申、之處、自他所勞、無、他事、之間、自然及、今日、然之間、親經來問、仍就、此問狀、所、令、申、子細、也、

御即位十月廿七日可、被、遂、而聊有、日次難之上、期日近々、萬事難、出來、延引如何、若延引者、十一月一日、庚十二月廿二日、壬兩日之間、如何、抑、延

引者、朔旦不可、出御、此條如何、

余申云、任、光仁天皇例、八月受禪、十月即位、雖、理可、然之、官廳修理之恒例用途、國費民疲、萬事難、叶者、被、用、十二月廿二日、何事之有哉、爲、吉例之月、又爲、最上之日之故也、朔旦無、出御、之條、頗雖、爲、不穩之事、粗案、我朝之規模、辨、昌泰之佳例、可、求、何時之舊跡、哉、加之、記文不、載、由緒、所、疑只諸社祭許歟、今度又依、即位延引、無、賀表、之出御、非、無、其故、歟、被、用、昌泰之例、條、不可、及、異議、歟、

抑、不、受、叙、蹈、天下之位、例、人代以來曾無、蹤跡、依、一日不可、空、寶位、於、踐祚、者被、急行、雖、理可、然、至于即位之時、猶試可有、此沙汰、歟、非、管遺、無、例之恨、殆可、爲、招、亂之源、歟、用、茲暫延、引此大禮、試被、待、彼三神、如何、此條定叶、神明宗廟之靈意、自有、鏡、劔、璽符之歸來者歟、若然者、須、指、彼期、殊有、祈請、也、凡朝廷大事、莫、過、劔璽紛失、而君臣共不、歎、此事、去十月廿六日以後、天下之、巨務、觸、事雖、多、至于此條者、一切如、無、沙汰、賊徒盜、取、逐電了、實計略雖、難

及、志之所之、或致祈請、或廻鑒策、殆可被忘他事之處、已不被重此大事、冥冥有恐歟、早定即位之期、彼以前、無爲無事、可有彼歸來之由、付內外、可有祈願之由、中心所庶幾也、然而不能上疏、今就此聖問、達愚意許也、

一初度行幸、被用曉更如何事、

申云、行幸雖不用晴禮儀、更不失歟、臨時之經營、頗爲國煩、曉天之臨幸、定此人望歟、

一以民部省南門、可擬會昌門歟事、

申云、儉約者、明王之所好也、何況、近日之天下哉、爲省土木之煩費、被止門垣之修造事、可叶時宜歟、但省南門、不當高御座正南、雖非巨難、頗不叶正禮歟、加之、彼省築垣、當時無實云々、定有修復歟、若然者、與改立官南門、不可有幾之差別、猶任治曆例、民部省北垣、移立官南門、尤宜歟、而其事猶不可叶者、不壞官門、其中被縮行裝束事如何、其條又猶難叶者、雖不穩被用省南門之外、無他計歟、

一可被移紫宸殿高座於官廳哉否事、

申云、紫宸殿、即位彼處不吉、何故可被執高御

座哉、大極殿高御座者、依爲類類恐累代之物、每代無新造者也、至于今之高座者、先朝之時新調也、今度尤可被棄置、就治曆之寸法、被新造、尤叶物議歟、

一列見、定考、於何處可被行哉事、

申云、官西廳、外記廳之間、可奉時議、但西廳猶可宜歟、抑、被忌南殿即位之條、中心鬱陶、然而不能上奏、治承之度、依下官議奏、被用彼殿了、其例已不吉、今猶申此旨、只依執申先度之議、不願例之吉凶歟之由、謗家各可難之、殆可爲譏奏之因緣、仍雖有憚、上疏愚心之所欲、又難歟止、仍粗示開事趣於親經了、其趣、何者、先以大極殿、被行即位之禮、以豐樂院、被行大禮之例、其行來尙矣、而豐樂院依無基跡、移行大極殿之後、不論例之吉凶、徧以用之、今大極殿燒失之後、修造以前、以紫宸殿、被定即位之場也、末代之作法、恐大廟之造營、再難終土木歟、縱又世及治政、雖可有造畢、正堂無舍屋之間、被移行正寢者、正禮也、乍置天子之居、於諸司、被行大禮、專不當也、凡求例者、是非難

決之時事也、至于此條者、以紫宸殿、被定置  
即位之所、於理可然、若被定其所之上、又不  
可尋例之吉凶、凡定法事、臨期無有異變、於  
此事、每度有此沙汰、可謂少人之沙汰歟、若又  
官廳、非常事出來之時、又以何處、可用即位之  
場哉、殆永可止此禮歟、凡以勿論事也、何況官  
廳之修造、雖不及莫大、粗案國家滅亡之體、期  
日以前造畢、更以難叶歟、又人煩國費也、明王之  
政、不先忌諱、只以扶國爲事、云彼云此、紫  
宸殿之大禮、殆可叶冥衆之靈意歟、以此狀、具  
含親經了、縱雖爲嘲哂之基、更不爲苦、所存  
只爲朝而已、北陸宮、加賀、明日可有入洛、今日就  
寺云々、

廿日、壬午、天晴、向大將第、依爲發日也、驗者法印弟  
子承慶也、又以驗佛藥師靈像、傳教大師入唐本、尊、或人依沙告與余也、奉懸枕  
上、今日時下又心地宜、爲悅不少、自今日服蒜  
也、入夜人傳云、義仲今日俄逐電、不知行方、郎從  
大願院中又物忿云々、

廿一日、癸未、傳聞、義仲一昨日參院、被召御前、勅云、  
天下不靜、又平氏放逸、每事不便也云々、義仲申云、

可罷向、明日早天可向云々、即院手取御劔給  
之、義仲取之退出、昨日俄下向、云々、

廿二日、甲申、天晴、今日、大將平愈了、驗者同人也、悅思  
不少、法印藥師供之驗也、可尊々々、八條院御不例、  
仍以基輔爲使、問御安否於女房、同前云々、

廿三日、乙酉、陰晴不定、家能卿來、談雜事、人傳云、行  
家可可遣追討使之由、自院再三被仰義仲、々々  
不申左右、俄以逃下、爲籠行家云々、

廿四日、丙戌、長者、以職事季佐、被告吉田惟異、今朝  
物忌也、

廿五日、丁亥、雨下、傳聞、賴朝以文覺聖人、令勘發義  
仲等云々、是追討懈怠、並損京中之由云々、即付

〔件〕聖人陳遣云々、

廿六日、己丑、雨下、或人云、法皇天下之政沙汰亂天、令  
惘然給云々、

廿七日、己丑、雨下、自八條院被仰云、彼讓之間事、重  
令申之處、所勞不危急、強不可忿事歟、無下  
二、世二人もなきやうなりと云々、重申子細了、

廿八日、庚寅、天陰、雨小下、或人云、賴朝上洛、明年四五  
月云々、如例浮說歟、夜半大風、今曉、或女房夢見爲



余最吉事也云々、

廿九日、卯朝問天晴、入夜或人來、數刻言談、思社稷之故也、佛天知見、今日、自藏人宮內權少輔親經之許、注送先日申狀云、以詞即奏聞了、然而爲後代猶可注置令申御之趣、仍大概此定覺悟、若有相違者、可被直付云々、披見之處尤神妙也、但一兩所直付了、答神妙之由了、

抑、即位猶可被用紫宸殿之由事定、有天下之嘲歟、然而全非執議奏之旨、歸爲存政教之道理、令申之由申了、又申云、今般被用正殿之條、非管貽聖意無私之美、抑又省民力有煩之愁者也、重欲奏達者、可招謗難、退欲默止者、難遁不忠、進退之間、偏任賢慮、可被相計之狀如件者、

右壽永二年卯春夏秋此一冊墨付百拾六枚者以三緣院道教公眞痕松殿右幕下道昭卿被書寫之者也

慶安二年丑己正月仲旬 陶化翁（北押）記之

玉葉卷第三十八終

# 玉葉 卷第三十九

自壽永二年十月  
至同年十二月

壽永二年冬〔癸卯歲也〕

十月〔大〕

一日、壬辰〔天〕陰雨下、晝間〔天〕晴、及晚風吹、傳聞、先日所造賴朝許之院廳官、此兩三日以前歸參、與巨多之引出物云々、賴朝載折紙申三ヶ條事云々、

二日、癸巳朝間天陰、午後雲晴、或人云、賴朝所申之三ヶ條事、一は平家所押領之神社佛寺領、慥如本可付本社本寺之由、可被下宣旨、平氏滅亡爲佛神之加護之故也云々、一は院宮諸家領、同平氏多以虜掠云々、是又如本返給本主、可被休人怨云云、一は歸降參來之武士等、各有其罪、不可被行斬罪、其故何者、賴朝昔雖爲勅勘之身、依全身命、今當伐君御敵之任、今又落參輩之中、自無如此之類哉、仍以身思之、雖爲敵軍、於歸降之輩、寬宥罪科、可令存身命云々、此三ヶ條載折紙

言上云々、一々之申狀、不齊義仲等歟、御即位之間、人々申狀、去夜返遣親經之許、返事今日到來、可用紫宸殿之由、〔有〕院宣、而依方角事、其沙汰未切云々、傳聞、今年可有五節云々、即位以前五節久壽例二條云々、

三日、甲午雨下、至于今日、服蒜葱廿五合也、如只今者、其驗未見、

四日、未陰晴不定、及晚大夫史隆職來、密々持來賴朝所進合戰注文、并折紙等、院御使廳官所持參云々、件折紙不違先日所聞、然而爲後代注置之、

一可被行勸賞於神社佛寺事、

右日本國者神國也、而頃年之間、謀臣之輩、不立神社之領、不顧佛寺之領、押領之間、遂依其咎、七月廿五日忽出洛城、散亡處所、守護王法之佛神、所加冥顯之符給也、全非賴朝微力之所及、然者可

被行殊賞於神社佛寺候、近年佛聖燈油之用途已闕、如無先跡、寺領如元可付本所之由、早可被宣下一候、

一諸院宮博陸以下領、如元可被返付本所事、

右王侯卿相御領、平家一門押領數所、然間、領家忘其沙汰、不能堪忍、早降聖日之明詔、可拂愁雲之餘氣、懷灾招福之計、何事如之哉、賴朝尙領彼領等者、人之歎相同平家候歟、宜任道理有御沙汰者、

一雖奸謀者、可被寬宥斬罪事、

右平家〔郎〕從落參之輩、縱雖有科忌、可被助身命、所以者何、賴朝蒙勅勘雖坐事、更全露命、今討朝敵、後代又無此事哉、忽不可被行斬罪、但隨罪之輕重、可有御沙汰歟、

以前三ヶ條事、一心所存如此、早以此趣可令計奏達給、仍注大概上啓如件、

合戰記不遑具注、

五日、丙申天陰、此日依爲赫忌內不參御堂、大將所參也、入夜按察入道資、來、依赫慎間隔、罷謁之、談世間事等、余有種種謔言、之由聞及、且謝遣其

事也、

七日、戌天晴、及晚小雨、最勝金剛院領、伊賀國四ヶ庄皆悉停廢、國司山下兵衛尉義經、歷院奏所停廢云々、仍付泰經卿經院奏、今日以兼親所示送也、如返事者、大畧勿論事歟、  
八日、己天晴、傳聞、一昨日賴朝進飛脚、傳中義仲等可伐賴朝之由結構事云々、泰經卿之許、送札云々、

又聞、平氏等欲入鎮西之間、猶恐國人等、猶歸到周防國云々、此日、法皇幸石清水宮、諸卿已下着束帶供奉云々、

九日、庚天晴、靜賢法印來、談世間事等、賴朝進使者、忽不可上洛云々、一秀平隆義等、可入替上洛之跡、二率數萬之勢入洛者、京中不可堪、依此二故、上洛延引云々、凡賴朝爲體、威勢嚴肅、其性強烈、成敗分明、理非斷決云々、今度獻使者所爵申者、三郎先生義廣上洛也、義經、又義仲等不逐平氏、亂朝家尤奇怪、而忽被行賞之條太無謂云々、申狀等有其理歟、此外多談雜事、不能具錄、〔傳聞義仲經廻播州、若賴朝上洛者、可超北陸方〕

若賴朝忽不<sub>二</sub>上洛者、可<sub>レ</sub>伐<sub>二</sub>平氏<sub>一</sub>之由支度云々、  
今日有<sub>二</sub>小除目<sub>一</sub>云々、陰陽頭賀茂宣憲雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>名譽<sub>一</sub>、  
依<sub>二</sub>重代衰老<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>抽任<sub>一</sub>歟、尤可<sub>レ</sub>然、又賴朝復<sub>二</sub>本位<sub>一</sub>、  
之由被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>云々、

十日、<sub>辛丑</sub>朝晴、午後陰風吹、傳聞、去夜日吉諸社被<sub>二</sub>加<sub>一</sub>  
一階云々、

二宮、八王子、客人宮、十禪子、

大行事、牛御子、下八王子、早尾、

又紀伊國丹生高野社等、各加<sub>二</sub>一階<sub>一</sub>云々、

十一日、<sub>寅</sub>雨下、佛殿聖人來、談<sub>二</sub>後世菩提事<sub>一</sub>、

十三日、<sub>辰</sub>天晴、入<sub>レ</sub>夜雨下、深更大雨、爲<sub>二</sub>方違<sub>一</sub>向

堂、此日、大夫史隆職來、談<sub>二</sub>世上事等<sub>一</sub>、院廳官々史生

泰貞、<sub>先日爲<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>賴朝<sub>一</sub>、重爲<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>赴<sub>二</sub>坂東<sub>一</sub>云々、件</sub>  
<sub>朝許<sub>二</sub>去<sub>一</sub>比歸洛、</sub>

男來<sub>二</sub>隆職之許<sub>一</sub>、語<sub>二</sub>賴朝仔細<sub>一</sub>云々、不<sub>レ</sub>遑<sub>レ</sub>記、又云、

御卽位於<sub>二</sub>南殿<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、而依<sub>二</sub>方角之沙汰<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>參

陣之由親經相催云々、又云、平氏決定入<sub>二</sub>西海<sub>一</sub>了云

云、

十四日、<sub>巳</sub>天晴、辰刻大地震、同刻歸宅、尹明云、平氏

去八月廿六日入<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>了、放<sub>レ</sub>火以外云々、肥後國住

人菊池、豐後國住人臼杵御方等未<sub>二</sub>歸服<sub>一</sub>云々、

十五日、<sub>午</sub>天晴、頭中將、大將五節事重加<sub>レ</sub>催、猶申<sub>二</sub>無<sub>一</sub>  
術之由了、

十六日、<sub>未</sub>天晴、終日令<sub>レ</sub>沙汰師量文書事、

天文博士廣基、主稅助晴光等來、示<sub>二</sub>天變事<sub>一</sub>、十三日雷

電、十四日大地震、并鎮星入<sub>二</sub>大微<sub>一</sub>之變等也、鎮星之

變殊重云々、

十七日、<sub>申</sub>天晴、卯刻虹二筋、<sub>其色如<sub>二</sub>常<sub>一</sub>、俱殊分明、</sub>自<sub>レ</sub>坤至<sub>レ</sub>艮、又

東天赤光云々、觀性入<sub>二</sub>西山<sub>一</sub>了、基輔相具行向、爲<sub>レ</sub>令

見<sub>二</sub>地形<sub>一</sub>也、入<sub>レ</sub>夜雨下、傳聞、義仲隨兵之中、少々

超<sub>二</sub>備前國<sub>一</sub>、而彼國并備中國人等起<sub>レ</sub>勢、皆悉伐取了、

即燒<sub>二</sub>拂備前國<sub>一</sub>歸去了云々、又聞義仲無<sub>レ</sub>勢云々、

十八日、<sub>酉</sub>午刻雨下、此日、法印被<sub>二</sub>登山<sub>一</sub>了、日來<sub>自<sub>二</sub>去<sub>一</sub></sub>  
<sub>下句之<sub>二</sub>被<sub>一</sub>坐<sub>二</sub>近隣<sub>一</sub>、<sub>女院新<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>、而且依<sub>二</sub>彼<sub>一</sub>素願、且隨<sub>二</sub>余<sub>一</sub></sub>  
<sub>比也、</sub></sub>

勸進、今日最上吉日、被<sub>レ</sub>登<sub>二</sub>無動寺<sub>一</sub>了、即自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>

入<sub>レ</sub>堂可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>祈也、觀性昨日入<sub>二</sub>西山<sub>一</sub>、同自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>

於<sub>二</sub>如法佛前<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>行法<sub>一</sub>也、智詮又北斗念誦、同

自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>始修也、今日、大將來、中將相共密々有

詩、五節事可<sub>レ</sub>奉行之由仰<sub>二</sub>光長<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>所勞<sub>一</sub>辭申、然

而、只乍<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>里亭<sub>一</sub>、放<sub>二</sub>御教書於<sub>一</sub>諸國之間事許、可<sub>レ</sub>

奉行之由重仰了、今日夜精進行水、被<sub>二</sub>信心祈請<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>



蒜忌內二七日過了、不及誦呪轉經、只心中之行也、

廿日、亥、天晴、已刻、大將方見出穢物、小兒五體、即爲具足云々、

卅日穢、其後彼家之人來余亭、昇立緣上、但不居、覽

經程云々、可爲穢哉否、依不審、爲尋問、召遣明

基了、傳聞、去十八日、賴盛卿逐電、京中又鼓騷云

云、申刻、頭中將隆房朝臣來、依有穢疑呼緣邊、

余在簾中、長押上也、依不疾出、爲示五節之間事、

所來也、先日親宗御教書、全非御氣色之趣、只課文

章所書歟云々、奇特奇特、粗示穢次第、然而、忽不

可有其免、仍殊不示、依此事可遁之狀、只示

開仔細許也、參入御覽可被免之由同巾了、是余大

納言時令獻之例也、

廿一日、壬、天晴、穢事明法博士基廣、道宗、明基等、返

事到來云、

一日數事、

雖五體具足、無藏府之時、爲七日穢、雖五體不

具、有藏府之時、爲三十日穢、今已雖有五體、腹

中無藏府云々、然者可爲七日穢者、兩人勸文、

一穢始事、

以鼻香爲始例也、不然之時、只以見付可爲始

者、兩人、

一乙所穢否事、

甲所之人參乙所、脫沓參上、停立緣上、頃之歸參

者、以着座飲食爲穢、而今雖昇緣上不居、仍不

論履之着否、依不着座飲食、不可爲穢者、

兩人勘文同前、但明基云、着穢所履參入脫緣

下、天昇者、依履可爲穢、本自徒跣天參者、

不可爲穢云々、

依三件等勘文、定七日穢了、又此第不穢、

廿二日、癸、天晴、已刻、大外記賴業來、談世上事、竊所

示之旨同愚案、可謂賢士云々、才學之卿大夫等、

多入僻韻云々、政理與才學、素各別之道也、

廿三日、甲、天晴、奈良僧正送書云、來廿七日寺家有

指合事、廿八九日之間、有吉日者可上洛云々、

小兒爲令付、可被上洛之由、先日示之、問二日、自是

廿七日依爲吉日、其由、仍今有此旨、問二日、自是

示之由答了、即召陰陽師賀茂在宣頭、及晚來、召

簾前問之、今日於院有御卜、思食事始終吉凶如何

云々、兩度有御旨、未時、未時占不快、申時占吉云々、

因之遲參所申也、余二次尋問事等、

申云、凡十九年爲一章、然者自初朔旦年、廿年ト云ニ相當也云々、久安朔旦以後、保元又朔旦冬至出來畢、爲三十四年云々、古來雖一章、猶有無朔旦之例、無縮年限中間有朔旦之例、仍有議信四、被止了、不待一章之條、雖有不審、算勘一切不誤、是天之與嘉瑞也、而遁而不被用之時、人所傾奇也云々、今度大畧相當、雖有聊之相違、大都叶算勘云々、一御即位所、并方角事、

申云、去十四日有其沙汰、初無異議、可被用官廳之由有沙汰、而今度猶紫宸殿可宜之由議出來、而無移徙之禮之條、如何之由有評定、冬至以前爲王方、其後又當御遊年方、大將軍王相方、定本所宿、其所者一夜付忌、至于遊年方者、不論本所旅所、只以四十五日付忌、仍無他所之可臨幸之故、不能避遊年之方、春節以後無日次、十二月十九日戌日遷幸、廿一日元所攝之即即位日也即位可宜之由宣憲令申、而在宣申云、猶被犯戌日不快也、只當日拂曉有臨幸、即位之後不日還御、不可有一宿、然者不可及方角之沙汰、御移徙以前被行即位、可無殊難之由申了云々、大內自閑院當乾方云

云、

一衰日申日晦等忌輕重事、廿八日者小童衰日也、廿九日ハ申日也、卅日ハ晦也、仍問之、

申云、申日者不行吉事、勿論晦日又不快、衰日者有可行吉事之文云々、其文云、修善拂惡云々、余云、如文者、祈佛神可拂惡之由也、非可行吉事之意歟者、在宣云、善ヲ修シテ、惡ヲハ可拂ト可讀之由、先達令存歟、仍先達多申此由也云々、然而今仰又有其謂、所詮晦日與衰輕重之本文、并被行吉事例等、可注進云々、

或人云、義仲可賜上野信濃、不可虜掠北陸之由、被仰遣了、又賴朝之許、件兩國可賜義仲、可和平之由被仰了云々、此事依或下臈之中狀、俊堯僧正一昨日參院、御持佛堂時云々申此由法皇、稱善、即從僧正諫言、忽被降此給旨了云々、此條愚案一切不可叶、凡國家滅亡之結願、只在此事、可彈指々々、

〔在〕朝廷之王侯卿相、縉素貴賤、併顧私不<sub>レ</sub>在公、實是愚而猶愚也、非國者無建家、非君者無建親、思身之安全、先可廻國家靜謐之籌策之處、各恐左右、敢不謹言、又皆無謀重事之量歟、

可<sub>レ</sub>悲々々、

廿四日、卯<sub>乙</sub>天陰、傳聞、賴朝先日付<sub>ニ</sub>院使<sub>發貢</sub>、令<sub>レ</sub>申事

等、各無<sub>ニ</sub>許容<sub>一</sub>、天下者君之令<sub>レ</sub>亂給<sub>ニ</sub>コソトテ、攀緣

即塞<sub>ニ</sub>其路<sub>一</sub>、美乃以東欲<sub>ニ</sub>虜掠<sub>一</sub>云々、但此條不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>實

說<sub>一</sub>、

廿五日、丙<sub>辰</sub>雨下、入<sub>レ</sub>夜<sub>〇</sub>以下國文

廿六日、丁<sub>巳</sub>申刻、五位藏人親經來、問<sub>ニ</sub>御即位之間事<sub>一</sub>、

先本<sub>ニ</sub>人々所<sub>ニ</sub>定申<sub>一</sub>者、於<sub>ニ</sub>官廳<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>此禮<sub>一</sub>之由

也、而余先日內々、相<sub>ニ</sub>含親經<sub>一</sub>之處、即以<sub>ニ</sub>其趣<sub>一</sub>奏聞、

仰云素所<sub>ニ</sub>思食<sub>一</sub>旨也、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>異議<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>紫宸殿<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>

被<sub>レ</sub>行之由被<sub>ニ</sub>仰切<sub>一</sub>了、而冬至以前<sub>自<sub>ニ</sub>閑院<sub>一</sub>ハ大<sub>ニ</sub>爲<sub>一</sub>王</sub>

方、春節以前、冬至以後、爲<sub>ニ</sub>御遊年方<sub>一</sub>、仍春節以後、

見<sub>ニ</sub>移徙之日<sub>一</sub>、會無<sub>ニ</sub>其日<sub>一</sub>、仍移徙行幸之禮不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶、

爲<sub>ニ</sub>之如何<sub>一</sub>、十九日戊日、被<sub>ニ</sub>用<sub>一</sub>移徙之條、一條院自<sub>ニ</sub>

或御曹司、遷<sub>ニ</sub>御一條院<sub>一</sub><sub>見<sub>ニ</sub>師尙<sub>一</sub>勘文<sub>一</sub>、之外、無<sub>ニ</sub>其例<sub>一</sub>、件例</sub>

非<sub>ニ</sub>初度<sub>一</sub>、非<sub>ニ</sub>大內<sub>一</sub>、猶今度可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>憚歟<sub>一</sub>、若又即位之當

日有<sub>ニ</sub>渡御<sub>一</sub>、其日夕還御如何、<sub>大外記賴業、圖番頭</sub>在宣申<sub>ニ</sub>此由<sub>一</sub>云々、條々可<sub>ニ</sub>

計申<sub>ニ</sub>云々<sub>一</sub>、申云、戊日遷宮例、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>ニ</sub>一條院御移

徙之例<sub>一</sub>、避<sub>ニ</sub>日忌<sub>一</sub>事可<sub>レ</sub>重<sub>ニ</sub>新造家<sub>一</sub>也、雖<sub>ニ</sub>大內<sub>一</sub>、雖<sub>ニ</sub>初

度、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>准<sub>ニ</sub>新第事<sub>一</sub>也、然者於<sub>ニ</sub>戊日之忌<sub>一</sub>者、依<sub>ニ</sub>被

例不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>憚<sub>一</sub>、但紫宸殿裝<sub>ニ</sub>高御座<sub>一</sub>、已准<sub>ニ</sub>入省院<sub>一</sub>、

自<sub>ニ</sub>里內<sub>一</sub>、直幸<sub>ニ</sub>大極殿<sub>一</sub>、被<sub>ニ</sub>行<sub>一</sub>即位、其例也已多、准<sub>ニ</sub>

彼例、當日臨幸之條、又以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>其難<sub>一</sub>、然者兩方共

無<sub>ニ</sub>難者<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>用<sub>一</sub>無<sub>ニ</sub>煩儀<sub>一</sub>也、當時天下之有樣、暨

閱<sub>ニ</sub>禮法<sub>一</sub>、被<sub>ニ</sub>就<sub>一</sub>容易<sub>ニ</sub>之條<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>上計<sub>一</sub>歟者、親經

可<sub>レ</sub>補<sub>ニ</sub>家司<sub>一</sub>之由仰<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>、領狀、入<sub>レ</sub>夜歸宅、

廿七日、戊<sub>午</sub>天晴、傳聞、來月法皇可<sub>レ</sub>幸<sub>ニ</sub>春日社<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>宇

治、攝政可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>儲<sub>一</sub>御膳已下雜事云々、又聞、此一兩

日今一重天下物忿、不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>何事<sub>一</sub>云々、

廿八日、未<sub>巳</sub>天晴、傳聞、賴朝去十九日出<sub>ニ</sub>國<sub>一</sub>、來十一月

朔比可<sub>ニ</sub>入京<sub>一</sub>、是一定說云々、又義仲去廿六日<sub>或廿八日、</sub>

出<sub>ニ</sub>國<sub>一</sub>、來月四五日之間可<sub>ニ</sub>入洛<sub>一</sub>、與<sub>ニ</sub>賴朝<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>決<sub>一</sub>雌

雄云々、因<sub>ニ</sub>茲院中<sub>一</sub>已下天下之人皆以違云々、人皆有

所<sub>ニ</sub>言歟<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>恐々々、今日親經來、辭<sub>ニ</sub>五節事<sub>一</sub>、

廿九日、申<sub>庚</sub>天晴、雅賴卿來、談<sub>ニ</sub>世上事<sub>一</sub>、大略獲麟畢之

世也、已失<sub>ニ</sub>存命之計略<sub>一</sub>、隨<sub>ニ</sub>有樣<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>向勢州之

所<sub>ニ</sub>知云々<sub>一</sub>、此次語云、去比攝政竊云、自<sub>ニ</sub>院被<sub>一</sub>仰<sub>ニ</sub>合

右大將可<sub>レ</sub>任<sub>ニ</sub>大臣<sub>一</sub>之間事、其趣云、此事忽不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>速、

而下官頻望申如何、松殿定被<sub>ニ</sub>怨歟<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>公意<sub>一</sub>如何、左

右只申<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>在<sub>一</sub>御慮之由<sub>ニ</sub>丁云々<sub>一</sub>、定能卿告送云、五



節參入御覽事、相計追可被仰、左右之由、有其仰云々、一切不可叶、猶被懸者、可辭〔退〕五節之由令申了、

卅日、辛酉天晴、自今日三ヶ日殊始念誦、信心甚起、可悅々々、

# 閏十月

一日、壬戌天晴、此日、日蝕也、所載勘文、辰刻虧初、午刻復末云々、而午刻虧初、申刻復末、算勘之相違歟、

先々雖時刻相違、今日殊乖勘文了、可尋之、

依春日朔幣、神事如常、又書心經、每月之勤也、日蝕御祈僧徒、依神事令候別屋也、

二日、癸亥天晴、午刻、右中辨光雅爲院御使來、余依念誦之間、不出客亭、召籙前謁之、廣庇也、光雅仰云、

天下亂逆、連々無了時、是偏爲崇德院怨靈之由、世之所謳歌也、仍可建神祠於成勝寺中、之山、欲

慮有之、仰彼寺行事辨光長、有其沙汰之處、猶有御思惟、去比被訪占者處、占趣太不快云々、仍重

被問、可有改葬哉否之由、申最吉之由、仍就其赴可有沙汰之處、先規已選近廢帝、及崇道天

皇等之例、大旨雖載國史、子細不詳、隨又事幽玄、專難被遵行、隨宜可被計行歟、被仰彼息法印、偏爲沙汰、被遂行、叶時議歟、將又自院可被差副別使歟、可令計申者、兼又、日時於院可被勘歟、又其地如何、又准廢帝等例者、可被置山陵歟、如此之間事、委思量可令奏者、

申云、先改葬之條、雖不可必然、偏就御占之趣、可被行之由被仰下、不可及異議、其上沙汰之趣、只可在勅定、但彼法印、當時現存、尤可有便宜歟、有其人、自院被副御使、有何事哉、於日時者、尤於院可被勘歟、無其人、又雖不被副人、何事之有哉、於其所者、暗只今難計奏、且被仰合彼法印尤宜歟、兼又被置山陵事、不可然歟、其故、中古以來依遺詔、代々帝王已無此事、且爲蕩怨心、被置山陵之條、不合道理、只就佛教不可過被奉訪菩提歟云々、光雅又云、平城上皇亂之時、弘仁被申柏原山陵一所、任彼例保元〔亂〕之時、被申安樂壽院一所、今度之事、又尤可被申彼寺歟、而被加法金剛院如何、又可有告文哉、其〔使公卿歟〕如何者、申云、被申兩寺尤



可然、告文必可、有使者、公卿四位殿上人之間、可

依時議、則光雅歸了、此事惣無所據歟、

申刻、頭辨兼光來、余謁之、其儀同光雅、雖藏人頭、爲家司之故也、語云、平

氏始雖入鎮西、國人必依不始、用逃出、向長門

國之間、又不入國中、仍懸四國了、貞能、出家シテ

留西國了云々、此由自周防伊豫兩國、進飛脚、令

申云々、又私義仲送使於兼光之許、其男說如云々、

無相違、其上申云、自前內府之許、送使者於義仲之

許云、於今者偏可歸降、只欲乞命云々、此上神鏡

劔、無事之際、難被奉迎取事、第一之大事也、

次第沙汰又以乖說歟、兼光又云、可有改元之由、

賴業真人令申、因茲可然哉否、可令計申給上之

由、有御氣色者、申云、今度事已絕常篇、然者不

待年之改、恐被行改元、已叶經史之意、尤可然

者、兼光語云、北野御幸之賞、別當權別當共被補僧

都云々、此事未曾有也、別當、親範入道子也、三十未

滿之人云々、又云、件次北野社之內小神等、被增神

位之間、輔正定義兩人加神階云々、此事驚奇不

少、彼兩人者、昔任朝端、已是人臣也、今祝小神之

條、氏人之今案歟、非公家之所知食而被加階級

者、已贈位歟、其山緒如何、次第甚不當、大略有若亡

歟、勿論々々、良久兼光歸了、

三日、甲天晴、拂曉向西山、爲見草菰之地也、及

晚歸洛之次、參詣東寺、於金堂聊所作之後歸宅、

於西山、如法佛前滿本尊咒遍、佛今日修行、中將

相具之、大將依渡物氣不伴之、

五日、丙天陰、午後雨下、依故院御月忌參御堂、大

將同之、自頭中將之許、大將五節猶可營參入之

儀之由、以消息示兼親之許、申猶不及力之由、

了、大將報狀、

六日、丁天晴、申刻、頭中將隆房來、仰大將五節參入

事、先以季長示返事之後、余謁之、猶一切不可

叶之由申切了、凡家慣參入御覽共勤仕之、又有上難

仕樋洗、又下仕四人也、而今勤一事混凡俗之條、

專不可然、余先年奉仕之時、故殿依奈良大衆事、

忿怨世間之間、兩事共不勤仕也、今度偏可依彼

例也、中心雖存此旨、上奏不出此詞、依善惡無

分別之世間也、傳聞、賴朝難成上洛之間、其實不

可然云々、又義仲今兩三日之間可歸洛、洛中又可

滅亡云々、獻下仕裝束色目於攝政、基朝爲

八日、已本命日泰山府君祭也、此日、頭中將隆房朝臣來仰云、余調、即位以前被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>節會<sub>一</sub>例、是則二條院是也、其外無<sub>レ</sub>所見、彼例強不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>規模<sub>一</sub>、今度如何、可<sub>レ</sub>計奏者、申云、於有可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>節會<sub>一</sub>之理者、何必被<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>哉、凡即位以前、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>南殿出御<sub>一</sub>歟、代始初度節會、無<sub>レ</sub>出御之條、聊可有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>憚歟、然而於<sub>二</sub>件條<sub>一</sub>者、被<sub>レ</sub>逐<sub>二</sub>保元例<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>巨難<sub>一</sub>、只惣以今年五節、愚意所不甘心也、所以者何、先例亮開年無<sub>二</sub>五節<sub>一</sub>、是者別段之事也、此外有<sub>二</sub>事故<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>內亮燒亡<sub>一</sub>是也、不被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>五節<sub>一</sub>例粗在<sub>レ</sub>之、皆以雖非吉事、大禮以前新嘗會、素世之所<sub>レ</sub>疑也、然而依<sub>二</sub>永觀保元例<sub>一</sub>、治承又有<sub>レ</sub>之、猶雖非無事之疑、例及<sub>二</sub>再三<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>守<sub>二</sub>其跡<sub>一</sub>之處、治承已非<sub>二</sub>吉例<sub>一</sub>之上、於<sub>二</sub>今年<sub>一</sub>者、不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>常途例<sub>一</sub>、神鏡劔璽、已從<sub>二</sub>賊徒<sub>一</sub>避<sub>二</sub>宮出<sub>一</sub>城、朝端之悲哀、何事過<sub>レ</sub>之哉、五節者雖爲<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>、已是遊宴〔也〕、唱<sub>二</sub>萬歲樂<sub>一</sub>、舞<sub>二</sub>亂拍子<sub>一</sub>、專非<sub>二</sub>咒<sub>一</sub>三神之禮上歟、仍推<sub>二</sub>量<sub>一</sub>彼是、今年被<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止五節<sub>一</sub>、尤可<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>時議<sub>一</sub>歟、抑、今年可有<sub>二</sub>朔旦之叙位<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>新嘗會<sub>一</sub>者、行<sub>二</sub>下名之禮<sub>一</sub>如何、依<sub>二</sub>嘉承例<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>亮聞<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>行即位之叙位<sub>一</sub>、此際左大臣同申<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>云々、後聞<sub>二</sub>忠親又申<sub>一</sub>此旨云々、事、雖<sub>二</sub>權議禮<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>歟者、

隆房歸參了、

十日、辛未依<sub>二</sub>方違<sub>一</sub>參<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、頭辨兼光問<sub>二</sub>改元事<sub>一</sub>、

十一日、壬申晴、傳聞、五節事、下官申狀可<sub>レ</sub>然之由、人々

沙汰、大畧可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>停止<sub>二</sub>歟云々<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜定長告送云、五

節可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之由有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、頭中將定令<sub>レ</sub>申歟〔者〕、今旦

送<sub>二</sub>頭辨返事<sub>一</sub>、

頭辨消息、

改元事、參上之次申入候了、今年被<sub>レ</sub>行候之條、何事

候哉之由令<sub>レ</sub>申給候<sub>二</sub>ヒキ<sub>一</sub>、若〔然者〕、何月可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行候

哉、聞月例與<sub>二</sub>朔旦後<sub>一</sub>〔此〕間尙可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>給<sub>二</sub>之<sub>一</sub>

由、所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰下<sub>二</sub>候也<sub>一</sub>、便宜之時、得<sub>二</sub>此御意<sub>一</sub>、必令<sub>二</sub>

參上<sub>二</sub>候、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>給<sub>二</sub>候<sub>一</sub>、恐々謹言、

返事狀云、

改元何月可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行哉事、

右如<sub>二</sub>風聞<sub>一</sub>者、十二月廿二日可有<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>云々、然

者即位以前改元例、先可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>尋問<sub>一</sub>也、若無<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>

者、十二月改元、不可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>歟、於<sub>二</sub>不被<sub>レ</sub>踰年<sub>一</sub>

之條<sub>一</sub>者、如<sub>二</sub>賴業真人勘申<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>叶<sub>一</sub>時議<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>、至

即位以前之條<sub>一</sub>者、未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>、又乖<sub>二</sub>道理<sub>一</sub>者也、

抑、朔旦年改元、專不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>求<sub>一</sub>例、況於<sub>二</sub>有<sub>一</sub>先規<sub>二</sub>哉<sub>一</sub>、

此條勿論歟者、愚案如此、可被計披露之狀如件、

後十月十日

右大臣、

十二日、癸天晴、隆房朝臣告送、有議被止五節之由、尤善政也、初依左大臣申狀、可有五節之沙汰、今度被問之時、被申可被止之由云々、余初沙汰之時不預問、今度申狀被據用歟、

十三日、戊天晴、及晚大夫史隆職來、談世間事、平氏在讃岐國云々、或說、女房船奉具主上并劔璽、在伊豫國云々、但此條未聞實說云々、又語云、院御使廳官泰貞、去比重向賴朝之許了、仰趣無殊事、與義仲可和平之由也、抑、東海東山北陸三道之庄、蘭、國領如本可領知之由、可被宣下之旨、賴朝申請、仍被下宣旨之處、北陸道許、依恐義仲、不被成其宣旨、賴朝聞之者、定結辭歟、太不便事也云々、此事未聞、驚思不少々々、此事隆職不耐不審、問泰經之處、答云、賴朝雖可恐在遠境、義仲當時在京、當有恐、仍雖不當被除北陸了之由、答云、天子之政、豈以如此哉、小人爲近臣、天下之亂無可止之期歟、又語云、北野小神等、輔正、定義、

神位贈位之間事未決、於社雖被仰其由、未被宣下云々、此事偏定長之不覺也、不能左右云云、又云、御即位於紫宸殿可被行之由、一日被仰下了云々、良久退出了、入夜資隆入道來、令見大將所作之詩等、加褒譽、及深更退出了、

十四日、乙天晴、申刻許人告云、平氏兵強、前陣之官軍、多以被敗了、仍自播磨更義仲赴備中、之由風聞、隨又以御使、被制上洛、申承了由、而忽以上洛之由、（今夕）明旦之間、可入洛之由、昨日夕飛脚到來、其後院中之男女、上下周章無極、恰如交戰場、其事漏聞之間、京中之人屋、去夜今朝之間、運雜物於東西、遣妻子於邊土、萬人失色、一天騷動、不可云敢云々、余遲聞之、以使尋遣範季院、許之處、事已實也云々、去夜子時、經家朝臣妻產男子、即天亡了云々、賴輔入道最愛之娘也、入道在飯室、遣告了云々、父母現存、推其哀慟、實以可悲、凡今年之產、多有此聞、可恐事歟、今夜終夜不寢、法皇可有逐電之由、世人成疑之故也、然而遂以無其事、天曙了、

十五日、丙子自夜甚雨、終日不止、頭辨兼光問送云、改



元事、御即位前後之間事、外記勘申旨如此、重可令計申者、外記申狀不寫留、大畧賴業申前後可在、勅定之由、師尙申、今年改元不可、然之由歟、返事云、

改元事、今度傳國之儀、絳異、常篇、依經史之說、任實龜之跡、不待踰年、被改元號、尤可叶時議之由、素可存申也、而即位〔以前〕之條、乖例忘理、仍令驚申許也、爲消變異、鎮騷亂、被行改元者、事爲定準、理雖可然、論其實、頗無益歟、只後鑒之所及、爲令顯號令之有所以也、然則年內改元、有理無難、何忽變其儀哉、抑、即位同日後日之條、彼是其不可有其難、縱准變跡、雖改元號、今就近例、被行禮儀、有何妨哉、若然者後日可被行歟、但兼日召勘文、豫諮詢有識之輩、當日被仰下、始終逐薰風、首尾可相應歟、兩々之間、臨時可被進退歟、凡無傍難、無禁忌之事、只以隨時宜、可爲省之故也者、以此等之趣、可被洩奏之狀如件、師尙申狀云、依天變怪異、并天下亂逆、可被行改元歟、不然者明年可被行、今年不可、然之由

令申也、仍所申其仔細也、只恐意所存者、代々依受禪守文之儀、皆期踰年也、今度爲希代之立王、仍爲顯其旨趣、勘漢史晉史之例、逐神龜實龜之例、今年可有改元之由、賴業勘申之趣、可被據用旨、所計申也、而此條不申是非、只爲鎮亂、申可有改元歟之由之條、太無所詮、仍注其旨言上、定乖時議歟、又賴業勘文、申閏月十一日等之例不惡之由、此條雖即位以前不可苦之由令存歟、此條勿論也、皆爲令融所申出、不知朝政之違亂、又爲難人事忘道理、未代人心、於事如此、何爲々々、

今日、義仲入京了、其勢甚少云々、

十六日、丑雨下、今日義仲參院、條々承仰又令申云云、仔細可尋之、入夜大將中將密々有詩、資隆入道在其座、

十七日、戌天陰、靜賢法印密々告送云、昨日義仲參院、

申云、平氏一旦雖乘勝、始終不可及、不審、鎮西之輩、不可與力之由仰遣了、又山陰道武士等、併在備中國、更不可及、恐云々、又賴朝弟九郎、不知其名爲大將軍、卒數萬之軍兵、企上洛之由、所承及、



也、爲防其事、可恐上洛也、若事爲一定者、可行向、爲不實者、非此限、今兩三日之內、可承其左右云々者、已上義仲申狀也、只今不可及外聞、竊所告申也云々、平氏不可有不審之由、令申條、甚以荒涼事歟、或人云、賴朝郎從等、多以向秀平之許、仍秀平知賴朝之士卒有異心之由、內々以飛脚觸示義仲、此時自東西、可攻賴朝之由也云々、得此告、義仲不知平氏、迷而歸洛云々、如此事實否難知事歟、午刻、藏人左衛門權佐親雅爲院御使來、問云、朔旦叙位、以式日一行之者、賜下名位記等之儀如何、依嘉承例、欲合行即位叙位、在亮聞之例也、可計申者、申云、嘉承例全不可被忌、合行之外無異議者、

十八日、雨晴、女醫博士經基來、取姬君并中將等齒、又主稅頭定長來、令見醫書等、及晚範季來、談世上事、此次件男云、四方皆塞、中國之上下併可餓死、此事一切不可疑、於西海者、雖非謀叛之地、平氏在四國、不可通之間、又同事也、加之、義仲之所有、君偏庶幾賴朝、殆以彼被欲殺義仲歟之由、成僻推歟、將有告示之人歟者、如此之間、奉

怨法皇、兼又疑御逐電事、依之忽棄敗績之官軍、所迷上洛也、然而忽討平家、事不可叶、平氏猶存者、西國之運上、又不可叶、(仍)且爲令討平氏、且爲協義仲之意趣、法皇起自叡慮、早可令赴西國御也、只先可有臨幸播磨國、然者南西國等之住人等、皆向風可子來也、其時發鎮西(等)之勢、可誅伐平氏了、以後可有還御也、此外凡無他計云々、卽以此旨示泰經、々々甘心、又示靜賢法印、靜賢又以服膺、然而未此旨不達天聽云々、余案之、所立之次第、其理可然歟、但若有臨幸西海者、偏被釣具義仲等、違乖賴朝之由、決定令存歟、此天下猶雖一日、賴朝有可執權之運歟之由、素所恐案也、然者偏被變彼賴朝之條、尤可有思慮歟、恐意所存、只以道理被仰聞、彼是祈請神佛、強不恐此勇士等、以正道被行天下者、衆災可消也、只先猶可討平氏之由、被仰義仲、以別使者、又賴朝之許、可被仰遣仔細也、無左右御下向之條猶非王者之翔歟、然而不口外者也、範季等之議、可謂小人之謀、可悲之世也、

十九日、庚辰、天晴、向堂有文書沙汰、或人云、來廿六日

可有御遠行云々、是昨日範季所語儀狀○四字一本作意見二字〔歟〕、將又義仲奉具院已下爲宗公卿等、可向北陸之由風聞、此兩事之間歟、凡不能左右〔云々〕、法皇自今日三ヶ日雖可參籠今比叡給、依天下物騒、忽以還御云々、凡院中近臣周章無極云々、不知何事、

廿日、已天晴、早旦大外記賴業來、依昨日召也、粗有示仰事、所申可然、今日、靜賢法印爲院御使、向義仲之家、仰云、其心不說之由聞食、仔細如何、不申身暇、俄可下向關東云々、此事等所驚思食也云々者、申云、奉怨君事二ヶ條、其一ハ、被召上賴朝一事、雖申不可然之由、無御承引、猶以被召遣了、其二ハ、東海東山北陸等之國々所被下之宣旨云、若有不隨此宣旨之輩者、隨賴朝命可追討云々、此狀爲義仲生涯之遺恨也云々、又於下向東國之條者、賴朝上洛者、相迎可射一矢之由素所申也、而已以差數萬之精兵、令企上洛其身上云々、仍爲相防欲下向、更不可驚思食、抑、奉具君可臨戰場之由、議申之旨聞食、返々恐申、無極無實也云々、已上義仲申狀、靜賢歸參、欲申此由之處、

依御行法之間、不能申入、然間、義仲重以使者示送靜賢之許云、猶々關東御幸之條、殊恐申、早可承執奏之人云々、件事昨日行家以下一族源氏等會合義仲宅、議定之間、可奉具法皇之由、其議出來、而行家光長等一切不可然、若爲此儀者、可違背之由、執論之間、不遂其事、以件子細、行家令密達天聰云々、義仲申無實、定以詐僞歟、爲恐々、兼又、義仲殊有申請事云々、可討賴朝之由、賜一行之證文、欲見東國之郎徒等云々、此事已大事也、不能左右云々、又傳聞、平氏黨類、出九國向四國之間、甚庭弱、而今度官軍敗績之間、平氏得其衆、勢太強盛、於今者輒不可得進伐云々、而義仲等稱甚安平之由、是又僞言云々、天下滅亡、只在今來月歟、

廿一日、壬午雨降、義仲所望兩條、可討賴朝之由、申賜御教書事、並宣旨之趣、非御定者、奉行之人、聊可有勘發之條、共以不許〔云々〕、此上今一重令攀緣歟云々、凡此兩條之望、太以不當、無許容之條、尤有其謂歟、或云、平氏已來備前國、凡美作以西、併靡平氏了、

殆及播磨云々、(疑者若義仲、與平氏同意歟云々、)  
又(云)、基家卿逐電云々、依爲賴盛之聲、義仲有意  
趣云々、恐其事、令隱居歟、

廿二日、癸未天晴、傳聞、今日義仲參院、又聞、賴朝使雖  
來伊勢國、非謀叛之儀、先日宣旨云、東海東山道等  
庄土、有不<sub>レ</sub>服之輩者、觸賴朝可<sub>レ</sub>致沙汰云々、  
仍爲施行其宣旨、且爲令仰知國中、所遣使者  
也云々、而國民等惡義仲郎徒等之暴虐、寄事於賴朝  
之使、切塞鈴鹿山、射義仲行家等之郎從了云々、  
因之、義仲郎從等遣伊勢國一畢、今日家重等遣山  
上了、法印無動寺房也、

廿三日、甲申天晴、早旦人告、今夕明旦之間、法皇可幸  
南都云々、疑者可引籠吉野給歟、但未一定云  
云、已刻、觀性法橋來語云、少將公衡依大宮權亮能  
保賴朝妹之緣、公衡者、能保妹也、頗成恐云々、午刻、靜賢法印來  
語云、去夜義仲參院、以靜賢奏經等傳奏云々、其申  
狀云、先奉取院、可引籠北陸之由風聞、以外無實、  
無極之恐也、此事、所相伴之源氏等、指行家所執  
奏歟、返々恐申、早可承證人也云々、次平氏當時  
無追討使、尤不便、以三郎先生義廣欲令討、又依

恐平氏之入洛、院中之緇素、洛下之貴賤、運資財  
匿妻子、太非穩便、早可有御制止、此三ヶ條也云  
云、仰云、先可奉取院之條、全非源氏等之執奏、只  
只世間普依申事、所聞食也、然而全以無御信用、  
不及沙汰云々、次義廣追討使事、雖被仰切、賴朝  
殊存意趣之者歟云々者、靜賢又言、實可奉具  
院事、不可必然事歟、無事理、又無其要事  
也、只每事不許忿怨之間、若逃籠北陸歟、其時  
存意趣之輩、云武士云院近臣、自報怨歟、然者  
定物騷歟云々、武士之中、茲數重隆、殊結意趣云云、又院近臣如泰經、同內々相怨云々、雖然其  
恐不及他人歟云々、又云、彼宣旨之趣事、定長傳  
宣、兼光宣下云々、被問兼光之處、即改直了、而  
以不直以前之宣旨聞及歟、全不可被用事也、  
以其由可被仰義仲之由、兼光申云々、良久歸  
〔出〕了、傳聞、攝政愛物母堂等、昨日曉遣鞍馬方了  
云々、又入道關白家中太以鼓勵云々、又聞、義仲郎從  
等、多遣伊勢國美濃國等了、京中無勢云々、平氏再  
可繁昌之由、有衆人之夢想等云々、範季申云、昨  
日謁義仲、如申狀者、無謀叛之義云々、入夜定  
能卿來、談世上院中事等、南都臨幸事、未聞及云



云、

廿四日、乙天晴、傳聞、義仲重申、院曰、以義廣可追討平氏之由、申請不許之條、未得其意、猶枉欲遣義廣、兼又賜備後國於彼義廣、以其勢可討平氏云々、仰云、全非不許之儀、件男聞食庭弱之由、仍不可叶之由思食、不被仰左右也、而猶可宜之由、於計申者、不可及異儀云々、國事亦聞食了、但忽不可被任宰吏云々、奈良僧正送札云、自院密々有召、仍明日白地可上洛云々、

廿五日、丙天晴、此日奉鳳笙二管於賀茂社、上下各奉琵琶一面於春日社、奉龍笛一管於熊野、但預給智證阿闍梨、後日參詣之次、若令立使之爲大將壽命長遠祈禱、兼又天下時、可進之由仰食了、

亂逆之間、一門之家中、爲安穩太平也、仍余及大將神齋修祓、先浴如常、入夜方違向堂、此夜、奈良僧正上洛云々、傳聞、賴朝起相模鎌倉之城、暫可住遠江國、是以精兵五萬騎、北陸一萬、東山一萬、東海二萬、南海一萬、可討義仲等、爲令沙汰其事云々、須其身參洛之處、奥州秀平又率數萬之勢、已出白川關云々、仍疑彼襲來、逗留中途、可伺形勢云々、去五日起城云々、廿六日、丁天晴、今日終日令見沙汰師量文書等、傳

聞、義仲猶可討平氏之由、有院宣、愁領狀云々、又聞、義仲觸興福寺衆徒云、爲討賴朝、可赴關東、可相伴云々、衆徒不承引云々、入夜歸宅、此日、五位藏人親雅催大將云、朔旦日必可出仕者、申承了之由云々、此夜、大將中將竊有詩、無事不可、他聞云々、

廿七日、戊天晴、入夜或者來云、源氏武者也、源義兼號石孫、判官代源朝爲討平氏、行家來月一日可進發、爲臣義基子也、

爲討平氏、行家來月一日可進發、爲伴彼明日先可向河內所領云々、其次語云、義仲與行家已以不和、果以不快出來歟、返々不便云々、其不和之由緒者、義仲向關東之間、可相伴之由觸行家、行家辭通之間、日來頗不快之上、此兩三日殊以嗷々、然問行家來月朔日必定下向、義仲又爲不被奪其功於行家、相具可下向之由風聞云々、如只今者、外相雖不惡、其實必相互指隙歟云々、又云、於行家者、不可立合賴朝之由、內々令議云云、

廿八日、丑傳聞、行家義仲等、征伐了、下向、來月一日、依爲御衰日、院延引、或說二日、或八日云々、

廿九日、寅賀表加署事、先日左大臣遣進次第、當日



於仗座可加之由被造載、猶依不審、問遺賴業之許、申云、於事可有煩、仍兼日可賜公卿判之由、昨日申一上丁云々、此日奈良僧正被來、去廿五日夕所被上洛也、依院召云々、仍廿七八日兩日參上、然而全無殊仰云々、大略催大和國兵士等、可被用意平氏強者、可差遣之故云々、始可催衆徒之由有仰、而若可發大衆者、決定惡僧等得力、致濫行非法、歟、當時者隨分奔走、殊無大衆狼藉之聞、今漏承此院宣趣者、衆徒之濫吹、全不可叶制法、此條依重仰、可致沙汰、爲後日之恐、所申仔細也云々、重仰云、所申可然、大衆之條、可隨重御定、先只以寺家之力、催末寺莊園之兵士、可致其用意云々、先廿七日參上之處、與行家御双六之間無他事、雖入見參空退出、昨日參上奉仰云々、御堂御八講之次、又可上洛之由、所被示也、即被下向丁、今度不參入道關白之許、依無其隙也云々、

## 十一月

一日、卯〔天〕陰、時々小雨、但不及濕衣、此日、朔

旦冬至也、依爲即位已前、不出御南殿、只奏賀表、付御曆、於內侍所仗座設饗、偏依昌泰例、所被行也、左大臣造進次第、件次第被作載當座可加賀表署之由、煩非也、依大外記賴業申、變其儀兼取公卿判、今日已刻、史生持來賀表、賴業相副書札、內々示送曰、昨日申攝政御判之間、日暝了、右大將殿御判同可申請云々、余及大將共書名二字、雖大臣寄名例也返遣了、件表最末參議名下無等言字、寬治二年有沙汰被止了、具見堀川左大臣記、以往例或有之或無之、

未刻、右大將參內、藤原經、細地平經亥刻歸來語、今日次第、具在大將記、申刻、左大臣參陣、先召大外記賴業、被仰賀表案可昇立之由、賴業申云、持參表函之間、於途中墮入泥中被損亡了、加修理之間遲々云、大臣召奉行職事、親雅仰可尋沙汰之由、即史生二人昇立陣座下戶邊、次外記二人昇之、經陣小庭中門、及對南庭等、立軒廊西間、惣二次大臣以官人問內侍候否於職事、歸來申儲候之由、次左大臣已下起座列立東對南庭、大臣、納言、參議各一列、立北上面、如常次大臣就案東頭、此間內侍出居東階上、大臣待內侍出、可進歟、而頗早進云々、但永承、延久等又如此云々跪

挿笏、起取表函、不取花足、抑或乍跪取函、經案北、昇東階二級、乍立授函於內侍、左廻經案北立本列、揖後更揖、左廻經納言列前退下也、次或左廻或右廻、大將左廻、余所指示也、各經後列前退也、又歸入本所出之間復陣座、大臣早以退出、忠親卿爲上首、親經來座、仰不可有出御、依例可行之由、忠親乍在奧座、召官人、仰右中辨可召之由、即光雅朝臣裝束司、來奧座、忠親仰可居饗之由、次公卿等暨起座、徘徊陣座下馬道邊、次居饗、依左大臣次第不居飯、追可居云々、而忠親猶先可居之由仰之、仍先居之云云、居訖光雅觸忠親、即公卿着饗座、忠親着端、大將着座、次一獻、光雅、次二獻、重綱、次三獻、兼忠、皆自座下方勸之、二獻居汁、左大辨經方申上、各下箸如恒、元不居上、依上卿命、一兩人前居之、皆不居云々、次外記進申御曆奏候之由、上卿目之、外記稱唯之後、仰見參可持參之由、次挿見參祿法於杖進之、忠親向座上方如南、見文、所儀、忠親問外記云、無非侍從見參如何、外記退歸問賴業、歸來申云、朔旦冬至、無非侍從見參先例也、忠親雖有奇色、不重仰進弓場奏之、歸來仰御曆奏、可付內侍所之由於外記、以官人召少納言賴

房給見參、外記退下、少納言未參之、召辨兼忠給祿法、後上下退出云々、今日大將奉拜龍顏、事未始以前、御歲四歲、然而有成人之量云々、言語分明、敢不面嫌給云々、已上以大將口狀記、之、定有御事、

一當座可加賀表署之由、不可必然事、

正曆、長和、長元、永承、延久、寛治、大治、久安、

已上皆兼日加之、

嘉承、當座加署、堀川左大臣記云、加署事兼日事也、而今度依日

加署之也云々、

長寛、無指故實、不知由緒、偏執嘉承例、當時左大臣(子時右大臣)所被行也、

今度偏就嘉承長寛例、被存此儀、歟、而大外記賴

業申改了、就中、下官依所勞不可出仕、若必當

座可加署者、取左大臣判之後可持來余亭、

歟、太無便宜歟、又無障之大臣、不加署之例、

未曾有也、仍旁當座加署之儀、不可然之由、先日

賴業所示也、

又長元久安依他事、陣定公卿參陣之日、兼日取賀

表署云々、此外皆所特廻里第二也、

一公卿參列之時、出陣座間說々事、

大內陣座五間也、西一間稱大將座一人不着、第二

間一位大臣座、第三間二位大臣並大納言座、第四間中納言並參議座、第五間者造合間也、然而、參議座當時在第五間、是自然敷出其座也、非正法、然者不可用出入之路云々、凡出入間有兩說也、

一說、一位大臣、出西第二間東邊、

二位大臣、出第三間西頭、

大納言、出同間東邊、

中納言、出第四間西邊、

參議、出同間東頭、

是出自我座當間之儀也、京極大殿令存此儀給、

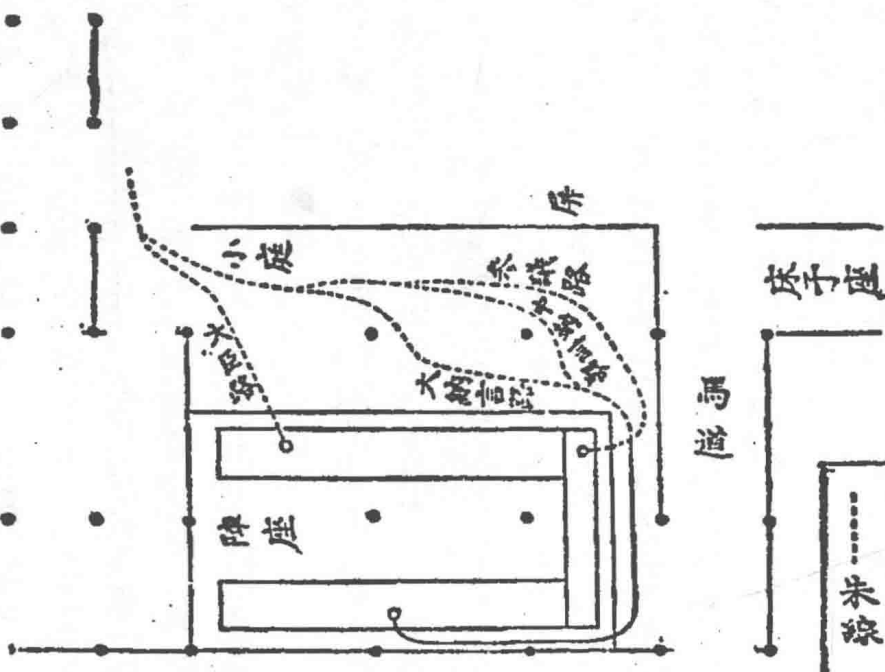
又寛治二年匡房記置、以之爲是、

一說、大臣不論一位二位、出西第三間西頭、已下同前、

是長和御堂、嘉承堀河左大臣等例也、各雖爲一位大臣、猶用二位大臣路也、於嘉承者雖爲里內、准而知之也、又被記置如此者也、

里內儀、依間數縮、隨宜可相計歟、延久、高陽院寛治、堀河、共仗座四間也、仍兩度共置第一間、以殘三間爲

路、依今一間縮不各雖有失禮違亂等、具見江記、大概如此也、今度仗座只三間、仍今一重爲新儀、人々所存兼以不審之處、如案有不同等云々、



今度路如斯、左大臣路、尤乖愚案、里內儀、雖不

可守株、猶可依道理歟、左大臣須出西一間東頭也、依間數少、雖不及置一間、猶可避西頭也、但定有所被存歟、此陣座不敷大將座、仍不可置其所之故歟、此條不可然、凡雖有用我座之次間、大內儀、一位大臣、出西第三間、西頭、即長和元年例是也。之說、未聞經自我座上間之例、若又就下、分別一位二位說、大臣偏存、可用第三間西頭之由歟、仍余分、西二間、以東三間、准當時之仗座、於第三間者、准造合間、一切不可用、路之儀歟、是又乖延久寬治嘉承等里內之例、訖旁不得其心者也、次忠親卿用第二間東邊之條、是本愚意所存也、尤叶道理、但左大臣之所為雖不當、被用第一間西頭者、隨又大納言可出第二間西頭也、雖有不登一道之說、臣者、不分二位之儀也、未聞置二路之例、忠親之所存、只糾左大臣之非道、令顯我正路之意歟、凡於大內者、云所之便宜、云人之作法、式法已定、是非分明、仍必不隨上薦之失、是例也、於里內者、准而用之間、意巧各異、難存一定歟、強正之失、所不甘心也、於大將者、忠親之作法、叶余所教、仍遂其跡了云々、爲後代聊注仔細耳、

## 一公卿列立所事、

里內儀、如延久古記者、上首當西巽角立歟、東禮儀、如寬治堀川左府記者、與西對東簀子平頭坤角也、立云々、江記推云、猶可違東、今度當東對西一間東程、可當軒廊云々、立云々、相違彼兩度之例、如何、但軒廊南庭、頗有水石之故歟、然而不及妨上首立所者也、

## 一退下之時左右廻事、

里內之時、先々人々所持疑也、然而可爲右廻四禮之時、之由、古賢議定了歟、永承古記、宇治殿仰又左廻也、如、此、大二條關白、與堀川左府、有相違歟、而大二條殿說、爲是之由、宇治殿有仰、延久京極大殿、寬次堀河左大臣、皆以如此也、仍今度又不可有異儀歟、而愚案右廻條、猶所不甘心也、凡殊於有口傳秘說等事者、雖其理不當、不能未世之進退、只守訓說、是故實也、至于如此、可依便之作法者、只可隨意歟、仍可左廻之由、含右大將了、而大臣又左廻云々、於忠親者、存先例、右廻云々、凡執右廻之故者、廻御所方之儀也、而情加愚案、節會之時、着端座之人、退下之時右廻、是隨便宜、不廻御所方、又內辨於東階下、給下名、退下之時左廻、是又隨便宜、不依



御所、就中、此例北上西面、御所當乾角、退下之路、各經後列之前、進行南、然則付退下之便、左廻之條、全非乖御所當時之進退、尤穩便也、強雖右廻、行南之間乖御所之條、只同前也、直退東者、右廻可然、更於廻南者、右廻殊失其便者也、雖古賢之一言、至于此條者、何強爲規模哉、加之、永承古記之意、深加簡粗叶恩案、後人披彼記、可加深案歟、

# 一南殿御裝束事、

不出御南殿、已無旬儀、南殿裝束、曾不可替尋常之儀歟、而今度被懸御簾云々、未得其意耳、

已上五ヶ條、任恩意注置之、朔旦已爲邂逅之事、仍爲子孫之輩、見此趣、爲令用捨也、公事之習、不失先例、不破道理、以之可謂知禮也、

今度、賀表作者、式部大輔信經卿、消書左中辨光雅朝臣、料紙左大臣下給白色紙、不折之

此日、義仲行家等爲討平氏雖可首途、忽以延引、依爲院御衰日也云々、來八日可進發云々、

抑、朔旦不出御例、昌泰元年、不知由緒、長和元年、嘉承二年、已上亮闇也

二日、壬辰天晴、傳聞、賴朝去月五日出鎌倉城、已京上宿旅館、及三ヶ夜、而賴盛卿行向議定、依糧料菟等不可叶、忽停止上洛、歸入本城了、其替出立九郎御曹司、誰人哉、可尋問已令上洛云々、

或人云、今日義仲參院云々、

三日、癸巳天晴、伴兩息向堂、沙汰師量文書事、傳聞賴朝上洛決定延引了、其弟九郎冠者、副五千騎勢、可令上洛云々、然而猶以不定云々、來十日院可被供養北斗堂、臨幸王院內云々

四日、甲午天晴、傳聞、賴朝上洛決定止了、代官入京也、今朝云々、今日着布和關云々、先奏事由、隨御定可參洛、義仲行家等於相防者、任法可合戰、不然者過平事、不可有之由仰合云々、又聞、平氏一定在讃岐國云々、此日隆職宿禰來、

五日、乙未天晴、春日社奉幣如例、陪膳季長朝臣奉行、國行依神齋不參御堂、彌勤講如例云々、傳聞、來八日行家下向鎮西一定、義仲不可下向、與賴朝軍兵可決雌雄云々、

六日、丙申天晴、春日祭也、神事如常、使左少將宗長云云、或人云、賴盛已來着鎌倉、唐綾直垂、立烏帽子、侍

二人、子息皆悉相具、各不持腰刀劍等云々、賴朝白糸葛水干立烏帽子對面、郎徒五十人許群居賴朝後云々、其後賴盛宿相模國府、去賴朝城一日之行程云々、以目代爲後見云々、能保宿惡禪師家云云、去賴朝居一町許云々、此事爲修行者說、雅賴卿所注送也、今夜、成長法師來、召問文書事、師自、今夕〔有〕三五體不具穢氣、今日始奉御返報、爲恐々々、重又進了、

七日、丁天陰、及晚雨下、傳聞、義仲因可被征伐之由、殊用心體念之餘、如此承及之由、令申院云云、仍被入院中警固之武士申上云々、行家已下、皆悉勤仕其宿直、而義仲一人、漏其人數之間、殊成奇之上、又有中言之者歟、行家明夕必定下向云云、賴朝代官今日着江州云々、其勢僅五六百騎云云、忽不存合戰之儀、只爲供物於院之使云々、次官親能、廣季子并賴朝弟、九郎等上洛云々、

此日、梅宮祭、幣立自河原了、依穢中也、今日又有御返札、銘肝可莫言之、使調見一事、猶有難澁歟、

成長法師文等遣召了、召入入夜持來、然而今夜不

開之、成長法師猶宿候、

八日、戌天晴、今日、備前守源行家、爲追討平氏進發、見物者語云、其勢二百七十餘騎云々、太爲少如何々々、今日義仲已打立、只今如亂逢事、院中已下京都諸人、每家鼓騷、抑、神鏡劍璽、無事奉迎取之條、朝家第一之大事也、而君臣共無此沙汰、仍余竊以此趣、含行家了、全無親睦之緣、然而偏依思社、招或僧具以開達了、中心之誓、上天可鑒耳、〔九月己亥、天晴、〕

十日、庚天陰、午後雨下、依方違宿堂、此日、蓮華王院內北斗堂供養也、權中納言賴實卿已下公卿五六人着直衣參入、殿上人束帶云々、傳聞、賴朝使於供物者着江州了、九郎猶在近江云々、以澄憲法印、爲御使遣義仲之許、賴朝使入京、不可齎存之由云々、雖有不悅之色、愁領狀歟、於無勢者強不可相防之由、令申云々、

十一日、辛天晴、及晚雨下、中心有悅喜之事、十二日、壬天晴、傳聞、資盛朝臣送使於大夫尉知康之許、奉別君悲歎無限、今一度歸華洛、再欲拜龍顏云々、人々所疑、若奉具神鏡劍璽歟云々、又聞、平氏其勢及數萬、追討忽不可計云々、入夜

觀性法橋來、依實修僧都所勞、白地出京、明日可歸入云々、

十三日、卯雨下、季經朝臣來語云、院廳官康貞、（一）昨日上洛云々、閭巷說云、秀平可追討賴朝之由、有院宣<sub>レ</sub>之旨、義仲示<sub>レ</sub>遣秀平之許、秀平以<sub>レ</sub>件證文付<sub>レ</sub>康貞進覽了云々、但此條定浮說歟云々、追可尋聞之、今日行家起<sub>レ</sub>鳥羽了云々、

十四日、辰天晴、大外記賴業來、大將中將兩息共受<sub>レ</sub>始尙書於賴業、是非兼日<sub>レ</sub>之支度、臨期所<sub>レ</sub>思立也、賴業於<sub>レ</sub>明經道、不<sub>レ</sub>耻<sub>レ</sub>上古之名士也、仍爲<sub>レ</sub>令受<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>其說也、申刻、頭辨兼光爲<sub>レ</sub>院御使來、召<sub>レ</sub>篠前

謁<sub>レ</sub>之、普通之禮、（實首可）招上長押上、然而、兼光（依爲）案司、不正其禮耳、仰云、神鏡劔

璽、出<sub>レ</sub>城在<sub>レ</sub>外、吾朝之大事、莫<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>於此、仍試遣<sub>レ</sub>御使、誘以<sub>レ</sub>勅命如何、此事天下有<sub>レ</sub>變之時、人々議奏、豫雖有<sub>レ</sub>其沙汰、自然送<sub>レ</sub>旬月、而去九月之比、前內大臣上<sub>レ</sub>書於法皇、其狀云、於<sub>レ</sub>臣全無<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>背<sub>レ</sub>君之意、事出<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>圖、周章之間、於<sub>レ</sub>舊主者且爲<sub>レ</sub>遁<sub>レ</sub>當時之亂、率具蒙<sub>レ</sub>塵外土了、然而此上事、偏可任<sub>レ</sub>勅定云々、如此狀<sub>レ</sub>者、彌表<sub>レ</sub>和親之儀、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>迎彼三神、歟、而義仲追討之時、官兵敗績、臨<sub>レ</sub>此時被<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>御使

者、邊民之恐、恐存<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>士卒之庭弱諂<sub>レ</sub>之由歟、此條如何、能思量可<sub>レ</sub>計奏者、申云、此事舊主蒙塵之刻、速可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>此儀、而延而及<sub>レ</sub>于今、懈緩之條、悔而無<sub>レ</sub>益、況於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>彼漏達之趣乎、被<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>御使<sub>レ</sub>之條、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>異儀、抑彼報奏之旨、密而可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>豫議、遠境<sub>レ</sub>之間、御使更歸參之後、重有<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>儀者、擁息之處、自有<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>歟、仍智慮所<sub>レ</sub>及、<sub>レ</sub>然有<sub>レ</sub>議定、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>含<sub>レ</sub>御使也者、兼光云、攝政被<sub>レ</sub>申云、御使之上、以<sub>レ</sub>手跡可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>献<sub>レ</sub>女院、爲<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>疑殆也、左府被<sub>レ</sub>申云、御使可有<sub>レ</sub>二人也云々、余云、此儀共可<sub>レ</sub>然、抑撰<sub>レ</sub>器量、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>献<sub>レ</sub>其人者、兼光退歸了、

十五日、巳天晴、及<sub>レ</sub>晚宰相中將來、語<sub>レ</sub>院中事、武士守護、逐日不<sub>レ</sub>懈云々、院中上下、或不<sub>レ</sub>受、或甘心、兩樣云々、又云、賴朝代官九郎、可<sub>レ</sub>入洛哉否、頗有<sub>レ</sub>豫議、大畧所<sub>レ</sub>進物并<sub>レ</sub>使者等、可<sub>レ</sub>歸國<sub>レ</sub>之樣、有<sub>レ</sub>其沙汰、然間又儀出來、以<sub>レ</sub>澄憲、重被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>遣義仲許<sub>レ</sub>之處、其勢不<sub>レ</sub>幾者、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>入京之由、愁承伏云々、又云、只今主典代景能來入、所被<sub>レ</sub>遣賴朝之許、御使也、此一兩日入洛云々、仍問<sub>レ</sub>賴朝報奏趣<sub>レ</sub>之處、大畧不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>御返事、專有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>悅之色、於<sub>レ</sub>仔細者、申<sub>レ</sub>始御使<sub>レ</sub>康貞了、今



仰只同前也、早可歸參云々、敢無響應之氣、殆可謂攀緣歟云々、

十六日、兩陰晴不定、今曉地震、早旦傳聞、宰相中將室平產了云々、仍示送悅之由、今日余欲參院之處、定能卿告送云、  
件卿不產穢、在法住寺直胤、但院中產婦之夫三々日被忌、仍不參院云々、

日院可臨幸南殿、御用心之體、萬陪於日來、今日之出仕指合〔歟〕云々、仍不參、今夕所々堀堦搆釘拔、別段之沙汰云々、此事天狗之所爲歟、偏被招禍也、不能左右々々、藏人清實來、催右大將云、寮御〔馬不足〕、可進權立馬云々、申力不及之由、〔依無馬也〕、

十七日、雨下、平旦人告云、院中武士群集、京中騷動云々、不知何事、頃之、又人云、義仲可襲院御所之由、風聞院中、又自院可被討、義仲之由傳聞彼家、兩方以僞詐有告言之者歟、依如此浮說、彼是鼓騷、敢不可云云々、若乖勅命之者、隨罪之輕重、被行罰科者例也、又縱雖有不服王化者、虜領一州、引籠外土、粗有先蹤、未聞洛中咫尺之間有如此之亂、此事計也、義仲忽無可奉危國家之理、只君搆城集兵、被驚衆之心之條、專至

恐之政也、是出自小人之計歟、果以有此亂、王事之輕、不足論是非、可悲々々、及午後聊落居云々、攝政依召參入、今夜可被宿候云々、是依爲御愛物、殊應召也、他公卿近習、兩三輩之外、無參入之人云々、可彈指々々々、長方卿一人參入、悲泣而退出云々、以主典代景宗爲御使、被遣義仲、其狀云、謀叛之條、雖諍申告言之人、稱其實者、不及遁申歟、若事爲無實者、速任勅命、赴西國可討平氏、縱又乖院宣、雖可防賴朝之使、不申宣旨、一身早可向也、乍在洛中、動奉驚聖聰、令騷諸人、太不當也、猶不向西方、逗留中夏者、風聞之說、可被處實也、能思量可進退云々、其報奏之趣未聞及、余以使者行、令進院、示送定能卿云、依所勞不早參、物騷之仔細委可被告示云、返事之趣、大途如風聞、及晚左少辨光長來語之旨、又以同前也、此夜、八條院還御八條殿云々、疑者明曉可被攻義仲歟云々、不能左右々々、義仲其勢雖不幾、其衆太爲勇云々、京中之征伐、古來不聞、若有不慮之恐者、後悔如何、小人等近習之間、遂至于此大事、君之不見士之所致也、日本國之有



無、一時可決歟、無犯過之身、只奉仕佛神耳、  
 十八日、戊申天晴、此日、吉田祭也、奉幣如常、早旦伴  
 大將欲參院之間、爲泰經卿奉行、有只今可參之  
 仰、申承了由、即相共參院、于時辰刻也、以泰經卿  
 被仰下云、世上物騷、遂日倍增、然間浮言多出來、御  
 所警固過法、義仲又似無伏命之意、事已及大事、  
 仍昨日以主典代景宗爲御使、被仰云、爲征伐可  
 向西國之由、度々被仰下、而于今不下向、又可  
 攻賴朝代官之由令申云々、然者早可行向、而兩  
 方共不首途、已欲歟、君、其意趣如何、若無謀叛之  
 儀者、早可赴西海者、義仲報奏云、先可奉立合  
 君之由、一切不存知、因茲度々書進起請了、今  
 被尋下之條、生涯之慶也、於下向西國、賴朝代官  
 引率數萬之勢、可入京者、一矢可射之由素所申  
 也、彼不可被入者、早可下向西國云々、此上  
 賴朝代官事、何樣可被仰乎、兼又依此騷動、可有  
 行幸於院歟、將忽不可然歟、此等條々可令計  
 申者、申云、先院中御用心之條頗過法、是何故哉、偏  
 被敵對義仲也、太以見苦、非王者之行、若有犯  
 過者、只任其輕重、可被加刑罰、又如被仰下者、

申狀已穩便歟、然者先被遣可然之御使、且被尋  
 問浮言之次第、且被勘發所行之不當、若指申告言之  
 輩者、任法可被行刑罰、先罷當時敵對之儀、尤宜  
 歟、義仲若伏理有和顏者、何不赴征伐哉、縱雖  
 可有罪科、出境之後有其沙汰者、不可有當時  
 之怖畏歟、洛中咫尺之間、被敵對君之條、當時後  
 代、朝之耻辱、國之瑕瑾、何事過之哉、若又猶不肯  
 受勅命者、彼時任法可有科斷歟、如今之沙  
 汰者、王化如無、甚以見苦歟、於賴朝代官條者、勢  
 少者可入之由、義仲申旨、先日有風聞、更不可變  
 申歟、又率巨多之士卒者、可停止之由、可被  
 仰彼代官歟、行幸之條、忽不可然歟者、泰經參  
 御前了、其後人々多以參集、左大臣已下、大略無殘  
 人歟、以定長卿、被仰暫可候之由、仍返候、及未  
 刻、定能卿密々來告云、只今以御車、密々行幸成了、  
 院不知食云々、頃之、定長來問云、不圖之外有行  
 幸、以此亭可皇居歟、將又猶以閑院可爲皇  
 居歟、可計申者、申云、以此御所爲皇居者、行  
 幸之條太奇、仍只殿上已下事、可在閑院歟者、定  
 長云、左大臣被申旨同前云々、

左大臣已下公卿、在上達  
部座、余早參之間、在後殿

東北鄰之間、故不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>被<sub>一</sub>座、及<sub>二</sub>申刻<sub>一</sub>、祔候、殊無<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>尋問<sub>一</sub>事、仍觸<sub>二</sub>泰經<sub>一</sub>退出了、大夫史隆職來、余謁<sub>レ</sub>之、隆職所存如<sub>二</sub>余案<sub>一</sub>、攝政自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>被<sub>二</sub>參<sub>一</sub>宿院御所云々、仁和寺宮、八條宮、鳥羽法印等、皆自<sub>二</sub>日來<sub>一</sub>被<sub>二</sub>候<sub>一</sub>院中云云、

十九日、<sub>二</sub>配天陰<sub>一</sub>、時々小雨、早旦人告云、義仲已欲<sub>二</sub>襲<sub>一</sub>法皇宮云々、余不<sub>二</sub>信受<sub>一</sub>之間、驚無音、以<sub>二</sub>基輔<sub>一</sub>令<sub>二</sub>參<sub>一</sub>院、令<sub>二</sub>尋<sub>一</sub>仔細、午刻歸來云、〔已〕參上之由、雖有<sub>二</sub>其聞<sub>一</sub>、未無<sub>二</sub>其實<sub>一</sub>、凡院中之勢甚爲<sub>レ</sub>少、見者有<sub>二</sub>興<sub>一</sub>違之色云々、光長又來、爲<sub>レ</sub>奏、院退出了、然而義仲之軍兵、已分<sub>二</sub>三手<sub>一</sub>、必定寄之風聞、猶不<sub>二</sub>信用<sub>一</sub>之處、事已實也、余亭依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>大路之頭<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>大將之居所<sub>一</sub>了、不<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>幾程<sub>一</sub>、黑煙見天、是燒<sub>二</sub>拂河原之在家<sub>一</sub>云々、又作<sub>二</sub>時兩度<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>時未刻也、或云爲<sub>二</sub>吉時<sub>一</sub>云々、及<sub>二</sub>申刻<sub>一</sub>、官軍悉敗績、奉<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>法皇<sub>一</sub>了、義仲士卒等、歡喜無限、即奉<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>法皇於五條東洞院攝政亭<sub>一</sub>了、武士之外、公卿侍臣之中、矢死傷之者、十餘人云々、夢歟非<sub>レ</sub>夢歟、魂魄退散、萬事不覺、凡漢家本朝天下之亂逆、雖有<sub>二</sub>其數<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>如<sub>一</sub>今度之亂、義仲者是天之誠、不德之君<sub>一</sub>使也、其身滅亡、又以忽然歟、慈生見<sub>二</sub>如此之

事、只可<sub>レ</sub>耻<sub>二</sub>宿業<sub>一</sub>者歟、可<sub>レ</sub>悲々々、攝政未<sub>二</sub>合戰<sub>一</sub>之前、被<sub>レ</sub>逃<sub>二</sub>宇治之方<sub>一</sub>了云々、入<sub>レ</sub>夜定能卿竊來<sub>二</sub>母堂<sub>一</sub>之許、即日來<sub>二</sub>余居所之北隣<sub>一</sub>也、今日、二位中納言兼房參院、合戰之間、爲<sub>二</sub>雜人<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>隔<sub>二</sub>僕從<sub>一</sub>、乘物等、步行而迷出、當時在<sub>二</sub>小屋<sub>一</sub>〔可<sub>レ</sub>送〕乘物之由、以<sub>二</sub>雜色男<sub>一</sub>被<sub>二</sub>示送<sub>一</sub>、仍相<sub>二</sub>具牛車等<sub>一</sub>、送遣之處、尋失了云々、後聞步行來<sub>二</sub>法性寺僧都之許<sub>一</sub>云々、及<sub>二</sub>深更<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>歸<sub>二</sub>家<sub>一</sub>了云々、日來都籠居之人、何故今日被<sub>二</sub>院參<sub>一</sub>哉、尾籠之甚、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>嗚呼々々<sub>一</sub>也、定爲<sub>二</sub>天下之沙汰<sub>一</sub>歟、主上、實清卿奉<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>云々、未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其御在所<sub>一</sub>云々、今夜宿<sub>二</sub>大將亭<sub>一</sub>、

廿日、<sub>二</sub>庚天晴<sub>一</sub>、傳聞、入道關白自<sub>二</sub>去夜<sub>一</sub>參<sub>二</sub>宿五條亭<sub>一</sub>、義仲迎寄云々、花山大納言逃<sub>二</sub>向日野方<sub>一</sub>云々、或人云、雅賢被<sub>二</sub>擄取<sub>一</sub>了、又資時被<sub>二</sub>伐取<sub>一</sub>了云々、但不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>一定說<sub>一</sub>、後聞兩人共擄取在<sub>二</sub>武士之許<sub>一</sub>云々、廿一日、<sub>二</sub>亥天晴<sub>一</sub>、今日、定能卿參<sub>レ</sub>院了、親信卿相替退出云々、昨日靜賢法印又依<sub>レ</sub>召參院、入<sub>二</sub>見參<sub>一</sub>云々、又義仲內々示云、世間事申<sub>二</sub>合松殿<sub>一</sub>、每事可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>云云、頗靜賢不<sub>レ</sub>詳歟、今日申刻、攝政自<sub>二</sub>奈良<sub>一</sub>、前駐六人、共七八人濟々威光云々、愚案不<sub>二</sub>甘心<sub>一</sub>、忍<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>

入京、歟、余〔密々〕祈請云、今度義仲若行善政者、余當其仁、此事無極不祥也、仍今度事、不可入其、中、不可順義仲之由、聊謝佛神了、莫言々々、廿二日、壬子天晴、早旦大夫史隆職告送云、權大納言師家任內大臣、可爲攝政之由被仰下了云々、昨夜丑刻云々、及晚隆職來語云主上御閑院云々、今朝參新攝政、人々濟々、前攝政居所近々、事甚揭焉云云、余免今度事、第一之吉慶也、傳聞、座主明雲合戰之日、於其場被切煞了、又八條圓惠法親王、於華山寺邊被伐取了、又權中納言賴實卿、着直垂折烏帽子等、逃去之間、武士等不知爲卿相之由、引張天欲斧處、自雖稱其名、衣裳之體、非尋常之人、僞稱貴種也、猶可打頸之由、各沙汰之間、下男之中、有見知之者、稱實說之由、仍忽免死、武士等相共、送父大臣之許云々、大臣憂喜相半、與纏頭於武士等云々、抑、今度之亂、其詮只在明雲、圓惠之誅、未聞貴種高僧遭如此之難、爲佛法爲希代之瓊瑾、可悲々々、又人之運報、誠難測事歟、前攝政去七月亂之時、專可去其職之處、依法皇之範氣、無動搖、今度依何過怠、被奪所職哉、入道關白之許、送書

札、賀其〔子吉慶〕事、本意之由有報札、又以使者、遣義仲之許、是等爲遁當時之害也、又聞、大外記賴業子直講近業、中流矢失命云々、但未聞一定、仍問遣父眞人之許、今日送訪札於前攝政之許、此日依天下穰、無大原野祭、仍不奉幣、但神齋如恒、依殿曆說也、

廿三日、癸丑天晴、此日歸北家、傳聞、內大臣非解官、借用云々、凡關官、三也、所謂死關、〔轉任〕、辭退也、借官始之、〔于〕當今禪門之計可然々々、

廿四日、甲寅以待外記大夫政職、遣大外記賴業之許、吊其子親業安否、去十九日、於戰場天亡之由、有風聞之故也、

廿五日、乙卯陰晴不定、入夜小雨、定能卿自院退出、余謁之、語云、法皇殊無御歎息之氣、歟云々、此夜依方違參宿堂廊、

廿六日、丙辰天晴、今日有文書沙汰、師景文書也、大將、中將等、同會合、入夜歸家、早旦奈良僧正送書云、松殿邊事、最勝事也、凡世上〔事如夢、欲辭申〕、寺務、及僧正等如何、可計示云々、條々委細示返事了、廿七日、丁巳傳聞、平氏付室泊了云々、實否不知、今



日宗雅朝臣語、前攝政邊事、義仲大略申、所領等事、不可有相違之由云々、然而、又萬事松殿押沙汰云云、今日、佛殿聖人來、傳聞、任大臣事、天下鼓騷、禪門頗有耻色云々、

廿八日、戊午天晴、範季光長等來、語世上事等、前攝政家領等、不可有遠亂之由、義仲示本所云々、然間新攝政皆悉成下文、八十餘所賜義仲云々、狂亂之世也、傳聞、任大臣之次第、先入道關白、以少將顯家爲使、被觸內大臣云々、希異之又奇異、更非言語所及者歟、

廿九日、己未天晴、宰相中將定能卿來、只今歸參院云云、北山大納言頗成恐之由、示送〔大將女房〕之許云々、仍送訪札之報狀云、雖不入解官之中、被沒官所領、又被停止出仕云々、尤不便事歟、晚頃、大夫史隆職注送解官等解官、

中納言藤朝方、參議右京大夫同基家、  
太宰大貳同實清、大藏卿高階泰經、  
參議右大辨平親宗、右中將播磨守源雅賢、  
右馬頭源資時、肥前守同康綱、

伊豆守同光遠、兵庫頭藤章綱、

越中守平親家、出雲守藤朝經、

壹岐守平知親、能登守高階隆經、

若狹守源政家、備中守源資定、

左衛門尉平知康、大夫尉

此外衛府廿六人云々、

今日申刻、五位藏人親經爲院御使來、問云、御即位來月廿二日可被遂行也、而至十八日、爲穢氣、仍其後廿二日、被立伊勢幣、廿八日本儲日也、即位、此定可被定行之處、萬事難叶、仍被問踰年例於外記、天智、天武、皇極、陽成院等例也、或經兩三年、或及七八年云々、或又明年也、先例已存、明年可被行歟、可計奏云々、申云、文武以後數代、陽成院之外、未聞踰年例、仍無左右、歲中雖可被行、用途難叶、儀或可闕者非此限、就中近日之爲體、不可似常途例、況於有先規哉、延引叶時儀歟者、左大臣忠親、長方兩卿、皆申可被延引之由云々、入道關白頗被執歲內、院宣延引可宜云々、  
卅日、庚申天晴、重送使者賴業之許、先日以使吊其子近業事、付其返報、聊有申事、可謂忠言、仍爲感



其事、所<sub>レ</sub>仰遣<sub>二</sub>也、

## 十二月大

一日、辛酉天晴、今晚女房有<sub>二</sub>最吉夢、依<sub>二</sub>天下穢氣、不<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>心經、件寫爲<sub>レ</sub>法<sub>二</sub>樂春日<sub>一</sub>也、仍過<sub>二</sub>穢限<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>書也、傳聞、去廿一日候<sub>二</sub>院北面<sub>一</sub>之下<sub>二</sub>膳二人<sub>一</sub>也、公友也到<sub>二</sub>伊勢國<sub>一</sub>、告<sub>二</sub>示亂逆次第於<sub>二</sub>賴朝代官<sub>一</sub>、九郎、井齋院、大官親能等也即差<sub>二</sub>飛脚<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>賴朝之許<sub>一</sub>、待<sub>二</sub>彼飯來<sub>一</sub>、隨<sub>レ</sub>命可<sub>レ</sub>入京、當時九郎之勢、僅五百騎、其外伊勢國人等多相從云々、又和泉守信兼同以合力云々、信性關梨飯來、自<sub>レ</sub>山示<sub>二</sub>法印返事<sub>一</sub>、先日爲<sub>二</sub>余使<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>登山<sub>一</sub>也、

二日、壬戌天晴、傳聞、義仲差<sub>レ</sub>使送<sub>二</sub>平氏之許<sub>一</sub>、在播磨國室泊云々乞<sub>二</sub>和親<sub>一</sub>云々、又聞、去廿九日平氏與<sub>二</sub>行家<sub>一</sub>合戰、行家軍忽以敗績、家子多以被<sub>二</sub>伐取<sub>一</sub>了、忽企<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>云云、又聞、多田藏人大夫行綱引<sub>二</sub>籠城內<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>義仲命<sub>一</sub>云々、

三日、癸亥天晴、傳聞、義仲賜<sub>二</sub>一所<sub>一</sub>、領<sub>二</sub>八十六箇所<sub>一</sub>云云、又新攝政所始去廿八日云々、右中辨光雅爲<sub>二</sub>執事家司<sub>一</sub>云々、光長棄置歎如何、拜賀來八日云々、及<sub>レ</sub>晚隆職來、召<sub>レ</sub>前仰<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>、

四日、甲子天晴、定能卿退出、自<sub>レ</sub>院來語云、昨日義仲奏<sub>レ</sub>院曰、賴朝代官日來在<sub>二</sub>伊勢國<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>郎從等<sub>一</sub>追落了、其中爲<sub>レ</sub>宗之者一人、乍<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>掬取了云々、又語云、院中警固、近日陪<sub>二</sub>於日來<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>女車<sub>一</sub>、マテ加<sub>二</sub>檢知<sub>一</sub>云々、今日終日寫<sub>レ</sub>經、

五日、乙丑天晴、故女院御忌日也、早旦伴<sub>二</sub>大將<sub>一</sub>參<sub>二</sub>御墓所<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>養舍利<sub>一</sub>、及昨日所<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>書之諸真言并壽量品<sub>一</sub>、復等、僧<sub>二</sub>三口<sub>一</sub>、事了引<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>九條御堂<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>未刻<sub>一</sub>僧徒參入、籠僧六口也、但忠立律師不參、仍諸加<sub>二</sub>關請<sub>一</sub>一口、又以<sub>二</sub>觀明法橋<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>上薦也、公卿右大將一人也、布施取衣冠、但無<sub>二</sub>堂童子<sub>一</sub>、略儀也、講演了、大將取<sub>二</sub>被物<sub>一</sub>、其後彌勒講<sub>二</sub>口<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>日來<sub>一</sub>、其後少<sub>二</sub>所作<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>日沒<sub>一</sub>退出、傳聞、平氏猶在<sub>二</sub>室<sub>一</sub>、南海山陽兩道大略同<sub>二</sub>于平氏<sub>一</sub>了云々、又賴朝與<sub>二</sub>平氏<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>同意云々、平氏竊奏<sub>レ</sub>院有<sub>二</sub>可許<sub>一</sub>云々、又義仲差<sub>レ</sub>使示<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>同意<sub>一</sub>之由於平氏上云々、平氏不<sub>二</sub>承引<sub>一</sub>云々、今日於<sub>二</sub>御堂<sub>一</sub>、光長語云、新攝政執事親經、年預光雅、廐上司資泰朝臣云々、他事未<sub>レ</sub>聞云々、又累代日記<sub>二</sub>等<sub>一</sub>、併在<sub>二</sub>鴨院<sub>一</sub>云々、

〔六日、丙寅天晴、〕  
七日、丁卯天晴、早旦佛殿聖人來、相次範季朝臣來、語<sub>二</sub>

世上事、平氏一定可入洛之由、能圓法眼告送云々、與義仲、和平哉否、未事切云々、今日又中御門大納言被來、余謁之、重喪以後、出仕之後、今日始被來也、又五位藏人親雅來、傳院宣云、朔旦叙位欲合行御即位〔叙位〕之處、即位延引、爲之如何者、申云、賜下名之儀、任先例可被行者、被付行正月叙位、七日可賜也、准臨時叙位、不可有賜下名之儀者、歲內可被行歟、可依下名之儀也者、傳聞、與平氏、和平之事、義仲內々雖骨張、外相示不受之由云々、及晚宰相中將告送云、來十日義仲奉具法皇、可向八幡邊、自彼爲討平氏、可赴西國云々、又範季告送同狀、凡不能左右事歟、或云、明日可有御幸云々、然而謬說歟、

八日、戊辰天晴、送使者於靜賢之許、問御幸次第返事云、凡不能左右、一定被仰下了、於今者無異儀、今一重滅亡了、京都又不可安堵、女房等少々、可遣遠所歟云々、凡京中上下周章無恒云々、又宰相中將退出、自院依可參御幸、爲出立一所退出也、伴相公室家、此兩三日所寄宿女院、新御所北對邊也、相公語云、今日有御卜、被問御幸之吉凶云

云、雖占申不快之由、不及沙汰云々、然者又不可有御卜歟、不足言云々、

當時御所五條殿、恠異頻示、仍欲有遷御八條院之處、義仲不受之間、忽八幡御幸之儀出來了云々、凡被忌恠異之條者、有若亡事歟、於今者、法皇〔之〕御身、何因可被惜思食哉、可彈指々々、余女房、大將妻等、密々明曉可遣南都之由、內々致其沙汰、然而、事猶非穩便、仍尋伺院邊之處、十日御幸頗不定、又公卿等參入、被尋問御幸事之由、乘燭以後聞及之、又縱雖有御幸、法皇之外他人不可參、不可有行幸、入道關白已下、諸卿留洛中、万事可致沙汰、爲不損亡京都、申行御幸之由、義仲令稱云々、仍明曉下向停止了、且又加卜筮之處、頗不快之故也、又左少辨光長同申、忽不可然之由也、及亥刻、或人告云、明日可攻延曆寺云々、驚奇無極、凡日來山門衆徒蜂起、甚以不被甘心、世之爲時、訴詔遺恨も可有事也、近日之事、只如不知如不見にて可有之處、大衆蜂起之條、還爲所可爲後鑒之耻歟、當時又依此蜂起、可被寄攻云々、誠台嶽之佛法滅盡之期至歟、可悲々々、賴輔入道今

日下向南都了、

六百六十二

九日、己天陰頗風雪、傳聞、昨日左大臣、并忠親卿參院、以成範卿被問左大臣云、義仲申云、爲討西國可罷向也、而法皇御在京、非無不審、山門騷動之由風聞、仍奉具法皇欲下向者、此事如何、被行御卜之處、申不快之由、爲之如何、左大臣申云、御占事不可及沙汰、義仲所申可然、早可有御幸云々、又以靜賢法印被問忠親卿、申狀同左大臣、但竊申云、與平氏和平之儀可被仰義仲也云々、然而件事、義仲太不請之由表外相云々、仍不及被仰下云々、而問、長方卿私以使者觸義仲云、穢中八幡御幸如何、縱雖無御參社、猶神慮有恐、太以不可然云々、因茲忽然而延引、穢以後可給候御幸之由定仰了云々、猶長方賢名之士也、今日、山法印白地被下京、大衆蜂起熾盛云云、實只天台之佛法可滅亡之時也、傳聞、俊堯被輔座主了云々、

十日、庚天晴、法印被歸登山上了、百日之入堂、無動寺也、退轉依爲遺恨、以隆憲觸義仲蒙許被登了、是又恐身之盛也、昨日下午京、依世間物恐、下官之

邊事不審之故下京云々、又山門既搆城郭、仍範城中之條、甚不穩便、加之已可攻山上之由風聞、仍且可被下京之由、余所示送也、而追討山門之儀、又忽不可然云々、仍被觸義仲之處、如案有許、縱又雖有內心之不許、此願已難退之故、不願萬事歸山、下官相共能令評議者也、山王大師有知見證明歟、大願之趣具難注錄者歟、只佛法興隆、政道反素之趣也、法印、下官、觀性三人之大願、已積年序了、今之入堂已祈請此事之故也、仍百千之事、不願、只奉任冥衆而已、此夜被行臨時除目、

參議藤俊經、

藤隆房、

即任右武、

藤兼光、

左大辨兼光、

左中辨光雅、

右中辨行隆、

權光長、

左少辨源兼忠、

右少辨平基親、右中將忠良、

義仲辭退左馬頭、

又被仰下天台座主俊堯、

僧正、云々、

十一日、辛天晴、早旦、法印示送云、無爲無事登山了、

夜內護摩以下所作等悉勤行了、爲悅不少云々、大衆

事立合義仲之儀、停止、不可用座主之條、決

定、可熾盛云々、

十二日、壬申天晴、及晩雨下、傳聞、山大衆蜂起、和平相半云々、五位藏人親雅、可<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>申荷前事<sub>一</sub>之由、催<sub>二</sub>右大將、申<sub>二</sub>所勞之由<sub>一</sub>了、

十三日、癸酉陰晴不定、時々風吹、傳聞、平氏入洛來廿日云々、或又明春云々、與<sub>二</sub>義仲<sub>一</sub>和平事一定云々、

〔十四日、甲戌〕

十五日、乙亥天晴、入<sub>レ</sub>夜向<sub>二</sub>法性寺<sub>一</sub>、宿<sub>二</sub>最勝金剛院堂廊<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>春節<sub>一</sub>也、女房同相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>之、主稅助安倍晴光來、示<sub>二</sub>天變之事<sub>一</sub>、

十六日、丙子天晴、早旦見<sub>二</sub>廻東北谷<sub>一</sub>、井南隄等、辰刻許歸<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>、

〔十七日、丁丑〕

〔十八日、戊寅〕

十九日、己卯陰晴不定、及晩小雨、參議右大辨兼光朝臣爲<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>來、依<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>請車<sub>一</sub>、借<sub>二</sub>定能卿車<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>之、密々自<sub>二</sub>兼光之許<sub>一</sub>返遣云々、是雖<sub>二</sub>非禮<sub>一</sub>、近日候天下每事、別段事歟、余又不<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>車之故也<sub>一</sub>、

此夜被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>朔旦叙位<sub>一</sub>、須<sub>二</sub>十一月中被<sub>一</sub>行之處、依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>五節<sub>一</sub>、御即位叙位之次可<sub>二</sub>合行<sub>一</sub>之由、豫有<sub>二</sub>議定<sub>一</sub>、是即位之次、爲<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>下名<sub>一</sub>也、而依<sub>レ</sub>混<sub>二</sub>合嘉承之

例、亮闇之時例、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>憚、只各別行<sub>二</sub>叙位<sub>一</sub>、不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>下名<sub>一</sub>之儀<sub>上</sub>之由、法皇有<sub>レ</sub>仰云々、然間大事出來、仍合<sub>二</sub>行即位叙位<sub>一</sub>之條、無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>之處、即位又延引、若明春叙位之次、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>加行<sub>一</sub>歟、將又歲內行<sub>レ</sub>之、先日法皇仰不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>下名<sub>一</sub>之儀<sub>上</sub>歟之由、豫有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>、遂歲內所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行也、執筆左大辨經房卿、此日、山大衆和平、奉<sub>レ</sub>振<sub>二</sub>下神輿<sub>一</sub>了云々、無動寺法印密々被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>送大衆不可<sub>レ</sub>發之子細於<sub>二</sub>永辨智海等之許<sub>一</sub>、内々依<sub>二</sub>余示<sub>一</sub>也、各有<sub>二</sub>甘心之色<sub>一</sub>云々、今日早旦奉<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>春日料心經<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>穢限過<sub>一</sub>也、

廿日、庚辰天晴、早旦見<sub>二</sub>聞書<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>、光長叙<sub>二</sub>四位<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>請大將袍<sub>一</sub>賜了、今明物忌也、今晚、智詮阿闍梨進<sub>二</sub>發熊野<sub>一</sub>、余及大將沐浴潔齋禮<sub>レ</sub>之、今日、左大將送<sub>レ</sub>札、被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>世上及自身之事等<sub>一</sub>、粗有<sub>二</sub>述懷之狀<sub>一</sub>、其次送<sub>二</sub>一首<sub>一</sub>、

あらし風ふきやをやむとまつほとに  
もとの心のとゝこほりぬる

返歌

われもさそ風にとゝろくかけはしを  
あやふむほとにとゝこほりぬる



天下騷亂之後、五ヶ年于茲、心雖慕一實之道、首猶梳雙華之鬢、卽期靜謐之時、爲修念佛之行也、以恩心察賢慮、猶豫宜歟、

廿一日、辛巳天晴、此夜被行京官除目云々、執筆左大

辨一夜儀云々、今日送心經一卷、復十返於覺乘法眼之

許、於社頭爲奉供養也、今日奉讀心經千卷、

廿二日、壬午天晴、每月書寫心經十三卷、復一卷相副小

布施、遣覺乘法眼之許也、是每年之勤也、於社頭

所奉供養也、今日又自奉讀心經千卷、奉法樂春

日御社、信心殊發、利生病焉者歟、未刻見聞書、左京

大夫清通、侍從其子、右京大夫季能、中納言隆忠、右衛門

督家通、左兵衛督實守、此外不覺悟、長方卿賜備中

國也、元淡路也、今日下名云々、今夜子刻大地震、近代必有

驗、可恐々々、入夜外記持來闕官帳云、昨日自

大外記師尙之許、送遣者、而參陣之間、不知給今日

除目、了退出之時見之、所持參也云々、依無先

例返給了、仰甚奇怪之由、今夜有燒亡、八條院之

邊、故家朝後家云々、

廿三日、癸未天陰、午後雨降、入夜殊甚、早旦見下名聞

書、去夜被行云々、今日、頭中將通資送札於大將之許、催可

參臨時祭之由、其上所謹上云々、須書進上、仍返札於使了、今日、宗家卿被來、

廿四日、甲申天晴、一昨日所遣覺乘許之心經、使者遲

持向、昨日爲衰日、今日可奉供養、所示送也、仍今

日且聞神事、已刻、大外記賴業着布衣密々來、談

自身及世上事、今日晚頭始可出仕云々、賴業云、西

海主君入御者、當今如何、若六條院之體歟云々、余

〔聊〕示所思、賴業有甘心之色、此日、頭中將通資朝

臣送札遣基輔、示云、才御笏不慮有紛失事、明日臨時

祭料、可尋進者、申云、元不相持、又無可尋得之

力者、

廿五日、乙酉天晴、此日、臨時祭也、使參議右兵衛督隆房

朝臣、公卿忠親卿以下五六人參入云々、此日恩息小兒

密々參詣春日御社、凡余子息七歲以前可令參春

日之由、有所願之故也、

廿六日、丙戌天晴、行向大將方、入夜歸來、藏人少輔親

經來、問云、崇德院可被立神祠之由有、其沙汰、

其所如何、可被申者、院宣云々、申云、此事先日依御占不

快、止神祠、可爲改葬之由承之、今仰相違如何、

但此條和說也、於其所者、暗難計申、若無一定之

〔地〕者、可<sub>レ</sub>然之所兩三所相定、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>御占<sub>一</sub>歟、  
廿七日、<sub>亥</sub>丁法皇正月十三日可<sub>レ</sub>幸<sub>二</sub>天王寺<sub>一</sub>云々、此事  
親信卿、及業忠等、爲<sub>レ</sub>追從義仲<sub>二</sub>所<sub>一</sub>申給<sub>二</sub>云々、  
廿八日、<sub>子</sub>戊此日、攝政初度上表云々、又有<sub>二</sub>不堪荒奏<sub>一</sub>  
云々、右少辨基親爲<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>來、權中納言隆忠拜賀云  
云、定能卿來、

廿九日、<sub>丑</sub>巳天晴、大夫隆職來、談<sub>二</sub>世上事<sub>一</sub>、平氏義仲和  
平、一定之由、以<sub>二</sub>忠清法師<sub>一</sub>說聞了云々、今日和奏云  
云、左大臣參陣、有<sub>二</sub>不堪定<sub>一</sub>云々、

卅日、<sub>寅</sub>庚天晴、今日、熊野御燈明日也、爲<sub>二</sub>大將使<sub>一</sub>、智詮  
阿闍梨參入也、仍精進潔齋、追儼如<sub>レ</sub>例〔云々〕、

右壽永二年<sub>卯</sub>辛冬此一冊墨付八拾八枚者以三緣道教  
公眞筆松殿右幕下道昭卿被書寫之者也

慶安二年<sub>丑</sub>己正月仲旬陶化翁記之

玉葉卷第三十九終

## 正 誤

初頁より十六頁迄は新任校訂者の校閲を經ざる爲め、又六〇〇頁以下は印刷の切迫により僅かに初校にて用を達せし爲め、原稿の誤を其儘傳へたる所多し、今略ぼ是を左に正す、猶此外にも多かるべけれど、其は他日を期し第一巻のと共に一括めにして正誤を出す考なれば讀者此旨を諒せられたし、

猶初頁一十六頁中には點、連讀線の誤脱等少からざれど全煩を  
恐れて是を省けり、

恐れて是を告げり、

二頁 上段 行  
一六

宜仁門

正  
行

八 上 三

若官人傳仰可撤  
軾、富之山、時直參

若官人修<sub>三</sub>仰可<sub>レ</sub>徹<sub>レ</sub>  
寫之由<sub>二</sub>時直參<sub>レ</sub>紙<sub>一</sub>

六五 上上 一九

檢之

檢之

六九 上下 七八

有蓋

盡、有  
里

九上二

欲下公卿給

欲下公卿給

同同 下同 一一三九

仰二追自、是

且仰三追自是

二〇 下 一 八 一

歐歌  
省

謳歌  
着

六五 上上 四六

(子孫)

雨

二七同 二上下 二九九

整蠱！

張代網

二九 下下 一五一

文殊不動明王

文殊，不動明王

九六 下下 一五八

然而且

而且

八 下 八

陳宜

官

山田安榮校訂  
矢野太郎

九百六十六



# 玉葉第三目錄

卷	頁數
卷第四十	一
卷第四十一	二十八
卷第四十二	六十一
卷第四十三	百一
卷第四十四	百三十三
卷第四十五	百七十八
卷第四十六	二百二十二
卷第四十七	二百六十七
卷第四十八	三百九
卷第四十九	三百四十八
卷第五十	三百八十
卷第五十一	四百十六
卷第五十二	四百三十二
卷第五十三	四百七十四
卷第五十四	五百六
卷第五十五	五百三十四
卷第五十六	五百五十八

## 卷第五十七

文治六年(建久元年)正月—五月

五百八十五

## 卷第五十八

建久元年七月—十二月

六百二十

## 卷第五十九

建久二年正月—三月

六百四十五

## 卷第六十

建久二年四月—五月

六百七十四

## 卷第六十一

建久二年六月—九月

七百七

## 卷第六十二

建久二年十月—閏十二月

七百三十二

## 卷第六十三

建久三年正月—十二月

七百七十五

## 卷第六十四

建久四年正月—十二月

八百十五

## 卷第六十五

建久五年正月—九月(五六月缺)

八百五十五

## 卷第六十六

建久六年正月—十一月  
建久七年正月—十二月  
建久八年正月—四月  
建久九年正月—六月  
建久十年正月  
正治二年正月—十二月

八百九十四

## 玉葉第三目錄終



玉葉

卷第四十

自壽永三年正月  
至閏六月

壽永三年春夏

四月十六日甲戌改元、  
爲元曆元年也、

正月

一日、卯陰、拂曉、四方拜如常、今日無院拜禮、院御所不  
及改、又無三小朝拜、爲三代始、而依三日次不レ宜也、四、  
未刻、大將如例、參院、即參內、晚頭攝政參入、其後公  
卿着陣、節會如レ例、內辨皇后宮大夫實房卿、外辨上首  
權中納言長方卿云々、大納言忠親並此大將等、爲レ見  
內辨作法不レ着三外辨云々、雖三不當一又近例云々、亥  
刻、大將歸來語三今日事、具召三大將レ記レ之、抑依レ爲三  
御忌月、不レ奏三音樂並國栖笛聲一、此事先帝御時被三宣  
下一了、當今又可レ同、而重可レ有三宣下一哉否、大將成三  
不審、問三遣大外記師尙許一之處、事理重不レ可レ被レ仰  
之上、延久元年例又不レ然云々、今日又不レ被レ仰云々、  
然而諸司存而不レ奏也、今日、手水陪膳季長朝臣、節  
供、光長朝臣勅、此日、右少辨基親來、入レ夜大風降雨、  
又雷鳴、

二日、壬辰、終日降雨、大外記師尙來、手水陪膳範季朝臣、  
三日、癸巳、陰晴不定、手水陪膳以政朝臣、今日、右大辨  
兼光來、辨少納言小々來、凡今年無三出仕之人云々、  
此日、賴業隆職等來、余以レ人元日節會外辨外記不レ候  
事問レ之、申云、外記國栖之時參會、外辨諸司役問レ史  
云々、曾無三先例、准三他事、有三此沙汰一云々、內辨以三  
職事、奏三事由云々、余案レ之、（尤）不審事也、  
四日、甲午、陰晴未レ定、定能卿來、伴卿今年不三出仕一、只  
着三布衣一祇三候院云々、兼雅親信等卿同前云々、自  
院預三給犬三疋於中將一、今日、定能卿相具所レ來也、  
事甚奇異云々、然而不レ能三返上一、凡法皇爲レ體、始而不  
可三云々一、  
傳聞、賴朝今日出門、決定可三入洛云々、虛言歟、或  
人云、平氏來八日可三入洛云々、此事不レ被三信用一事  
歟、  
五日、乙未、陰晴不定、參御堂、依三恒例彌勒講一也、此

間、前源中納言來、仍大將相共令着廣底座、余在中講演了、置布施公卿等不取之之後、余出佛前、堂中他招入納言、謁談移刻、語云、賴朝之軍兵在墨俣、今月中可入洛之由所聞也、及三日沒退出了、余歸宅之後、右中辨行隆來、余召簾前、問大佛之間事、左御手已率鐙了、凡今年內可終功之由、聖人所申也、又云、宋朝鑄師之外、爲聖人沙汰而加河內國鑄師、宋人雖有不快之色、誘彼是、於今者和顏了云、此次、行隆語云、我子息不論男女、有靈魂託事、及大亂之時、必有此事、所謂崇德院并宇治左大臣等靈魂也、所言之事、如指掌、皆以符合、可謂奇異、此事敢不口外云々、余問云、當時有其事哉、答云、近則一昨日三日、有託言事、其趣、西海主再可歸都城、日本國神明併有加護、神璽寶劍、安穩可被奉相具也、而奉相從輩之中、無可量重事之器、仍恐自有乖神慮之事歟、若然者三神欲紛失、可悲云々、但十之八九有歸都之運云々、又云、凡武士等可滅亡之期也、於欲亂天下之意趣、如思遂了、於今者天下屬靜謐、我等欲鎮居云々、但於被立神祠者、全非所望、讚州墓所之邊可

立一堂、又可修佛事云々、又云、義仲不可久、賴朝又可然、平氏若有運歟、極可依其所行云云、即及亥終退出了、此託言事、爲後鑒記之、可謂奇異歟、今日依新甘攝政衰日、無叙位云々、六日、丙天晴風吹、入夜刑部卿賴輔來、此日叙位云云、或人云、坂東武士已越墨俣入美乃了、義仲大懷怖畏云々、今日向大將第、及深更歸來、七日、丁天晴、早旦見叙位聞書、甘攝政叙正二位、正三位也、又松冠者、去年直叙正下、今度叙四位、今日、白馬節會如常云々、大將參入、取左右白馬奏、內辨皇后宮大夫房、外辨上大將云々、今日、松殿中納言隆忠出仕云々、頗有未練之氣云々、八日、戊傳聞、義仲與平氏和平事已一定、此事自去年秋比連々謳歌、有言機々異說、忽以一定了、去年月追之比、義仲鑄一尺之鏡面、奉顯入幡或說、御正體、裏鑄付起請文云々、遣之、因茲和親云々、十日、庚入夜人告云、明曉、義仲奉具法皇、決定可子向北陸、公卿多可相具云々、是非浮說云々、十一日、辛朝間雨下、午後天晴、此日、密々女房等道



南京、依<sub>二</sub>世間物念<sub>一</sub>也、基輔母尼下<sub>二</sub>向南都<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>之爲名、今晚、義仲下向忽停止、依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>物告<sub>一</sub>也云々、來十三日平氏可<sub>二</sub>入京、預<sub>二</sub>院於彼平氏、義仲可<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>向近江國<sub>一</sub>云々、範季爲<sub>二</sub>院御使<sub>一</sub>來、問<sub>二</sub>崇德院佛祠之間事<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>之後、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之由申了、

十二日、<sub>寅</sub>朝問雨下、及<sub>レ</sub>晚大風、此日、大將女房又下<sub>二</sub>向南都<sub>一</sub>、但賴輔入道日來在<sub>二</sub>中川<sub>一</sub>也、<sub>山寺</sub>遣<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>也、傳聞、平氏此兩三日以前送<sub>二</sub>使義仲之許<sub>一</sub>云、依<sub>二</sub>再三<sub>一</sub>之

起請、存<sub>二</sub>和平義<sub>一</sub>之處、猶奉<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>法皇、可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>北陸<sub>一</sub>之由聞<sub>レ</sub>之、已爲<sub>二</sub>謀叛之儀<sub>一</sub>、然者同意之儀可<sub>二</sub>用意<sub>一</sub>云云、仍十一日下向忽停止、今夕明日之間、可<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>第一

之郎從<sub>二</sub>字稱<sub>一</sub>、即召<sub>二</sub>返院中守護兵士等<sub>一</sub>了云々、

十三日、<sub>卯</sub>天晴、今日自<sub>二</sub>拂曉<sub>一</sub>至<sub>二</sub>未刻<sub>一</sub>、義仲下<sub>二</sub>向東

國事、有無之間變々七八度、遂以不<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>、是所<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>

近江<sub>一</sub>之郎從以<sub>二</sub>飛脚<sub>一</sub>申云、九郎之勢僅千餘騎云々、

敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>敵<sub>二</sub>對義仲之勢<sub>一</sub>、仍忽不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御下向<sub>一</sub>云

云、因<sub>レ</sub>之下向延引云々、平氏一定今日可<sub>二</sub>入洛<sub>一</sub>之處、

不<sub>レ</sub>然之條有<sub>二</sub>三之由緒<sub>一</sub>云々、一ハ義仲奉<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>院、可

向<sub>二</sub>北陸<sub>一</sub>之由風聞之故、二ハ平氏遣<sub>二</sub>武士於丹波國<sub>一</sub>、

令<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>郎從等<sub>一</sub>、仍義仲又遣<sub>二</sub>軍兵<sub>一</sub>令<sub>二</sub>相防<sub>一</sub>、然間、平氏

一定和平了、仍事一定之後、遣<sub>二</sub>脚力<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>引退之由仰遣之處、猶企<sub>二</sub>合戰<sub>一</sub>、平氏方郎從十三人之首已梟了云云、因<sub>レ</sub>茲置<sub>レ</sub>心遲怠、三ハ行家出<sub>二</sub>逢渡野陪<sub>一</sub>テ、一箭可射之由令<sub>レ</sub>稱云々、因此事遲々、縱橫之說雖<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>取信、依<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>浮說<sub>一</sub>記<sub>レ</sub>之、

十四日、<sub>辰</sub>天晴、傳聞、自<sub>二</sub>大神宮<sub>一</sub>、恠異之由、注<sub>二</sub>進義仲之許<sub>一</sub>、其狀云、

一正月一日、雷電之中間、自<sub>二</sub>辰巳<sub>一</sub>指<sub>二</sub>戌亥方<sub>一</sub>天、光物千萬、光天渡了云々、

一大神宮<sub>ヨリ</sub>北<sub>二</sub>向天<sub>一</sub>、箭四筋被<sub>レ</sub>放了、事一定也、

一雷電二日被<sub>レ</sub>打<sub>二</sub>寄蛭<sub>一</sub>、真虫、永松栗真庄、安乃々津、

惣テ、津々ニ藻被<sub>レ</sub>纏テ、或二三石、或四五石、每津

浦有<sub>二</sub>皆生<sub>一</sub>ニ、其後經<sub>二</sub>兩三日<sub>一</sub>テ、紛失了、凡昔、

今、真虫海<sub>ヨリ</sub>打上ラ、事ハ、伊勢國不<sub>レ</sub>候、件蛭

自<sub>二</sub>海東<sub>一</sub>寄云々、

一天下大事チカツキ候ニ、尤御用意有テ、御祈可

候云々、是神官注文云々、

或人云、關東飢饉之間、上洛之勢不<sub>レ</sub>幾云々、實否難

知歟、申刻、人傳云、明後日義仲奉<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>法皇<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>

近江國<sub>一</sub>云々、事已一定也云々、

十五日、<sup>乙</sup>天晴、早旦人告云、御幸停止了、依<sup>ニ</sup>御赤痢病也云々、義仲獨可<sup>レ</sup>向云々、或云、不可<sup>レ</sup>向云々、隆職來語云、去夜無<sup>ニ</sup>御齋會內論義、依<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>即位以前也云々、又云、義仲可<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>征東大將軍之由、被<sup>レ</sup>下宣旨<sup>ニ</sup>了云々、今日、家節供闕如、余不<sup>レ</sup>致<sup>ニ</sup>沙汰、如此事非、可<sup>レ</sup>執思<sup>ニ</sup>之身之故也、

十六日、<sup>丙</sup>雨下、自<sup>ニ</sup>去夜<sup>ニ</sup>京中鼓願、義仲所<sup>レ</sup>遣<sup>ニ</sup>近江國之郎從等、併以歸洛、敵勢及<sup>ニ</sup>數萬、敢不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>敵對之故云々、今日奉<sup>レ</sup>具<sup>ニ</sup>法皇、義仲可<sup>レ</sup>向<sup>ニ</sup>勢多<sup>ニ</sup>之由風聞、其儀忽變改、只遣<sup>ニ</sup>郎從等<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>元警固、雖中可<sup>レ</sup>祇候、又分<sup>ニ</sup>遣軍兵於行家許<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>追伐云々、凡自<sup>ニ</sup>去夜<sup>ニ</sup>至今日未刻、議定變々及<sup>ニ</sup>數十度、如<sup>レ</sup>反掌、京中周章無<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>于取<sup>レ</sup>喻、然而及<sup>レ</sup>晚頗落居、關東武士少少付<sup>ニ</sup>勢多<sup>ニ</sup>云々、

十七日、<sup>丁</sup>朝間天陰、午後頗晴、

十八日、<sup>戊</sup>申

十九日、<sup>己</sup>酉 昨今天下頗又物騒、武士等多向<sup>ニ</sup>西方、爲<sup>レ</sup>討<sup>ニ</sup>行家<sup>ニ</sup>云々、或又在<sup>ニ</sup>宇治、爲<sup>レ</sup>防<sup>ニ</sup>田原地手<sup>ニ</sup>云々、義廣<sup>三郎</sup>爲<sup>ニ</sup>大將軍<sup>ニ</sup>云々、

廿日<sup>庚</sup>天晴、物忌也、卯刻、人告云、東軍已付<sup>ニ</sup>勢多<sup>ニ</sup>、未

渡<sup>ニ</sup>西地<sup>ニ</sup>云々、相次人云、田原手已着<sup>ニ</sup>宇治<sup>ニ</sup>云々、詞未<sup>レ</sup>訖、六條川原武士等馳走云々、仍遣<sup>レ</sup>人令<sup>レ</sup>見之處、事已實、義仲方軍兵、自<sup>ニ</sup>昨日<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>宇治、大將軍美乃守義廣云々、而件手爲<sup>ニ</sup>敵軍<sup>ニ</sup>被打敗了、東西南北散了、即東軍等追來、自<sup>ニ</sup>大和大路<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>京、<sup>於<sup>ニ</sup>九條川原邊<sup>ニ</sup>者、一切無<sup>ニ</sup>損<sup>ニ</sup>也、</sup>不<sup>レ</sup>廻<sup>レ</sup>踵到<sup>ニ</sup>六條末了、義仲勢元不<sup>レ</sup>幾、而勢多田原分<sup>ニ</sup>二手<sup>ニ</sup>、其上爲<sup>レ</sup>討<sup>ニ</sup>行家、又分<sup>レ</sup>勢、獨身在京之間遣<sup>ニ</sup>此殃、先參<sup>ニ</sup>院中<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>御幸<sup>ニ</sup>之由、已欲<sup>レ</sup>寄<sup>ニ</sup>御輿之間、敵軍已襲來、仍義仲奉<sup>レ</sup>奔<sup>ニ</sup>院、周章對戰之間、所<sup>ニ</sup>相從<sup>ニ</sup>之軍僅卅騎、依不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>敵對、不<sup>レ</sup>射<sup>ニ</sup>一矢<sup>ニ</sup>落了、欲<sup>レ</sup>懸<sup>ニ</sup>長坂方、更歸爲<sup>レ</sup>加<sup>ニ</sup>勢多手<sup>ニ</sup>赴<sup>ニ</sup>東之間、於<sup>ニ</sup>阿波津野邊<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>伐取<sup>ニ</sup>了云々、東軍一番手、九郎軍兵加千波羅平<sup>ニ</sup>三云々、其後手以群<sup>ニ</sup>參院御所邊<sup>ニ</sup>云々、法皇及祇候之輩、免<sup>ニ</sup>虎口、實<sup>ニ</sup>三寶之冥助也、凡日來、義仲支度燒<sup>ニ</sup>柳京中<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>落<sup>ニ</sup>北陸道、而又不<sup>レ</sup>燒<sup>ニ</sup>一家、不<sup>レ</sup>損<sup>ニ</sup>一人、獨身被<sup>ニ</sup>梟首<sup>ニ</sup>了、天之將<sup>ニ</sup>逆賊<sup>ニ</sup>宜哉々々、義仲執<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>後、經<sup>ニ</sup>六十日、比<sup>ニ</sup>信賴之前蹤<sup>ニ</sup>猶思<sup>ニ</sup>其晚、今日、卿相等雖<sup>ニ</sup>參院<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>門中<sup>ニ</sup>云云、入道關白以<sup>ニ</sup>顯家<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>使者、兩度上書、共無<sup>レ</sup>答、又甘攝政乘<sup>ニ</sup>顯家車<sup>ニ</sup>參入、被<sup>レ</sup>追歸<sup>ニ</sup>了云々、可<sup>レ</sup>彈指<sup>ニ</sup>々

々々、余依風病不參入、大將又病惱、仍不參也、爲恐々々、

廿一日、辛亥天晴、物忌如昨、或人諫云、甘攝政不可、

安堵、下官可出馬云々、余案之、末世之作法進退、

有恐天〔下〕不并國之條、雖似有憑、政道之

治亂、偏可在君之最、我君治天下之間、亂亡不可

止、不肖之者、不當委任之仁、恐必有後悔歟、加

之、微臣於社稷不惜身命之條、佛天可有知

見、然則若有世之運者、天不可并士、無運者又

所不欲、一旦之浮榮也、不如只奉仕伊勢太神宮

春日大明神、仍一言不上聞、諫人云、甚強者、及晚有

召、定長奉行、有可被風病無術、事非矯矯、仍申其子

細了、今日、大外記賴業來、談世上事、及晚大夫史

隆職來、洗浴之間不謁之、或人云、前攝政可還補

之由云々、法皇之愛婦也、尤可然也、彌下官不能出

詞、努力々々、

廿二日、壬子天晴、風病聊有減、仍愁參院、以定長被

尋問事五箇條、

一無左右可被討平氏之處、三神御坐彼手、此

條如何、可計奏者、兼又相副公家之使者於追討

使下遣如何云々、

申云、若可有神鏡劍璽安全謀者、忽追討不可

然、遣別御使可被語誘歟、又賴朝之許、同

遣御使可被仰合此子細歟、被副御使於

追討使之條、甚無所據歟、

一可被渡義仲首哉否如何、

申云、左右其不可爲事之妨、但理之所出、尤

可被渡歟、

一賴朝之賞如何、

申云、可被仰依請之由歟、然者又若存無

恩賞之由歟、暗被行、被仰其由、何事有哉、

於其官位等事者、非愚案之所及者、

一賴朝可上洛哉否事、

申云、早可令上洛、殊可被仰下、於參否者

不可知食、早速可遣召也者、

一御所事如何、

申云、早々可有渡御他所、其所、八條院御所

外、無可然之家歟、

定長語云、昨日左大臣、左大將、皇后宮大夫、堀川大納

言、押小路中納言、左右大辨等參入有議定、各申狀大

概同<sub>二</sub>下官申狀<sub>一</sub>、但平氏追討之間事、左大臣左大將猶不知<sub>二</sub>如何<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>追討<sub>一</sub>之趣歟、是則敬慮如此<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、  
他事、定能  
稱密示<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、各被<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>形勢<sub>一</sub>也、不可<sub>レ</sub>然々々々、又被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>首事、長方云、若被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>遠國之賊首<sub>一</sub>事歟云々、  
此本  
可<sub>レ</sub>然又賞事、左大將云、任<sub>二</sub>討<sub>一</sub>惠美大臣之時例、被<sub>レ</sub>叙<sub>二</sub>三品可<sub>レ</sub>宜云々、  
此事又  
此外事一同云々、退出了之後、人告云、攝政內大臣、各如<sub>レ</sub>元之由被<sub>レ</sub>仰下<sub>二</sub>了云、天雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>弄、國后弄<sub>レ</sub>之、末世受生之恨、尋<sub>二</sub>宿業<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>報而已、

廿三日、丑天晴、觀性法橋來、又範季朝臣來、語云、平氏猶可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>追討<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>仰下<sub>二</sub>了云々、神鏡劍聖事、猶不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>重歟、此條神慮有<sub>レ</sub>恐、爲<sub>レ</sub>之如何々々、大外記賴業注進云、昨日被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>事等、此日未刻、大地震、

廿四日、寅天晴、大將所勞殊增、自<sub>二</sub>一昨日<sub>一</sub>有<sub>二</sub>病氣<sub>一</sub>、昨今不快也、仍語<sub>二</sub>佛殿聖人<sub>一</sub>受戒、又召<sub>二</sub>泰茂<sub>一</sub>書<sub>二</sub>除病之符<sub>一</sub>、又令<sub>レ</sub>占<sub>二</sub>加持吉凶<sub>一</sub>、寂吉云々、又春日御社、令<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>二々條願<sub>一</sub>、  
一自今年、每年三々年可<sub>二</sub>金詣<sub>一</sub>事、於<sub>二</sub>又奉<sub>一</sub>造一尺三寸不空絹索觀音像、可<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>長日供<sub>一</sub>之由、同立<sub>レ</sub>之、合三種也、令<sub>二</sub>佛殿聖人<sub>一</sub>令<sub>二</sub>讀上<sub>一</sub>也、其後

有<sub>二</sub>少減<sub>一</sub>、所定驗歟、今夜使<sub>二</sub>晴光修<sub>一</sub>泰山府君祭、又自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>以<sub>二</sub>智詮阿闍梨<sub>一</sub>修<sub>二</sub>不動供<sub>一</sub>、已渡<sub>二</sub>邪氣<sub>一</sub>、廿五日、卯天晴、今晚、大將汗快出、其後心地頗有<sub>レ</sub>減、是佛法之驗也、今夜、大將女房自<sub>二</sub>中川<sub>一</sub>歸洛、依<sub>二</sub>大將病<sub>一</sub>也、大將今日脚病更發、起居不<sub>レ</sub>通、而今夜初夜時、物氣快發、其後忽以行步、實靈驗揭焉者歟、

今日、大外記賴業注<sub>二</sub>進去<sub>一</sub>廿二日所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宣下<sub>一</sub>之等事、廿二日、及<sub>二</sub>兼燭<sub>一</sub>、右衛門督家通、着<sub>二</sub>仗座<sub>一</sub>、藏人左衛門權佐親雅來仰、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>前內大臣攝<sub>一</sub>行政事、左近大將藤原朝臣、如<sub>レ</sub>舊可<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>任內大臣<sub>一</sub>之由、上卿移<sub>二</sub>外座<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>大外記賴業<sub>一</sub>仰云、  
官人不候、以<sub>二</sub>奏<sub>一</sub>不被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>詔書<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>連<sub>一</sub>去年、又不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>攝政停止事<sub>一</sub>、  
上卿被<sub>二</sub>執申<sub>一</sub>云々、而例云々、  
又不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>攝政停止事<sub>一</sub>、  
被<sub>二</sub>傳去年例<sub>一</sub>云々、  
不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>氏長者宣旨<sub>一</sub>、  
爲<sub>二</sub>三公之上首<sub>一</sub>之上、先其後於<sub>二</sub>近衛亭<sub>一</sub>覽<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>、  
公院給<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、後、  
先外記、  
覽今日  
次官方、  
光  
臣、大藏人、  
頭中將通、  
次政所、  
實朝臣、  
檢議、次又官方、  
基親、末<sub>二</sub>及<sub>一</sub>夜半<sub>一</sub>事訖云々、

恩案、去年十一月十九日以後、所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行之叙位、除目、詔勅、宣命、宣旨、官符、昇不、侍中併不可<sub>レ</sub>用之由、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>也、其故何者、逆賊執<sub>二</sub>朝務<sub>一</sub>、時人猶媚<sub>二</sub>其權<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>任之官、猶帶<sub>二</sub>其身<sub>一</sub>、仍雖<sub>二</sub>謀叛之者<sub>一</sub>、人猶歸



之、甚以奇怪、自今以後、諛<sub>レ</sub>賊臣<sub>一</sub>之條、爲<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>後昆  
嚴肅<sub>一</sub>也、平治々承、此條雖<sub>レ</sub>同、皆成人御宇也、仍所  
號皆勅定也、更不<sub>レ</sub>齊<sub>二</sub>今度之亂、君臣共幼稚、未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>  
成人之量、法皇又如<sub>二</sub>禁固、何及<sub>一</sub>政事之沙汰、只偏義  
仲一人之取也、豈以<sub>二</sub>木曾之下知、專備<sub>一</sub>竹帛之證據<sub>一</sub>  
哉、此條君尤可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御存知也、而一切不<sub>二</sub>思食、人又  
不<sub>二</sub>申行<sub>一</sub>歟、

後聞、此事經<sub>二</sub>數日<sub>一</sub>之後有<sub>二</sub>申行、少<sub>一</sub>人云々、然而違  
期之後、尤可<sub>レ</sub>見苦、且又天氣不<sub>二</sub>思食寄、依<sub>二</sub>小人<sub>一</sub>之  
異見、無<sub>二</sub>始終<sub>一</sub>云々、此事二月下旬之比有<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>也、  
仍追所<sub>二</sub>書入<sub>一</sub>也、

廿六日、辰天晴、此日、女房等自<sub>二</sub>奈良<sub>一</sub>歸洛、中將同  
之、自<sub>二</sub>去夜<sub>一</sub>聞巷謳<sub>二</sub>哥平氏入洛之由、不<sub>二</sub>信受<sub>一</sub>之  
處、果以虛言云々、或云、猶被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>平氏追討<sub>一</sub>之議、以<sub>二</sub>  
靜賢法印<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>御使、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>含子細<sub>一</sub>云々、此儀愚心  
所<sub>二</sub>庶幾<sub>一</sub>也、是全非<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>級平氏<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>思<sub>一</sub>神鏡劍聖之安  
全也、

今日、大將歸<sub>二</sub>南宅<sub>一</sub>、此家女房歸住之間、無<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>之故  
也、大將今夕又聊有<sub>レ</sub>增云々、

廿七日、巳天晴、觀性法橋來、只今入<sub>二</sub>西山<sub>一</sub>云々、午刻

許、女房相共向<sub>二</sub>大將宅<sub>一</sub>、今旦頗宜云々、此間、定能卿  
來、語<sub>二</sub>世間事等<sub>一</sub>、其次云、平氏事、猶止<sub>二</sub>遣<sub>一</sub>御使<sub>一</sub>事、  
偏可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>征伐云々、近習卿相等和議歟云々、所謂朝  
方、親信、親宗也、小人近<sub>レ</sub>君、國家擾、誠哉此言、  
及<sub>二</sub>晚歸宅、自<sub>一</sub>院爲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>武士<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>借<sub>二</sub>余廬<sub>一</sub>、指  
家之由有<sub>レ</sub>仰、定長奉行申<sub>二</sub>承訖之由<sub>一</sub>、事體不足<sub>レ</sub>言、然而  
不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>遁避<sub>一</sub>、末代之事勿論々々、

今夜依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>吉日<sub>一</sub>、姬君奉<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>觀音品壽命經<sub>一</sub>、并諸真言  
等於無動寺法印、今日、法橋清仁注<sub>二</sub>進天變等<sub>一</sub>、

廿八日、戌天晴、早旦、大夫史隆職進<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>云、忽被<sub>二</sub>  
追捕<sub>一</sub>、家中及<sub>二</sub>耻辱<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>之如何、九郎之從類之所爲云  
云、依<sub>レ</sub>思<sub>二</sub>召人之滅亡<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>使於九郎許<sub>一</sub>、相<sub>二</sub>觸子細<sub>一</sub>、縱  
其身雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>罪科<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止當時狼藉<sub>一</sub>之由也、又以<sub>二</sub>書  
札<sub>一</sub>示<sub>二</sub>遣前源納言之許<sub>一</sub>、次官親能在<sub>二</sub>彼納言之家<sub>一</sub>、件  
男爲<sub>二</sub>賴朝代官<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>九郎<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>也、仍萬事爲<sub>二</sub>  
奉行<sub>一</sub>之者云々、因<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>觸、件男所<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>彼納言<sub>一</sub>也、  
九郎返事云、此事、平氏上<sub>二</sub>書札於京都<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>弱<sub>二</sub>取件使  
者<sub>一</sub>、各持<sub>二</sub>報札<sub>一</sub>云々、其中有<sub>レ</sub>之、史大夫之者可<sub>レ</sub>召進<sub>二</sub>  
之由<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>左衛門尉時成奉行<sub>一</sub>、自<sub>一</sub>院被<sub>レ</sub>仰下、仍相尋之  
間、罷<sub>二</sub>向大夫史之宅<sub>一</sub>、次第不敵、於<sub>二</sub>狼藉<sub>一</sub>者早可<sub>レ</sub>止

云々、又納言返札到來、親能申一切不知之由云々、又相尋宰相中將之處、返事之上、全不知食事云云、及晚達使隆職之許、尋問子細、飯來云、文書等少々雖遣三山里、於要須之文書者併隨身、爲備卒爾之尋也、而打破文庫戶、併被取了云々、凡官中文書、古來只一本書也、而肝心失者、即我朝之滅亡也、誠天下之運滅盡之期歟、可悲々々、

廿九日、未天晴、佛殿聖人來、令見大將、於今者更不可有別事之由示、爲悅々々、偏佛神之加護也、

此日、法印被來入、中御門大納言被來、又聞、西國事、被遣追討使一事一定也、今日已下向去廿六日出門云々、

其上猶靜賢可遂使節之由有仰、靜賢辭退云々、其

故被遣御使者、令休後畏懼之心、爲三神安穩入

洛也、而遣勇者征討之上、何及尋常之御使哉、道

理不叶、又難遂使節之故也云々、所申尤有理

歟、凡近日之儀如反掌、不便云々、

又聞、全立僧正可補天台座主之由、昨日被定仰了、以吉日可有宣下云々、近日之政、理運只此一

事歟、余遣書札并使者、示悅之由了、

依穢氣、春日祭延引、凡二月神事皆延引了、仍今日不神齋、無奉幣故也、

## 二月大

一日、庚天晴、依穢氣、春日祭延引、然而神齋如例、

他人不然、就殿曆說所爲也、雅賴卿來談世上

事、齋院次官親能者、前明法博士廣孝子、賴朝之近習者、又雅賴卿

門人也、今度爲陣行事爲上洛、去廿一日謁件卿

之次、親能云、若可被直天下者、右大臣殿可知

食世也、無異議云々、納言問云、此條可及上奏

歟如何、親能云、若有尋者可申此旨之由所存也云

云、納言重云、無尋者可默止歟、親能云、可進申

之由、不承云々、事體頗似無四度解歟、實件男

不覺人也云々、

昨今、追討使等、皆悉下向云々、先追落山陽道之後、

漸々可有沙汰云々、

二日、辛天晴、傳聞、伯耆國美徳山有稱院御子之

人、生年廿歲、未元服云々、件宮、資隆入道外孫云

云、幼稚之時、九條院被奉養育、其後依無衆生、在

外祖父家、然間、生年十五之年、無音逐電、人不

知

其意趣、即向大和國、暫隨遂二川冠者、

其時稱成親卿子也云々

其後先到伯耆大山、次移住美徳山、猶稱成親卿子、

而平氏被追落之後、顯其實稱院御子、已伐取

伯耆半國、海陸業成、武勇者也奉付之、但小鴨基康不

從云々、又美作國小々打取了、昨日上使者於京都、

爲入院見參云々、奉仰源氏相俱可伐平氏云

云、事次第奇異也、仍爲後記之、

入夜有火、出來自七條室町東西、而相并十餘町燒

亡、當時院御所八條院御所、即御同宿也、雖近令免了、余進使者、

謝不參之恐於兩方了、

成人云、向西國追討使等、暫不遂前途、猶逗留大

江山邊云々、平氏其勢非厄弱、鎮西少々付了云々、

下向之武士、殊不好合戰云々、

土肥二郎實平、次官親能等、此兩人賴朝代官也、相刻武士等所令上落也、或御

使被誘仰之儀、甚甘心申云々、而近臣小人等、親信、親宗等、阿少辨、

御素懷也、仍流掉無左右事歟、此上左大臣又被執

申追討之儀云々、凡此條甚理雖可然、不被重神

銳劍重之條、神慮如何、天意又不主者歟、人云、攝政

執事家實、兼光年預棟範云々、光長依爲松殿縁人、弃

置云々、

三日、壬天晴、法印被來、今日行家入洛、其勢僅七

〔八〕十騎云々、依院召也、賴朝又免勸氣云々、

四日、亥雨下、向大將第、所勞大略減了、行步猶不快

云々、源納言示送云、平氏率具主上、着福原一畢、九

國未付、四國紀伊國等勢數萬云々、來十三日一定可

入洛云々、官軍等分手之間、一方僅不過一二千

騎云々、天下大事、大略分明云々、

五日、甲雨下、參御堂、彌勒講如例、攝政被送札

云、有可示合事、見參無其期歟云々、依所勞不

能出仕、以使者可被示送之由答了、

自今夜奉滿尊勝陀羅尼、七ヶ日之間可滿一萬

反也、仰祈僧達、依夢想也、余又修小行法、又仰

信助阿闍梨、令修同供也、

六日、乙天晴、或人云、平氏引退一谷、赴伊南野云

云、但其勢一萬騎云々、官軍僅二三千騎云々、仍可

被加勢之由申上云々、權右中辨光長朝臣來、召能

前仰雜事、又聞、平氏引退事謬說云々、其勢不知

幾千萬云々、

慶後始被<sub>レ</sub>向云々、

八日、<sub>丁</sub>天晴、未明、人走來云、自<sub>三</sub>式部權少輔範季朝臣許<sub>二</sub>申云、此夜半許、自<sub>三</sub>梶原平三景時許<sub>一</sub>、進<sub>三</sub>飛脚<sub>一</sub>申云、平氏皆悉伐取了云々、其後午刻許、定能卿來、語<sub>三</sub>合戰子細<sub>一</sub>、一番自<sub>三</sub>九郎許<sub>一</sub>告申、<sub>綱手也、先落<sub>二</sub>丹波城<sub>一</sub>、次加羽冠者申<sub>三</sub>案內<sub>一</sub>、<sub>大手、自<sub>三</sub>濱地<sub>一</sub>、寄<sub>三</sub>福原<sub>一</sub>云々</sub>自<sub>三</sub>辰刻<sub>一</sub>至<sub>三</sub>巳刻<sub>一</sub>、猶不及<sub>二</sub>一時<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>程被<sub>三</sub>責落<sub>一</sub>了、多田行綱自<sub>三</sub>山方<sub>一</sub>寄、最前被<sub>レ</sub>落<sub>三</sub>山手<sub>一</sub>云々、大略籠城中之者不<sub>レ</sub>殘<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>、但素乘船之人々四五十艘許在<sub>三</sub>島邊<sub>一</sub>云々、而依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>廻得<sub>一</sub>、放<sub>レ</sub>火燒死了、疑內府等歟云々、所<sub>二</sub>伐取<sub>一</sub>之輩交名未<sub>二</sub>注進<sub>一</sub>、仍不<sub>レ</sub>進云々、劔璽內侍所安否、同以未<sub>レ</sub>聞云々、</sub>

九日、<sub>辰</sub>天晴、申刻許、二位中納言被<sub>レ</sub>來、余謁<sub>レ</sub>之、山法印素在<sub>三</sub>此第<sub>一</sub>、同謁<sub>レ</sub>之、納言歸後、奈良僧正被<sub>レ</sub>來、今日爲<sub>三</sub>院參<sub>一</sub>上洛、於<sub>三</sub>途中<sub>一</sub>聞<sub>三</sub>平氏被<sub>レ</sub>討之由<sub>一</sub>云云、先來<sub>二</sub>着堂廊<sub>一</sub>、<sub>昨日俟<sub>二</sub>有其<sub>一</sub>告、取<sub>二</sub>聞<sub>一</sub>之</sub>自<sub>三</sub>其所<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>來也、自<sub>三</sub>是<sub>一</sub>可<sub>二</sub>參院<sub>一</sub>云々、自<sub>三</sub>院向<sub>一</sub>母堂許、宿<sub>三</sub>彼家<sub>一</sub>、明旦可<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>向南都<sub>一</sub>云々、今日未刻、少將忠季、<sub>忠親</sub>來<sub>二</sub>大將第<sub>一</sub>、申<sub>三</sub>請春日祭陪從裝束<sub>一</sub>、當時穢中也、然而下申、依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>穢以後<sub>一</sub>、彼日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>祭云々、仍來示歟、但平氏之穢、又

可<sub>二</sub>充滿<sub>一</sub>、定不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行歟、今日、三位中將重衡入京、着<sub>二</sub>楊直垂小袴<sub>一</sub>云々、即禁<sub>二</sub>固土肥<sub>一</sub>二郎實平、<sub>賴朝邸從、爲<sub>二</sub>宗者也<sub>一</sub>、許<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、</sub>

今日、付<sub>三</sub>小童<sub>一</sub>、<sub>六歲、未<sub>二</sub>着袴<sub>一</sub>、於奈良僧正、被<sub>レ</sub>來之次、令<sub>三</sub>謁見<sub>一</sub>、示付也、依<sub>三</sub>幼稚<sub>一</sub>、忽不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>送<sub>一</sub>南都<sub>一</sub>也、自<sub>三</sub>今夜<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>觀性<sub>一</sub>始<sub>二</sub>水歡喜天供<sub>一</sub>、</sub>

十日、<sub>己</sub>天晴、此日遠忌也、催<sub>二</sub>送布施<sub>一</sub>取於光明院、佛經供養等如<sub>三</sub>例年<sub>一</sub>、今日、請<sub>三</sub>法印<sub>一</sub>、余相共讀<sub>二</sub>懺法例時<sub>一</sub>等、奉<sub>二</sub>爲先妣<sub>一</sub>也、入<sub>二</sub>夜藏人右衛門權佐定長來仰<sub>一</sub>、院宣云、平氏首等、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>渡<sub>一</sub>旨思食、而九郎義經、加<sub>二</sub>羽範賴等申云<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>義仲首<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>平氏首<sub>一</sub>之條、太無<sub>二</sub>其謂<sub>一</sub>、何故被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>平氏<sub>一</sub>哉之由、殊鬱申云々、此條如何可<sub>二</sub>計申<sub>一</sub>者、申云、論<sub>三</sub>其罪科<sub>一</sub>、與<sub>三</sub>義仲<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>齊、又爲<sub>三</sub>帝外戚等<sub>一</sub>、其身或昇<sub>二</sub>卿相<sub>一</sub>、或爲<sub>二</sub>近臣<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>逐<sub>二</sub>誅伐<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>首之條<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>不義<sub>一</sub>、近則、信賴卿頸所不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>渡也、加之、神璽寶劔猶在<sub>二</sub>殘之賊手<sub>一</sub>、無爲歸來之條、第一之大事也、若被<sub>レ</sub>渡<sub>二</sub>此首<sub>一</sub>者、彼賊等彌令<sub>二</sub>勵<sub>一</sub>怨心歟、仍旁不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>渡<sub>一</sub>其首、將軍等只一旦申<sub>三</sub>所存<sub>一</sub>歟、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>之上、何強執申哉、賴朝定不<sub>レ</sub>承<sub>二</sub>申此旨<sub>一</sub>歟、此上左右可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>勅定<sub>一</sub>者、定長云、被<sub>レ</sub>



問左大臣、內大臣忠親卿等、各申不可被渡之由、一同云々、定長又語云、重衡申云、舊札副使者、重衡卿從云々遣前內府之許、乞取劔璽、可進上云々、此事雖不可叶、試任申請、可御覽云々、

十一日、庚午雨降、此日大將加灸治、十九所典藥頭和氣定成參勤之、賜牛一頭、余行向、仰聞病子細於醫師、灸治後飯宅、及晚頭參院、平氏誅爵之間、人々多參入云々、余依所勞于今所遲々也、八條院御同宿也、以定長入見參、仰云、彼岸之間依念誦無暇、仍不謁、所勞之由聞食、雖不參同事也、世上事迷成敗了、雖自今以後、被尋仰事、無繼介可令申也、抑、平氏首事、計申旨可然、又人々問申不可被渡之由、而將帥等殊鬱申、其上強又可及、恠惜、仍仰可渡之由、丁云々、申畏承了之由、即參女院御方、謁女房、暫而退出、

傳聞、入道關白、院御氣色殊不快云々、內々仰云、禪門示遣攝政可推舉之由於賴朝之許、去年七月亂之後事云々賴朝答不能口入之由云々、又仰云、去年七月、當時攝政有可被改之儀、時入道舉十二亞相、朕不許、存右府當仁之由、而禪門申云、攝錄若入右府之家者、

永可留彼家、不可雪我耻、仍不可被改本人、且依此申狀、無動搖、而禪門又申云、然者、(一)所庄庄、少々可分賜云々、朕答云、攝政氏長者無改易者、何及所領之違亂哉者、今當義仲亂逆之時、補十二之攝政、領數百之庄園、是則朕先日依示攝錄家領難分之由、寄事於此勅言、不遺一所押領云云、次第甚所爵思食也云々、又去冬可有西國之御幸之由、義仲申行之時、以隆憲爲使、禪門頻被勸申、此事又難忘云々、已上院仰此事等以體說所聞也、又聞、平氏之許、遣舊札通音信之人、不可勝計、王侯卿相、被官、貴賤、上下、大都洛人無殘輩、就中、院近臣甚多云々、余雖聞此事、敢不相驚、一切無此恐故也、以之思之、貞直之道、庶而猶可庶者歟、彼岸所作今夜結願了、

十二日、辛未今曉有吉夢、宿業魔界併消滅之祥也、猶佛法之效驗、雖末世惟新、可信可貴、夢中及覺後、歡喜之思難休者也、法印被來、宰相中將定能卿來語云、明日可被渡首云々、數刻言談之後歸去了、十三日、壬申雨降、午後頗晴、此日被渡平氏首、其數十云々公卿頭不可被渡之由、有<sup>違</sup>其議、武士猶鬱申云々

如何、通盛卿首同被渡了、可彈指之世也、及晚大夫史隆職來、談世上事、今日余向大將第一、

十四日、酉天晴、自今日又三ヶ日始行法、今日法印并觀性等來、

十五日、戌入夜向堂、今夜、法印於堂被修廿五三昧念佛、爲聽聞女房相共所向也、供事了、鐘報之後歸宅、

十六日、亥天晴、源中納言雅賴卿來語云、賴朝四月可上洛云々、次官親能爲院御使、下向東國、仰云、賴朝若不上洛者、可有臨幸東國之由有仰云々、此事殆物狂、凡不能左右々々、

十七日、子微雨、下向大將亭、灸治之後漸起揚云々、頗有驗歟、

十八日、丑天晴、佛嚴聖人、并本性房等來、

十九日、寅天晴、此日、故殿御忌日也、仍未刻參御堂、申刻講演始、導師覺智僧正、刑部卿賴輔、右大辨兼光等卿參上、山法印、并尊忠僧都等會講、事了引布施、其後余歸宅、法印相共讀例時懺法、此日、中御門大納言被來、傳聞、平氏歸住讚岐八島、其勢三千騎許云云、被渡之首中、於教經者一定現存云々、又維盛卿

三十艘許相卒指南海去了云々、又聞、資盛貞能等、爲豐後住人等乍生被取了云々、此說、日來雖風聞、人不信受之處、事已實說云々、又聞、重衡卿萬事被尋問之間、下官可知天下之由、平氏議定之間、令申云々、仍被尋問云、若有通音信事歟云々、申云、其條一切不然、只依爲傍若無人、當其仁云云者、

廿日、卯天陰、入夜參院、以定長申入、暫來告召之由、即參御前、有種種勅語等、去月廿一日所遣賴朝許之飛脚歸參、賴朝申云、勸賞事只在上御計、過分事一切非所欲云々、良久之後、參八條院御方、謁女房、深更退出、

廿一日、辰雨下、一昨日有僧事、

仁和寺圓教寺別當權僧正定遍、

天王寺別當法印定惠、

廿二日、巳天晴、依觀性法橋勸進、法印於御堂被行法恩講、年來之勤云々、此行之本意、以難藝、管絃、歌、舞、奉、供養於佛云々、仍會合之道俗、密々詠詩哥、事不及廣、大將中將同詠之、爲結緣也、仍大將并法印、以他人爲名、余不加和哥也、及深

更事了歸宅、

今日申刻許、左大辨經房卿來、語世上事等、其性頗立貞潔、歟、但過去難知歟、然而所存頗可感歟、語云、諸國兵糧之資、并武士押取他人領事、可停止之由被下宣旨、武士實行云々、

廿三日、壬午、大夫史隆職、近日可被下之宣旨等注進之、仍續加之施行、更以不可叶事歟、有法不行、不如無法、

應令散位源朝臣賴朝追討前內大臣平朝臣以下黨類事、

右左中辨藤原朝臣光雅傳宣左大臣宣奉勅、

前內大臣以下黨類、近年以降專亂邦國之政、皆是氏族之爲也、遂出王城、早赴西海、就中掠領山陰山陽南海西海道諸國、偏奪取乃貢、論之政途、事絕常篇、宜令彼賴朝追討件輩者、

壽永三年正月廿六日

左大史小槻宿禰

應令散位源朝臣賴朝召進其身源義仲餘黨事、

右左中辨藤原朝臣光雅傳宣左大臣宣奉勅、

謀反之首義仲餘黨、遁而在都鄙之由、普有其聞、宜令彼賴朝召進件輩者、

壽永三年正月廿九日

左大史小槻宿禰

五畿內七道諸國同下知之、

應令散位源朝臣賴朝、且搜尋子細經言上、且從停止武勇輩押妨神社佛寺、并院宮諸司及人領等事、

右近年以降、武勇輩不憚皇憲、恣耀私威、成自由、下文廻諸國七道、或押顯神社之神供、或奪取佛寺之佛物、況院宮諸司及人領哉、天譴遂露、民憂無定、前事云存、後輩可慎、左中辨藤原朝臣光雅傳宣、左大臣宣奉勅、自今以後、永從停止、敢莫更然、但於有由緒者、彼賴朝相訪子細、言上于官、若不遵制旨、猶令違犯者、專處罪科、曾不寬宥者、

壽永三年二月十九日

左大史小槻宿禰

左辨官、下五畿內諸國七道諸國同知之、

應早仰國司停止宛催公田莊園兵糧米事、

右治承以降、平氏黨類暗稱兵糧、掠成院宣、恣宛五畿七道之莊公、已忘敬神尊佛之洪範、世之衰微、民之凋弊、職而由斯、況源義仲不改其跡、益行此惡、曾失朝威、共背幽冥、爰散位源朝臣賴朝、不廻幾日、討滅西賊、然則干戈永斂、宇宙靜謐、權大納言藤原朝

臣忠親宣、奉勅、早仰諸國司、宜停止件催者、諸國承知、依宣行之、

壽永三年二月廿二日

左大史小槻宿禰

中辨藤原朝臣、

廿四日、未發晴、此日、小御堂修二月也、余及女房向彼堂、余不出座、依公卿不參也、兼光朝臣雖申可參之由、不參、借十口、大導師行家如例年、經家朝臣取大導師被物、事了歸家、

廿五日、甲陰、召範源阿闍梨、山法師相者、令見大將中將等、各申有高運相之由、官福共富、壽命又長遠也云云、今日、近邊小屋等追捕入云々、

廿六日、乙酉、雨下、合煮物、

廿七日、丙戌、雨下、源納言示送云、攝政可被避職之由、有巷說如何云々、傳聞、賴朝四月下旬可上洛云々、又以折紙計申朝務云々、人以不可爲可、賴朝若有賢哲之性者、天下之滅亡彌增歎、

廿八日、丁未、雨下、攝政以外記大夫信成爲使、被通賴朝之許云々、人不不知何事、今日首途了云々、

廿九日、戊申、晴、大將方密々有時、又有當座云々、中將有宜句云々、九郎爲追討平氏、來月一日可

向西國之由有議、而忽延引云々、不知何故、或人云、重衡所遣前內大臣許之使者、此兩三日歸參、大臣申云、畏承了、於三ヶ寶物并主上女院八條院殿者、如仰可令入洛、於宗盛不能參入、賜議岐國可安堵、御共等、清宗可令上洛云々、此事實、若因茲追討有猶豫歟、

卅日、己未、晴、定能卿來、談世上事、平氏申可和親之由云々、又云、四月院可渡御白川御所云々、押小路金剛院此日、最勝金剛院修二月也、去廿六日爲式所也、而增供餽關如、仍所延引也、公卿右大辨兼光參入云々、

### 三月

一日、庚申、雨、藏人左衛門權佐定長依昨日召來、余呼簾前、謁之、聊依有可申入之事、爲仰付所相招也、非別事、國所望之間事也、此次、定長語云、重衡所遣之使者、左衛門尉重衡、歸參、又有消息之返事、申狀大略庶幾和親之趣也、所詮源平相並可被召仕之由歟、此條賴朝不可承諾、然者難治事也、但此上於別御使來之時、奉子細、重可申所有云々、又云、院



御所雖有可被新造之儀、忽不可然、且是攝政被諫申云々、尤上計也、良久退出了、

二日、卯雨下、行向大將方、大將灸治不能來此第一、仍且爲散其不審（也）、中將相伴、及晚資隆入道來、有詩哥之興、及深更歸來、

三日、壬辰天晴、依平等院一切經會、攝政被向宇縣云々、後聞、樂行事中將公時、少將雅行云々、忠節、胡飲酒舞秘藏之手云々、

四日、癸巳天陰、申刻、攝政自宇治被歸云々、觀性所誂之願文、尹明草進、可直之事等、注付返遣之、可審三十六部如法經之間事也、奉滿三千手、羅尼三十遍、依或者夢想也、

五日、甲午天晴、依彌勒講、參御堂、大將相扶灸治、先是參候、僧都同參入、講演了歸宅、今日、定能卿相具其息少將親能來、御堂櫻樹一本、其花尤盛、

六日、乙未天晴、女房等爲見花密々向堂、明後日可參詣日野、仍自今日潔齋、今夜、錯立法印得之經、令讀法華經、

七日、丙申天晴、自八條院有被仰事、賴盛卿申狀也、今日、法印又被送僧一人、（令）讀經、爲去夜、

八日、丁酉寶上吉也、天陰不雨降、此日、密々參詣日野、年來每年參詣、而此四五年、依天下不靜、自然不參、依有所思、今日所參詣也、及晚歸來、自今夜、令始修樂師護摩、法印被修之、余行向達時、每夜初夜時如此可達也、余又同自今夜、始念誦、抑、先年結緣灌頂之時、樂師如來爲得佛、其後不慮外得驗佛一鋪、（樂師）件佛如法佛也、傳教大師渡唐之時、爲遂前途、所被圖繪也、而轉々東寺、仁海僧正得之、自彼時、年改不累代爲一所本尊、仁海弟子等、次第相承、勤仕御祈、而或僧自然傳得、依有夢想之告、所與下官也、事希異也、尤可仰歎、仍以彼本尊所修此護摩也、抑、件軸木、釋尊六年苦行之時、御杖切云々、可謂珍重歟、余念誦每日三時也、

九日、戊戌小雨降、大將方密々有詩、仍余行向、及晚歸來、入夜達護摩之時、如昨、

十日、己亥朝間雨降、入夜參院、以定長入見參、依召參御前、小時退下、參女院御方、頃之退出、今日、重衡下向東國、賴朝所申請云々、

十一日、庚子陰晴不定、女房密々參廣隆寺、頭弁光雅可奉行祈年祭之由催大將、其消息進上右大將

殿云々、光雅雖爲頭、直不可送書札、仍不遣返事云々、

十二日、丑天晴、及晚隆職宿禰來、談世上事、

今晚、余及女房同時有同夢想、其趣最吉也、下官心

願、佛神有感應歟、

十三日、寅天晴、攝政送札云、有可調事、參會內

裏、哉云々、答十六七日之程可參之由了、退案之、

當今御時未參內、忽出仕、人定成奇歟、猶參會院

宜歟、仍重示其由畢、

十四日、卯天晴、藏人少輔親經來、余乍召簾前調之、

示俊經卿有辭退入座之心之由、今日法印所修之

藥師護摩結願了、余行法同之、

十五日、辰天晴、法印於堂被修廿五日三昧、余女

房相共爲聽行向、

十六日、巳天晴、已刻、大外記賴業來、文談移刻、此次

語云、先年通憲法師語云、當今皇和漢之問少比類

之暗主也、謀叛之臣在傍、一切無覺悟之御心、人雖

奉悟之、猶以不覺、如此之愚昧、古今未見未聞者

也、但其德有二、若敬心有欲果遂一事者、敢不拘

人之制法、必遂之、此條於主爲大失、今次自所聞食

置事、殊無御忘却、年月雖遷不忘心底給、此兩

事爲德云々、史書全經事等多以所談也、又語云、宇

治左大臣常云、大乘者不叶末世之機、人之可學者

小乘教也者、愚痴邪見之至、以之可知趣、良久退出

了、未刻、中御門大納言宰相中將等來、各調之、或人

云、平氏被伐了云々、或又生取、或又引龍土佐國云

云、近日如此之說縱橫、難存一定歟、

十七日、丙微雨下、向大將方、

十八日、丁雨下、大將來語云、今日夢想云、有八人云、

不知誰、夜部御覽セシ古集意は令知給タルカ、近日大將

抄出一句、其句云、藤枝扣松關、古集其中

者今之所問、指此句意云々、大將答云、不知給、又人

云、藤枝ト申ハ藤氏之第一人御事也、藤氏之第一人

ト申ハ、右大臣殿ニ御座ス、さは令知給歟云々、大將

云、未知給、又人云、扣關ト申スハ、爲右大臣殿御沙

汰、可令鎮世給之意也云々、大將云、松ハ又何ナル

意哉、人云、久可令保世給之故ニ松ト見也、ト

見テ覺了云々、誠是不可說之最吉夢也、余案此夢

意、今月末來月始、此事可成就歟、所以何者、古歌

云、爰にこそささか、りけれ藤のはな松にとのみも

思けるかな云々、仍春末夏首ニ可成就之徵也、

十九日、戊申天晴、早旦定能卿來、去夜參院、御方違之御共、只今所罷出一也云々、即依有御幸白川、又馳參了、

廿日、己酉天晴、今日、於院被始行千部法華經、御讀經關白、導師公顯僧正云々、

廿一日、庚戌

廿二日、辛亥

廿三日、壬子天晴、光長告送云、廣季只今入來云、賴朝

奏條々事於院、其中下官可爲攝政藤氏長者之由、令舉了之由、自廣元之許男也、所告送也云々、

即其正文可經御覽之由、廣季令申云々、當時攝政若可有其恩者、無只賜一州、可足云々、件狀加

一見返遣了、件脚力去十九日到來、賴朝奏院之狀、即

廣元執筆付泰經卿云々、同廿一日遣御返事、恐可

申左右之由被仰云々、大略此事被仰不可然者

歟、或人云、去十一日、左衛門尉公朝爲御使下向、

即此事賴朝之本意如此之由、豫依風聞、被仰遣其

子細云々、凡此事次第、可謂難堪報念也、所參

無疑下官之懇望也、縱雖有此疑、已無其實、強不

可爲告、不事而成就者、以之可爲驗之處、法皇

退絕之御心已切、引級攝政之條、已有御最負、此上賴朝不可及執申、然者遂以可默止歟、而當時洛中之貴賤上下、道俗男女、下官可有吉慶事之由、誦哥、殆過法云々、此事已嗚呼也、又尾籠也、取諸身無冥顯之過意、何因氏明神并本尊三寶、可令顯尾籠之名於後代哉、冥鑒之處、只奉仰佛神者也、中心此事亂世間、彌以不庶幾者也、今日、又宰相中將相具其息親能少將來、

廿四日、癸丑天晴、此日、少將親能來、於堂蹴鞠、女房等行向見之、早旦佛嚴聖人來、語爲余見寂吉夢之由、爲悅不少、今日、於春日御社奉供養余所書

之一字三禮心經一卷爲祈也、今夜、圓伊內供來、讀法華經、

廿五日、甲寅時々雨下、及晚晴、刑部卿賴輔卿來、觀性

法橋來加持如、法華經座、限以十日、次一宿之外不

可、在京之由起請了、自今夜被始行春除目、執

筆左大辨經房、

廿六日、乙卯除目中夜、

廿七日、丙辰天晴、及晚向大將方、今日入眼也、外記

持來關官帳、無例、前日若初日持來及入眼之條、



勘發外記一申使部、懈怠甚無謂、今日、中御門大納言來、大將家教催馬樂云々、

廿八日、丁天晴、未刻、見聞書、全無別事、可爲大除目之由、兼日謳哥、而依賴朝申狀、被止珍事等

了云々、賴朝叙正四位下、若是所望歟、將又推被行歟、然者同可被任直官歟、

廿九日、戊雨下、定能卿來、或人云、自入道關白并攝政之許、各送使者於賴朝之許、或送貨物、或有陳狀云々、下官只奉仕佛神耳、此日、大將方密々有作文、題云、春書方術中、探酌云々、

今日雖可被行下名、依凶會日延引云々、

四月

一日、己天晴、書心經如例、隆信朝臣來、和歌及密事談、或人云、賴盛卿後見侍清業、去月廿八日上洛、以件男余事又奏法皇云々、凡此事一切不存事也、不詳々々、

二日、庚天晴、此日奉幣春日社、修祓神齋如例、今日院被參日吉、此日被行下名云々、

三日、辛天晴、此日於春日御社、右大將所奉摺寫、

供養金剛般若經百卷、法眼覺乘供養之被物一重、絹袋一副遺之、仍大將神事也、但不忌僧尼、余又爲祈等六字供、水歡喜天供、見聞書、有過分非據事等、此日、梅宮祭也、依聊有思方、自河原立幣、

四日、壬天陰、小雨、大外記賴業來、即向大將第授聞書、法印并觀性等來、

五日、癸雨下、參御堂、彌勒講如例、大將同參、

六日、甲天晴、大將來此第、文士兩三期而會、有當座詩歌聯句等會、題云、新樹繞樓臺、陰字、

自昨日院中有五體不具穢云々、余來九日聊有可祈事々、仍忌院參之人、不令混合、

七日、乙天晴、雅賴卿來、談世上之事、賴朝卿後見史大夫清業、去比來納言許語云、下官事、賴朝推舉存堅事云々、奏聞之日、於八幡寶前、能致祈念之後、仰廣元令書之云々、請寶殿開梨、賜寶篋印陀羅尼一卷、破廿一反梵字、明日於故殿御墓所、可奉供養故也、即令參寶殿也、

八日、丙天晴、參御堂、此日、參寶殿開梨於故殿御墓、有令祈申事、即令供養寶篋印陀羅尼、余有



所作等、

今日頭辨光雅朝臣、送書於基輔云、祭主親俊朝臣、依度々御祈禱、申仙籍、雖先例不分明、須將天聽、獨默止之條、神慮難測、可否之間可令計申者、申云、神不享非禮、被聽之條、還乖神慮歟、於御祈禱者、可被行他事歟者、此事及沙汰之條、奇異之中又奇異也、可彈指之世也、殆雖叙一位、猶不似昇殿之非據歟、及晚大夫史隆職來、談世上事、高階仲基云、正月十八日爲余見吉夢之由、密々告隆職云々、此日、中將發了、一昨有病氣、今日又如、此、瘡病無疑歟、此日、公家無灌佛、依大祀以前也、

九日、天晴、此日、奈良僧正令詣春日御社、山法印令詣日吉、觀性法橋令詣八幡、皆余所也、余今日潔齋沐浴、令讀心經千二百卷、千卷春日、百卷八幡、百卷日吉料也、信心發起、可憑々々、

十日、戌天晴、中將參或靈驗所、頗宜發云々、入夜謁或女房、

十一日、巳大雨洪水、本命日泰山府君祭也、或人云、前內大臣宗盛於八嶋薨逝云々、三月十七日受病、同

廿四日入沒了、但殊秘藏不使郎從知云々、實否難知事歟、後聞認說全不薨云々、

十二日、庚天晴、中將詣一昨日參詣之靈驗所、瘡病平愈了云々、院主典代來、催右大將云、來十六日可有御幸白川、御移徙之儀也、可參入者、申可參入之由了云々、

十三日、辛天陰、中御門大納言被來、大習催馬樂、入夜隆職來、

十四日、壬天晴、參院、以定長入見參、仰云、只今自白川歸來、窮屈無術、若有可申入之事歟云

云申云、全無可申上事、依所勞久不出仕、仍所參入也、私語定長云、明後日御渡云々、而所勞罷居之身、不能參入、且恐申候也云々、歸來云、然者後日可謁、又渡事、全僧々しき禮の志にあらず云々、

即參八條院御方、謁女房之後退出、

此日、送秘藏第一之劔於奈良僧正許、來十六日參詣之次、殊可被納寶藏之由示了、自賀茂松尾持來莫如例、

十五日、癸天晴、入夜雨下、此日、賀茂祭也、仍神齋、近衛使左少將隆保云々、今日定能卿來、今日出願齋也、

元曆元年四月十四日、戊申自去夕雨降、午上甚雨、午後〔天〕晴、此日有改元事、去年雖有其議、依爲即位以前、不被遂云々、然而天下猶未靜之間、即位又難、被忿行、踰年之後已及數月、仍且依亂逆不止、即位以前所被行也、愚意猶未甘心、今夜、法皇有御移徙事、修造白川金剛院御所、所、今波給也、右大將先參、改元申事訖參院、乘、即供奉御幸、依河水甚深、以車渡河、諸人皆如此云々、事訖子刻許歸來、改壽永三年爲元曆元年云々、依三代始無赦令、上卿左大臣云々、改元及御幸儀、見大將記、抑、家主女院、被獻玉帶於法皇云々、

俊經卿 大應、弘治、大享、

兼光卿 元德、文治、

光範朝臣 元曆、恒久、承寬、

業實朝臣 顯實、應曆、

十七日、乙亥天晴、大將重來、談昨日事等、法印被來、十八日、丙子天晴、此日、吉田祭也、奉幣如例、陪膳能業、依四位不參也、奉行信光、自此日、令參籠僧於吉田社、令修仁王講、七ヶ日也、

十九日、丁丑天晴、此日朝、八條院御幸歡喜光院御所、酉刻、院自押小路御所、渡御後御所、是御移徙之後御行始也、兼雅卿已下供奉云々、有御引出物云々、笙箏云々、

此日卯時、或女房產男子平安、爲悅々々、

廿日、戊寅天陰、午後雨降、盲目聖人鑒阿來、法印相共謁

之、所示之事等、皆天下之至要也、可歸々々、

廿一日、己卯今日、佛舍利一粒賜鑒阿聖人、所望之上爲結緣也、

廿二日、庚辰天陰、定能卿來、

廿三日、辛巳此日、令參實嚴於故殿御墓所、仍余有所作一如例、

廿四日、壬午天晴、此日、石清水臨時祭也、仍右大將未一點參內、戌刻歸來、語云、大將爲上首、使泰通卿有宣

命辭別、依穢延引之由被載之云々、大內記不候、六位候之云々、代

始無辭別之由、見故殿御記、仍大將問之云々、然

而光雅等猶可有之由云々、未終事始、日景猶高、雖

可有五獻、依公卿人數不候、只三獻云々、攝政不

着庭中座、被寄指頭花云々、宣命草清書、共於殿

上奏之、近例也、事了攝政誘引大將、被見北陣

云々、其後大將參院云々、今日隆職來、語密々事等、其內有仲基之夢記、又賴朝令申下官事、有深意趣等、欲申其事、七ヶ日參籠八幡宮賴朝所祈之寺、之後、於寶前書折紙、令進上云々、偏依思天下事、令申云々、

廿六日、甲終日雨降、此日、僧正參御社之日也、仍余讀心經五百卷、奉法樂須千卷讀、而依所勞朝間不讀之、依不可叶、今五百卷語法印、令轉讀也、又自今日七ヶ日令參籠僧於春日御社、令轉讀金剛般若經、今日先解除、次通拜衣冠、其後奉讀心經也、今日大將云、一昨日攝政指花之時、左廻而歸云云、大將右廻、已次同之、攝政作法、人有疑之色云云、自今夜法皇被始、今熊野御精進云々、仍八條院還御八條殿、

廿七日、乙雨下、藏人左衛門權佐親雅來、仰院仰云、伊勢大宮司祐成、不被修造之間、可被改補他人、歟、將又可被重任、歟云々、申云、重任非據事也、重被尋祐成、申無其力之由、補他人、可被致修造、歟、若又祐成年來有勤無怠、任近例、可有重任、歟、然而猶不担任事也、

廿八日、丙雨下、賴業真人參大將方、其後來余亭、呼前談雜事、大將學生得天骨之由、深感之、悅思不少、傳聞、荒聖人聞覺、公朝等、一昨日夕入洛、今日、件聖人參院云々、以件聖人、余事猶申院云々、實是神明之加護歟、將又不祥之根元歟、未辨是非、不如固辭通也、去三月廿八日晚、季廣夢想云、下官着束帶立家南庭、而問、日輪自東飛來、余以袖奉受之了云々、今晚、女房見吉夢、又資博見最吉夢、大織冠御加護之由也、

廿九日、丁晴、法印被來、依阿闍梨解文事、院六借給云々、次第頗不當歟、今夜、四條京極邊小屋炎上、坂東荒聖人聞覺、今日參院、於廣座吐種種荒言云云、

## 五月

一日、戊午上、神齋如例、書心經一卷、又轉讀百卷、

三日、庚晴、自今夜、以醍醐宗殿阿闍梨、故宗命僧都、高祖弟子也、令修大威德供、依一昨日夢想也、一日奉圖明王像、即所始供也、余同有行法、又仰僧十人、各



七ヶ日之間、令滿小咒十萬遍、并百萬遍也、

四日、卯雨下、左近府荒手結、忠季少將一人着行云々、

六日、巳午上大、午後晴、此日、右近府荒手結也、大

將職事三人、奉行、國行、下家司所司等、向馬場、又饗

祿沙汰送如例年、少將忠季一人着行云々、

七日、甲雨下、自今日始行法、三明愛、於多武峯、始

祈、其上獻細劍一腰、依夢想也、大將番長厚次來、

申入今比叡小五月競馬乘尻之由、

九日、丙晴、今日吉小五月競馬五番云々、大將番長下

野厚次、爲助廉、厚助、被取落了云々、

十三日、庚晴、大夫史隆職來、語內印紛失并出來之間

事、所衆孝久捕犯人、仍被任兵衛尉了云々、又式

部權少輔範季來、語崇德院廟遷宮之間、蛇出來并夢

想等之事、範季并俗別當兼友等、同夜有嚴重夢想云

云、此次語祕事、

十六日、癸今日神齋、依明日可奉拜圖繪御社也、

十七日、甲雨下、自奈良僧正許、被奉圖繪春日御社

一鋪、余早旦沐浴解除之後、着束帶、帶如、取幣帛、

小幣六本指之、依爲、於御社寶前、兩段再拜如常、其後乍

著束帶候、寶前、奉轉讀心經一千卷、其後取幣帛

一本、社別奉拜四所若宮、率川等也、之後、退下解脫、隨分之苦

行也、即始自今日七ヶ日之間、一族相并可奉讀一

萬卷也、余每日可入堂、其今日、大將同參詣、

衣冠、不

廿二日、己此日、大將、講無題詩五首、資隆入道并親

經等在此座、中將同之、

廿三日、戊此日又參寶前、奉讀心經千卷、無言、不起

日來之間、余、女房、姫君、山法印等、每日入堂也、凡七

ヶ日之間、重輕服月水姪者等出家中、於僧尼余強

不憚之也、心經一萬卷、七ヶ日之間轉讀之、余女房

將姫君法印也、

廿四日、辛今日、余沐浴解除、日來、每日不沐浴着衣冠

參寶前、取幣奉拜、即奉返送之、相副鏡一面、爲

神寶、造金銀師子形、依遲々也、抑、此御社渡御事、

自他有靈夢、尤可信仰云々、

廿六日、癸自今夕風病發動、仍企湯治、

卅日、丁定能卿來、大將來會有小遊、大將取拍子、

### 六月

一日、戊天晴、早旦、書心經如例、又依朝幣、午上



神齋、入夜、藏人左衛門權佐親雅自院爲御使來、余依病不謁、仍以人兼親、示云、來十三日可有行幸押小路亭、而御座不御、內侍尙可候歟、又查御座御劔可被具歟、件御劔內侍可持候一歟、條々可計奏者、余問云、行幸何事哉、答曰、依御靈會也、余申云、內侍供奉不可、依御座御否、男官女官供奉之儀也、而使持御座之歟、仍雖無其物其人、何不供奉哉、查御座御劔、尤可被入御輿、雖無先蹤、御輿空納、依無便也、件御劔內侍取事不可、然、近將可持候也、其故者、內侍一人雖持御劔、今一人空手之條、還見苦歟、加之、內侍取此御劔者、已似被擬寶劔、事甚無便歟、內々移御座之時、不及御座、次將持候查御座御劔是例也、准彼儀、頭中將持之、尤穩便者歟、親雅歸去了、抑、寬治之比、皇居或堀河院、或閑院也、然而敢無行幸、神輿經他道、大炊御門歟今度行幸之儀、偏新儀也、准寬治之例、無行幸、尤上計歟、然而此條不及被尋問、仍不能進奏歟、此旨、內々雖聞親雅不  
可被置之由、之也、

五日、壬戌晴、雖所勞不快、依御月忌、相扶參御堂、七日、甲子自今日又浴五木湯、

九日、丙寅晴、法印被歸來、今日密々被參、故入道殿御墓、所依余示也、

十日、丁卯晴、及晚雨下、今日、菅家儒士長守初參、又教綱來、大將中將等賦當座詩、

十三日、庚午晴、午後雨下、此日、法印參賀茂日吉等社、即登山了、自來十六日、於青蓮院、依可被修護摩也、

十四日、辛未晴、此日、今熊野六月會云々、

十六日、癸酉晴、此日、法印於青蓮院、爲余被始修藥師護摩、限百仍余精進、扶病念誦、早旦、範季來談、世間祕事、此日、院參詣日吉給云々、一宿儀云々、咸云、平氏黨類、追散在備後國之官兵云々、土肥二郎實衡從也息男早川太郎云々、仍在播磨國之梶原平三景時、從也超備前國了、聞其隙、平氏等少々來着室泊、燒拂云々、仍被催遣京都武士等云々、凡追討之間、沙汰太如泥、大將軍在遠境、公家事無人、于沙汰、只天狗奉行萬事之比也、無沙汰、無祈禱、以何可期安全哉、可悲々々、但平氏始終不可叶事也、入夜日來參籠住吉之僧、歸來、語社頭事、

十七日、戊陰晴不定、入夜光長來、去夜謁賴盛卿、傳聞、法皇去比以手與臨幸薛給師家、入戶內、懸尻於打板上背、御覽菱繩調備之樣、被仰引出物可進之由、也、然而薛給九家貧、忽難得其物、然之間還御、其後存真實勅定之由、也、捧美麗薛給手宮於目上參入、稱御引出物之由、而候北面之周防入道能盛、竊誘追出了云々、昔雖陽成花山之狂、未聞如此之事、法皇又輕々狂亂、雖不可勝計、未有此程之事、實運之盡給也、不可敢、

今晚、女房夢云、人來告云、乘彌陀願力、必生安樂國云々、即覺了、平氏其勢強云々、京勢僅不及五千騎云々、

十九日、丙晴、隆職來、語世間事、來廿五日御即位定、來月五日遷幸、十七日御即位、官廳皆以不可叶之由所見也云々、余院御氣色不快之由、太政入道語仲基云々、語隆職云々、余不語天氣不快、先世之宿業歟、何爲佛神可判斷給歟、

廿一日、戊晴、依方達、秋節向堂、傳聞、賴朝上洛八月云々、

廿三日、庚晴、及晚右中并行隆來、召簾前問大佛

之間事、答云、於御身者皆悉奉了、當時奉營之間也、來月之內可終其功、其後奉塗滅金、若打掃可有、可有開眼也、滅金料金、諸人施入有少々之上、賴朝千兩、秀平五千兩奉加之由所承也云々、又造寺之間事、叶寸法之材木、存難得之由之處、吉野山之與聞、有大物之由、聖人行向見之處、殆過分而在之、隨又爲河邊之間、不可有引材木之煩、縱雖有材木、爲遠國者可多煩、又雖爲近近、無水便者、可費人力、而近々之間得水便、誠是天之令然也、聖人及寺僧、歡喜無極云々、又語云、平氏之勢太強、源氏武士等氣色損了、大略如平氏落之時、決定大事出來歟云々、又云、去九日寅卯刻計、自南都上洛之路、於木津川、入幡伏拜蝶多降、虫勢一寸許、有羽其色白、台山此恠異多所聞也、他所未聞、尤可奇云々、良久退出了、

廿四日、辛晴、午刻、頭弁光雅朝臣來、御即位之間條々事、院宣云々、

一來七月可被行即位、被問日次之處、十七日癸卯、

廿六日、壬所勘申兩日也、而十七日癸卯雖有三代

之吉例、（桓武、白河、堀河、加賀、之）七月十七日六條院爲登殿之日、兩條之難如何、被問、賴業師尙等之處、賴業申云、崇德院例、用捨在時議、六條院登殿、尤可有憚歟云々、師尙申云、雖有一代之不吉、已存三帝之佳例、仍不可被忌避、六條院崩日之條、可在時議云々、於廿六日者、壬子日、先規不見、兩日之間可被用何哉者、申云、兩日之間、被尋日之優劣於陰陽師、可被用勝也、但偏可被用、例之吉凶者、雖多吉例、猶不如崇德院之不快、尤可被憚歟、無國忌廢務、旁不及沙汰歟、但廿六日無難者、被用何難之有哉、一大嘗會兩國、於悠紀者近江無障、至主基備中爲賊首被領、丹波又爲造興福寺之國、爲之如何者、申云、丹波國事、可被仰合長者、他人不可申左右、備中勿論、此外定可然國可被下定歟、一近日、天下少事猶難叶、況大事、重疊國力難及歟、然而依不默止、強被行即位之後、至大禮若不被果行者、忍行即位、又可無其益、此條兼難知、二人又難計申歟、然而此條如何、

申云、道之所至即位（歟）者、讓位之翌日可被忍行也、其可遲緩者、不慮之事也、若於有可被遂行之儀者、早速可被行也、大嘗會臨期延縮之條、全兼不可及御沙汰也、大禮若有難被行之事者、隨又被抑即位之條、專不叶道理事也、只被忍行即位大禮之條、臨期可被進止也、抑、恐按之所、草、忽被行即位大禮之條、理不可然、此事、去年爲親經奉行、被尋問之時、粗雖以奏聞子細、大略如無許容、重上聞似有其恐、然而恐心內動、上奏不外顯者、可招冥顯之恐、仍恐所驚奏也、先我朝之習、以劔璽主爲國王、不待璽踐祚之例、誓契以來未曾聞、然而依無止事、有立王事、天子位不空一日之故也、然而至于即位者、待劔璽之歸來、可被遂行也、神鏡劔璽、當時在賊徒之手、大郡類紛失歟、而可被待歸來之由令申之條、殆爲嘲弄之基、又可謂乖時議、然而中心之襟、鬱陶未散、所以何者、去年七月以後、劔璽歸來事、無籌策無祈禱、已如無沙汰、日月不墜地、神明不棄國、佛法又不可空、訴皇天后土、請神明三寶、指其期一向可被遂征伐也、國家運不



盡者、必無爲可歸來、其時被遂即位、尤可謂上計也、若又粉失期至、沈海底、化灰燼歟、見定其左右之後、其時更可及議定也、未及如此之沙汰、暗不帶劔璽、被行即位之條、恐不重彼三神歟、國土之亂逆于今不休、偏以由此口、假令十月被即位之日以後爲期、拋西事云、祈禱、征討一向有沙汰者、事之雌雄、一時可決也、佛神之利益、可被期何時哉、國家第一之大事、弃而無沙汰之條、上天之警如何々々、光雅朝臣深甘心退出了、此日、天文博士廣元持來奏案、太白犯井云々、文云、天子浮船失珍寶云々、爲西主不快之變歟、又廣元云、今日寅刻夢想云、余夢、今兩三日之中可見天云々、余披夢書之處、上天者爲萬人之主、又得官得財、家吉云々、今日定能卿來、今夜宿此第一、廿五日、壬晴、故高倉院女房若州於嵯峨邊建立一堂、遂供養云々、法皇臨幸其砌云々、此日欲有即位定、而依有不定之儀、延引云々、廿八日、乙晴、頭辨光雅爲院御使來、余依疾不謁、去廿四日又如此、光雅云、御即位延否事、所申可然叶、叙慮、而一議者即位大祀等于今不被遂之條、

逆等定成嘲、彌得其力歟、劔璽歸來甚不定也、仍早可被行即位云々、此議又宜歟、仍猶可果行之由思食如何、重可計奏者、申云、所存先度奏聞了、而上計出來可被用者、其上不能申子細、只早可破遂行歟、光雅又云、一定非可被行之儀、猶被仰合之趣也、不申左右之條、猶如何云々、申云、此事我朝第一大事也、仍不祕所懷、慈上聞、其上許否者在叙慮、全不能執申、但今所被仰下之賊徒之所存、更以不可被願歟、賊首縱成此思、冥衆因茲引彼不可棄是、若依此儀、被恐即位者、彌有不重三神之過歟、自元所存、申云、劔璽避宮之後、未曾聞祈計之二、仍此時指期云、祈禱(卜)云、征伐有一向之沙汰者、必可決雌雄之趣也、何況、不帶劔璽、即位之例出來者、後代亂逆之基、只可在此事、云、彼云是、不能也思、者驚天聰之許也、此上左右只可被決勅定也者、光雅云、欲注預者、余云、尤可然、但與先度申狀不可有相違、凡此事全非執申叙慮、又在可被行者、殆此子細奏達無益歟、可被相計也、光雅退下了、此日起揚自病席、轉讀妙經一部、自爲祈疾也、經奉讀何



無驗哉、

廿九日、戌及晚大雨即晴了、早旦範季來、令見賢君  
與跡、現存之條以之爲證、莫言々々、天下之反昔  
之事、只在此秋者歟、但猶難取信事歟、

六月被如常、陪膳季長朝臣、役國行、共衣冠也、陰陽  
師資成、服薙之人、被之時自不撫之、然而管貫無  
憚云々、今日、又奉讀樂師經樂王品等、

右壽永三年壬辰春夏此一冊墨付六十枚者以三緣院道  
教公與痕松殿右幕下道昭卿被書寫之者也

慶安二年己丑正月仲旬陶化翁(花押)記之

# 玉葉卷第四十終

日本漢文史

籍叢刊

卷二

維史

[General Information]

书名=14664074

SS号=14664074